
Clan`s wedge

AGEHA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C l a n ' s w e d g e

【Nコード】

N 1 3 0 7 N

【作者名】

A G E H A

【あらすじ】

過去、Rという一族が総世界ロイヤル：全ての世界をひとくりにした総称…を統治していた。

しかし戦争の無く、世が安穏であることに異を唱える組織が現れる。反抗する組織との戦いの結果、遙かに強力な力を持っていたR一族の勝利で終焉を迎えた……とされている。

それは戦いに勝利したはずのR一族が反抗していた組織と共に姿を消したからである。

それから数百年の長い月日が経過した総世界。

R一族が総世界を統治していないことが既に当たり前のようになって総世界の、ある一つの世界で新たなRの血筋が再び現われようとしていた。

剣や魔法などが出てくる冒険ファンタジーです。

巡り合い

早朝からの襲撃により、スロート城は落城寸前であった。

敵国の決して止むことのない攻撃は幾度となく続く。

それは一つの小国の終焉を意味していた。

スロート城を見渡せる高台から、スロート城を見下ろす三人の人物がいた。

そのうちの二人はただ眺めているといった具合で、もう一人は非常に落胆しきりであった。

彼らは各地を放浪しながら旅をするアーティ、テリー、リュウという三人の魔導剣士。

彼等の続ける放浪の旅とは、自らの居場所を見つけることが目的である。

そして、旅に使用する資金が尽き掛けると、このような城下街の城に仕えるようにしていた。

魔導剣士……その言葉を口にすれば、どの国家であっても見えず知らずの彼らは無条件で優遇し仕えさせる。

それ程まで魔導剣士という戦力は、どの国家に対しても重要なものだった。

「この小国は占領されてしまったのか」

魔導剣士の一人、アーティが言葉にせずになく思う。

「マジかよ！ まだよ、オレたち給料貰ってないじゃんかよ！ これからの生活どうすんだよ……くそ、どうしてオレらがいない時に攻めてくるんだよ……」

一人だけ落胆の様子を示していたテリーは愚痴を語る。

「それくらい、別にいいんじゃないの？ 後で考えれば」

特に気にも止めていないのか、リュウはそう話す。

魔導剣士の三人は現在落城寸前の城、スロート城お抱えの魔導剣士である。

彼らは数ヶ月ほど前にスロート城へと雇い入れられていた。

だが、彼らのすることと言えば城の周辺を見回る程度。

彼らは自らの力を完全に持て余していた。

そのため休暇を取り、剣術訓練を名目に数日ほどスロート城を離れることになっていたがその隙を狙われた。

今まさに、彼らはスロートへと帰還している。

しかし、彼らはスロート城を助ける様子はない。

視認するだけであって、単なる他人事であった。

「新しい収入源を探さないといけないな」

落ち込むテリーにアーティは微笑みかける。

「でさ、これからどうする？」

相変わらず、テリーは非常に重い口調。

「なにが？」

「なにが……って、当然収入源に関してだろ。城が陥落^おちたなら、もう戻れねえし。でもオレはさ、魔導剣士としての能力を発揮出来る仕事が良いんだけど」

「確かにテリーの言う通り。自分に合ってることをしていたいからね。うーん……」

アーティは腕を組み考え始める。

「ってことで、リュウ。なにか良い案を思い付けたかい？」

「少しは自分で考えろよ。まっ、それなら魔物や盗賊とかの討伐依頼を引き受けるってことをしたらどうだ？ スロート城が陥落^おちれば、スロート城下街は荒れるだろう。ただ、ギルドが無いから面倒だとは思うけど、これなら腕も鈍らなくて資金も手に入れることが

出来るだろ？」

「あー、確かに」

リュウが提案したことに、二人は頷く。

「一先ず、リュウの提案したことに賛同し、城下街へ向かうことになった。」

アーティたちが向かう城下街は、漆喰を塗られた煉瓦造りの白壁が特徴的な家々が続く、綺麗な街。

城下街では他国の鎧を身に纏った兵士と、度々道をすれ違う。

旅人風の軽装を着用したアーティたちに気が付くと、兵士らは戒厳令が出ているや従属領民であるから……などと言われていたが傭兵であると伝えると侮蔑的な眼をし、さっさと離れて行く。

明らかに正規軍である敵国兵士にとっては、金の匂いを嗅ぎ付け戦場に早々と現れた守銭奴程度にしか思えないらしく、態度としては妥当だった。

アーティたちにとってはその態度が非常に楽に行動出来る要因となった。

「なんかよ、ムカつかねえか？　あのオレたちを見る目がさ。汚いものを見る目だぜ？」

愚痴愚痴とテリーは不満を語る。

「これが良いんだよ、これが。領民だったら戒厳令だし、万が一魔導剣士なんて知らせたら色々事情を調べられて戦闘なんてことも有り得る。ああ、やだやだ、めんどくさい。そんなのこっちから御免だね」

「そりゃあ、そうだけど」

アーティの返答に不満ながらもテリーは納得を示した。

現在、アーティたちが行っていることは傭兵を生業とするための店舗を見つけていることである。

元々、彼らは城へと仕えることを前提としていたためなのか店舗を探すということから手間取ってしまう。

旅をし、傭兵さながらの生活を送っていた彼らは不動産業という言葉を知らない。

そのためか、手間取った末に偶然見つけた空き店舗に安易で勝手な考えから店作りを開始する。

「店内には家具が一応揃っているようだな」

疲れたように、アーティは言う。

彼らが見つけた空き店舗の店内には以前誰かが使っていたのであるうか、家具などが無造作に置かれている。

「あとは、内装ってところかな」

「内装つて……何するんだ？」

「言葉のままだろ。店内で営業出来るように作り替えるんだよ」

テリーの問い掛けに対して、店の内装の準備をしながらアーティが答える。

「でも、大丈夫。この店は元々営業のために使われていたみたいだから、すぐに終わるよ」

「それなら……頑張るかな」

テリーは仕方なく納得する。

どうやら、スロート城の陥落で給料を払われなかったことがまだシヨックのようだ。

そして、店としての準備が整った頃、用意した木製の長い板を店の前に掲げる。

これから店の看板となる板には「モンスターハンター」と書かれてあった。

当然マンハントも行うつもりだが、兵士を刺激せぬようにとの配慮だった。

店作りもようやく終わり、ハンターとしての仕事をし始めようとしたが開店休業の日々が続く。

それもそのはず、戒厳令は続いていた。

戒厳令の間はわざわざ領民でもないのに敵国の兵士が配給を毎日持ってきていたので食べる物には困ることが無かった。

しかし、ただ無為な日々が過ぎた。

戒厳令から一週間後、彼らの店に一人の男性がやってきた。

「君たち、ここで何してんの？」

その時、木製で出来た店のカウンターから対応したのはテリーだった。

「あっ、お客？ 初めてだな。ここはね、モンスターハンターって言って、主にモンスターハントやマンハントとかを専門にしているところだよ」

このために作った、曰く戒厳令の暇潰しに作ったモンスターハンターという店についてのマニュアルを見ながら、テリーは説明する。

「へえ、そうなんだ」

じーっとテリーを見つめ、カウンター越しから店内を男性は覗く。

「それはともかくオレってさ、この店貸してるんだっけ？」

「はっ？」

ようやく、テリーは気付いた。

この男性が明らかに疑っている様子で見つめていたことに。

「もしかして、この店の持ち主だったり……？」

「そうだけど？ ついでだけど、オレはクロノって言うんだ。普通は契約時に名前も伝えてるけど、そのことも知らないってことはお前さ、無断で使っているだろ、この店？」

「そ、そんなことないけど……」

クロノという男性の予定外な一言にテリーは、かなりの動揺を見せる。

カウンターで対応するテリーはこのかなりマズイ状態をどうやって打破するかを必死で考えていると、クロノがあることを言う。

「モンスターハンターねえ。オレをここのメンバーに入れてくれるなら敷金、礼金、家賃とかタダにしてやってもいいけど、どうだ？」

カウンターに張ってあるマニュアルを、とても興味ありげな様子でチラチラッとクロノは見る。

どうやら分かりやすいくらい興味を抱いているようだ。

「最初からそういつてくれよ！ アーティモリユウもお前のこと歓迎してるぜ！」

正しく願ってもないチャンスに飛び付くかのように、店内にいたテリーがカウンターから身を乗り出し、抱き付く。

クロノがメンバーに入る意志を示したので内装したばかりの真新しい店内に、クロノを招き自己紹介をすることになった。

「まあ、これから一緒に仕事をする仲だから自己紹介するな。オレはアーティ、魔導剣士をしている」

「オレはテリー。それと先に言っとつけどオレは女だからな！」

「そんなことはどうでも良いだろ、別に？ あーあと、オレはリュウだ。よろしく」

三人の話聞き終わり、顔と名前を覚えているのか一通り三人をクロノは眺める。

「それじゃあさ、この店には何か掟とか規則とかそういうのあるのか？ あと、給料が幾らくらいとかも聞きたいね。いや、まずは給料だな」

「掟？」

アーティはクロノにそう聞かれ、まだ何も考えていなかったことに気付く。

給料については即座に思考を停止させ、掟についてだけ少しの間、考え始める。

「この掟は弱い者に有利をと、依頼モンスターを100%削除だ」

クロノを加入してから店の経営は、まともに宣伝すらしていないはずなのに驚くほど順調に店の経営が軌道に乗り始めた。

理由を店にいたクロノに聞いてみると、自分はこの小国を納めていた以前の国王の系列に当たる人物で、この城下街の長^{おさ}的存在でもあるために街の人間は自分のことを良く知っている。

そのため、クロノが営業している店だからこそ信頼が出来るということ^{こと}で依頼が多いようだった。

店を経営し始めてから数ヶ月が経過した頃、仕事の依頼をこなすうちに以前自分たちが仕えていた城を陥落させた敵国から「この国で反乱活動を行っている反乱軍の組織を討伐してほしい」との依頼が舞い込んだ。

「スロート^おを陥落とした国って隣国だったんだな。その隣国からつてのが気に食わないけど依頼金も結構高いしさ、引き受けようか？」

依頼書を眺めながら、アーティはメンバーに聞く。

「反乱軍って言うても、どうせ傭兵まがいのゴミ溜めだろ？ 剣の練習ついでに金も貰えるなら絶対行くべきだよ」

一応、この店の經理担当になっているテリーが討伐しに行くことを勧める。

そのことで今回の依頼を引き受けることになったのだが、城から来た依頼主は「反乱軍は街のどこかに恐らく潜伏しているらしい」ということを依頼書に書き記していた。

つまり、はつきりとは正確な場所が分からないらしい。

「これじゃ、全然情報が足んねえじゃないか」

依頼主が店から帰った後、情報の足らなさにテリーはイライラしていた。

「ともかく受けた依頼は達成しなきゃな。クロノも納得してくれるな？」

「ああ……」

クロノは静かに頷く。

その日から、早速アジトを探すことになったのだが思いの外に難航した。

本当に反乱軍などいるのかどうかと疑いたくなる程である。

それから数日が経過し、ようやく反乱軍のアジト？らしき場所をアーティが発見する。

元々反乱軍のアジトは無いのではないかというムードになっていた中での発見であったため、かなりアーティは自慢気だった。

「オレが見つけたんだからさ、倒すのは三人でやってきてくれない

？」

「楽がしたかったのか、アーティは堂々と言う。」

「あと人数は結構いた気が……する。ハァー、じゃあオレは暇みた
いだな。それじゃ頑張つてこい」

言い切ったアーティはソファで横になる。

普段と変わって、かなり強気になっているアーティにテリーは異常な程に殺意を感じた。

テリーはソファで横になっているアーティに音も無く近付く。

「あー、そうか。アーティは寝てていいよ！」

横になっているアーティの腹部にテリーは踵落としを一発加える。

「げふっ……あ……ぐ」

呻くような声を上げ、苦痛に満ちた表情で悶えながら不様な格好でソファからアーティは落ちた。

「なんだー、寝ていたくないのか？ 働き者だなー、アーティは？
まだまだ元気なようだし早速案内してもらおうか。勿論良いよな、
アーティ？」

アーティの首を強引に掴み上げ立たせるとアジトまで案内をさせた。

アーティの調査によって発見出来た反乱軍のアジトとは傭兵仲介所のことである。

傭兵仲介所といっても見た目は酒場のような外観をしており、屋外に傭兵らしき人物が数名程屯っているような余り近付きにくい様相。アーティは自らが行っている業種と同じ仕事をしていることで、依頼とは関係なく……所謂サボるために仲介所へ行ってみると店内には現在この小国を支配している隣国打倒を掲げる人間が大多数を占めていた。

それで、傭兵仲介所が反乱軍のアジトだと判断出来たのだが…

「で、どうする?」

顔色が優れない様子でアーティが反乱軍のアジトを見つめる。

今、彼らはアジトの近くの路地裏に隠れている。

問題はこの四人という少人数で、どう戦えるかである。

「それより、あいつらを見たことがある。何でかっていうと街に住んでいる奴ばかりだからな」

クロノが言う。

「いや、そりゃそうだろ。この街に住んだから。でも、オレがサボリ……調査しに行った時は全然気付かなかったな。まっ、クロ

ノが知っているなら一応何で反乱軍なんてしているのか聞きに行ってみようか」

一先ず、路地裏から仲介所に正面から向かうと屯っていた数人の傭兵が彼らに気付き、その内の一人が近寄ってきた。

「クロノさんじゃないですか。どうしたのですか？」

「最近、この辺で隣国の連中と戦っている奴らがいるって聞いてね。探していたんだ」

「もしかして、この解放軍をですか？」

「解放軍？」

「はい、解放軍です。そうですね……」

傭兵は辺りを見回す。

「誰も、私たち以外はいませんね。一通りのことを言いますと私たちはスロートを占領している隣国の兵たちを追い払うために結成されました」

「そうか」

「それで、もし良ければクロノさんも参加しませんか？」

「そうだな……」

クロノは両腕を組み、深く考える。

血縁関係だった小国の王の死。

このスロートを我が物顔で占領する兵たち。

隣国から新たにやってきた執政官による小国だった頃とは比べ物にならない程の税、従属民としての対応。

沸々と沸き上がる怒りに、クロノの言うことは既に決まっていた。

そして、クロノが口を開いた時。

「参加するぜ！」

アーティが参加することを勝手に決めた。

完全に肩透かしを食らったクロノだったが、国を取り返すために活動している解放軍に参加することを決める。

参加する意志を伝えるとアーティたちは傭兵に連れられ、仲介所に入った。

その際、仲介所で解放軍がどんな組織なのかなどを聞いていたことで、この組織がまともでスロートのために活動的であることは大体分かってきた。

「でさ、本当に解放軍に入るの？」

傭兵が話している最中にテリーが、アーティにボソボソと耳打ちする。

「しないけど？ いいか、テリー。人を騙すなら、お互いに共感し、お互いに納得することが大事だ。そうなってしまえば、付き崩すのは簡単だ」

「成る程ね。そうゆうことなら楽しめそうだわ」

だが、アーティにはただ一つ気になることがあった。

「因みにさ、この国を取り返すのはどれくらいかかりそうだ？」

しかし、そのアーティの問い掛けに傭兵は、しんと静かになった。

彼らの会話を聞いていた仲介所内の傭兵たちも同じ様子。

「おい、いきなりどうした？」

「私たちは実際には今すぐにでも、この国を取り戻したい。しかし、解放軍は人数が少なく、現在の状態で駐留軍と普通に戦えば間違いなく全滅してしまうのです。一体解放までにいつまでかかるのかは……分かりません」

「人数が思ったより少ないのか。だったら、この連中には悪いけどさっさと死んでもらうかな」

沈んだ様子で傭兵が話し終えるのと同時にそう思ったアーティが、テリーに合図を送る。

それに気付いたテリーは剣を鞘から抜くために剣へと手を伸ばそうとした。

「お前ら、何のために解放軍やってんだ！ さっさと城に行って執政官を倒しに行くぞ！」

情けない様子で戦う態度を見せない傭兵たちに完全にキレたリュウが叫ぶ。

「オレたちは魔導剣士だ。城の連中ごときに負けるはずがない。オレたちはこれから城に行くが戦う気が少しでもある奴は一緒に来い！」

リュウが兵士たちにそう言い放った。

「今、オレたちはってリュウが言っていたように聞こえたけど？」

アーティはテリーに視線を移す。

「そうみたい……だな。あいつ、今分かったけどバカだろ」

殆ど流れ作業的に話が進み、傭兵たちは魔導剣士を仲間に出来たことで士気が上がり、今日中に城に攻め込むことに決まった。

「情報が何もないのでは、幾ら魔導剣士であつても苦戦してしまいます。もうすぐ城の兵士に扮した我々の仲間が戻ってきますので城の間取り図や見張りの兵に関して確認した方がいいですよ」

いずれこういふ風になることを予測していたのか、解放軍の一人があることを話す。

「城か……」

アーティは以前のことを思い返す。

だが、特に思い耽^{ふけ}ることも無かったので考えることは止めた。

時刻は経過し、スロート城から戻ってきた兵士からの報告があった。

これから数時間後、スロート城を見回りする兵士が交代の時間に入るため、城の詰め所に一旦集合する。

見張りの数が一時的に少なくなり、城は制圧がしやすい状態になるらしい。

「犠牲は少ない方がいいし、その時間帯を狙おう。どうせ執政官さえ殺せば、城の兵士たちも逃げていくだろうから」

報告の内容からアーティはその時間帯に奇襲することを決めた。

報告の時間に近付いた頃、アーティたちは城の傍まで移動を開始する。

城の城壁などを確認すると確かに兵士たちの数は普段よりも少なく、詰め所の方に戻っている様子。

この機会を逃がさぬようスロート城に突撃すると、城内の守備力が下がった状態での奇襲攻撃だったため内部は混乱。

兵士が特に多かった詰め所には魔導剣士の三人が突撃し、城を一気に制圧することに成功する。

その最中に捕らえた執政官を倒すと当初考えていた通りに指揮系統を失った兵士たちはこれ以上戦わず逃げていった。

「簡単に制圧出来るじゃないか。解放軍は今まで何をしていたんだ？」

あまりにも呆気なく城を取り返せたのでアーティはそう思う。

「やりましたね、アーティさん！」

興奮した様子の兵士が近付く。

「私たちはこれで自由になったんですよ！早く街の人たちにもこれから重税を払わなくていいことを知らせに行きましょう！」

「そうだな、凱旋って感じで行ってみるか」

街に行くと、スロート城にいた兵士たちが逃げていくのを見ていた民衆たちからとても歓迎された。

ついに自由になれたと、街総出で祭りが行われた。

次の日、領民から街の長として有名であるクロノを暫定的な指導者とする形で選ばれた。

そのため、クロノにはやるべきことが山程ある。

隣国の従属国となっていたため、このスロートを完全に独立した共和国として、確立させることが重要だった。

しかし、解放されたばかりのこのスロートではあらゆる物が不足している。

一応決めたプランでは城の兵士を解放軍、モンスターハンターメンバー、街からの志願兵に。

税は高めに設定するが、落ち着きを取り戻した際は下げること。

民衆の意見などを反映させるために議会を作り、独自の国作りをすることに決まった。

「これが今出来る最善の方法かな？」

取り返したスロート城で市民と一緒にクロノが、この国の基礎造りを考えながら独り言を発する。

「アイツらにも知らせてくるか……」

城での会合が終わり解散した後、クロノはモンスターハンターまで向かった。

「アーティ、いるか？」

しかし、クロノが店内に入ると店内には誰の姿もなかった。

「無用心だな。泥棒が入ったらどうするんだ？」

そう言いながら店内の物をクロノは漁る。

「おい、主人」

「なっ……？」

びつくりしながら、クロノはカウンターの方を振り向く。

そこには四名の男女がいた。

「このギルドに来れば仕事が貰えるって聞いたんだけど」

カウンター越しから、その中の一人の青年が話す。

「仕事……ってことは客じゃないみたいだね。何かここに用なのかい？」

クロノの問い掛けに、一人の少年がカウンターに身を乗り出す。

「僕たちはモンスターハンターのメンバーになりたいの！ 僕らは強いから雇うべきだよ！」

じいーっと特に何も考えずクロノは彼らを三秒間だけ見つめる。

「うん、構わないよ。あの三人はオレだけじゃ何を考えているか分からないから」

結果、アーティたちに相談せずクロノは訳の分からない理由で四人をモンスターハンターのメンバーに加入した。

数分後、何も知らないアーティたちが依頼されていた仕事を終えて、店に戻つてくると店内にはクロノの他に見覚えがない四人組がいた。

「お客ですか！ お金さえ払ってくれるなら何でも依頼通りにしますよ！」

何故か上機嫌でアーティは接客というには程遠い対応を取る。

「おかえりなさい、アーティさん！ 僕たち、新しくメンバーになったので宜しくお願いします！」

そんなアーティに対し、四人組内の一人の少年が礼儀正しくアーティに挨拶をする。

「なんだって？」

意味が分からないアーティは少年から、いつの間にか店番をしているクロノの方へと視線を移す。

「その四人がメンバーになりたいって言うていたからメンバーにしてやったんだ。別にいいだろ？」

なんか悪いのか？というような感じでクロノが言う。

「確かに人数は多い方がいいけどさ。でもクロノ、勝手なことするなよ。ていうか、店内の物いじったろ。位置変わっているぞ」

「いいだろ別に、アーティの仕事も減るんだから」

「それじゃ困る、ここ歩合制だし。つか、スルーすんなよ」

話し合いの結果、クロノが勝手に四人をメンバーにしてしまったが確かに人数の多ければ仕事もやりやすいため、この四人を正式にメンバーにすることが決まった。

そのため、クロノの時のようにアーティたちは自己紹介をすることになった。

「……という訳でオレたちはこういう仕事をしている」

アーティたちが最初に自己紹介と一緒に今まで行ってきたことを一通り説明する。

「そうなんだ……結構色々あったんだね。それじゃ僕も自己紹介していい？」

「ああ、いいよ。オレたちも君たちのこと知りたいし」

「それじゃ僕からするね。僕の名前はルウ、炎使いをしているんだよ」

ルウという名の少年が話すと、最初にカウンターから声を掛けてきた青年がルウの肩に手を置く。

「オレはライルだ、因みにルウはオレの弟。それとオレは剣士と水使いをしている」

「それでね、僕と兄さんはすっごく仲が良いんだよ！」

「はあ……」

「どうしたの、兄さん？」

「ルウ、オレに話し掛けないで……気安くしないでくれない？」

「……どうしたの、兄さん？ アーティさん、多分兄さんは今日機嫌が悪いみたい。本当に僕たち、仲が良いんだからね」

ライルの対応にルウはかなり焦っている。

二人の関係からして、そんな訳ないだろと何となくアーティは思いながら残りの二人に声を掛けた。

「君は何ていうの？」

次にアーティが話し掛けたのは腰の辺りまで長く綺麗なウェーブ掛かったブロンドの髪をした女性だった。

彼女は何故か白衣を羽織っている。

「私の名前は橘綾香よ、医者と賢者の両方をしているの。でも、血を見るのは嫌だから戦うのは苦手……医者も休職中だし。あと、私は散弾銃という物で戦うわ。私のショットガンはFN IPTSと言つて、口径12ゲージ、全長984mm、重量2940gの……」

「ちょっと、ストップ。それより、綾香さんって戦うの苦手なのか？　ここってモンスターハントとマンハントを行う店だけだ」

「何よ、医者である私に人を傷付けろっていうの？　貴方、最低だわ。でも確かにそれも好きだけど、私は怪我した貴方たちを治療する。それなら安心して戦えるでしょ？」

何故か綾香は笑顔でショットガン（FN-TPS）をアーティの顔に構える。

「戦うことは苦手じゃないのかい？　よく見たら弾込が壊れているから、そのショットガンは撃つことは出来ないよ」

「うん、知っているわ」

綾香はアーティの眉間にショットガンを構えたまま、笑顔で“バクン”と言いながら引き金をカチツと引く。

「うわ、大丈夫か、この人って？」

内心、アーティはそう考えた。

「最後はボクだね。ボクは春川杏里って言うんだよ、トンファー使いなの。年は確か十六だったような気が…」

最後に声を掛けたのは可憐な少女風な容姿でありながら、ボーイッシュな服装を着用し、見た目が綾香に似ている人物だった。

その少女はとても愛らしく、皆を惹き付ける天性の魅力を持っている

るかのようである。

「あと、これがボクの武器だよ」

杏里は笑顔で腰に付けたサイドバックから、二つのトンファーを取り出す。

取り出した際、アーティは何か寒気がする程の覇気を杏里から感じた気がした。

しかし、杏里がサイドバックにトンファーを戻した途端に覇気を感じなくなったため勘違いだとアーティは思う。

「これで男性二人と女性二人が仲間になった訳だし今日は歓迎会でもする?」

全員の自己紹介が終わり、リュウが歓迎会をすることを提案する。

「ちょっと待つてよ。多分、ボクのこと勘違いしてると思うから言うけど、ボクは男だからね。間違わないでよ!」

恥ずかしそうな素振りをしながら、杏里は少し怒る。

「はっ、うそ? だって杏里と綾香って似ているからてっきり姉妹かと思ってたよ」

「姉妹でも兄弟でもないよ、ボクたちは」

「そうなんだ」

女性かと思っていた人物が男性であると分かり、リュウは以外だと
言った感じの反応を見せる。

そんなリュウと杏里とのやり取りを見ながら、テリーは店内にある
鏡に映った自身と杏里を見比べていた。

「にしても、どうやってたら素で男が女みたいになれるんだ？ ホン
ト不思議だよ……どうしてオレは男っぽいんだろ？」

テリーは杏里の方を見ながら一人そう思う。

一先ず、ライルたちが仲間になったため歓迎会を開いた。

これからは仲間が増えたお陰で仕事もしやすくなるなど古参メンバ
ーたちが思った矢先、隣国ではあることが起きていた。

戦争

スロートを占領していた隣国ステイでは、中枢を担う軍部の将校たちがステイ城内で緊急の軍事会議を行っていた。

それは、アーティたちが歓迎会を行なっているのと略同時刻。

ステイの将校たちは即座の巻き返しを図っていた。

現在、将校たちは戦略室中央に設置された豪華な円卓のテーブルを囲むように置かれている綺麗な装飾が施された椅子に座り、スロート城から逃れてきた警備兵の報告を聞いている。

「……とのことで、我々は敗走をする結果に陥りました」

逃げ帰ってきた警備兵が将校たちに怯えた様子で報告する。

「なんだと！ この、バカ野郎が！」

椅子から立ち上がり、テーブルを激しく叩き、喚く将校がいた。

将校の名はクロウ。ステイに所属する魔導剣士の一人である。

「あれは、ようやく手に入れた領地だぞ！ さっさと戻って取り返してこねえか！」

「ふん、まあ落ち着け、クロウ。警備兵などに任せるよりも、また私たちが戦いに赴き取り戻せば済むことだ」

「うるせえぞ、デュラン！ 貴様の部隊と違ってな、あの戦いでオレの部隊はかなり殺られたんだぞ！ それをこつも簡単に明け渡しやがって……」

威圧的な形相で喚くクロウに声を掛けたのは魔導使いのデュランという男性。

魔導使いも魔導剣士と同等の能力を持ち合わせる能力者である。

宥めようとしたデュランにさえ怒鳴り散らすクロウに三剣士の最後の一人、サーボが声を掛ける。

「煩いのは、貴公だ。確かに貴公の部隊が死力を尽くし、あの領地を勝ち取ったのは認める。しかし、その後の統治を国王から仰せ付けられていたのは貴公であり、貴公に従う部下だ。貴公の指示不足や部下の油断が、この反乱を引き起こさせたのではないのか？」

「ぐっ……」

事実をさらりと言われ、クロウは叩き付けた両の手に怒りを堪えるように握り締める。

「オレの部隊が戦力の整い次第、また攻め潰しに行けば良いということだな？」

とても納得がいかないという雰囲気、ありありと醸し出したままクロウは他の将校たちに向かって喚く。

「いや、我々も行く。我々三剣士の実力を奴らに再度見せ付け、二度と反乱などを起こさぬようにさせよう。このことは私から国王

に進言し、宣戦布告を致して頂く」

この会議後、デュランは国王に謁見し、再びスロートに戦争を仕掛けることが早急に決まった。

数日後、ようやく議会が作られ共和国になり始めようとしたスロートに通知を行うため、ステイから一人の使者が来ていた。

ステイの使者は議会に入り、議会内のテラスでクロノを見付けると彼に近寄る。

「クロノ様、ですね？」

「ん？」

議会での仕事を終え、ぼんやりとした眠そつな様子で資料に目を通していたクロノは反応する。

「私はステイからの使者として参りました」

「なに？ ステイからって？ 何しに来たの？」

「これを……」

さっと手渡しする感じで使者は書状を手渡す。

「これは何？」

書状を手を取ったクロノは使者に訊ねる。

「が、使者は早急にその場を立ち去ってしまったのか周囲には既に姿が無かった。」

「あれ？ いなくなつた？」

よく意味が分からなかったクロノは会議が終了していたので、これから向かおうとしていたモンスターハンターの事務所に向かつて歩を進める。

「何だよ……クロノじゃん。何しに来たんだよ？ お前はスロートの議長になつたんだから、もうここに用なんかないだろ？」

店に辿り着くと、店の外壁に背中を付けながら恐らく接客担当の役目であるアーティがタバコを吸っていた。

元々商人であつたクロノはアーティを見るなり、こいつは馬鹿だと反射的に思う。

「店の前でタバコを吸うな、客が避けるだろ？ 第一ここはオレの店だし、オレの好きな時に来ても構わないだろ。ところで……」

一応の釘を刺したところで、持っていた書状をクロノはアーティに見せる。

「ついさっき、ステイの使者がオレにこれを渡してね。何が書かれているか、ここで見ようと思ったわけ」

「そっか、適当に店内で見えていけよ」

と言いつつも、アーティはクロノから隙をついて書状を奪い取る。

「ちょっ……」

クロノが何かを発していたことは知っていたが、店の中に移動したアーティは丸めてあった書状を広げる。

「やっぱりね。この書状の内容は、簡単に言うなら宣戦布告だな」

書状の内容をアーティは後から店内に入ってきたクロノにさらっと語る。

「宣戦布告って！ おい、どうしてステイの連中はまたスロートに攻めてくるんだ！」

「そんなこと、オレに聞くなよ。自分で考えればいいだろ」

面倒だったアーティはクロノを払うように手を動かし、再びタバコを吸う。

「考えろって……分かる訳ないだろ！」

「あつそう。でも、何でこんなのをお前が持ってた？ 普通は議会にステイの使者とかが届けるはずなんだけど。まっ、相手にとつては敵国である訳だし、留まっていたら殺されるとでも思ったのか

な

「さっきから何を話してんだ？」

二人の様子に気付いたテリーが店内の奥の部屋から出てくる。

客だと思ったのだろうか、多少の笑顔を作っていた。

だが、アーティを視認した途端、テリーは怒りの表情へと変わった。

「てゆうか、アーティイ　！　タバコは外で吸えって言ったじゃねえか　！」

恐るべき早さで鞘から剣を引き抜いたテリーは、アーティがくわえているタバコを斬り落とす。

数センチ前を剣が横切ったアーティは、呆然とした様子で静かになった。

「チツ、バカが！　オレがタバコ嫌いなことぐらい知っているだろ！　アーティ、テメーじゃなかったらとっくに叩き切っているところだ！」

「ちょっと、いいか？」

もう既に叩き切っているじゃないかと思いつつも、クロノはそれを口にしない。

「どうした？」

鞘に剣を戻しながら、テリーは対応する。

「スロートが宣戦布告をされたみたいなんだ、どうすれば良いんだ。教えてくれ」

「はっ？ どうするって、何も考えてなかったの？」

「まさか、敵がまた攻めてくるってことをかい？ テリー、知っているんだっ たら何で知らせてくれなかったんだよ！」

「マジかよ、お前が国の再興だけで独立が勝ち取れるだなんて考えているとは思っていなかったよ。敵はな、もうこの国を取り返すため巻き返しを図っているんだ。そう考えるのが当然だろ？」

「だったら、スロートの皆に戦争を伝えないと！」

「ああ、それが一番良い。それと、ステイは軍事国家だろ。こっちも同等なくらい戦力を上げないとまた占領されるよ」

その後、宣戦布告されたという事態にとにかく焦っているクロノにテリーはこれからどうすれば良いのかを魔導剣士として観点からの確に指示する。

指示されたクロノは内容を理解し、議会を通してスロートの危機を通知。

クロノの対応は早く、宣戦布告という危機を早急に国全土に発令することが出来た。

そのことでスロート城へは民衆や元小国の兵士が志願兵として続々

とやってきた。

民衆たちは剣の振り方、弓矢の弾き方などの戦い方さえ知らないが、他国から従属的な支配を受けなくなかったのかとても士気は高かった。

「あのさ、オレらがここにいたらヤバくないか？」

スロート城にやってきた志願兵たちとは別に、何故か城の応接間に案内されたアーティは落ち着かない。

当然だが緊張して落ち着かない訳ではなく、久しぶりの大金の匂いを感じ取っているからである。

あわよくばと思い勝手にスロート城へ出向いたにもかかわらず、応接間に招かれるというVIP待遇はアーティにとってヤバかった。

「少し落ち着けて。オレたちこそここに在るべきなんだよ」

「なんで？」

当たり前のように話すリュウの言葉の意味が分からなかったのか、テリーに聞き返す。

「なんで……って、わざわざオレに聞くなよ。リュウと話してんだから、そのままリュウと話せばいいだろ？ とうるか考えれば分かるだろ、オレたちは魔導剣士だからスロートの最重要戦力ってわけ」

「そう、テリーの言う通りだ」

テリーの説明が終わったと同時に、クロノが応接間に入る。

クロノはアーティたちに軽く挨拶をすると、ここに集めた理由を話し始める。

「アーティ、テリー、リュウの三人と、ここにはいないけどライル、ルウ、綾香、杏里は結構強いから兵士たちの隊長として、この城に集まっている志願兵や民衆たちを率いてもらう。勿論、彼らの戦闘能力促進も頼む」

「はー、やっぱりそういうことね。待っていましたとは言わんばかりにとはまさにこのことだね。早速依頼金の話になるけど全員を雇うなら料金は高額になるよ。料金はそうだな……戦争だし、大体100万と……」

「何を言っているんだ、アーティ？ 普通こういつ時ってタダだろ、タダ」

「なっ……に……？」

タダという想像を絶する言葉に絶句し、アーティは動かなくなる。

「ああ、それでもいいよ。その代わりに食糧と武器は提供しろよ」

結局テリーがその案を受け入れ、タダ働きになった。

クロノがタダ働きを持ちかけた理由は新しく出来たばかりのスロー

トの財政はとても切迫しており、戦争をするための資金すら殆ど無いに等しい。

そのため、アーティたちを営利的に雇う金なども無かった。

クロノが金を払いたくない理由が明白に分かったので、アーティも仕方なく納得した様子。

数日かそれとも数週間かは分からないが確実に迫り来るだろう脅威に対応するために、各々が引き受けることになった部隊の能力を高めることになった。

宣戦布告から数日が経過した頃、スロートの戦力は戦うことを可能とさせる程になり始めた。

ここまで戦力を増強出来たのは素早い発令と民衆の国を守りたいという強い意志によるものであることは間違いない。

しかし、それは敵も同じく、スロートから偵察に出ていた斥侯せいこうの情報によると敵の主力の軍団が出撃したと報告があった。

それを応接間……臨時の作戦会議室で、クロノは聞いていた。

「なあ。これって、どうして敵が主力の軍団だと分かったんだ？」

同じく作戦会議室にいたライルが疑問に思ったことを聞く。

「それは勿論、あの三剣士の三人が出揃っていたからだよ。そいつらに出くわしたら絶対に一人で戦おうとするなよ。ライルのレベルだったら殺されるかもしれないからな」

「忠告どうも。オレは魔導剣士なんかには絶対に負けられないけどな」
クロノの発言に対して、自身は魔導剣士に勝つことが出来るはずだ
という意志から、ライルは反発する。

「兄さんたち、何話してるの？」

ライルと一緒に作戦会議室に入ってきたルウが訊ねる。

「ふうー……」

溜め息混じりに、ライルはルウから目を逸らす。

「……………？」

何事かと、ルウはライルを見上げた。

「いや、何も話していない。それじゃ、オレは剣術の練習をしてく
るよ」

「兄さん？ 待ってよ、僕も行くよ！」

「来るな、お前は全然来なくていいんだ」

ライルはルウから目を逸らしたまま、部屋を出ていく。

「兄さん……どうして？」

ただ、部屋から出ていくライルを見つめたまま、一人取り残された

ルウは悲しそうな声を発した。

「あの兄弟は仲悪いのかな？」

悲しげな表情を浮かべるルウを見ながら、クロノはそう思った。

翌日、戦いの準備のため、スロートの重要な砦に志願兵たち三千人程を集結させた。

当然だが、この三千人がスロートの略全兵力といっても過言ではない。

敵兵士の数は斥侯の情報によると、あの魔導剣士たち三人とケルド、クリスという将校が二人、引き連れたステイ軍兵士数は約五千らしい。

どうやら敵部隊は将校一人につき、約千人の兵士が配置されるよう編成されているだろうと予測が付く。

さらに斥候からの情報により敵部隊が、この砦までの距離からしてあと数刻程で戦うことになるとの報告がなされるとアーティは以前から決めていた作戦についてを、砦の作戦会議室に集めた隊長のメンバーに一通り話し始める。

「以前から決めていた通り、奇襲はライル、ルウの部隊四百人。誘導は杏里、綾香の部隊五百人。白兵戦はオレ、テリーの部隊千八百人。伏兵はクロノ、リュウの部隊三百人だ。白兵戦の部隊はこの砦

の近くの森へ誘導部隊が砦に敵の部隊を引き寄せるまで潜伏する。誘導部隊は砦から離れた所から敵の部隊を確実に砦の城壁にまで近付ける。これは当然だな、ここに全兵力を集めているのにスロートまで素通りされては適わないからね。奇襲部隊は砦の城壁に隠れ、誘導部隊が砦内まで退却した後に一斉攻撃を仕掛ける。もし負けそうになった場合、伏兵部隊は戦わず全軍撤退するからな……ってことで配置に付こうか？」

数時間後、斥候からの情報通りに敵部隊が配置された誘導部隊に迫ってきた。

敵兵は全てが重装備で以前まで城を警備していた敵兵とは比べ物にならない数。

まさに、恐怖を覚える程である。

敵兵たちを確実に砦へと引き寄せるため、砦から離れた場所に誘導部隊は配置されていた。

理由は無論、スロートの城などへ行かせないため。

略全兵力を砦に配置しているため、どうしても砦で戦わなくてはならなかった。

「どうして、ボクが誘導部隊に参加することになっちゃったんだろ
う………凄く怖いよ」

圧倒的な敵兵の数に杏里は恐怖を感じ、震えていた。

「大丈夫よ、杏里くん。作戦通り、最初に私たちが奇襲部隊のいる

皆まで誘導すれば奇襲部隊や白兵部隊が戦ってくれるのよ。スロートの戦力がこれだけだと相手に油断させることが私たちの部隊の役目なの。どうせ、すぐに逃げるし」

俯いたままの杏里に綾香は笑顔で話す。

「でもでも……最初に戦うのはボクたちなんだよ？」

そうした杏里の不安が残ったまま、誘導作戦を展開することになった。

「敵を狙えー！」

兵士の号令で草原に伏せていた兵士たちが立ち上がり、全て弓を構える。

戦術はゲリラ方式。敵の油断をつき、少しでも数を減らすことが目的だった。

「今だ、放てー！」

号令と同時に弓矢が放たれ、弓矢は数十人程の敵兵を射ぬき打ち倒したようである。

先手を取られた敵部隊は全軍突撃という勢いで杏里たちの部隊へと迫ってきた。

「引き付けるのには成功したようね。そろそろ、皆まで逃げる？」

「うん、早く逃げようよ！」

「ところで……杏里ちゃんは何でトンファー使いなの？」

退却をする最中、綾香は杏里の腰にあるサイドパックにトンファーが装着されていることに気付く。

はつきり言っただけに興味は無かったが、この状況でなのか訊ねてしまった。

「ボクね、見た目がこんなだから、なよなよで女みたいだってバカにされたことが何度もあるんだ……」

杏里は寂しそうに語る。

「身体を鍛えるためにトンファーを始めたんだけど、これを持つと本当に強くなった気がするの……っていうか、杏里ちゃんって呼んだ？」

「えっ、なに？ さっきから何か言ってたの？ 今はそんなどうでもいいことより、逃げることだけを考えましよう」

さらっと綾香が流したため、微妙に杏里は傷付いた。

全力で敵兵が追い掛けてくるなか、誘導部隊は運良く誰一人脱落す

ること無く砦まで退却出来た。

「あの少人数の部隊が綾香さんたちの誘導部隊だな……ってことは、その背後の黒い絨毯みたいな大軍が敵部隊ってことか」

砦の城壁にある見張り台から、隠れながら見ていたライルは圧倒的な兵力差を目の当たりにし、勝機自体がスロート側にあるのかと不安になった。

「そうだね。それじゃあ、兄さん。綾香さんたちが砦の門を通過したら一斉攻撃しようね」

「……………」

ライルは敵部隊を眺めながら、ルウの問い掛けに全く反応しない。

「兄さん？」

「煩い、オレに話し掛けんな」

「どうして……？」

ライルに最近いつも冷たく接されているが、初めて話し掛けるなど言われ、ルウのテンションは急激に下がった。

一先ず、誘導部隊が城壁の門を通過したので射程範囲に入った敵部隊に砦の城壁の上に隠れていた奇襲部隊が一斉に弓矢を浴びせる。

どうせ相手は民衆上がりの今逃げまくっている連中くらいだろう。

そのように敵兵の殆ど全てが油断していた。

そのせいかいきなりの攻撃であったため、多数の死傷者が出て、混乱状態に陥る。

その後、白兵部隊が突撃したので誘導部隊も皆から反転し戦いを始め、多数の兵士が集まり瞬く間に乱戦となった。

この混乱を招く結果になった原因はステイの兵たち、将校が油断していたためだった。

だが、油断したとしても、それは仕方が無い。

通常、この数日間という期間で従属国とされた国が支配していた国よりも戦力を増強出来る訳もない。

例え寄せ集めたとしても当然のように烏合の衆として存在することが出来る程度である。

分かり切っていたこと……それこそがステイにとっての盲点。

敵の情報を積極的に探ろうとしなかった。そのため斥候も出さず、戦いを生業としている魔導剣士がいることに気付けなかった。

彼らはもっと早く気付くべきであった。軍人でもないのに、何故スロートの城や城下街ではなく、民衆が砦を守っていたのかを。

「雑魚が！ オレの前に立つな！」

怒声を上げながらたった一人で数十人程のステイの兵をアーティが

軽く薙ぎ倒しながら叫ぶ。

魔導剣士としての破格の強さにステイの兵たちが圧倒され全く手出しが出来ずにいると、ある人物が殺気をアーティへ向けながら近づく。

殺気を感じた方へ反射的にアーティが振り向くと、装飾がされた貴族風の鎧を身に纏った将校風の男性がサーベルを構えていた。

その男性は三剣士の一人、サーボである。

「尋常ではない強さだな。貴様、まさか魔導剣士なのか？」

「ああ、そつだよ。にしてもよっぽど油断してたんだな。敵のことがまるで分かつちやいないな」

相手を挑発するようにわざと嘲るような口調で言う。

「何とでも言う方がいい。どうせ貴様等には全て死んでもらう」

挑発にのせられたのかサーボは直ぐ様、アーティに追撃する。

アーティは自身の間合いにサーボが入った瞬間に剣を振った。

しかし、縦一線に一気に剣を振ったアーティだったが、サーボの手にするサーベルの剣先で簡単に弾かれる。

細身のサーベルに弾かれるという予定外の反撃に一瞬、体勢を崩したアーティにサーボは尚も追撃。

「はっ！」

掛け声とともにアーティを貫く。

しかし、サーボは死を悟った。

サーベルに、その攻撃に手応え無し。

即座にアーティは接近を許してしまったサーボに体当たりをし、地面に押し倒すと剣で一気に貫いた。

呻き声を上げ、両の手で刃を引き抜こうとするサーボだったが血を吐き絶命する。

「思ったより、強かった…」

サーボから剣を引き抜くとアーティはそう呟いた。

「なんだ、サーボは死んだか。全く使えない奴だったな」

突然、誰かの声が聞こえた。

声の主を確認したアーティはサーボを倒し、油断してしまったことを後悔する。

その声の主は魔導使いのデュラン。ステイの三剣士の一人である。

勝機を確信したようにデュランは即座に呪文を詠唱し始めた。

デュランが魔法を詠唱し始めたため、アーティは即座にデュランを

斬ろうとしたが距離からして、とても間に合わない。

「フレイムタン！」

灼熱を帯びた火球がアーティを襲い、アーティは一瞬で消滅した。

「アーティ！」

アーティの近くで戦っていたテリーはアーティが消滅したことに気が付き、隙が生じた。

その隙を取られ、背後から来た敵兵士にテリーは斬り倒される。

薄れる意識の中、ある言葉をテリーは聞いた。

「確か貴様もあの男と多数の兵を殺していたな？ ああ、貴様は何もしなくて良い。これで私の手柄のみがまた増えるのだからな」

見下げた声でデュランが話すと再びフレイムタンを詠唱した。

救世主

アーティ、テリーの戦死により指揮系統と重要な戦力である魔導剣士を失ったため、砦での戦いはスロート軍の敗走により終わった。

同じくステイの軍勢も魔導剣士のサーボが戦死、急襲や攪乱などで戦力に深手を負い、奪った砦に少数の部隊を置いて一時撤退する。

なんとか生き延びたスロートの兵士たちはスロートの城下街へと命辛々帰還した。

逃げ延びる最中、リュウがアーティたちの戦死を知り、姿を消す。

魔導剣士の三人がいなくなってしまったため、今すぐにもスロートには強力な味方が必要だった。

このままの戦力では戦いに勝つどころか、スロートも生き残った者たちもステイからは守れない。

考えたクロノは議会を通して補充要員を行い、戦力を増強させた。

その掻き集めに近い補充要員の際、城に集められた集団に水人のノールという人物がいた。

ノールという人物はスロート城下街の外れにある家で、弟と妹の三人で暮らしている若い女性。

彼女は自らが水人だと気付かれないようにするため、兄弟と共に街外れに住んでいた。

この世界では水の状態変化を熱などの要素を何も加えずに自由自在に操れ、自らの身体自体を水のように変化させることが出来る水人は神の使いだと信じられている。

彼女はそのような違和感さえも感じさせる扱いをされるのを嫌い、今まで水人だとは誰にも悟られないよう生活を送っていた。

だが、今回の補充要員により水人であるということが露見し、城へ強制的に兵士たちが連れてきたのであった。

「離してよ！ ボクが何したっていつの！」

殆ど何も聞かされずに強引に城へと連れて来られた為、ノールは城内入り口で暴れている。

「落ち着いてください！ 我々は貴方の助けが必要なんです！」

しかし、所詮は若い女性。たった一人の兵士に簡単に静止させられてしまう。

「知らないよ、そんなの。ボクを家に帰してよう……」

兵士たちの腕を振り払うと、ノールは泣き崩れた。

ノールは何故自らが城に連れてこられなければならなかったのかの理由さえ聞かされてすらいない状況。

彼女が恐怖を感じ泣いてしまうのも無理は無かった。

「へえ、お前が噂になつてる例の水人？」

泣き崩れたノールに対してどうすれば良いのかと困惑している兵士を尻目にその光景を見ていた一人の男性が、泣いているノールに近寄ってきた。

「お前は確かに水人……所謂神の使いらしいけど、戦闘能力がないに等しいからつてクロノに戦闘指導をオレは押し付けられたんだ。じゃあ、そうゆう訳だから場所を移動しようか」

そのように話すと、嫌がるノールの手を強引に引き、ある場所へノールを連れていく。

男性が連れていった場所とは、城内にある剣術指導部屋であった。

「まずは剣術からしようか」

男性はノールに剣術指導をするため、剣を持たせようとする。

「貴方は誰なんですか……？ 何でボクはここに連れて来られたんですか……？」

「オレは、カイト。今回、お前を強くするために雇われた傭兵だよ。何でここに連れてきたかっていうとお前が水人だからだよ。神の使いなんだから、スロートを勝たせてくれよ」

「そんな……何でボクが神の使いなの？ スロートを勝たせるって……ボクは家に帰りたいよ……」

ノールは床にしゃがみ込み、渡された剣を手から放す。

「魔導剣士の連中がいなくなった今じゃ、アンタだけが頼りなんだ。諦めないで一緒に戦ってくれ！」

再び、カイトはノールに剣を持たせる。

「戦うなんて……できないよ。ボクは死にたくなんかない……」

「いい加減にしろよ。誰だって死にたくないし、戦いたくないんだ！でもな、祖国を守るために皆必死なんだ！」

しゃがみ込み俯くノールに対して、訴え掛けるようにカイトは彼女の両肩に手を置き揺らす。

だが、ノールは「ごめんなさい……」とただ謝る事しか出来なかった。

「くそ……これが水人なのか」

不安で泣くことしか出来ないノールを戦う気がないと受け取ったカイトは苛立ちながら部屋を出ていく。

修練場に一人残されたノールは床にしゃがみ込んだまま、泣き続けていた。

不安で怖くて家に帰りたくて、ノールはそうするしか出来なかった。

その時、床にしゃがみ込み泣いているノールの隣に誰かが座った。

「ゴメンな、こんなことさせて」

「……………」

ノールは手で涙を拭う。

彼女の傍へ座ったのはクロノだった。

「本来なら君にここへ連れてきた理由を伝え、君の意志を聞いてからスロートの軍にスカウトするか、しないかを決めるはずだったんだ。本当に済まない」

「……………」

俯いたまま、ノールは何も答えない。

「ここから言うのは……………独り言だと思ってくれ。でももし、感じたことがあつたら答えてほしい」

「……………」

「現在、スロートは隣国のステイというところから宣戦布告をされているんだ。そして、今の戦力差ではステイに勝つ事が出来ない」

「……………」

「ノール、君の力が本当に必要なんだ。頼む、力を貸してくれ」

クロノはノールに頭を下げた。

「ムリだよ、ボクに戦えなんて言ってるけど……………ボクは戦ったことなんてないし死にたくない。戦えなんて言われても出来ないよ……………」

「いや、ノール。それは違うよ。君には水人の能力が潜在しているから、ノールでも戦えるんだ。それに水を自由自在にどのような形にも変化させることが出来る君は間違いなく高度な水人だ」

「でも……ボクは高度な水人じゃない」

「そんなことはない、水の状態変化を操れて身体を水のように出来るノールは間違いなく高度な水人だよ。普通の水人は水の状態変化を一つしか使えないんだ」

「見たの？ ボクが水人化したのを？」

「ああ、見たよ。だからこそ、君の力を借りたい」

嘘だった、クロノ自身がそのような変化を見たこと自体無かった。

切羽詰っている状況のクロノは罪悪感に駆られながらも言葉を続ける。

それからクロノはノールに水人は、どうゆうことが出来るかを教えた。

例としてはノールも訓練すれば、水から氷の剣を作るなど物体化出来ること。

水人化すれば、剣で刺されても斬られても全く傷を付けられなくなるらしいということ。

説得するようにノールに話した後、クロノは立ち上がった。

「また、スロートがステイに負けてしまったならスロートも、民衆も、ノールも、君の弟たちもどうなるかは分からない。お互いの愛する者たちを守るために一緒に戦ってくれ」

「ボクは……」

ノールは何かをクロノに伝えようとしたが、やはり俯き言葉を発しなくなった。

「もし……それでも戦うことが嫌なら帰っても構わない。戦いなんて、誰もしたがるようなことじゃないからな。無理矢理連れてきて本当に済まなかった」

クロノが訓練部屋を去って行くとステイから弟たちを守らなくてはいけないことが自らの責務だと考え始めてしまっているノールは自身の水人としての能力を駆使して戦うことを決心した。

「ボクが、皆を助けられるんなら頑張ろう……でもボクは何をすればいいんだろう？」

ノールは戸惑いながらもクロノが言っていた水で物を作ることや身体を水に変化させる練習を始める。

先の戦いから数日後、スロートの砦を奪ったステイの部隊がスロートの街に攻めてくるといふ報告が砦付近まで偵察に出ていた斥侯か

らあった。

その報告を受けたクロノは隊長のみを城内の作戦会議室に集めた。

勿論、救世主であるノールも一緒に。

「皆、もう知っていると思うけどここにるのが水人のノールだ」

先にクロノは、ノールのことを紹介する。

「あと、ここにいる連中の名前を順番に言っていくな。以前からいたメンバーはライル、ルウ、橘綾香、春川杏里、それとオレ。新しく加入されたメンバーのカイト、ジーニアス、クレヴァー、ワイスだ。この連中は全員隊長として部隊を率いることになっている」

「よ、よろしく……」

ノールは緊張した様子で頭を下げる。

「そんなに緊張することはないよ、仲間なんだから。それじゃ今回の作戦を立てるけど、先に言うことがある。今回の作戦には戦闘能力の未熟なノールをまだ参加させないことにする」

「おい、何でだ？」

作戦会議室にカイトの声が響く。

「ノールには戦闘経験がないからこそ、経験を積ませるため戦場に連れて行くべきだろう？ それに救世主としてその場にいるだけでも兵士たちの士気を上げるのに役立つだろう？」

「確かにカイトの言う通りだ。けどな、ノールは剣さえまともに振れない、ただの女の子なんだ。まだ、戦場に連れていく訳にはいかないだろ？」

「……………」

カイトは納得がいかないのか、無言でクロノを見つめる。

「まだ、何かあるのか？」

「はいはい、分かりましたよ。納得すればいいんだろ？」

納得がいかないのか吐き捨てるようにカイトは言った。

決戦当日、ノールは戦う必要も無いため、いつも通り剣術指導部屋に籠もって物を水で作ることや水人化する練習をしていた。

ノールは戦いに参加しなくても良いことに心から安心してしたが、何とも言えない不安も同時に抱えていた。

戦う理由もないのに剣術指導部屋に籠もっているのはそれが原因である。

自身の存在を気付かれて以来、誰も自らをノールとして、一人の女性として見てくれていない。

人々は何か、各々が思う偶像だけをただ自らに見ている。

それを強く感じ取っていたノールは、戦争のため誰もいなくなった剣術指導部屋に一人でいる方が寂しくても落ち着けたのだ。

その時、剣術指導部屋に入ってくる人物がいた。

「なんだ、ここにいたのか。どうせ、ここにはいないだろうと思ったんだけどな。ほら、さっさと行くぞ」

部屋に入ってきたのは、カイトであった。

そして、近寄ってきたカイトはいきなりノールの腕を引っ張る。

「痛いよ……離して……」

ノールはカイトの手を振り払おうとする。

「暴れるな、お前を戦場に連れていくだけだ」

「どうしてなの？　ボクは戦わなくていいってクロノさんが言ってたじゃない？」

「お前はクロノの言った通りに全てが行われるとでも思っていたのか？　とにかく、お前には兵たちの士気を上げるだけの道具になってもらう。もし、来ないというのなら……分かるな？」

カイトは背負っていた死神が扱うような形をしたサイズという鎌をノールの首筋に宛がう。

「そ、そんな！ ボクは死にたくなんかないよ！」

「なら、戦場に来るんだ。これからも生きていきたいのならな」

拒否することが出来なくなってしまったノールは自らの意志とは関係なく戦場へ向かわねばならなかった。

戦場へ向かうと、今回は救世主ノールも戦闘に参加するという演説をカイトは行う。

「我々スロート軍は救世主、水人のノールの力を借りることに成功した！ 彼女の力があれば必ずや我々は勝利を手にすることが出来る！」

カイトの演説によって、兵士たちは神の使いと信じられる水人が仲間についたと知り、そのことによって兵士たちの士気は上がる。

彼らは力と勇気で満ち溢れていた。

「ねえ。ジーニアス君はさ、あの救世主様のことどう思う？」

カイトの演説を他の兵士たちと一緒に聞いていた杏里は、演説の際にカイトの傍にいたノールのことを見つめながらジーニアスに訊ねる。

「へっ？ 僕かい？ うーん、あの人は優しそうな感じだから全然戦闘向けに見えないね。あの人なんかより絶対僕たちの方が強いよ」

ジーニアスは何となく答える。

「でも、どうして水人は神の使いなんだろう？ 水人が敬われるくらいなら僕だってエルフなんだから、人間に敬われる感じであるはずなのに……」

「そうだよな。スゴく綺麗で可愛いし、ボク好きだな。救世主様のこと」

「えっ？ ちょっと杏里くん？ 何言ってるの？」

質問をしておいて、杏里は全くジーニアスの話を聞いていなかった。演説が終わったのち、偵察に出ていた斥候が前線本陣に帰還する。

情報によると今回の敵部隊の戦力は兵士約三千人とクリス、ケルドの将校二人。

明らかに、偵察と戦闘の両方の要素を含めた構成になっている。

スロート軍の戦力は兵士約二千五百人とカイト、ノール、ジーニアス、杏里、ライル、ルウである。

今回の戦いは以前の敗戦によってステイの軍を砦から、よりスロートの領地内に接近させてしまったため街から殆ど離れていない辺境で戦うことになった。

そのため、クロノが作戦会議の時に指示したことを実行することにした。

それは小競り合いが起こるたびにスロートの本陣……つまり城に向

かって退却することだった。

「一歩も引くんじゃねえぞ！ 逃げたらどうなるか分かってんだよな！」

敵の将校ケルドが自軍を脅迫することによって水人がいると噂されるスロート軍から兵士が逃げないように叫ぶ。

しかし思いの外、簡単にスロートの領内で毎回のように勝利を収め、ケルドの部隊は勝利に沸き立ち始めた。

「ははっ、やはりか。この前スロートに負けそうになったこと自体が単なる偶然だったんだ。もはや魔導剣士だろうが、水人だろうが恐れるには値しねえ」

そう確信めいた発想を得たケルドは自軍の部隊を砦にある本陣から離れ、よりスロートへと接近した。

それは当然、畏だったのだが…

一方、スロートの前線本陣ではカイトとノールが会話をしていた。

「ノール、お前はオレの後ろにいる」

「なんで……？」

「理由を聞いてるのか？ それは、お前が実戦経験もなく剣程度も振れないようだからだ。オレから戦い方を見て学べばいいだろ」

「……………」

「一応、言っておくが自分の身は自分で守れ。オレはお前を守る」とはしない」

「それって、ボク死ぬかもしれないじゃん？」

「そうだな。どうせ戦うことも出来ないんだから、せいぜい殺されないように逃げ回っているんだな」

「……………」

言葉では言い表せられない嫌な気持ちにノールはなっていた。

その話の間もスロートから離れた位置に建てられた前線本陣にステイのケルドの部隊が迫り、戦闘になっていた。

この時、今までのように逃げ出さないどころかスロート軍が自軍を圧倒していることにケルドとケルドの部隊は気付く。

ただバラバラに逃げていたスロート軍を打ち破ったのだと過信していたケルドの部隊は皆の本陣から離れ過ぎ孤立。

そして、前線本陣へ向かう別ルートから背後へ迫っていたスロートの伏兵などの攻撃により、囲まれてしまっていたのが全ての原因だった。

その激戦の最中を死神が扱うような刃の大きな鎌で敵を薙ぎ払っているカイトをノールは必死に追い掛け、彼の戦いを見ていた。

「この人は何でこんな簡単に人の命を奪えるの……………」

初めて、人の死をノールは見ていた。

カイトの鎌の一振りですべての兵士たちの死に絶える様子を。

ノールが感じていたのは吐き気を感じる気分の悪さと次は自らがつらくなるかもしれないという死の恐怖だった。

「この程度の兵だけなのか？」

ノールの意志とは関係なくカイトは敵を倒し続ける。

戦い慣れていた彼であったが、自らよりも熟練の低い敵兵しかいないことに油断をしていた。

その油断を突くかのように、一人の敵兵が捨て身でカイトに突進。

鎌を振り切った一瞬に近いタイミングを狙い、間合いに入り込んできたのだ。

「これは殺られる……」

攻撃に対して、カイトは瞬間的に悟る。

…が、敵兵はカイトに攻撃を与えることなく倒れた。

「助かった……のか？」

倒れた敵兵の方を見るとノールが水人の能力で氷の剣を出現させ、その剣で兵士を突き刺したようである。

「へえ、やれば出来るんじゃないか。少しは見直したよ……ノール？」

カイトが声を掛けた時、ノールにはある異変が起きていた。

彼女は肩で息をする程に深く呼吸をし、ただ呆然とした様子で刺し殺した兵士を眺めていた。

「人を……人を殺しちゃった……」

兵士を刺し殺した刃から流れ落ちる赤い鮮血が自らの手を伝う。

その瞬間、ようやく自分のした行為を悟ったのか身体を震わせたまま、ノールはその場にしゃがみ込む。

「おい、ノール！ 一体どうしたんだ！」

「ごめんなさい……ごめんなさい……ボクは貴方を殺したくなかったのに……」

カイトの言葉が聞こえていないのか、ノールはその場で泣き崩れ、死んでしまった兵士に許しを乞う。

「どうしたんだよ！ くそ、世話が焼ける！」

カイトには敵兵を倒しただけで、何故ノールが泣かなくてはならなかったのか理解出来なかった。

しかし、足手纏いな状態に陥ってしまったノールを放っておく訳に

もいかず、泣き崩れてるノールを無理矢理抱きかかえるとカイトは戦場から離れた。

二人が戦場を離れてからも戦いは長時間に渡り続いた。

今回はライルがステイの将校ケルドを撃破したためスロート軍の勝利で戦いは終わった。

その後、生き残った者たち全員で街に凱旋する。

凱旋した兵士たちをスロートの人々は祝福する。

心身ともに衰弱し、何もかにもが嫌になり始めていたノールにとってはまさに異様な光景だった。

城の中庭で人を殺めてしまったことにノールは苦悩していた。

悩んでも、既にどうしようもないことになってしまっていることを最初から彼女は痛い程分かっていた。

「人を殺しちゃったボクなんか生きてる価値なんて無い……よね」

ノールは中庭にある三人掛け程のベンチに座り、一人泣いている。

そして、徐に氷のナイフを作り出し、自らの首筋に当てる。

彼女は自殺をしようとしていた。

だが、それ以上ナイフを進めることが出来ない。

死の恐怖は彼女の手の動きを止めた。

「あつ！ 救世主さま！」

その時、声とともに杏里が彼女の目に入る。

ふいに杏里が近付いて来たため、ノールは氷のナイフを昇華させ何事もなかったように振る舞った。

「ど……どうしたの？ えーと、君は杏里ちゃんだよな？」

「もう！ どうして救世主さまもボクを女だって間違っの！ ボク怒るよ！」

「だって、そう見えるじゃん」

杏里は怒っているようだったが怖さを然程も感じなかった。

杏里といると安心出来るような気がして久しぶりにノールは笑顔の表情を作った。

それから、杏里はノールの隣に妙に寄り添うような感じで座る。

すると何かに気付いた杏里がノールの顔を覗き込んだ。

「どうしたの？」

「ノールちゃん、泣いてたの？ あ、間違えた、救世主さまだった」

「泣いてないよ。それとボクを救世主様なんて言わなくていいよ」

「嘘だよ、だって目が赤いもん。何かあったの、ノールちゃん？」

「ボクね……人を殺しちゃったの……」

ノールは少し俯いた様子で答える。

「何人？」

杏里は表情も変えずに笑顔のまま、そんな風に普通に聞く。

「兵士の人を一人だよ……」

また、ノールは吐き気がした。

自らを人殺しだと認めてしまっている様で。

「なんだろ、ボクは今日だけで二十三人倒したよ」

「えっ………？」

一瞬、ノールは杏里の言っている意味が分からなかった。

杏里がさっきと変わらない笑顔で、人殺しを自慢気に話すことが理解出来なかった。

「杏里くんは自分で何を言ってるか分かってるの!」

「どうしたの、ノールちゃん?」

きよとんとした表情で杏里はノールの顔を見つめる。

何故、ノールが突然怒ったのか分からない様子。

「ノールちゃんは褒めてくれないの? 皆は凄いつか英雄だつて言ってくれたのに、どうして?」

悲しそうな表情をする杏里は何故なのか分からず戸惑う。

この時、ノールは人殺しを英雄視させている事実を知る。

自身よりもまだ子供の杏里さえも、そういう風に戦争を考えていたことにも。

この黒い感情というべき殺戮を終わらせたいと深く考えるようになった。

その夜、自室でノールは鏡に映っている自分と向かい合い、一体自分は何のために戦っているのか一人考えた。

その結果、自分ができることといえば、この戦いを早く終わらせる事だけであった。

そうすれば犠牲者も少なく済むし、それに杏里みたいに自分より若い人たちにそんな考えをさせなくて済むと…

しかし、そうするためにはノール自身も戦わなくてはいけなかった。

「ボクは人を殺したくない。でも、そんなこと言っていると戦いはずつと続いて今以上に沢山の人が死んじゃう。だから、ボクも皆のために戦う。そしてこの国を救った後、ボクが殺してしまった人のために……償いのために……」

鏡に映った自分に向かって、あることを心に誓う。

次の日からノールは剣術指導部屋で氷の剣を具現化させ、敵となる兵士を殺すための訓練を始める。

最初は剣をただ棒のように振り回す程度がやっとという感じであったが、徐々に剣で物を断ち切る程の能力が身に付いてきた。

そして、一つの剣で戦うより二刀流で戦う方が、自身にとってより効果的に戦えるということに気付く。

「ノール、以前より感じが変わったな。一体何があったんだ？」

いつも通り、ノールに剣術指導をしていたカイトが話し掛ける。

「ボクは変わったよ。戦いを終わらせるためにボクも戦うって決心したんだ」

カイトに何気なく答える。

それは、自分自身に言い聞かせるようにも受け取れた。

「そうか、まあ頑張れよ」

もう自分が教えなくても、ノールなら一人でもやっていけるとカイトは思った。

ある日、ノールは人がどこにいるか分かるという水人の特殊能力を得た。

この能力が何かに役立つかもしれないと思い立ったノールは中庭にいたクロノに話すと、ある人物を探してほしいと頼まれる。

「ノール、その能力を使って探してほしい人がいるんだけど……出るか？」

「確かに出来るけど、この能力って魔力の燃費が相当悪くて効率が良くないから一日に一回だけね」

「そうか……」

「で、誰を探してほしいの？」

クロノが探してほしいかったのは、ステイ軍と初めて戦った後に姿を消した魔導剣士のリュウのことである。

リュウを探してほしいと頼まれたノールは早速その能力を使う。

「えーと……この城から北東の方角に十キロ近く離れた所にある民

家にリュウさんから出てる水蒸気を感じ出来るんだけど、探しているのはこの人で間違いないと思うよ」

そこまで話すと、ノールはふらふらつとよろめきながら倒れた。

「ムリ……もう疲れた」

倒れたノールはそのまま眠り始める。

「ちよつ、ノール、こんなところで寝るな。ここは中庭だよ」

クロノが顔を軽く叩いて起こそうとしたがノールは起きる気配が無い。

仕方がないので近くにいた兵士にノールをノールの自室に持つていくようにと頼み、クロノは一人でリュウの下へ会いに行った。

クロノが言われた通りに城から北東の方角に向かって歩いて行くと確かに集落があった。

しかし、この時クロノは失敗したと思った。

「どの家にいるんだ？ 大まかな事しか聞いてなかったから分からない」

仕方がないかとクロノは思いながら、一軒一軒調べていくことにする。

「すみませんが、この辺りでリュウという男性が何処に住んでいるかを知っていますか？」

まずは一軒目としてクロノが近くの民家のドアを開けて呼びかける。すると、その家の奥から声が聞こえた。

「リュウってオレの事だけど、誰だ？」

クロノは一軒目からリュウを見付けたようだった。

玄関まで出てきたリュウは、自らに訪ねて来た人物がクロノだと知る。

「なんだ……クロノか。何しに来たんだ？」

「何しに来たんだじゃないだろ。お前、なんでいきなりいなくなんだよ。心配したんだぜ、オレたちは」

溜め息をついてからクロノは言う。

「別にいいだろ？ オレがどこに行っただって構わないだろ」

「別にいいか……なら、アーティたちのことはどうするんだ。悔しくはないのか？」

「その言葉からするとやっぱり、アーティたちは……」

立ち眩みをしたかのようにフラツと、リュウは体勢を崩した。

「あいつらが死ぬなんて……いなくなることで自体今まで一度も考えたことがなかった。今も、きっと何処かで生きていると思いつながら

過ごしていた。だが、それはもう止めだ。アーティたちを殺した奴が憎い……」

「……………」

それを何も言わずに黙って、クロノは聞いていた。

「クロノ、またオレも一緒に戦っていいか？ どうしてもアーティたちの仇を討ちたいんだ」

「勿論だ、リュウ。また一緒に戦ってくれ」

説得により、リュウは再びメンバーに加入されることが決まった。

クロノとリュウがスロートに戻ってくると街の民衆はリュウが戻ってきたことを歓迎した。

戦いから逃げた自分を受け入れてくれた人たちのためにも死ぬ気で戦おうと、リュウはまた決心した。

リュウのメンバー復帰により戦力が増えたため、今度はスロート側がステイに攻勢をかけるとクロノは決める。

それは、クロノがこの戦いに勝つことが出来れば早期講和も可能だと考えたからである。

その前哨戦として、先の戦いで奪われた砦を奪回することになった。クロノは以前と同じように隊長の人物を城の作戦会議室に集め、どう戦うか作戦を練ることにした。

「皆、最初に言うがこの戦いはオレ達が不利だ。砦には当然だが多数の兵がいて接近すればオレたちを弓で長距離から狙ってくるだろう……という事で何か良い案はないか？」

「スパイとして、誰かを送り込んでみるのってどう？ それで内部を混乱させるってのは？」

「隊長としての強さを誇る人物はもう姿を知られているからな。それに普通の兵士には任せられる内容ではないし、今の状態で採用できないな」

ルウの問い掛けにクロノはそう答える。

「そんなの簡単よ。ノールちゃんを罠に使えばいいのよ」

捕まえたという感じでノールを背後から抱き締めながら、綾香は笑顔で言う。

「……………」

何故、自分に綾香が抱き付いているのか分からないという感じで、ノールはなんとなく綾香を振り払わないでただ黙っていた。

「確かに裏切った手土産としてノールを連れていけば砦に潜入出来そうだけど、策略だとバレた場合が問題なんだよな。その状態じゃ

助けることなんか出来ないし、それは止めよう。うーん、いい案がないから砦を囲み補給路を断ち切る持久戦で行こうか」

「えー！ 私の案が良いと思うのに…」

「さすがにムリだよ。そういえばだけど、綾香って散弾銃が得意って言うってたけど散弾銃って何だ？」

「これはね、私がルーメイアから持ってきた物よ。弾が無くなったから今は魔力を弾に変化させて使っているの。あと、この銃は弾込めが壊れているからって使えない訳じゃないわ」

シヨットガンを自慢げに構えながら綾香は話す。

「ふーん、そうなのか」

「ってというか、貴方が言ってた補給路を断つ作戦が一番良いじゃないの。なんで良い案があるのにわざわざ私たちに聞いたの？」

結局、クロノが考えていた作戦で決まり、翌日スロート軍は砦に向かって進軍を始めた。

スロート軍が砦の周囲まで進軍するとステイ軍はクロノが最初に言った通り、砦の城壁で弓を構えていた。

「進軍してきたってことはもう分かっているらしいな。でも、近付くことは無いってことには気付いてないらしい」

クロノは砦の方をじっと眺める。

「ねえ、このままステイに行つて不意打ちみたいな感じでステイを占領した方が良くんじゃないの？ 砦で、わざわざ戦うんじゃないの？」

「それは出来ないんだ、杏里。何故かはこのままステイに行くと、ステイにいる兵士と砦にいる兵士とに挟み撃ちされる可能性があるからな」

「あつ、そっか」

杏里は素直に頷く。

「もしそうならなくとも砦の兵士がスロートに攻め込むことも考えられるしな。それでは、オレたちが降伏しないといけない」

「言われてみれば、確かにそうだね。クロノさんって見た目と違ってちゃんと物事考えてるんだね！」

「えっ、なに？ オレってどういう風に見られてんの？」

微笑ましい様子で言い放つた杏里に、クロノはいつも自らがどう思われているのか微妙に気になった。

一方その頃、砦では城壁の上から砦の周囲を囲み始めるスロート軍を眺める人物がいた。

それは三剣士の一人、クロウである。

クロウは殺気立った様子で怒鳴っていた。

「あいつら、やっぱり砦囲みやがった！ しかも弓矢の射程範囲の外だ！ だから、先手を打つために伏兵を用意するべきだったんだ！」

「クロウ將軍、落ち着くんだ。私たちはもう負けることが出来ないのだ。それに民衆たちは革命を起こそうとしていると噂されているのだからな」

ステイの女性將校、クリスが話す。

確かにクリスの話す通り、ステイでは民衆が革命を起こそうとしていた。

理由は当然、民衆たちが戦争をする気などないことを意味している。

しかし、三劍士の三人が国王を唆し、国王の命令により民衆は戦わなくてはならなかった。

それに前回の敗戦、砦を奪ったとはいえ前々回のとても勝ったとは言えない戦い。

もはや、ステイは完全に背水の陣の状態。

ここで負けるようなことがあれば確実に革命が起きる、その状態であった。

「それに私たちには援軍が来るのだからな。救援さえくれば、この戦況でも勝つ見込みはある」

「援軍だと……？ 援軍がステイから来ると今でも思っているのか

「？」

「どういう事だ？ ついさっき、デュラン将軍が…」

「デュランが援軍なんて呼ぶはずがねえに決まってるだろ！ お前がデュランをどう考えているのか知らねえが最初から来ねんだよ、援軍なんてなああ　！　お前はオレにデュランが逃げたことを報告さえすれば良かったんだ！　だったら、このまま皆に籠城したって何の意味もねえ！　全員で水人のノールだけを狙え！　奴さえ倒せばスロートの連中は戦意喪失するかもしれねえからな！」

追い込まれたクロウは籠城を諦め、兵士を率いて砦から出撃した。

「おい、クロノ！　敵が攻めてきたぞ！」

監視の為、砦を眺めていたリュウが叫ぶ。

「確かにそうだな。囲まれたとしても以外と籠城するかと思っただけだ。こうなるってことは、ステイ側は援軍を待っていることが出来ない理由が何かしらあるようだな」

クロノはそう思うと、声を張り上げ兵士全てに聞こえるように叫ぶ。

「よし、全員で片を付けるぞ。突撃開始だ！」

砦から出撃するステイ軍と砦を囲むスロート軍が両軍激突し戦いになった。

「クソがあ　　っ、水人はどこだ！」

剣を振り回しながらクロウがヤケクソ気味で、ノールを探しながら戦っていた。

その喚きながら戦うクロウの存在に気付いたライルが迫り、クロウの背後から剣を振り上げ斬ろうとする。

しかし、背後からの攻撃にクロウは見抜いていたかのようにバックステップで背後に素早く下がり、剣を振り下げられる直前でライルに体当たりを加える。

「オレがただ喚き散らすバカだと思ったのか？　未熟者め、貴様ではオレには勝てん」

倒れ込んでいるライルに対して、クロウが言う。

「見抜いてたのか、さすが魔導剣士だな！」

直ぐ様にライルは立ち上がると追撃し、剣を振るがクロウは剣の腹の部分でそれを弾く。

「もらった！」

タツクルのような構えでの攻撃にクロウは体勢を崩す。

…が、ライルは攻撃の後、片足に力を入れることが出来ず、よろめき倒れた。

「何が……起きた？」

違和感を感じた足を確認すると出血をしていた。

「さっきの攻撃に体勢を崩した訳ではない。貴様には見えなかったのか？」

地面にひれ伏すライルにクロウは見下げた眼で眺めると、剣を頭上高く振りかざし、一気に振り下ろす。

普通に人を刺し貫くとは別格の酷い音とともに、自身の身体を弾き飛ばす衝撃。

それはライルを刺し貫いた音では無かった。

「ああ……!!」

誰かの苦痛に満ちた叫びをライルは聞く。

見上げると、ノールが瞬間的にライルを庇ったのか胸を刺し貫かれた状態で剣を抜こうと必死に藻掻いていた。

心臓付近を刺し貫かれた一撃は致命傷だった。

どう見ても助からない深手を負ったノールは意識を失った。

「……」

「なんだか眩しいなあ……ボクって、何してたんだけ？」

きらきらと光るような暖かい不思議な明るさを感じ、ノールはゆっくりと閉じていた眼を開く。

仰向けで倒れていたノールが目を覚ますと、柔らかくふわふわする感触を背中に感じた。

ゆっくり身体を起こすとそこは今までいた戦場とは全く違う、雲のようなものが地平線の先まで続く不思議で幻想的な世界だった。

ふわふわするものは土の地面の代わりに存在する白い雲のようだ。

この風景を何となく見て気付いた……ここが天国という場所なんだと。

だが、不思議とそのことをすんなりと彼女は受け入れる。

それは自らの背中にも聖書で見たことがある、天使と同じ白い羽根が存在したからであった。

「ボクは死んじゃったんだね。ミール、エール……死ぬ前に逢いたかったよ……」

自然と頬を伝うモノを静かに拭う。

死んでも、天国にいても、これ程辛いのは何故だろうか？

止まらない涙に、心からノールは思った。

そんなノールに物凄い勢いで、何かが接近していた。

「とっつー!」

その何かの掛け声と略同時に、ノールは背後からの衝撃により弾き飛ばされた。

「いったあ……? 今のは何……?」

衝撃によって殆ど顔から雲に倒れ込んだノールは、即座に起き上がり自らの背後を確認する。

しかし、背後には何もなく余計に訳が分からなくなった。

「おい、どこを見ているんだ。上を見る、上を」

ノールの上の方から落ち着いた感じの女性の声が聞こえた。

宙を仰ぐと、そこには白い鎧を身に纏った一人の女性が空中に浮かんでいた。

それを可能にしているのは女性の背面に存在する彼女の背丈程ある天使の翼をためかかせているからである。

「何で浮いてるの……?」

「お前と同じ天使だからだろう?」

不思議そうに女性はノールの問い掛けを返すと、雲の上で自らを見上げているノールをいきなり抱きかかえ空中へと一気に舞い上がった。

「うわっ！」

全身が地面から完全に離れるという初めての感覚にノールはじたばたと暴れる。

「天使なのに空を飛んだことが無いのか？ 我々には羽根が生えているのだから空を飛べるんだよ。そんな我々には幼い頃からの常識を知らないと見ると、やはり先祖返りしたばかりの見習い天使であることは間違いないな」

そのようなやり取りを数分間程しながら天使の女性がノールを抱きかかえた状態で空中を飛行していると、大きな神殿と宮殿を足したような建物が見えてきた。

「あれは何？」

「あれはお前がこれから仕える女帝が住む宮殿だ。天使になったからにはお前に知って貰われないといけないことが沢山ある。そのため、私はお前をここに連れてきた」

天使の女性はその建物の入り口付近に舞い降り、ノールもその場を下ろす。

「それでは、中へと入ろう。それとだが、私の名はレイディアントという。よろしく」

「ボクの名前は……」

「名は別に言わなくていい。どうせ、これから会う女帝にも名前を伝えるのだから、その時に聞かせてもらう」

レイディアントは後で聞くという理由で、ノールの話を遮る。

そして、ノールを連れ、宮殿内の長い回廊を進むと大きな扉の部屋の前で立ち止まった。

「私だ、扉を開ける」

レイディアントの声に反応するように、扉は内側に向かって開き始める。

室内に入ると、そこはとても広い空間であり床には一面赤い絨毯が敷かれ、ノールが見たことのない煌びやかな装飾などが刺繍されていた。

「女帝アクローマ、先祖返りしたばかりの天使を発見したため連れて参りました」

レイディアントは数十メートル程離れた場所から跪き、玉座に座るアクローマに話し掛ける。

「ほら、お前。さつさと自己紹介しろ」

「は……はい。ボクはノールっています」

「……………」

玉座に座っていたアクローマは、がくつと体勢を崩す。

アクローマからは寢息のような音が聞き取れた。

「あれ？」

「またか……職務中に寝るな　！」

アクローマに向かって手をかざし、恐るべき速さで魔法の詠唱をレイディアントはする。

かざされた手からは光の波動ソレイユという魔法が放たれ、躊躇いなくアクローマへ直進。

ソレイユの光の波動は一直線に玉座に座るアクローマに届き……命中、玉座ごと弾き飛ばした。

「痛あ、なにすんのよ！　今の一体誰が魔法使ったの！」

私は怒ってますよ……って感じの表情でアクローマは起き上がる。

「私だ、アクローマ。これで目が覚めたか？」

「な、なんで……？」

眠そうな顔でアクローマはレイディアントの方をぼんやりと見つめる。

「ちょっと、レイディアント。どうしてそんな遠くにいるの？ 普通、私と話す際は私の近くまで来るのが通例でしょ……ホント、バカね。謝りなさいよ、今すぐに土下座で」

「お前が遠くから話し掛けられた方が女帝っぽくてカッコイイと私に頼んでいたから、こんな馬鹿げた距離からわざわざ声を掛けたんだらうが！」

「どういふことかしら、そんなこと知らないわ？ 私の関与があったとは到底思えないわね。でも、貴方がどうしてもって言うならそう言うことにしておいてあげるわ。私って、心が広いわね。だから、さっさと近くに來なさいよ」

レイディアントは怒った様子でノールの手を引き、倒れている玉座を直しているアクローマに近付いた。

「こんにちわ、貴方の名前を聞かせてね」

笑顔で、アクローマは訊ねる。

「ボクはノールって言います」

「ノール？ もしかして貴方って……あー、今はそんなこと関係ないわね。えーと、貴方は天使になったばかりでしょ？ だとするなら貴方に話さないといけないことがあるの。ちゃんと聞くのよ」

「はい、分かりました」

「なに、貴方？ かなり従順なのね。そういう子は騙されやすいから気を付けるのよ。それはともかく……まず、最初に良く勘違いさ

れているのだけどここは天国ではないわ。私たちは天使だけと神を崇めていない。偶像崇拜なんてくっだらなことは、はなからバカらしくてやってられないのよ」

アクローマが途中まで話すと、ノールは何故天使が神を信じないなどと堂々と話すのか理解出来ず、ただアクローマを見つめていた。

「ふふつ、貴方の表情を見ると大分混乱しているようね。でも、大丈夫よ。ステレオタイプな価値観なんて事実には直面した状態なら簡単に現実へと修正出来るものだから。それと、私の話をちゃんと最後まで聞くのよ？」

ぼーっとしてるノールにアクローマは注意を促す。

「天使は魔族や悪魔とは敵対してない。まあ、そりゃそうよね、わざわざ何で敵対しないといけないのか理解に苦しむところがあるわあと、天使だって魔族や悪魔に先祖返りが出来るの、その逆も可能ね。貴方も魔族か悪魔の先祖返りなんでしょ？」

「あの……元々ボクは魔族や悪魔ではありません。今まで水人でした」

「えっ……ウソ？ それって天使界や魔界以外から来たってこと？ どうやったのかしら？」

「ボク、死んでないんだったら元の世界に帰りたいの」

「なに言ってるの、それはダメよ。えーと、もし大天使長になったら元の世界に帰らせてあげても良いわよ」

ノールの一言にアクローマは速答する。

「なに？ 大天使長って？」

聞いたことのないワードに、ノールは傍にいるレイディアントにその意味を訊ねる。

「それは、この天使界で最高位である女帝の次に高い階級だ。元々四名の構成だが現在ルーシエが……欠員が一名いるため能力のある者が必要だ。天使になれたばかりの未熟なお前が、大天使長になるまでに一体どれ程の時間が経つのか想像もつかないな」

残念だったなという感じでレイディアントは話す。

アクローマとの話が終わると、ノールはアクローマの側近である白瀬向日葵という男性の天使に、アクローマに仕えている天使たちが暮らす宿舎まで連れていかれることになった。

「君ってさ、水人なんだってね」

宮殿内の通路を歩きながら、白瀬向日葵がノールに話し掛ける。

「なんで知ってるの？」

「アクローマ様の謁見の間にはいたじゃん。オレって、こつ見えても側近だからアクローマ様の傍にすることが出来るんだよ。それで、話している内容が聞こえるんだよね」

「ごめんなさい……貴方には気付かなかったです」

「えっ、マジで。ちょっとショックだけど」

二人で何気なく話しているうちに宿舍前まで着いた。

「ちょっと待って」

「向日葵さん、どうしたの?」

「この近くに敵がいるんだ」

「えっ?」

ノールが聞き返すと向日葵は宿舍の傍の噴水で仲が良さそうな感じで会話をしている男女二人組の天使を見ていた。

「あいつは、危険思想を抱いている。オレがこの手で奴に天罰を与えてやるう! くらえ、ホーリー!」

向日葵が速攻で魔法を詠唱し終える。

それと同時に、桃色の髪の女性天使と仲良さげに会話をしていた男性天使の足元が光り輝き、火柱のような光線が空に向かって男性天使の全身を駆け抜けていき、その光線とともに宙に弾き上げられた男性天使は雲の地面に叩き付けられた。

「よし、命中した。あいつ、リサと仲良さげでイラッとしていたんだよね。スッキリしたし、これから君を部屋に案内するよ」

とても満足したのか笑顔で向日葵は何げに軽くガッツポーズをする。

「何やってるの……この人」

普通に考えて有り得ない行動を取っている向日葵にノールは一瞬で引いた。

ノールが普通に引いていると神聖魔法ホーリーを受けた天使が明らかに怒った様子で迫る。

「また貴様か、向日葵！ 何故、毎回毎回私に向かって魔法を放ってくるのだ！」

「ハア？ なんだあ、あいつ？ マジ、うぜっ。今すぐ、オレの視界から消えてくんないかな」

何故なのか、向日葵自体も逆ギレする。

「ノールちゃん。オレ、ちょっとあの九澄冴良っていうバカに用があるから自分で部屋に行つてて」

怒った様子で向日葵は九澄の方へ向かう。

「自分で行けって言われても……ボクはどうすればいいの？」

戸惑いながらも宿舎内にいる天使たちに場所を聞き、ようやくノールは自室となる部屋に辿り着いた。

一人部屋となっている部屋には白いシーツが敷かれたベットとクロ

ーゼットなどの家具が置かれてある。

そして、ノールはベットに倒れ込むようにして崩れ落ちる。

「はあ……今日は色々あつて疲れちゃった。疲れたから、もうボクは寝てもいいよね」

「ここ……どこだった？ あ、そうだ、今は天使界にいるんだった」

仰向けのまま、ベットで寝ていたノールはぼんやりした様子で目を覚ます。

ノールは身仕度を済ませると、アクローマへ会いに向かった。

ノールはアクローマに聞きたいことが幾つかあった。

何故、自分はここにいるのか。

何故、天使になれたのか。

どうやってたら大天使長になれるのか、などであった。

謁見の間の前に着いたノールは目の前の扉を見つめる。

しかし、扉は全く反応がなく、開く気配さえなかった。

仕方なくノールは水人化し、身体を水蒸気化させ、室内で実体化した。

そして、玉座に座っているアクローマに近寄る。

「ちょっと、君。一体何処から入ってきたの？」

当然だが、アクローマの側近である天使が止めた。

「あれ、君って昨日白瀬と一緒にいた見習いの娘かい？」

「あ、はい。ノールっていいいます。アクローマさんに会いたくて来ました」

その側近の天使が九澄であったので、微妙に緊張した様子で答える。

「とにかく素性が分かったとしても、アポイントも取らずにアクローマ様に会うことは出来ないよ。話があるなら、オレの方から伝えてあげるから、ひとまず謁見の間から出ようね」

九澄がノールを遮るように言うと、ノールの手を掴み部屋の外に出そうとした。

「ちょっと、待ちなさい」

室内にアクローマの声が響く。

「その子は、私に会いに来たのでしょうか？ だったら、私の傍に連れてきなさい」

「ですが、アクローマ様はこれから職務を行うはずでは…」

「いえ、いいわ。見習いの子なのに謁見の間へ強引に入ってくるのだから、本当に何か聞きたいことがあるのよ、きつと」

「そうですね、私にはアクローマ様が職務をサボれるから引き止めたように見えますが？ では見習い天使くん。貴方にアクローマ様と話す許可が出ましたよ」

ノールは九澄から離れ、アクローマに近寄る。

「どうしたの、私に何か聞きたいことがあるのでしょうか？」

「はい、あります。ボクは何で天使界にいるんですか？」

「ごめんなさい、それは私には分からないわ。多分、何か幾何学的なことが起きて貴方はこの世界にいるのだと思うわ。恐らくだけどね」

「何でボクは天使になれたんですか？」

「それは先祖返りによってなれたのよ。貴方の祖先の誰かが天使だったのでしょう。ごめんなさいね、昨日はこのことを失念していたわ」

「どうやったらボクは大天使長になれるんですか？ 本当に大天使長になればボクを元の世界に帰してくれるんですか？」

「……聞いていなかったわ。向日葵、今ね、ノールちゃんは私に何て言ったの？」

「またですか？ 私は九澄冴良ですよ。それにそういう風に話す時はいつも、しっかり相手の話を聞いていますよね？」

「うん、聞いている……」

「貴方のことならもう大体知っています。私より、かなり年上なんですからしっかりしてください。それに話を誤魔化したいのではありませんかとマシな言い方があるでしょう？」

「うん……そうね。ごめんなさい」

何故か、女帝であるアクローマが九澄に謝る。

「ノールちゃん、貴方がそんなに大天使長になりたいなんて知らなかったわ」

九澄に説教され、アクローマはテンション低めでノールに再び話し掛ける。

「ボクが大天使長になれば元の世界に帰してくれるってアクローマさんが言ってたんで……」

「そうだったのかしら……？ まあいいわ、私も限度を大幅に超える程かなりの譲歩をしてそういうことにしましょう。だから、私を敬うのよ？」

その後、アクローマは九澄とは別の側近の天使に誰かを呼んでくるように頼んだ。

側近の天使がグリードという人物を呼びに行つてから数分が経過した時、呼びに行った天使が謁見の間に入ると同時にアクローマに報告する。

「グリード様を連れて参りました」

その声に反射的に反応し、ノールは振り向く。

やってきたのは天使ではなかった。

肌の色が灰色のような濁った色で目も赤く、その異様な姿がノールには恐怖の対象に映った。

「あ………悪魔なの？」

「いいえ、お嬢さん、私は悪魔族ではありません。私は魔族のグリードと申します」

グリードは怯えるノールに軽く一礼をする。

「それじゃ、グリード。今、貴方が話しているノールちゃんが大天使長になりたいって言うてるから指導の方をよろしくね」

「は………？ いつもなら大天使長のレイディアント様や向日葵様が見習いの指導をしているはずですが、何故私なのでしょう？ 実技は私より練度の高い彼等の方が能力の成長も早く最適だと思うのですが……」

「いえ、いいの。貴方が一番適合しているはずだから。別に断る理由も無いはずよ？」

何故か威圧的に話すアクローマに対して、グリードは納得したのかノールを訓練することを引き受けた。

グリードがノールの訓練を引き受けた後、グリードはノールを連れて術技訓練のための訓練所へと移動する。

「あの……グリードさん。ボクは大天使長になれるんですか？」

「厳しいようですが、ノールさん。貴方の能力では大天使長になれるどころか他の階級である熾天使、智天使になれる確率さえも零に等しいでしょう」

グリードが申し訳なさそうに話す。

その言葉は非情だった。しかし、現実を誤魔化してはノールを余計に苦しませるといふ思いに事実を言わせた。

淡く抱いていた希望が打ち砕かれたような気がして、ノールは肩を落とし泣きだしそうになった。

「ですが、ある方法を使えば貴方でも能力が格段に上がるはずす」

「どうゆう方法ですか？」

「それは私が貴方に向かって魔法を放つことです」

「それだとボクって……死ぬんじゃないですか？」

「大丈夫です、私が回復魔法を使用しますから。それに魔法を相手

から何度も受けることによって貴方の眠っているポテンシャルが急激に開花するはずですよ」

「ポテンシャル……？ それ以外に方法はないんですか……？」

「すみません、私には最速で能力を上げる方法はそれしか知りません」

頬笑みながら、グリードは頭を下げる。

ノールは痛いことが死ぬ程嫌だった。

しかし、グリードの頬笑む姿を見て嫌な予感しか浮かばず、痛いことがどんなに嫌だったとしてもグリードの提案する訓練を受けざるを得ないことも分かっていた。

「それでは、魔法を詠唱しますよ」

静まり返った訓練所にグリードの声が響く。

その声を聞いた時、ノールは身体の震えが止まらなくなった。

それを抑えるため、自らを両腕で抱き締めるようにして恐怖を和らげようとした。

「怖い……ボクは死んでしまうのかな……？」

死の恐怖が彼女の心を覆っていた。

そのせいか、ノールはグリードを正面から見る事が出来ず、俯く

ような姿勢になっている。

「ダークボムを発動します」

魔法詠唱の終了後、グリードはそう語る。

それと同時に怯えるノールの周囲を漆黒の球体が囲み、爆発する。

強力な爆発による衝撃破により、今まで立っていた場所から数メートル吹き飛ばされ、ノールは地面に叩きつけられた。

その衝撃で、身体の至るところが裂傷により酷く出血した。

あまりに一瞬過ぎて、ノールは声すら出せなかった。

反応出来たのは、自らの身体から流れる血を眼にした時であった。

「……………くう……………痛い……………よう」

急速に失れる意識、それと同等に感じていた痛みさえも失われる感覚……………ノールは自らに迫る死を悟った。

「キュア！」

再び、グリードの音が響く。

すると、今までの薄れゆく意識がはつきりと冴え、身体の怪我をしていた部分は治癒され元に戻った。

「あれ……………？ 身体が痛くない？」

「それはそうですよ、私が回復魔法を使いましたから。ところで、貴方の能力に変化はありましたか？」

「よく……分からない」

身体が何ともないか確認しながら、ノールは答える。

「でしたら、もう一度魔法を詠唱しましょう」

「い、いえ、もう嫌です。怖い……ボクは死にたくない……」

「いいえ、ダメです。今は貴方の生きたいという我儘に付き合っている暇はありません。変化があるまで、貴方には生死の境を何度も彷徨ってもらいます」

再びの恐怖から既に涙を流し泣いてしまっているノールに向かい、何の躊躇いもなくグリードは暗黒魔法ダークボムを放つ。

ノールとグリードの訓練が始まってから一週間後。

訓練の結果からなのか、ノールは暗黒魔法であるダークボムが身体に直撃しても衝撃に耐えられるようになっていた。

「驚きました。やはり、貴方には戦闘の素質が元々備わっているのかも知れません」

「戦闘の素質ですか？」

「天使は魔族の放つ暗黒魔法を最も不得意としているにも関わらず……」

グリードはノールを見つめる。

ノールの身体は暗黒魔法の直撃に対して、以前のように血塗れになるどころか傷一つ付かなくなっている。

「いえ、何でもありません。それは貴方自身がそのことに気付くべきですから」

「はあ……」

何かしつくりこないのか、微妙な返事をする。

この一週間、ノールがグリードとともに受けていた訓練はただ暗黒魔法の直撃を与えられ続けるだけというものでは無かった。

元々武闘派だったグリードにとって訓練と言えば正に武術の体得である。

生まれ持ったの素質、水人特有のしなやかさにノールは非常に早い速度で武術を体得していく。

名目上、魔力による訓練という苦しみを立て続けに受けることは無かったがそれでは強くなれないことをノール自身が悟っていた。

それが、ノールに焦りを抱かせていた。

「では、そろそろ実戦に移ってみましょう。私が相手をします」

「えっ？」

「実戦経験が無いのでは戦いになりませんか。貴方がどんなに嫌がったとしても私は止めませんよ。貴方は痛みにより成長をするタイプですから。では、ノール。準備はよろしいですか！」

突然、グリードは叫ぶ。

暗黒魔法を放つためにノールと取っていた距離を一瞬で縮め接近し、ノールの腹部に背面廻し蹴りを放つ。

衝撃によってノールは約10メートル近く蹴り飛ばされ、背後の壁に叩きつけられると床に倒れた。

床に倒れたノールは強烈な激痛から両目を見開きながら口から酷く吐血する。

彼女は身体の内側に何か突き刺さっている酷い痛みにもその場から微塵も動けず、言葉さえも発することが出来なかった。

「無理は承知で言います。立ちなさい、ノール。貴方はその程度では無いはずですよ」

身動きさえも取る気配が無くなったノールにグリードは近付く。

そのノールに対して、グリードは強引に掴み上げるとノールを壁に

押し付け、何度も殴った。

執拗過ぎるグリードの攻撃でノールの身体の至る所から出血をしていた。

それは、人体が絶命だけを免れる限度の破壊である。

「……………」

ノールが攻撃を加えられるたびに小さく発していた死の叫びが止まった時、グリードは手を止めた。

「ノール、では回復を致します。しかし、全くの無抵抗では……………何か強くなったということもまだ無さそうですね」

グリードは反応を示さなくなったノールを床に横たわらせる。

「そういえば、ノールは天使でもあり、水人でしたね？ 水人は身体を水に変化させられるというのに、何故貴方のように身体から大量の出血をするのでしょうか？」

ふと疑問に思ったグリードはノールに語る。

「つと、今はそんなことを語っている場合では無かったですね」

「……………」

その時、グリードは何か声を聞いた。

一瞬でノールの周囲に酷く歪んだ寒気とする覇気が宿る。

グリードにより身体の至る箇所が壊滅的な程に破壊された状態であったが凄まじい速さで再生し、ノールの傷が完全に癒えた。

「程度の低い魔族……貴方ごときがRの血を絶やせるとでも？」

傷の癒えたノールは冷たい眼でグリードを眺めながら、そう発する。

しかし、その声は女性のものであるが明らかにノール自身の声では無い。

「ノール、貴方は一体……？」

「煩いぞ、程度の低い者」

ノールはグリードに向かって、手をかざす。

「プラネット」

ノールが詠唱無しでプラネットという神聖魔法を放った瞬間、恐るべき威力の光り輝く爆発と同時に訓練場ごと周囲を崩壊させた。

プラネットを直接受けたグリードは崩壊してしまった訓練場から弾き飛ばされ、少し離れた雲の上で意識を失った。

「……………？」

混沌とする意識のなか、グリードは目を覚ます。

身体からは痛みを感じなかった。

あれ程の衝撃……何故、自分がまだ生きているのか不思議であった。

「……おい、グリード！ 聞いているのか！」

その声で、ようやくグリードは周囲を見る。

彼の寝ているベットの周囲には九澄冴良とアクローマが立っている。

そして、ここが医療室だとグリードは分かった。

「アクローマ様に九澄……一体どうしたのですか？」

「どうしたじゃない、グリード！ あの子に何をしたんだ！」

「私は……」

九澄に問い詰められ、グリードは俯いたまま答えない。

「壊れた訓練場には血溜りがあった。あれはお前の血じゃないはずだ。あの子があんな状態になったのはお前が原因だろう！」

「まあ、いいでしょう、九澄。それ以上は隣で聞いている私が眠くなるわ。グリードのお陰でノールちゃんの強さは大天使長並みになったということだし、このことはもう不問にしましょう」

やる気なさげにアクローマが言う。

有り得ない一言に、九澄もグリードも呆気に取られ、ただアクローマを見つめる。

「……ってことはあの子が新しい大天使長になるのですか？」

微妙な表情で九澄はアクローマに訊ねる。

「そうゆうことよ。にしても、グリードも智天使なのにノールちゃんをよくそんなに強くさせたわね。貴方を蹴散らした時の彼女の覇気は同じ人物とは思えない程ケタ違いだったわ」

「そうだ……ノールには……」

「言わなくても、大丈夫よ。私はもう彼女のことを十分に知っているから」

「あの別人格のような……モノですか？」

「当然よ。でも、貴方は忘れなさい。覚えていても仕方が無いわ」

「今、彼女は……？」

「ノールちゃんはまだ寝てるわ」

「それでは、これから会いに行きます。ノールには謝らなければならぬことをし過ぎました……」

「残念だけど、謝ることはまだムリだろう」

グリードの話聞いていた九澄が答える。

「何故です？」

「寝ていたから知らないだろうけど、お前は二日間も昏睡状態だったんだ。今日、たまたま確認しにきたらお前が目を覚ましていただけで……まだあの子は目覚めていない」

グリードが目覚めてから、二週間が経過したある日、グリードとは別の病棟で寝ていたノールは目を擦りながら目覚める。

「眠い……ここって……どこだっけ？」

「あつ、ノールちゃん！ 目を覚ましたんだね！」

白い服装を纏った看護師風の天使が声を掛ける。

「ノールちゃん、スゴかったんだよ！ 今から二週間くらい前に神聖魔法プラネットを使ったんだから！」

「プラネットって何？ それに……二週間くらい前ってどう言っつと！ ボクは一体今まで何してたの！」

「そつだよね、いきなりそんなこと言われても分からないよね」

ノールの困惑した様子を見て、はっとした表情を看護師の天使はする。

「ノールちゃんは、この医療室で二週間近く寝ていたの。何で、そうなったかというと身体に血液が足りなかったことと魔力を使い果たしていたからなの」

「そんな……ボクは休んでいる暇なんて無いのに……」

ノールはベットから這い出て立ち上がろうとする。

だが、立ち上がるとすぐに体勢を崩して、ペタツと地面に座り込む。

「大丈夫、ノールちゃん？ まだ寝ていた方が良いんだよ？」

「ううん、ボク、もう大丈夫だから。看護師さん、ボクのこと看病してくれて、ありがとう」

天使に支えてもらって、ノールはふらつきながらも立ち上がる。

調子も悪く、まだ本調子には程遠いものだったが強くなりたいという意志がノールを突き動かしていた。

「そこまでノールちゃんが言うなら仕方ないか。ノールちゃん、起きたら私のとこに来なさいとアクローマ様が言っていたよ」

心配そうに天使は言う。

「そっか、それじゃ、早く会いに行かないと」

ゆっくりながらもノールはアクローマがいると思われる謁見の間まで歩いて行った。

「疲れた……こんなに謁見の間まで遠かったっけ？」

回廊の壁を伝いながらノールがふらついた様子で歩いている。

ようやく、アクローマがいるかもしれない謁見の間まで辿り着くと扉は開いていた。

その時、ちょうど側近の天使がアクローマの周囲には居らず、ノールはアクローマへと簡単に近付くことが出来た。

「アクローマさん。何か、ボクに用があるんですか？」

「……すー……すー」

「ふつうに寝てるし……」

ノールが声を掛けた時、アクローマは玉座に身を横たえ安らかそうな寝顔で眠っていた。

起こすべきかノールが困っていると、ふいに背後から怒声が響く。

「どけ！ ノール！」

直観的に嫌な予感がしたノールは背後を振り替えらずにその場から離れる。

その瞬間、アクローマに向かって以前見たことのある光線が飛んでいき……玉座ごとアクローマを弾き飛ばした。

「バカ、起きたか？ つーか起きろ！」

「い……今の誰よ！ いい加減にしなさい！ 私を誰だと思ってんのよ！」

玉座の下敷きになり、藻掻きながらアクローマは起き上がろうとする。

「ハア、でも分かるわ。世界でもっとも優秀で才色兼備な女帝である、このアクローマに不満を持つのは仕方ないわ。優秀である私にしか持ち合わせないものなんて沢山あるもの、生きていれば誰しも嫉妬するわ、それが必然なのだから。でも、いい？ 私に対してこうゆう風に隠れて不意打ち攻撃を仕掛ける時点でもう貴方は私に全てが劣っていると自ら自分の生涯を懸けて認めているのよ。本当に可哀相ね、自ら自分の生涯を全否定するなんて。貴方のM体質には心から同情するわ……って、ノールちゃんじゃないの。目が覚めたの？」

玉座からはい上がり、玉座を定位置に独り言を言いながら直していたアクローマは言いたい放題言った後によやくノールに気付く。

「うん、まあね。二週間くらい寝てたらしいけど……てか、アクローマさんは普段から今みたいなこと思ってんの？」

「今みたいなことってなに？」

意味が分かってないのか、アクローマは首を傾げる。

「……………」

ノールは何も言えず、この頭がおかしな女帝を眺めるしか出来なかった。

「驚いたぞ、ノール。まさか、お前が本当にR一族だったなんてな」
そのノールに対し、レイディアントが驚いた口調で言う。

「なんですか？ R一族って？」

「お前を指導していたグリードから何も聞いてないのか？」

「はい」

「ふふつ、バカねえ、ノールちゃんは。何でそんなことも分からないの？ 本当にバカみたい、私はとっても呆れちゃったわ。自分の家族のことくらい、せめて分かりなさいよ。何考えちゃってるのかしら？ 私に無駄な心配をさせないでよ、もう迷惑だわ」

この間、ずっとアクローマは笑顔で語っている。

「ボクには……………親と呼べる存在がいませんでした。だから、自分のことが分かりません」

事実を話し、悲しそうにノールは俯く。

「えっ、ウソ？ そうなの？ それなら、家族のことなんて知らなくて当然ね。ゴメンね、バカなんて言っただけ。そんなことより私、貴方のことバカだなんて一度も思っただことなんてないわ」

「いい加減に黙れ、アクローマ」

アクローマの言い方にレイディアントは不快感を露にする。

「ノール、それならお前には身内はいないのか？」

「いえ、弟と妹がいます」

「親族は誰かいないのか？」

「いいえ、分かりません。ボクたちは物心ついた頃より前から街の孤児院にいたので。今はスロートの街外れのところに家を借りてるんですけどね」

「そうか、お前は家族に会いたくて頑張っていたんだな」

「そうです。だから、ボクは大天使長になりたいんです」

「それならばとても良い話がある。もうノールの実力は把握出来た、これからは正式にノールを大天使長として認める」

「えっ……それって本当に？」

レイディアントの言葉に困惑しながらも本当にそうなのか確かめるためにアクローマにも訊ね様としたがアクローマは寝ていた。

「人をバカにしたかと思ったら、次は寝ているのか？ お前がアクローマならこの場合寝るか？」

「絶対寝ない」

「だろうな、ではアクローマに代わって私から話しておこう。ノール、お前がR一族であり、R一族としてのポテンシャルを既に開花させたことを考慮すると、大天使長になることが妥当だと決まった。その為、お前が目覚めたら大天使長にさせようと私たちは決めていた」

「それって！」

「そうだ、これからは大天使長……」

「そんなことどーだって良いの！ 早くボクを元の世界に帰してよ！」

「ああ、勿論。良いよな、アクローマ……って言うかこのボケている女帝は寝ているんだったな」

「起きてるわよ、全く失礼なんだから！」

寝ていたはずのアクローマが突然怒鳴る。

そして、アクローマは玉座から立ち上がり、ノールの肩を掴み揺らした。

「ノールちゃん、せっかく大天使長になれたんだからもっと天使界

にいてよお!」

「嫌です、すみません」

アクローマがお願いしてから、わずか0・5秒。

何かアクローマに不快感を感じていたノールは即答する。

「なんか……フラれた気分になったわ」

意気消沈とした様子でアクローマは玉座に腰掛ける。

アクローマはとても気分を害したようである。

「約束したことですものね、仕方ないわ。元の世界に帰っちゃうんだったら、この能力を教えましょう」

ノールに何かの魔法をアクローマは詠唱する。

「今、なにをしたの?」

「貴方に復活の魔法リザレクと最上級回復魔法のエクスト天使界にいつでも来られるよう異世界空間転移という能力を覚えさせたの。どーお? 魔法って貴方が思っているよりも案外簡単に教えることができるのよ」

何か、イラツとする口調でアクローマは自慢げにノールに言う。

「ふーん、そうなんだ。それと、ボクは魔法について何か思ったこととはありません」

「静かに、これからが大事なことから。私たちはR一族である貴方をいつでも歓迎するわ。それと、桜沢一族とそれに属する一派の者たちには気を付けなさい。R一族である貴方を間違いなく殺しにくるわ」

「殺されるってどうゆう事ですか？」

「それは自分で考えなさい。貴方の自らの血が勝手に教えてくれるはずだから。それでは元の世界に戻すわ」

魔法をアクローマは詠唱し、ノールを元の世界に戻す異次元空間を出現させる。

その異次元空間に入ったノールは、とても速い速度で空間を移動しているような気がした。

元の世界へ

胸部からの激痛を感じ、反射的にノールは眼を開けた。

痛みを反応し無意識のうちに痛みを感じる方へと目をやると、胸から心臓を一突きにする形で剣が突き刺ささっていた。

そのままの状態自身で自身が地面に倒れていることをノールは悟った。

「やった……やったぞ！ オレが水人を倒した！」

自身の近くでクロウが勝利のおたけびを上げているのが聞こえた。

「済まん……ノール……」

足を斬られ、負傷しているライルが自身に謝っているのが聞こえた。

周囲の兵士たちはノールが倒されたと知り、戦いの手を止めた。

それは、ノールがライルを庇って刺された時から、時間の経過が無いことを意味していた。

「身体は痛いけど、どうしたんだ？ 今までの場所は一体？ それよりも剣が身体を……でも、ボクはまだ生きてるみたい」

ゆっくりと立ち上がると身体に刺さっている剣の柄を両手で掴み、剣を身体から引き抜いた。

それにより、大量の赤い鮮血が流れ出たがノールは動じていない。

「なっ……」

有り得ないその光景を眼にし、ライルは息を飲む。

誰がどう見ても胸に剣を突き刺されたノールは即死で間違いない状態だったからだ。

「誰を殺したって？」

自身を倒したと叫んでいるクロウにノールは声を掛ける。

クロウは勝利の笑みを浮かべながら、その声がする方へと振り返った。

だが、クロウが見たのはまさに信じがたい光景。

「な……なぜ、お前は生きているんだ！」

「ウザイよ。近くで叫ばないでよ。こっちは血が足りなくて、フラフラするんだから。ああ、そうだ。これから、アンタに起こることをたった今ボクは思い付いたよ」

にいつと、表情に笑みを浮かべる。

「な、なんだ！」

その瞬間、クロウの首の付近を煌めく何かが過ぎ去り、クロウの首は胴体から落ちた。

胴体と頭部を斬り離されたクロウは血飛沫を上げ、ぐらつきながら地面に倒れ込む。

恐らくノールが氷の剣（水竜刀）で斬ったのであるが、あまりにも一瞬に近い早さだったため、その場にいたライルでさえも何が起きたのかすぐには分からなかった。

「何で生きているんだろうね、ボクは？　ボク自身もその事は分からないけど、心臓を貫いたくらいで油断しちゃダメってことかな？」

ついさつき覚えた最上級回復魔法のエクスを詠唱し、ノールは身体の怪我をしている部分を治す。

魔導剣士クロウの戦死により形勢は完全にスロート軍の物になった。

伝令によりクロウの死を知ったステイの将校クリスはこれ以上戦ったとしても勝つことは出来ないと悟り、全軍降伏をする。

それにより、スロート軍は降伏したステイ軍と共に今までステイ軍が占拠していた砦へと移動を始める。

「ボクねえ、さっきまで別の世界にいたんだよね。これってどう思う？」

砦内に到着した時、ノールは何事もなかった様子で今まで自らに起きていた不思議な出来事について話す。

ノールの話す内容に周囲の人物らは、一体何を言っているのかと不思議に思った。

しかし、それ以上にノールの身体に起きている驚愕すべきことをクロノが直接聞く。

「ノール、身体は大丈夫なのか！ 服に大量に血がついているぞ！」

「あー、これかい？ 例の魔導剣士に心臓を刺された時だよ。でも、全然大丈夫。心臓を刺されても、ボクは死なないみたいだし」

よく見ると大量に出血しているなどノールも思ったが、今の彼女にとってそれはどうでも良いことだった。

「それより、ボクって違う世界にいたんだよ。ほら、だって背中に羽があるし……って無くなってるじゃん！」

何度も背中をさわりながら、ノールはとても驚いている。

「落ち着け、とりあえずオレも落ち着くから。いいか、オレたちはずっと戦場にいたし、オレたちと一緒に戦っていたじゃないか。別の世界について何処に行っていたんだよ？」

「確かにそうだけど、何でだろう？ ボクには天使の白い羽があったのに……あつ、そうだ。ボクは最上級回復魔法とか復活の魔法とかも覚えたよ」

「本当なのか、それって？」

一瞬、ピクツとリュウは反応した。

ノールの言葉が嘘か本当かも分からない状態だったがその言葉に絶^{すが}りたかった。

「生き返らせてほしい奴らがいるんだ。頼む、何でもするからアーティとテリーを生き返らせてほしい」

「構わないよ。あと、別に何もなくていいけどボクが別の世界に行ったことは信じてほしいな。ボク自身の傷を癒すことが出来たのも、その世界に行っていたからなんだよ。まあ、ボク自身はつきりしないけどね」

実際に起きたことだと確信が欲しかったノールは復活の魔法リザレクを詠唱し始める。

つい先程、アクローマに教わったばかりで一度として扱った事のない魔法であったがノールは軽やかに魔法の一節を詠唱していた。

詠唱を始めたノールの目の前に二つの人型が浮かび上がる。

それは、ノールの詠唱が進むにつれ、人としての形を形成し始めた。

そして、リザレクの詠唱終了と同時にアーティとテリーが出現した。

「キツ……もう、ボクは無理だよ……」

復活の魔法リザレクは極端な程に魔力を扱い、身体から魔力を殆ど失ったノールはその場に倒れる。

…が、それを彼女に触れることの出来るチャンスと考えた杏里がしっかりと抱き止めた。

「アーティ……なのか？」

「……………」

リュウの問い掛けに、出現した二人からはまるで反応が無い。

彼らの形だけで実際は生きていないのでは無いのか。

結局は再び彼らと会えないのでは無いのかと、この時リュウは思っていた。

「リュウか、心配掛けたようだな」

そんな不安を打ち消してくれたようにアーティは起き上がった。

「アーティ！ 本当にアーティなんだな！」

「当たり前だろ？ なんか嬉しそうじゃね？ 男なのに泣くなよ、ホント気持ち悪いから」

「ここは……どこだ？ オレは何をしてたんだ？」

意識が冴えないのか片手で頭を押さえながら、テリーも起き上がる。

「テリー！ 本当に生き返ったんだな！」

リュウは嬉しさのあまりなのか、何故かテリーには抱き付いた。

「なっ……何してんだ、オレに抱き付いてんじゃねえ！」

抱き付いてきたリュウに対して、テリーは即座にリュウの右腕を掴み、背負い投げで投げ飛ばす。

「テリー、落ち着けよ。リュウはオレたちが生き返って嬉しいんだ。少しは、はしゃがせてやれよ」

「……はあ？」

言ってる意味が理解出来ないのか、テリーは戸惑っている様子。確かに自らが死んだことや、生き返ることなどを理解出来る者などいるはずも無かった。

「なあ、クロノ。デュランがどこにいるのか、お前は知っているか？」

その光景を見ながらアーティが訊ねた。

「デュランだって？　そういえば、さっきの戦いではいなかったらしいな。多分、ステイのどこかにいるんじゃないか？」

「そうか、生きているんだな。それなら考えるまでも無い、今すぐ奴を殺してくる。オレの中には抑えきれない感情しかないんだ！」

いきなり叫ぶとアーティの背中に飛竜のような翼が出現し、アーティは皆の窓から飛び出すとステイの方角に猛烈なスピードで飛んでいった。

その場にいた全員が、翼を出現させ空を飛んでいったアーティのことで呆然としてしているとテリーに投げられ倒れていたリュウが立ち上がる。

「アーティの口振りからして、もしかと思っていたがついにアーティも覚醒したのか……」

「覚醒ってなんだ？ リュウは何か知ってるのか？」

アーティに何が起きたのか全く分からないクロノがリュウに訊ねる。

「ああ、知ってる。元々アーティは人間じゃなく、アイツは竜神族っていう純血の竜族だ。アーティの背中に羽が生えたる？ あれを竜王化といって、あの状態のアーティが相手だったら、オレたち全員がかかっても絶対に勝てないだろう」

「全員がかかるってどういう意味だよ？」

「例えだよ、例え」

「何でそんなこと知ってるんだ、リュウは？」

「秘密って訳にはいかないよな。実はオレも人間じゃなく、元々竜賢族っていう純血種だ。オレもアーティのように変化が出来る」

「それじゃ、テリーも？」

「テリーは……違うよ。テリーは皆と同じ“人間”だ」

その話をリュウがしている間、テリーはリュウを黙って見つめていた。

「失礼する」

砦内にステイの将校クリスが入ってきた。

「よう、クリス。どうした？」

クロノがクリスに話し掛ける。

「何故、我々はこれ程までに自由なのだ？ 武器を取られはしたが捕虜にすらなっていない」

元々軍人であるクリスは敵を捕らえると捕虜にすることは当然と思っ
ているため、理由をクロノに訊ねる。

「何故って言われても、オレたちは戦争なんて初めからしたくないんだ。だから、クリスたちを捕虜にする理由なんて無いんだよ」

「何だと？ その理由は何なんだ？ それでは、もし私が兵を煽動し反乱を起こしたらどうするのだ？」

「反乱するのか？」

「いや……そのようなことなどはしない」

「なら、そんなことどうでも良いだろ。もう戦いは終わったんだ。生きている、それで良いじゃないか。オレたちは、もう敵同士じゃないんだ」

「貴公がそんな考えをお持ちだったとは」

静かにクリスは何かを考えている。

「いや失礼、そのことを話す訳ではなかったのだ。私は三剣士に唆された国王の命で貴公の国に戦争を仕掛けてしまった。無論どのような罰も慎んで受け、処刑となってもそれは結果だ、私はそれで構わない。だが、兵士たちは祖国に帰してほしい。私の最後の願いだ」

「そのことなら、大丈夫。クリスを処刑なんてしないし、戦争が終われば兵士たちも全て解放するよ。そんな考えをする必要も無いし、もう少し我慢しろよ」

「そうだな……貴公のような考えの持ち主がステイにもいて欲しかった」

クロノに話しておくべき内容を話せたクリスは再び砦内にいるステイの兵士へと会いに向かった。

「あの人は負けたからって色々考え過ぎだよな。やっぱり、将校だからか？」

その風景を見ながら、クロノは思った。

クロノとクリスが会話をしている頃、アーティは物凄いスピードで

ステイの方角へ向かって一直線に飛行していた。

既に自身の感情を制御することは出来なくなっている。

彼の心にあるものはデュランを殺すというただ一つのことだけであった。

アーティがステイの首都に到着すると速攻でステイの城に正面から入り込む。

まさか空から突然侵入者が現れるとは考えたことすらなかったステイの兵士は全く太刀打ちが出来ないどころか対応も出来ない。

全てに置いて、アーティが兵士たちのレベルより圧倒的であることを示していた。

兵士たちがアーティを止められないまま、アーティは数分間に渡り城内を暴れ回り、デュランがいないことを知るとスロートに戦争を仕掛けた王族を憂さ晴らしのため皆殺しにした。

それでも全く怒りの収まらないアーティはステイの兵士にデュランの屋敷がどこにあるか強制的に聞きだし、即座にデュランの屋敷へと向かった。

「デュランのヤロ　！　何時までもこの世にへばりついてんじゃねえ　！」

聞き出したデュランの屋敷に着くとアーティは悍しい光を放つ黒色の球体を両手に作り出す。

放たれたその二つの球体は、ほんの数秒でデュランの屋敷を灰燼に帰した。

「……………」

その光景をアーティは無言で眺める。

この時、何かアーティは急激に身体から感覚が失われていく虚脱感を感じていた。

一体何故このようなことをしているのかという感覚にも同時に覆われていた。

「何がしたかったのかな……オレって？」

考えてもただ虚しくなるばかりで、一旦仲間がいる皆に戻ることにした。

「アーティ！ 何処に行ってたんだ！」

アーティが皆へ戻ると皆の城壁櫓でアーティの帰りをクロノが待っていた。

それを確認したアーティはクロノの前に滑空し、降り立つ。

「よう、クロノ。こんなところで何してるんだ？」

「何してるだと？ それは、お前に聞きたいことだよ！ 早く皆のところに来い！」

「おい、どうしたんだよ？」

着地したアーティをクロノは隊長として部隊に参加している人物たちがいる一室に連れていく。

その途中、アーティはクロノに声を掛けた。

「おい、オレの話聞いているのか？ 一体何で焦ってたんだよ？」

「焦ってる？ 当たり前だろ！ 生き返ったと思ったら突然出ていきやがって！ しかも、そんな姿で戻ってくるなんて……」

「オレが戻ってきて嬉しくないのか？」

先程暴れ回ったせいで極度に疲れているのか、アーティは自分でも良く分からないことを発している。

話しているうちに隊長のいる一室に辿り着いた。

「アーティを連れてきたぞ！」

「どこに行ってたんだ、アーティ。心配したんだぞ？」

二人が部屋に入るとテリーが、心配していたのか真っ先にアーティに駆け寄る。

「ステイの王族とデュランをこの世から抹消させた。ようやく、胸の支えが取れた感じがする」

そう言いつつも、アーティの表情は心なしか優れてはいない。

「てゆーか、その目どつしたんだよ……？ 普通じゃないぜ」

「どの辺が？」

「はい、アーティさん、手鏡」

怖がるテリーの代わりにニコニコしながら綾香がアーティに手鏡を差し出す。

何気ない様子で手鏡を受け取り鏡を覗き込むとアーティ自身も自らの両目に驚いた。

「これって……」

鏡で自らの両目を見るまで気付かなかったがアーティの両目は緋色に輝き、人間としての目では無くなっていた。

「ああ……そうだ」

何かを思い出したのか呟くと、アーティの目の色も普段通りに戻り、飛竜のような羽根も消えさった。

「これでいいか？」

「うん……」

そわそわした様子でテリーはアーティに触れる。

「それよりも、王族を皆殺しにしたって本当か？」

「まあね……今思えば、何がしたかったのか分からないけど」

「それは物凄く困るな。これじゃ、早期講和どころか国王が殺されたことで国民の怒りを買いでしたら泥沼の戦いになる恐れがある」

「それなら心配ないよ。オレが王族を皆殺しにした時、ステイの兵士たちは王族を助けなかった。助けたところで、オレ相手では何もならないことを知っていたんだ。それに助けなければ戦争も終わると感付いたんだろうしな」

「そうなのか？ だったら、早期講和してこないと。さすがに王族という指導者を失ったんじゃ、他国から付け込まれるかもしれない。ステイに新たな指導者が現れるまでは援助をしよう」

その後、スロート軍は捕虜となったクリスたちと共にステイへ向かい、ステイ首都を制圧。

ステイの議会でクロノは戦争の終了、ステイに対しての援助、捕虜の返還、早期講和の調印などを行い同盟関係を結んだ。

クロノはステイ側に対して、戦争の戦費などの要求をしなかった。

互いの国が総力戦により国力が明らかに低下している。

互いにとってそれ以上の損失、さらなる火種を無くそうという意志

を示していた。

戦争の終結、同盟の締結によりスロート全軍は、スロートへと帰還する。

ついに戦争の無い平和がスロートとステイに訪れたのである。

「暇だ……死ぬかも……」

終戦後であるため傭兵を扱うような仕事もなく、開店休業状態の店のソファーでアーティは横になっている。

この数日間は平和という言葉を実体化したかのようで、はっきりいって暇すぎて死にそうだった。

「こんなことなら平和になんかするんじゃないかった……」

ソファーでグッタリしてるアーティが不謹慎な発言をする。

「平和の方が良いに決まってるよ！ アーティさんのバカ！」

横になりながらアーティが意味不明なことを発していると、ちょうど店のカウンターで誰も来ないのに律儀に店番をしていた杏里が怒る。

それを聞いたアーティは怠さを感じる身体をソファーから起こすと

杏里の方を見て笑った。

「お前、なんだか以外と可愛いな」

「えっ？」

また女性扱いかと思い、杏里は怪訝な顔をする。

しかし、良く聞いてみるとこの場から逃げないといけなかったと分かった。

「可愛い人間の血は良く飛び散るらしいけど、さっそく試して見ようか？ お前の綺麗な顔もステイの王族のように八つ裂きにするなんて、オレには簡単だからね」

その瞬間、アーティは竜王化し、杏里に迫ると両腕で杏里の首を絞めるフリをする。

「や……やめてよ……アーティさん……」

しかし、アーティは絞めるフリだった手に力を加え、首を絞め始める。

すると、杏里はカクンと体勢を崩した。

窒息させた訳ではないので、ただ単に恐怖で気を失ったようだ。

「杏里なんか苛めても……つまんね」

何かを呟きながら、アーティは竜王化から人間としての姿に戻る。

ソファで寝ていたせい、まだ頭がぼんやりするアーティが次の暇つぶしの相手を探そうとすると明らかに取り乱した様子で店にノールが入ってきた。

「み……みんな！　お願い、助けて！　ボクはどうしたら良いのか……」

「なんだ、ノールか？　いきなりどうした、暇そうじゃないか？」
結局、する事がないのでアーティはソファへ横になってから取り乱しているノールに訊ねる。

「ミールもエールも家にいなくて……ボクの家も燃えて何もなくなっちゃったの。ボクは何日も二人を捜し続けたのに何処にもいなくて……何でいないのさ！」

「ちよっ……お前、マジで煩いって」

「煩いって？　ボクは落ち着いてるよ！」

「あっそう、黙るんなら見つけてやるよ。お前の弟妹」

「本当に？　ありがとう！」

「二万になります」

ソファで横になりながらアーティはあることを言った。

「いや、食料費とかその他諸々が経費で係るから二万に＋も係る

わ

ようやく、ノールはアーティの言っている意味が分かった。

「そんな……ボク、お金なんて持ってないよ」

「そんなことオレは聞いていなかったんじゃないのかな、ノール？
オレは依頼金を寄越せとだけ言っているんだ、ここまで言えばお前でも分かるだろう？ 別に何かを話せとは言っていない。お前がすることはただ金をここに持つてくることだ。それが契約つてもんだ、分かるな？」

最低過ぎるアーティの発言で、ノールは俯いたまま何も話さなくなつた。

「ちょっと、アーティ。それはないんじゃないの？」

話を聞いていたテリーが引いた感じでアーティに言う。

「ハア？ そう言われてもね、これはビジネスだよ。他人を可哀想
と思つて只働きするなんてどうかしてる。幾ら救世主だからといつてオレたちの客であることには変わりないだろ？ まして今じゃ救世主ではないとノール自身が宣言したし、元々モンスターハンターのメンバーでもないだろ？ だとしたら、初めからオレらとは何も関係なんてないんだよ」

「こつ……こいつ。命を救ってもらつたのに信じらんねえくらい最低な奴だ……」

心から、テリーはアーティが最低な奴だと思えた。

しかし、アーティの話す通りノールは自ら救世主ではないと認めた。ステイからスロートに帰還した際、議会を通してノールは自らを神の使い、救世主ではないと国民に宣言したからだ。

当然、神の使いと信じていた者からの宣言に民衆は困惑する。

民衆が困惑する中、そうなるに察知していたのかクロノが直ぐ様対応した。

勝手に救世主だと決め付けているが“彼女は、どこにでもいるような普通の女の子”だと…

ノール自身の言葉、クロノからの言葉で、それ程混乱が起こらずに民衆たちはそのノールの意志を受け入れた。

ただし、心臓を突き刺されても死ななかったことと魔導剣士さえも圧倒的に倒してのけることから、結局救世主であったと民衆の心には今後とも残り続けるのだが…

ひとまず、戦争が終わった後、さっさとスロートの街外れの家にノールは帰っていった。

だが、ノールが見たものは焼け落ちた自宅である。

そこには弟のミールと妹のエールもいなかった。

その後数日間、必死で二人を捜したが見つかる気配すら無い。

最後の望みをかけて戦争中に存在を知ったモンスターハンターの店に訪れたのである。

「ボクは……お金なんて持っていないよ……」

もつとしようも無くなったノールは泣き出す。

「ノール、君にはとても言葉では言い表わせない程に感謝している。もし、オレで良ければ弟たちを捜すのを手伝ってやるう」

泣いているノールにリュウは声を掛けて慰める。

「本当に……？　ありがとう……！」

「礼には及ばないよ。普通の良心があるのなら君のために、なにをするべきだと考えるはずだから」

チラッと、リュウはアーティの方を見る。

「どうした？　ノールの依頼をタダで引き受けるなんてお前らしくないね」

「……お前つて。オレは、いつも困っている者の味方だが？」

何かを言い掛けたリュウだったが途中で言うのを止める。

結局、アーティ以外のメンバーが二人を捜すことになった。

第一部～第五部までのキャラ設定など

第一部～第五部までに出てきた組織、キャラクター、世界観、種族の細かな設定を載せていこうと思います。

ついでに作品内の時間経過ですが第五部終了時点で、アーティたちが小国に来てから、ちょうど一年間の歳月が経過しています。

設定の順序は

名前（年令、身長、種族、出身地、性格、特徴や価値観の順です）

アーティ（年令19歳、身長178cm、竜神族の青年、出身地は不明。根は真面目だが調子に乗りやすい性格。覚醒し、竜王化出来るようになったことで態度がでかくなった。嗜好品のタバコをこよなく愛している。魔導剣士）

テリー（年令18才、身長173cm、B82W57H77、人間の女性、出身地は聖ミートリア帝国。クールを装っているつもりのようなだが本来は素直な性格。女性だが男物の服を着用している、理由は戦いの最中動きやすくするため。本人としては女性らしくしたいと思っているが、それは夢見る程度。タバコを無性に毛嫌いしている。魔導剣士）

リュウ（年令24才、身長180cm、竜賢族の青年、出身地は不明。いつも何を考えているかの分からないが、誰に対しても優しさ

を向ける性格。ギャンブルが得意で一番好きなのがカジノのポーカー。アーティと同じように竜王化することが出来る。魔導剣士)

クロノ(年令21才、身長175cm、人間の男性、出身地はスロート。性格は冷静で知性派だがぼんやりするのが好きのため、端から見ればそうは見えない。現在はスロートの議長。普通の人間であるため、魔法を使うことが出来ない。ある持病を持っている)

ノール(年令18才、身長172cm、B88W54H83、水人の女性、出身地は不明。性格は泣き虫で臆病。大抵水人の民族衣裳を着用している。両親がいないため、愛の意味が解っていない。恥ずかしいという感情にとっても疎い。水人としての身体付きのせいか華奢なため腕が細く自身の作り出した水竜刀以外の剣は重くて振れない。水人のため、体重が驚く程に軽い。一族の血縁によつてか、凄まじいポテンシャルを秘めている。現在は天使の大天使長)

春川杏里(年令17才、身長164cm、人間の男性、出身地は不明。性格は天然の片鱗が見える。トンファー使い。目が悪く眼鏡が欠かせない。髪の色はブルーグレー。ノールに密かに好意をよせているがかなり恋愛ベタで自身の気持ちを言いだせないでいる。橘綾香とは何故か見た目が似ている。変声期により声が余計に女性のようになつた。顔、身体付き、仕草が限りなく女性に近い男性。幼い頃に催眠暗示を掛けられたせい、人を殺す恐怖や罪悪感がかなり薄い)

橘綾香(年令25才、身長170cm、B90W64H85、人間の女性、出身地はルーメリアという世界。天然でマイペースなおつとりとした感じの性格。職種は医者と賢者をしていて、大抵白衣を着用している。散弾銃などの銃器操作が得意。以前までは別の世界で暮らしてた。医者であるが血を見るのが嫌いで休業している)

ライル（年令18才、身長175cm、水人の男性、出身地はロイゼン魔法国家。優しい性格だがルウに関してのみ無関心のように見える。弟にルウがいる。水人なので髪の色が青。水人の氷の能力だけが扱える。ルウに対しては無関心を装っているが、実際は兄弟としてどう接して良いか分からないだけ）

ルウ（年令15才、身長158cm、炎人の少年、出身地はロイゼン魔法国家。性格は素直。炎人なので髪の色が赤。何故自身が兄とは同じ水人ではないのかと不思議に思ってる。以前のように兄とは普通に話したいと思っている）

カイト（年令26才、身長178cm、人間の男性、出身地はスロート。性格は戦争中でなければ普通。用いる武器は鎌。口は悪いが人望は厚い。兵士を指導する専門家立場になっている傭兵）

ジーニアス（年令13才、身長130cm、エルフ族の少年、出身地はエルフシテイ。兄と姉のせいで、性格は従順で控えめ。魔力が最も強力であったエルフの末裔で、兄弟の中で最上級の力を持つが兄と姉の趣味には全く付いていけない）

クレヴァー、ワイス（この二人はジーニアスの兄と姉。エルフシテイのアカデミーで首席を取る程の実力であるため兄はクレヴァーと名が付けられた。ジーニアスも同じ境遇で、クレヴァーとジーニアスは本名ではない。ワイスは女性のため別。この兄妹二人はジーニアスに対して少し間違った価値観を持っている）

アクローマ（年令260才、身長174cm、B87W59H81、天使の女帝、出身地は天使界。天然でめんどくさがりで、かなりマイペースな性格。過去に荒廃の天使として同族の天使たちに恐れら

れていた経歴がある。レイディアントとは幼馴染で親友)

レイディアント(年令258才、身長176cm、B84W59H80、天使の女性、出身地は天使界。聡明な大天使長だが以外と性悪で質が悪い。西洋の貴婦人風な女性。白銀の長い綺麗な髪を持つ。趣味は読書、園芸)

白瀬向日葵(年令138才、身長180cm、天使の男性、出身地は天使界。性格は軽く外道。趣味は人に向かって神聖魔法を放つこと。階級は大天使長)

九澄冴良(年令147才、身長176cm、出身地は天使界。優しく繊細な性格。魔力が強く高度な魔法も扱える。白瀬向日葵になにかと神聖魔法を放たれるが理由は分かっていない。白瀬とは相性が良く、あれでも仲が良い)

グリード(年令102才、身長176cm、魔族であり智天使、出身地は魔界の西地区。普段は優しい性格だが実力を出し始めると性格が変わる。天使に先祖返りすることは可能だが、先祖返りをしない。元々は魔界の魔神階級)

クリス(年令27才、身長171cm、人間の女性、出身はステイ。とても紳士で騎士的な性格。戦争を生き延びたステイの将校で貴族でもある。髪の色は銀髪)

サーボ(年令33才、身長173cm、人間の男性、出身は不明。冷静で謙虚な性格。ステイの貴族であり魔導剣士だった。サーベルが得意)

デュラン(年令48才、身長166cm、人間の男性、出身はステ

イ。自己中心な性格で傲慢。いつも自身のことしか考えてない魔導使い。奇妙なペットを飼っている)

クロウ(年令36才、身長188cm、人間の男性、出身はミラージユ自治区。粗暴な性格。キレやすい魔導剣士。大剣を片手で振り回すなど、強力な腕力を持っていた)

ケルド(年令20才、身長181cm、出身はステイ。コロシラムの剣闘士であり、クロウ直属の将校。粗暴で頭は単純)

種族の設定

人間(全種族の中で一番人数が多く、どの場所にも生息する種族。しかし、全種族の中でもっとも脆く簡単に壊れる種族。寿命は全種族の中でも断トツで短い約80歳。物分かりが悪く、身勝手に短絡的な価値観と個性を持つ)

エルフ族(賢く大抵が美形で優れている者が多い種族。魔力は高いが、それに溺れることなく平和主義を貫き通している。寿命は約300歳程であり、長さは普通程度。森や林などには住んでなく、街や村に暮らしている。エルフだからと言って妖精ではない。森にしかいないとか悪戯好きなどの悪質なステレオタイプに微妙に悩まされている。ごく稀に、強力な魔力を秘めたエルフはダークエルフという強力な魔力を獲た形態に変化出来る。エルフ族にとっての変化である)

水人（普段は見た目を普通の人間と変わらないように人間化している。人間と違うのは水の状態変化を自由自在に操れること。高度な水人は水の状態変化を全て自在に操れ、自らも水のように変化出来る。寿命は約300歳で普通程度。レベルの度合いによって水人、水神、水帝の順に変化が出来る、強力な能力を得ることが出来る）

炎人（普段は見た目を普通の人間と変わらないように人間化している。人間と違うのは炎や熱を自由自在に操れること。高度な炎人は自らも炎のように変化出来る。寿命は約300歳で普通程度。レベルの度合いによって炎人、炎神、炎帝の順に変化が出来る、強力な能力を得ることが出来る）

雷人（普段は見た目を普通の人間と変わらないように人間化している。人間と違うのは雷や電流を自由自在に操れること。高度な雷人は自らも雷のように変化出来る。寿命は約300歳で普通程度。レベルの度合いによって雷人、雷神、雷帝の順に変化が出来る、強力な能力を得ることが出来る）

天使（聖書に出てくるような天使とは全く異なり、偶像崇拜などやっつけられないため神を崇めてはいない。気高く清らかなとかのステレオタイプなイメージはそもそも無い。神聖魔法という魔法を得意とする。天使界という世界で暮らしている。白い翼が背中に生えているが、邪魔な時は人間化するなどして出し入れ可能。寿命は約500歳と長い。天使の形態の種類は五つあり、普通の天使（見習い天使）、エターナル、ハイエターナル、女神、光体の順で強化される。当然だが、女神は女性のみ。女神は実質上神であり、天使界では高い影響力を持つ。ただし、女神となれる女性は一名のみ。女神が寿命で死ねば、新たに女神となる者が現われる。女神に関しては崇拜する）

魔族（別に天使とは敵対していない。魔界という世界で暮らしている。暗黒魔法という魔法を得意とする。性格上、残虐的な気質を持つ。寿命は約500歳と長い。魔族の形態の種類は五つあり、普通の魔族、インフェルノ、ハイインフェルノ、アビス、暗黒体の順で強化される。なお、天使では女性が強く、魔族では男性が強い）

悪魔（別に天使とは敵対していない。魔族の家来という訳でもない。外見が奇妙な者は存在せず、全て人型。悪魔界という世界で暮らしている。好戦的な者が多い種族のため、よく他の種族と契約を交わし他世界へ傭兵家業に出向いている。全種族中で傭兵家業に生きる者が一番多い種族。そのせいか、一番契約を交わしている人間には恐怖の対象と取られる様になった。天使のように翼があるが、飛竜のような形をしている。魔族のように暗黒魔法が得意。寿命は約500歳と長い）

天使、魔族、悪魔（寿命が500歳と長寿なために肉体の成長速度が変わっている。成長は18歳までは人間と変わらず成長し、100歳でようやく人間の二十代のような見た目になる。年令が500歳になっても人間の三十代くらいの見た目と変化が殆んどない。人間以外、他の種族もおおよそ、この成長速度）

竜神族（竜族の中で最も高度な能力を持つ一族。見た目は人間と何ら変わり無いが、覚醒すれば竜王化という変化が出来るようになる。竜王化をすれば、飛竜の翼が背中にはえ、竜人に変化する。寿命は約300歳と普通程度）

竜賢人（竜族の中で最も賢い一族。見た目は人間と何ら変わり無いが、覚醒すれば竜王化という変化が出来るようになる。竜王化をすれば、飛竜の翼が背中にはえ、竜人に変化する。寿命は約300歳と普通程度）

ネコ人（人間と見た目は変わらないが、ネコの耳や尻尾がついている。大抵のネコ人は実際のネコのように猫目、マタタビに弱い、跳躍力が高いなどの性質がある。ネコ人といっても和毛があるのは耳と尻尾だけで、他は人間と変わりない。ネコ人は平和主義で、いつも丸まって寝ている。寿命は500で長い）

イヌ人（人間と見た目は変わらないが、イヌの耳や尻尾がついている。大抵のイヌ人は動物のイヌのように忠誠心が高く懐きやすい、嗅覚が鋭い、尻尾で感情表現をするなどの性質がある。イヌ人といっても和毛があるのは耳と尻尾だけで、他は人間と変わりない。イヌ人は戦いが苦手。ネコ人はもつと苦手。成長してもずっと子供のような外見で幼く見える。寿命は500で長い）

一族、変化の設定

R一族（過去に総世界の全てを統括していた恐るべき能力を持つ一族であり、過去に大量殺戮をしていたルインという世界最強の生物を倒した一族。因みにノールのように：ールとなる人物は間違いない）R一族であり、Rはロイヤルの頭文字。ロイヤルとは生まれながらにして世界を統べるべき存在を示す。過去に桜沢一族と戦って以来、R一族の子孫に桜沢一族を倒すという血の掟が付いた）

桜沢一族（この一族は確実に男性しか生まれぬ一族で、その極めて複雑な反動のせいか見た目が限りなく女性に近い男性にしか育たない。全ての人物が個性的な性格を持っている。遺伝のせいか一族

全て視力が低く、眼鏡が欠かせない。R一族と同じように敵対している相手の一族を倒す血の掟が生まれながらにしてある)

変化(変化には種類がある。変化とは人間化、水人化、炎人化、雷人化、悪魔化、魔族化、天使化、竜王化であり自身の属性を変えることができる能力である)

ミールを取り返せ！

戦争の終結により、スロートには傭兵という職種を特に必要しなくなったため、モンスターハンターの店は開店休業状態に陥っていた。何もすることがなく暇を持て余していたメンバーたちだったが、スロートを救った元救世主ノールから、ある依頼をされる。

それは、ノールの弟妹を捜索して欲しいとの内容。

しかし、メンバー総出で二人を捜しても結局見付け出すことは出来なかった。

ノールが困っていることを知ったスロートの議長クロノが兵士を派兵し、さらに隣国のステイにも救援を求めたため、より広域を捜索することが可能となった。

数日後、隣国ステイの兵士の報告により、ノールの証言から得られたミールと背格好の似た人物の目撃情報を掴んだ。

とても急いだ様子で街中を走る男性がいた。

彼が目指す先は、モンスターハンターの店。

ステイから得た情報をノールに早く伝えようとしたのだ。

そして、彼はモンスターハンターの店へと息を切らせながら入った。

「ノール！」

店内に男性の声が響く。

声の主はクロノであった。

「クロノ、どうしたの？ ミールたちが見付かったの？」

丁度、店内にいたノールが聞き返す。

クロノが店に入った時、店内にはノールとリュウ、店番をしているテリーの姿があった。

「そうじゃないけど、ステイの兵がミールらしき人物の目撃情報を掴んだらしい」

「それって……もう見付かってんじゃない！」

「いや、まだ情報も不確かだし、それらしき人物だよ。それに今、その人物を確認することは出来ない」

「どうして？ 何が問題なの？ ボクは情報があった場所に今すぐ行くよ！」

見付けたという情報を聞いたことで気が気でないノールに対して、クロノは店内を見渡し何かを探していた。

「何してんの？」

「ちょっと、近くにアーティがないかと思ってね」

「何で、アーティ？」

「アーティには聞かれたくないことなんでね。実は……魔導使いのデュランに捕まっているらしいんだよ」

「何だと？ あのクズはオレが抹消したはずだ！」

恐ろしい殺意をクロノは背後から感じた。

「うわっ！」

恐怖によつてか、情けない声を上げてクロノがその場を離れると背後にいる人物がアーティだと気付けた。

「何をやっているんだ、クロノ？ そんな暇があるならデュランがいる場所をさっさと教える」

「わ……分かったよ、アーティ」

クロノは自らを落ち着かせるため、一度深呼吸をする。

「場所を教えるけど、優先すべきはデュランを倒すことよりも捕まっているミールを救うことだからな。それは分かってほしい」

「ああ、分かっている。デュランさえ抹消出来れば他はどうでもいい。興味の欠けらすら沸かない」

怒りによってか話を聞いていないアーティに、やれやれといったような表情をクロノはする。

「っーかさ……ボクの弟たちのことはどうでもいいって、今言ったよな？」

冷えた目付きでノールはアーティを睨む。

辺りは急激な勢いで寒気がする程に気温が低下し始めた。

そして、ノールは水竜刀を両手に出現させ、完全に戦闘体勢の構えに移る。

「落ち着けて。喧嘩なんてしたら店が壊れるぞ。しかもさ、オレが貸している店だよ、ここって」

クロノはノールを宥めて落ち着かせた。

仕方なさそうにノールは水竜刀を消す。

「落ち着いたみたいだね。それじゃ、デュランとミールが何処にいるか話すよ。デュランはステイの首都から、北に進んだ他国との国境ギリギリの場所にある古城にいる。そこら辺でデュランと一緒にミールらしき人物を確認したとステイの兵士から報告があったんだ」

「ありがとう、クロノ！ ボクはミールのところに行くね！」

「ちょっと待てよ、ノール。一人じゃ危険だからメンバーを何人が連れていけよ。これは明らかに罠って感じがするしな」

「ミールが罫？ そんなこと無いに決まってるよ。でもクロノが連れて行って言うなら、テリー、ライル、杏里くん、リュウの四人を連れていくよ」

「おい、オレも行くぞ」

デュランと戦いたいのか、アーティは自ら志願する。

「あのさあ、ボクにとっては傍にいただけで迷惑以外の何者でも無いってことが分かる？」

さっきのことが気に食わなかったのか、ノールは最初から喧嘩腰だった。

終始、睨み合う二人。

「さっさと行くから支度しろ」

さっきから部屋で会話を聞いていたリュウが二人に言う。

それを聞いて二人は睨み合うのを止め、さっさと支度をして六人でデュランの古城へと向かった。

ステイから北へ進んだ先、確かにステイの兵士の情報通りに古城があった。

何も無い平原に古城は築城されており、以前は国境警備に使われていた物のようだ。

「ここで、間違いないと思うけど？」

ライルは地図を見ながら周囲を確認している。

「それじゃ元気だしていこー！」

何故かテンションの高い杏里は笑顔だった。

「バカ女、仕切んなよ、勝手に」

「アーティさん、こうゆう時は“おー！”とか言つのが普通でしょ？ んっ……女って言った？」

「お前って何しに来ているのか分かっているのか？」

「分かんない」

さっきと変わらない笑顔の杏里。

「……前もって誰か教えてやれよ」

そう思い、アーティは少し頭が痛くなった。

とにかく、古城の前まで来たので城内へと入ることにした。

「それじゃあ、開けるよ」

古城の少し朽ち果てた鋼鉄のような金属でできたドアを、重量があるはずだが軽々と片手でテリーは開く。

古城一階内部はとても広く、何故か円形上を置いて部屋の奥に階

段があるだけで他に何もなかった。

「何で円形？」

何となくメンバーそれぞれが思っているよ…

「やあ、諸君。ようこそ、私の城へ」

階段辺りからデュランが声を上げる。

こっちの出方を知っていて、わざとらしい台詞から明らかに何かを仕組んでいるのは見え見えだった。

「デュランがかかってこい！ 叩き潰してやる！」

あのようなわざとらしい台詞でも怒りのせいかな当然のようにアーティが怒鳴っている。

「ふん、これだから低俗な下種は困る。私の話を聞くことが出来ないのかな？ 言葉も身分も弁^{わか}弁^まえないようなクスに何を言っても理解することなど出来ないだろうかな」

「……それってさ、オレのことか？」

その瞬間、アーティの異常な殺気が室内を覆う。

殺気で張り詰めた空気にデュランは無意識のうちに後退りをしていった。

「で、では、私はこの城の最上階にいる。ノール、お前の大切な物

も辿り着けたのならば返してやるぞ」

とても焦りながらデュランは階段の近くにある、何かの出っ張りを押す。

すると階段近くの壁が左右に分かれ、アーティたちが入ってきたドアも堅く閉ざされた。

「行け、エノーマス！ 奴らを皆殺しにしろ！」

左右に開いた壁の方にデュランは叫び、階段を駆け上がっていった。

「てか、エノーマスって何だ？」

「エノーマスっていうのはネコの大種類、大体ライオンくらいの大きさをした弱いモンスターだよ。全然話しにならないような相手だから大丈夫……」

ライルの問い掛けに答えていると、アーティは左右に開いた壁の方から出てくるものに反応する。

現われた生物はアーティの話すエノーマスという種類のモンスターではなく、それはエノーマスという名前の二本足で立つ大型肉食恐竜のような生物であった。

エノーマスは壁が開いたことに驚いている様子だったがアーティたちちに気付く。

アーティたちを眺めていたが暫しの沈黙の後、想像を絶する鳴き声を上げ、エノーマスは襲い掛かってきた。

「ヤバい！ 逃げろ！」

テリーが叫ぶと同時に六人は円形の建物内をバラバラに逃げ出す。

しかし、正確には逃げ出す人物は一人だけでも良かった。

「ちょっと〜！ 何でボクに付いてくんの！」

何故かエノーマスは他の者には目もくれず、ノールだけを追い掛けている。

そのため、ノールは今まで生きてきた人生の中で最速のスピードで走っていた。

その内にアーティ、杏里、テリーは特に急ぐ様子もなく二階へ上がる。

「早くしろ、ライル、リュウ。それと、ノールはさ……何時まで遊んでんだ？」

呆れた様子のアーティが階段の上から言う。

「はあく〜！ ふざけてんじゃねえ〜！ どの辺が遊んでるように見えんだよ〜！」

リュウと焦っているライルが階段を上り始めると、追い付いたノールも階段を上がることにする。

それと一緒に、ノールを追い掛けていたエノーマスも階段に猛烈な

勢いで突進。

衝撃によって階段は物凄い轟音とともに崩壊し、途中まで上っていたライルとリュウは一階へと落下した。

その最中、ノールは水人化し、身体を昇華して水蒸気となり二階でノールとして実体化。

そのまま、落ちた二人を見向きもせず先に行ってしまった。

「これって見捨てられたか？」

階段の瓦礫の中からライルとリュウが立ち上がり、誰も居なくなつた階段の先を見つめながらそう思う。

視線を戻すと正面にはこちらを見ているエノーマスの姿があった。

「戦うしかないかな…」

エノーマスに向かってライルは剣を構える。

何かを察知したのか、エノーマスも二人に向かって猛烈な勢いで突進する。

「ところで、どうする？」

「何が？ あっ……おい見ろよ。あいつさ、恐竜のくせに“魔法障壁”張っているみたいだな。もしかして、デュランが張ったのか？」

特に焦りもせずぼんやりした様子でリュウが話す。

話している途中に、エノーマスが突進してきたため二人は素早く躲した。

「どうするかな、これって。エノーマスを倒すにはオレの水人の能力を使うしかないのか？」

スロートでは色々と厄介なので隠していたがライルは水人である。

ノールとは異なり状態変化のうち、氷の能力のみが扱えた。

その氷の能力を駆使したことにより、エノーマスの足元が一瞬で凍り付き、巨体であるエノーマスは物凄い音と同時に倒れた。

「今だ、リュウ！ そいつを殺れ！」

「あつ？ 何だつて？」

破壊された階段をただぼんやりと、リュウは眺めていた。

「おい、リュウ！ 何やってんだよ！」

「はあ？ お前……遊んでたんじゃねえの？」

「何だと！ マジで、いい加減にしるよ！」

何故か戦おうとしないリュウに対し、ライルは本気で怒る。

勿論怒っているのは倒されたエノーマスでもある。

唸り声を上げながらエノーマスは立ち上がると、敵と判断したのが突然スピードアップをした。

しかし、ライルは冷静だった。

再び、水人の氷の能力を扱う。

「氷壁！」

ライルが能力を駆使すると、ライルの前に一瞬で氷の壁が出現。

突然現れた壁にスピードアップしたエノーマスは立ち止まることが出来ず、氷の壁にぶつかり、エノーマスは気を失った。

「やったね。それじゃ、止めを刺すか」

ほっとした様子で、ライルはエノーマスに近付く。

「待てよ、ライル」

ライルの腕を掴んでリュウは止める。

「なんだよ、離せ。何もしなかったのに邪魔するのかわ？」

ライルはリュウの腕を振り払う。

「こいつは草食恐竜だぞ？ 害もないのにお前は殺すのかわ？」

「はっ……？ こいつは牙も生えてるし、オレたちを喰うために追い掛けたじゃねえか！」

「こいつはじゃれていたろ？ オレは竜賢族っていう竜人だから、こいつが何を考えているかくらいなら分かるって。それにアーティも言ってる？ 追い駆けっこしているノールに何遊んでんだって」

「知ってたんなら、先言えよ……」

ライルが疲れたようにしゃがみ込むと、リュウは再び壊れた階段の方を眺める。

数分後、意識をはっきりと取り戻したエノーマスは再び起き上がる。ボーツとした様子で辺りをキョロキョロしていたエノーマスは階段の近くにいるライルたちに即座に気付き、再びライルたちへと猛烈な勢いで走ってきた。

だが、ライルたちは無視というより無反応だった。

そんな無反応なライルたちの前で突進の構えだったエノーマスは急遽立ち止まる。

何故止まったかという逃げなかったから。

それから脅かそうと、かみつく素振りや前足でちょっかいを出すなどしてエノーマスは頑張っていたがライルたちは無反応だった。

そもそもエノーマスはリュウの話した通り、草食恐竜。

当然、ライルたちを食べることなど最初からしないし、出来ない。

そのうち、二人が構ってくれないためなのか飽きてしまい、エノーマスは堅く閉ざされた古城のドアを軽く薙ぎ倒し、どこかへ行ってしまった。

「メチャクチャ恐かったよ…」

まだ、エノーマスが近くにいないか、ライルは辺りを確認する。

「あの恐竜は見た目が怖いから肉食だと最初勘違いしてしまう。懐き易いし見た目の割に食費も余りかからないから門番にするのが最適なんだよな」

「オレは……てっきり喰われるかと思ってたよ」

「いや、じゃれてたろ？」

「ところでさ、これってどうやって上るんだ？」

崩壊した階段を前にただ立ち尽くすしか二人は出来なかった。

その頃、二階に上がることの出来た四人は古城の広さと部屋の多さにとても苦戦していた。

「これって、どこにデュランがいるんだよ!」

「知らないよ、だから探してんだろ……あれって階段か？」

イライラしているアーティに何か冷めた感じのテリーが廊下の先に階段を見付けたことを語る。

「そういえば、デュランが最上階で待っているって言ってたな」

ようやく、デュランがこの階層にいないことを悟り、アーティはガツカリする。

一先ず、四人が階段に近付くと階段の周囲は広いフロアになっていた。

「あいつらがデュランの言ってた敵なの？」

フロア内に誰かの声が響き渡る。

「そうだな、それじゃ排除するぜ」

声の主と思われる青年と少年の二人が、三階から降りてきた。

「敵の数は二人だ。テリー、杏里、お前等に任せていいか？」

アーティが敵に聞かれないように囁く。

「なんで？ ボクが倒しても良いけど？」

「お前には何かやることあるんじゃないか？ たっけ？」

「確かにそうだね、だったら任せた方が良いかも」

その言葉を聞いて一気にテリーと杏里は敵の二人に攻撃を仕掛けた。

二人を引き付けている隙に、アーティとノールは三階へと駆け上がる。

「しまった！ 逃げられたか！」

敵の青年がノールたちを追い掛ける。

「逃げたんじゃねえよ。さっさと、デュランを始末しに行ったんだ。分からないのか？」

追い掛けようとして背後を見せた隙を狙い、青年をテリーは剣で斬り付けようとした。

だが、瞬間的に殺気を感じ取ったのか敵の青年は持っていた巨大な鎌で剣を受け止める。

「油断したぜ。なら、先にお前等を仕留めてからあいつらを殺すことにするわ。ジャスティン、気を抜くなよ！」

「分かってるよ、ヴェイグだってもう油断しないでよ！」

ヴェイグが、もう一人の少年、ジャスティンに声を掛けると持っていた鎌で一気にテリーの剣を弾く。

そのまま、テリーの首を狙って鎌をもう一度振るがテリーは背後へ躲す。

「こんな鎌を楽々で扱えるなんて、結構な鍛練を積んでいるってことか？」

なんとなく、テリーはそう思いながら攻撃を躲していた。

「テリーさん！」

杏里が心配そうに叫ぶ。

てっきり、それをテリーがヴェイグに押されていると思っていたらよ
うだ。

その瞬間、杏里の頬をナイフが掠めて背後の壁に刺さった。

「はいはい、よそ見しないの。君はね、僕と戦うんだよ」

ヴェイグと一緒に階段を降りてきたジャスティンがナイフを構える。

「いきなりナイフなんて投げないでよ！」

「いいじゃん、スローイングナイフが僕の戦い方なんだから。それに戦っているんだよ、僕たちは？ 君が勝手によそ見たのが悪いの。違う？」

次に投げるナイフを親指、人差し指、中指の三本で持つ、所謂ハンドルグリップの持ち方でジャスティンは杏里へ挑発的に向けた。

「そんなこと……わざわざ言わなくていいよ！ ボクもう怒ったからね！」

怒った杏里はサイドバックにあるトンファーを構えた。

「何それ？ そんなもので一体どうやって戦うの？ 弱そうだね。」

ジャスティンは明らかに馬鹿にしたような口調。

「弱そう？ バカなのか、お前は？」

突然、杏里の口調、雰囲気が変わる。

次の瞬間、速攻で杏里はジャスティンの間合いに入り込み、トンフアーを回転させることで腹部と右足に一撃を加えた。

この時、ジャスティンは骨が碎ける程の衝撃を受け、痛みのため床に両膝を付いて攻撃された腹部を押さえる。

だが、ジャスティンは右足を押さえなかった。

神経にダメージを受けてしまったのか、既に感覚自体が無いようだ。

「相手の戦闘能力は武器じゃない。ましてや、戦闘能力が不確定な相手に油断するなんて……」

「何てことだ……ジャスティン！」

ウェイグがテリーの攻撃を止め、ジャスティンを支えに行く。

「あっ？」

肩透かしを食らったような反応をテリーはする。

「大丈夫か！ しっかりしろ！」

ヴェイグはジャスティンを支えながら必死で声を掛け続ける。

しかし、ジャスティンは口から血を流したまま殆ど反応を示さず、苦痛に満ちた表情を浮かべる。

「テリーさん、彼らに隙が生じている。止めを刺すよ」

「オーケー、分かっている………ってか杏里なのか！ 全然キャラ変わってんじゃない！」

「前もって言ったたでしょ。ボクはトンファーを持っては強くなった気がするって……あれ、それを話したのは別の誰かだったかな？」

「強くなるってというか、変わり過ぎだろ……」

態度も変わっている杏里にテリーは引いていた。

「おい、お前らの中で回復魔法が使える奴はいるか！」

ヴェイグが二人に訊ねる。

「回復魔法だ？ これから死ぬアンタらにはもう関係ない魔法だろ」

「待ってくれ、オレはどうなっても構わないが、ジャスティンだけは助けてくれ！ 頼む、お願いだ！」

「そんなことが通るだろうと本気で思っているわけ？ 平和ポケもいいところだな、おい。それに自分だけはとか言って残された人の

ことを……いや、それは良いか、別の話だ」

そのままヴェイグたちを斬ろうとテリーは剣を構えると、杏里がテリーの腕を引っ張って止めた。

「助けてあげよーよ？　ねっ？　ボクは回復魔法が使えるから助けても良いでしょ？」

「なっ……！　また性格が変わったのか！」

トンファーをサイドパックに閉まったせいか、杏里は雰囲気などが元に戻っている。

はつきりいって、テリーは未知の生物に出会ったような気持ちだった。

「どう？　大丈夫？」

三階に上がる階段の手摺りの部分を背もたれにジャスティンを気遣いながら座らせ、杏里は回復魔法を掛け始める。

「分かっていると思うけど、アンタらは人質だからな」

テリーはヴェイグが持っている鎌を取り上げる。

「人質だって？　オレたちを人質にしたってそんなことでデュランが動じるとは全く思わないな。あいつ、クズだし」

「なんていうかき、お前等とデュランの関係って何？」

「金で雇われたただけだ。それ以外に何かがあるんだ？」

「うぜえよ、バーカ。そんなの知るか」

「そういえば、お前って案外強いけど、どこから来たんだ？」

「スロートだ」

「そんなことじゃない。だったら、オレもステイから来ましたって言えば良いのか？ オレが言いたいのは何処から来たかってことだ」

「ハア？ 何言ってるの？」

「分かった、オレが先に話すから教えるよ。オレはエリアースって世界から来たんだ。どうせ、お前も他の世界から来たんだろ？ この世界には強いヤツがまだまだ少ないみたいだしな」

「ところで、さっきからベラベラとしゃべっているけど他の世界から来たってどうゆう意味だ？」

「はあ……？ いや、知らないなら別に良いんだ。気にしないでくれ」

「なんか隠そうとしているだろ？ 杏里、ジャスティンを回復するの止める」

ヴェイグが話を終わらせようとしたため、杏里に合図をする。

「えっ？ どうして？」

ジャスティンといつの間にか仲良くなっていたのか、杏里は回復魔法を掛けながら楽しげに会話をしている。

「どうしてって、ヴェイグが何かを隠しているからに決まっているだろ！ 杏里、今すぐジャスティンの腕を折れ」

「えっ？」

杏里とジャスティンが一緒に反応した。

「おい、止める！ 話が違うじゃないか！」

ヴェイグは必死でテリーを止める。

「やだね、止めると思うのか？ テメーが話さないのが悪い。確かに回復してやるとは言ったけど人質っていう立場をそもそも忘れていたようだから多少痛め付けさせてもらう。あとお前、そこから動いたら斬るからな」

ニヤけながらテリーは武器を持っていないヴェイグに剣を構える。

「お……折るの？」

脅え泣きそうな声でジャスティンは杏里に訊ねた。

「ごめんなさい……ジャスティン君。すぐに治すから我慢してね」

杏里はジャスティンの腕をそつと掴み、手に力を入れる。

「止めてくれ！ 何でも話すから折らないでくれ！」

「はあーあ、明らかに見え透いた嘘だな。痛みもないうちに本当のことを言える訳ねえ」

そういうと、テリーは杏里に合図を送る。

力なくコクンと頷くと、杏里は止まっていた動作を再び行う。

ぐぐつと、両腕に力を入れていた杏里の動きが止まる。

杏里が手を離すとジャスティンの右腕がダランと妙な方向に傾いた。

「お、折れてる……腕が……」

自らの身体に起こっている事態に混乱しているジャスティンは泣きながら静かにそう発した。

続けて、杏里はジャスティンのもう片方の腕を掴む。

「もう止めてくれ！ ジャスティンは女の子なんだ！ それ以上傷付けないでくれ……」

杏里を止めさせようとテリーにヴェイグは^{すが}縋りついた。

「お前、動いたな？」

冷えた目付きでヴェイグを見下ろす。

その時、ヴェイグは完全に死を悟った。

…が、テリーはヴェイグを殺そうとせず、突然笑い出す。

「ははっ、本当に情けないヤツ。最初から話せばいいんだよ。オレとお前等是对等な立場なんだからな。それとな、オレも女だ。こういう生業には女も男も全く関係ねえんだよ！」

怒っているのか、テリーはヴェイグに言い放つ。

「アーティさんだけじゃなく……テリーさんも怖い人だったんだ」

テリーのことが明白に分かった杏里は、妙な方向に傾いているジャスティンの腕を再び掴む。

「いた……い……」

痛みにピクツと反応したジャスティンだったが同時にあることに気付く。

折れたはずの腕が自由に動いたのである。

「折ったんじゃないの？」

「折ってないよ、腕の関節を外したの。ごめんね、もう恐がらせたりしないからね」

杏里はポケットからコスモスの絵柄が刺繍されたハンカチを取り出し、泣いているジャスティンに手渡す。

それから、ヴェイグは世界についてを説明する。

この現在いる世界以外にも世界というのは沢山あり、その世界を纏めてひとくくりで表した物を総世界という。

その総世界間を移動する魔法はヴェイグの話したエリアースという世界などで習得が可能。

強者や大抵の能力者は他の世界に行く方法を殆ど誰もが知っているため、テリーにも聞いてみたらしい。

「へえ、そう言うことね。全然知らなかったよ。じゃ、他の世界にどうやって行くのか方法を教える」

「……オレは魔法で教わったから、お前に方法を教えることが出来ないんだ」

「そうか、ヴェイグ。だったら、お前はその方法を魔法で教えた奴がいる所までオレたちを黙って連れていけばいい」

テリーは話を聞き終えたため、杏里にまた合図を送る。

再び、杏里はジャスティンに回復魔法を掛け始めた。

同時刻、三階へ到達することの出来たノール、アーティらは三階の部屋という部屋全てを隈なく捜し回っていた。

捜す目的についてはお互い全く別だったがとにかく必死だった。

「あれを見て！」

ノールが廊下の奥を指差す。

その方向に一瞬何か人影らしき物が見えたような気がした。

「あれが、どうした？」

「ミールだよ！ 間違いないって！」

「だからさ、何なの？ お前はオレを邪魔したいのか？」

「えっ？」

「元々の目的はデュランを殺すことだろう。第一目標自体を忘れて自分勝手な行動を取られるとオレは困るんだよね？ お前に言っても無駄だと思うけど、チームワークっていう言葉が分からないの？」

いかにも呆れた口調でアーティはグダグダと語る。

「あれ？？ ボクの耳には殺してほしいとしか聞こえなかったんだけど、気のせいなのかな？」

ノールとアーティはミールらしき人物のいた方向へと向かう。

そこには次の階に上がる階段があった。

「……もう、オレは何も言わないぞ」

「無駄足だったね」

さっさと、留まる必要の無かったフロアから階段を上ると最上階のテラスへと出た。

「ここが最上階ってことだな」

アーティが辺りを見渡す。

「なんだ、もうここまで来たのか」

テラスにはデュランとミールの二人がいた。

「ミール！」

ミールの姿を見て反射的にノールが叫ぶのと同時にアーティは飛び出す。

速攻で攻撃を仕掛けるため、デュランとの間合いを一気に詰めようとした。

「死んどけ、デュラン」

詰められた間合い、その瞬間にアーティがデュランを斬り伏せれば確かに終わりだった。

しかし、デュランを庇うようにミールが立ち塞がったため、アーティはミールの目前で剣を止めた。

「退け！ 死にたいのか！」

「……………」

俯いたままのミールはアーティの声に反応しないどころか目前まで迫った剣にまるで動じない。

「くそっ……………」

アーティは、その場から離れる。

離れた瞬間、アーティがいた場所に剣が突き刺さった。

突き刺さっている剣の柄の先端には鎖のような物が括り付けてあり、それは鎖鎌の鎌を剣と取り替えたような構造になっていた。

「よく躲したな」

三階から別の男性が上がってきた。

「なんだ、まだ他に隠れて居たのか………… ノール、どうしてその男に気付かないんだい？」

「へえ……………」

ようやく自身の隣にいる男性にノールは気付いた。

何故か数秒程、ノールと男性が見つめ合っていると……

「あつ、ダメだ。こんなに可愛い子と見つめ合えるなんて恋としか言い様が無い。デュラン、この子はオレじゃ倒せない。お前に任せよ」

「分かっている。貴様はアーティの相手でもしている」

「はいはい。お前のやることって本当に最低だな」

男性がデュランと何かを話すとアーティと向き直る。

「今のは隠れていた訳じゃない。こうやってムダに接近戦を避けることがオレの戦い方なんだよ」

男性は床に突き刺さった剣を鎖で引き寄せ、自身の手元に戻す。

「じゃ、そうゆう訳で殺し合いますか？」

再び、男性はアーティに攻撃を仕掛け、戦い始めた。

「ふん、水人ノール。貴様はアーティとアレスの戦いを眺めに来た訳ではなかるう？ ミールを助けるためではなかったのか？」

何故かデュランはノールの注意を引き、ミールから離れた。

直観的に助けるチャンスだと思ったノールはミールに近付き、ミールを強く抱き締める。

「ミール……本当に心配したんだよ……」

ミールの体温を肌で感じ、ノールは涙を流した。

数ヶ月振りに弟のミールに会えたことを実感し、嬉しくて泣いているようだった。

「離せよ……」

「ん？ ミール、何か言った？」

ミールを抱き締めたまま、ノールはミールの顔を見る。

虚ろな目で自身を見つめているミールに異変が起きていることにやっとノールは気付いた。

「えっ……？」

腹部に衝撃が走り、ノールは腹部を押さえる。

痛みが走るその部分に彼女は何が起きているのかすぐには分からなかった。

「水人ノール。ミールはお前を殺すつもりだ。無論、私が洗脳してやったのだからな。まだ、この世に未練があるならミールを殺せ！」

とても勝ち誇った顔でデュランは言う。

その間もミールの絶え間ない攻撃は続き、ノールはただその攻撃を受けることしか出来なかった。

まるで心が無い機械のようにミールはノールに対して何度も攻撃を加えた。

「バカか！ ミールの攻撃を避ける！」

「何言ってるの、お前？ もう可愛いあの子には避ける気力も無いんだよ。折角助けに来たっていうのに逆に助けに来た相手に殺されかかっているんだぜ？」

アレスは再びアーティの顔を目掛けて剣を投げた。

当然、アーティは素早く躲す。

「お前、剣に鎖が付いてるの忘れてるだろ？」

アレスが投げた剣の鎖を一気に引き戻したことによって、アーティの背後から腹部を剣が貫いた。

「くっ……そ……」

反射的に突き刺さった剣をアーティは引き抜こうとする。

「はいはい、前だよ、前を見ようね」

アーティは剣に気を取られてしまい、アレスの接近を許してしまった。

剣の他に携帯していたナイフでアーティの首を薙ぐ。

頸動脈付近を斬られたアーティは自らの首から吹き出る血を押さえながら無言で倒れた。

「まっ、こんなもんだろ。デュラン、アーティを倒したぞ」

「ご苦労。こっちはしぶとくムシケラ並みにまだ生きているよ」

ノールたちのことをデュランは観賞している。

「ボクだよ、分からないの……？」

身体中を傷付けられていたノールはそれでもミールが自分のことを分かってくれると信じてミールから決して離れなかった。

しかし、もう限界だった。

意識を取り留めること自体が不可能になっていた。

ガクツと体勢を崩し、床に倒れ込むとノールは動かなくなった。

「……………」

ミールの攻撃が止まる。

「姉さん……？」

片腕で頭を押さえながらミールは倒れた。

「なんだ、ミールの洗脳が解けてしまったのか。となると、ノールは死んだな」

ミールの異変を悟ったデュランは二人に近付いた。

「ノールを倒せてしまった今となっては、お前はもう用済みだ。姉の下に送ってやるわ」

魔法を詠唱しようとしたデュランであったが、何かを思い出す。

「そういえば、アーティも倒していたのだったな。こやつのおかげで私はあの国での権威を全て失った。例え死んでいたとしても少々痛み付けねば気が済まん」

二人から離れると、血塗れで倒れているアーティにデュランは近付き、アーティの頭部を踏み付ける。

その時、再び恐ろしい程の殺気が空間を覆った。

「お、おい！ デュラン！ そいつから今すぐに離れるんだ！」

アレスが叫ぶのと同時にアーティが立ち上がり、デュランの首を鷲掴みにし片手で軽々と持ち上げた。

「これは自殺志願って奴か？ デュラン！」

飛竜のような羽を背中に広げ、瞳も灼熱のような真紅に変わり、首にあつたはずの傷も既に塞がっている。

それから起きたのは、ただの殺戮だった。

気が済んだアーティは竜王化を解くと、倒れているミールの顔を叩いて起こし、ノールを魔法で手当てするようにと語った。

ミールは黙ったまま頷き、手当てを始めた。

ミールの回復魔法を詠唱する声はずっと震えていた。

薄らと、ミールは洗脳されていた時に自身が何をしたか覚えている。

姉に対して致死量に匹敵する程の暴行を躊躇いなく与えた事実を受け入れる覚悟が、まだ彼には無かった。

「で、そのアンタはどうするんだ？ 今から殺され……いや、失礼。オレと戦うか？ オレとしては首に付けられた傷の礼を十分にしなきゃならない気がするんだけど」

「いや……遠慮しとくよ。確実にオレが死ぬからな」

アーティが圧倒的な強さでデュランを死に至らしめた様を見て、アレスは能力の差を一瞬で悟ったらしい。

「それじゃ、もうこんな所に用ないな。アレス、お前はノールを運べよ。死にたくなかったらな」

「……分かった」

「それと、ノールが水人だということを知っているな？」

「ああ、知っている」

「水人は元々人間では無いから、身体を自由な形に整えられる。つまり、ノール本人が望んだ理想の体系をなんの努力も必要なしに手に行き届くことができる」

「それがどうしたんだ？」

「言いたいことが分からないのか？ 痩せているのにノールの胸のサイズは見ただけで分かる通りDとEの特大サイズだ。オレが背負えと言っという何だが全く背負えるだけで羨ましいよ」

微妙な笑みを浮かべるアーティに対して、アレスは少し引いていた。

「姉さんを変な目で見るな！」

嫌な雰囲気を感じ取ったミールはアーティに叫ぶ。

新世界

微妙に揺れる、不思議と心地よい眠りからノールは目を覚ます。

目をゆっくりと開くと、自らが誰かに背負われているのだと分かった。

この微妙な揺れは、その人物に背負われているからだった。

「ふう……ん」

眠かったノールは寢息を発して再び寝入ろうとした。

「あつ、起きたかい？」

ノールを背負っている人物が声を掛ける。

この時、ノールは一瞬で目が覚めた。

今、自らを背負っているのはモンスターハンターメンバーの誰の声でもなかったからである。

ノールは勝手に、というより無意識に近い感覚でメンバーの誰かが自身を背負っているのだと思っていた。

「うわっ……！ 離せ！」

誰だか分からず不安になったノールは暴れだす。

「落ち着いて、姉さん！」

その人物の隣を歩いてきたミールが落ち着かせるように言う。

「えっ？ ミールなの？」

ミールの存在を目にしたノールは落ち着いていたのか暴れるのを止める。

自らを背負っている人物をノールは確認すると何故か敵であるアレスに背負われているのだと分かった。

「……って言うか、何でボクはこの人に背負われているの？」

アレスの顔を覗き込むようにノールは見つめる。

そのとても近い距離にアレスは何やら緊張しているようだった。

「ノール、気が付いたのか。Mじゃあるまいし、これからは攻撃を躲すことも考えて行動しろよ」

ノールが疑問に思っているとアーティが声を掛ける。

「そういえば、ボクたちだけしかいないみたいだけど……他の皆は？」

「さあね、他の連中は先に帰ったんだろ？ じゃあ、さっさとアレスから降りて一人で歩けよ」

それを聞いた後、ノールは寝たフリをする。

別に身体はミールの回復魔法で歩く程度なら大丈夫な程回復していたが、自分で歩く必要の無さからわざわざアレスから降りて歩くことが面倒だった。

そして、ノールたちはモンスターハンターの店に戻ってきた。

「おい、ノール起きろ」

店に戻った時、アーティはアレスに背負われたまま相変わらず爆睡しているノールを起こす。

しかし、反応が無かったので頭部を平手で数回叩く。

「ん……うん？」

アーティに叩かれるまで熟睡していたノールは寝呆けながら目を覚ます。

「テリーが、話があるらしいから聞くよ。ついでにだけど、ノールお前、強いみたいだからモンスターハンターメンバーにスカウトする」

「ああ、そう……」

微妙な返事の後、ひとまずノールはアレスから降りた。

「ゴメンね、ずっと背負わせちゃって。ていうか、貴方は敵じゃなかったの？」

「敵だったよ、一応。でも、依頼主のデュランはついさっき死んだ

から、もう敵同士じゃない。それに……」

「それに、どうしたの？」

「女の子を背負ったのは初めてだったから、オレとしては嬉しかったし」

「ふーん、そうなんだ。背負ってもらったのに感謝されるならいつでも背負ってもらおうよ」

アレスの話聞いてても、特に何も思わなかったノールはそんなことを言った。

「これで、メンバー全員そろった？　じゃあ、話すけど皆聞いとけよ」

テリーがついさっき戦ったヴェイグを連れ出す。

「このヴェイグって男が別の世界から来たと話しているんだ。もしかしたら仕事の幅が広がるかもしれない。そういう訳で、ヴェイグの話聞いてみようと思う」

テリーがメンバーに話す。

その後でヴェイグに合図を送るとヴェイグが話し始めた。

「オレはエリアースというところから来た。つまり異世界から来たんだ」

「私もルーメイアっていう異世界から来たわよ。皆も知っている」と

思っけどね」

異世界という言葉聞いて綾香が反応する。

「綾香さんも異世界出身なのか？ 何でそのことをもっと早く言わなかったんだよ」

少し呆れたようにテリーが言う。

「以前、私のショットガンのことを説明した時に話したじゃない」

「いつもの天然的な発想じゃなかったの？」

「テリーちゃん。失礼ね、私のどこが天然だっていうの？」

恐らく怒っているのだと思うが何故かいつものように綾香は笑顔で対応する。

「やっぱり綾香さんに聞くより、敵であるヴェイグに聞いた方が正確だな。ところで……」

再び、テリーはヴェイグに視線を移す。

「どっした？」

「何で、世界は複数に分かれているんだ？ 信じられないけど、パラレルワールドとか？」

「オレがそんなこと知るかよ。学者じゃないんだぜ？ オレが言えることはな……」

それから、ヴェイグは異世界についてを説明する。

異世界に行く魔法があり、それはエリアースという世界で習得可能ということだった。

「じゃ、オレたちをそこに連れてけ。異世界に行ける魔法が使えるんだったら、テリーの言う通り顧客が増えて仕事の幅が広くなりそうだしな」

「ちょっと待てよ、アーティ。その間、この店のことはどうする？ オレは異世界になんて行かないよ」

「クロノ、もしかして異世界に行くのが恐いのか？」

「ははっ……残念ながら違うよ。オレはこれでもスロートの議長だから、この国を勝手に出ていくことなんて出来ないんだ。それに良い機会だから言うけどな、この国にも新たに軍隊を作ることにした。それでメンバー全員にも軍隊へ入ってもらいたいって前々から言いたかったんだけど。勿論、解散ってことで」

苦笑いをしながらも、さらっとクロノは言った。

「どういうことだよ、それって……マジで？ それって、普通に困るけど。折角モンスターハンター作ったのになんで解散しなきゃいけないんだよ？」

暇そうにクロノの話聞いていたアーティだったが、とても納得出来ない内容に速答する。

「だったら、メンバーの意志を優先して決めようか。オレとしては全員が軍に入ってほしいけどな」

「おい、お前。勝手に話を進めるなよ…」

クロノが勝手に話を進めた結果、モンスターハンターは解散することになった。

その最中、アーティは自分に付いて来てくれる人物だけの第二次モンスターハンターを新しく結成する。

結果的にアーティについてくる人物はテリー、リュウ、ノール、ミール、春川杏里、橘綾香、ライル、ルウ、ジーニアスの九人だった。

アーティに付いて行くという理由に関しては全員バラバラだったが、一応第二次モンスターハンターは結成された。

そして、アーティたちはヴェイグが異世界に行く魔法“空間転移”を詠唱し、新たな世界エリアスへと向かった。

一瞬に近いような高速移動の感覚を実感した時、視界が開けた。

そこは、ついさっきまでいたスロートの街並みとは全く異なる風景の場所であった。

現在、自分たちがいる場所は丘の高台のような所であり、遠くに大

きな建造物が立ち並ぶのが見える。

「あれ、なに？ 塔の一種とか？」

「いや、あれはビルっていう建造物だ。ノールたちの世界とは違って、ここは総世界のなかでも近代的な世界だから、ああゆう物も機械という物を使ってたった数年で造ることが出来るんだ」

ノールの問い掛けにヴェイグが建物の方を眺める。

「あと、今言った機械っていう物はとても便利な物だから、スロートに持ち帰ったら良いよ」

「そうなんだ。でも…」

「でも、なんだい？」

「ここは、スロートより二酸化炭素の量が多いね。ボクは水人だから水素と酸素を取り込む時に、何となく肌で分かるんだよね」

「やっぱり、そう思うのか。ノールの言う通り、二酸化炭素は沢山出ているよ。機械を動かすために電気や石油という燃料が必要なんだ。でも石油という燃料を機械に使つと、どうしても二酸化炭素が排出されてしまうんだ」

「ふーん、そうなんだ」

「それと、総世界は全ての世界が総世界語という共通語を扱っている。だから、住む世界の違うオレたちでもこうやって普通に話せるんだ。オレは不思議だと思っているけど、言語はどの世界にもこの

一つしか存在しない。絶対にこれは何かあると思っただけ……と言っても、ただのオレの空想だけだね」

「言葉？　ボクたちが話している言葉以外の他にもあるの？」

「いや……ないけど」

「なんか難しいことを考えているんだね、ヴェイグは。でも、何でボクに色々教えてくれるんだい？」

敵であるはずのヴェイグが気軽に説明してくれることが気になり、なんとなく訊ねる。

「ジャスティンが……」

「ジャスティン？」

「ほら、行くぞ」

ヴェイグは何かを言い掛けたようだったが話すことを止めると、ビルが立ち並ぶ街とは別に郊外へと向かって歩き始めた。

道幅一杯をアスファルトという黒い物で舗装された長い道を歩いていくと、ある城に辿り着く。

「ここは、ハンター養成所だ。ここで二年間修業を積み、ハンターの証と強力な力を手にすることが出来る。因みにここは男性のみが入会可能なんだ。それでジャスティンは男装して入会している」

「ジャスティンくんって女の子だったの？　それってここに入会す

るにはボクも男装しなきゃいけないってこと？」

「そうだ。それが嫌なら入らなくても良いけど、どうする？ さすがに強制って訳にはいかないし」

「そっか……」

考えたノールは同じく女性であるテリーと綾香に相談する。

しかし、特に待っている間することも無かったので仕方なく男装して入会することを決めた。

男装を済ませ準備が整ったノールたちはハンター養成所に入会するため城内に入る。

城内で指導員の人物が新たに入会しようとする十人の手続きをし、ハンターになるための二年間を過ごす部屋割りを行った。

この城はこの世界の中世と呼ばれる時代に作られた物の内部を改築し使われている。

そのため広い城内には新しく寮などが作られ、入会者はそこで暮らすことになっていた。

「では、二人一部屋なので私がランダムで決めていきますね。それと、ヴェイグさんとジャスティンさんも仲がとても良いようですし一緒に分けましょう」

「分かりました」

ヴェイグとジャスティンは嫌な顔をせずに、普通に答える。

指導員が勝手にそう決めても、ヴェイグたちが反論しなかったのは意味があった。

ここには規約がいくつかあり、指導員に逆らうことは規約違反とされているからだ。

結局、部屋分けはランダムで決められ、アーティとジーニアス、ライルとヴェイグ、テリーと綾香、ジャスティンとミール、ルウとリユウ、ノールと杏里となった。

「ボクと同じ部屋になったね。よろしく、杏里くん」

「うん！ そうだね！」

杏里は嬉しさを隠しきれないといったようなオーバーなりアクションを取った。

それ程、好きな人と一緒に暮らせることが、杏里には嬉しかった。

「あー、良かった。男のメンバーと一緒にじゃなくて安心したよ」

「そうね、別に気を使わなくていいしね」

テリーと綾香は男性のメンバーと部屋が一緒ではなくて安心した様子。

「あー、その二人。一応、男ってことで入会してたから男らしくしろよ」

二人の聞かれたら即座に女性と分かってしまうその会話を聞き、ア
ーティが注意する。

そのように個々の感想があるなか、ハンター養成所での生活が始ま
った。

「えーと、ここだね」

ノールと杏里は割り当てられた自室となる部屋へ入る。

室内へ入ると内部は、この世界の洋風と呼ばれる作りとなっている
1DKで、二段ベットとテーブル、その他の家具のような物が置か
れていた。

「ところで、これなに？」

早速ノールは初めて見た薄い物体（薄型テレビ）を指差す。

「うーん、ボク分かんない。ヴェイグさんなら知ってると思うよ」

杏里もテレビに興味を示したのか、テレビにふれる。

その瞬間、スイッチにもふれたので突然画面が付き、杏里は驚いた
様子でテレビから距離を取った。

「なにこれ？」

じーっとテレビに映るニュース番組を見つめたまま杏里は動かなくなつた。

「そういえば……ボクは以前にも、こつゆう未知のモノと出会つような体験をしたことがある気がする」

そんな杏里を見て、ノールは何かを考え始めた。

しかし、その考えの答えに至るまでに大して時間は係らなかつた。

「思い出したよ！　ボクは天使なんだよ！」

「いきなりどうしたの、ノールちゃん。嘘を吐いているっていうのが簡単に分かるよ？」

まだテレビと悪戦苦闘している杏里は少し苦笑いを浮かべる。

「信じないなら別に良いよ……そうだ！　ミールも連れて行こう！」

その後、ノールはミールを部屋に連れてきた。

部屋に着いた時、ミールにも同じようなことをノールは話したのだが、ミールも杏里と似た反応をした。

「あつそ、気分が悪いけど天使界に連れて行ってあげるよ」

信じてもらえず気分が悪くなつたが、ノールは呪文を詠唱する。

詠唱終了と同時に殆ど一瞬で天使界にノールたちは現れる。

見渡す限り地平線の向こうまで地面の代わりに雲海が続き、神秘的な大きな宮殿も見えた。

「なに、これ……！」

杏里、ミールは現実と掛け離れた風景を目の当たりにし、息を飲む。

「ほら、見て。あの宮殿にアクローマって人がいるから今から会いに行くよ」

「うん……」

周囲を見渡しながら、杏里とミールはノールに付いて行く。

ノールたちが宮殿の出入口付近まで行くと偶然、レイディアントに出会った。

「ノールか、久しぶりだな。ところで後ろにいる二人は誰だ？」

「ミール、杏里くん。この人はレイディアントって言うんだよ。悪い人だよ」

「何で？ まあ、ここに来たのならアクローマにも会いに行け」

何やら忙しかったのかレイディアントは空へと舞い上がり、どこかに行ってしまった。

「凄い……空を飛んでるよ」

「ふふっ、何か忘れていないかい、二人とも？」

「えっ？」

「ほらほら、ボクの背中にも羽があるんだよ」

ノールはわざとらしく背中に現れた羽を見せびらかす。

「姉さん、本当に天使だったんだ」

「まあね。じゃ、優越感を実感出来たし、そろそろアクローマに会いに行こうか」

ひとまず三人はアクローマに会うため、謁見の間に向かう。

しかし、謁見の間の扉は閉じられていた。

さっさと帰りたかったノールは扉を蹴やぶって開け、室内へと強引に入る。

それに続いて二人も謁見の間に入ると、玉座に誰かが座っているのが見えた。

「あの人が、アクローマっていうんだよ」

先に謁見の間に入っていたノールが言う。

「今は側近の人がいないから近付いてみようか」

ゆっくりとノールたちは玉座に座るアクローマへと近付く。

しかし、アクローマはノールたちが近付いたからといって微動だに
しなかった。

結局のところ、アクローマは寝ていた。

「姉さん、この人がアクローマっていうの？」

「そうだよ、でも折角会いに来てやったのに寝てるね。ホント使え
ね」

「ちよつと〜！ 聞こえてるわよ！」

笑いながらノールが説明していると、アクローマが突然立ち上がり
怒鳴る。

寝ていたはずのアクローマが突然立ち上がったことに三人は驚いた。

「私の一体どこが使えないって言うのよ！ 全く私のどこ捕まえて
そんなこと言っているのかしらね！ それとも優秀過ぎる私への嫉
妬なのかしら、ノールちゃん！」

「……………はあ？」

凄い剣幕でアクローマは怒っていたが、まるで無関心という感じで
ノールはアクローマの話を全然聞いていない。

「あの、姉さんのことあまり怒らないでください」

「ん……？ 気付かなかったけど貴方たちって誰？ 教えなさいよ、ノールちゃん」

「はあ、仕方がないね。こっちの男の子はボクの優しく綺麗で繊細な可愛い弟のミールだよ」

「ちょ、ちょっと！ 姉さん、何を言ってるのさ！」

一瞬、呆気にとられたミールだったが姉の不意打ち的な発言に恥ずかしくなった。

「良いじゃん。ボクは、ミールのことを心からそう思ってるんだから。それで……」

チラツと杏里の方にノールは視線を移す。

「こっちの眼鏡を掛けた頼りない女の子みたいなのが杏里ちゃんね」

「ノールちゃん、ボクのどの辺が女の子みたいなの？」

「見た目、顔、声、仕草」

ノールの何気ない速答の返事は杏里の心にダメージを与えた。

「そんな……ボクは気にしてるのに……」

「まつ、取り敢えずこんな感じかな」

ノールは軽く杏里を無視する。

「ふーん、そうなの。ついでだから言うけど、その二人は絶対に天使の先祖返りよ」

「ミールと杏里くんが？」

「そうよ。貴方と同じ血筋のミールくんなら確實。その眼鏡ちゃんは何故だか分からないけど、そっちも天使の先祖返りよ。もし良かったら、今すぐにも天使にさせてあげるけどどうする？」

にこやかな様子でアクローマはミールと杏里たちを見つめる。

勿論、ミールたちは天使になれるのはとても良いことだと思った。

だが、言いようのない不安が襲い、複雑な気持ちでもあった。

「姉さんは……どうやって天使になれたの？」

「えーと、確か目を覚ましたら羽根が背中にあっただね……」

「ちよっ、長いわ」

思い出しながらノールが話している途中で、アクローマはまだ覚悟が決まっていない二人に天使化させる魔法を掛けた。

数分後、二人の背中には天使の羽が出現する。

「僕の背中に羽が……」

「さあ、これで私たちと同じ天使よ。とても嬉しいでしょう？」

「……はい」

明らかに微妙な返事を二人はする。

「二人とも天使になれたね。それじゃ、アクローマにも会えたし、もう用ないから帰ろうか」

ノールの素っ気ない一言に反応したアクローマは、ノールに抱き付く。

「ちょっと、逃がさないわよノールちゃん！ 折角来たんだからもつと天使界にいなさいよ！ 第一、大天使長になれた貴方には職務つていう物が……」

「いやです、すみません」

「なんか、前も同じこと言われたような……ひとまずフラれた気分になったわ」

色々と言いたかったアクローマだったが気分を害してへこんだ。

ノールたちはさっさと天使界から帰り、寮のノールの自室へ戻ってきた。

「姉さん、この羽ってどじやってしまっの？」

天使の白い翼をぱたぱたと少しはためかせながらミールは聞く。

新たに背面へと現れた感覚をどう制御して良いのか分からないようだ。

「それはね、人間化すれば良いんだよ。普段、ボクがしてるじゃん」

「人間化って……ボクは人間じゃなくなってるの？」

さり気なく人間では無くなったことを伝えたノールの言葉に杏里は恐くなった。

「そうだよ、今は二人とも人間のフリをしている天使。それとね…」

静かに目を閉じると何かを考え始める。

ノールが目を閉じていたのは数秒程だった。

そして、決心した様子で目を開いた。

「二人は今まで普通に人間だったから何も感じなかったと思うけど、ボクはこの世に生まれた時から……最初から人間じゃなかったんだよ。誰にもこんなこと言わなかったけど、ボクは水人だってこと凄く気にしてたんだからね」

落ち着かない様子でノールは今まで言えなかったことを二人に問い掛ける。

二人はノールがそんなことを今まで考えていたとは全く考えたことさえなかった。

人間ではない……その感覚にずっと悩んでいた彼女に気付けなかった。

「ノールちゃんが水人だからって特別視するようなこと、ボクはしたことはないよ。確かに前までは救世主さまだったから凄いなあって見てたことがあったけど変な風に見たことはないよ」

「僕だつてそうだよ。水人とか人間とかの区切りで姉さんを見たことはないよ。姉さんは姉さんなんだから」

「そうかな……ありがとう。ボクは人間じゃないから皆から変な風に見られてたりしてるんじゃないかなって思ってたよ。ゴメンね、突然変なこと言つて」

「大丈夫だよ、ノールちゃん。あ、つてことはボクたちが人間じゃなくても別に気にしなくても良いってことだね」

「杏里くんは前向きなんだね。ボク自身、まだあんまり割り切れてないのに……」

「へえ？ 気にしなくても良いんじゃないの？」

その後、ノールはどうやってたら人間化出来るかを水人化した状態から戻る時の要領で二人に教え、天使化した状態の二人は人間に戻れた。

ノールにとつても天使化した状態から人間に戻るのは初めてだったので、上手く戻れて安心した。

「そういえばね、天使界は時間の観念から除外されてるから全然時間が経過しないよ」

「そうなの？」

「うん、そうだよ。天使界に何日もいたとしてもこっちの世界は数秒も経過しないんだよ。それよりさ、ハンター養成所でどんなことするか分かる？」

「さあ？ 分かんない」

杏里もここに来たばかりなので、よく分からなかった。

数時間が経過した頃、指導員が入会したばかりの十人を呼び集めた。指導員はこれからどのようなことをしていくか示してあるシラバスなどを配布する。

そして、今後についてを簡単に説明した後、指導員は立ち去った。

「なあ、こんなこととして強くなると本当に思うか？ オレには全く無意味だと思うんだけどな」

シラバスを見ながら何気なくアーティが言う。

確かにアーティの話した通り内容としてはイマイチ。

第一、アーティたちの命を懸けた実践の日々からすれば、この程度かと思わされるものばかりだからだ。

「一応、他の世界についてをよく知りたいから交流の場として少しはここに滞在する。あと……近代的な世界という例えだったか。この世界の機械とかの使い方も覚えたいからな。あと、他の世界に行く方法もさっさと見つけろよ」

そうアーティが言い、各々自室へと解散した。

「はあ……シラバスの内容ってつまらなそうなスケジュールだし、こんなところにいたら逆に疲れそうだね、杏里くん」

自室へ戻ってきた時、ノールはつまらなそうにため息を吐いた。

「そうだね。でも、これはボクたちが強くなってる証拠だと思うよ。だから頑張ろ！」

「へえー、頑張る？ 君は殊勝だね。ボクはぜんぜんやる気がしないよ。そんなことより先にお風呂に入ってくるね。体力たいすいを綺麗にしたいから」

杏里に手をひらひらとさせながら、ノールは部屋に備え付けてある浴室に入っていく。

その際、ノールは着替えやタオルなどを何も持つては行かなかった。

脱衣場で衣服を脱ぎ、浴室に入ったノールはいきなり困ることがあった。

「これって……どうやってお湯を入れるの？」

湯の入っていない浴槽を眺めながら、水道の蛇口を探す。

しかし、そんなものは無かった。

そもそも、この世界エリアースとノールが暮らしていた世界ティストとは文明の発展が違い過ぎる。

彼女が困ってしまうのも当然無理はなかった。

「どうしよう……」

キヨロキヨロと浴室内を見渡していると、あるものがノールの目に入った。

それは何かのパネルのようで、何種類かのボタンが取り付けられている。

何となく、ノールはその一つを押してみた。

するとフタの付いている排水溝からお湯が溢れだしてきた。

ノールが排水溝だと思っていたのはジャグジーの噴射口である。

「お〜！」

お湯が溢れ始めたその排水溝にノールははしゃぎながらふれる。

自動で、しかもボタンを押すだけで勝手にお湯の量を調整してくれ

る仕組みが分かり、嬉しくて長風呂してしまった。

数十分後、浴室からノールは何の躊躇いもなく裸のまま出てきた。

「凄いよ、ここのお風呂！」

「あつ………！」

陶器のように白い素肌が映える華奢なノールの裸体が杏里の目に映る。

生まれたままの姿で浴室から出てきたノールは何も身に付けていないどころか隠す素振りすらも見せない。

彼女の肌が付いた水滴が、より杏里にHな考えを引き立てさせた。

即座にこの子には恥ずかしいという感情は無いのか、自分に裸を見られても構わないのかなどが杏里の頭に浮かんだが杏里に出来ることは一つだった。

見てはいけないという反射から杏里は裸のまま浴室から出てきたノールから目を背けた。

「ん？ どうしたの？」

杏里が即座に自分から目を背けたため不思議に思い、ノールは杏里に近付く。

「ち、違うよ！ ノールちゃんがお風呂から、いきなり出てきたから見ないようにしてるんだよ！」

「いきなりって何が？　ボクは普通だった……けど？　どこがおかしかったのかい？」

杏里の行動を見てもよく分からないのか、ノールは身体に付いている水滴を水蒸気化させ乾かす。

つまり、ノールは恥ずかしいという感情にかなり疎いようだった。

「そんなことよりさ、聞いてよ！　凄いや、ここのお風呂……ジャグジーっていうの？　あれから、お湯が沢山出てきてね」

「ノールちゃん……服着ないの？」

やはり見てはいけないという感覚からなのか、ずっと下を俯いたまま杏里は答える。

「心配してくれるのかい？　でも、大丈夫だよ。ボクら水人は人間と違って体温が元々低いし、人間の肉体とも構造が色々違うから風邪を引くことが出来ないの」

「そうじゃなくて……裸だから」

「ん〜、ミールと同じこというんだね。家にいた時もミールがよくボクに言ってたよ。でもね、ブラを付けると胸が苦しいんだよ。ボクの苦しさは骨格しか女性になれなかった君じゃ分からないけどね。ボクの勝手なんだから君は別に気にしなくていいよ」

「でも、気になるよ。裸なんだもん……」

「ところでさ、何でボクのこと見ないの？ ボクが折角ジャグジーのこと話してるのに全然興味ないみたいな感じだし」

「裸だから見ないようにしてるのに見ていいの？」

「またそれ？ 二度も言わせないでよ。普通話す時って相手の顔を見るものでしょ？ わざとボクの顔を見ないって感じで不愉快なんだけど。普段だったらボクと話す時、しっかり見てるじゃん」

「じゃ……じゃあ、見るよ。ノールちゃん」

極度に緊張した様子で杏里は顔を上げ、ノールの声が見る方を見る。

その時、ようやく杏里は自分の隣にノールが座っていることに気付く。

「一体どうしたの？」

ようやく、自らの顔を見上げた杏里にノールは笑顔で声を掛ける。

「あ……あの、ノールちゃん。何でまだ服着てないの？」

「何で、ってさっき言ったじゃん。別に気にしなくて良いって」

「い、いじめんなさい……」

「っていつかさ、さっきからボクの身体ばかり直視……してる気がするんだけど？」

「へえ？」

慌てたように杏里は視線をノールの身体から逸らす。

「なんか嫌な目付きだったよ、杏里くん。ミールの時となんか違う。気持ち悪いし、やっぱり服着よつと」

微妙な不快感をノールは抱き、さっさと着替えを済ませる。

そして、ノールは着替えを済ませると同時に杏里に声を掛けた。

「一応、寝る前に決めるけどさ、上と下どっちが良い？」

「上と下どっち？」

「この、二段ベットだよ。二段ベットの上と下でどっちで寝たいって聞いてんの」

「ボクは上が良い！」

「良いよ、君はボクより年下だからそういつと思ってたよ。んじゃ、ボクは寝るね」

寝る場所も決まり、特に杏里と話すことも無くなったので、ノールはさっさと就寝した。

その頃、ミールとジャスティンはあることを話していた。

「いい、ミール？ この薄い物が、ノートパソコンっていうの。分かった？ それと、こっちはテレビね。使い方とかは後で説明するから、まずは名前と形を覚えてね……って言うか君の世界には本当に無かったの？ 家電製品とかって」

現在、ジャスティンはミールに家電製品の説明をしている。

だが、何に対しても分からない様子のミールに教えていくのが段々と面倒になっていた。

「うん。無いよ、全然。だから、分からないの。どうゆう物かって」

とても興味がある様子でミールは電源の入っていないパソコンのキーボードをカチャカチャと触る。

どうやって扱うものなのかを知ろうとしているようだった。

「ふうん……住む世界が違つと文明も凄く違つんだね」

それを見て妙に納得出来たのか、ジャスティンは頷く。

「もう夜になつちやつたみたいだね。僕は説明してて疲れちゃつたからお風呂に入つて、もう寝たいよ」

ふと、暗くなつた窓の外を眺めたジャスティンが呟く。

「そういえば、ジャスティンくん。ここには大浴場もあるみたいだから、今日は一緒にそっちに入つてこない？」

「ええっ！ 今、何を言ってるの、ミール！ 僕のこと兄さんから聞いたでしょ！」

「ど……どうしたの？」

「何が、どうしたの？なんだよ！ 見え透いたようにとぼけちゃって……」

何かを怒りながら言おうとしていたジャスティンだったが止めた。

微妙に白い目付きで、ジャスティンはミールを見つめる。

「もういいよ、ミールなんて知らないし」

そう言い残して、ジャスティンは部屋を出ていく。

「どうしたんだろ、ジャスティン君。僕、怒らすようなことを言ったのかな……」

翌日、ハンター養成所での指導を初日からサボったアーティは他の世界に行く方法を独自の調査していた。

はつきりいって、アーティは簡単な指導しかないハンター養成所に居たくは無かった。

そんな中で、アーティが養成所の図書館で魔法に関する書籍を調べ

ていると偶然に他の世界に行く魔法“空間転移”の記述を発見する。

「あー、これじゃん。さて、この魔法は覚えるのが簡単そうだし、楽に会得出来そうだな」

ペラペラと書籍を捲りながらそう思ったアーティは図書館にメンバーの九人を呼び寄せる。

「オレはもう扱えるようになったから皆も早く覚えてくれよ」

その書物をコピーしたものをアーティはメンバー全員に配布する。

どうやって使い方を覚えたのかは知らないが、既にアーティは大抵の機械なら使いこなせる様子。

その後、各々の部屋に戻るメンバーたち。

「どうしよう……これ覚えちゃったら、すぐに出発しちゃうよね。折角、ノールちゃんと二人きりになれたのに……」

自室へと戻る途中、杏里はそのことだけを考えていた。

「杏里くん、どっちが早く魔法を覚えられるか競争ね！ ふふつ、確実に有能なボクが先に決まってるんだけどね」

さりげなく、杏里より優位に立とうとしたかったノールが笑顔で本音を言う。

二人は自室に到着し、自室へと入った。

「うん……そうだね」

「どうしたの？　なんだか元気がないよ？」

杏里のテンションが低いことに気づき、不思議そうに訊ねる。

「ううん、なんでもないの。ノールちゃんと同じ部屋に二人きりになれたのに残念だなあ……って思って」

「ボクと二人になれてかい？」

「うん。だって、傍にいただけでボク楽しいんだもん。ノールちゃんのことがボクはずっと前から好きだったんだよ」

「そりゃあ、ボクも好きだよ。勿論、皆も好きだよ。アーティは除くけどね」

「違うの、そうじゃないの！」

「ん？」

何言ってるの？という風な顔でノールは見つめる。

そのノールの反応に言うべきか迷ったが杏里は決心をした。

「ノールちゃん、ボクと付き合って」

とても恥ずかしいとしか杏里は思えなかった。

もっと他に言いたいことがあったのだが、言おうとした瞬間に忘れ

てしまったのだ。

杏里は心から祈った。

今みたいに情けない様子で告白した自分と付き合い合ってくれなことを。

「あつ、うん。別にいいよ」

ノールは特にリアクションを取る訳でもなく、かなりそっけなくOKを出した。

そして答えた後、杏里に親しげに近づく訳でもなく、それから声を掛ける訳でもなく、部屋にある雑誌を手に取ると椅子に座る。

そのあまりにそっけなさ過ぎる態度に杏里は少し不安になった。

「本当にいいの？　ボクと付き合い合っても？」

「いいけど？　あと、ボクは付き合い合っつてことをしたことがないから杏里くんが教えてね」

その日から杏里はノールに大抵くっついて生活するようになった。

翌日、図書館で魔法の勉強を杏里がノールにとても寄り添うような形でしていると二人の男性が近寄ってきた。

「おい、お前等！　なんて不謹慎なことをしているんだ！」

近寄ってきた二人組の内の一人が怒鳴る。

その男性たちはノールたちを引き離してから言葉を続ける。

「お前等、男同士だろ！　ムダにくつつき過ぎなんだよ！　バカか！」

その言葉を聞いてノールは周りに指導員がないことを確認してから答えた。

「はあ、うぜつ。言っとっけどね、ボクは見た目で分かる通り、女なんだよ！　第一、こんなに綺麗で可愛い美少年がいるはずないでしょ！」

自身を指差し、さも当然のように綺麗だとかを話した時、ノールはあることに気付く。

「あつ、ボクの隣にいるじゃん」

そう思いながら杏里の方を見る。

その時、ノールがいきなり怒鳴ったためノールを見ていた杏里と目が合う。

目が合った瞬間、何か負けたような気がしてノールは無性に腹が立った。

「それなら二人とも女なのか？　逆にそれも問題ありだろ。そーゆ

うのをアブノーマルって言うんだぜ。まっ、女ならさっさとここから出てってもらうからな」

「絶対にイヤだね。それにね、杏里くんは男……ってまあ、それはどうでも良いか。そんな関係ないことより、アンタらにそんな権限がある訳がないじゃん」

「それがあるんだな、君たちには残念だけど。オレはこの養成所で一番強いんだ。こっちはここで二番目に強いぜ。つまり強さによって発言権があるってことだよ」

男性は隣の男性と自身を自慢するよつに言う。

「あつそう、じゃあアンタらを倒して一番になれば辞めなくて良いんだね。さいつこうに簡単だし」

静かにノールは深呼吸をする。

「確かにそうだけど止めといたほうが良いぜ。君のそんな細い身体で何が出来るん……」

そこまで男性が話した時、既に彼の身体は宙に浮いていた。

男性はノールにアッパーカットを物凄い勢いで打たれたからだった。

一瞬で意識が彼の内側から飛びさり、宙に浮いたまま気を失った男性の身体目がけ、すかさずノールは後ろ回し蹴りをくらわせる。

強力な一撃によりノールから五メートル程離れた本棚まで男性は蹴り飛ばされた。

その間わずかに三秒、まさに瞬殺だった。

「アンタも戦う？」

ノールは仲間が瞬殺されたため焦っているもう一人の男性に笑顔で聞く。

「いや……完全にオレ達の負けだ」

失神している仲間を背負い、男性は逃げ出す。

「これで邪魔なのがなくなったね。それじゃ勉強の続きをしようか」

「だいじよぶかな……あの入って。凄い可哀相なことになってたけど」

「良いんだよ、別に。あんな弱いくせにでしゃばっているバカには一発御見舞いした方が良いの」

軽いストレス発散が出来たノールは楽しげに話すと、杏里は不思議そうな顔で訊ねる。

「確か、パンチとキックで二発だったけど？」

アーティたちがハンター養成所に来てから一週間が経過した時、メンバー全員が“空間転移”をようやく覚えることが出来た。

そのため、再びメンバー全員が図書館に集まった。

「じゃあ、もうこんなところには用ないな。それとさ、オレは同じ部屋だったから知ったんだけどジーニアスが…」

アーティがジーニアスの方を見ながら何かを言い掛ける。

「ストップ！ アーティさんそれ以上話さないで！」

「あれって、かなりウケるよな。ところで、何であんなの着てたんだ？ 最初、誰だか分からなかったけど」

「そ、それは……その……」

瞬時にジーニアスは赤面し、それ以上は何も話そうとしなかった。

「ふーん、これがジーニアスの弱みみたいだね。ジーニアス〜あとで、お金貸してくれない？」

「何だか知らないけどジーニアスが可哀相だ。ていうか年下にたかるなよ」

テリーが大人気ないことを堂々と言っているアーティを止めた。

「ところで、これから何処に行くんだ？ 空間転移を覚えたことだし、もうここを離れるんだろ？」

「もちろん離れるよ。で、行き先はコロシウムに決まってるじゃん。ここの入会金払って完全に金欠状態だから金稼ぎしないといけないよ」

テリーの一言にアーティは速答する。

「じゃあ、そういう訳でコロシウムに行くよ」

アーティが空間転移を詠唱しようとした時、ヴェイグとジャスティンが図書館に走って入ってきた。

「待ってくれ！」

「えっ、どうしたの？」

ノールが訊ねた。

「他の世界に行くんだろ？ だったら、オレたちも一緒に連れていってくれ！」

「別に良いけど、ハンターにはならなくて良いのか？」

一応、アーティが念のため聞く。

「ああ、勿論。ここにいるより、お前等についていった方が強くないぞうだしな」

そのため、ヴェイグとジャスティンは仲間になった。

コロシウムへ

エリアースで空間転移を詠唱したことにより次の世界、つまりコロシウムのある世界へとメンバーたちは移動した。

何となくコロシウムのある世界へと移動したかったメンバーたちはこの世界の名前もどいう世界なのかも知らない。

ただ、メンバーたちは巨大な円形状をした石造りの建物の前に現われた。

「これがコロシウムの建物なの？」

驚いた表情で、ルウは兄であるライルに聞く。

「……………」

「兄さん、ここがコロシウムなの？」

聞こえなかったのかと思い、ルウはもう一度聞く。

突然現れた建物にライルも驚いていたのだが…

「オレに話し掛けないでくれないか」

いつものようにライルはルウに冷めた対応を取る。

「どうしてなの？ 僕たちは兄弟でしょ？ 兄さんは、どうして僕のことを無視するの？ 昔みたいに接してよ…」

ライルの対応に、ルウは悲しげな表情を浮かべる。

「……………」

一瞬、言葉に詰まったライルだったがルウから視線を逸らし、無言のまま建物の入り口へ歩いていった。

「おい、ライル。勝手に先行くなよ」

ライルがコロシアムの入り口の方に歩いていったため、建物を眺めていたアーティたちもそれに続いた。

建物内に入ってみると参加者であろう人物が多数いた。

ここはやはりコロシアムのようで、その造りは石や岩を四角形などの形に切り取って積み重ねられた円形格闘場である。

「さあ、さつさと参加するから受け付けに行くよ」

アーティが先陣を切り、コロシアム入り口正面にある受け付けの方へと歩いていく。

「あの、試合に参加したいんだけど？」

「はい。では、こちらの用紙に御自身の御氏名、御種族、レベルを御記入下さい」

受け付けの女性係員は愛想良くアーティに用紙を渡す。

「ふーん……ところで優勝賞金と違って勿論あるんだろ？」

すらすらっと用紙に自身のプロフィールをデタラメにアーティは書き込む。

「勿論御座います。それはなんと……賞金1000万です！」

「1000万だって!？」

久しぶりの大金の響きに、わなわなと震える。

無一文に近い悲しい金欠状態だったが、ハンター養成所へと支払った分を簡単に取り戻せ、それ以上にお釣のくる破格さにアーティは熱く燃えた。

「と、ところで、これはどういう風に戦うの？ トーナメント形式？」

落ち着きがなく、上擦った声でやけにニヤニヤしながらアーティは訊ねる。

「はい、今回は参加者72名限定の試合がまず行なわれます。参加者はA～Hの8ブロックで9名ずつに分けられ、最後まで残ったブロック勝利者のみが決めた本戦トーナメント戦へと参加が可能です。そして、本戦トーナメント優勝者に1000万が授与されます」

「成る程。本戦では仲間同士が戦いそうだね。まっ、それはそれで面白そうだ」

その後、メンバー全員が用紙に自身の名前、種族、レベルを書き込

んだ。

「それじゃ、参加するブロックに解散するよ」

アーティの号令で参加するブロックの選手控え室に分かれることになった。

「杏里くんってさ、何ブロック？」

気になったノールは、杏里に聞く。

「ボクはBだよ。ノールちゃんは？」

「残念だね……ボクはHブロック。砕いたりするまでには時間が掛かっちゃうね」

「えっ、何を……？」

満面の笑みを浮かべるノールがどんなことを考えているかが分かったから、杏里はそれ以上聞けなかった。

彼女が言っている砕く相手とは確実に自分だからだ。

「もし、杏里くんがわざわざバカみたいに最後まで残ってきたら……フッフ」

「う、うん……」

少し血の気が引いた顔で苦笑いしながら杏里は逃げ出した。

その頃、Aブロックでは既に九人が一斉に戦い始めていた。

しかし、ほんの数秒程で決着が付く。

何故ならアーティが最初から竜王化し、他の参加者を八つ裂きにしたからだった。

「竜王化する程の相手ではなかったね。でも、オレだって竜王化することには慣れたいんだ、そう思う。悪く思うなよ」

圧倒的な破壊力で他の参加者を葬り去ったアーティはそう語る。

あっという間に一回戦が終了し、直ちにBブロックの戦いが始まることになる。

会場アナウンスにより、Bブロックの参加者が戦闘エリアへと集まった。

戦闘エリアは一平方メートルの白い石板が縦横に二十五枚ずつ並べられた造りになっており、その周囲から数メートル程離れた位置に階段状の観客席が設置されている。

「杏里、オレたちは戦うことになったみたいだ。仲間だからといって手加減は無しだからな」

同じBブロックに参加するリュウが戦う前に言う。

杏里とはリュウ、ジーニアス、他の参加者六名が戦うことになっていた。

「そうだね……でも、ボクはリュウさんを傷付けたくないよ。ボク、やっぱり参加しなければ良かったかな……」

「杏里、トンファーを握ってから同じことを言えるのか？」

「へえ？」

腰に付けたサイドパックに目を落とす。

徐に杏里はサイドパックからトンファーを取り出した。

「前言撤回します。ボクがリュウさんを倒す。ボクが貴方に負けるだなんて、まず有り得ない」

「まっ、それくらいのやる気が無いとこっちとしてもつまらないからな」

一瞬で性格の変わった杏里にリュウは俄然やる気を出している。

「それでは、第二回戦を開始します！」

コロシアムの係員が叫ぶ。

合図とともに戦いが開始され、参加者九名は各々が狙いを定めた者と戦い始める。

戦いの最中、杏里は真っ先にリュウやジーニアスを狙わなかった。

淡々と他の参加者を潰した後で戦いたかったからだ。

杏里が気付くと、リュウとジーニアス以外に立っている者は既にいなくなっていた。

「おかしくないか？ 誰か一人くらい残しておいたらどうなんだ？」

戦闘開始から一步もその場をリュウは動いていない。

「一人くらい？ バカだね、リュウさん。ボクとジーニアス君がまだいるじゃない」

「そうか？」

ジーニアスへとリュウは視線を送る。

しかし、ジーニアスは床にしゃがみ込み、戦おうとしなかった。

杏里もリュウも明らかに近接戦闘タイプ。

しかも、この狭いフィールドでは魔法を扱って戦うジーニアスが完全に不利。

それが分かったのかジーニアスは床にしゃがみ込み、いじけている。

「ジーニアスは戦意がなさそうか。じゃあ、杏里。お前を倒せば終わりみたいだ」

言い終わると、リュウは杏里に向かって走り出す。

トンファーを構え、迎撃姿勢に移った杏里はリュウを待ち構えた。その瞬間、リュウはスライディングをし、杏里の背後へと回った。待ち構えていた杏里だったが、リュウの予想外の動きに対応出来ない。

「くらえ！」

リュウの叫びと共に強烈なボディーブローを杏里の背後から放つ。

威力は杏里の肋骨を軽く砕く程の想像を絶するもの。

衝撃で杏里は吐血をしたが倒れず踏み止まっていた。

「女性を……殴った気がする」

杏里の女性のように華奢な身体に拳をめり込ませた状態のまま、リュウは妙な罪悪感を感じた。

その隙に振り返った杏里がリュウの顎にトンファーをクリーンヒットさせる。

絶妙な角度で顎に命中したせいか、軽い脳震盪を起こし、リュウはその場に倒れる。

「痛かったよ、リュウさん。骨が折れたみたいだから、つい本気になっちゃった」

そう話し、杏里は周囲を見る。

相変わらずジーニアスは戦意が無いようで杏里の勝利でBブロックが終了した。

アーティ、杏里の勝利は他のブロックの参加者たちに多大な影響を与えた。

「絶対あんな奴には勝てない」

「今回は諦めよう」

そのようなことを口にし戦う前から戦意を喪失。

戦うことを辞退する参加者たちが続出したのだ。

「これじゃさ、みくんな不戦勝になっちゃうじゃん」

不満そうにテリーはアーティに言う。

「いや、ごめんね。参加者がこれ程辞退するとは思ってなかったからさ。でもさ、これで確実に賞金はオレたちの物だよ。だってもう面子はオレたちしかいないし」

コロシムだというのに参加者が大量に辞退し、戦う必要が無くなったテリーは暇そうにしている。

それに対して、アーティは金が確実に手に入ると分かったので、さつき以上にニヤニヤしていた。

「あとは、もう適当でいいよ。それどころか不戦勝でも構わね」
結果的に参加者が続々と辞めてしまったため、簡単に本戦トーナメントのメンバー表が決まった。

第一回戦 Aブロック勝者のアーティ対Bブロック勝者の杏里。

第二回戦 Cブロック勝者のテリー対Dブロック勝者のジャスティン。

第三回戦 Eブロック勝者のライル対Fブロック勝者のルウ。

第四回戦 Gブロック勝者の綾香対Hブロック勝者のノールと対戦表に掲示されていた。

「戦う相手がやっと決まったね。でも、ミールは戦わなくて良かったの？」

ノールは同じHブロックに参加していたミールに訊ねる。

「良いの。僕はもう姉さんのことを傷付けたくない」

「ん……？」

「姉さん、僕の言っている意味が分かってないでしょ？」

「うん、分かった？」

ノールの一言にミールは溜息を吐いた。

その頃、ライルとルウは選手控え室で会話をしていた。

「兄さん、僕は絶対に勝つよ。僕が勝つたらこれからは以前みたいに僕と普通に話してもらおうからね」

ルウは強い口調だった。

「……………」

ライルはルウの顔から目を逸らし、無言で選手控え室を出る。

「オレはルウと実際はどう接すれば良いのだろうか？ もう、オレはルウに本当のことを話した方が良いのだろうか？」

控え室から出たライルは何かに苦悩している。

「では、トーナメント戦の第一回戦を開始します！」

ライルが選手控え室前の通路にもアナウンスが流れた。

アーティと杏里の戦いが気になったライルは悩むことを止め、そのまま観客席の方へと歩いていった。

ライルが観客席に着くとアーティと杏里は既に戦い始めていた。

戦い方は二人供、一撃必殺狙いで互いに相手の頭部、首、急所、四肢しか殆ど狙っていない。

仲間同士であるのに躊躇うことの無い高度な戦いを繰り広げる様子を目の当たりにしたライルは自身と二人の能力差を感じた。

しかし、ライルが受けた印象とは裏腹にアーティと杏里はあることを実行しようとしていた。

「杏里、戦うの止めにしない？ もう、オレは面倒なだけで？ どうせ、ウチのメンバーしかいないんだから、この試合の勝敗なんてどうだって良いだろ？」

杏里の攻撃を剣で防ぎつつ、アーティはニヤける。

「それにさ、オレの負けでいいからオレの身体の何処かを攻撃しろ。いいな？」

「でも、アーティさんは全部ボクの攻撃防いでるじゃん？」

「馬鹿、攻撃速度が速すぎだ。そんなの食らったらオレ怪我するじゃん、ムダに。だから、次のは軽く打て。負けたフリをしてやるから」

「それじゃ、軽めに攻撃しますよ……」

勝手な提案をしてきたアーティの腹部を目がけ、杏里はトンファーで軽く殴打する。

その際、アーティはあたかも躲すことが出来なかったという感じのフリをする。

わざとらしく倒れて気絶したフリをし、アーティは動かなくなった。

「勝者、杏里選手〜！」

係員が声高らかに叫ぶ。

その係員の声と共に観客の声援と歓声が杏里の耳には聞こえた。

だが、浮かない顔を杏里はしていた。

戦いが終了し、杏里が控え室に戻ってくると、救護室へ運ばれたはずのアーティが既にいた。

「こんな勝ち方で良かったのかな？」

「全然構わないよ？ 第一、勝ち負けにこだわる程でもないし。それとも、お前がオレにわざとらしく負けたかったのか？」

「そうゆう訳じゃないけど……」

「じゃあ、構わくない？」

本戦トーナメント第二回戦に突入したがテリー、ジャスティンともに辞退したため杏里が自動的に決勝戦に。

そのため、第三回戦が開始されることになった。

その頃、控え室ではライルとルウがまた会話をしていた。

「ルウ、やっぱりオレと戦うのか？」

何となく気まずい雰囲気が出るなか、ライルの方からルウに話し掛ける。

「勿論。絶対負けないよ」

「それはムリだ。ルウだって水人と炎人の関係を知っているだろう？ 炎人は水人には種族上、勝つことが出来ないことを」

「知ってるよ。だから兄さんは僕に冷たくするんだろ！ 僕だって兄さんと同じ水人として生まれてきたかったよ！ 僕が炎人だから、ずっと兄さんは僕を無視してるんでしょ？」

話しているうちに泣きそうになったルウは顔を隠す。

「……………すまん」

その時、第三回戦を知らせるアナウンスが室内に流れる。

やはり重い空気のなか、二人は控え室から闘技場の戦闘エリアに移動する。

「第三回戦を開始してください！」

係員が叫ぶと共に試合が開始された。

その声と共にライルは氷のナイフを空中に十数本程出現させる。

腕をルウに向かって振ると、出現したナイフはルウを貫こうと宙を進む。

「落ち着け……炎人の僕だって、上手く戦えば兄さんに勝てるんだ」
自らに言い聞かせながら、ルウは魔法を詠唱する。

「ファイアウォール！」

ルウの周囲に炎の壁が出現し、氷のナイフを全て溶かし消滅させた。

「よし、次は反撃するだけだ。でも兄さんを傷付けたくないな……」
何となく、そう考えていたルウは再び魔法を詠唱し始める。

ふいに何か背中に違和感をルウは感じた。

しかし、それは一瞬の内に痛みへと変わった。

「氷のナイフを飛ばせば、お前がファイアウォールを使うのは既に読んでいた。ファイアウォールは全面に火のカーテンを張り巡らせる魔法だ」

ライルの声と共にルウの着衣腹部の辺りが赤く染まる。

ライルは弟であるルウを剣で刺し貫いていた。

「氷のナイフをお前の頭部に向かって投げたのも、お前のファイア

ウォール自身で視界を隠させるためだ」

そう言いつつ、ライルはルウから剣を引き抜く。

ルウはガクツと体勢を崩すと床に膝を付き、正座のような体勢になった。

「今までだって一緒に強くなってきたんだ。お前の行動くらい分かる。それにお前の考えていることだって……オレだって本当は話したかったさ」

ライルはルウに呟く。

この時、ルウは不思議な気持ちだった。

実の兄に剣で腹部を刺し貫かれ、既に戦意を失っていたはずだったが再び戦おうとする意志が生まれた。

それは、兄と自らの気持ちが一緒だったのではないかと思えたからだった。

「兄さんだって僕と同じ思いだったんだ。僕が勝てば絶対に約束を守ってくれるはず……」

正座のような姿勢からルウは自身の正面に駆け出す。

腹部の痛みから立ち上がる事は出来なかったため、タックルのような体勢から一回転するとライルと向き直った。

「勝つのは僕だよ……フラッシュオーバー！」

魔法の効果で、ライルの周囲どころか自身ごとを巻き込む大気が一瞬で凝縮する。

凝縮された大気は酷い大爆発を起こした。

凄まじい爆風でルウもライルも弾き飛ばされ、両者共立ち上がることはなかった。

闘技場の爆煙が収まった頃、数人の係員がライルたちの救助に向かう。

ライル、ルウの怪我は酷く両者共に意識が無かったため、二人は医療室に運ばれていった。

その結果、戦いの勝敗が着くことはなかった。

「あれ、もう終わったの？　じゃあ、次はボクの番だね。ボクの相手は確か綾香さんかな？」

控え室に第三回戦終了のアナウンスが流れるとノールは傍にいた杏里に話し掛けた。

「そつだよ、綾香さん。ノールちゃん頑張ってね」

「でもさ、ボクが綾香さんに勝てたら、わざわざバカみたいに勝ち

残った杏里くんを…」

「何か言ったの、ノールちゃん？」

あまり聞き取れなかった杏里は聞き返す。

「ううん、気にしないでいいよ。君の心と身体に恐怖を刻印するだけだから」

ノールは杏里に笑顔で答えると、綾香と戦うために控え室を出ていった。

早速、戦闘エリアに向かうと既に綾香がノールを待ち構えていた。

「では、第四回戦を開始します！」

係員が戦闘の開始を叫ぶ。

そして、綾香は笑顔でショットガンの銃口をノールへと構える。

「ノールちゃん。痛い目に遭って泣いちゃう前に戦うことを止めた方がいいわよ？」

「やだよ、勝つのはボクだから」

両手に水竜刀を作り出し、ノールは綾香に向かって駆け出す。

「不思議なのよね。貴方に銃を撃つことが何故か罪悪感を感じないのよー！」

綾香はショットガンを四発、ノールに向かって放つ。

元々、魔力で弾を作り出しているため弾をリロードすることなくノールの肘と膝に特に命中させた。

ノールの四肢を狙い、戦闘不能に追い込もうとしたようだ。

「残念だけど、ボクって水人化してるから効かないんだよね」

少し半透明の状態になったノールが言う。

「水人化っていうのは身体を水にすること。だから、今のボクは物理攻撃が全然効かなくなるんだよね。ボクの対処法を思い付けないと一方的に攻撃することになっちゃうけど。どうする、綾香さん？」

その言葉を聞いて、綾香は銃を撃っても勝てないと気付く。

「ああ、そう。だったら貴方を痛ぶるしかなさそうね」

綾香は、ある魔法を詠唱する。

「デススパーク！」

綾香の放った魔法の電撃がノールの身体を、一瞬で貫いた。

感電したのか悲痛な悲鳴を上げ、ノールは倒れる。

「水人の弱点は電気よ。私が貴方の弱点を知らない訳ないじゃない。フツッ、貴方にとっては身体の四肢を撃たれるよりも、ずっと痛いはずよ」

「……………」

綾香の問い掛けにノールは微動だにしない。

「えっ？ ウソ？ 死んじゃった……の？ 水人に電気が効くって知ってたけど、こんなに効くなんて知らなかったわよ！」

回復させようとしたのか綾香が倒れているノールに焦った様子で近付いた時、背後から氷柱が数本、背中へと突き刺さった。

「な、なんで…………？」

背中から出血する血を確認した綾香は意識を失った。

「綾香さん…… 水陣結界だよ。綾香さんが、ボクにどうやって攻撃してくるか分からなかったから最初に張っていたの」

そう話しながら、ノールは立ち上がる。

綾香に勝利することが出来たのだが、ノールは水人なのでデススパークにより、深刻なダメージを受けていた。

そのため、廊下の壁を伝いながら、ふらふらと控え室に戻ってきた。

「あつ、ノールちゃん大丈夫！」

杏里は控え室に入ってきたノールを支える。

「まさか…… 綾香さんが本気で雷系の魔法を使ってくるなんて思わ

なかったよ」

「大丈夫？ 次は戦わない方がいいんじゃないの？」

杏里は支えながらノールを椅子に座らせた。

「ダメだよ！ 決勝戦で辞退なんてしたら、綾香さんにあそこまでして勝った意味がないじゃん！ それに……ボクが勝つかもしいんじゃないじゃん」

「ノールちゃん……」

それから、ノールに対して辞退を勧めることを杏里は言わなかった。

だが、ノール自身、戦う前から勝つのは杏里だと最初から分かっていた。

「それでは、決勝戦を開始します！ 決勝戦進出者は戦闘エリアへと入場してください！」

係員のアナウンスが控え室に流れた。

「行こうか、ノールちゃん」

「……うん」

二人は闘技場の方へと向かう。

戦闘エリアへ来ると決勝戦ということもあり、観客たちの大きな声援が辺りを覆っていた。

ノールと杏里は係員の誘導の下、戦闘エリアの中心に向かい合おうに立つと係員が声を発した。

「戦闘を開始して下さい！」

号令の下、決勝戦が開始された。

「一発でもダメージを受けたら負けそうだね…」

杏里と距離を取りつつ、ノールをそのことを考えていた。

先程の戦いのダメージが、ノールには残っているため普段より警戒の姿勢を取っていた。

「行くよ、ノールちゃん！」

トンファーを持っているせいか、性格が変わってしまった杏里は氣遣っていたはずのノールを一撃で仕留めようと迫る。

それと略同時に両手に水竜刀を作り出そうとしたノールだったが、身体が帯電したせいか水竜刀を発現出来なかった。

その隙を見透かしたように杏里のトンファーがノールの頭部に直撃。

完全に致命傷のダメージを与えるよう狙い撃ちしたもので、ノールを死へと誘う。

一撃の下に卒倒したノールは動かなくなった。

「ここは……どこだったけ？」

朧げな意識の中、ノールは目を覚ます。

白いベット、点滴などが彼女の目に映った。

隣には杏里が心配そうな感じで椅子に座っている。

「ノールちゃん！」

杏里は意識を取り戻したノールに抱き付く。

「ゴメンね、ゴメンね……ノールちゃんに怪我をさせたくなかったの……」

ノールに抱き付いたまま、杏里は泣きながら謝っていた。

「ちょっと……離してよ、杏里くん。重いんだから」

殺意さえも感じさせる攻撃からして怪我をさせる気は間違いなくあったなと思いつつ、ノールは杏里を退かして身体を起こした。

「ボクは気にしてないよ。賞金も手に入ることだし」

「本当？　ありがとう！」

杏里にもようやく笑顔が戻る。

「バカ、人のこと殴つといて笑ってんじゃないよ。ところで、皆は？」

「や、やっぱり、ノールちゃん怒ってる?」

「さっさと見えよ?」

「ボクと……ノールちゃんだけにした方が雰囲気が良いだろうから
コロシウム内を散策するってアーティさんが言ってたよ」

「何でそんなことしたの?」

「うん、分かんない」

二人は医療室を出て、アーティたちを探しに向かった。

「早いな、もう終わったのか?」

コロシウムの観客席へ向かうと暇そうに座っていたアーティたちが
ノールたちに声を掛けてきた。

しかし、メンバーの数がアーティ、テリー、ヴェイグ、ミールしか
いなかった。

「何、終わったって?」

「あつ、なんだ。違ったのか。てっきり、そうゆう関係だと思って
いたよ」

「えっ？ 何が？」

「だから言つたる。姉さんと杏里くんはそんな関係じゃないって」

ノールの問い掛けと同時にミールがアーティに言う。

「ああ、そうだったね。それよりさ、ノールはこのコロシウムが始まった理由は知っているか？」

「ううん、知らない」

「やっぱり、そうだよな。さっきまでお前等は救護室にいたからな。実は、このコロシウムの優勝者はこの世界を実質上支配している魔王ルミナスを倒さなくてはいけないらしいんだ。この世界の人間は魔族に支配されるのが嫌らしいから、こうやって強い奴を見つけるため莫大な資金をコロシウムの賞金にしてたつてわけ」

「じゃあさ、こんなに堂々とコロシウムなんて開いてたら危なくない？」

アーティの話を聞いていたノールは不思議に思った事をアーティに問い掛ける。

「そう思つたる？ だけど、それは違うんだ。今までに数回もこんな風にコロシウムを行ってきたらしいけど、ルミナス側から襲ってきたことは一度として無いらしい。そうやってルミナスは自らの城にやってきた優勝者と戦う。つまり早い話、ルミナスはこのコロシウムでのことを単なる暇つぶし程度にしか思つてないらしい」

「ルミナスに勝てなかったら優勝しても単なる罰ゲームになっちゃうね」

「ああ、そうだね。でも、勝つのは当然オレたちだ。って訳でお前等二人が救護室から出てきたら、ルミナスの城に向かおうとしたんだよ」

「でも……」

「分かっている。メンバーの数が少ないことだろ？ ライル、ルウ、綾香さんは怪我が治ってないし、まだ意識もない。ジーニウス、リユウ、ジャスティンがあいつらに回復魔法を掛けてるから、一緒には行けないってことだ。で、オレたち六人で戦いに行くことにしたんだ」

「別に少数精鋭でボクは良いと思うよ？」

「それもそうだな、行こうか」

そのため、このコロシウムから数千キロ近く離れたルミナスの城へ以前覚えた空間転移を詠唱し、一瞬でルミナスの城の前に着いた。

ルミナスの城は白を基調とした優雅さが映える造りで、魔王という言葉や雰囲気をおぼやける物とは異なっていた。

「魔王っていうくらいだから相手に恐怖や威圧感を感じさせるような嫌な造りがされているんだと僕は思ってたよ」

考えていた風景と違っていたため、ミールは少し驚いた様子で姉のノールに言う。

「うん、そうだね。でも、魔王だから強いんだよね……あれ、ミール、髪伸びたんじゃない？あとで切ってあげるね」

「それじゃ、城内に入るぞ。何かあるか分からないからその辺気を付けるよ。特に、ノール。まっ、何かあったらお前を守るけどな」

一応、アーティが注意を促してから全員城内へと入る。

城内はとても広く高級な造りになっており、絵画、甲冑、様々なアンティークなどが均等に飾られ、入り口の段階からとても豪華のものであった。

「うわぁ……ルミナスさんてお金持ちなんだね」

スロートの城とは別格な程に豪華な造りが、素で杏里を驚かせた。

「どうせこの世界の連中から巻き上げた物だろ？」

明らかに金持ちそうなルミナスにテリーは嫉妬している。

ひとまず、六人が城のエントランスでうろつろしている……

「さっきから気になっているのだけど、君たちここで何をしているの？」

エントランス正面にある二階へと続く階段から誰かがゆっくりと降りてきた。

ふと、メンバー全員がその方向を見るとそこには黒いドレスを纏う

人物がいた。

それはとても魔王と称されるような禍々しさなど全く感じさせない綺麗な顔立ち、容姿をした人物だった。

「えっ？ 女か？」

「自分自身、一番認めたくないことだけど残念ながら男性だよ。この見た目上では何を言っても仕方ないことだからニューハーフだと解釈して」

「へえー、それでお前がルミナスか？」

「そうだけど、私になにか用なの？ あっ、もしかして戦いにきたとか？ もし、そうだとしたなら君たち程度じゃ話にならないよ。レベル差の関係だね。うーん……そうだね。ハンデとして全員でかかってきたらどうか？」

明らかに見下した眼をしたまま、ルミナスは階段を降りた。

「あっそ、全員でかかってこいって言ったのはお前だからな。死んでも後悔するなよ！」

アーティが剣を構え、ルミナスに突撃すると残りの五人も一斉にかかる。

一斉攻撃を仕掛けてきたからといってまるでルミナスは動じず、両手に魔法剣を出現させた。

そして、ルミナスは最初にかかってきたアーティの剣による一撃を

軽く往なし、魔法剣で斬り付けた。

アーティ自身の攻撃も強力なもので、剣と剣同士がぶつかり合った際に豪快な金属音を響かせていた。

しかし、その強力な一撃もルミナスにとっては軽く片手で往なす程度。

明らかな実力差があった。

「この人強い……接近戦は危険だよ！」

アーティが簡単に斬られたのを見て、ノールは魔法を詠唱し始める。

その間に二人がかりでルミナスを攻めたテリーとヴェイグも一撃で倒されてしまう。

「もう、残り三人？ これなら君たちの命もあと三十秒つてところかな」

そう言うと、ルミナスは魔法を詠唱しているノールの下へと走る。

「プラネツ……」

プラネットを発動しようとした時、ルミナスがノールの間合いに侵入し、ノールの喉を魔法剣で貫いた。

「あと少しで魔法が使えたのに残念だったね」

ノールの喉から剣を引き抜くと、ルミナスは地面に向かって剣を振

り、付着した肉片や血を払う。

ノールの首からは血が噴水のように溢れ、ノールは反射的に手で首を押さえたが無駄だった。

意識を失いかけ体勢を保てなくなり、ガクツと膝を地面に付くとそのままノールは倒れた。

「可哀相だけど弱者は殺されることを前提に存在理由があることは生物の摂理上決まっていることなんだよね」

「姉さん！」

ノールのように魔法を詠唱していたミールは、とっさに詠唱を破棄し、別の魔法を詠唱する。

「ふーん、あの娘が君のお姉さんなのかな？」

そのミールを何の躊躇もなく、ルミナスは斬り倒す。

「私は貴方が弟だからといって、姉のあの娘のように手加減はしないよ。貴方を戦士と認めて戦っているのだからね……それはそうと、まだ可愛い女の子が一人生き残っているみたい」

ルミナスは周囲を見渡し、離れたところにいた杏里に気が付く。

「私の召使いになるのだったら生かしておこうかと思うのだけど、どうする？」

血液が付着した魔法剣を両手に携えたまま、親しげにルミナスは語

り掛ける。

「……………」

杏里は震えたまま、何も言葉が出ない。

これ程までに戦闘能力の違う相手を何ら警戒することさえなく、まるでピクニックへ行くかのような緊張感で相手にしてしまっていた。

ハンター養成所、コロシウムでのことで完全に自分たちの能力を過信してしまった結果が今まさに現れているのだと杏里は思っていた。

「良いよ、君のその表情。それ恐怖っていうんだよね。凄くそそられるよ、もっと苛めてあげたくなる」

突如、杏里の背後に黒い十字架が出現する。

突然のことに反応が鈍った杏里は一瞬で十字架に括り付けられた。

十字架に拘束された杏里の周囲を黒い剣が囲み宙を漂う。

「貴方の対応が余りにも遅いから、お友達のようになってもらうよ。暗黒魔法デッドリーも久しぶりだから試し撃ちしたいし……良いよね？」

杏里の意見など全く聞きもせずに周囲を漂う黒い剣が杏里を貫いていた。

「少し時間がかかったね。三十秒ちよっとってところかな。弱者を一方的に傷付けるのは私……いやいや、オレの性にはどうしても合

わないね」

はっとした様子で自らの一人称をルミナスは言い換える。

「さあて、いつものやりますか」

何かの魔法をルミナスは詠唱し始める。

ルミナスの語るいつものとは強制魔族化であり、そのことによって人間などは魔族になってしまうのである。

そうになると、どうしてもルミナスを頼らざる負えなくなる。

その原理で刃向かい自身に向かってくる者たちを逆に自らの下部としていた。

「詠唱は終わったよ。もう魔族の力が宿ったはずだと思うけど……気分はどう？」

数秒後、アーティたちの首筋には魔族の漆黒の刻印が浮かんた。

「これで私……いやいや、オレと同じ仲間ってわけ。そろそろ回復させてあげるね」

最上級回復魔法エクスをルミナスが詠唱しようとした時、極度のダメージを受けていたはずのノールが立ち上がった。

首を刺された致命傷の傷は既に癒え、血も流れていない。

「痛った……どうしてくれんの？」

「自然治癒が出来るの？ 不思議な人だね、君は。それより、どう？ 人間でなくなった感想を聞かせてよ」

「自然治癒？ 違うよ、ミールが最後に詠唱したのは回復魔法だったんだよ。それと残念だけどね、ボクは元々人間じゃないの」

即座にノールは天使化をする。

しかし、魔族の能力の影響よってか羽の色が漆黒へと変化してしまっていた。

そのため、ノールは複雑な変化の形態、魔天使化をしていた。

「何、これ？ 羽の色が違うよ……それにどうしてだろう、人を殺したい」

そう話すと、ルミナスの方を見た。

「ううん、違うの。貴方を殺したいっていう訳じゃないの。ただ、落ち着かないの。そうしないといけないのじゃないかという思いがどうしても治まらないだけなの……ふふっ、ボクが人を殺したいだなんて思う訳が無いじゃない」

ルミナスと目が合ったノールは自身が思ってしまったことを否定する。

しかし、普段の彼女とは明らかに様子が違っていた。

それは狂気その物。それ以外に例えようが無かった。

「き、君さ、一体どうしたの？」

魔族であるルミナスさえも彼女の狂気に戸惑った素振りを見せる。

だが、その戸惑いが完全に仇となった。

ノールがルミナスの頭上に不思議な紋章の魔方陣を描いていたことに気付けなかったのだ。

魔方陣から突如降り注いだ光線がルミナスに直撃する。

魔法の発動速度は早過ぎて、ルミナスは避けることさえ出来なかった。

「神聖魔法か……」

力なく、その場にルミナスは倒れた。

極度に傷付いたルミナスの身体からは血が滴る。

「……あれ？」

ルミナスが床に倒れた時、ノールの黒色の羽が白一色の元々の天使の羽に戻る。

それから少しの間、ぼんやりした様子でルミナスを見下ろしていた。

「そつだ……皆にエクスをかけないと」

ノールは思い出したように倒された他のメンバー五人に最上級回復魔法エクスを詠唱し、回復させた。

「皆、大丈夫？」

「ああ、なんとか……な」

最初に起き上がったアーティがノールの問い掛けに答える。

「にしても、今の凄い回復魔法だね。オレたちが受けた傷じゃ普通なら回復魔法を数十分くらいかけないと回復しないよ」

「スゴいでしょー？　これが大天使長ノール様の実力ってわけ」

アーティの問い掛けにノールは自慢げだった。

「確かにね。でも、その能力があるならコロシウムに残った連中にも詠唱しとけば良かったんじゃないのか？」

「あつ」

「あつ、てやっぱり、思い付いてなかったのか。でも、その白い羽を見れば、お前を天使だと言わざるを得ないな。ところで、この魔族化を解くにはどうするんだ？　制御が出来てないらしくまるで負の感情しか抱けないんだ」

「アーティもそう思った？　それはね、頭の中で人間になりたいって念じるの。そうすれば元に戻るはずだよ」

「そっか、竜王化から戻る要領と同じだね」

アーティはそう答えると精神統一をし始め、アーティの首筋の刻印は消えた。

「あとね、今の戦いで気付いたんだけど変化する動作を最短でしないとダメだと思うんだよね。人間化してる時はボクたちって弱過ぎじゃん。相手が強い時は最初から変化すれば良かったんだよ。そうすれば戦闘能力が上がるんだし」

「……ってことはオレも人間じゃないのか？ この嫌な考えも、オレが魔族になっちゃったからか？」

魔族化されたヴェイグが自身の変化を認められない様子。

「そうだよ、でも大丈夫。ヴェイグも人間化すれば良いんだから」
それから、ノールはヴェイグに変化の仕方を教える。

杏里とミールは既に天使化した際に戻る方法を覚えていたので、自身の力だけで元に戻れた。

その五人を納得がいかない様子で見つめる人物がいた。

「ってかさ、何でオレだけ変化してないみたいなんだ？ その嫌な考えって何なんだよ？ オレも魔族化しているのか？」

何故か自分だけ漆黒の刻印が浮き上がらなかったテリーはノールに聞く。

「ふふ……さあね、ルミナスが忘れたんじゃないの？」

一度、鼻で笑ってから明らかに見下したような口調でノールは答える。

「オレをバカにしてないか？」

不快に思ったテリーは倒れているルミナスを揺すって起こす。

「おい、ルミナス！ オレを魔族化しろよ！」

「離してよ……身体中が痛いから私は動きたくないの。それに君にも魔族化するように魔法をかけたよ」

ゆっくりとルミナスは立ち上がる。

「君らは何しにここに来たわけ？ 用が無いならさっさと帰ってほしいのだけど」

「用ならある。この世界の連中がお前に消えてほしいって言うてるから、この世界から追い払いにきたわけ」

ルミナスに掴み掛かっているテリーに代わって、アーティが返答した。

「別に良いよ。ここは私にとって別荘の一つだから。それとさ、魔族になりたいのだったら最初から普通に言いなよ」

再び、テリーに向かってルミナスは魔族化させる魔法を詠唱する。

しかし、テリーの身体には何の影響も示されない。

「もう魔法はかかったはずだけど？」

「バカにしてるのか？」

「そんなことない、確かに私は魔法をかけたよ。どうしてかな、こんなことは初めてだよ。普通なら簡単に変化が出来るのに何でかな？」

一度、テリーをしゃがませるとルミナスはテリーの首筋を確認した。

「首筋に刻印が無いし、私でも分からないや。それじゃ、私は魔界に帰るから城内から出てくれない？」

「なんかさ、お前態度変わってない？」

アーティがルミナスに言う。

「もう同族なのだから私たちは仲間でしょう？ 先に言っておくけど魔族には階級があるの。邪神ミトス様を中心に霸王、魔王、魔神、魔族の順ってことだから君らは私の下部というわけ」

「下部だと？ そんなことは金をよこしてから言え」

今一、よく分からない断り方をアーティはする。

「っていうか、早く外に出てくれない？」

ルミナスはノールたちと一旦城外へと出ると、ある魔法を詠唱した。

「異世界空間転移！」

ルミナスが魔法を詠唱すると城は一瞬で消えた。

「何か分かったら君のところに行くから。じゃあね」

その言葉を残し、ルミナスも城と同様に消えた。

スロートでの修業

結局、自らルミナスはこの世界を離れた。

結果的にはルミナスを追い払うことに成功したアーティたちはコロシウムへと戻る。

「よう、魔王は倒せたか？」

コロシアムの会場外でアーティたちの帰りを待っていたリュウが声を掛ける。

「なんとかか……でも、あいつがオレたちを魔族化させなかったら全滅していたよ」

「全滅って、六人がかりでか？ やっぱ、魔王って名は伊達じゃなかったんだな。ってというか魔族化って何よ？」

「リュウは知らないのか。魔族化っていうのはだな……」

アーティとリュウが話しているとコロシウム内から綾香たちがやってきた。

「あれ、おかえり。私たち、怪我が治ったから貴方たちを迎えにいらしたよ」

相変わらず笑顔で綾香が話す。

「そうか、それならこの世界にはもう用が無くなったね。ところで、一旦テイストに戻っても良いかい？」

「どうして？」

不思議に思った綾香はアーティに訊ねる。

「オレはルミナスと戦ったことで実際は自分が弱かったのだと気付けた。修業をして鍛練を積みたいんだ」

「そうね、自分の欠点を気付けるなんて、アーティくん偉いわ。それじゃあ、テイストに戻りましょう。ところで、ルミナスって誰？」

「オレたちが戦った魔王の名前だよ。オレが戦った時、ルミナスの動きが全く見えなかったんだ。それに竜王化も素早く出来るようにしたいしな……」

その後、アーティの話した通り、テイストで修業をすることが決まった。

早速、アーティは空間転移を詠唱する。

その瞬間、見慣れた風景の広がる世界に飛ばされた。

久しぶりにスロートへと戻ってきたのである。

「なんか、すっごい久しぶりって気がするね」

戻ってきたことが嬉しいのか杏里は笑顔でノールに言う。

「はいはい、そうだね。杏里くん、最高にウザいよ」

たったの一言で、ノールは杏里のテンションを打ち砕いた。

その後、ノールたちはスロートの街へ近付く。

普段なら誰もいないはずだったスロートの街の入り口に兵士が門番として立っていた。

「あれ？ アーティとノール？ なんか、久しぶりじゃん」

その兵士は以前敵だったはずの傭兵アレス。

「アレスじゃん。こんなところで何してんの？」

何でこいつがここにいるんだと思いつつも、アーティが訊ねる。

「それは勿論、門番だって。時々、ここを襲ってくるモンスターや賊を追い払うために他の兵士より強いオレが警備しているんだ。それとオレって軍隊の連隊長になったんだ」

「ふーん、スロートに軍隊が出来たのか。アレスの出世の話はともかく、その他にこの街で変わったことはないか？」

「結構あるな……でも、そのことはクロノ本人に聞いた方が良いよ」

「そか、アレスがそういうならそうするよ」

アーティたちはクロノに会うため、スロートの城へ行ってみることに

になった。

「今すぐ全員で城に行く必要もないから一旦ここで解散しよう。あと、集合場所はこの城だからな」

一応、念のために集合場所を伝えると、メンバーの殆どがバラバラにスロートの街へと消えていった。

「後で合流するのが面倒だから念のため城に来て言ったのに……残ったのはお前等だけかよ」

「なに？　なんか問題でもあるの？」

明らかに不満そうにしているアーティに対して、ノールは不愉快そうな態度を示す。

結局、アーティと一緒にクロノに会いに行くのはテリー、リュウ、ノール、杏里の四人だけであった。

残ったメンバーがクロノに会うため城の城門から城内に入ろうとした時、城の門番の兵士が止めた。

「止まりなさい。ここから先は民間の方は立入禁止ですよ」

「クロノに会いに来たんだ。入ったっていいだろ？」

「確かに以前までは誰でもクロノ様にお会いすることが出来ていたよ。けど、城主様になられてからは職務を優先しているのでアポイメントを取らなければ会うことは出来なくなっただよ」

「ハア？ アイツに会うくらいで何でそんな面倒なことしないといけないんだよ！ それにクロノ様ってなんだ！」

「口を慎みなさい、君。知らないなら教えてあげるけど、クロノ様はスロートの帝となったのだ。クロノ様は弱冠二十才代だというのにとっても優秀で聡明な方だ。私もあの方のようになりたいものだよ」

「お前のそんな戯言に付き合ってらんねえんだよ！ 退けよ！ さつさとクロノにオレを会わせる！」

兵士が感嘆を込めて話していると、アーティは強行突破しようとする。

「ダメだつて！ 民間人は入ってはいけないと言っているだろ！」

アーティが無理矢理城内へと侵入しようとするため、数人の兵士が城内から集まりアーティを止めた。

それを少し離れたところから、ノールたちは白い目でじつと見つめていた。

「城門からはあのどうしようもないバカのせいで入れないみたいだから、ボクは空を飛んで中庭から入ろうと思うんだけど、どうする？」

溜息を吐いてからノールが三人に話す。

「ノールは天使だから空を飛べるけど、オレは空を飛べないよ」

「なに、テリーは飛べないの？ はあ……使えね。じゃあ、ボク

が掴んでいってあげるよ。これで貸し1ね」

わざとらしく言うとノールはかなり見下げのような態度をする。

「なんなの、ノール？　もしかして、オレにケンカ売ってる？」

ひとまず、兵士に止められているアーティを完全に無視する形でノール、杏里、リュウは天使化もしくは竜王化し、羽を出現させてから空へと飛翔し、城内の中庭へと侵入した。

「えーと、クロノはどこかな？」

降り立った中庭から城の様子をメンバーたちが確認していると侵入したノールたちに気付いた男性が近寄ってきた。

「久しぶりだな、ノール。ところで何でこんなところから入ってきたんだ？」

「やあ、カイト。久しぶり」

ノールたちに声を掛けた男性は戦争中に一緒に戦った仲間のカイトだった。

「何ていうか……お前、少し見ない間に遅くなった感じがするな」

「ねえ、カイト。ところでクロノはどこにいるの？」

「クロノか？　クロノなら城の図書館で本を読んでいるはずだ。案内するか？」

「うん、お願い」

「あつ、ちよつと……」

カイトとノールが会話していると、リュウがカイトに声を掛けた。

「スロートに軍が出来たって本当か？　って言うかクロノが帝になつたっていうのも本当なのか？」

普段とは違う真剣な顔付きでリュウは訊ねる。

「ああ、どちらも本当だ。そのことに関してはオレが説明とかするよりクロノに聞いた方がいいと思うけど？」

「そうだな、そうするよ。でも、まさか本当だとは……」

「あつ？　何か言ったか？」

「ああ、いや、独り言だよ」

「そっか。今から案内するからついてこいよ」

城の図書館に続く回廊をカイトは歩き出す。

数分間程歩いているとカイトが、ある部屋の前で止まった。

「着いたよ。ここが図書館だ」

「ありがとう。クロノを探してくるね」

「どちらかっつていうと探さなくても、クロノならすぐに見付かる。ひとまず、机に倒れこむようにして寝ているのがクロノだ」

「ふーん……分かった」

よく分からない例えをカイトが言ったので、ノールは微妙な返事をした。

ノールたちが図書館内に入ると沢山の本が彼らの目に入った。

ノールの背丈二つ分程の高い本棚、それが約一メートル感覚で何十列も並べられていたが、それを全て敷き詰めるように蔵書が本棚の空間を埋めていた。

「フリースペースみたいな空間があるから、あそこにクロノさんがいるんじゃないかな？」

杏里が本棚の列の間にある広い空間を指差す。

「あつ、そうだね。行ってこい」

ノールは笑顔で杏里に言う。

「ノールちゃんも行くんだよ……」

ノールの手を引きながら杏里は他の二人とそのフリースペースへと行く。

数十台程の木製の机が等間隔で並ぶその空間には、ひときわ目立つ人物がいた。

その人物はかなりの書物を自らの座る机に置いている。

どうやら、それを全て読もうとしているらしいが机に突っ伏したまま微動だにしない。

「あれだろ。クロノつて。てか、クロノつてあんなに本を読む奴だった？」

寝ている人物の肩をテリーが叩くと、その人物は反応してテリーの方を見る。

「なんだ……テリーか。どうした？」

やはり、その人物はクロノであった。

寝ぼけながらも、ゆっくりと座っている椅子から立ち上がる。

「久しぶりにスロートへ来たから、ついでだ」

「そうか、ありがとう。来てくれて残念だけど、この折角の再会をオレは何も持て成すことが出来ないよ。今この国に軍隊を作り、他国からの侵略に備えた防衛の準備をしているんだ。そのせいで城の財政は切迫しているんだよ」

「ああ、そうだったな。カイトが軍隊をスロートに作るって言っていたもんな。でさ、侵略に備えたって言ってたけど、また何処かと戦うのか？」

「いや、以前の戦いのように何も無い状態から軍隊を作っていたの

では手遅れになると思う。次はお前等みたいな能力者が一緒に戦ってくれるとは限らないからな」

その後、クロノは別に聞きたくはないのに現在の国の情勢、城の状態を愚痴りながら言い始める。

「あのステイとの戦争。どうしてあれ程に順次事が進んだのか分かるか？ 理由は簡単だ。スロートもステイも貴族が参加しなかったからだ。スロートの貴族たちは一度負けていたから、今度のオレたちが命懸けで戦った戦争には何人死んでも加担する気もない。ステイの貴族たちは三剣士の連中が王族を唆していたから、勲功を獲ても三剣士に奪われると多数が考えたらしい。だから、クリスなどしか貴族は参加しなかった。貴族どもは毎回自分たちのこと以外考えていないのさ」

「へえ、例えば？」

「簡単に言つと、奴らは戦争のことを全く知つちやいない。コネと金と出世にしか興味が無いんだよ。それを分かりやすく貴族がオレや議会の連中に言ってくれたよ。議会でオレが帝となる会議の時にあいつ等の一人が何て言つたと思う？ あいつはステイとの戦争で民衆が死んだのはオレのせいであり、殺戮者が帝になるのは間違いだと言つた。その後、当然のように貴族こそを次帝にすべきと堂々と言つていたよ。理由は、貴族が帝なら民衆に損害無く他国を攻め落とせるからだとき。全く、見当違いもいいところだ。そんな時だけに、民衆をバカな話に引っ張りださないでくれと言ってやりたかったよ。当然、勘違い野郎の出現で議会も啞然とし静まり返ったけどな。まっ、議会でオレが帝となることを承認された時に、そうゆうことを考えることしか取り柄が無いにも関わらず威張り散らす連中は罷免したけどな。当の本人たちは何故罷免にされるのか思い当

たる節が一つもないらしいがな。けどな、さすがに……金持ちな貴族は議会や軍隊職に置かざるを得ないけど。こっちだって議会や国の運営収入は欲しい」

「なあ……話はもういいか？ 長すぎてこっちはお腹一杯だよ」

これ以上、テリーはもうクロノの話を聞きたくない様子。

それを一緒に聞いていたリュウはあることを考えた。

「なあ、さつき財政が切迫しているって言ったけど、もし今ここに金があつたら助かるか？」

「ああ、物凄く助かる。助かると言っても今以上に税金は上げたくないんだよ。民衆にあまり負担を押し付けたくないし。それに税金を上げざる負えない状況であつても貴族たちはこの提案に噛み付いてくるさ。領民思いの対策ではないとな」

悩みの種である内容を突かれたため、またテンション低めでクロノは愚痴を語る。

「そっか。今な、ここに1000万があるんだけど欲しいか？」

「えっ？」

その言葉をクロノ以外の三人も反応した。

「それをお前はやるのか！ その金やつたら生活が出来なくなるんだぞ！ お前はそれが分かっているのか！」

リュウの言葉にモンスターハンター經理担当であるテリーが一瞬でキれる。

「クロノだって頑張っているんだから……良くない？」

リュウはテリーから何かマズイことを言ってしまったかな？という感じで目を逸らす。

「そうか、ありがとう。リュウ、テリー、早速城の財政へこの資金は回すな」

リュウが持つ1000万が入ったアタツシユケースにクロノは手を伸ばす。

しかし、テリーがその手を反射のように手刀で打ち払い、次にリュウを殴り倒してケースを奪い取った。

「テメー！ 1000万だぞ、意味分かってんのか！ 金が無いと餓死するんだぞ！」

テリーはケースをしつかりと抱えて、全力で図書館から走り去って行った。

図書館からテリーがケースを抱え全力で走り去った後、クロノは申し訳なさそうに倒れているリュウを立たせた。

「いってえ……アイツ本気で殴りやがった」

「冗談だったのに済まん。普通にそんな大金を貰える訳が無いよ。リュウには悪いことしたな、テリーにも」

「ところでさ、何で軍隊作ったの？」

唐突にノールがクロノに聞く。

「絶対必要っていう訳じゃないけど、これからスロートが他国から侵略を受けるかもしれないだろ？ その事態を想定し、直ぐ様に対処出来るよう備えておきたかったんだ」

クロノは疲れているのか一旦椅子に座り、テーブルに置いてある書類を取ってから説明する。

「と言っても、スロートの軍隊は専守防衛が基本。戦うことは相手がスロート領域内へ侵入するまで絶対にしない。階級はオレを中心に元帥、大将、中将、少将、准将、大佐：（省略）：中尉、少尉、曹長、軍曹、兵士って感じで。ついでに参謀、軍師は有能な人物が他の役職と兼任して行く。階級に関しては書籍に記述されてあった他国のをパクった」

「確かにどこかで聞いたような感じだね。でも、そんなに沢山の人を任せさせる必要があるんだったら、最初から強い人を何人か雇った方が良くないんじゃないの？」

「ノール、強い人って例えば誰だ？ アイティヤテリー、お前みたいなのか？ オレだって、そんな人物が雇える程いるのだとしたら最初から雇っているよ。でもな、そんなのがいないからこそ国つて言うものは軍隊を作り、沢山の兵士で守ったり戦ったりするんじゃないのか？」

微妙にストレスが溜まっているのかクロノは威圧的な口調で言う。

普段から優しいクロノが突然威圧的に答えたのでノールは俯いてしまった。

「オレは最初から魔法を扱うスキルが無かったし、アーティミたいな戦闘能力なんかも全くない。これも才能や能力の限界ってことなのかな。認めたくないけどな」

言い終わるとクロノはノールたちに、いつもと変わらない口調で語り掛ける。

「ところで、テリーを探しに行かないか？」

「面倒。ボクはパス」

ノールはテリーのことだったので速答で答える。

「はやっ！ ノールも一緒に探しに行こうぜ」

あまりに速答だったため、フォローするようにリュウは訊ねる。

「いいえ、絶対に嫌です、リュウさん。すみません」

「そんなに嫌なの？ テリーとは仲が悪いのかい？」

仕方なくリュウとクロノで探しに行くことになった。

「ねえ、ノールちゃん。どうしてテリーさんのこと探したくなかったの？」

「うざいよ、今すぐ死にたいの眼鏡？ そのことをボクに聞いたら殴るよ」

「えっ、眼鏡って……？」

杏里はテリーのことを聞くのを止めた。

その頃、ミールとジャスティンはミール、ノールたちの自宅があった場所まで来ていた。

そこでミールが見た物は更地へと変わってしまった自宅後だった。

「ミール、元気出しなよ。家がなくなっても僕たちが一緒にいるから」

「そうだね……そう考えよう」

暗い表情を浮かべたまま意気消沈としているミールは今にも泣きそうである。

「こんな何も無いところにおいても仕方ないからさ、城に行ってみよう。他の皆もそこにいるはずだから」

ジャスティンの問い掛けにミールは静かに頷く。

「今、僕は分かったよ。姉さんが皆と一緒にモンスターハンターの

一員になったことが。帰れる場所がなくなったからモンスターハンターにいたんだね。それなのにいつもみたいに明るく振舞っている姉さんは凄いよ……」

「そうみたいだね。じゃあ、ミールは？」

「僕は姉さんがモンスターハンターに入るっていったから、僕もモンスターハンターに入ったの」

「前から思ってたけど、ミールってシスコンでしょ？」

「えっ……？」

ジャスティンのさり気ない一言に意気消沈としていたミールはさらにショックを受けた。

城へ行くため、二人がスロートの街を城の方角へ向かっていると一人の女の子が二人を横切った。

とても急いでいるのか、その女の子は息を切らしながら走っている。

「ちょっと、君！ ストップ！」

ジャスティンはその女の子に声を掛ける。

「なに、急いでるんだから！」

一瞬振り返って立ち止まると、女の子は走り去ろうとする。

「だったら皆にばらすけどいいの？」

ジャスティンはその女の子にわざと聞こえるように言う。

「ねえ、ジャスティン君。あの女の子は知ってる人なの？」

「ミールもすぐに分かるよ。彼の方から戻ってくるから」

「えっ、今、彼って言った？」

すると、走り去ろうとしていた女の子がジャスティンの方へ向かってきた。

「ジャスティン君、もしかして知ってた？」

その女の子が聞くとジャスティンは笑顔で答える。

「当たり前。僕だって普段から男装してるんだよ。相手が同じように変装していたら簡単に見破れるよ」

「ジャスティン君が男装してるって普通じゃない？」

そもそも、ジャスティンをまだ女性と認識していないミールは理解していない様子。

「はあ……ミールって何で人の言ってる意味を理解しないの？」

「ミール君、ジャスティン君。このことを皆に黙っていてくれないかい。お願いだよ……」

必死にお願いをすると女の子は走り去った。

「あの子って誰だったの？」

「身長や声とかで分からなかったの、ミールは？ 確かに見た目が全然変わってたから分からなくても仕方ないけど、なぐんかミールって鈍いよね」

それから、ミールとジャスティンが城の城門前まで来ると城門からテリーが物凄い勢いで走り去っていった。

「今のテリーさん？」

ミールがテリーが走り去っていった方を確認する。

「そ、そうみたいだね……」

「どうしたの、ジャスティン君？」

「僕は、あの人のことが恐いの。殺されるんじゃないかと思って……」

「ジャスティン君をテリーさんが殺そうとしてるの？」

ミールは驚いて聞き返すとリュウ、クロノ、アーティが走ってきた。

「ミール、ジャスティン！ テリーがこっちに来なかったか！」

リュウが二人に訊ねる。

「さっき見かけたよ、テリーさんなら向こうに物凄い勢いで走っていった」

ミールがジャスティンのことを気にしながら言う。

「そうか、分かった」

リュウたちがそれを聞くとテリーを探すため走っていった。

その時、アーティがとても悔しそうにしているようにミールには見えなかった。

城門へ二人が移動すると、事前に城の門番にクロノが話していたのか止められずに城内へと入ることが出来た。

そして、図書館に行くといいと兵士が教えてくれたので図書館へと二人は行ってみることになった。

「ノールちゃん、それって何を讀んでるの？」

「エツチな小説」

「うそっ！」

ノールの予定外な発言に杏里はオーバーなリアクションを取る。

「冗談だよ、ボクがそんなの読む訳ないじゃん……っていうか、アーティが言っただけで杏里くんはそうというの毎日讀んでるの？」

「そんな訳ないじゃん！　ボクはそんなの一度も読んだことないよ！」

ノールがそうなの？という表情で聞くので杏里は本気で否定する。

「冗談だよ、冗談。アーティがそんなこという訳ないじゃん。杏里くん、本気で否定してるし」

杏里が全力で否定する様が可笑しかったのかノールは笑う。

「ちょっと……ノールちゃん。いきなり変なこと言わないでよ」

テンションが下がり、杏里の身体の力が抜けた。

「でも、こうゆう風にすれば本当に気持ちいいのかな？　ふれるだけでも、いいんでしょう？　なんだか、興味……あるな」

ペラペラと小説のページを捲りながら、ノールは囁いた。

「こうゆう風に……？」

何となく分かった杏里はそれ以上ノールに言わなかった。

実際に彼女が読んでいる物とは……

「姉さんたち、楽しそうだね。何を話してたの？」

そこに何も知らないミールとジャスティンがやってきた。

「実はね、杏里くんが小説を……と言ってもエツチな……」

「ちょっと、ノールちゃん！ それって変な誤解を受けるでしょ！
口調からして嫌な予感がした杏里はノールがそれ以上誤解を受ける
ようなことを言わないようにノールの口に手を当てようとする。

それをノールは軽く躲して、ミールの背後に隠れる。

「ゴメン、ゴメン。冗談だって。杏里くんはそんなことしないよ」
「……………」

恥ずかしくなったのか杏里は黙ってしまった。

「ところで、ミール。どうしたの？」

「姉さん……僕たちの家がなくなってたよ……」

「うん、知ってるよ」

「建て直す？」

「面倒だからいいよ。ボクたちには建て直すお金なんて無いんだか
ら」

「姉さん、エールがどこに行ったか知ってる？」

「ん？ あの子は一人旅をしてる途中でしょ？」

「確かにそうだけど……」

案外あっさりとしている姉にミールは少し驚いた反応を見せる。

「ミールたちってさ、家族が他に誰がいるの？」

ジャスティンが訊ねた。

「僕らは姉さんと僕と妹のエールの三人で暮らしてたの」

「親は？」

「いないよ。それに誰が親なのかも分からないし」

「どうやって今まで暮らしてきたの？」

「街の孤児院に姉さんが僕たちを連れていって一緒に生活してたらしいけど、僕は孤児院に来た時の記憶はあんまりないんだ。それから姉さんがスロートの貴族の家で使用人として働いてくれたから街の外れの方に家を借りられてたの。それがさっき行ってきたところ」

ミールが自分たちのことをジャスティンに話す。

ジャスティンには最初から親というものがいたもので、どれくらいノールたちが苦労したのかは率直なところ余り分からなかった。

それから時間が経過し、アーティたちがテリーを連れて図書館へと戻ってきた。

「ゴメンな、テリー。あれは冗談だったんだよ」

諭すように、クロノがテリーに言う。

テリーは静かに、こくと頷く。

泣いていたのか、テリーの目は仄かに赤く染まっている。

「さっき決めた通りクロノには500万を渡すからな」

アーティはテリーが抱え込むように持っていたケースを取り上げると、クロノの中に入っている現金の半分を渡す。

「有難う、皆。これで足りない財源を確保出来たよ」

クロノはアーティたちに頭を下げる。

「バカ、仲間相手に頭なんて下げるな、気持ち悪い。それでさ、ちよつと修業がしたいから城に住まわせて貰いたいんだけど？ 人数は十二人いるけど」

「それなら、オレも言おうとしたことだ。お前等の強さなら兵士たちの指導を十分に任せられるしな。兵士宿舎を貸すから勝手に使ってくれ」

クロノの了承を得たため、メンバーたちは兵士宿舎での生活を始める。

兵士の指導などをしながら、メンバーたちは強くなるため日々修業した。

そして、三カ月の時間が経過した。

「クロノ様！」

図書館の定位置となっていている机にいたクロノへ兵士がとても急いだ様子で何かを伝えにきた。

「どうしたんだ？ 何かあったのか？」

兵士のその焦りようから事態を察したクロノは直ぐ様訊ねる。

「隣国ラミングが二人組の人物に襲撃を受けており、我が国に救援を申し出ています！」

「たった二人相手に救援を出してきたのか……ってことはつまりアーティ並みに強いってことだよな、それって」

その緊急事態をクロノはアーティたちに伝えるため兵士宿舎へと向かった。

その頃、ノールは自室のキッチンで食材を選んでいた。

「やっぱり、空間転移って便利だな。欲しい食材をすぐに買いに行けるもんね」

食材を手に取りながら、ノールは楽しそうに語る。

「杏里くん、今日のお昼ご飯ってオムライスでもいいよね？」

「もちろん。ボクはノールちゃんの料理全部好きだよ」

「そう？　なんだか嬉しいな」

笑顔で自分の料理を杏里が誉めてくれたのでノールはやる気が出てきた。

「誰がいるか！」

いきなり、クロノが部屋に入ってきた。

「クロノさん、どうしたの？」

杏里がクロノに聞く。

「隣国ラミングがお前等みたいな奴から攻撃を受けているんだ、救援に向かってくれ！　それより……この部屋にはノールと杏里以外に誰かいないのか？」

クロノは部屋を見渡す。

「この部屋にはボクたち以外いないよ。クロノは知らないと思うけどハンター養成所に行っていた時と同じ部屋分けだからね。それに

ボクたち以外、今日は修行中で城には誰もいないよ」

「だったら、今すぐに二人はラミングへと救援に向かってくれ。オレたちも準備が整い次第救援に向かうからな」

「え、今日は休みのつもりだったのに…」

「じゃあ、行こっか。ノールちゃん」

「人の話を聞いているの、杏里くん？」

ノールたちは昼食を食べる前にラミングに向けて出発することとなった。

クロノが準備のため、急いで部屋を出て行ったのでノール、杏里は大陸地図でラミングが何処にあるのかを確認することにした。

「ノールちゃん、ラミングまで結構距離があるよ。どうやって行くの？」

大陸地図を眺めながら杏里はどうするか聞く。

「一応聞くけど、ボクたちは何なの？」

「何って……何？」

「天使に決まってるでしょ？ ボクたちには羽があるんだよ、羽が。空を飛んで行くに決まってるじゃないか！」

ノールは杏里を脅迫的な口調で軽く脅す。

「う、ごめんなさい……天使になれたことを忘れてたの……」

「そうなの？ なら仕方ないね。ひとまず空を飛ぶために中庭に行こう」

それから、ノールと杏里は城の中庭に移動する。

「それじゃ、杏里くん。天使化して」

「うん、やってみるね」

杏里は背中から白い天使の羽を具現化させた。

「杏里くんは空飛んだことある？」

「ううん、まだ一度もないよ」

「なら練習しよう。落ちても助けられないから安心して飛んでいいからね」

とても嬉しそうにノールは笑顔を作る。

杏里は嫌な予感を感じたが一通り空を飛ぶ練習をし、ラミングへと向かう。

空を飛んでいるとノールたちはラミングの国境を簡単に越えた。

「そつえばさ、ラミングのどこに救援に行けば良かったんだろう？ 知ってる、杏里くん？」

「ううん、知らない。クロノさんに聞いてなかったね。というかラミングが何処にあるのかも結局聞いてなかったし。分からないから首都の方に行ってみようか」

数分後、ラミングの首都が見えてきた。

ラミング首都は遠目から見ても分かる程に至る箇所が破壊され、火災も多数の場所で起きているのが確認出来た。

「ここみたいだね」

ノールたちは急降下して破壊された首都に着地する。

「杏里くん、敵は絶対に強いからそのまま天使化といちゃ駄目だよ」

「そうだね……街の人、みんな。簡単に殺されているみたいだしね」

無数の死体が街の至る箇所にあつた。

それらは全て攻め込んできた人物に殺されたようだ。

「どうする、ノールちゃん……時間は掛かるけど皆を生き返らせる？」

「そうしたいけど復活魔法リザレクは、ある程度の能力を持ち合わせている人にしか効果が無いんだよ。残念だけど普通の人を生き返らせるのはムリだね」

「そんな……」

ふいに杏里は涙を流す。

彼らを不憫に思い、流れたようだ。

「そんなことより倒しに行くよ」

ラミング首都を破壊した人物を見つけ出し倒すため首都を数分間程歩いていると、ノールたちは誰かの声を聞く。

「なんかさ、こっちの方から魔力を感じたけど何かいるのか？」

「ノールちゃん、ボクたちの近くに誰かいるみたいだよ」

「そうだ、杏里くん。知ってた？ 融合をすれば、ボクらはもっと強くなれるらしいよ」

「えっ？ 融合？ 今はそんなことより一旦隠れないとダメだよ」

隠れようとしなないノールの手を引き、杏里は破壊され廃屋となった建物に隠れた。

「どうして隠れるの？」

「相手は首都をたつた二人で破壊した人たちだよ。たぶん、ルミナスさんくらい強いと思うの。一度様子を見た方が良いよ」

「あつそ。なら、ボクは見学。君は特攻。オーケー？」

「ごめん、ボクが間違っていたよ」

その時、ノールたちが隠れた廃屋の外から音が聞こえた。

「確か、この辺から高い魔力を感じただけど……ドREAM。なんか分かったか？」

「いいえ、ルーク様。どこにいるかはまだ索敵出来ておりません」

「ああそう。じゃあ、この辺消滅させる？」

言い終わるとルークという人物の魔法を詠唱する声が聞こえた。

「確かね、この魔法について魔術書か魔法専門書で読んだことがあるの。これは最悪な程強力な魔法だから最大級の魔法障壁張った方がいいよ」

詠唱している魔法について知っていたノールは危険を感じ、杏里に伝える。

「へえ、どのくらい？」

杏里がノールに聞き返した時、ルークの詠唱が終わった。

「デスマーン！」

ルークの発動させた魔法によって、禍々しい黒い三日月が現われた。ルークの邪悪で強力な魔力を内蔵させた三日月はとても凄まじい爆発を起こし、一瞬で大規模な範囲を全て破壊する。

「これで、さっきの奴も死んだか？」

自らの魔法に影響されないように魔法障壁を張っていたルークが周囲を確認する。

すると、完全に崩壊した建物跡地で魔法障壁を張っているノールと庇われるように倒れている杏里に気付いた。

ノールと杏里はケタ外れの威力に傷付いていた。

「いたあ……本当に死ぬかと思ったよ」

「生き残っていたのか。でも、それで終わりって訳じゃないよな？」

二人にルークが近付く。

「はあ、杏里くん、またボクたち死ぬかもしれないよ。あつ、そうだ。さっきボクが話した融合のこと覚えてるよね？」

「えっ……うん、覚えてるけど……」

怪我をした右腕を押さえながら泣きそうな顔で杏里は立ち上がりとうとする。

「てゆうか、君のせいだからね。隠れたりしないで……それに君も魔法障壁を張ってくれば、こんな攻撃受ける必要なんて無かったのに」

全身に魔力を高めたノールは杏里の顔を引き寄せ、口付けをする。

突然のことに杏里が驚いていると、ノールたちの周囲が光に包まれ見えなくなった。

数秒後、光が収束したその場所にノールと杏里の姿は無く、何故か女性がただ一人立っていた。

そこに立っている女性は周囲をキョロキョロと見渡す。

不思議そうに周囲を見渡すその女性の耳はネコのようにであり、着ている白い法衣からは尻尾が出ている。

それは彼女がネコ人という種族である証拠だった。

「あの女は？」

女性を指差しながら、ルークはドREAMに聞く。

「はい、ルーク様。あの人物はネコ人という種族です。ネコ人という種族はとても温厚で優しさを具現化した種族だと私は聞いております」

「そうか、戦闘向けじゃないのか。結局は雑魚が二人から一人になっただけか。つまらないな」

その時、ネコ人の女性は何かを語る。

「やっと……やっと、私は異次元から出てこれたみたいね」

何かを囁くと、女性は二人に気付いたのかチラッと見る。

ルーク、ドREAMを確認すると女性は嬉しそうに頬笑んだ。

「こんにちは。貴方たちは誰？」

「オレはルーク、それとこっちにいるのがドREAMだ。初対面のところで悪いけど、お前には死んでもらうよ」

ルークは両手に魔法剣を作り出し、その女性に斬り掛かりに行く。

「魔法剣ね……貴方、私を殺そうとしているの？」

ルークが女性に斬り掛かろうとした直前、女性は残像が残る程の速度でルークにボディーブローをくわえる。

その速度のまま、女性は跳躍し、ルークの顔目がけ飛び蹴りを入れた。

着地した女性は即座に魔法を詠唱し「アポカリプス」と発する。

次の瞬間、アポカリプスを直撃で受けたルークは全身から大量の出血をし、血塗れになり地面にひれ伏す。

アポカリプスという魔法は身体の血管や神経だけを完全にズタズタに引き裂く暗黒魔法の禁忌魔法の一つで、一撃で相手を死に至らしめる程の威力を持っていた。

しかし、ルークは生きていた。

あれ程の連続的な攻撃を行い、相手の能力を瞬時に見極め、生かさず殺さずのために気遣いをするその女性は恐ろしく強かった。

「あはは……あははははは！ 楽しい！ これを詠唱するとね、綺麗な赤い華が咲くの！ 次は、貴方の番よ、ドREAM？」

狂喜を顔に浮かべる女性からは想像を絶する殺意が放たれている。

狂気の殺意に飲まれたドREAMは身体が完全に硬直し、ルインに何の対応さえも出来ずに攻撃を受け倒れた。

「本当に弱いんだから……貴方たちじゃ話にすらならない」

彼等を崩壊させた後、その女性はとても不満なのか愚痴を言う。

「この総世界で最強である私が語るのもどうかしているけど、私を倒せるような相手……いえ、そんな生物は“綾香”以外存在しないわね。私並みの強さを持つ相手と一度で良いからまた手合せしたいわ」

ネコ人の彼女の名はルイン。

過去に総世界を死の恐怖へと導いた最強の殺戮生物。

彼女は今までR一族の魔力により、異次元空間に封じ込められていたが、ノールと杏里の融合によって異次元に変化を及ぼし現世に出現することが出来たのである。

「でも、私のしなくてはならないことはこんなことじゃ無いわ。“桜沢一族”のために、この命を使ったのか……私は一体どれ程の歳月を異次元で過ごしていたのかしら？ いえ、私のことなどどうでも良いわ。今は一刻も早く“桜沢一族”を捜すことが先決で

あり、それが生き残った私の使命よ」

ルインは静かに語る。

その時、ルインの身体が突然光り始めた。

「えっ？ どういうこと……？」

その光がルインをゆっくりと包み込み、今度はその場にノールと杏里が出現した。

「さっきの変な空間から戻ってこれたみたいだよ」

入れ代わりで異次元空間から出て来れたのでノールは辺りを警戒している。

「今ね、ボクはすっごく嬉しいよ。もう、ボクたちはここまでの関係になってたんだね。ノールちゃん、またキスしない？」

ノールの腕を掴み、寄り添いながら杏里は嬉しさを隠しきれない様子。

どう考えても杏里には緊張感が無かった。

「さっきからそればかりでなんかおかしいよ、杏里くん。あと離してくれない？」

「そうかな？」

「とじろでさ、この二人はどうする？ いつのまにか誰かに倒され

たっばいけど」

ノールは倒れているルークとドREAMを見つめる。

簡単に倒されてしまったルークとドREAMは決して弱い訳ではない。

二人は魔界の魔神で次期魔王候補の實力を有している。

そのため魔王ルミナスを倒したノールという女性と戦うことにより、己の實力がどれ程の物かを計るためにテストへとやって来た。

しかし、二人の戦った相手は生物界実質最強の女性ルインであった。

彼女のレベルは現在約20万……それは総世界に住む、他の生物とはケタ違いの強さを誇っていた。

当然、勝率は0%。ルークたちなどでは負けること以外出来なかった。

「ねえ、ノールちゃん。可哀相だからこの人たちを助けてあげよ？」

「止めを刺すんじゃないかって？ ボクたちを殺そうとしたんだよ？」

「うん、いいでしょ？」

「いいでしょ？って人の話を聞いてないよね、君って？ 何で助けたいのかは分からないけど、融合すれば勝てるみたいだし別にいいよ」

「ありがとう、ノールちゃん！」

笑顔で頬笑むと杏里は早速二人に回復魔法を詠唱する。

数分間程、杏里が回復魔法を掛けたことよってルークたちは立ち上がる。

「……何なんだ、あの女？ オレは魔界でも結構強い方なのに……
それなのに。クソ、もうそれ以前の問題なのかもしれないな」

悔しさを滲ませ落胆とした様子のルークたちは異世界空間転移を詠唱し、魔界へと戻った。

「あの二人、ボクが情けをかけてやったから生きていられるのに何の礼も言わずにいなくなっただね。全く恩知らずめ」

「ノールちゃんはただ見てただけじゃん」

「それじゃ、ボクたちも帰る？」

「うん」

破壊されたラミングの首都からノールたちは翼をはためかせながら空へと舞い上がる。

空を飛行しながらノールは最近の自らの感覚がおかしくなっていると感じていた。

ラミングでは沢山の死者の姿を見たが特に何も思えなかった。

以前は誰かが死ねば涙もでて、その人物を本当に可哀相だと思えた……だが、今はその感情がない。

戦争慣れをしてきている、そうノールは実感し始めていた。

「ただいま」

ノールたちはスロートの城に帰ってきた。

「帰ってきたのか。ラミングはどうだった？」

帰ってくるとクロノがすぐにノールたちの元にやってくる。

ノールたちの帰りを待っていたようだ。

「結構酷い状態だったから皆で早く助けに行った方が良いよ。あと、ラミングを攻めていた二人組はボクが倒したから」

「そうか。ノール、杏里、ありがとな」

「ボクが倒したよ」

自信たっぷり語るノールに杏里は微妙な気持ち芽生えたが何も言わなかった。

その後、準備の整っていたクロノはラミングに救援隊を派遣する。

特にすることの無くなったノール、杏里は自室へと戻った。

「ねえ、ノールちゃん。ちょっと、お願いがあるんだけど…」

「なあに?」

「あの……さっき、ボクに…」

「どうしたの?」

「キス、したよね?」

「はっ? あっ、そうだ。料理作るの忘れてた」

はっ?という一言で明らかに面倒そうに一蹴すると、さっさとノールはキッチンの方へ歩いていく。

「ボクの話聞いて!」

「えっ、なに?」

「ボクはノールちゃんからキスをされて、ずっと思ってたの。そろそろ……その、恋人同士だからしたいなって」

「本気で言ってるの?」

ノールは困った顔をし、少し考え込む。

「えーと、それってなんとかならない?」

「ど、どうして?」

「初めてなんだよね、ボクって。一度もしたことなんてないから行為自体の仕方が分からないって言うか」

「それなら、ボクも同じだよ。ボクも初めてだし」

「……はいはい、じゃあ後でね」

早くこの話を終わらせたかったのか、ノールは特に関心がないような素振りで簡単に話を流し、キッチンへと向かった。

杏里に関してはノールと違い、ノールとの行為を思い浮かべ極度に緊張し、ノールが会話の後に作った昼食をかなりぎこちなく食べていた。

それから、数時間後が経過した。

夜も更け、ノールたちの普段の就寝時間に近付いた。

「じゃあ、そろそろ寝るかな」

椅子に座り、エリアースで販売されている雑誌を読んでいたノールは軽く口に手を当てあくびをする。

そして立ち上がると眠たそうにベッドの方へと歩いていった。

「もしかして、今から?」

「ん？」

「やっぱり、しないの？」

「仕方ないね……たった今、思い出したよ。じゃあ、ボクはどうするの？ 服脱げばいいの？」

ささつと、ノールは服を脱ぎ始める。

「ノールちゃん、急過ぎだよ！」

突然、服を脱ぎ始め露になった素肌をさらすノールを目にし、杏里は目のやり場に困り余計にあたふたしてしまう。

華奢なボディに似合わない同性をも憧れさせるだろう程にハリのある形の良い大きなバスト。

そして、彼女の快樂へ誘う魅惑の蜜壺が…

あたふたした割りにはしっかりと杏里はノールの素肌を見ていた。

「いや……だって君がしたいっていうから脱いだんだよ。脱がなきゃ出来ないんでしょ？」

一々、無駄に慌てる杏里を微妙に冷めた目でノールは見つめた。

ひとまずノールは脱いだ服を畳み、それを床に置くと何も纏っていない裸の状態でベットに横たわった。

「杏里くん、顔が結構赤いけどなんで？」

「き、緊張しているからだよ。ノールちゃんは裸なのに恥ずかしくないの？」

「確かにボクも緊張してるけど、恥ずかしいって何が？ それとさ、しないならボクはもう寝るけど、どうするの？ 時間的にもう眠いんだけど」

「待って！ ボクも決心したよ！」

今のノールの一言が自身を急かしているのだと勝手に受け取った杏里は、ようやく何かを決心した。

「ん？ 結局するの？ 今日は止めにしよって…」

「待ってて、すぐに準備するから！」

杏里は急いだ様子で服を脱ぎ出す。

「人の話を全然聞いてないね…」

溜息を吐き、仕方なくノールは諦める。

その間、ノールは杏里が服を脱ぐのを黙って見ていた。

何故か、ピースサインを横にした状態を作って。

「何してるの？」

「こっやってね、君の胸と股を隠すとやっぱり女の子なんだなって

思うよ。ボクより腕とか脚も細くて綺麗だし」

「それって誉められても……全然嬉しくないよ。ボクは男なんだから」

なんとなく一度考えてから嫌がっているような素振りを杏里は見せた。

数十分後、ノールは浴室から出てくる。

その間、杏里はベットの上で俯きながら正座をしていた。

「はぁ……杏里くん、君には聞きたいことが沢山あるんだけど？」

怪訝な顔をし、ノールはあからさまに怒声を発していた。

「痛いつて、ボクは言ったよね？」

「うん……」

「止めてって、何度もボクは言ったよね？ 少し、涙が出ちゃったし。ボクは怖かったんだからね」

「うん……」

「っーかさ、なんで断りもなく出したの？ 先に言ってもらえば、

色々とお処出来たかもしれないのに本当、理由が聞きたいけど?」

「ごめんなさい……」

「もう、さっきからそればかりじゃん。他にさ、ボクに言うことないの?」

ゆっくりとノールは杏里が正座するベットに座る。

それは、自身の気が済むまで杏里を殴り倒すために傍に座ったのだが……

「責任……取るよ」

とても困った様子で杏里は言葉に詰まりながらも言う。

その言葉を聞いて、ノールは今までの怒った表現を一変させた。

「ホント? じゃあ、ボクたちは結婚だね。こんなにすんなり決まるなんて嬉しいよ」

「結婚って、本当にノールちゃんと言ってるの!」

「ボクは本気だけど? だってさ、こつこつ関係になるってことはいずれボクたちの子供が出来るじゃん。さすがにその辺は最初の方に決めてないといけなかって思ってたね」

「じゃあ、ボクと結婚するつもりでHしたの?」

「ボクはそうだけど? 君に誘われた時さ、どうしたらいいのか凄

く悩んだけどね。初めてだし……それに以前みたいな嫌な目付きで身体を見られたくなかったしさ」

「もしも……結婚は早すぎるってことで、ボクが断ったら？」

杏里の一言に、部屋の空気が急激に重く息苦しいものに変化した。

数秒後、ノールは重い口調で静かに語る。

「ボクにしたいだけしといて、君は本当に勝手過ぎるね。断るのだつたら、ボクの限界以上の力を出して今すぐにでも消滅させてあげるよ。絶対に生き返らせてあげない……許してあげない」

とても綺麗な笑顔を浮かべ、ノールはサラっと言う。

しかし、彼女の目は笑っていないどころか強烈な殺意に満ち溢れていた。

その瞳で見つめられた杏里は背筋が凍り付くような程の非常に強い殺意を感じ取り、そしてノールの背後には杏里の方に向かって氷柱が数本出現していることに気付いた。

「スロートではさ、年令が14歳になれば誰でも結婚出来るんだよね。勿論、君も忘れていないよね？ ボクはもう18歳だしそろそろ結婚しなきゃいけないかなって思って悩んだ末に身体を差し出したのに……もし断ったらこの氷柱がどこかに飛んでっちゃうかもね。例えば、誰かさんの首や胸や頭の方とかに」

今まで実感したことのない程の殺意に、杏里は震えが止まらなかつた。

その結果、子供が出来れば結婚をすると杏里はノールに決められた。だが、この時二人はお互いの種族の違いについてを全く考えていなかった。

人間と同じ見た目だが水人であるノールと元々人間である杏里の違いについてを…

翌朝、ノールはキッチンで楽しげな様子で何かを作っていた。

「わぁー、いい匂いだね」

「えへへ、美味しそうでしょー。今、チョコ作ってるんだよ」

レシピが書かれたメモを見ながら、ノールは答える。

「へえ、でも何でチョコを作ってるの？」

「分からない？ 今日バレンタインデーだよ？」

ノールは不満そうに言う。

「何それ？ バレンタインデーって？」

「ジャスティンくんが言ってたんだけどね、好きな人や日頃からお

世話になつてゐる人にあげる習慣みたいなことらしいよ。ジャスティンくんの世界では、そう言う習慣があるからボクもって思つてね」

「ふーん、ジャスティンくんの世界ではプレゼントはチョココレイトって決まつてるんだね。でも、それって何に使うの？」

「使うんじゃないくて、これは食べるんだよ。チョココレイトは物凄く甘くて美味しいんだよ。ジャスティンくんから貰つて初めて食べた時はホントにカルチャーショックだったよ」

「ホントに？ いいな、ボクも食べたいな。ボクにもチョココレイトちょうだい！」

「えっ？ なんで？」

「だって……甘くて美味しいんですよ、チョココレイトって？ それに好きな人にチョココレイトあげるって……」

「君には義理チョコだよ。あと、発音はチョココレイトだよ」

「義理チョコってなに？ 普通のチョコじゃないの？」

「義理チョコって言うのは好きでない人にあげるもの。言わば、社交辞令みたいなものだよ……今、普通のチョコじゃないっていった？ 普通のチョコじゃないのって良いアイデアだね。君のは普通のチョコじゃないようにするよ」

何かを思い付いたのか、満面の笑みをノールは表情に浮かべた。

その表情を見た時、杏里の心境は言うまでもなく複雑だった。

ノールの思い付いたことは間違いなく悪いことであると直感的に思ったからだ。

第一、昨日のこともあるので嫌な予感を杏里はしていた。

「杏里くん、チョコレート食べたいとか言ってるくせに何も手伝わないならどっか行って。邪魔だから、マジで」

目も合わさずにノールは杏里に言う。

微妙に傷付いた杏里は仕方なくダイニングの方で待っていることにした。

「出来たよ、チョコ。皆に配ってくるね」

数時間掛けてメンバー分のチョコを作りあげたノールは、ようやくチョコを配る段階まで来ていた。

しかし、部屋にいる杏里にはチョコレートを渡すどころか視線も合わさずに部屋を出ていってしまう。

自分にはくれないのだと思って、また杏里は微妙に傷付く。

それから部屋に戻ってきたノールはさっきと変わらず笑顔のままだった。

「やあ、杏里くん。今から君のためだけにチョコを作ってあげるね」

「う、うん……ありがとう」

「なんか嫌がってない？」

何故かノールが視線を逸らす。

何か、杏里に感付かれたような気がしたためだった。

そそくさとノールはキッチンへと再び向かう。

それに対し、杏里はノールの姿をずっと目で追っていた。

その時、キッチンの方からノールの声が聞こえた。

「えーと、コールドタルどこに置いたっけな？ あれを魔法で溶かして、ボクの水人の力で冷やしてからひとくち大に整えれば、すぐに出来上がりなのに……これを食べた時の杏里くんの顔を思い浮かべると本当に笑えるね」

ノールの意志が明白に分かった杏里は泣きながら部屋を飛び出した。というか、逃げた。

天使界での決戦

ラミングの一件の後、数日間が経過した。

そんなある日、数名のメンバーがミールの自室に集まっていた。

同じ組織のメンバーではあるが戦争や長旅のせいがお互いのことは殆ど何も知らない。

だからこそ、仲間たちのことが知りたかった。

「今日は予定上、僕、ジャスティン君、ルウ君、ジーニアス君の四人だけだよ。皆、集まってくれてありがとうね」

ミールが他の三人に言う。

「ところで、ミール。これって何するの？ 一応、同室だから僕も参加するけどさ」

「僕たちはお互いのことって何も知らないじゃん。お互いのことをもっと知りたかったから一緒に話し合おうと思ってね」

「ふーん」

「じゃあ、僕から。僕はミール、魔法使いなんだ。家族は姉のノーエルと妹とのエールがいるよ」

「ミールも両親がないのかい？」

ミールの言葉にルウが反応する。

「ルウ君もいないの？」

「そうだよ。僕と兄さんは奴隷だったからね」

ルウの発言で室内は静まり返った。

「えっ？ どうしたの？」

「ルウ君、それって本当？ 奴隷って？」

「本当だよ、今でもそうなんだから」

「そうなんだ……」

「で、ルウ君を買ったのは誰なの？」

特に何も気にしていない様子のジーニアスがストレートに聞く。

「ちよっ、ジーニアス……」

ジャスティンが止めようとする。

「それでね、僕と兄さんを買ってくれたのはスロート隣国のロイゼン魔法国家城主ジークハルト様だよ」

「へえー、そうなんだ。その人、奴隷を買う割りには優しいんだね。ルウ君に強制させないみたいだしね」

「そうだね。ジークハルト様は奴隷を奴隷とは見ない人だもん。僕たちにも権利があつて、自分自身の幸福のために生きていいって初めて言ってくれたんだ……だから、僕はあの人に生涯尽くそうと思つてる」

「じゃ、今は？」

「修行中だよ。ジークハルト様が許してくれたの。必ず強くなつてジークハルト様にまた仕えるんだ」

「次は僕が言つていいかい。先に皆にも聞きたいからね」

ルウの話を聞いていたジーニアスがルウたちに語る。

「僕は見ての通り、エルフ族。ところで、エルフって何だか分かる？」

「ジーニアス君を見るまでは森とかに住んでるイタズラが好きな精霊だと思つてたけど」

ミールが思っていたことを口にする。

「そう、それだよ、それ！」

怒った口調でジーニアスはミールに迫る。

「おかしくないか、そんなの！ 僕らがどんだけその悪質なステレオタイプに悩まされているのかなんて一度だって考えたことないだろ！」

「う、うめん」

詰め寄られ反射的にミールは謝る。

「っていう訳で、僕と兄さん、姉さんはエルフ界から来たんだよ。いずれは、そう、いずれは僕たちエルフ族が優秀な種族だと、エルフという言葉聞いた瞬間に分かる程の実績を上げてみせることが僕らの使命なんだよ！」

「なんか凄い使命だね……」

「でしょ……でも、人の価値観なんてどう変えればいいんだか。第一、僕らの使命を兄さんや姉さんは忘れてるし」

「ジーニアスの兄弟って、あのステイとの戦争で一緒に戦った人だよね」

ルウが思い出したように言う。

「そつ、クレヴァーとワイス。あの二人はね、僕に何故か女装を……」

「女装？」

その瞬間、はつとした表情をジーニアスはする。

「わあ　！　何でもないから忘れて！」

「はいはい、要するにジーニアスは女装大好き少年なんでしょ？」

ジャスティンがつまらなそうに軽く流す。

「違つて言つてるだろ！　じゃあ聞くけど、ジャスティン君だつて男装してるじゃないか！」

「僕はいんだよ。男の子だからね」

「……そうなの」

沈んだ様子でジーニアスは話すのを止めた。

「まつ、いいや。ジーニアス、後で本当のことをミールがいない時に話すから」

「なんだよ、やっぱりそうなんじゃないか」

落ち着いたようにジーニアスと言う。

「あの、ジャスティン君、ジーニアス君。さつきから君たちは何を言つてるの？」

二人の話を理解していたルウとは違って、ジャスティンを未だに女性とは認識していないミールはかなり戸惑っている。

「後で考えれば？」

ジャスティンはまた軽く流す。

「じゃあ、次は僕の番か。全く皆、凄い過去や使命があるから僕は全然話すようなことないよ」

と言いつつも、ジャスティンはかなりテンションが高い。

「僕は、ジャスティン・ルシタニア。エリアースの名家出身者だよ。ふふっ、つまり貴族でお金持ちさ！」

「お金持ちなの、ジャスティン君って？」

何故かミールが速攻で食い付く。

「お金持ちってどのくらい？」

「まあね、アースでは……あっ、ごめん。自世界ではエリアースのことを地球って言うんだ。変な名前でしょ？僕は共通の呼び名であるエリアースの方が好きなんだ」

「あの……ジャスティン君」

「あー、ごめんね。ルシタニア家はエリアースで五番目にお金持ちなんだよ」

「いーなあ。僕に少し分けてくれない？」

「えっ？ あははっ！ミール、本気で言ってるの？」

「うん、本気だよ。家が更地になっちゃったから……」

「あっ……」

ジャスティンは笑うのを止めた。

「そついや、ジャスティンはどうして男装してるの？」

フォローするようにルウが言う。

「おー、よく聞いてくれたよ。実はね、僕に兄貴がいるじゃん」

「ああ、ヴェイグさん？」

「うん、ヴェイグ。ヴェイグはさ、性格も善いし優しいし有名大学を卒業したのに……ニートだったんだよ」

「えっ、有名大学？ ニート？」

他の三人ともジャスティンの話した単語が分からない様子。

それでもジャスティンは話を続ける。

「で、兄貴をニートじゃなくさせるため仕方なく僕が男性しか入会出来ない厳しいハンター養成所へ一緒に入ってやったの。今じゃ、あの優男で“働いたら負けかなと思ってる”とか“働きだしたら、一生損”ってバカなこと言っていた兄貴もサイズっていう鎌を片手で振り回せるような実力者になったわけ」

「ところで、ニートや有名大学って何？」

「へえ？ ……ああ、ニートっていうのは働かず戦わずの何もした人だよ。あと、大学ってのは勉強をするためのところだよ」

「ああ、つまりアカデミーね？」

ジーニアスが反応する。

「まっ、そうゆうところ。ジーニアスも学校行ったんだ」

「とっつぜんさ！ 勿論首席だったよ、僕は！ このジーニアスという名もその時に貰ったんだよ！」

自慢げにジーニアスは語る。

「頭が良いのに女装好きじゃね……」

「何か言ったかい、ジャスティン君？」

「うっん、なーんにも？」

「そろそろ僕も言っていいかい？」

ミールが他の三人に訊ねる。

「一番最初に何か言ったじゃん」

「あれだけじゃ、ちゃんと僕自身のことを話したことはないよ。僕にも言わせてよ」

「良いよ。でも、ミールは自分のことシスコンだってバラしたいだけでしょ？」

「ジャスティン君……」

微妙にミールはショックを受けた。

「まっ、まあ、気を取り直して。僕はモンスターハンターに入る前は……」

「魔法使いだっただんでしょ。さっき聞いたって」

「それもそうだけど、僕はギャルソンだったの。貴族の人たちがくるカフェのね」

「ああ、ボーイね。僕も城でやってたよ」

少し嬉しそうにルウが答える。

「うっ……僕だけが普通な感じがする」

「そんなことないよ、ミール」

やけに優しくジャスティンが声を掛ける。

「ミールだけ貧乏だし、洗脳されたことがあるし、家が燃えたじゃん」

「……………」

ミールは勝手に流れてしまった雫を顔から拭った。

「ごめんごめん、冗談だよ、ミール。まっ、内容は事実だけどね」

ジャスティンが慰めようとする。

「ところで、ミール。ノールさんってどうして自分のことを“ボク”って呼ぶの？ 普通、“私”って呼ばない？」

「言われてみればそうだね」

ルウの問い掛けにミールも不思議に思う。

「姉さんは僕ら姉弟が孤児院暮らしだった頃から一人称が“ボク”だったよ。理由を聞いても僕のためだって言って正確なことを教えてくれないの」

「ふーん、なんか不思議だね」

その同時刻、綾香とテリーは自室で会話をしていた。

「私、ルーメイアに帰ろうかしら」

「綾香さん、帰っちゃうの？」

「ううん、それほど帰りたいう訳でもないのだけだね」

綾香はテーブルの椅子に腰掛ける。

「オレに故郷はもう……無いから、帰れるところがあるのって羨ましいな」

ベッドに腰掛けながら剣の手入れをしていたテリーだったが、その一瞬だけ言葉が詰まる。

その時のテリーは普段とは異なる悲しげな表情を浮かべていた。

視線を感じ、はっとしたようにテリーが綾香の方を見ると案の定綾香がじーっと見つめていた。

「どうしたの？」

今さっきの自身の顔を見られたかなとは思いつつも普段通りの口調で語る。

「なんか、テリーちゃんってさあ。いつも男の子みたいな服装ね」

「今まで動きやすさだけを重視してたから」

質問に対して、テリーは速答する。

テリーに取って男装をすることはコンプレックスでしかなかった。

「まあ、そうよね。戦闘中にスカートなんて履いてたら見えちゃうもんね。見せ過ぎてたら露出狂っばいわね、それは幾らなんでも気持ち悪いわ。あっ、そうだ！」

何かを思い付いたのか綾香は自身のクローゼットを開け、ごそごそと何かを探し始める。

「綾香さん？」

「室内にいる時くらいはテリーちゃんも女の子らしい服を着ましようよ。ちょっと待っていてね、似合うのを探してるから」

「……ってことは綾香さんの服を着ていいの？」

「勿論よ。でも私のルールには従ってもらおうわ」

綾香はテリーに自らの服を何着か手渡した後、どこかに行こうとする。

「どこ行くの？」

「貴方の見た目を評価してくれる人を連れてくるわ。貴方は着てみたい服を何着か選んでいて」

数分後、綾香が部屋に戻ってきた。

「はい、皆こつち来て〜！」

綾香は自室にノールとジャスティンと杏里の三人を連れてきていた。

「何か用なの？ 折角ミールたちと話していたのに…」

ジャスティンが綾香に聞く。

「ちょっと、テリーちゃんの服を選んでたから誰かに見てほしくてね」

「テリーさんの服って、カタログで？」

ジャスティンが答える。

「ううん、違うわ。私の服」

「テリーさんが綾香さんの服を着るの？」

「そうよ。あの子、男装することを気にしてたみたいだったからせめて私と一緒にいる時くらいはなっかって感じで」

「へえー、服ねえ。それって、おもしろそうじゃん！」

二人の会話中、それは楽しいことだと瞬時に考えついたノールはつい口走ってしまふ。

「綾香さん、着てみたんだけどどうかな？ オレ……男装する前はドレスとかしか着たことなくてこーゆうの初めてで……」

テリーが浴室の脱衣所から青色のキャミソールを着て出てきた。

「あっ……」

テリーと綾香に連れてこられた三人の目が合う。

「ボクは……急用を思い出したから部屋の外で笑ってくるよ」

「ちょっとストップよ、ノールちゃん。この服が似合ってるかどうかの感想言つてよ」

右手で口を押さえながら逃げるように部屋を出ていこうとするノールの腕を綾香が引っ張り、部屋から出ていけないようにする。

「あの、ボクは何で連れてこられたの？ ボクは女の子の服装なんて見ても分からないよ」

不思議そうな表情で杏里が綾香に聞く。

「何を言ってるの、杏里ちゃん？ どちらどう見ても貴方は女の子じゃない？」

「え、ボクは男だよ」

杏里が男性だと実際には知っているのか微妙ににやけながら綾香が杏里を止める。

その間に、ノールは部屋から出ていった。

「なあ、ジャスティン。やっぱり、オレは男装してた方が似合うのか？」

沈んだ声でテリーはジャスティンに聞く。

この時、ジャスティンは以前のこともあり、テリーにはとても恐怖の印象があった。

「テリーさん、元気出して。ちゃんと似合ってるから…」

しかし、テリーの声が微妙に暗いことに気付いたジャスティンは慰めるように言った。

「オレさ、何だか女として自信が無くなってきたよ…」

「元氣出して、テリーさん……」

気を落しながらも再びテリーは綾香から借りた服を何着か着ていく。しかし、いつも男装をしていたからなのか似合ってはいるが見た目に妙な違和感があった。

何か綺麗な若い男性が女装をしているような……そんな違和感が。

そして、いつの間にか室内に戻っていたノールは笑いを堪えるだけで既に精一杯だった。

そんな笑いを堪えるノールにイラつきながらも、ますますテリーは自信を無くした。

「オレはこれからも男物の服を着るよ……」

かなり気を落した様子でテリーは呟く。

「テリーさん、もう着替えないの？ 可愛かったのに……」

「そんなのどうだって言いだろ！ お前、男のくせにオレの着替えをさつきから見てもんじゃねえよ！」

自らの着替えを普通に見ていた杏里を殴る。

「やあつ……いたいよ……」

杏里は何故かノールの後ろに隠れる。

「にしてもさ、凄いウケるよね。テリーが女の子らしくすると」

「前から思ってたんだけど、ケンカ売ってるだろ？」

「ようやく、分かったの？ てつきり、今でも気付いてないのかと思ってたよ」

「何だと！」

イライラしていたテリーはノールの両肩に手を押し付け背後に押し倒す。

「わあっ！ いった……なにすんの」

押し倒されたノールはゆっくり立ち上がるとテリーを睨み付ける。

「謝ってよー！」

「ヤダね」

「何で？」

「ケンカ売ってきたのはお前じゃん」

「ノールちゃん、テリーさん。ケンカはダメだよ……」

杏里はテリーとノールを止める。

「杏里、少し黙れ。ノール、お前は表に出ろ」

「もしかしてケンカするの？　そもそも格ってモノが違うから、ボクは全然構わないんだけど」

険悪なムードのままノールとテリーは部屋から出ていく。

「ケンカってさあ、二人ともなに考えてるのかしらね？」

綾香は苦笑いを浮かべながら言う。

全然止める気は無い様子だった。

「止めにいこうよ、杏里ちゃん」

「ボクは今なんで名前に“ちゃん”を付けられたんだろう？」

ジャスティンが部屋を出ていくと、杏里はそう思いながらジャスティンについていった。

城の中庭へと移動したノールとテリーは、やはり戦おうという姿勢を変えなかった。

「ノール、謝るなら今のうちだよ？」

「何言ってるの？　何でボクが謝らないといけないみたいに見えるわけ？」

静かに水竜刀をノールは作り出す。

それを見たテリーは鞘から剣を抜く。

「ジャスティン君、止めないの？」

物陰に隠れている杏里がジャスティンに聞く。

「ねえ、どっちが勝つか気にならない？」

「気にならないよ！ 早く止めるよ！」

杏里が止めようとした、その時。

「ソレイユ！」

殺那的にノールは天使化し、神聖魔法ソレイユを放つ。

ソレイユの光の波動はテリーを完全に捉え命中し、地面に転倒させた。

だが、魔族ではないテリーに神聖魔法ソレイユは大した威力を示さない。

どちらかというと、ノールはテリーを傷付ける気などなかった。

それに対し、ソレイユを受けたテリーは即座に体勢を立て直そうとする。

…が、テリーが体勢を立て直す前にノールは接近し、テリーの腕を蹴り上げ、持っていた剣を弾き跳ばす。

次の瞬間、ノールがテリーの首筋に水竜刀を突き付けた。

「はい、ボクの勝ちね」

「……………」

テリーはノールを見上げる。

テリーの目には既に敵意が無かった。

「どうしてかな………… オレはどうしてこんなに弱いんだろうな?」

蹴られた腕を押さえながら、落とした剣を見つめ泣き始める。

「テリー、どうしたの?」

ノールの問い掛けにテリーはただ俯いたまま泣き続ける。

「な………… 泣かないでよ、テリー。ボクが悪かったから」

水竜刀を昇華し、テリーに近寄るとノールはテリーの背中を優しく擦った。

「違うの、ノールが悪いんじゃない。今まで男装までして戦うためだけに生きてきたのに自分が弱くて何も出来ないって分かったら勝手に流れてきたんだ…」

「いつもと性格違うじゃん。なんか全然テリーらしくないよ、それじゃ」

「オレだって……女なんだよ。泣いたっていいじゃん……」

「……ゴメンね」

その風景を見て、物陰に隠れていた二人は話す。

「何言ってるのか全然聞こえないけど仲直りしたのかな？」

テリーとノールを眺めながらジャスティンが言う。

「たぶん。ノールちゃん、テリーさんのことを気遣ってるみたいだつたし、もうボクたちが止める必要はないね」

「じゃ、行こっか、杏里ちゃん」

「ジャスティン君。何でボクの名前に“ちゃん”を付けるの？」

「年令も近いし、女の子同士だから別に“ちゃん”でもいいかなっと思ってただけど……やっぱり、君には“さん”を付けた方が僕はいいのかな？」

「ボクは男だよ？」

「ええっ！ ウソつかないですよ！」

「ほ、ほんとだよ！ ほらあー！」

焦った杏里はジャスティンの手を掴むと、自らの胸に押し付ける。

「……あれ、貧乳？ 杏里ちゃん、綺麗なのに僕より小さいね。しかも同姓だからって胸に手を押し付けさせるなんて大胆」

「だから、違っつたら！」

言い合いながらも杏里たちは、テリーとノールから離れていった。

数分後、綾香の部屋にノールとテリーも戻ってきた。

「ねえねえ、二人で殴り合ったの？ もう青春なのね、貴方たち！」

綾香が二人を笑顔で迎える。

「殴り合うことが青春なの？」

「違うよ、杏里くん。綾香さんは、そーゆーのが青春だと思ってるだけだよ」

杏里の問い掛けにジャスティンが答える。

「綾香さん、この服を返すよ」

室内に戻ったテリーは借りていた服を綾香に渡す。

「なんで？ 折角似合ってたのに残念だわ」

綾香は本当にテリーに似合っていたかと思っていたらしく、ガツカリしていた。

「ねえ、テリー。さっきはゴメン……」

「いいよ、もうオレはこれ以上強くなれないって分かったしな」

ついさっきの戦いでテリーは何かを悟ったようだった。

これが変化すら出来ない普通の人間である自分と他種族の力の差だと。

すると突然、キッチンの辺りから強力な魔力が発せられる。

「テリーっっているかい？」

強力な魔力の感じられた場所にルミナスが現れた。

空間転移により、何処からか現れたようだった。

「お前は……」

瞬間的にテリーは剣を構える。

「落ち着いて。私は別に戦いに来たっていう訳じゃないよ」

ずかずかと室内を歩くルミナスは勝手に部屋のテーブルに着き、足を組むと再び話を続ける。

「テリー、貴方が魔族化出来なかったことだけど理由は簡単。貴方が“聖帝”だからだよ。私は本気で驚いたよ。なにせ、この総世界でただ一人の存在とお目にかかれたのだからね」

「何を言ってるんだ……？」

「惚けないで、もう私は理解している。とにかく、貴方は……ああ、いいえ。貴方は人間と聖帝以外の変化をすることはこれからも一切出来ません。ですから魔族になることは諦めて下さい」

突然、ルミナスはよそよそしくも口調を正す。

その後、異世界空間転移を詠唱し、ルミナスは消えた。

「なんだよ……聖帝って」

「確かに気になるね。聖帝なんて種族、ボクも聞いたことないよ」

「図書館で自身が何なのかを調べてくるよ。ルミナスでも分かるならきつと情報が無くとも取っ掛かりくらいは……聖帝ってのがどうゆうモノかをオレは知りたいよ……」

宙に向かってただ構えていた剣を鞘にしまい、テリーは部屋を出ていく。

「ボクも行くよ」

ノールもテリーについていった。

それから、二人は図書館で数時間掛け、聖帝に関する書籍を探す。

しかし、結局二人はそれに関する書物を何も見付けることが出来なかった。

それはこの世界では人間以外の多民族に関してすらも情報が乏しいからだろうということしか二人は分からなかった。

「テリー、もう諦めよ。見付からないんだし……」

「いや、まだ……もう少し探すよ」

「あつ、そうだ」

この時、直感的にノールはアクローマなら何かを知っているかもしれないと思った。

「もしかしたら聖帝に関してを天使界にいる人なら知ってると思うから、今から行くこうかなって思ったんだけど、テリーも一緒に行こうよ」

「オレは止めとく。知りたいけど、その天使界には行っちゃいけない気がするんだ」

「そう……」

ただ黙々とテリーは聖帝に関する書籍を探し続ける。

「やっぱり、テリーも人間じゃなくなることが恐いんだね。ボクは天使になれた時、凄く嬉しかったけどな……あれ、嬉しかったんだっけ？」

そんなことを一人考えながら、ノールは図書館を出た。

「あつ、姉さん、どこ行ってたの？」

ノールが自室に戻ると杏里の他にミールがいた。

「姉さん、あのさ。僕、聞きたいことがあるの。何で姉さんは自分のことを…」

「天使界に今から行かないかい？」

「えっ？」

「それじゃ、魔法を使っよ」

二人が天使界に行くかどうかも聞かないうちにノールは魔法を詠唱する。

一瞬に近い早さで天使界に移動し、アクローマの宮殿の前に出現する。

「それじゃ、行くよ」

ノールが勝手に仕切りながら、ノールたちはアクローマに会うため玉座の間まで歩く。

「あの、ノールちゃん」

「なに、杏里くん？」

「何で天使界に？」

「ちょっと、アクローマに聞きたいことがあったから来たんだよ。一人で行くのは寂しいから二人も連れてきたの」

「そうなんだ。遊びに来たのかと思ったよ」

話しているうちに三人は謁見の間まで着く。

普段ならいつも閉まっているはずの扉が開いていたので入ってみると、いつもならいるはずのアクローマが謁見の間にいなかった。

仕方なく謁見の間にいた天使にノールは声を掛ける。

「ねえ、アクローマって知らない？」

「アクローマ様かい？ 今は確か、邪神の攻撃を防ぐための作戦を戦略室で立てていらっしやるはずだよ」

「戦略室にいるんだね。教えてくれてありがとう」

「……あれ？ もしかして、貴方は大天使長ノール様ではないでしょうか？」

「そうだけど、何かボクに用かい？」

「でしたら、今すぐ戦略室に向かってください！ 現在、天使界へと邪神の軍勢が侵攻してきているんです！」

「何でわざわざボクが……？」

焦っている天使に手を引かれ、ノールは物凄く急かされながら戦略

室へと連れていかれた。

仕方なく、ノールを杏里とミールは追い掛ける。

「ここが戦略室です。お入り下さい！」

焦っている天使が戦略室の扉を開けると、ノールを無理やり室内へと押し込む。

その室内には智天使や熾天使などの上級天使たちの姿があった。

「ノールじゃないか……何しに来たんだ？」

室内にいたレイディアントが訊ねる。

「何しに来たかだって？　なんか謁見の間に行った天使がボクたちを無理やりここに連れてきたの」

明らかにムツとしたような表情をノールはする。

「そうか。だとすればもう知ってると思うが邪神ミトスという者がこの天使界を侵略しようとしている。無論、手を貸してくれるな？」

「どうする、ミール、杏里くん。ボクはもう帰ろうと思うんだけど
すらっと言ったノールの言葉に杏里とミールが驚く。

「帰らないよ！　こつゆう場合、絶対に助けるべきだよ！」

「あっそう。だったら手助けしてやるじゃん！」

ノールはさつきと変わらず嫌そうな表情をする。

「一応、聞くけどさ。ミトスって誰？」

「ミトスというのは私にも何を考えているのか全く分かん。リベラル派だと毎度のように語っているが奴はそもそもリベラルの意味が分かっていないに違いない」

「なんなのか全く分からないんですけど？」

訳の分からない説明をレイディアントがべらべら語っているとさつきとは別の天使がとても急いだ様子で戦略室に入ってきた。

「敵襲です！ 前線での報告よりも早い奇襲攻撃です！」

「どういうことよ、それって！ 今回の情報、偵察関連はラーズの担当でしょ！ さつきと情報が全然違うじゃないの！」

戦略室で指揮を執っていたアクローマが本気で怒鳴る。

「邪神ミトス側にラーズ様が裏切ったとの報告もあります！」

「はあ？ どうしてよ！ あの子は智天使階級なのよ！ どうして私たちを裏切るのよ！ こうなったら全軍突撃よ！ ミトスをぶっ飛ばしに行くわ！」

怒鳴りながらもアクローマは戦略室にいる天使たちに命令を発する。

命令を受け、室内の天使たちは戦略室を急いで出ていく。

ノールたちも彼等に続くよう急いで宮殿の外に出た。

そして、先に出て行った上級天使が多数の天使たちを率いながら飛び立っていくのと一緒に空中へと舞い上がった。

「これってやっぱり空中戦になるんだよね？」

ぱたぱたと羽をはためかせ、空を飛行しながらミールはノールに聞く。

「そうだね、空中で戦うなんてボク自身も初めてだよ。そういえば、ミールはどうして空を飛べるの？ ボクと一緒に飛ぶ練習しなかったよね？」

「僕はスロートで練習したの。途中、綾香さんに“天使がいる”とか言われながら何度か魔力で作られた網で捕まえられたけど……」

「なにそれ……まあ、あの人ならやりそうかな。ところで、あれ何？」

ノールたちの向かう空の方角に、多数の影が迫っていた。

「スクランブル（緊急迎撃態勢）の構えになれ！」

その時、大天使長であるレイディアントが天使全員に号令を発する。即座に飛行していた天使たちはその号令に従い陣型を整え、突撃の態勢を崩さない。

邪神ミトス側の軍勢は悪魔が数万近くの大軍。

アクローマ軍も天使が、大体同じくらいの数だった。

「見ていても分かるけどこれだけいるんだからさ、後ろの方でゆっくりしてない？」

戦うのが面倒なノールは杏里とミールにその話を持ち掛ける。

「ダメだよ、ノールちゃん。天使界を守らないといけないんだよ。さっきの天使さんがノールちゃんに大天使長つて言つてたけど、それって多分強い人のことでしょ？ だったら尚更最前線で他の人たちを守りに行かないと……」

「どういう持論を君は展開しているんだい？ つまり、杏里くんはボクが大天使長だからってわざわざ最前線まで行つて怪我をしろつて言いたいのかい？ 君は怪我をして弱っているボクの姿が見たいのかい？ 杏里くん、酷い。見損なつたよ」

「そう言われても……」

連続で不満を言われたため、杏里は困ってしまった。

「でも、ボクは傷付いて弱っているノールちゃんを守ってみたいな」

「ないない、君に守られるなんて一生無いね」

一進一退で激戦が続く中、戦場から少し離れた雲の地面で戦いを見上げている人物がいた。

その人物の名は、ミトス。

魔族を統括する邪神の位置に存在するミトスが戦いの風景を眺めながら、自らに下ったラーズへと声を掛ける。

「ラーズ、君の言った通り天使たちは急いで立ち向かってきたね。ところで、君はどうしてアクローマを裏切ったりしたのだい？ あんなに良い子なのに？」

「アクローマ様は最近人格が変貌し過ぎており、あの崇高な強さもカリスマ性も身を潜めてしまった。もはや、アクローマ様についていく気が失せてしまったのだ」

ミトスの問い掛けにラーズは答える。

「そうかな？ 君からは未だアクローマに対する揺るぎない尊敬の念が感じられるのだがね？ だとするならば、その気持ちは大切にすると良い」

「良いのか、それでも？」

「自由だ。今頃、私に忠誠心を払えとは言えない。アクローマの下に戻りたいのならば、好きな時に戻って良い」

「そんな簡単でいいのか？ 私はアクローマ様を裏切ることともこれから邪神に仕えることも真剣に考えて……」

「それも、自由だ」

「そうか……ミトス、貴方からはアクローマ様とは違う他のカリスマ性を感じるよ」

「私にカリスマ性？　ハハハ、私にそんなものなどないよ。もしあるのだとすれば、是非ともカリスマ性とやらを發揮してみたいものだ。そういえば……アクローマが職務中に玉座で堂々と寝ているとは本当なのかな？」

「なっ、そんなことまで魔界に知れ渡っているのか？」

啞然と落胆が混ざったような反応をラーズは示す。

「そろそろ私も戦いに行くよ。あと、ラーズ。君にはこの戦いに参加してほしくない。これだけの天使の数だ。間違えてしまう可能性がある」

魔天使化特有の漆黒色の翼を広げ、ミトスは空を飛翔する。

一方その頃、ノールは接近してきた明らかに格下レベルの悪魔の攻撃を水人化した状態、つまりは身体を水にし打撃を無効化出来る状態に変化していたというのにわざとらしくダメージを受けたかのようになりアクションをし、空から落下しようとしていた。

「うわー、やられたー」

「ちよっ、姉さん！　真面目に戦ってよー！」

棒読みで何かを言いながら落下していくノールの腕をミールは掴み、勝手に落ちていけないようにする。

「いいじゃん、眠いんだから。ボクは雲の上で寝ていたい。ほら、それに見てよ、この傷。致命傷だよ」

「姉さん、いい加減にしてよ！ 僕だって怒るよ！」

「じゃあ、杏里くんと二人で悪魔たちを倒してくればいいじゃん。あつ、それじゃあ、急用を思い出したからボクは雲の地面で寝てる……傷を癒しているから」

ミールの手を振り払ってノールは落下していく。

「姉さん……」

落下していくノールをただミールは眺めていた。

そのミールたちから離れた位置でミトスが天使たちを薙ぎ払いながらミールたちに接近してきた。

「弱いね、簡単に捨てる命なら最初から降伏すれば良いのに」

ミトスは尋常ではない強さで迫ってくる天使たちを一撃で撃破する。

「主力級天使がいないみたいだね。普通の天使だったら油断でもない限り攻撃なんて当たりもしないからね」

戦いの最中、ミトスはそのことを考えている。

彼は幾度も天使界を侵略していた。

だが元々、天使と悪魔又は魔族の実戦演習のためにこの戦いは行われている。

侵略が名目上のことであると知っている人物はミトス、アクローマ、それに近い側近のみ。

しかし、今回は違った。

わざわざ天使であるラーズを味方に引き込んでまで戦いを早期に行わせなければならぬ理由があった。

「ん……！」

ちょうどその時、雲の地面で寝ていたノールにミトスが倒した天使が落下し直撃した。

呻き声に似た声を出しながら、ノールは天使を退かす。

「……生きてる？」

ノールは天使を揺すって目覚めさせようとする。

しかし、その天使には既に息が無いことをノールが知り、以前失ったはずの許せないという感情が芽生え、ノールは空へと飛翔した。

「ミールと杏里くんにひとまず会いたいな。でも、これだけの数じゃ……」

ノールは周囲を見渡す。

宙に浮かぶノールの周囲、つまり自身の下方でも多数の天使、悪魔たちが戦い合い、何処を集中的に見れば良いのかまるで分からないような状態だった。

「そこ、君」

そんな中、ノールに声を掛ける人物がいた。

ノールは反射的に声のする方を見る。

その声の主は自らの前にいた。

「私の接近に直ぐ様気付けないのだとすれば、戦いの場だということに君は本当に緊張感が足りないな。恐らく、何かを探していたのだろうけど、その前に自らが死んでしまつては意味が無いだろう?」

「なんか用ですか?」

「勿論、用ならあるよ。魔王クラスの魔族を倒せる程の力量を持つ女性天使と是非とも戦いたかった。相手をしてくれるね?」

「魔王クラスの?」

何となく、ノールはルミナスを思い出す。

「あんなに良い子なのに、一体誰があのよ様な仕打ちしたのだろうか? 私には全く分からない……理不尽だ」

「それってさ、ルミナスのこと？」

「知っているのか、君は？」

「ボクがやつつけた人だし」

「そうか。そういえば、君は安らかな死を手に入れた男の子に似ている。そうだな、顔立ちも近いことだからもしかしたら姉弟だったりするのかもしれないね」

「安らかな死って……誰のこと言ってるの？」

「綺麗な金色の髪をした君に似ている男の子だよ。彼の胸を貫いた時、彼の傍にいた眼鏡を掛けた女の子が“ミール君”と叫んでいたから、ミールという名の男の子だったんだね」

笑顔でその内容を話すミトスに対し、ノールの内では何かが弾けた。

「ふざけてんのか！」

速攻でノールは神聖魔法プラネットを放つ。

しかし、強力な魔法障壁を張っているミトスにはプラネットは当たらず、彼の目の前で消滅してしまった。

「強力な魔法だ、まだ幼ささえうかがえる程の君が扱えるとは到底思えなかった魔法だ。優秀だな、君は。だが、君は不意打ちを仕掛けるのか」

ミトスは深く溜息を吐く。

「な、なんで魔法が効かないの？ だったら水竜刀で……」

何故ミトスに魔法が効かないのか、ノールには分からない。

怒りにより興奮し、我を忘れたノールが魔法障壁という能力を忘れてしまったことが原因だった。

「そうか、次は接近戦か」

焦っていたノールには目で追うことの出来ない速度でミトスが急激に迫り、瞬時に魔力を宿らせた右手でノールの胸を貫いた。

「どうして、ルミナスを傷付けたか……理由は分かっている。自身の力を確かめなかったのだろうか？ 君の得意な不意打ちで。何故、正面から堂々と立ち向かわない。“彼女”が一体何をしたというのだ？」

いつの間にか自らの前にいるミトスの声を聞くと、ノールは胸に痛みを感じた。

自身の身体に視線を落とし、出血していると悟る。

ノールは空から落下していった。

落下していったノールを見下ろし眺めながら、ミトスは退却を考えていた。

「私の気は済んだ。標的は消えた。これ以上の戦いは部下の者たちに迷惑を掛けてしまうな」

その頃、ノールは落下している途中に気付いたレイディアントに受け止めて貰っていた。

「しっかりしろ！」

「……………」

胸に致命傷を受けているノールは、ある方向を視点の定まっていな
い虚ろな瞳で、じっと見つめたまま何も反応が無い。

「死ぬなよ、ノール！ 回復魔法を掛けてやるからな！」

レイディアントが彼女に必死に呼び掛ける。

その呼び掛けが良かったのか、ノールに反応が見られた。

「悔しいよ。どうしてミールは死なないといけなかったの？ おかしい、こんなの間違ってる。あいつだって死なないといけない……」

うわごとのようにノールは何かを語っている。

その瞬間、ノールの身体が突然光り始める。

ノールの身体には新たな変化が起き始めていた。

「なんだ……………何が起きている？」

「すみません、レイディアントさん。離してください」

「あつ……ああ」

既に意識を取り戻していたノールをレイディアントは離す。

レイディアントから羽ばたいたノールの背には通常なら二枚となっている天使の翼が六枚になっているのが確認出来た。

ノールの身に起きた現象に気付いたレイディアントは、ノールにそれを知らせようとしたがレイディアントの話を聞かずに飛び立つ。

ノールの向かう先はただ一つ。ミトスのもとであった。

「君なら来るだろうと思っていたよ。レイディアントが君を救うのを確認出来たからね」

再び自らのもとに舞い上がって来たノールを確認する。

「ボクがお前を倒すんだ！」

自らの魔力を一つにノールは収束させた。

膨れ上がる魔力の異常な高さにぞっとする程の身の危険をミトスは感じ、魔法障壁を強めようとする。

それと略同時に、ノールは魔法を放つ。

「エデン！」

エデンという魔法をノールが放つと、ミトスの下の空間に巨大な魔方陣が出現し、巨大な光の波動が上空にいるミトス突き抜けてい

った。

エデンの威力は何十にも張り巡らせたミトスの魔法障壁を完全に破壊したため、かなりのダメージをミトスは受けた。

「これだから神聖魔法は止めてほしいね…」

「ミトス様！」

悪魔がミトスに焦った様子で声を掛ける。

「どうしたんだい？ やつと、倒すべき天使を見つけたと思ったところだったのに。ルミナスのために倒さなくてはならない」

「我が軍の被害が甚大です。今回も退却しましょう！」

「分かっている。だからこそ、愚痴を言わせてもらった。でも、最後まで戦わせてほしかったな」

ミトスは悪魔と会話しながら、破壊された魔法障壁を復元する。

「ちょっと待つてよ、逃げるの！」

ノールは怒声を上げる。

「そうだよ、今から逃げるんだ。それ以外ない」

その後、ミトスの軍勢は全軍退却した。

ミトスの軍勢が退却してから残されたものは天使、悪魔の死屍累々。

それを目の当たりにしたノールは暫らくの間、呆然としていた。

「大天使長様」

「うん……？」

「お疲れのように見えます。私たちが死人をリザレクで復活させますので先に宮殿へとお帰り下さい」

ノールが周囲を見ると他の天使たちが死んだ天使と悪魔たちを生き返らせていた。

生き返った悪魔は敵であるはずの天使に礼を言いながら退却していく。

「リザレクを詠唱すれば生き返せるんだっただね。すっかり、ボクは忘れてたよ。でも……戦ってた相手に礼を言うなんて今まで何の為に戦ってたのか分からないじゃん」

死んでしまっている天使や悪魔をノールも生き返らせながら、アクローマの宮殿へと帰還した。

「姉さん！」

宮殿に戻ると宮殿の外で待っていたミールがノールに抱き付いてきた。

「どづしたの、ミール？」

「僕は死んでしまうのかと思ったよ。ミトスって人が僕の胸の辺りを手で突き刺して……回復したかったけど声が上手く発せられなくて、それで血が止まらなくて……」

怖かったのか、ミールはノールを強く抱き締める。

それからミールは黙ってしまった。

「ミール？」

ノールはミールの頭を優しく撫でる。

「僕は……その後のことを覚えてないの」

「ミール、大丈夫だよ。ミールは何処も怪我してない。きっと攻撃を受けた時に気を失っちゃっただけだよ」

ノールもミールを強く抱き締める。

ミールの身に起きたことをノールは知っていた。

だからこそ、嘘を吐いた。

死んでしまったことにより受けた恐怖をミールから少しでも拭えな
いかと思って。

「ありがとう、姉さん。もう僕は大丈夫だよ」

ミールは恥ずかしそうにノールから離れる。

「そういえば、アクローマさんが姉さんを戦略室まで呼んでって言ったよ。なんかあったのかな？」

「いつもの無駄なお願いをしてくるんじゃないかな？」

溜息を吐くとノールはさつさと宮殿内へと入る。

それにミールも続いた。

「呼んだかい？」

ノールが戦略室の扉を開ける。

戦略室の扉を開けると、さつきと同じ熾天使、智天使の顔触れと共にアクローマがいた。

「ノールちゃん、貴方を待っていたわよ！」

「ん？　なんで？」

「それは勿論、この天使界で150年振りに女神化出来る天使が現われたからに決まっているじゃない。本当に凄いわ！」

「女神化って？」

「貴方は女神化の意味も分からないのになれたの……これは本当に凄いわね。いい、ノールちゃん。女神化って言うのは私たち女性天使の最上級形態よ」

「なんか、よく意味が分からないんだけど……」

「せっかちなね、本当にせっかちなんだから。私が説明しているんだから最後まで聞きなさいよ。少しは心にゆとりを持ってみたらどうなの？ 女神がヒステリックじゃ話にならないでしょう？ ふふっ、若いのにヒステリックなんて将来どうなるのかしら。笑っちゃわ」

「ねえ、アクローマ」

「なあに？」

「マジでぶん殴っていいかい？」

「……ひとまず、公式的な形態は全部で四つあるわ。一つ目は現在の天使である状態。二つ目はエターナル化。三つ目はハイエターナル化。最後に女神化ね。私は……まあ、私のことはいいわね。私は道を踏み違えてしまったのだから」

「話を上手く逸らしたつもりかい？」

「それでね、この女帝にならない？ 貴方にだったら全部任せられるわ」

「すみません、ホントに勘弁してください」

「なんでよ……もう！ 楽が出来ると思ったのに」

「そんなことだろうと思ったよ。アクローマも案外簡単なんだね」

「一々、アクローマを相手にするのが面倒になったので、ノールたちは戦略室を出ていった。」

「やあ、ノールちゃん」

戦略室の外の廊下に杏里が立っていた。

「そういえば、杏里くんも死んだの？」

「ボクが死んだって……？」

唐突な質問に杏里は戸惑った様子を見せる。

「当たり前じゃん、そんなの。天使界だってことを忘れてるでしょ？ ミールがあれだけのダメージを受けたのなら杏里くんなんて殺されて当然って思うんだけど違うの？」

「じゃあ、あれは実際に起きたことだったんだ……」

不安そうに胸の辺りに杏里は手を置く。

「どうしたの、杏里くん？ 初めて死ぬことが出来て嬉しいのかい？」

「ねえ……ボクのことノールちゃんは心配してくれないのかい？」

「心配って誰を？ ボクはミールのことだけで十分だよ」

「……何でもないよ。愛している人からは心配されるものだど、ボクが勝手に勘違いしてただけだから」

意気消沈とし、表情が消えてしまった杏里は何処かに歩いていった。

「愛しているって杏里くんは言ってたけど……姉さんと杏里くんは今まで付き合ってたの？」

ミールはとても焦っている様子。

「そうだよ、付き合ってる」

「えー！ 知らなかった！」

「そうなんだ」

「だったらさ、姉さんは杏里くんのこと好きなんじゃないの？」

「そう、好きだよ。杏里くんと恋人だとは、一応心の何処かで思ってる」

「そっかあ、姉さんもようやく誰かを愛せるようになっただね」

「愛する……？ そうなんだ、こつゆうのが愛するっていうんだね。どちらかっていうと、この関係はギブアンドテイクだと思っていたけど」

「なにそれ？ 姉さん、好きならなんで杏里くんにあんなこと言ったの？」

「その方がおもしろそうだったから」

「そう……杏里くん、可哀想なくらいガツカリしてたから謝ってきた方がいいよ」

「うん、そうだね。 見てるボクはおもしろかったんだけどね」

ノールは杏里がふらふらと歩いていった方へと走っていった。

その先にはレイディアントが趣味で作り上げた空中庭園がある。

庭園には憩いの場になるようにと観賞用の為、人間界にもあるような木々などが沢山あった。

そこで杏里を彼女なりに頑張って探していると太い幹の木の下で座りながら泣いている可憐な少女がいた。

気付かれないようにノールが木の背後から近付いてみるとそこにいる少女は杏里だった。

「杏里くん」

ノールは後ろから杏里にそっと抱き付いた。

「ああっ！」

驚いた杏里は女性ののような声を上げ、後ろを振り返ろうとする。

その際、杏里の目が少し赤く顔には涙が流れた跡がノールには見えた。

「もしかして泣いてるの？」

「な、泣いてないよ……」

杏里は服の袖で顔をこする。

「もしかして、ボクにフラれたとか思ってたない？」

ノールは杏里の正面に移動する。

「……………うん」

「杏里くん、そんなの嘘に決まってるじゃん。ボクは杏里くんの」と……」

一瞬、口籠もったノールは俯いている杏里に軽く口付けをして抱き付く。

「あっ……………」

「ボクとキスとかしたくなかったの？」

「違うの……………違っけど嬉しくて……………」

「杏里くんって、いつも良い匂いがするよね。身体もボクより細くて綺麗だよ」

「ボクはノールちゃんにカツコイイって言ってほしいな……………」

「はっ？」

笑いを堪えるためにノールは杏里の胸に顔を押し付ける。

「ごめん、絶対に言ってもらえないんだとたつた今分かったよ」

「杏里くん、ボクのこと怒ってる?」

「ボクはノールちゃんのこと全然怒ってないよ。大好きだもん」

「そっか、良かった。じゃあ、ミールのとこまで行く。戦略室辺りに待たせているから」

「うん!」

杏里はようやく笑顔で話した。

しかし、ノールは今だに恋や恋愛の意味がまだ分かっていなかった。

そのためか杏里が言った“大好き”という言葉にも何も反応を示さない。

ひとまず、ノールたちは庭園から戦略室辺りまで戻る。

「あつ、姉さん」

戦略室前で待つていたミールが声を掛ける。

「杏里くんと一緒にいるってことは仲直りしたんだね」

「うん、一緒にいたい気がするし」

「そう……なんだ。そういえば、アクローマさんが姉さんと呼んできたよ。まだ天使について話していないことがあるって言うってた」

「そうなのかい？　じゃあ聞いてあげようか」

仕方なくアクローマの話を聞くためにノールは戦略室に入る。

「遅いわ、ノールちゃん。貴方は何をやってるのよ、もぐ。若いんだから少しは早く動きなさいよ」

「全然関係なくない？　それにさ、ボクにだって色々あったんだし」

「あつそう、ならそのまま話を聞いてなさい。話してなかったけど天使には人間にはない機能みたいなものが存在するのよ」

「えっ、なに？」

ようやく、ノールはアクローマの話を聞く姿勢を取った。

そして、ミールと杏里も天使になれたのでそのことにとっても興味があつた。

「何でこういう時はすぐに反応するわけ？　まあいいけど天使は天使の脳というモノを持ってるわ。それは例えるなら……え」と

「例えるなら、パソコン並みだろう。言うまでも無く、お前のは既にジャンクだろうな」

近くにいたレイディアントが見下げた感じで笑う。

「ちょっと、何言ってるのよ。殴るわよ」

「殴るだど？ ついさっきの戦いで中級悪魔程度にさえもてこずっていた奴のパンチなんて、奇跡でも起こらない限り擦りもしないだろうな」

呆れた様子でレイディアントはさっさと部屋を出ていく。

「ムカつくわ……悔しい……」

「アクローマとレイディアントってどういう関係？」

悔しがっているアクローマにノールが聞く。

「レイディアントは私の親友よ。いつも私のことを守ってくれるの。255年前からの幼なじみ」

「幼なじみね……って言うか255年前って冗談でしょ？」

「冗談じゃないわよ。私の方が貴方よりとっても年上なのよ、尊敬しなさい……ってもしかして天使の寿命のこと話してなかったっけ？」

「うん、話してないよ」

「そうなの？ 説明するけど天使の寿命は簡単に言うと約500歳よ。でも、500歳になっても見た目は30代だから、年を取っても見た目は気にしなくても大丈夫よ」

「つまり、ボクも500歳まで生きられるってことなの！」

本当に嬉しかったのかノールはとても感激している。

「ボクたちもそうだよな？ 500歳って…」

杏里、ミールはノールと違ってアクローマの発言に困惑した。

「受けとめ方は人それぞれのような。どちらにせよ、貴方たちは500歳まで病死でもしない限り生きられるわ。それと……ノールちゃん。貴方には個別に話があるから私と一緒に来なさい」

「えっ……ちょっと、アクローマ離してよ」

アクローマはノールの手を掴み、戦略室から庭園に移動する。

「何で移動したの？」

「あの眼鏡くんには絶対に聞かれない内容だったからね」

「どうして？」

「どうしてって……分からないの？ あの子はどう考えたって桜沢一族だからよ」

「なにそれ？」

「以前に私が話したことじゃないの、貴方たちR一族と昔から敵対している一族なのよ。死にたくないなら今すぐに眼鏡くんを消しなさい」

「やだよ。まず最初に杏里くんがボクのことを殺そうとする理由が分からないし。それに彼はあれでもボクの恋人なんだよ」

「恋人つて……何やってるのよ、貴方は！ まさか、もうしてたりなんかしないわよね？」

「したよ、大体数回くらいかな？ 杏里くんは気持ちいいっていうけどさ、ボクには何も感覚がしないんだよね」

「最悪だわ……どうしてわざわざ桜沢一族と行為をするのよ？ 第一、貴方は自分が何歳だか分かってるの！」

「18歳だけど？」

「ああ、やっぱり……貴方のしていることは完全に背徳行為よ！ 普通、天使は80歳からしたがるものなのに本当にバカなんだから！」

怒鳴ったり、焦ったりしていたアクローマだったがその場に力なくへたり込む。

「いえ、望みならまだあったわ！ 貴方とあの子は水人と人間じゃないの！ だったら、種族の違いから間違っても子供を宿することなんて絶対ないわ！」

「子供を宿することが絶対にないってどうゆう意味？」

「貴方は！ 貴方は知らなくても良いことよ！ そんなに行為をしたいんだつたら天使か水人とすればいいでしょ！」

「違うよ！ ボクだって好きでしてる訳じゃない！ 子供が欲しいの！」

「はあ？ 子供が？」

一瞬、アクローマは考え込む。

「ふーん、そうなんだ〜ノールちゃん。良い、貴方は知らないかもしれないけど生物には種族という物があって、その種族同士でしか妊娠することは出来ないのよ。つまり、水人の貴方と人間の眼鏡くんには子供なんて初めから出来るはず無いのよ、バカねえ」

「ウソ……」

信じられない事実を聞いたノールは黙ってしまった。

「はあ〜、もうビックリさせないでよ。今の貴方の反応を見れば、もう安心よ。これで貴方の“一子相伝の力”が桜沢一族ごときに流失することはまず無くなったわ。これで、あの眼鏡くんには用なんて無くなったわね。私も手伝ってあげるから貴方や貴方の一族のために眼鏡くんを消しましょう」

「やだよ！ ボクは絶対にそんなことしない！」

事実を知り、呆然としていたノールだったが、そう叫んでアクローマから逃げ出す。

「待ちなさいよ、ノールちゃん！」

アクローマはノールを制止したが振り切られ、逃げられてしまった。

その後、ノールは戦略室に待たせている杏里とミールの二人と合流

し、天使界から逃げるようにして戻ることとなった。

結局、当初の目的だった「聖帝とは何か？」ということを知ることが出来なかった。

代わりに種族の違いから自身は杏里との間に子供を宿せないということを知る。

その時、ノールの頭の中にあつたことは、ある一つの水人のみが扱える能力。

禁忌とされているその能力は元々能力が低かつたノールでは扱えることなど出来なかつたが、女神化をした際に水人の能力も上昇したため使用可能だと考えた。

この能力を使えば……ノールはそんなことをぼんやりと天使界からスロートへと戻る際に考えていた。

第七部～第十一部までのキャラ設定など

第七部～第十一部までに出てきた組織、キャラクター、世界観、種族の細かな設定を載せていこうと思います。

ついでに作品内の時間経過ですが第十一部終了時点で、第一部開始から約一年半の歳月が経過しています。

設定の順序は

名前（年令、身長、種族、性格、特徴や価値観などの順です）

アーティ（年令19歳、身長178cm、竜神族の青年。何故か、機械類の扱いが得意。ルミナスに負けた際に自身の弱さを悟り、以前のような態度は無くなった。つまりは凹んでいる。ノールを毛嫌いしているが理由は覚えていない）

テリー（年令18才、身長173cm、人間の女性。女性らしさを取り戻すため綾香から女物の服を借りて着たが、あまり似合わなかったためシヨックを受けた。ルミナスの話した聖帝というものを独自的に調べるようになった）

リュウ（年令24才、身長180cm、竜賢族の青年。意外な趣味があるが誰にも話していない。竜王化することに少し抵抗がある）

ノール（年令18才、身長173cm、水人の女性。臆病だから虚勢を張って他人を少し下に見る時がある。恥ずかしいという感情が

疎い。一応、緊張することは出来るが、それは集中してる時の焦りやワクワクしてる時の緊張であって恥ずかしくて緊張するといったことは感覚的に出来ない。杏里に対して、多少の殺意を抱いている。正確には杏里のことは好きではない。女神化出来るようになり、天使界では信仰の対象とされるようになってきている)

春川杏里(年令17才、166cm、人間の男性。ノールとは同年代の男女のように仲良く付き合いたいと思っている。しかし、自身のことをノールがどう思っているのかは分かっていない。最近では、ノールとの結婚について複雑に考えている)

ライル(年令18才、身長176cm、水人の剣士、優しい性格で最近ではルウに対しても優しい。水人なので髪の色が青。スロートでの修行によって水人の気体の能力も扱えるようになった)

ルウ(年令15才、身長160cm、炎人の少年。炎人なので髪の色が赤。コロシウムでの件から兄と普通に話せるようになって嬉しい)

ミール(年令15才、身長160cm、出身地は不明、性格は明るい敬語を使っていたりと控えめさも伺える。髪の色は金色を薄くしたような色。以外と心が弱く、一身上の事柄を揶揄されると泣く時がある。かなり姉思いのシスコン。姉の自身に対する接し方でもっと困っている)

ジャステイン・ルシタニア(年令15才、身長152cm、B72W55H76、人間の女性、出身地はエリアース、性格は真面目。ハンター養成所に兄のヴェイグと一緒に入会するために女の子だけでなく男装している。ミールに対して、初めて会った時から気に掛けている。主にナイフなどの小型の武器で戦う。ダメ兄ヴェイ

グを強く優秀な兄貴にするため、ジャスティンは常に頑張っていた。女の勘が鋭い)

ヴェイグ・ルシタニア(年令19才、身長177cm、人間の男性、出身地はエリアース、性格は大ざっぱで自身の好きなことしかしない。ジャステインの兄で、元生粋のエリート二ト。好きなゲームキャラが大鎌を用い戦っていたので、ヴェイグも大鎌を用いている。有名大学を一発合格&飛び級卒業しているので、かなり頭脳明晰。しかし、頭脳明晰の能力がゲーム、アニメ、マンガ、ネットだけに注がれているのでルシタニア家は崩壊する寸前だった。目が悪いため眼鏡をかけている。ジャステインに溺愛しているが、妹萌えということではない)

橘綾香(年令25才、身長170cm、人間の女性。他の世界からスロートにやってきたため、最初から空間転移は扱える。大抵白衣を着ているが、理由は服装を気遣わなくても良いから。性格とは違い、以外と頭は良く全ての医師免許を取得している)

ジーニアス(年令14才、身長130cm、エルフ族の少年。魔力が強力なエルフの末裔で兄弟の中で最上級の力を持つ。兄と姉の趣味にはついていけないと思っていたが最近思考が変わった。今では女装をするとジーニアスだとは気付けない程、服装の着こなしや化粧が上手くなった)

アクローマ(年令261才、身長174cm、天使の女帝。魔界の邪神ミトスとは親友で、自身が魔界に出向く程、友好的な関係が出来ている。ミトスとの戦いは演習であり、アクローマ自身が戦いにおいて本気を出すことはまず無い)

レイディアント(年令259才、身長176cm、天使の女性。聡

明な性格の大天使長ではあるが誰に対しても敬語などを扱わない。
趣味の園芸でアクローマの宮殿一区画を無断で自身の庭園に変えた)

エール(年令不明、身長不明、人間の女性。ノールの妹。現在は行方不明)

ルイン(年令259才、身長172cm、B88W54H85、出身地はネコ人のフラット共和国。性格は壊滅的な程に酷く自己中心で所謂性格破綻者。総世界最強のレベル20万の女性。数百年前にR一族に敗れた際、異空間に封印された。見た目は長く綺麗な銀髪が特徴的で白い法衣を身に纏う、しおらしい可憐な女性……という感じ。見た目とは裏腹に外道に匹敵する快樂殺人鬼)

ルーク(年令27才、身長177cm、出身は不明、魔族の青年、階級は魔神、どこか軽くて生意気な性格。魔法剣の使い手。元は人間だったが、ある理由で魔族になった。自身の階級を上げるため強い人物を倒すことが趣味になっている)

ドREAM(年令65才、身長183cm、出身は不明、魔族の青年、階級は魔神、律儀な性格。強力な槍術使い、つまりランサー。ルークの召使いでルークと同様に元は人間だった)

ルミナス(年令96才、身長171cm、出身は不明、聡明ではあるが軽い性格でもある。魔族の男性?。階級は魔王。魔法剣の使い手。元はエルフ族だった。総世界中で戦った相手の種族を趣味で魔族に変え、自身の部下にしている。本人が男性だと語らないと気付けない程に美しい顔立ち、身体付きもしなやかで男性らしさを感じさせない。邪神ミトスとは距離を置いている)

ミトス(年令350才、身長178cm、魔族の男性、階級は邪神

マイペースな性格。魔力を両腕に宿らせ戦う手刀使い。元エルフだがエルフであることに嫌気がさし、魔族になるため魔界を訪れた。猫舌なため熱いものは苦手。手刀使いだからか、手先がかなり器用。自由主義者で自身をリベラル派だと語っている。アクローマとは親友。演習ではいつも天使界を乗っ取るうとしている侵略者側。極度の方向音痴)

ラーズ(年令166才、身長172cm、天使の男性、出身は天使界。元々、智天使兼偵察隊の指導者だったがアクローマを裏切った)
アレス(年令22才、身長175cm、人間の男性、性格は冷静、出身は不明。スロートで傭兵をしている。鎖鎌のような変わった剣で戦う)

世界、能力などの設定

エリアースの設定(他の世界よりも文明が進み、とても近代的な世界。スロートが中世時代だとするとエリアースは現代世界といった感じ)

ハンター養成所(この養成所で、二年間修業すればハンターという能力者になれる。ハンターとは総世界共通に指導が出来る傭兵みたいな感じ)

ラミング帝国(旧グラール帝国。軍事大国、人口約78万人、帝政であるためか帝も政府も多少腐っている)

スロートの軍隊（アーティたちがスロートから離れた際にクロノが議会に働き掛け新しく作った部隊。人員は二万人を想定しており、階級制で帝のクロノが中心とした組織）

別種族との交配について（例としては水人のノールと人間の杏里とでは子供は出来ない。生物は同種族間でのみ交配が可能。それが各種族の存続が出来る理由であり、逆に楔のようなもの。種族が違っていけば性行為の感じ方も皆無。ただし凡庸である人間を除いてはの話）

魔法障壁（魔術の詠唱で発現された魔力を完全に封鎖する魔力による壁。魔法障壁にはレベルが存在し、発現させた能力者のレベルに合わせて壁の強固さが比例する。なお、魔法障壁は魔力のみを封鎖するので物理的な攻撃は防ぐことが出来ない。水人などの元素攻撃も防ぐことが出来ない。魔法障壁は、見た目が丸い円形で、術者を包み込むように出現する）

元素攻撃（水人、炎人、雷人が、自らの実体を削って行う攻撃。水人は、この三種類の生態の中で特質系であり空気中の水素と酸素を扱えば簡単に元素攻撃が可能。炎人、雷人は元素的に現すことが困難なため、魔力を扱い、元素攻撃を行う。ただ、魔力を扱っているが魔法障壁に防がれることはない）

水人などの相性（水人、炎人、雷人には相性がある。水人は水であるため電気をよく通し、感電するため雷人に弱い。炎人は炎を掻き消されるため、水人に弱い。雷人は電気を扱くと炎人に火力を与えてしまうため炎人に弱い）

水人などの元素攻撃（水人などは元素攻撃が行える。水人は水の固

形化、氷の固形化、霧、津波、渦潮、体温変化など。炎人は炎、揮
発、火砕流、溶岩流、体温変化など。雷人は発電、雷、熱雷などと
多種多様)

水人シスイ

天使界からスロートへと戻る最中、禁忌とされる一つの能力についてをノールは考えていた。

禁忌の術の名は水分身という。

この能力は水人にとって禁忌の術、扱っていけない能力。

自らと殆ど同じ、もう一人の自分を作り出す能力^{コピー}。

扱っていけない能力であること自体を彼女自身も知っていたが、扱おうと考えている。

それは彼女自身の焦燥と自身への失望から判断された短絡的な物だった。

「やっと帰って来れたみたいだね……って、なんでボクたちはわざわざ天使界に行ったんだっけ？」

異世界空間転移により、ようやくノールたちはスロート城の自室に戻ってくる事が出来た。

魔力を消耗し、疲れていたノールは部屋のソファに座る。

「姉さんは何かしらの理由があったから天使界に行ったんじゃない

の？」

「最初はボクもそのつもりだったんだけど、なんだったっけ？」

「疲れている時に悩むと余計に疲れるから今は悩まない方がよいよ」

杏里は心配しているのか、ノールに気遣いの言葉を掛ける。

「そうだね、ボク自身悩むのとか苦手だし。ボクはもう寝ることにするね」

「でも天使界は時間の観念がこっちの世界とは除外されてるから、ここはまだ昼前だよ。寝るには早過ぎるんじゃないの？」

ベットで仮眠を取ろうとするノールにミールが問い掛ける。

「聞いてなかったの。疲れてるって言ったじゃん、バカミール。なんだい、それともミールはボクに添い寝してほしいの？ てゆーか、ボクは添い寝してあげたい」

「なっ……！　なんで僕がバカなのさ、それに添い寝って！」

「なに、違っの？」

「違っに決まってるじゃん！」

恥ずかしかったのか、ミールは速攻で部屋から出ていく。

「ふう、これで煩い美少年が何処かに行ってくれたね」

ゆっくりとソファから立ち上がるとノールは二段ベッドの下の階に座る。

「杏里くん、ボクは今から寝るけどお昼になったら起こしてくれない？」

そう話してからベッドに横になった。

「ねえ……ノールちゃん。今がお昼だよ。お昼ご飯作ろうよ」

杏里は気遣ったつもりだが、ノールが仮眠を取り始めてからたった五分後に寝ているノールを揺すって起こす。

「はやっ、ボクはまだ寝てないよ……もう、杏里くんがお昼ご飯作れば良いじゃんか。いや、作りやがれ」

「ムリだよ、ボクご飯作ったこと無いもん」

「はあ、杏里くん。男の子なんだから料理くらい作れないと女の子は君を好きになつてくれないよ」

ベッドから起き上がるとキッチンに行く前にノールはさり気なく語る。

「そうなの？ それならボクも作る！」

「うん、それがいいよ」

杏里の分かりやすい性格に単純な子だなと内心思いながら、ノールは杏里と一緒に料理を作り始めた。

そして、作った料理をテーブルに運び終わる際に杏里に言う。

「ボクね、子供を作ろうと思うの」

「それは知ってるよ。前からしてるじゃん」

ノールと杏里はテーブルに備え付けてある椅子に座る。

「そうだけどね、普通にだと出来ないらしいんだってさ。ボクは普通とは少し違った手法を使おうと思うの。それは、水分身って言うんだけどね」

「普通にだと出来ないってどうゆう意味？」

「幾らしてもムダだってこと」

「どうして？ そんなことボク聞いたことなんてないよ」

「杏里くんはさ、ボクのこと何だと思ってる？」

「そんなの決まってるじゃん！ ボクにとって世界で一番…」

無言でノールはテーブルから身を乗り出すと、向かい合って座る杏里の頭を叩く。

「えっ………なんで？ ノールちゃん、酷いよ」

「ボクはね、人間じゃないんだよ」

「ウソ！ ボクはノールちゃんのこと……今まで人だと考えていたのにやっぱり違うの？ 何の動物なの？」

再びノールは身を乗り出し、今度は杏里の顔を平手で数回叩く。

「痛いよー。止めて……ノールちゃん。ごめんなさい……」

何故か杏里は泣き始める。

「何が“やっぱり”なのさ。本当に失礼だね、君は。また言うけどさ、ボクは人間じゃなくて水人なんだよ。とにかく、種族の違いから君とは幾らしてもムダなわけ。それでね、別の方法で子供を作ろうと思うんだけど別に良いよね？」

「でも、その方法って何？」

「水分身っていう水人の禁忌の術なの。絶対に使っちゃいけないんだけど、これ以外もう方法が無いの」

「そうなんだ……ノールちゃん、絶対に使おうとしてるでしょ？」

「当然使うに決まってるじゃん」

「やっぱり！ だったらボクに出来ることがあれば何でも手伝うよ
！」

「そうかい」

嬉しそうな顔をして喜んでいる杏里をノールはしらけながら見る。

「今さ、何でもするって言ったよね？」

「うん、言ったよ」

「お昼ご飯食べた後に手伝ってもらいたいことがあるんだけど」

食事が終わり食器を洗った後、ノールは部屋の中央を陣取っているテーブルを部屋の隅に退かし、水竜刀を作り出した。

「何してるの？」

「何って、今から水分身をするんだよ」

「どうして水竜刀を作ったの？」

「実はね、この禁忌の能力には生け贄の血が必要なんだよね」

ノールは杏里の方を笑顔で見る。

「えっ、もしかして……」

「それでね、この部屋にはついさっき何でもしてくるって言うてくれた生け贄がいるの。誰とは言わないけどね」

笑顔のまま、ノールはずっと杏里から視線を逸らさなかった。

「どっしりよう、これって殺されるかも……」

そう思い立った杏里は咄嗟に部屋から逃げようとする。

しかし、ドアノブを幾ら回しても出入口の扉は開かなかった。

「何で開かないの!」

「ボクが細工したんだよ。臆病な君だから約束してもどうせ逃げだるうと思ってね。いい加減に諦めた方がよいよ」

その声を聞いて杏里はノールの方に振り返った。

「ノ、ノールちゃん?」

ノールの目はいつもの自分を見ている目ではなかった。

それは明らかに獲物を狙う目、確実に杏里を捕らえるつもりだった。

「どこ、刺されて血を流したい?」

「な、なんでノールちゃんはボクのこと刺そうとするの?」

「君が何でもするって言ったから」

「そんな理由でボクのこと殺すの?」

「殺すって、なーに言ってるの杏里くん? ボクが杏里くんを殺す訳ないでしょ」

そう言いながらもノールは水竜刀を構え、ドアの傍にいる杏里に接

近する。

そこはもう、ノールが剣を振れば確実に杏里を斬れる範囲だった。

「それじゃ行くよ、杏里くん」

振り上げた剣をノールは思いっきり振り下ろした。

「やめて　！」

杏里は悲鳴を上げ、目を瞑る。

「……………？」

しかし、特に何も起きなかったため目を開けた。

「えーと、次は魔方陣を作って……………」

部屋のテーブルがあつた場所にノールは魔方陣を描いていた。

「ボクのこと刺したの？」

「刺したよ、右腕」

杏里は自身の右腕を確認する。

確かに手の甲に一ミリ程の傷があり、血が滲んでいた。

「刺したってこれだけ？」

「そうだけど、なんで？」

「だって生け贄とか言ってたから物凄く血が必要かと思ってたんだよ。脅かさないですよ」

「そんなエグいことなんてボクはしないよ。もしかして杏里くんってMなのかい？」

「違うよ！」

一瞬、何かを考えてから杏里は怒った。

「あっそう。そんなことはボクにとって本当にどうでも良いことだしね………っっていうか男の子なのに“やめて　！”はくない？それとも、ようやく女の子の本性が目覚めたのかい？」

ノールは面倒だったから聞き流す。

「ボクはどうしてもよくないよ！　それにMじゃないし、女の子でもないよ！」

「はいはい、そうだね。杏里くんはSよりMだよ。男の子じゃなく女の子だよ。そう言うことにしてあげるよ」

ノールが杏里の話を軽く聞き流していると魔方陣が光り出した。

すると、その魔方陣から少しずつ人型が形成され始める。

「うわっ、なにこれ？」

「なにつて新しい水人を作ってるの」

「水人つてこうやって作るの！」

「違うよ、これは禁忌の術。普通じゃ有り得ない作り方だよ」

ノールが話していると、その人型はノールにとても似ている水人衣装を纏った男の子に形成された。

「似てるね、ボクにそっくりだよ」

魔方阵に出現した男の子をノールは見つめる。

「ところで……ノールちゃん。この子どうするの？」

「これから育てるよ？」

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。ボクが母親で杏里くんが母……父親なんだから必ず良い子に育つよ」

「ボクが父親なの！」

「そうだよ？ 君の血を使ったじゃん」

「けど、この子つて見た目が大体15歳くらいに見えるんだけど」

床に倒れている水人の少年に動きがあった。

ゆっくりとながらも上半身を起こし周囲を見渡していた。

「あっ、起きた。ボクがお母さんですよ」

上半身を起こした水人の少年をノールは抱き寄せる。

水人の少年は抱き付かれたといって特に何も反応する訳でもなくノールの方をただ見ていた。

「この子って何も話さないの？」

「この子は見た目は15歳って感じだけど、まだ生まれたばかりだから0歳なんだよ」

「ってことはまだ赤ちゃん？」

「そう、赤ちゃん。でも、一日くらいで日常生活は出来るようになると思うよ。ボク 능력と同じくらいになるよう創ったからね」

「この子の名前はなんて言うの？」

「シスイ、前々から決めてた」

「ふーん、子育てか」

「一先ず、シスイ君に日常生活の一通りを教えるために言葉を教えよう。まっ、言葉なんて教えなくても良いんだけどね。何故かって言うとボクと知能があまり変わらないから、すっごくシスイ君は頭が善いんだよね」

ノールはわざとらしく“すっこく”をかなり強調する。

「ってことは遠回しに自分は頭が善いって言ってるんだね」

杏里は微妙な苦笑いをする。

「母さ……ん？」

「ん？」

シスイが突然言葉を発したため、二人はシスイの方を見た。

「もう話せるんだ。偉いぞ、シスイ君！」

ノールは再びシスイを抱き締める。

「あれ？」

その頃、アーティが自室で不思議な現象を見ていた。

「ジーニアス。お前、今から図書館に行こうとしてないか？」

「へえ？」

キッチンの冷蔵庫から牛乳を取り出していたジーニアスは不思議そうに振り替える。

ジーニアスは自身の130cmという身長の高さを極度に気にしていた。

そのためか彼は牛乳を飲むことを日課としている。

「確かに行こうとはしてたけど……どうして分かったの?」

「あれ、なんでだったかな?」

「やっぱり、僕は兄さんたちに会いに行くよ」

「ああ、分かったよ」

ジーニアスは不思議そうな表情をしたまま、部屋から出ていった。

自身でも不思議に思える出来事にアーティはジーニアスが出ていった後、一人思索する。

「単なる偶然にしては出来過ぎている。もしかしたら竜神族特有の能力かもしれないな。リュウならよく知っているかもしれないね」

ぶつぶつ独り言を話ながらアーティも自室を出た。

ゆっくりと暇そうに歩いていると数分でリュウの自室に着く。

「よう、リュウ。いるか?」

アーティはノックさえせずに堂々と室内へと入る。

室内はノールの部屋と殆どの家具が同じである。

宿舎内の物は城側の方で全て統一されているようだった。

「おまつ……ノックくらいしたらどうなんだ？」

部屋中央のテーブルの椅子に腰掛けてコーヒーを飲みながら休息を取っていたリュウが呆れたように言う。

「マナーとでも言いたそうだな。全くお前らしくもない」

「言いたそうじゃなくて普通のマナーだろ」

「そんなことより、オレに不思議な感覚があったんだ」

「どんな？ てか、入り口で突っ立ってるのも何だから椅子に座れよ」

「ああ、分かってるよ」

アーティは室内の中央にあるテーブルの椅子に座る。

「で、どんな不思議なことがあったんだ？ 話してみるよ」

「ああ……なんかデジャビュっていうか。いや、違うな。あれは経験じゃなくて見えたというべきか……なのか？」

「それ、なんなのか知ってるよ」

「へー、今のだけでも分かるのか。やっぱり、これって竜神族の能力とかか？」

「いや違うよ。確かに能力だけど竜神族特有のものじゃない。これは“シナリオ”という能力だ」

「シナリオ？」

「そう、シナリオというのは未来予知に匹敵するような能力が種族覚醒によって……つまりお前の場合は竜王化出来るようになったことよって扱えるようになったんだ。でも、それはオラクル（神託）のようなものじゃない。確かに未来を見ることは出来るようになるけど誰も予測出来ないようなことが起こると簡単に見えた未来事象が変化させられるんだ。そのため、未来に起こり得るだろう一つの事象をただ確認したに過ぎないというのが正確。ただし、自分に変える気が無くともそのまま見えた事象が起こる訳ではない。その事象は覚醒した者の殆どが見たいと思えば見ることが出来るのだからね。因みに見える事象は自分の過去、相手の未来だけ」

「なんか凄いことをお前は知っているんだな。学者かつつのも、でも何かおかしくないか？ 普通、SFとかでは自分の未来、相手の過去だろ。自分の過去が見えたって何の価値もない」

「確かにそうも捉えられるな。でもそれは幻想の世界だろ、現実は違う。そうだ、アーティ。シナリオを上手く扱えるように誰かの未来を一回見てみたらどうだ？」

「リュウは使いこなせるのか？」

「勿論……と言っても、テリーのことしか殆ど見ないんだけどな」

「何で、テリーだけなんだ？」

「話さない和不味いか？」

アーティの言葉にリュウは曇った表情をする。

あまり詮索をするなど言いたげな様子で。

「オレ、なんか不味いこと言ったか？ あっ……」

何かを思い付いたのか、アーティは声を上げる。

「テリーの風呂入ってるとことかを見てるんだろ？」

「はっ……はあ？」

予想外のことを聞かれたらしく、リュウは二度聞き返す。

「凶星なんだろ？ オレなら断然、ノールだな。綾香さんは年上でそんな考えをするのは何か申し訳ない」

「女性ならジャスティンを忘れてるよ。まっ、風呂覗くつてのは間違っているから別に良いけどな」

「裸を見てたんじゃないのか？」

「変態だろ、それって。どうしてそんなことを思い付くんだか。でも何で、ノールなんだ？ ノールのことは嫌っているんじゃないのか？」

「嫌いだよ。けど、何だか守ってやらないといけない気がするんだ

よな……って何を言っているんだ、オレは？」

「残念だな、アーティ。ノールは杏里と付き合っているだろ。あの二人のいちゃつき振り……いや、いちゃついているのは杏里だけか。あれを見たら諦めるしかないだろ」

「ノールは好きじゃないって最初に言っただろ？　ただ、何か気になるだけだ」

「ふーん……」

リュウは、じーっとアーティを見つめる。

「なんだよ？」

「シナリオを使ってみた。お前とノールはこれからも仲違いしたままだな。てっきり、運命的な存在かと思っただけど、オレの思い違いだっただよ」

ホッとした様子で、リュウは椅子から立ち上がる。

「オレは一人になりたいから、そろそろ出ていってくれないか。もう疲れたんだ」

「疲れたって、何もしてないだろ？」

「“人間化”したまま、シナリオを使っただ。魔力を相当消費してしまったよ。本来、これは竜賢人のオレならお前と同じく竜王化した時に扱うべきなんだ」

「つてことは覚醒しないとヤバいんだな？」

「ああ、相当ヤバい。酷く疲れるよ」

「でも、オレがジーニアスをシナリオで見た時は疲れなかったけど」

「無意識のうちに使ったからだろ？」

「そういうパターンもあるのか。そっぴや何でオレにシナリオをかける時に竜王化しなかったんだ？」

「いいだろ、別に。オレは今から寝るから、どっか行けよ」

「相当、疲れているんだな。どっか行けよなんて、お前から初めて聞いたよ」

仕方なくアーティはリュウの自室から出ていった。

「よう、ノールはいるか？」

リュウの自室から出ていったアーティは次にノールの自室に移動していた。

特にドアをノックすることもなく、アーティがドアを開けたのだが後悔した。

自らの前にはノールが誰なのか分からない少年を抱き締めていて、

その傍で微妙におろおろとしている杏里がいたからである。

「……………修羅場か？」

嫌な予感がしたアーティは即座に立ち去ろうとする。

「ちょっと待つて、アーティ。何が修羅場なのか分からないけど、この子のことを紹介するから」

「オレは面倒なことは嫌だぞ」

「あっそう。なら、さっさと帰ってくんない？」

「はあ？　なんでそうなんだよ？」

仕方なくアーティは部屋に入り、ノールの話を書くことにした。

「ここにいる水晶のように綺麗な男の子はシスイ君っていうんだよ」

「そうなんだ……………ていうか変な紹介の仕方だな、それって。てかなんか、お前に似てね？」

「似てるよ、ボクの魔力で創ったんだからね。まだ生まれたばかりだから赤ちゃんなんだ」

「オレより数才年下のようにはか見えませんが、まだ赤ちゃんなのか？　魔力でそんなことも出来るのか？」

「母さん、この人って誰？」

シスイがノールの服を引っ張って訊ねる。

「あつ、この人かい？ アーティ……じゃなかった。ただのイカレ野郎だよ」

「イカレ野郎さんですか。初めまして、イカレ野郎さん」

「おい、待て。今のどう考えてもおかしいだろ。ところで、シスイは赤ちゃんだって言ったけどお前って誰かを育てたことなんてあるのか？」

「ないよ。だって、子供と触れ合うのなんて久しぶりだし」

「だったら今のお前の行動で分かったけど、お前には任せておけない。このままだと有り得ない人になりそうだしな」

「ええー。何でそんな風に決め付けるわけ？」

「皆と一緒に育てた方が楽しく育てられると思っけど？」

「それなら……うん、いいよ」

アーティの言ったことをノールは納得する。

その後、アーティの提案によってノールたちはシスイのことを仲間に伝えるためにアーティを含めた他のメンバーを城の中庭に呼び集めた。

しかし、ノールがメンバーを呼び出したのは夜の九時であった。

「今、夜の九時なんだけど？ もっと早く知らせることは出来なかったのか？」

明らかに迷惑そうな口調でアーティは語る。

「ところで、その男の子は誰だ？」

興味を持っているのかリユウはシスイに近寄り、顔を覗き込む。

「この透き通るように美しい美少年はボクの子供のシスイ君だよ」

「子供？」

チラッと杏里の方を見るメンバーたち。

「ち、違うよ。ボクは何もしてないよ」

恥ずかしそうに俯き、メンバー全員の視線を杏里は逸らす。

「杏里くんはシスイ君の父さんだよ。血を使ったもん。特定のやり方で水人は創ることが出来るんだよ」

「おい、ノール！ それはどういうことだ！」

数時間程前の儀式のことをノールがメンバーに説明すると、一人だけその内容にとっても反応を示す人物がいた。

たったそれだけの説明。

それだけでどのようなことをしたのかが把握出来た人物とは、ノー

ルと同じく水人であるライルだった。

突然、ライルが叫んだので全員ライルの方へ視線を移す。

「どうした、いきなり？」

メンバー全員がライルの方を振り向く中、アーティが聞く。

「それは水人にとって禁忌の能力なんだ！ 何故なら必ず創り出された者は創り出した者を殺すからだ！」

「何言ってるの？ そんなことシスイ君がする訳ないでしょ？」

「必ずするに決まっているだろ！ その魔法を知っているなら、その魔法に関しての書籍を読んだはずだろ！」

「読んだよ、悪い？ でもね、シスイ君はボクのことを絶対に殺さうなんてしないよ。冗談でも、そんなことを勝手に決め付けないだよ」

「なんだと!！」

ライルはノールの胸倉辺りを掴む。

水人であるノールの身体は20キロと軽いため、ライルの力だけで数ミリ宙に浮いた。

「ちょ、ちよっとライル、怖いよ……」

「……スマン」

ノールの衣服からライルは手を離す。

「ノールちゃん、大丈夫？」

我先にといった具合で杏里がノールを気遣う。

「うん。でも、びっくりしたね。別に大したことじゃないから気にしないでいいよ」

実際は落ち込んでいるのか沈んだ声でノールは言つとシスイの手を握り、シスイを連れてどこかへ行ってしまう。

「待つて、ノールちゃん！」

杏里も二人を追う。

「その魔法つて扱っちゃマズイのか？」

残されたメンバーのうち、アーティが気になって聞く。

「ああ、水人に関する書籍には毎度のように書いてある。創られた者は創りだした者を殺すと」

「そんなことがあるんだね。オレのことじゃない時点で割かしどうでも良いけど、オレに任しときな！」

突然、大声を出したアーティは竜王化する。

「なに变化してんだよ？」

「シナリオだよ、シナリオ。オレがノールとシスイの未来を見て、これからどうなるのか確認してみるよ」

少しの間、アーティは静かになる。

「ノールは……？」

「あー、アーティ？ さっきから何してんの？」

そもそも、シナリオというモノ自体知らない他のメンバーに代わってテリーが訊ねる。

「どうしてだ……？」

それが聞こえていないのか、アーティは焦りながら何かを言いだす。

「ノールがルーメイアってところでネコ人に殺されているんだ……」

「はっ？ お前、なに言っているんだ？」

「シスイだって同じだ……あのネコ人に……」

何やらぶつぶつと言いながら、アーティはテリーに視線を移し何かを言おうとする。

「テリー……」

しかし、テリーを見て、再び黙するとその場を離れていってしまった。

「何なんだ、あいつ？ とにかく、シスイがノールを殺さないようにオレたちが見張ってればいいんだろ？」

テリーがライルに訊ねる。

「簡単に言えばそういうことなんだが……」

その頃、自室へと戻っていたノールは珍しく困っていた。

「はぁ……どうしよう」

ベットの方を眺めながら、ノールは呟く。

「ノールちゃん、元気だして。皆もシスイ君のこと、きつと認めてくれるから」

「皆は関係ないよ。ボクが悩んでるのは君とボクしか寝るスペースがないこの二人分のベットにどうやって三人で寝るかだよ」

「あっ……そうなの」

杏里もベットの方に目を向ける。

「うーん、それじゃあ、ボクは下に寝るよ」

「そうかい、そうしてもらえると助かるよ。シスイ君は二段ベット

の上の方で寝てね」

「うん、母さん。おやすみ」

既に当たり前のように会話をしているシスイは二段ベット上部へと上がっていった。

「ボクたちも寝よっか？」

ノールもさっさと二段ベット下部へと入る。

「うん、そうだね。ノールちゃん、ボクは床で寝るから、新しいベツドクローズを取りに行ってくるね」

木製のフロアリングの床で就寝するため自身の寝具を持って来ようと杏里は部屋から出ていこうとする。

「ちょっと待ってよ」

ベットで横になったノールが声を掛けた。

「なに？」

ドアの前にまで歩いた杏里は振り返る。

「一緒にボクと寝るんじゃないの？ 杏里くん、自分でベットの下方で寝るってボクに言ったからシスイ君を普段君が使ってるベットの上方を使わせたんだよ。ボクがスペース作るから一緒に寝よっよ」

「で、でも……シスイ君が上で寝ているんだよ？」

「ん？ だからこそ、ボクと一緒に寝るんでしょ？」

不思議そうにノールは杏里を眺める。

てつきりそのノールの行動が自らを誘っているのだと杏里は勘違いしていた。

そのため、ノールが空けたスペースへ横になるとノールの身体をおそるおそる抱き寄せた。

正直イラツとしたノールはウザそうに身体を捻って杏里から離れると、間髪入れずに杏里の顔をストレートで殴る。

杏里はようやくその時点で勘違いだと気付き、泣きながら謝った。

「シスイ君がいるんだから少しは時と場所を考えてほしいよ。もう……」

翌日からノールは毎日のようにシスイと接した。

しかし、それから数週間が経過しても父親にされた杏里を含め、メンバー全員がシスイに対してどう接することが一番良いのかはあまり良く分からなかった。

それは誰一人、子育てをしたことが無いこととシスイが年令の割りには身体が少年のような大きさになっていることが原因だった。

そんなある日、シスイに会いに来ていた綾香にノールは不安を打ち

明ける。

「こつという場合ってさ、誰か引くくらい子供好きな人が小説とかでは大抵いるんだけどね。そうすれば、どうしたら良いのかを聞けるのに……それにボクって子供の時から自分の両親のこと何も知らないし、これ以上どうやって子育てすれば良いのか分からないよ」

部屋中央を陣取っているテーブルでノールと向かい合う形で椅子に座っていた綾香に問い掛ける。

「ええ、そうね。私にはお母さんがいたけど子供の頃の記憶が無いのよね……どんな風に育てられたか私も分からないわ。ゴメンなさいね、力になれなくて」

「綾香さん、だったら愛ってどういうモノ分かる？」

「愛って愛情のことよね？」

「そう。ボクね、エリアースで買った子育ての本を読んだけど愛を持って接するってことが分からないの」

「そんなこと簡単じゃない。貴方がね、こつやって毎回スイ君と接していることが愛情なのよ」

「じゃあ、ボクと綾香さんが今こつやって接していることも愛なの？」

「えっ？」

ノールに出された紅茶を啜っていた綾香だったが不意打ち的な発言

に吹き出す。

「や、やーね、ノールちゃん。私たちが愛し合ったらダメでしょう？ 同性同士なんだから私たちの場合は友情って言うのよ」

「そうなんだ……難しいね、愛って」

「深く考えなくても良いのよ。貴方が楽しく接すれば、シスイ君は必ずよい子に育つわ。あと、シスイ君が悪いことをしたら必ず叱ってやらないとダメよ。それも愛なのよ」

「じゃあ、綾香さんが悪いことをしたら……」

「友情よ」

問い掛けに綾香は即答する。

魔導剣士修煉場

数日後、ノールがシスイの子育てに困っていることをアーティは耳にする。

そのため、アーティはある提案をするため、ノールの部屋へと向かった。

「よう、行き詰まってるらしいじゃん」

わざとらしくアーティはそう言いながら部屋のドアを開けた。

室内に杏里の姿は無く、ノールとシスイの二人だけがテーブルの椅子に腰掛けていた。

「チェックメイト」

シスイはテーブルに置かれた何かを動かす。

「はぁ……」

ノールは何やら肩を落とした様子。

「何やってるの?」

「あつ、アーティ、いたんだ?」

「いたんだじゃなくない? オレが何度か呼び掛けたのに無視していたじゃん」

「ゴメンね、アーティ。チエスしてて気付かなかったの」

「違うよ、母さん」

「何が、シスイ君？」

「アーティさんが部屋に入る際に呼び掛けたのは一度だけでした。それにドアをノックしていないので、マナーを守っていないと僕は思います」

「そうだね、シスイ君が正しいよ……ってことで、アーティ。今の手順でやり直せ」

「良いのか、それで？ 折角良い話を持ってきたんだけどな」

「うん。じゃ、やり直せ」

「……………」

仕方なく、アーティは今の手順をやり直す。

「よう、ノール。いるか？」

アーティはドアをノックしてから部屋へと入り、ノールに呼び掛ける。

「アーティ、よく飽きないね？ どうしてまたやり直すの？ 馬鹿なの？」

「……………」

部屋で待っていたノールの予想外な一言にアーティは無言になった。

「母さん、それは言い過ぎです」

「いいんだよ、シスイ君。楽しさを優先させるのも人生なんだよ」

「そ、そうなんですか？ 知りませんでした」

笑顔で語るノールとは別にシスイは深く頷き、疑いさえ持たずに納得している。

「……………」

無言でアーティはノールに近付くと、ノールの頬つぺたを掴む。

「あっ、いたっ！」

突然、頬を引つ張られノールはじたばたする。

「何すんだよ！」

「ちょっと楽しさを優先させてみた。でも、そこでお前が怒るのはおかしいんじゃないかい？ お前の言った通りのことをしたただけなのに」

「う、うん……………」

「シスイ、今のノールの様子を見て分かったと思うけど楽しさを優

先させるのは間違いだよ。分かるな？」

「……はあ。何となく分かりました」

「で、ノール。お前に良い話を持ってきた」

「なに？」

「一度、シスイを修練場とかに預けてみるってのはどうかな？」

微妙に顔を引きつらせ、アーティは無理矢理笑みを表情に浮かべる。

「なんか、絶対に裏があるでしょ？」

「ま、まさか！ オレがそんな風に見えるのかい！」

「なーに勝手に焦ってんだか？ ボクからシスイ君を引き離そうと
している魂胆がバレバレだからね」

「こっちとしては離れて貰わないとね。シスイがこのまま、モンス
ターハンターで何もせずに暮らしているのは困る。こっちとしては
仕事くらいして貰わないと」

「仕事して貰わないと困るだって？ よく言うよ、今はスロート城
で世話になってるだけなのに。それに仕事だって無いじゃん？」

「いいや、ある！」

「はっ？ バツカじゃないの？ スロートの兵士を鍛えることが仕
事ですだなんて言ったらぶっ飛ばすよ？」

「これから……三ヶ月後にルーメイア、ソニックブームという世界から仕事の依頼がくる。それまでにシスイを鍛えたい」

「どついう依頼？」

「ルーメイアからは幻人という種族の討伐。ソニックブームからは長年戦い続けている人間族とエルフ族の戦いを終わらせることだ」

「嘘っぱくは……無いね。いつそんな仕事を手に入れたの？」

「馬鹿だな。優良な組織には何もしなくても仕事が舞い込んでくるもんだよ」

「ふーん？」

何やら両腕を組み、ノールは考え始める。

数十秒間、何も語らず真剣に悩んでいた。

「シスイ君、ボクとこれから二ヶ月間くらい離れ離れになること出来る？」

優しく、ノールはシスイに声を掛ける。

シスイはその問い掛けに驚きと戸惑いの表情を見せた。

その後、悲しそうに俯き、問い掛けに対して無言で返す。

余程、ノールと離れ離れになるのが嫌なようだ。

「ボクの言うこと、聞いてくれるよね？」

「母さんは僕を嫌いになったのですか？」

「違うよー！」

椅子から立ち上がり、ノールはシスイを抱き締める。

「ボクはシスイ君が大好きだよ。でも、これからは皆と一緒に仕事
もしないといけない。君にはそれが出来る程の能力が必要なんだよ」

「いやだ……母さん、僕を見捨てないでよー！」

「見捨てるなんてしないよ。君にはボクを護れるくらい強くなって
ほしいの。シスイ君はボクを護ってくれるよね？」

「僕が母さんを……？」

ただ泣きじゃくっていたシスイだったが、ノールの目をしっかりと
見る。

それをノールは頬笑みで返す。

「僕でも……僕でも母さんを護れるの？」

「護れる、君なら絶対に出来る」

「母さん。僕、何だか自信が出てきました」

「よし、良い子だ、シスイくん！」

ノールはシスイを抱き締め、優しく包み込む。

「そろそろ、三文芝居は終わるのかな？」

とても暇そうにアーティは二人の会話を聞いていた。

「アンタってさあ、まともなことが言えないわけ？」

シスイがノールの説得により、魔導剣士修練場へ修練を行うことを決めてから数時間後。

城の中庭のベンチに腰掛け、ぼんやりと一人夜空を杏里は眺めていた。

「ノールちゃん……最近、シスイ君とばかり接してる。ボクがこうして部屋を出ていっても心配もされていないみたいだし。ボクって、ノールちゃんの一体何なんだろう？」

静かに夜空を眺めながら杏里は悩んでいた。

“帰ろうか”、そう思った杏里はベンチから離れた。

その瞬間だった。杏里が自らに強烈な殺気が向けられているのに気付けたのは。

「だ、誰！」

周囲を見渡すが誰の気配もしない。

ただ、殺気だけがひしひしと感じられた。

「こ、これは……まさか幽霊じゃ……」

得体の知れないものに恐怖を感じ、その場を逃げ出そうとした瞬間、杏里は背後から突然身体を抱き付かれた。

「いやああー！」

「なーにが“いやああ！”なのさ？ 女か君は？」

「へえ……？ その柔らかさはノールちゃんかい？」

殆ど半泣きの状態の杏里はノールの声を聞き、我に返る。

「ところで柔らかかさってなに？」

「ノールちゃんの胸の柔らかさだよ。いつもさわってるから大きさや弾力性で誰だか分かつ……」

そこまで杏里が真剣な表情で語った時、ノールの平手が杏里の顔を捉えた。

まるで鞭を地面へと叩きつけたような音が夜の中庭に響く。

「いつもさわってるって何言ってるの、君は！　なんかさ、それじゃボクが君にさわられたがってるみたいじゃん！」

「でも、胸を行為中にさわるのなんて普通……」

不適切な発言にノールの二発目の平手が飛んだ。

「ボクはね、君に胸をべたべたさわられて気分が悪かったよ！　それでもボクは我慢してたんだよ！　それなのに普通だと言い切るなんて……君の普通ってなんだよ！　現実と君の思っていることは違うんだからね！」

「ご、ごめんなさい……」

「ん、謝るなら、それでいいよ。あと、行為の話になるけど出来れば十分以内に全部終わらせてくれない？　ボク、面倒なんだよね」

「でも、ボクとしてる時、雑誌読んでたり携帯ゲームしてるじゃん」

「ああ？　君は感じられるから楽しいと思うけどさ、ボクは何にも感じないんだよ！　こっちはね、君に身体を預けているからヒマでヒマで仕方ないの！　だから、ゲームしたり雑誌読んでるんですけど！　クソっ、おかしいよ、あのエッチな小説と書かれていたことと内容が違う！」

「やっぱり、あの小説は……」

杏里はスロートの図書館での出来事を思い出していた。

「ノールちゃん」

「なんだよ!」

「ごめんなさい……でも、ノールちゃんは何でここに居るの？ ボクを心配して探してくれたの？」

「あー、そうだったね。君が最初から意味の分からない持論を展開してくれたから危うく何をしに来たか忘れるところだったよ」

そういうと、ノールは再び杏里の背後へと回る。

「どうしたの？」

「動くな。動いたら殺すよ?」

その声と共に背後からノールが抱き締める。

「えっ、ノールちゃん?」

そのため、杏里は反射的に振り返ろうとしたが止めた。

何故なら、ノールの右腕がナイフのように尖っていて、それを自らの胸辺りに押し当てていたからである。

そもそも、ノールは水人。

身体の水分で物体を作ることなど出来て当たり前だった。

「つまり動いたら刺すってこと……? ねえ、何でこんなことするの、ノールちゃん?」

「臨場感を出すためだけど？ そんなことより杏里くん、シスイ君と魔導剣士修練場へ行ってくれない？ お願い！」

「別にこんなことしなくても…」

杏里は背後へ振り返ろうとする。

瞬間、杏里の胸に激痛が走った。

「動くなって言ったよね？ もっと深く刺されたいの？」

「ごめんなさい……」

痛みに耐えながらも杏里は何故刺されたのか理解出来なかった。

「もう一回言うけど、シスイ君と一緒に魔導剣士修練場へ行ってくれるよね？」

「えっ……ごめん。聞いてなかった」

杏里の胸にさつき以上の激痛が走る。

衣服の胸の辺りは瞬く間に赤く染まった。

「だから、シスイ君と一緒に魔導剣士修練場へ行ってくれるよね？」

「うん……いいよ」

痛みのため泣きだしてしまった杏里から、ノールは離れる。

「どうしてこんなことしたの？」

「単なる暇潰しだよ」

「ボクのこと……絶対に殺そうとしたでしょ？」

「そんなことは……でも、もう少しで心臓だったね。おしかったよ」

杏里の血が滴る右腕をノールは薄い笑顔で頬笑みながら、いとおしそうに眺めていた。

翌朝、ノールの自室には昨日の内にシスイと一緒に魔導剣士修練場へと向かってくれとノールに頼まれたメンバーの四人が集まった。

集まったメンバーは杏里、ミール、ヴェイグ、テリーである。

「皆、おはよう。それじゃあ、さっさとシスイ君と一緒に魔導剣士修練場へ行ってもらうけどいいよね」

「いいけど。オレは修練場に行くのは久しぶりだから、さっさと行ってみたいな」

「だよ。テリーはやっぱり話が分かる人だよ。あと、はい、これ」
ノールはテリーに何かを渡す。

「なにこれ？」

「これはケータイって言ってね、遠くの相手にも話すことが出来る

便利なツールだよ。これでね、シスイ君の成長を伝えてほしいの」

「へー、こんなもので遠くの相手と話すことが出来るのか？ ところで遠くの相手にとってどのくらいだ？」

「そうというのはヴェイグに聞いて。ボク、分かんないから。電話をかけてくれれば出るから。説明はこれくらいにしといて……」

早速ノールは空間転移を詠唱し、シスイを含めた五人をスロートから魔導剣士修練場がある世界へと移動させた。

そして、シスイたちは魔導剣士修練場という場所の前に出現する。

「オレは以前ここにいたから案内してやれるけど、どうする？」

テリーが魔導剣士修練場の方を見つめる。

「テリーさんってこのこと知ってるの？」

「オレはここで修練を受けて魔導剣士になったんだ。でも、このことは知ってるけどここが他の世界にあるとは知らなかったよ。オレやアーティ、リュウはここを卒業した後、スロートのある世界に空間転移されてたんだな」

自らに問い掛けてきたミールに言う。

「そんなことより、中に入るうぜ？」

他のメンバーを急かすようにテリーは続ける。

魔導剣士修練場の敷地内へと五人は入った。

その広大な敷地には闘技場のようなエリアと宿舍らしき建物などが多数ある。

「入会に金は掛からない。在籍する魔導剣士が賞金首を討伐することや仕事をこなすこと、あとスポンサーによって経営を成り立たせているからな。そういう訳だから、さっさとこっちに来い」

以前行ったことのあるコロシウムによく似た闘技場の建物の方へとテリーは他のメンバーを先導する。

「テリーさんは魔導剣士修練場に入会する前も強かったの？」

何気なくミールが訊ねる。

「雑魚以下だ。あの時のオレは剣どころか重いもの自体持ったことがなかったしね。生活が180度一変して本当に毎日がキツかったよ。オレのつまねえ話を聞くより、入会の際に能力を計るようになるから軽くウォームアップしとけ」

テリーの案内で五人は闘技場内にあつた受け付けまで行き、入会審査を受ける。

その時、テリーの話しした通りに体力審査ということで最初にテリーが呼ばれた。

「オレ、呼ばれた？　じゃ、簡単に勝つてやるから待ってるよ」

そのため闘技場の戦闘エリアへとテリーが移動する。

戦闘エリアはコロシアムの時と殆ど変わらないような作りがしてあった。

「懐かしいな」

周囲を見渡しながらテリーが囁くと自らと戦うことになった見習いの魔導剣士へ視線を移す。

「おい、雑魚。格好悪い負け方する前に試合放棄した方が身のためだぞ」

「男装をして意気がつてる女に何が出来る？」

「あっ？」

相手の魔導剣士が語ったことを、すぐに受け入れることがテリーには出来なかった。

無言のまま、相手の言葉の内容を何度も考えていた。

相手の魔導剣士が語ったことを、すぐに受け入れることがテリーには出来なかった。

無言のまま、相手の言葉の内容を何度も考えていた。

しかし、その考えが理解に至った時、テリーの目の下がピクピクと震える。

状況は悪化していた。

「来ないのか？ ならば、こちらから！」

魔導剣士がテリーに迫り、剣を振り下ろす。

剣を構えさえしていない無防備な状態だったテリーの右肩に剣が突き刺さり、血が滴った。

「……………」

剣によるダメージを受けても、テリーには変化は見られない。

ただ、確認出来るのはテリーの強い殺気。

事ここに至り、状況を悟った魔導剣士は後退する。

だが、それは余りにも遅過ぎた。

戦闘後、スタスタと受け付けまでテリーは戻ってきた。

テリーに言葉は無く、メンバーたちを素通りし受け付けにある椅子に座った。

「テリー、さっきの……………一体何したんだ？」

「……………」

ヴェイグが今さっき起きた出来事を訊ねるが、テリーはそれを無言で返した。

放っておいてほしいと言った感じで。

数分前、テリーが行ったことは完全に人間の能力を逸脱した物だった。

肩を斬られたテリーは後退した魔導剣士に向かい、二度だけふらふらと剣を振る。

そのゆっくりとした動作は魔導剣士に当たること自体が考えられないはずの行動。

しかし、明らかに魔導剣士の身体の位置がずれていた。

倒れるように落ちた魔導剣士であった肉塊。

それ自体も数秒後には消え失せてしまっていた。

「テリー、一体あれは何をしたんだ？」

テリーの反応とは関係なく、ヴェイグは再び訊ねる。

「煩い、もうほっといてくれ」

「そっか……」

その後、テリーの次にミール、ヴェイグ、杏里と戦う順番が回る。

ミールとヴェイグの戦い方は至って普通だったが、トンファーを用い戦った杏里の戦い方は最低だった。

戦う相手となった見習いの魔導剣士の頭部から足先に掛けて全身を殴打し、意識を失った魔導剣士の首にトンファーの柄を数秒間押し当て、窒息させ殺そうとした。

この行為を行っている間、ずっと杏里は頬笑んでいた。

当然、他の魔導剣士たちによって杏里は止められたのだが結果的に四人は魔導剣士との戦いで勝利を収めた。

そして最後、シスイに順番が回った。

「シスイって誰かと戦ったことあった？」

「いえ……」

少しかだけ調子を取り戻したのかテリーが恐がっているシスイに声を掛ける。

「僕は母さんを護るため、ここに来たのですが……あれが力なんですね」

「もしかして杏里とかの戦いを見た程度で怖気付いたか？ だとすれば、洗礼を受けることになるな」

「洗礼？」

その問い掛けの後、シスイが呼ばれる。

戸惑いながらもシスイは戦闘エリアまで歩いていく。

シスイの相手は見た目が屈強そうな魔導剣士の男性。

二人が向かい合った時、戦闘の合図が流れた。

だからと言って、シスイは何も行動しない。

シスイの反応を見て、すぐに何かに感付いたのか、ずかずかと間合いを狭めて行く。

魔導剣士が目前まで迫ってもシスイはぼんやりと見つめるだけだった。

結局戦いはシスイが負けてしまった。

しかも、戦うというよりかは大人と子供の手加減された喧嘩だった。

ひとまずぼかぼか殴られ、逃げ出せば罵倒され、ようやく立ち向かったと思えば全く歯が立たずまたぼかぼか殴られるの繰り返し。

それはシスイが床に崩れ落ちるまで続いた。

「シスイ君！」

他の魔導剣士に介抱を受けているシスイに杏里は駆け寄る。

「杏里姉さん？」

「大丈夫？ 回復魔法を掛けてあげるね」

「いえ、大丈夫ですよ。疲れてしまっただけですから」

「疲れたって……あんなに身体を殴られたんだよ。全身が痛いはずだよ」

シスイが我慢していると杏里は受け取り、回復魔法を掛け始める。

その際、シスイから出血が無かったのを杏里は確認した。

「杏里姉さん」

「なに？」

「戦うって何をすれば良いんですか？ 僕には杏里姉さんのような戦うが出来ませんでした」

「ん？ 戦うなんて簡単だよ。戦いなんて自分が思うように楽しめれば良いんだよ。相手と一緒に楽しむ遊びなんだから」

「あれが……遊び？」

「そっだよ、遊び。シスイ君、もう疲れたでしょう？ お昼寝しようか」

「うん、杏里姉さん。おやすみ」

床に仰向けになったまま、シスイは寝に入る。

そのシスイを背負い、杏里は受け付けへと戻ってきた。

「シスイは失神したのか？」

戻ってきた杏里にテリーは声を掛ける。

「ううん、寝てるの」

「マジか？ あれだけ殴られりゃ痛みや悔しさで絶対に寝れる訳が無いはずなんだけど」

「シスイくんは……ボクにだって心配させないように痛くないって言った。きつと自分が痛がっていないように見せれば、皆は心配しないと思って我慢しているんだよ」

「へー、そうか。コイツ、なかなかの大物になるかもしれないな」

「では、皆さんの能力も把握出来たことですから、この魔導剣士修煉場をご案内しましょう」

いきなり声を掛けてきた男性は笑顔を作る。

「うわっ！ アンタ、いつの間に！」

「すみません、驚かせてしまいましたか？ 気配を消して歩くのは

癖なんですよ。では、皆さん行きましようか」

五人は修練場内を案内されるため、声を掛けてきた男性の後を付いて行く。

気配を常に消して歩く男性、ヴォルトに魔導剣士修練場を案内してもらった五人はこの場所の内容が大体理解することが出来た。

「ここがどういう場所かオレは知ってるから別に案内してもらわなくて良いんだけどね」

案内された後、テリーは呟く。

「それより、杏里。シスイには何かしらの変化はなかったか？」

「シスイ君はヴォルトさんがいる間、何かになされたみたいな声を出していたんだよ。どうしたんだろうね」

「やっぱりな。シスイは水人だから雷人のヴォルトが近くにいること自体が嫌だったはずだ。種族的な問題で」

「ノールちゃんが電気系魔法を苦手としているのと同じ理由？」

「そう。ノールは水人だから電気系魔法に対して致命的な程に相性が悪い」

「ふーん、そつか。今度、ノールちゃんに試してみようかな」

「おい……お前」

杏里の話した内容にテリーは引いた。

「先に言っておくけど、ノールは水人化の他に天使化も出来るだろう？ 水人化の場合は致命的なダメージを与えられるが天使化すれば水人でなくなったノールに蓄積されたダメージがオレたちが受けた際のダメージ量と変わらない程度になる。その場合、お前はノールに殺されるよ？ しかも、天使という種族は男性よりも女性が強いんだからな」

「忘れてた……ノールちゃんは天使界の大天使長だった。そういえば、テリーさんは種族のこと詳しいね」

「色々な場所で聖帝についてを調べてたら、他の種族についても知りたくなってね。まっ、その程度のことだ」

「テリーさん、シスイくんを寝かせてあげたいから何処か休ませられる場所に行きたいんだけど」

「ああ、そうだな。宿舎の方を勝手に使わせてもらおうか」

受け付けから離れ、テリーたちは宿舎の方へと向かう。

テリーたちが修練場内に建てられている宿舎に着くと、建物内には数部屋の空き部屋があった。

そのため、テリーたちは部屋分けをすることになった。

室内にシングルベットが二つ、クローゼット、テレビ、机などの家具があるキッチン付きのワンルーム。

「部屋分けをするけど、どついつ風に分ける？ あと、当然だけどオレは一人部屋だからな。理由は分かっているとと思うけど……ミールやシスイなら安心だけだ」

チラツとテリーは杏里、ヴェイグの方を見る。

「ボクはヘンなことしないよ！」

疑われてる気がしたので杏里は即答する。

「微妙に信じられない。襲ってきそうだね」

ひとまず、テリーは一人部屋、ミールとシスイ、杏里とヴェイグという具合に部屋分けが行われ、それぞれの部屋に解散する。

「ところで、杏里。ノールに脅されたって聞いたけど本当か？」

杏里とヴェイグの二人が自分たちの部屋に入った時、気になっていたことをヴェイグは聞いた。

「そうだよ。ボクを後ろから抱き締めて動けないようにされたの。それに胸を氷柱のようになった腕で刺されたし……ボクって嫌われてるのかな？ ヴェイグさんも、ノールちゃんに脅されたの？」

あまり考えないようにしたかったが杏里はヴェイグに同じ話題を振る。

「まさか、そんなことされてないよ。ノールに魔導剣士にならないかって誘われたから、ここに来たんだ」

「だったら、ボクにも普通に言っただけだったな」

杏里はガツクリと肩を落とす。

その頃、場所は変わってミールとシスイの二人が自室となった部屋で会話をしていた。

「色々聞きたいことがあるんだけど、君は姉さんとどんな関係なの？」

「僕は母さんの子供だよ」

「そんなことが信じられるか？　そもそも、君が生まれたばかりだとしたら姉さんみたいな姿しているはずないし、僕と普通に話せるはずが無いよ」

以前から言いたかったことをシスイに訊ねる。

とてもミールは戸惑っていたが、それは無理もないことであった。

いつも一緒にいた姉と同じような姿をした人物が目の前に現われたのだから仕方がなかった。

「僕は母さんの魔力で創られた存在なの。だから、他の人とは違うんだって……この前、母さんはそう話して下さいました」

ミールが怒っているか思っているのかシスイは俯いたまま語る。

「魔力で？」

「そうです。僕は魔力で創られたので最初から母さんと似た身体すがたをしているということも僕に話してくれました。僕は母さんと似ていることが、心から嬉しいのです」

自身のことを理解してもらったためにシスイは言う。

説明を聞いてもミールはシスイのことが、よく理解出来なかったし、存在を認めたくなかった。

だが、彼を突き放すようなこともしたくなかった。

修練に向けて

「うわっ……！」

シスイの悲鳴が場内に響く。

「どうした、それでは強くなれないぞ」

床に倒れているシスイにヴォルトが起こそうと近寄った。

現在彼らは初めて来た時に戦った闘技場で修練を開始している。

ここでは、入会者一名ずつ担当の魔導剣士が付くことになっていた。

その際、運が悪かったのか種族的に相性の悪いヴォルトがシスイの担当を受けることになってしまった。

水人のシスイにヴォルトが近付いたため、シスイの身体には電流が流れるような感覚が襲う。

その不快で嫌な感覚を耐えるため、踞ることしかシスイには出来ない。

「いつまで、そうしているつもりだ？ さあ、早く立ち上がるんだ」

ヴォルトはシスイの腕を掴み、無理矢理立ち上がらせようとする。

そのため泣きながらヴォルトの手をとり、シスイは立ち上がった。

「シスイ君が可哀想だよ……」

同じ闘技場で修練を受けている杏里はシスイがヴォルトに傷付けられているのを見てみると辛かった。

ハラハラした様子でシスイを眺める杏里に対し、彼の担当である魔導剣士が声を掛ける。

「杏里さん、よそ見はいけません。私との修練の最中ですよ？」

「魔導剣士さん。残念ですが、貴方はボクには勝てません。貴方から別の人に担当を変わってほしいの」

「何を言っているのですか、杏里さん？ 私たちは、まだ戦ってさえないのに勝てないだなんて。良いですか、相手の力量は……」

「そんなこと一切聞いていません。ボクはボクよりも強い人に担当が変わってほしいんです。ただ、今すぐに」

「貴方は私を侮辱しているようですね。良いでしょう、私に勝つことが出来ましたら担当が変わって差し上げましょう」

「はあ………そうですか？　ところで魔導剣士さんは人を殺したことがありますか？」

「いえ、まだ一度も。それが一体どうしましたか？」

「やっぱり。貴方の動き、身のこなしはどう考えてもそれを表わしているからね」

「だから、それがどうしましたか？」

「貴方は人を傷付けたり、傷付けられたりを殆どしていないでしょう。それだから、ボクが貴方の前に立っていても脅威だと分からない」「い」

「何やら結構な自信のようですね。ならば私を倒してみなさい」

魔導剣士は杏里に向かって剣を構えた。

「行きますす！」

魔導剣士は杏里に迫る。

それを確認し、溜息混じりに杏里は仕方なくトンファーを構えた。

「弱い人に武器を構えるのは、ボク嫌なのに……」

杏里の頭部辺りを狙い、魔導剣士は剣を振る。

それに対して杏里は静かに右腕に持つトンファーで軽く受け止めた。

「攻撃は、これだけ？」

「まだこれから！」

魔導剣士は何度も剣を振る。

だが、その連続的な攻撃も杏里は軽くトンファーで受け流し、当たることは無い。

「あの、ボク。まだこの位置を動いてないんですけど…」

以前より、杏里は比べ物にならない程強くなっていた。

そのためか、魔導剣士の猛攻に対してもまるで動じない。

「ならば、これは！」

魔導剣士は杏里の背後へと廻った後、杏里と間合いをとり、魔法を詠唱する。

「フレイムタン！」

詠唱により出現した火炎の火球が杏里を襲う。

「戦いで適わないと分かったら、今度は魔法でかかってくるんだね」

杏里は即座に魔法障壁を作り出し、簡単にフレイムタンの火球を防いだ。

「なに！」

攻撃も魔法も防がれ、魔導剣士は戦意を失い始める。

「どうやら、打つ手が無いようだね」

たじろぐ魔導剣士に対し、一気に杏里が間合いを詰める。

そして、魔導剣士の片腕をトンファーで殴打した。

「うわぁぁ……」

魔導剣士は腕を折られたため、背後にぐらつき折られてない片腕で反射的に片腕を押さえる。

「ふふっ、隙だらけだよ。魔導剣士さん」

微笑を浮かべる杏里は続けて残った腕をトンファーで殴打し、簡単に折る。

「こ、殺さないでくれ……」

杏里に適わないと完全に分かったため、魔導剣士は逃げ出した。

「最初に言ったじゃない。強い人が相手じゃないとボクとは釣り合わないって」

逃げ出した魔導剣士を見ながら、杏里は溜息を吐く。

「杏里、お前って絶対DSだろ？」

杏里の攻撃方法やその攻撃中にした杏里の表情を見ていたテリーはそう判断する。

「そ、そんなことないよ。ボクはSなんかじゃない」

杏里はトンファーをサイドバックに戻したため、性格が元に戻る。

「ところで、テリーさんは何してるの？」

特に修練もしないで杏里と魔導剣士の戦いをテリーは今まで暇そうに見ていた。

そのため、疑問に思った杏里は訊ねる。

「あっ、オレ？ 簡単に言つと魔導剣士だつてことがバレたんだ。そうゆう訳でオレはお前等の修練をしてやる側になつた訳だよ」

「それじゃあ、ボクの修練もしてくれるの？」

「なんていうかさ、オレって男を倒すのが好きなんだよね。オレじゃなくて、別の人に修練してもらつたら？」

「それって、どうゆうこと？」

「分かんなかったか？ 女とは戦いたくないってことだよ」

「テリーさん！ ボクは男ですよ！」

「知ってるよ、そんなこと。悔しかったら見た目、顔、声、仕草をたまには男らしくしてみろよ。杏里ちゃん」

ニヤけた様子でテリーは杏里をからかう。

「うう……」

心にダメージを受けた杏里は修練場から出ていった。

「ねえ、テリーさん。杏里くん何か言った？」

杏里がテリーの傍を泣きそうな表情で離れていったため、ミールが聞く。

「打たれ弱いんだな、杏里は。メンタル面をどうにかしなきゃ誰かに付け込まれるぞ」

「なんか変なこと言ったの？」

「杏里の容姿のことをからかってやっただけ」

「杏里くんは自分の容姿をからかわれると泣きそうになっちゃうんだよ。もう言っちゃダメだよ」

「そう言われてもね。杏里をからかうって楽しいじゃん」

「ダメだからね！」

「ところでさ、お前は誰かと戦うのか？」

「ううん、もう戦い終わったよ。ただ、杏里くんみたいに自分と釣り合う強さの人がここにはいないの」

「オレと戦ってみる？ 簡単に倒してやるけど」

「僕は倒されません。今すぐ勝負しましょう」

「気合いが入ってるな。そういえば、ミールの武器ってなんだ？」

「僕は武器を持たない方なんです。魔法だけで戦ってます」

「そつか。接近戦には弱いつてことだな？」

速攻でミールの間合いに入り込んだテリーは戦闘態勢にすら入っていないミールを不意打ち的に剣で斬り付けた。

飛び散る鮮血が目に入っても、ミールは自らに何が起きたのか一瞬では把握出来なかった。

「うぁー！」

身体の痛みに耐えきれず、ミールは床に踞る。

「どうした、ミール？ もう試合放棄か？」

踞っているミールに追い打ちを掛けるよう剣を突き立て貫く。

その後、一方的にテリーの攻撃が続いた。

四回程、剣を突き立てた時ようやくテリーはミールが極度に衰弱していることに気付き、攻撃を止める。

「やばっ……やりすぎた。ミール、生きてるか？」

明らかに不慣れな様子でテリーはミールに回復魔法を詠唱する。

「はぁ……はぁ……テリーさん、僕を本気で殺そうとした？」

「途中から斬ることが楽しくなって。また続けていいか、ミール？」

「お断わりします。全く、間合いも何もあつたものじゃない」

予定にあつたこの日の修練が終わり、自室に戻つたシスイは部屋にあるベットに倒れ込む。

極度の疲労により、シスイは何もしたくなかつた。

だが、母親のノールのことを思うと不思議と涙が流れる。

「母さんのためなんだ。僕が我慢しないと…」

「シスイ君？ 泣いてるの？」

シスイのすすり泣く声に心配になつたミールはシスイの傍らへ行く。

「どうしたのですか？」

シスイは涙を流したまま、ミールの方を見る。

この時、ミールには背筋をゾクツとさせるような不思議な感覚が過る。

恐らく姉に似ているためなのか、それともシスイに対して何らかの感情が芽生えたせいなのかもしれない。

「やっぱり泣いてる。シスイ君、身体が痛いなら回復魔法を掛けて

あげるね」

ミールは魔法を詠唱し、シスイを回復し始める。

「ミールさん……僕は多分、悲しいのだと思うのです」

ベットに横たわったまま、シスイは言う。

「どうして?」

「僕は母さんを護るため強くならなないとダメなんです。でも、母さんと約束したのに僕は今すぐに母さんに会いたい。本当に会いたいです」

「泣かないでよ、シスイ君」

シスイの姿はノールと似ている。

そのため、ミールには姉のノールとシスイがダブって映っていた。

「それに今、シスイ君が姉さんに会いに行ったら僕は姉さんに刺さる気がするし……」

「母さんがどうしたんですか?」

「なんでもないよ。世の中には知らない方が絶対に良いことだってあるんだよ」

「そうですねか……ミールさん、少しだけ傍にいて貰ってもいいですか?」

「傍に？ 別にいいけど？」

回復魔法を掛けていたミールだったが、シスイに寄り添う形でベツトに座る。

「ミールさんは母さんに似ていますね」

「まあ、姉弟だから」

「ミールさんは僕が貴方を好きになってもいいですか？」

「う、うん。いいよ」

「良かった……」

心が籠もった言葉をシスイは囁く。

再び、ミールにはゾクツとするような感覚がした。

「き、君って……女の子だったりする？」

「女の子？」

シスイはにこやかに笑う。

「ミールさんは僕に杏里姉さんみたいなこと言っんですね。僕も杏里姉さんも男の子ですよ」

「杏里姉さんって、杏里くんのことだよな」

「はい。彼は僕の父さんなのですが、僕には姉さんにしか。ですから、杏里姉さんと呼んでいます」

「そうなんだ……」

次の日、再びシスイはヴォルトと修練を積まされた。

それは、他のメンバーたちにとって大したことのない程度の修練だったが戦う能力のないシスイにとっては常に必死だった。

「立てますか、シスイ？」

修練を終えたからなのか、口調が柔らかくなったヴォルトが倒れているシスイに手を差し出す。

「……はい」

何とか、シスイは立ち上がる。

「昨日よりは動きも機敏になっています。シスイには戦いの才気があるのかもしれない」

「あの」

「どうしました？」

「ヴォルトさんはどうやって強くなりましたか？」

「私ですか？」

シスイの問い掛けにヴォルトは少し考える。

「最初は確か、世界の悪党を根絶やしにすることを目標に私は強くなるつもりでした。そのためなら何でもするつもりで、まずは魔導剣士になっておこうと思ったんです」

「それで……悪党は倒せたんですか？」

「いや、出来ません。と言うよりもそれをするのは最初から不可能だったんです。どの世界にも沢山の人っていて、しかも誰だろうと悪党になる可能性があります」

「まだ戦い続けているのですか？」

「いいえ、今は新しい魔導剣士を育てることをしています。それが今の私の目標です。シスイも何か目標としているものがありますか？」

「あります。母さんを護りたいんです」

「母親を、ですか？」

「はい、そうです」

「貴方は立派です。本来は元々誰もが、自らの大事な人を護るために戦う。その幼さで気付けるのですから」

「はあ……」

歳のせいかな、シスイはヴォルトが言っている意味がよく分からなかった。

「今日はもう部屋で休むといいでしょう。母親を護ることも大事ですが、そのことに固執し過ぎて、まだ未熟な身体を壊してはいけない」

「はい、分かりました」

シスイはふらつきながらも自室まで戻った。

戻ってから、昨日と同じようにシスイはベットに横たわる。

「シスイ君、今日もボロボロになっちゃったね」

ベットに横たわったままのシスイを気に掛け、ミールが声を掛ける。

「すみません、今日も疲れてしまいました……」

「回復魔法、使っ？」

「はい」

それを聞いて、ミールはシスイに回復魔法を詠唱する。

「ミールさん、すみません」

「なにが？」

「いつも、回復魔法掛けてくれるじゃないですか」

「ああ、そつゆつことね。気にしなくていいよ」

ミールはシスイの怪我が治ってきたため回復魔法を止めた。

「最近元気ないけどやっぱり戦うのは辛いかい？」

シスイはその言葉に反応したのか、ミールの方を見る。

「……そうです」

そう囁いて、ミールから目を逸らす。

「大丈夫だよ。僕も最初は辛かったもん」

ミールはシスイのベットに座り、シスイの頭を優しく撫でた。

「ミールさんはどうして僕に優しいのですか？」

「えっ？」

「僕が好きだからですか？」

「う、うん。そうなのかも……」

「僕は凄く嬉しいです」

シスイがにこやかに頬笑むのを見て、何故かミールは緊張してきた。

力一杯、彼を抱き締めてあげたい。

そんな衝動に駆られたミールは焦りながら話題を変える。

「君が辛いのは分かるよ。けどね、戦って辛いのは僕たちだってそうだよ」

「……はい」

「簡単なことを聞くけど、良いかい？」

「はい、何ですか？」

「僕を殴れるかい？」

「えっ……」

驚いた様子でシスイはミールの顔を見つめる。

そして、ミールから目を逸らし俯く。

「出来ません、そんなこと」

「そっか、やっぱり」

それを聞いたミールはシスイに近付く。

「えいつ」

気迫の籠もっていない弱々しい掛け声と共にミールはシスイの顔を殴る。

俯いていたせいか反応出来なかったシスイはベットに押し付けられる形になった。

「痛かったでしょ？ 君も誰かをこうやって殴ったり、これ以上の酷い目を相手に与えないといけない。でも君はヴォルトさんとの戦いの時に、優しさを持って行動をしてるように見えるの。優しさなんて、戦いではただ相手を有利にさせるだけの不必要な感情だよ」

ベットに倒れているシスイをミールは手で揺する。

ゆっくりと起き上がったシスイはミールの方を見る。

「いきなり殴られてムカつくでしょ？ そりゃあ僕だって殴られたらムカつくし、何倍にしてもやり返したいと思う。じゃ、次は人を殴る練習をするために僕を殴ってみよう。殴るのは目、顎、喉、胸のどれかだよ。ここが人の急所だから……」

そこまで話した時、シスイはミールに抱き付いた。

「ちょっと……何やってるの？ 僕に攻撃をされたんだよ。君は悔しくないのかい？」

「僕を……」

「なに？」

「僕を嫌いにならないで……」

シスイは力一杯、ミールを抱きしめ、声を出して泣く。

「シスイ君……」

ミールはどうしたら良いのか分からなくなっていた。

殴れば、誰でも闘争本能や怒りなどを滾たぎらせられると思っていたからだ。

しかし、シスイの行った行動は必死に抱き締めるということ。

ただ、ミールに嫌われたくないという想いからだった。

「落ち着いて、君を嫌いになったから殴った訳じゃないの」

「……………」

シスイはミールを抱き締めたまま、泣き止むことはなかった。

数日後、ミールはシスイから不思議なことを言われた。

「ミールさん、貴方は好きな人がいますね？」

「へっ？」

反射的にミールはシスイの方を見る。

「心から愛しているんですね、その人を」

「だ、誰を？」

「えっ？」

「僕の好きな人って誰のこと？ 僕はまだ女性とは付き合ったことがないよ」

「おかしいですね……確かに“見た”はずなのに。すみません、ミールさん。何か勘違いだったようです」

「多分それって夢じゃないかな？」

「はあ……夢ですか」

「そう、夢だよ」

「母さんが、僕は魔力体だから夢を見れないのだと水人の書籍を眺めながら教えてくれましたけど？」

「とっころで」

「はい、どうしました？」

「僕の愛している人って誰なの？」

「名前は“知りません”が容姿なら何とか覚えています。確か、シヨートカットでボーイッシュな服装をしたお金持ちの女の子でした」

「よ」

「一瞬、ジャスティン君かと思ったよ。彼は男の子だし、やっぱりそれは間違いだよ」

「ジャスティン？　そうですか、ミールさんには分かる方でしたか。先程まで、名前も経歴も鮮明な映像で“見た”かのように、はつきりとしていたのですが今ではまるで思い出せません……何故でしょう？　しかも間違いだとしたら何だかガツカリです」

少し、シスイは落ち込んだ様子を見せる。

「そこは落ち込んでほしくないよ。だって、それが事実だと僕は……その……言いたくないけど、同性愛をしてるってことになるもん」

「はあ……愛とは様々な種類があるのですね。母さんにも分からなかったことなので、僕も愛が分からなくなりそうです」

「ミールさん、起きてください！」

ミールに不思議なことを話したその日の深夜、シスイは抱き枕を抱き締めながら寝ていたミールを揺すって起こす。

「うー……なに？」

何となく、ムツとしたような反応をミールはする。

若干低血圧気味のミールは寝起きにかなり機嫌が悪い。

「母さんがネコ人にやられて傷だらけなの！ 助けに行きましょう
！」

「また、あの話かい？ 本当にいい加減してよ、こっちは眠いんだ
から」

愚痴を言いながらも、ミールはベットの傍にある棚を開け、ケータイに手を伸ばす。

「えーと……リダイヤルっ」と

さっさと通話をするため、リダイヤルボタンを押し、ノールと連絡を取る。

「あつ、姉さん、起きてた？」

約数秒後、ミールは会話を始める。

「ごめんね、変な時間に電話して。なんか、怪我とかしてない？
……だよね、そんなことある訳ないもんね……どうして、そんなこと聞いたかって？ シスイくんが心配したからかな？ ……うん、
じゃあね」

ポーツとした様子でケータイを棚にしまう。

「ちよつと、シスイ君」

「母さんはどうでしたか？」

「何ともないよ。第一、水人化出来る姉さんが身体を怪我するなんて殆どないんだから」

「そうですね……良かった」

シスイは安堵したような表情を見せる。

「シスイ君」

「どうしましたか？」

「次、こんな時間によく分かんないことで起こしたら君を怒るからね」

「……どうしてですか」

「君は自分勝手過ぎるよ。君がいう“見た”っていう姉さんのことはデタラメな嘘なんでしょう？ そんなことに僕を巻き込まないですよ」

「そんな……嘘じゃないよ」

「じゃあ、どうだったら良いの？ 本当に姉さんが怪我とかしていただく方は良かったなんて言うのかい？」

「違うよ、そんなこと！ 僕は母さんが心配で……」

「だったら、僕のことも考えてほしいね。じゃ、僕は寝るから」

「はい……すみませんでした」

シスイは今にも泣いてしまいそうな声で悲しげに返答する。

その日から、シスイは夜中になさされるようになった。

ミールが心配し、シスイを起こしてあげる。その繰り返し。

それでも、シスイはミールを頼らなかった。

自らに起こった“見える”力について調べた結果、ミールに頼れないと知ったからだだった。

明くる日の夜中、ミールは部屋の外（廊下）からの物音で目が覚めた。

「うっせー、ホント、バカじゃないの……？」

ぶつぶつと愚痴を言いながら、その音でシスイも起きたかと思い、シスイが寝ているベットの方を見る。

「あれ？ シスイ君、どこに行っただら？」

隣のベットで寝ているはずのシスイはいなかった。

ただ、毛布が捲れているだけでどこにも。

「どうしたのかな？ トイレ……かな？」

ぼんやりとシスイのベットを眺めながら何となく考えていると、突然無言で自室のドアを男性が開けた。

「うわっ！ ちょっと、なに勝手にドア開けてんだよ！」

突然、自室に男性が入ってきたため、ミールは急いでベットから下りる。

「……………」

そのミールに男性は無言で近寄るとミールの腕を掴んで引っ張る。

「ちょっと、待ってよ……………ってか何で掴んだよ！ 離せ！」

反射的に、その男性の顎付近を全力で殴る。

しかし、男性はまるで効いていないような様子だった。

「嘘だろ……………普通なら脳震盪を起こしてもおかしくない威力なはずなのに……………」

その後、ミールは数発殴ったが男性に腕を引っ張られたまま、闘技場にまで強制的に連行された。

ミールが闘技場へと連れてこられると、内部にはテリーのほか、魔導剣士修練場に来ているメンバー全員がいた。

「あつ、ミール。お前も捕まったのか。使えない奴だな」

テリーが呆れたように語る。

「……………」

ミールを無言で闘技場まで連れてきた男性は、ミールの手を離した。

「やっと離れたか、お前ふざけんなよ！」

空中へ舞い上がるとミールは男性の顔に廻し蹴りをくらわせた。

男性はその威力によって弾き飛ばされたが、即座に立ち上がって無言でミールの方を見つめる。

「何でだよ……………体術が効かないなんて」

「ミール。よく分かんねえけど、こいつらには攻撃が効かないみたいだ。オレも部屋に入ってきたこいつらを全力で殴ったけど、全く効いてないみたいだったし」

「テリーさん、こいつら一体何なんだよ！ こいつらも魔導剣士なのか！」

「落ち着けて、普段から敬語のお前が全然らしくないぞ。それとこいつらだけ何なのか分からない。一体何をしたいのかなんて余計にな」

「あの、ミール君。シスイ君は一緒じゃないの？」

不安そうに杏里がミールに訊ねる。

「シスイ君……そうだ。僕が起きた時にはもうシスイ君がいなかったんだ。シスイ君がここにいないってことはどこかに隠れているかもしれないね」

「いえ、そうではないですよ。ミールさん」

どこからか声が響いた。

「……シスイ君？」

全員が、その声ができる方を見る。

「皆さん、すみません。まだ上手く扱えなくて」

闘技場の奥の方から、シスイがミールたちに近づく。

「扱って……何を？　もしかして、そこにいる人たちをかい？」

自身や他のメンバーを無理矢理連れてきた男性たちをミールは見つめる。

「そうですね。ミールさん、察しが良いですね」

「何でこんなことしたの？」

「これからしないといけないことが僕にはあるのです。でも、僕だけでは出来ない。誰かに協力して貰えないと困るのです」

「どっやって操ってたんだ、こいつら?」

シスイの話を止め、テリーは聞く。

彼女はシスイの言動から嫌な予感以外していなかった。

「この人たちですか? それは僕の水人の能力を駆使した結果ですよ。何故かは分からないですけど、人間は身体の約70%が水で出来ているとパソコンで見たんです。それなら水人の力で操作出来そうかな? って思い、試してみたんです……ミールさん、“シナリオ”を覚えていますね?」

テリーに話した後、再びシスイはミールに問い掛ける。

「なに、それ?」

「貴方が女性と付き合っているとそのことを貴方に伝えた。それを僕は伝えた。覚えていますね?」

「うん、覚えてる」

「その未来予知の総称を“シナリオ”といいます。神など存在するはずがないので、神託オラクルではありません。よく誤解されるらしいのでこれは伝えておきますね」

「それが何なの? どうしてこんなことしたの?」

「貴方を未来予知で“見た”ことを貴方に伝えようとした。ですが、僕は“見た”ことの大半を忘れてしまっていた。自ら“見た”この内容を伝えようとすると忘れてしまう、それがこの“シナリオ”の

欠点。それでは伝えることにはならない、何を伝えたいのか僕自身分からなくなってしまう……しかし、それは生物であればの話」

シスイは悲しげな表情を見せる。

「お前が何を言いたいのか分からないけど、お前には予知能力があつてその能力を悪用しようとしてることは分かった。こうなりゃ、こっちは力づくで止めるよ」

「テリーさん、僕に操られてください。理由はこの場で言えば忘れてしまうので、無条件でお願いします」

「却下。当然、断るよ。こちらとしては勝手な行動をしてもらいたくはないんでね」

「では、仕方ありませんね。僕が彼等にしように貴方たちも力尽くで操作させてもらいます。僕の“見た”通りに動いてもらわないと困るのです」

つまり、これからシスイが何をしようとするか直感的にメンバー全員が分かった。

「おい、杏里、ミール、ヴェイグ！ 分かっているだろうな！」

テリーが叫んだ瞬間、四人は闘技場の出入口へと向かって一斉に駆け出す。

「逃げても構いませんよ。貴方たちにとってはそれが賢明な選択だ。ですが、貴方たちは僕から逃げられない。ただ、それを断言します」

「ねえ……テリーさん。僕たち、逃げてきて良かったのかな？」

魔導剣士修練場から四人は疾走する。

「シスイ君のことを説得した方が良かったんじゃないかって僕は思ったんだけど……」

「ミール、シスイの話を聞いただろ？ 賛同を得られないと知ったことは、どう考えたってオレたちもあの魔導剣士ども同様、一緒に操って従わせようって魂胆だろ？」

「確かにそうだけど……」

「ミール君。これってさ、絶対ノールちゃんに知らせないといけないんだよね？」

何かに杏里は怯えている。

恐らく、シスイのした行動をノールが知れば、監督責任をあのよう
に押し付けられた自分はノールに本当に殺されてしまうのではない
かと、そんな感じで。

「どうした、杏里？ 気分でも悪いのか？」

ノールの話をした瞬間から、杏里の顔色が悪くなった。

それが気になったのでヴェイグが訊ねる。

「ううん、なんでもないの。ボクは大丈夫だから」

ヴェイグは杏里の様子から、とても大丈夫でないのだと理解出来た。

「知らせるとするならば、やっぱりこれだろ。ケータイで連絡」

走ることを止め、ケータイをテリーは取り出す。

しかし、電話は繋がらなかった。

「あれ、繋がらないけど？ アンテナは最高なんだけど」

「仕方ないからさ、一旦テストに戻ったらどう？」

結局、電話は繋がらないため、一旦テストにテリーたちは帰ることに決まった。

「じゃあ、またオレが」

テリーが続けて空間転移を詠唱する。

しかし、空間転移は発動しなかった。

「あれ？」

「詠唱失敗ですか、テリーさん？」

「いや、それは無い。以前詠唱したことがあるから空間転移出来る

はずだし……スロートの情景を思い浮べたし……」

「もしかして、あれのせいだったりする？」

ミールは空を見上げる。

「空って？」

釣られるようにテリーも空を見上げた。

空には雲一つない、星が煌めく綺麗な夜空が広がっている。

それは普段と何ら変わらない風景だった。

ただ、見え方がいつもと違っていた。

「薄い膜のようなものが……あれは水か？」

テリーたちの遙か上空には何か薄い水の膜のようなモノが覆っている。

少しだけ情景が濁っているのはそれが原因のようだった。

「とにかく、嫌な予感がする。急いでここから離れよう」

テリーが話したのち、その場から四人が離れようとする。

「ホワイトアウト！」

瞬間、何者かの声が響く。

テリーたちが周囲を見渡すと、徐々に濃い霧のようなモノが覆い始める。

魔法のようなのか自然の速度とは比較にならない早さで周囲を覆う濃霧に視界が完全に奪われていく。

「やっぱり、シスイ君……なの？」

濃霧によって視界が奪われた状態でミールが彷徨っていると背後から気配がした。

「ミールさん」

「シスイ君……？」

ミールは背後へと振り返る。

「ミールさんは僕がしたことに驚いてくれましたか？ ほら、あの空にある膜が見えるでしょう」

「あの水の膜は、一体何を意味するの？」

「あの範囲までが皆さんを操ることの出来る範囲。皆さんには本当に協力してもらわないと困るのです」

「協力って……」

「そうですね、母さんのために」

「姉さんが？」

「これ以上はミールさんに教えられません。勿論、母さんにも。話そうとすれば、欠けら程しか伝えたい記憶が僕には残りませんから。伝え方は別にあります、これが僕の最初で最後の母さんへの……」

悲しげにシスイは魔法を詠唱する。

危機感を感じ、反射的に構えの態勢へとミールは移ろうとしたが……

「身体が……動かない？」

「ミールさん、全てが終わったら貴方たちを解放します。僕がしたことに対して許してほしいとは言えません……ただ、僕を忘れないでほしいです」

直後、ミールの意識は途絶えた。

修練場に行こう

シスイが他人を操作し始めてから数日後。

「おっそいんだけど？」

何故か、ノールはアーティの部屋でダラダラしながらテレビを見ている。

「お前さあ、そろそろ自室に帰ってくんない？」

四人掛けのテーブルの椅子に腰掛けながらダラダラとしているノールにアーティは語る。

そのアーティもテーブルの椅子に座り、ジーニアスと向かい合う形でトランプ遊びをしていた。

「いいじゃん、別に？ 今、杏里くんがいないから部屋に居てもボク楽しくないんだもん。それにさ、逆に感謝して貰いたいところだよね。折角、こんなに綺麗なボクがこのむさ苦しい部屋に来てやってんのにそんな態度取るなんてムカつくじゃん。あっ、言っとくけどむさ苦しいのはアーティだけだからね」

背伸びをしながら、ノールは立ち上がる。

「最近お前って性悪だね。初めて会った時と分かりやすいくらいキヤラ変わったけど。それより、遅いって何が遅いんだ？」

「うぜーっ、知るかよそんなの。あっ、そうだ、アーティ。知りた

いなら土下座しろ」

「本当にやな女だな」

「じゃあ、僕には教えてくれますか？」

その話を傍で聞いていたアーティと同じ部屋で生活しているジーニアスが訊ねる。

「勿論だよ。ミールみたいにジーニアス君は可愛いし綺麗だからね」
ジーニアスの隣に座っていたノールは、ジーニアスの頭を優しく撫でる。

「僕を子供扱いしないで下さいよ」

微妙に恥ずかしかったのか顔を仄かに赤く染めた。

「ってかさ、何でオレに教えないでジーニアスには教えたんだよ？」

「ふん、さっき言ったじゃん。聞きたいなら土下座だって」

その際、ノールはアーティと顔を合わさなかった。

「……………」

「それじゃ、ジーニアス君には教えてあげるね」

「あっ……………うん」

何やら緊張しているのかジーニアスは言葉に歯切れが無い。

「えっとねえ、ジーニアス君。何が遅いかって言うかね……」

「さっさと見えよ」

話してる途中でアーティが割り込む。

「だから、アーティには全然話してないんですけど。ボクはジーニアス君にだけ話しているんだよ。勝手に勘違いしないでくれない？それとも妄想癖ですか？ 可哀相ですね、アーティさん？」

「ああ、そうかい。だったらさっさとジーニアスに話してやれよ」

「何言ってるの？ 今そうしてるじゃん。ねえ、ジーニアス君」

「えっ……う、うん」

「ほら、ボクの言った通りじゃん。アーティはほつといて続きを話すからね。実はね、杏里くんたちから連絡が来ないんだよ」

「ケータイから電話すればいいじゃん？ エリアースで何個か買ったる？」

「そんなこと、とっくにやったよ……って言うか、ジーニアス君に話してんの。勝手に割り込まないでよ、ムカつくし」

「それってさ、もしかしてお前が恐くて連絡しないだけなんじゃないの？ 確かお前ってさ、杏里のこと脅して魔導剣士修煉場に行かせたって他のメンバーから聞いたけど、それが原因じゃねえの？」

「脅したって、ボクが？」

「ナイフで胸を刺したって、オレは聞いたけど？」

「それはどう考えたって嘘だよ。第一、ボクがそんな酷いことする訳がないじゃん。ねえー、ジーニアス君」

「あの……ノールさん。そろそろ続きをしないでいいですか？」

「あっ、ゴメン。何かトリックテイキングゲームみたいのをしてるようだけど、アーティとなにやってるの？」

「ブラック・ジャックです。僕は得意なんですよ」

ジーニアスはとても自慢げに語る。

「よし、ジーニアス。また続きをするか」

トランプをシャッフルし、アーティはカードをテーブルに置く。

「じゃあ、引くよ」

さっ、さっ、と二人はカードを引いていく。

「オレはミツバのジャックとスペードのクイーン。これって、勝ったんじゃないね？」

「ふふっ、アーティさん。僕はハートの1とハートのジャックだよ」

「ハア……」

アーティは落胆した様子で深い溜め息を吐く。

「アーティさん、あと二回で二万だからね。忘れてないよね？」

「あ、ああ、勿論覚えているよ。当たり前じゃないか？ あっ、ノール」

「なんだよ？」

「連絡が来ないんだったら自分から会いに行けばいいじゃないか？ オレたちも行くよ」

「あっ、それいいね」

「それいいねって……普通最初に気付くだろ？」

「それじゃ、さっさとシスイくんに会いに行くから支度しろよ、アーティ」

「何で、命令口調なんだ？」

「ジーニアス君も一緒に行ってくれるよね。お願い！」

アーティの話を完全に無視して、ノールはジーニアスに話し掛ける。

アーティはそれをただ黙って見ていた。

それぞれが支度をし終わった後、ノールは空間転移を詠唱する。

空間転移により一瞬に近い速さで、シスイのいる世界へと着いた。

「おつかしいなあー。ボク、魔導剣士修練場前に来るように魔法を使ったんだけど？」

空間転移により行き着いた先は魔導剣士修練場近くにある街であった。

街にはビルなどが立ち並び、車両のためのアスファルトで出来た道路が造られている。

つまりこの世界は、エリアース程の文明が発達しているようだった。

「ねえ、アーティ。何で魔導剣士修練場に行けなかったと思う？ほらあ、さっさと理由話せよ」

しかし、返事は帰ってこなかった。

「ちょっと、アーティ聞いてんの？」

疑問に思ったノールは辺りを見渡す。

だが、周囲には自分以外誰もいなかった。

「なにこれ？ ボクをバカにしてんの？」

イラッとしたノールは、スロートのアーティの部屋に戻るため再び空間転移を詠唱する。

「ちょっと、何で二人とも来ないのさ」

アーティの部屋に戻るとノールは二人に話し掛けた。

「知らないよ、オレたちもお前と一緒にシスイのいる世界に行けると思ってたよ」

「わざと来なかったんじゃないか？」

「魔法なのにどうやってだよ？ それに行かないんだっいたら何で支度なんてするんだよ？」

「あつ、そうか。また魔法を詠唱するから今度はついてくるんだよ？」

再び、ノールは空間転移を詠唱し始める。

また今回も一瞬に近い速度でシスイのいる世界に着いた。

「着いたよ。アーティ、ジーニアス君」

ノールは笑顔で周囲を確認する。

しかし、二人はいなかった。

そのせいなのか、ノールは心から、イラッとした。

数十秒後、ノールは速攻で空間転移を詠唱し、アーティの部屋に戻ってきた。

「ちょっと、何で来ないのさ!」

「いや、こっちが聞きたいよ。こっちだって準備してたんだからな」と言いつつも、アーティとジーニアスは相変わらずテーブルでブラック・ジャックをしている。

「何してんの?」

「ブラック・ジャック。それっ、ダイヤのクイーンとスペードの9だ」

アーティは元気よく、引いた二枚のカードを出す。

「へへっ、僕はスペードの1とハートのキングだよ」

ジーニアスは笑顔でカードを見せる。

「つまらん……もう一回勝負だ!」

その後に引いたカードを目にしたアーティが一言だけ呟く。

「ちょっと、ボクの話し聞いているのかい? 何で一緒に来ないのって聞いてんの!」

「知るかよ。今から大勝負を仕掛けるんだから後にしやがれ!」

「えっ……ちょっと……」

「ジーニアス、今度で積み重ねた額が二万だ。勿論やるよな!」

「オーケー、アーティさん。まだ、僕しか勝っていないけどね」

「ちよつと、アーティ。子供からお金取る気なの？ 最低、大人気ないよ！」

「まだ、オレしか負けてないんだけど？」

とにかくアーティはノールを無視して、またジーニアスとブラック・ジャックを始める。

さっ、さっ、とカードを引いて二人はカードを見せる。

「オレはハートの3、ハートのキング。また引かせてもらっよ」

「別にいいけど僕が引いたのはミツバの1とハートのジャックだよ」

「……………」

項垂れた様子でアーティは無言になった。

「い、いや、まだオレが負けたとはい決まってるねえ！ 次のカードでブラック・ジャックにすればドローだ！ それでいいだろ！」

次にアーティが引いたのは普通にスペードのキングだった。

「な、なんでだ…………？」

アーティはテーブルに突っ伏した。

「それじゃ約束通りに」

先程と変わらない笑顔でテーブルに置いてあったアーティの財布から二万だけジーニアスは取り出す。

「アーティさん、これでまた新しい僕の衣裳が買えるよ。ありがとうー！」

とても嬉しそうにジーニアスは部屋から出ていった。

「ねえ、アーティ。ちょっと」

「……ノール、すまん。オレは戦闘不能だ。身も心もうボロボロなんだ。十回やって十回負けたんだぞ。しかもジーニアスはイカサマも何もしてないんだ。素で勝っていたんだ。だって、全てオレがカードを切っていたんだから……他の奴と一緒に行ってくれ」

アーティはテーブルにうつ伏せになったまま、微動だにしない。

「クソ……二万って、タバコ何カートン買えると思ってるんだよ。マジ、泣きたいよ」

「まつ、いいんじゃないの？ 身体にはね」

「でも、あの金はな……女物の服に使われるんだから、オレが全然救われねえよ」

「女物って……もしかして、ジーニアス君はお姉さんのワイスさんに何かプレゼントでもするの？」

「だったら、割り勘で金を分けてあげるよ。あいつの趣味だからこんな賭けをやってるんじゃないか……あいつがエリアースで変なものを見付けてこなければ良かったのに」

「エリアース？」

「メイドカフェ……だったかな？ 毒されたから衣裳が欲しいんだとき」

「でも、ジーニアス君って男の子だから衣裳はギャルソンのじゃないかな？ ボクも、この城に連れてこられる前は貴族の家のメイドしてたから疑問に思っただけだよ」

「ジーニアスに変な感情を抱きなくなったら訳を聞かない方がいい」

「ふうん？ だったら仕方ないね。じゃ、ボクは別の人を誘ってこれから」

仕方なく、ノールはアーティの部屋から出ていく。

その後、ちょうど城の中庭を歩いていたライル、ルウを理由も言わずにノールは自室に呼んだ。

「用って、何ですか？」

そわそわしながら、ルウはノールに聞く。

「言っただけ？」

「全然聞いてないよ。来てくれてノールさんが言っただけ」

「ああ、そうだった？ 今からシスイくんに会いに行くんだけど、ボクと一緒に来てくれるかい？ 何だか知らないけどね、杏里くんから連絡が来ないんだよ」

「杏里たちに何かあったのか？」

シスイという言葉に反応したライルはノールに迫る。

「えっ？」

「シスイが杏里たちに何かしてたらどうするんだ！」

ライルが強迫的に迫ってくるため、ノールは後退りをする。

そのためか、壁に押し付けられるような格好になった。

「ちょっと……ライル、怖いよ……」

「……すまん」

悪かったと思っているのか視線を逸らし、ライルはノールから離れる。

「ノールさん、大丈夫？」

「うん……ルウくん。なんか、ゴメンね」

「それじゃ、シスイのところに行くか。二人とも、空間転移を詠唱

するぞ」

ライルは空間転移を詠唱し始めた。

そして、三人はついさつきノールが着いた街へと現れる。

「あれー？ 今度は三人で、すんなり来れたね。不思議だな？」

何故か今度は三人でこの世界に来れたため、ノールは不思議だった。

その時、ルウが頭を抱え、しゃがみ込む。

「兄さん……僕、ここに居たくない！」

「ルウ！ どうしたんだ！」

酷く慌てた様子でライルはルウに駆け寄る。

「僕……スロートに戻るね」

苦しそうに頭を抱えながら、ルウは空間転移を詠唱し、その場から消えた。

「ルウ君、どうしたんだろう？ 大丈夫かな？」

「分からないが凄く心配だ。ルウになにかあったら、オレは……オレは一体どうすればいいんだ」

「ライル、落ち込みすぎ」

以前とは打って変わったライルのルウへの反応に微妙に引きつつ、ノールは語る。

「でも、本当に何があったんだろう？ ルウ君の行動は、さっきのアーティたちがここに来れなかったのと何か関係してるのか？」

ぼんやりとしながらノールは空を見上げる。

「ねえ、ライル。空に水の膜みたいなものが張ってあるんだけどさ、何かな、あれって？」

「空に？」

ルウのことで深く悩んでいたライルも空を見上げる。

「確かに薄い膜みたいなのが張ってあるような？」

「なに、あれって？」

「さあな。ひとまず、オレはシスイに会ったら帰るぞ。ルウのことが今は心配だからな」

「うん、分かった」

ノールたちは魔導剣士修練場へと向かって歩き始めた。

その頃、この世界にノールが現われたことをシスイは察知していた。シスイには、ノールの行動を全て把握出来た。

それは空に張っている薄い水の膜のようなものによって可能にさせている。

シスイの作った水の膜には複数の魔法が込められている。

その能力の内容は水の膜が張つてある位置にいる生物を操ることが出来ること、その位置にいる生物の行動が全て把握出来ること、その位置に操られている生物以外入れないこと、操られていないのに無理矢理侵入しようとするやと魔力に抑えられ身動きが取れなくなることである。

ただし、シスイと同じ水人には行動が把握出来る以外に効果がない。

そのため、シスイはノールたちがいる街へと操っている魔導剣士たちを向かわせた。

「ライル、この街って何かおかしくない？」

「ああ、オレもそう思っていたところ」

「だよね。さつきから歩いているけどさ、ここってエリアース並みに近代的だから道路があるのに自動車も一台も通らないし、人の気

配もない……不思議だね」

「でさ、街をうろついている訳だけど魔導剣士修煉場って何処だ？」

「ん〜、迷子」

「ハア？」

笑顔で迷子になっていることを自白したノールに対して、ライルはかなりテンションが下がった。

仕方なくライルは街の周囲を確認していると、目前にあるT字の通りの方から数名の集団が近付いてきた。

「あの人たちって敵だよね？ 誰もいないのにそれを不思議に思っ
てさえないって感じだし」

「そうかもな。というか、アイツらに魔導剣士修煉場の場所を聞いて
みたらどうだ？」

「バカだね、言ってくれる訳が無いでしょ？ 一応聞くけど何人ず
つ倒す？」

「六人だから均等に半分でいいんじゃないの？」

「んじゃ、いこっか」

一気にノールたちは駆け出す。

ライルとノールは戦いを挑み、集団をたったの一分で全滅させた。

「弱いね……なんか今思ったんだけどさ、この人たちって本当は無関係だったりして？」

あまりにも弱い連中だったので、ノールは不安になっていた。

「……ってか、オレも思ってた。ハンターだったら、どうしようか？ 敵じゃなかったらさっさと回復してやらないとヤバいかも」

ライルが回復魔法を詠唱しようとした時、不思議なことが起きた。

倒したはずの数名の集団が立ち上がったのだ。

「あれ？ 手加減しすぎたかな？」

とっさに謝らなくてはヤバいかもと思ったノールは集団へと近付く。

「怪我はないですか？ ちょっと、敵かと思っちゃって……すみません」

「強いですね、ノールさん。ですが、接近し過ぎたのは頂けません」

「へっ？ 何でボクの名前を知ってるの？」

ノールが訊ねた瞬間、ノールの首筋に衝撃が走った。

ノールは何も出来ないまま、地べたにひれ伏す。

「油断をし過ぎています。人間化している私を実際は雷人だと全く気付けないなんて」

「ノール！」

ノールの異変を察したライルはノールを助けるために駆け出す。

「さあ、皆さんはノールさんをシスイの下へと運んでください」

集団の一人が他の五人にノールを預けると、ライルへと向き直る。

「この街や世界に入られるのは現在では水人のみ。ならば弱点が分かる、それは私の存在だ」

その男性は突如、雷人化の高度化である雷神化を行う。

それは常に電流を身体から発しているため、水人にとっては最悪な相手であった。

「さっきのが私の実力であると思うな。半端な者は相手が弱いとすぐに油断する。それを狙ったに過ぎない」

「雷人だと！」

ライルは直ぐ様、雷人の男性と距離を取る。
ヴォルト

「どうした？ 早く私を倒さなくては彼女を救えないぞ？」

「ああ、そうゆうことね。だったら、さっさとそこを退けよ」

「それは出来ない。シスイからの命令を拒むことは私には出来ない。ノールさん以外は排除しろとなっている」

ヴォルトは鞘から剣を抜き、その剣に電流を通電させる。

「シスイが何をしたいのか私には分からない。それに排除しろとのニュアンスもどの程度のものなのかさえも分からない。もし、殺してしまった場合は何も未練を持たず死んでくれ」

ヴォルトはライルに迫る。

「こいつ、シスイを知っているようだな。まさか、シスイに何かされているのか？」

ヴォルトと距離を取りつつ、ライルはこれから雷人相手にどう戦えば勝利出来るのか思案する。

ライルが戦おうとしているヴォルトは雷人である。

以前、シスイとヴォルトが戦っていた時のように水人のライルは雷人のヴォルトが傍にいただけでダメージを受ける。

しかも雷人化の高度化である雷神化ならば、ダメージは増加する。

そのため、ライルは短期戦を望んでいた。

「そういえばこいつ、さっき雷神化したよな……雷神化は雷人化した状態の高等した形態だ。そうすれば、雷人化した時より電流量が増加し、雷人自体の能力もより強化される。これはどう考えてもオレじゃ勝てないな」

そんなことを考えつつ、ライルは迫ってきたヴォルトの剣による攻

撃を躲す。

しかし、ライルは躲しながらもヴォルト自身から発せられている電流を受けていた。

「早くなんとかしないと身体に電流が帯電して……いずれ、オレは動けなくなる」

再び、ヴォルトの振るった剣による攻撃を躲すと、ライルは即座に態勢を直す。

ライルがヴォルトに勝利するには逃げながら、魔法による長距離戦に持ち込まなくてはならなかった。

もしも剣を交じ合わせてしまえば、ヴォルトの剣から電気の直流しを受け、一撃で仕留められてしまう危険性がある。

「勝つ方法は……やっぱ、アレしかないよな」

それでもライルはヴォルトへと剣で攻撃を仕掛けた。

当然、ヴォルトはライルの攻撃を躲さずに剣で受けとめた。

「何故、私と剣を交えたのですか？ 私と貴方がどうゆう種族なのかを貴方は深く知っているはず。今貴方は単なる自殺行為を行っているのですよ？」

ヴォルトの剣から伝わってライルの身体に電流が流れ始める。

直後、傷口に硫黄を塗り込むような痛みがライルの全身を襲った。

「オレ、まだ攻撃をくらってないよな……こんなに強烈なんて……」

その後も、ライルはヴォルトの剣を何度も剣で受けたため、身体に電流が帯電し始めていた。

それによってかライルの動きは鈍り、動きを抑圧され始めた。

「早くも動きが鈍ってきたようですね？」

ヴォルトはライルに何度も攻撃を仕掛ける。

確かにヴォルトの言う通り、ライルのスピードは極端に鈍っていた。

「……………」

「応答する体力もなくなりましたか？ でしたら、これ以上痛め付けるのは可哀相ですね」

止めを刺すため、ヴォルトは身体から電流を発し、剣にその電流を込める。

そして、軽くフェイントを掛け、ヴォルトはライルの腹部を剣で刺し貫く。

意識を失ったのかヴォルトに寄り掛かるようにして力なく倒れた。

「これで終わりですか。能力の高い若者でしたが、やはり我々雷人には水人である以上勝てないということですね」

ヴォルトは剣を引き抜くと、ゆっくりとライルを地面へと横たえ、自らの雷神化を解く。

「では、シスイの元へ戻りますか」

ヴォルトはライルから離れようとしたが……何か足に引っ掛かった。

それと略同時に、ヴォルトは呼吸が出来なくなった。

「勝手に……自己完結してんなよ！ 負けるのはテメーだ、そろそろ息が出来なくなってるじゃねえのか！」

ヴォルトの足に引っ掛かったモノは、必死にしがみ付いたライルだった。

「何を……？」

「さあな？ ただ言えることは、テメーは水人のオレに接近し過ぎたんだよ」

「そうですね、これは失敗りましたね……」

擦れ息苦しそうな声にならない声で、ヴォルトは嘔き倒れた。

「勝ったか……水人だって雷人に勝てるじゃねえか……」

貫かれた部位を押さえながら、ライルは立ち上がる。

「ダメージが酷いけど、ノールを助けないと……」

ライルがヴォルトに勝利した頃、ノールは修練場に到着していた。

不意を突かれたため身動きの取れないままのノールは魔導剣士の一人に背負われた状態。

完全に無抵抗のまま運ばれていた。

修練場の戦闘エリアに辿り着いた魔導剣士たちは、そのエリア中央にノールを仰向けのまま置き去りにして立ち去った。

「母さん？ 大丈夫？」

シスイの声が聞こえる。

「母さん、ゴメン。身体、痛いよね？ 他の人を操る時の加減がまだ分からなくて……」

「……………」

「けど、母さんにはまだ痛い思いをしてもらわないとダメなの。理由は言えないけど、そうしないとダメなの」

「……………シスイくん？」

僅かにノールがシスイの声に反応する。

「僕は母さんを諦めないから。だから、あの人の目覚めに僕は懸ける……杏里くんたち、母さんに命が関わる程の怪我をさせて」

シスイの話が終わった後、杏里とミールの二人が仰向けのままのノールに近付く。

「どうしたの、そんなところに寝転がっちゃって？ そんなところに寝てたら傷付けづらいでしょ？」

そう言うとミールはノールの腹部を思い切り踏み付ける。

「うう………！」

あまりの痛みにノールは悲痛な声を発する。

「そんなウザったい反応はどうでも良いの。僕はシスイ君から姉さんを傷付けて良いって言われたから、早く姉さんを傷付けたいの。それなのにどうして姉さんは僕に協力してくれないの？」

不満げにミールは痛みに悶えるノールを再び踏み付ける。

「ほらあ、早く水人化しよ？ 水人化すれば、物理攻撃が効かなくなるんでしょ？ 踏まれたくないんだったら、さっさとしなよ」

「……………」

ノールは無言で、水人化を始める。

徐々にノールの身体は透け始め、肉体とは異なる身体へと変化した。

しかし、それは今のノールにとって極度な負担になる変化だった。普段の人間化した状態であっても身体を動かせなくなる程の高圧電流を受け、身体が帯電しているにもかかわらずの水人化。

通常の水人なら水人化した瞬間に意識を永遠に失ってしまう。

「痛い……痛いよ、ミール……」

それでもノールは意識を保っていた。

しかし、痛みは致死量に匹敵する。

酷い苦痛にノールはミールの足元に縋りつく。

「姉さん、痛いんだね？ 僕の言ったことが酷い結果になることになるのを知らなかったのかい？ ……ううん、そんなことないよね？ 僕のことを信頼してるから分かっててもしたんでしょ。ふふっ、僕は凄く嬉しいよ。僕の言葉や行動で姉さんがどんどん傷付いていくんだもん」

その後、ミールは何か魔法の一節を唱える。

「今の魔法はね、姉さんが一番嫌いな雷魔法だよ。魔法が発現するまでの時間を少しずらしておいたから死ぬ前に言い残したいことを何か言えば？」

「……ミール、大好きだよ」

「はっ？ そんなこと言えば助かるとでも思ったの？ 浅知恵だね、姉さんは。じゃあ、さっさと死んで。デスパークボルト、発動！」

瞬間、ノールに強力な雷が落ちる。

ノールの全身を電流が貫き、身体は生きることが拒んだ。

ノールの身体からは水蒸気のようなモノが放出される。

それは、水人にとっての死である“分解”であった。

「杏里くん、ごめんね。君の出番はなかったよ」

ミールは杏里に声を掛ける。

「全然構わないよ、ミール君が楽しそうだったから」

二人は楽しげに会話する。

そんな二人を尻目にシスイはノールの変化を待っていた。

「僕の“見た”母さんはこの後、変わる。あれが本来の姿なのですか……母さん？」

身動き一つ取らなくなったノールをシスイは見つめる。

当然、ノールの“分解”は止まらない。

それが既に水人としての死なのだから。

「疑問に思ったのだけど、もしかしてシナリオという能力を知っていますか？」

「えっ？」

シスイは驚きを示す。

声は分解しているはずのノールから聞こえたからだった。

「酷くないですか？ シナリオで、この娘が“死ぬ”と分かっているでもその子である貴方が死期を早めさせるなんて」

「貴方は……母さんなのですか？」

「違う、私とノールは別物。一つではありません。私の意志をノールは知らない。今は知る必要など無いの」

ゆっくりとノールは立ち上がる。

既にノールの“分解”は止まっていた。

そして、その場にいるのはノールであってノールではない。

ノールの身体を得た、ノール自体の能力を遥かに凌駕する何者かだった。

「シナリオで、貴方は見たはず。ノールはネコ人のルインに殺されると。母親の死を変えたかったですか？」

「変えたかったです。分解での死なら、貴方が出てきてくれると知ったから」

「そう……この瞬間からシナリオは変わってしまった。全ての者に決められていたシナリオが。では、母親にも貴方の意志を伝えると良いでしょう。意味は分かりましたね？」

「はい、母さんがどうなるか気付いた時から心を決めていました」

シスイは何かの魔法を詠唱する。

すると、杏里やミールたちの周囲を透明な六角形のオーブが覆った。

「封印障壁を彼らに施しました。僕が死ぬまで彼らにダメージも無ければ僕を庇いに来ることもありません」

「そう。なら、もう何も言わない。私の出来ることはこれくらいだから」

ノール（不明）はシスイに近付き、シスイの頭部を掴む。

「デススパークボルト」

一瞬で、シスイの全身を電流が貫く。

ガクツと両膝を付き、シスイは動かなくなった。

ついさっきのノールと同じようにシスイも“分解”が始まる。

それと略同時にノールにも変化が起きた。

「シスイ君……身体、どうしたの……？」

ノールから発せられた音はノールの声。

ノールとは別の人物（不明）から人格が変わったようだった。

「こ、これって“分解”が起きているじゃない！ どうして、シスイ君！」

シスイの身に起きている事態を悟ったノールは極度に取り乱した。

「母さんに戻ったのですね」

シスイは何かを囁く。

「もう、僕にエクスは効かない……勿論、魔力体である僕にはリザレクも効かない。僕はこうなることを望んでいたのです」

「シスイ君、生きてよ！ 死なないでよ……」

「もうすぐ、僕が僕である魔力が途切れます。それまでに母さんに話しておかなければならないことがあります。これから、僕が言うことをどうか忘れないで下さい。母さんは、モンスターハンターに所属してはならない。母さんは、ルーメイアの世界に行ってはならない。この二つを守れば、母さんの身に悪いことは決して起きません」

言い終わると、シスイの“分解”が加速する。

「やはり、そうだったみたいです。僕はもう死んでいるからシナリオを忘れなかった……僕が試したことも決して無駄ではなかったようです。杏里姉さんやミールさんのことを許してやって下さい。僕が彼らを操っていたから母さんに怪我をさせてしまいました」

そして、シスイは完全に“分解”し、ノールの目の前から消えた。

「母さん、僕はもう死んでしまいます。母さんと出会い、母さんを愛せたことをとても嬉しく思います。これから会えなくなってしまうですが……母さんのことを僕はいつまでも心から愛しています」

シスイの最後の声はとても嬉しそうに聞こえた。

「……………」

目の前の自体、シスイが消滅したことをノールは受け入れられない。

胸の辺りが急に苦しくなり、目から涙が溢れた。

それと共に、ノールは全身から力が抜け、床にぺたんと座り込む。

例え目の前で起きた現実を受け入れられなくとも理解は出来た。

シスイは死んでしまったのだと。

「シスイ君……シスイ君……」

ただ、ノールは泣くことしか出来なかった。

泣いていれば、シスイが心配して戻ってくると思って。

泣いていれば、これ自体が本当は夢であり、この夢から目覚められると思つて。

「ノールちゃん」

ノールの背後から声が聞こえる。

振り返つてノールは背後を確認する。

「杏里くん？」

「元気を出して、ノールちゃん」

「……………」

「ノールちゃん、ひとまずスロートに戻る？」

「……………」

ノールはずっと泣き続けている。

「一緒に帰る？」

「君は……………シスイ君が死んじゃったのに悲しくないの？」

「……………」

「ゴメンね、もう大丈夫。自分で、シスイ君を“殺した”のに泣くなんて偽善的で最低だよ。ははっ……………段々思い出してきたよ」

「でも、ノールちゃんがシスイ君と話してる時、普段と様子が違かったよ！」

「普段と様子が違うのなんて当たり前でしょ。シスイ君を殺そうとしてるボクと普段のボクの様子が一緒だったら、普段からボクはクズだってことだもん。にしても、大事な人を殺す感覚ってこんな感じなのかな？ ボクがシスイ君を殺す前にしたことが思い出せないんだよ。ボクが雷魔法を放ったのは、しっかり覚えているのに」

「ノールちゃん……」

「帰ろっか、杏里くん。こんなとこにいたって意味ないでしょ？」

「うん……分かった」

二人が会話をしている間、ミールはただ二人を見つめていた。

今まで操られていたせいか、はつきりとは思いつけないが姉のノールを酷く傷付けてしまった。

ミールには以前も操られていたため、ノールを傷付けてしまった過去がある。

その後、姉を守るためにスロットで必死に積んだ鍛練も結局は姉を傷付けてしまう結果にしかならなかった。

「僕はこれ以上、姉さんの傍にいてもいいの……かな？」

ミールは心の中で、そう思う。

「ミール」

ノールがミールに声を掛ける。

「な、なに、姉さん？」

「ボクは魔力が少なくなってるみたいだから空間転移を頼むよ」

「姉さんは僕のこと……」

「早くして」

「うん、ゴメンね」

俯いた様子でミールは答える。

「空間転移」

ミールの詠唱により、ノールたちはスロート城内の中庭に現われる。同じエリアから来たためなのか、一緒にテリー、ヴェイグ、ライルもその場に現われた。

「あれ？ 部屋から出れた？」

ぼんやりとした感じで、テリーは呟く。

「何してんのお前等？ 操られてたんじゃないのか？ てか、ノールもいたのか。って言うか、スロートにいるのか今って？」

全く話の展開にテリーはついていけない。

「テリーさんは操られなかったの？」

「まあ、色々と“普通の奴とは作りが違う”のさ。てことで、監禁されてたみたいなんだけど……つか、その二人は何やってるの？」

テリーは倒れているライルと、ライルの手当てをしているヴェイグを見つめる。

「ライルの身体は電気がかなり帯電している。早急に治療を施さないと命に関わるんだ。テリー、肩を貸してくれ！ 彼女、名医橘綾香ならライルを救えるはずだ！」

「はあ？ 綾香さんが？ 普通にヤブみたいな感じに見えるけど大丈夫なのか？」

ヴェイグと共に内心、心配そうにしているテリーがライルを背負うと中庭から離れた。

「ボクは部屋に戻るけど、室内には……入らないでほしいの」

俯き酷く落ち込んでいるノールは中庭から離れる。

「待って、ノールちゃん」

と、杏里が声を掛けた時、二人を呼ぶ声がした。

「杏里、ミール。そこにいたのか」

声を掛けたのはアーティである。

「テリーたちが戻ってきたのを確認したから、お前らも戻ってきたと思ってね。探してたよ」

「どうしたの？」

「テリーたちが戻ってきたら伝えようとしていたんだけど、今回また新しい仕事が入った。早速だけど仕事についてを話したいからオレの部屋に集まってくれ」

「うん、分かった。でも、ノールちゃんが…」

「知っているよ。もうノールのことは“見た”。勿論、ノールがするべきこともね」

「それってどういうこと？」

「ノールも、オレの部屋に来るってことだよ」

アーティに二人がついていくと、アーティの部屋にはライルと綾香の二人、ノール以外が全て集まっていた。

「皆もう来てたんだ？」

「まあ、最初から知っていたしな。これからのことについて話すけど、これからモンスターハンターはオレが探してきた仕事を行うこととする。行いう仕事は二つ、ソニックブームでのエルフ対人間の戦争加担とルーメィアで発生した幻人という種族を排除するだ」

「あつ、ルーメイアってオレ知ってるわ」

アーティが会話している時にテリーが答える。

「同室だから色々と聞けたんだけど、綾香さんの故郷だよ。そこって」

「へえー、マジか。だったら、綾香さんにはルーメイアに行ってもらうか。知っている人が居れば、行動が取りやすいからね」

「行動が取りやすいからって、もしかして」

「ああ、そうだ。二つも仕事があるから、メンバーを二つに分けて仕事を行ってもらおう。つまりは班分けだ」

「オレは……アーティと一緒にいいな」

普段と違ったソワソワしたような態度をテリーはする。

「構わないよ？ 先に言ってもらった方が班分けをしやすい。ついでに言うけど、オレの班はソニックブーム側。それ以外がルーメイア側って感じね」

特に気付いてないのか、アーティは業務報告のように返事を返す。

「あつ、そう。なんか、しらけたわ」

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、何も言ってるねえ」

怒っているのか普段より声のボリュームを上げて、テリーは言った。

「何怒ってるんだよ、テリーらしくないな。でさ、他に振り分けられたいと思ってる奴はいる？ 先に言ってくれ」

「アーティさん」

軽く流されたため、さっきより怒っているテリーに代わって次にジーニアスが訊ねる。

「ソニックブームではどちらの味方をすれば良いのでしょうか。僕がソニックブームに行くとしたら、エルフ側を支援しますけど」

「だったら、ソニックブームに行くのは止めておいた方がいい。仕事を依頼したのは人間側だ」

「どうして、その戦争が起きたんですか？ ルーメイアではミュータントが人を襲っているから助けに行かないとダメだって分かるけど、エルフと人間が戦うなんて理由が聞きたいです」

「聞きたいのか、ジーニアス？ 理由を聞かなくてももお前が考えることと同じだ。種族の違う者同士の戦争なんて悪辣で程度の低い価値観が行わせるものだよ」

「それでも理由が聞きたいです」

「そっか。怒るなよ、ジーニアス？ あいつら人間は人間以外が上に立つのを極度に嫌っているらしく、見た目が人間ではないとすぐ

に気付けたエルフ族だけを毛嫌いしているみたいだ。エルフ族がその世界にいるのが嫌だ、それが戦争の原因だ」

「やっぱり……そうだったか」

ジーニアスはググツと、両手を握り締める。

「僕が目には物を見せてやる。ソニックブームの世界の人間を根絶やしにしてやります」

「あー、ダメだわ、それは」

「どうして？ アーティさんは人間の味方をするの？」

「いや、そんなことはない。人間が死ぬのなんて、オレからしてみればハナからどうだっていい。でも、仕事の事情に自らの価値観を持ち込んだじゃいけないとオレは思っている。だから、ジーニアス。それはダメだ」

「だったら僕はルーメイアに行きます。人間側に着いて戦っている皆を戦場で見たら僕は裏切ってしまうような気がして……ソニックブームへ行くのは嫌です」

「それでいい、ジーニアス。仕事だと理解してくれて、ありがとう」
既に泣きそうになっているジーニアスの頭をアーティは撫でる。

アーティにはジーニアスが何故、ここまで他の世界のエルフ族を思っていたのかを知っていた。

自らと同種族が戦うことになったら助けに行きたいと思う。

それは他の種族では間違いなく有り得ないことである。

戦いは嫌いだが、私には関係ない、戦うことなど野蛮だ、力の争いなど無益だ。

そんなことはエルフ族も分かっている。

しかし、平和を愛するエルフ族は違った。

力なき弱き者も、強き者も、誰しもが戦いを仕向ける相手に立ち向かうのだ。

当然、ジーニアスにも強く優しさに満ち溢れたその心があった。

「でも、僕は悔しいです。僕には力があるのに」

ジーニアスはもう自らの眼から溢れるものを抑えることが出来なかった。

「ジーニアス！」

ジャスティンがジーニアスを抱き締める。

「ジーニアスはスゴく良い奴だよ。変な趣味を持った男の子だと前から思っていたけど、熱い心を持っていたんだね。見直したよ！」

「ジャスティン君……」

ジーニアスは自らの心情が認められた気がして、再び泣き始める。

その時、ヴェイグがいる方から、ガタツと音がした。

「ジ、ジャスティンがオレ以外の男に抱き付くなんて……」

ヴェイグにとって、ジャスティンが他の男性に抱き付くことは腰を抜かしてしまう程に驚くべきことだったらしい。

その後、数分間を掛けて、メンバーをどの世界に割り振るかを話し合っていると、アーティの部屋のドアを開く者がいた。

「アーティ……いる？」

物悲しい声で語り掛けるノールには普段の彼女らしさは無い。

「どうした、遅かったじゃないか？」

「ボクは今日でモンスターハンターを辞めるよ……じゃあね」

それだけ言うとノールはドアを閉めてしまう。

「おい、ノール！」

辞めるとだけ伝えて行ってしまったため、アーティはノールを追い掛ける。

アーティが自室の外へ出ると、城の回廊には誰もいなかった。

仕方ないので、アーティはノールの部屋まで行き、彼女の部屋へと入る。

「ノール、いるか？」

アーティが室内へと入った時、ノールは膝を抱き、その膝に顔を押し付けたまま、ベットに座っていた。

「どうして、モンスターハンターを辞めたいんだ。理由を言ってくれよ」

「……………」

ノールは何も答えない。

「ノール」

「ボクはもう戦いたく無いんだよ。ボクがこんなだから、シスイ君を殺してしまったの」

二度目の問い掛けの時、ノールは答えた。

そして、ノールは微かに頬笑む。

「ふふっ、狂っているんだよ、ボクは自身の子供を当たり前のように殺すんだから。皆に迷惑が掛からないようにモンスターハンターも辞めて、一人で死ぬよ」

「そういう訳の分からん理屈で戦いたくもないし、生きたくもないのか？ 言うけどな、オレだって数多くの種族を殺害してきた。だからと言って今まで死にたいだなんて思いもしなかったわ。お前もさ、もうちょつとまともな考え出来ないのか？」

「ボクが他の誰かを殺すのは……これで二人目だよ。アーティのようにボクは強くない、そんなこと思うことなんて出来ない……もう辛いんだよ、ボクは生きていたくないんだよ！」

「お前は生きている！ シスイはお前にそう望んだはずだ！ あいつが最後に言い残した言葉は何なんだ、思い出してみろ！」

アーティの声にハツとした様子でノールはアーティを見上げる。

死ぬしかないと悟っていた自分に心から“生きる”と言ってくれたと感じたのだ。

「……シスイ君はボクを愛してるって言ってくれた。生きてほしいって言ってくれた」

俯いたまま、ノールは答える。

「でも、アーティはどうしてシスイ君が言ったことを知っているの？」

「ノール、お前がモンスターハンターを辞めるのは認める。その代わり、お前が戦うのを止めるなら、お前の経験値を全て提供しろ」

「うん、分かった……」

ゆっくりとノールは頷いた。

「ああ、それと」

アーティは座っているノールの頭部を掴む。

「なに……してるの？」

「せめてものの行為さ。今日から四日間、きつと良い夢が見れるよ」

数分後、アーティは自室へと戻ってきた。

そのアーティの手には不思議な球体が浮かんでいた。

「アーティ、それってなんだ？」

「これか？ これはノールから取った経験値だ。じゃあ、皆に配るから」

「配るって、どうやって？ それにノールからって……」

テリーの問い掛けに答えずにアーティは魔法によって、ノールの経験値を全員に振り分けた。

「おい、待てよ！ 姉さんが経験値を渡す訳ないだろ！ 今までの

努力の成果をタダで明け渡すなんて絶対におかしいよ！」

「そうだね、でもそんなことはオレの知ったことじゃないよ？ あいつはシスイという人員を減らしただけでなく、何を考えているのか自分が辞めるとまできた。つまりは今日から使えない女だ。まあ、所詮経験値を他のメンバーに受け渡すためだけにウチの組織に在籍していたと考えれば少しは役に立ったのかもしれないね」

「テメー！ 言わせておけば勝手なことを言いやがって！」

普段のミールなら絶対に口にしない言葉をアーティに投げ掛ける。

「そうか、ミールも姉弟だったな、あの女と。お前も一緒にモンスターハンターを辞める。もうな、こつちとしてはまた問題を起こされたら困るんだよ。ほら、さっさとあの女のところに行きな」

「言うな、それ以上」

ミールのオーラが一瞬で変わった。

完全にキレてしまったのかミールは周囲を考えず、魔法の詠唱を始める。

それは誰も聞いたことのない魔法詠唱。

恐らく天使しか扱えない神聖魔法の一種らしい。

その時、ミールの目は心なしが銀色のような色を放っていた。

「くらえ、プラ……」

と、そこまで発した時、杏里がミールの口を塞いだ。

「ダメだよ、ミール君！ 仲間同士で戦うなんて！」

「放してよ！」

ミールは杏里を振り払う。

「アーティ、お前が生きていられるのは杏里くんのお陰だからな！

“オレ”はモンスターハンターになんか絶対に所属なんてしない！ 頼まれたって願い下げだ！」

そう怒鳴るとミールは怒りながら部屋から出ていった。

「あつ、ボクも……ノールちゃんが辞めるなら辞めるね」

杏里もそう言い残し、部屋を出ていこうとする。

「ちょっと待て、杏里」

アーティが杏里の腕を掴み引き寄せる。

そして、アーティは杏里の耳元であることを伝える。

「オレの言葉だけじゃ、決してノールを救えない。ノールを愛しているお前とミールだけが、今のあいつの心を救えるはずだ。あと、ミールには済まなかったと、オレがソニックブームへ行った後に伝えてくれ。あれは本心ではなかった」

「あつ、うん……分かった」

杏里は不思議な表情をした。

自分から誠心誠意を込めて謝れば良いのではないかと。

「伝えてくれよ、お願いだ」

そういうと、アーティは杏里から離れる。

「ああ、じゃあ、もう行っていいよ。引き止めて悪かった」

ミールに語った時と同じような口調をアーティはする。

杏里は疑問に思いつつも、アーティの部屋から出ていった。

結局、新たな仕事を始める前にメンバーの三人がモンスターハンターを辞める事態になってしまった。

他のメンバーはとても困惑していたが仕事の期日が迫っている。

それから、モンスターハンターのメンバーとして残ったメンバーたちは別の世界へと向かった。

ただ、一名を除いて。

第一三部～第十六部までのキャラ設定など

第一三部～第十六部までに出てきた組織、キャラクター、世界観、種族の細かな設定を載せていこうと思います。

ついでに作品内の時間経過ですが第十六部終了時点で、第一部開始から約二年の歳月が経過しています。

設定の順序は

名前（年令、身長、種族、性格、特徴や価値観などの順です）

アーティ（年令20才、身長178cm、竜神族の青年。覚醒したことにより、シナリオを開花。その能力を扱って何かを悟ったが誰にも語れぬために一人何かを画策している。ノールには不思議な感情を抱いている。ギャンブルは壊滅的な程苦手のだが、本人は気付いていないため結果的に大敗を喫する。今回のブラック・ジャックも当然互いに小細工無しのガチ勝負だった）

テリー（年令19才、身長173cm、人間の女性。シスイの操る能力で唯一、一人だけ操られなかった人物。理由をテリー自身は分かっている様子。聖帝を知り始めて聖帝としての能力を数パーセント程扱えるようになった）

リュウ（年令25才、身長180cm、竜賢族の青年。アーティより先にシナリオを開花させていたがテリーに対してしか扱っていない。アーティに少しだけ避けられるようになっていことに気付いている）

ノール（年令19才、身長173cm、水人の女性。心が折れ鬱の傾向があり、死にたがっている。自らが、シスイを殺してしまったと思い込んでいる。モンスターハンターを辞めたため、これからどうするかを深く考えているが、やはり現時点では死のうとしか思い浮べられない様子）

春川杏里（年令18才、身長166cm、人間の男性、性格は天然というかぬけてる。ノールを痛め付けてないせいか、操られている時の記憶を全く持って無いがノールはシスイを殺していないと思っている。今のノールを自らがどうやって支えていけば良いのか不安になっている）

橘綾香（年令26才、身長170cm、人間の女性。医者と賢者の資格を持っているが今は医者も賢者もしていない。それでも、医者らしく振る舞いたいらしく女医のような白衣は欠かさず着用し見せ付けている。しかし、頼られると何故か困る。総世界的に有名な名医らしく、別の世界に住んでいたヴェイグでも橘綾香の医者としての腕を知っていた）

ライル（年令19才、身長177cm、水人の剣士。ノールを助きたい一心で、雷人であり雷神化したヴォルトに闘いを挑み勝利した水人のまま、雷神化した雷人に勝利を収めた数少ない水人。水人の書籍などで水人についてをノール同様に調べている）

ルウ（年令16才、身長163cm、炎人の少年。最近兄に剣技を習い得意になった。魔導剣士修煉場へ行くことになったが、シスイの水のバリアに阻まれ、スロートに戻った）

ミール（年令16才、身長163cm、出身は不明。シスイが自分

たちにしたこと一番ショックを受けていた。操られている時に姉を分解（死）へと追いやったことが記憶に残っている。姉を傷付けることしか出来なかった自らが姉の傍にいても果たして良いのかと深く疑問に思っている。しかし、アーティの言葉で姉を守るのは自分しかないとい心から思い、考えを変えた）

ジャステイン（年令16才、身長158cm、人間の女性。ノールと同じように同室だった人物が数週間いなかったため寂しかった。その時に、ミールのことを自身がどう思っていたのか悟ることが出来た）

ヴェイグ（年令20才、身長177cm、人間の男性。以前、ジャステインが言ったようにとてつもなく賢くパソコンのような脳を持っているため橘綾香が名医だと既に知っていた。一先ず、見たもの聞いたものは調べ尽くすことが日課らしい）

ジーニアス（年令15才、身長130cm、エルフ族の少年。最近自分の身体が13才の頃から成長していないことに気付いた。子供ながらに同族を救わなくてはならないという強き心を持っている。ギャンブルに関してはメンバー内最強）

ヴォルト（年令85才、身長176cm、雷人の男性、出身は不明、冷静沈着で紳士的な性格。自らの電流を帯びた剣を用い戦う。雷神化出来る上級雷人で能力はとても高かった。ライルとの闘いの最後に窒息させられたが、その窒息は一時的なものなので生きている）

シスイ（年令0〜数ヶ月才、身長160cm、コピーの水人男性、性格は強がりで寂しがり屋。ノールの水分身で出現したノールとは性格も価値観も全く別の水人。女性のノールと顔や体型が似ているため華奢な細身の美少年である。ノールと見た目が似ているためミ

ールと仲が良かった。能力はノールが自らを基準に設定したのでノールとあまり変わらない。しかし、シスイはノールとは違い、行動決断力に優れ意志も強い。コピーであるがゆえか痛みを感じる神経が欠如しており、先天性無痛無汗症のような状態になっている。魔導剣士との戦いで苦しまなかったのはこれによるもの。ただし、雷人の電気には違和感や苦しさを感じる。ノールの仕付けが良かったのか常に敬語を話し、礼儀を弁えている。品行方正な人物だったが人間に対しては極度のレイシスト。口にも態度にも示さなかったが人間を下等な生物と見下している)

能力について

水分身（強力な水人のみで使用出来る禁忌の業。本体と似た水人を創ることが出来るが創られた者の性別は逆転する。水分身をして創られた人物が本体を殺せば、創られた人物も本体も死ぬ。逆に本体が創られた人物を殺した場合は特に何も起こらない）

水のバリア（水神化した水人のみで使用出来る能力。水のバリアに魔力を入力すれば、水で覆った範囲内にいる生物にその能力を与えることが出来る。ただし、水人には効果がない。元々は支援魔法）

経験値の振り分け（経験値は自身が渡すことを受け入れれば、相手に渡すことが可能。その代わりに、自身の能力は強くなろうと決意した瞬間の強さに戻る。何故なら根こそぎ受け渡すことになるから。しかし、受け渡すことを行なえるのは水人、炎人、雷人のみ。例を上げるならば、ノールの場合はステイの兵士と戦おうと決意した時の強さに戻る。だが、扱える魔法や能力や変化は残る）

中間点

現在、メンバーたちはアーティの提案で今まで滞在していたスロートから離れ、ジャスティンたちの故郷であるエリアースへと移動していた。

理由は名目上、スロートよりも近代的なエリアースの方が充実した機械という設備が整っているからであつたが他のメンバーはノールが原因だろつとは見当が付いていた。

しかし、理由はそうでは無かつた。

アーティには分かつていた。

シナリオへの変化を起こすというのがどういふことなのかを…

「アーティ。おい、アーティ！」

「あつ、どうした？」

「お前の分のハンバーガー買って来たから食べよ、ほら」

買って来たハンバーガーという食べ物をテリーは手渡す。

現在、アーティたちはエリアースのファーストフードショップで食事を取っている。

「以外と美味しいよ、これって」

片手に持ったハンバーガーをテリーはバクバクと豪快に食べていく。

「テリー、ちょっといいかな？」

「なに？ ドリンクバーなら向こうだよ？」

「違う。少しは女の子らしくハンバーガーを食べたらどうかなって
言いたかっただけ」

「女の子が食べている時点で、“女の子らしく”食べていると思う
けど？」

「屁理屈じゃないかい、それって」

「でき、アーティ。もう一回聞くけど班分けはソニックブームがア
ーティ、オレ、リュウ、ヴェイグ。ルーメリアが綾香さん、ライル、
ルウ、ジーニアスで良いんだよな？」

「ああ、そうだよ。三人も辞めちゃったからな。いきなり人数が減
っちゃったね」

「んで、ジャスティンもな。ヴェイグはどこに行ったのか知ってい
るみたいだけど」

「ふーん、そっか。ジャスティンにも何か理由があるんだろう」

「お前さ、最近何か隠してないか？」

何かを感じているのか、アーティにさり気なくテリーは言う。

「えっ？ えっ……例えば何だよ？」

「分かりやすいな、アーティは。何か悩んでるんだっいたらオレにも教える」

「さあ、何だったかな？」

さっさと話を切り上げると、メンバー全員にアーティは呼び掛ける。

「次にオレたちが行くのは、ソニックブームとルーメイア。今回の仕事は長期間を要する激しい戦いだ。命に関わるようなことになったら、すぐに逃げるんだよ。今のオレたちには天使が一人もいないのだから、リザレクが扱えない」

「それに関しては大丈夫だよ。誰も死にたくなんかねえからな」

先日、命に関わる闘いを行ったライルが速答する。

「本当よ、全く。この前、私でももう無理かもって諦める寸前だったわよ」

クスクス笑いながら、綾香は当たり前のように語る。

「あっ、諦めるって医者としてどうだよ」

マジか？という風な表情をライルは浮かべる。

「まあとにかく、そういう訳で戦いでは絶対に勝て。相手に完全な敗北を与え、勝利を強く実感しろ！」

「おー！」

アーティの号令にメンバーの数人が答える。

「あの、お客様」

「はい、何ですか？」

「店内では他のお客様もいらっしやいますので、なるべくお静かにお願いします」

「あ、はあ、すみません」

店員にさり気なく注意され、アーティはトーンダウンした。

「はあ……まっ、いいか。ハンバーガー食い終わったら空間転移でそれぞれの世界へ向かってくれ」

ファーストフードショップの一角でぼんやりと綾香はあることを考えていた。

それはスロートを去る時の出来事。

その時の回想を巡らす。

「ライルくんも思いつきり傷付いちゃって……ゾクゾクしちゃうじゃないの」

隣で聞いたら完全に引いてしまいそうなことを囁きながら、綾香はアーティの部屋へと向かう。

彼女はヴォルトとの戦いで傷付いたライルを治療していたため、アーティの招集に遅れていた。

そのアーティの部屋へと向かっている途中、廊下正面からミールと杏里が歩いてくるのが見えた。

「あら、こんにちわ。ミール君、杏里くん」

「……………」

ミールは無言のまま、綾香を見ようともしない。

「やあ、綾香さん。ミール君は今とっても機嫌が悪いの。気にしないでね」

「そうなの？ 私は構わないけど」

「ボクたち……モンスターハンターを辞めたの」

「どうしてなの？ これから仕事があるのよ、私たちは」

「姉さんが辞めたからだよ。それに……僕はこんなところに所属なんてしていたくない」

「そうなの、ノールちゃんも辞めちゃったの。だったら、仕方ないわね」

微妙に何かを綾香は考える。

「ねえ、杏里くん。もしかしたら貴方、私の弟じゃない？」

「えっ?」

唐突すぎる一言にミールと杏里は綾香の方を見る。

綾香の質問に杏里は呆気に取られた様子であったが答えた。

「そうだったの?」

「ううん、分からないけどね。似ているからそうなのかもしれない
と思っ……やっぱり違うかしら?」

「ボクには分からないよ。ボクの父さんと母さんはもう死んじゃったから、ボクのこと分かる人はいないし……」

「何だ、杏里くんにも両親がいたの。ねえ、杏里くんって養子ってことはないの?」

「違っよ、綾香さん!」

「じゃあ、名字は? 同じだったら姉弟よ!」

「それ決め付けすぎだよ……」

「名字よ！ もう、ハッキリしなさい！」

「は、春川です……」

「春川？ じゃあ、違うわね。私の名字は橘よ……なんか残念だわ」

綾香はかなり落胆した様子だった。

それから綾香はその名字が違うというだけの理由で特に調べもせず姉弟ではないと判断した。

身内かどうかなど、DNAの技術で簡単に知ることが出来るのだが綾香はそのことに気付けなかった。

513

「杏里くんが私の弟だったら良かったのに」

綾香はスロートでの出来事を思い出しながら溜息を吐く。

「綾香さん？」

「えっ、なに？ どうしたのかしら？」

何かを考えてるのか黙ったまま、ボーツとしている綾香にアーティ

が声を掛ける。

「オレたちはソニックブームの方に行くから、さっさとライルたちと一緒にルーメイアの方に行ってくれないかい？」

綾香が周囲を見ると既に他のメンバーは支度を整えた状態であった。

「そうね、それじゃあ私は故郷でゆっくりしてくるわ」

「ああ、その方が良くかもしれないね。戦いは長引くと思うし、オレもゆっくりしながら仕事するよ」

メンバーのやる気は区々（まちまち）だったが、メンバーは二つの世界に別れた。

丁度彼らが二つの世界に散った略同時刻、ルーメイアの地にネコ人という種族のある一人の女性が出現していた。

彼女がルーメイアの地に出現したことは不明。

当然、彼女自身も何故この地に自らが現われたのかを知らない。

ただ一つ、彼女には分かることがあった。

「私は、再び異次元空間から抜け出すことが出来たのね」

静かに、彼女は涙を流す。

「今度は……何時までこの世界にいれるのか分からない。これが最後なのかもしれない」

彼女は涙を拭った。

「でも、ただこれだけは言えるわ。私は自由よ！」

嬉しさのあまり右腕を高々と振り上げ、完璧なガッツポーズを取る。

ルーメイア

エリアースにて綾香が空間転移を詠唱してから数秒後。

ルーメイア行きメンバーたちは小さい池の畔にいた。

そこは周囲を見渡しても、建物どころかここがどこなのか分かる物さえない場所だった。

「……どっ？」

疑問に思ったジーニアスが綾香に訊ねる。

「ここはね、私のお気に入りの場所よ。この場所から少し歩けば、私の故郷のフォートっていう街があるわ」

「それって、僕たちの仕事に何か関係があるの？」

「ジーニアス君、何を言っているの！」

いきなり大声を出して、ジーニアスに綾香は詰め寄る。

「あ、あの……綾香さん？」

「全く関係がないわ。そういう訳で、私の故郷であるフォートの街に寄りましょう」

綾香は他の三人を完全に仕切って、フォートまで連れていく。

そして、綾香たちがフォートの街が見える高台辺りまで到着した。

「うーん、なんかおかしいのよね」

里帰りが出来るため、かなりはしゃぎながら歩き回っていた綾香だったが態度を変化させる。

「どの辺がおかしいんだ？」

「街の様子よ。だって、私がいた時には街の中に城なんて立ってなかったもの」

「それじゃあ、普通の街から城下街にランクが上がったってことじゃない」

「確かにそうなんだけど、街並の景観を崩してるわ、あれって」

綾香の故郷であるフォートは、スロートと同じように煉瓦造りの綺麗な街並みをしている。

しかし今では、その街を括るように城壁が構築され、街の丁度中心に最近築城されたばかりの真新しい城があった。

その城には見栄えを城らしくするためなのか、いくつかの尖塔が立っているが見張りとして扱えるのは一つだけのようだ。

「ともかく、フォートまで行きましょうか」

綾香たちは高台から街へと移動する。

街全体は城壁に囲まれているので仕方なく城門の方へ向かった。

城壁や城門には最近戦いがあったのか、至る所に突破しようとした際に付いた傷があった。

「なんか、これって壊れそうじゃない？」

何となく、ルウがライルに言う。

「ホントだな。もしかしたら戦争が起きているから街に城作ったり、わざわざ街を括るような城壁を作ったりしたのかもな」

「故郷で戦争なんて起きてほしくないわ」

何故か綾香は表情に笑顔を浮かべる。

「綾香さんは故郷で戦争が起きていることについて、特に何とも思っていないみたいだ…」

他の三人はそう思った。

その時、城壁の上から声が聞こえる。

「お前等！ その場を動くな！」

声が聞こえた方を見上げると、城壁の上に数人の兵士を確認出来た。

城壁の上は見張り台が設置されていた。

「呼んだ？」

綾香が手を振って兵士に向かって叫ぶ。

「ああ、お前等のことだ！そこを動くんじゃないぞ！」

そう叫ぶと兵士は綾香たちに向かって、ボウガンを構えた。

それと同時に城門の門が開き、中から数十人程の兵士が様々な武器を構えた状態で綾香たちに近付く。

「何これ？もしかして捕まりそうか？」

「多分ね。話せば分かってももらえると思うけど」

それから、槍を構えていた兵士が話し始める。

「何だ……やっぱり色がある人間だったのか。すまない、君たちのことを誤解していた」

「何のこと？」

「君たちを幻人だと思ってしまったんだ」

「なに、その幻人って？」

「君たちは幻人のことを知らないのかい？ここで話をするのは危険だからひとまず街の中に入ろう。こうしている間に奴らが襲ってくるとも限らないからな」

兵士たちは綾香たちを城壁の中に連れていった。

城壁内に入り、城壁の門を閉じた時、兵士が再び話し掛ける。

「君たちは幻人のことを本当に何も知らないのか？」

「ええ、知らないわ」

「そうなのか……君たちは今まで一体どこに暮らしていたんだい？」

「スロートよ」

「聞いたことのない国だね。でもまだ、そこに幻人が現われていないと考えるととても平和な国なんだろうね。是非とも、その国に移住したいところだよ、ははは……」

「幻人ってそんなに不味いの？」

「そうさ、奴らは今までに幾つもの城や街を壊滅させ、人々を殺し尽くしてきた。幻人というのは数年前に突然現われた人間とは全く別の生命体だ。奴らの見た目は人間のようにだが身体は肉体ではなく霧のようになっていて、その身体には色素がない。我々人間を見ると突然襲い掛かってくるんだ」

「それ、マジで？」

「ああ、全て本当だ。そういえば、君たちは何故ここに来たんだ？今この街は戦場の最前線のような場所だよ」

「それはここが私の故郷だからよ。見た目は以前よりボロボロになつてるけどね」

より見やすくなった街の風景を綾香は眺める。

「だとしたら、君たちも幻人からこの街を救うため一緒に戦ってくれないか。君の故郷のためにも」

「もっちろん！一緒に戦ってあげるわ！」

「それなら、あの街の中心にある城に向かってくれ。そこで隊長が兵士として登録してくれるから」

「皆も聞いたわね？ さつさとお城に行くわよ」

さつさと登録するため、城に向かって綾香は歩きだす。

「ちょっと、僕たちは仕事をしに来ただよ。ここだって綾香さんが勝手に寄ってきたんだし、これ以上勝手な行動とかは……」

「ルウ君？ 私の故郷がこれ以上壊されても貴方は平気ってわけ？ 酷いわ、貴方は決してそんな子じゃないと思っていたのに……私泣きそう」

「そうゆう訳で言ったんじゃないけど……」

「なら良いじゃないの。そうゆう訳だから、まずはお城に行きましょ」

半ば強引に綾香は三人を城に連れていった。

城に向かうため街を歩いていると沢山の兵士とすれ違った。

そのすれ違った兵士たちは全て鎧などを纏い、剣などの武器で武装していた。

それでここは戦場の最前線なんだと各々が実感出来た。

「ねえ、綾香さん。ここで戦うって言っても、いつまで戦うの？ さっきの兵士の人が幻人は数年前に突然現われたって言ってたけど、それは言い換えると数年間幻人と戦っているってことだよね？ いつまでたっても戦いは続くような気がするんだけど」

「ルウ君、大丈夫よ。私たちはノールちゃんの経験値を貰ったお陰でまた強くなれたじゃない。それになんか私ね、新しい力を手に入れたみたいだし」

「それはそうだけど幻人っていうのがどんな連中なのかも分からないし…」

話をしていると街の中心にある城に綾香たちは辿り着く。

「そのこの四人。お前等は志願兵か？」

すると城門の前にいる深紅の甲冑を身に纏った男性が声を掛けてきた。

「志願兵よ」

「そうか、そのこの男三人が志願兵なんだな」

どれほどの力量なのかを見定めるように男性は三人を見る。

「……えっ？ 私もいるじゃないの？」

「なんだ、お前も戦うのか？ だったら、今のうちに止めておくんだ。戦いを女が行うことなどムリだ」

「私が女っていうだけで戦えられないなんて、どうして決め付けられんのよ！」

「なんだと？ 戦いは男のみが行える神聖な物だ。それを汚そうと
いうのか？」

綾香と男性は価値観が最初から食い違っているため言い争っている
と、城内から将校風の身なりの良い男性が出てきた。

「どうした。その者たちは新しい志願兵か？」

綾香と言い争っていた男性はその声がする方を振り返る。

「トレイン隊長か。そうだ、この四人が志願兵として入隊したいと
言っている。だが、女に戦いは不向きだ。参加するなと話していた
ところだ」

「いや、今は人間と幻人の総力戦だ。誰だろうと幻人と戦わなくて
はならない。例え、戦いを心から望んでいないとしてもだ」

「そう言われてもな……戦いに女は参加してほしくないんだ」

はた迷惑そうに深紅の甲冑を身に纏った男性はそう言い残し、城内
に入っただけだった。

「済まないな、君たち。気分を悪くしてしまったのなら謝る。ここではないから、城内に入ってから話そう」

「その前に聞きたいことがあるんだけど」

城内に入ろうとするトレインに綾香は声を掛ける。

「どうしたんだ？」

「私も戦いに参加出来るわよね？」

「当然さ。ただでさえ、人間の数が不足し始めているのに断る理由などあるはずもない」

それから、トレインは城の赤い絨毯が敷き詰められた謁見の間へと四人を連れてきた。

「この城の王に会わせるのか？」

ライルはトレインに訊ねる。

「そうじゃない。この街に城を築城した際の王はとっくに戦いで戦死した」

「だったらどうしてオレたちを謁見の間に連れてきたんだ？」

「応接間がこの城にはなくてね。それは先に言えば良かったかな。それと、オレはこの最前線の兵士を率いている幻人壊滅戦線の隊長トレインだ。王がいない今、オレが代理の王をしている」

「なに、その幻人壊滅戦線って？」

綾香は聞き慣れない単語を聞いたため聞き返す。

「幻人壊滅戦線というのは世界全体に出現した幻人を絶滅させるために作られた組織だよ。この組織は……」

やけに説明口調でトレインは幻人壊滅戦線についての内容を綾香たちが特に聞きたくもないのに勝手に語りだす。

約二十分程聞いた時点で完全に飽きてしまった綾香はあることを思っていた。

地雷踏んだ、と。

はっきり言って、綾香は内心かなり気まずかった。

他のメンバーに謝りたくなっていた。

「綾香さん」

隣にいたルウが綾香に耳打ちする。

「何時まで続くんだらうね。この話って」

ルウは完全に遠い目をしていた。

「この男……いつまで話しているんだ？ 早く……なんとかしないと……」

ジーニアスもイライラしているのか何かを囁いている。

その時、トレインが気になることを話す。

「この世界は幻人との戦いで人の数が不足している。君たちは幻人のことを知らないみたいだから、この世界の外から来たのだろうか？」

「この世界の外から来たってことが分かるの？」

「オレだってこの世界の外から来たんだ。君たちの行動を見れば簡単に分かるよ。一応、人数不足を解消するため外の世界の者に支援を要請しているのだが……現在数組の傭兵部隊がまだ来ていないんだ。ここに来る前に死んだのか、それとも逃げたのかは今となっては分からないけど」

その話を聞いた時、メンバーには思い当たる節があった。

「モンスターハンターっていうところにも傭兵を頼んだ？」

「頼んだよ。まだ連絡さえ寄越さない連中だから覚えている。ところで、何故モンスターハンターを知っている？ まさか、君たちが？」

「はい、そうです。遅れてすみません」

女性が可愛らしく謝る素振りを綾香は行う。

「傭兵だったのか、それならば丁度良かった。明日は幻人が集結しているという拠点に攻め込む予定だから少しでも人材が欲しかった。」

それと、これは忠告だが敵の数は桁違いだ。死にたくなかったらこの世界から逃げた方がいい」

「逃げる訳ないじゃない。何のためにここに来たのか意味分らないでしょ？」

「確かにそうだな。だが傭兵の中には直前となってから逃げ出す輩もいる。これは戦いに志願する傭兵には毎回言っていることなんだ。不快な思いをさせたなら済まない」

トレインは綾香に頭を下げて謝る。

「さつきも言った通り、明日は戦う予定だから今のうちに休んでおいてくれ。休む場所は街に多数の空き家がある。そこで待機していてくれ」

ようやく話し終えたのか、トレインは謁見の間から出ていく。

「で、どうする？ 空き家でも探しに行くか？」

ライルが他の三人に訊ねた。

「いえ、恐らくだけど、あの子ならこの街を離れずにまだ暮らしているはずだわ。ひとまず、そこに行きましょう」

「知り合いがいるのか？」

「当たり前でしょう。ここは私の故郷なのよ、知り合いがいて当然よっ」

「確かに」

「よし、そうと決まれば行きましようか」

綾香たちは城内から出て、綾香の語る“あの子”の家まで移動する。

「まだ暮らしていれば、ここに住んでいるのだけど…」

廃屋が多い住宅街の、ある一軒の二階建住宅のドアを綾香が軽くノックする。

「はい、何方ですか？」

数十秒後、ドアがゆっくりと開くと、そこには犬のような耳と尻尾を付けた約10歳くらいの可愛らしい男の子が立っていた。

男の子はオドオドした様子で、そのためなのか耳と尻尾が少したれ、ふるふると震わせている。

「もしかして、綾香！」

その男の子は綾香に気付くと耳と尻尾をピンと立たせた状態で駆け出すと綾香に抱き付く。

「綾香、ずっと心配してたんだよ。突然いなくなるんだもん」

「ゴメンね、エージ君。あの時はお母さんが死んじゃって、寂しくてこの街に居たくなかったのよ」

「あー、ちょっといいかい？」

綾香とエージという男の子が会話しているとライルが話し掛ける。

「再開したことを喜ぶのは構わないけど……綾香さん、この子の家に泊めてもらってことになるのか？」

「そうよ。ねえ、エージ君。私たちを家に泊めてくれない？」

「うーん、どうしようかな……？」

男の子が少し悩んでいるような素振りをする。

だが、すぐに笑顔へと戻ると綾香に再び抱き付いた。

「いいよ、綾香と一緒に居てくれるなら！」

「それじゃ決まりね」

エージの許しを得られた綾香たちはエージの家に入った。

建物の中は外観から見た通りの二階建構造となっており、部屋数もこの人数であっても十分の様子。

「オレを気にせず、ゆっくりしていいってね！」

笑顔を浮かべ、エージは綾香たちに話す。

「君って、もしかして一人暮らし？」

ルウがエージに声を掛ける。

自身よりも年令が低そうに思えたため聞いてみたようだ。

「そうだよ、オレは数十年前から一人暮らしだよ。スゴイでしょ？」

「数十年前って、エージ君は何歳？」

「オレかい？ オレは今年で36歳だよ」

「ええ！」

「ルウ君知らなかったの？ イヌ人のエージ君は人間と身体の成長の速さと寿命の長さが違うのよ」

「……ってことはエージさん？」

「オレに“さん”付けするのは止めて。出来れば“くん”付けなら構わないけど……」

そわそわしながら、エージは恥ずかしそうな様子。

その言葉を聞いて、綾香は他の三人にあることを教える。

「ついでにエージ君は年令の割りに見た目と同じくらい価値観も子供っぽい。気にしないでね」

「そうなんだ……」

綾香の話三人は妙に納得出来た。

「何を話しているの？ オレも混ぜて！」

「いいわよ、一緒に話しましょう」

それから、エージと綾香は話し始める。

お互いずっと会っていなかったためなのか、話が尽きないようであった。

「オレたちは席を外そうか」

そっと、ライルはルウとジーニアスをつれて綾香たちから離れた。

エージの家から出ると外は既に暗く闇に包まれている。

「すっかり暗くなっちゃったな」

ライルがルウとジーニアスの二人に言った。

「どうして外に出たの？ 僕もエージさんともっと話たかったけど」

「ルウ、少しは考える。あの二人を邪魔しない方がいいだろ」

「どうして？」

「オレの考えだけど、あの二人は久しぶりに出会えたんだろ。だってら邪魔しちゃいけないんじゃないかと思ってさ」

「そうかな？」

「それとエージの一人称がオレだったことで気になったんだけど、二人はいつまで自分の一人称が僕のままなんだ？ オレは昔から自分のことをオレって言ってるからそういうのはよく分からないんだけど？」

そういえば確かにとルウ、ジーニアスは思った。

自身のことをいつも何気なく“僕”と呼んでいたからなのか、自分の一人称について考えたこともなかった。

「僕は自分のことをオレって呼んだ方がいいの？」

ジーニアスはライルに聞く。

「それはまあ……個々の判断だけど？」

「だったら変えなくていいよね。何でだか分からないけど僕の兄さんは変えるなって言っているから」

「お前の兄貴か……」

ライルはこの時、スロートにいたジーニアスの兄、クレヴァーのことを思い出していた。

クレヴァーは不思議な趣味や思考を持つ人物であったため、ジーニアスに対し自らを“僕”と呼ぶように強要しているのかもしれないとライルは思った。

「ライルさんは僕の兄さんと会ったことがありますか？」

「一応、あるよ。美形のエルフって感じだけど何であんな価値観を持つているんだ？」

「いえ……それは僕には分かりかねます」

「確かに、自身の価値観のことなんて本人にしか分からないもんな言葉をとて濁したジーニアスを見て、ライルがフォローする。

それを見ていたルウは家の方へ視線を移す。

「兄さん、僕たちはどうするの？ 家の中に戻る？」

「まだ、中には入らない方がいいんじゃないか？ その代わりに、街中を散策してこよう」

その時、城門の辺りから喧騒が聞こえることに気付く。

「何かあったのかな？」

「もしかしたら幻人って連中が攻めてきたのかもしれない。仕事を引き受けてることだし援護をしに行くぞ」

ライルたちは城門へと向かう。

城門付近まで行くと城壁の上から弓矢を放っている兵士と、そして城門を必死に押さえている兵士たちの姿が目に入った。

「城門の外になんかいるみたいだな。戦闘中のようだし、オレたちも参加するか？」

「勿論だよ、ライルさん。僕はノールさんのレベル分けをされてから、ずっとウズウズしていたんだよ……何かを殺したいってね」

一瞬にして態度を豹変させたジーニアスは城壁の門へ向かって駆け出す。

「おい待て、ジーニアス！」

突然駆け出したジーニアスにライルは制止するよう叫んだが、ジーニアスはその声を無視し、走る速度を全く変えない。

その瞬間、城門が突破され城壁内に人間のような姿をした半透明な物体が侵入した。

暗い闇にうつすらと浮かびあがる霧が人型になったような物体、それが幻人であった。

「兄さん！ あの霧、人間の形をしてるよ！」

まるで幽霊のような姿をした幻人にルウは恐怖を感じた。

「全然、得体が知れないな……アイツら。ジーニアスを助けに行くぞ！」

しかし、ジーニアスを助けるためにライルとルウが駆け出そうとした時、目に映った光景はその考えが間違っていたと分らせる程のものだった。

「バースト……」

何らかの魔法を詠唱し終わったジーニアスは片手を城門から侵入してきた幻人へと向かってかざす。

ジーニアスのかざした掌からは侵入してきた幻人の数だけ、光線が放たれた。

その放たれた光線は致命的なダメージを与えられるであろう部位だけを射ぬき、幻人を全て絶命させた。

「さーて、死んだね。次はどうやって殺そうかな」

光線を受け死んでしまった幻人を眺め、不敵な笑みを顔に浮かべる。

平然とした口調で言うジーニアスには普段の様子は無い。

それどころか、彼の綺麗な黄緑色の髪色さえも黒色へと変化している。

「兄さん、ジーニアス君の様子がいつもと違うよ……」

「確かに、そうだな。それはジーニアスがダークエルフ化をしているからだ。髪の色が黒色へ変化している」

「ダークエルフ化って？」

「エルフ族が暴走状態に陥った時になる変化だ。あの状態になると身体のリミッターが完全に解除され、尋常でない強さを得ることが出来るらしい……確かに見ての通りだな」

「でも、そんな状態なんていつまでも続かないんじゃないの？ ずっと、限界以上の力を出し続けるなんて…」

ルウがライルに訊ねた時、何度も城門の外へと魔法を放ち続けていたジーニアスが倒れた。

「ジーニアスの魔力が切れたようだな。ルウ、ジーニアスを助けに行くぞ」

ライルはジーニアスに駆け寄る。

その際、城壁の外の様子が目に入った。

外にはジーニアスが連続で魔法を放ち続けていたため、多数の幻人たちが死滅していた。

「その少年は一体何なんだ？」

城壁上方からの声にライルは城壁を見上げると、城壁の上で応戦していた兵士たちがとても信じられないといった様子で二人を見下ろしている。

「兵士たちはジーニアスの強さに驚いているようだな。いや、ムリもないか……これ程強いとはオレも知らなかったからな」

ライルがそう思っていると、ルウも駆け寄ってきた。

「兄さん、ジーニアス君をエージさんの家に運ぼう！」

心配そうにルウは話す。

「そうだな」

ライルはジーニアスを背負い、エージの家に向かった。

ライルたちがエージの家に戻ってくると、綾香が家の前でウロウロしていた。

「皆、どこに行ってたのよ！ 私、見捨てられたかと思ったわ……」

ライルたちを待っていたのか、ホッと安堵したような表情をする。

「どうやら、少し泣いてもいたようだった。」

「綾香さん、泣かないで。僕たちは綾香さんのことを見捨てたりしないよ」

「ルウ君？ 私は泣いてなんかないけど？」

「えっ？ でも、涙が」

「涙じゃないわ……私が泣く訳ないじゃない……」

着用していた白衣の袖で綾香は顔を拭う。

その際、ライルはジーニアスを家の中で早く休ませたかったのか、綾香を軽くあしらって家に入ってしまった。

「ライル君は私に興味無いみたいね。それより今、ジーニアス君がライル君に背負われていたけど何かあったの？」

「街の入り口に幻人が攻めてきたから戦うことになったんだよ」

「幻人に会ったの？ やっぱり強かった？ あっ、その話は後で聞くことにするわ。私は医者なのだから、ジーニアス君をしつかり看病しなきゃいけないのよね」

綾香はさつさと家の中に入っていった。

「そういえば、綾香さんって医者だったんだね。すっかり忘れてたよ」

「さつき、突然綾香が家の外に出ていったんだけど、一体何してたの？」

寝室へと運ばれたジーニアスを綾香が看病している時、ついさっきのことが気になっていいるエージが聞く。

「特に何も」

ライルがあっさりと答える。

「皆で何話しているの？」

寝室から綾香が出てきた。

「綾香、さっき外に出て何してたの？」

「えっ……」

エージの一言を聞いて、綾香はライルとルウの方を確認するように見る。

「さあ、何だったかしらね……忘れたわ」

「そう？　じゃあ、ジーニアス君だけど大丈夫だった？」

「うん。だけど魔力を限界近くまで使い果たしているみたいだから、今日はベットから動けるようなコンディションにはならないわね。それと、ジーニアス君の髪の色が真っ黒に変わっていたけど……」

「それは、ジーニアスがダークエルフ化したからだ」

「ダークエルフ化って……どうしてそんなことしたの？　そこまでしないといけないくらい追い込まれていたの？」

「いや、そんなことはなかった。それどころか幻人を一方的に殺しているようで、あれはとても戦いとは呼べなかった」

「それって、ジーニアス君が幻人を殺戮したってことよね？」

信じられないといった表情で、綾香はとても驚愕している。

綾香自身もダークエルフ化という変化がどういうものかを知っている。

ダークエルフ化は自らの能力全てをリミッター解除することにより、限界以上の魔力や攻撃力を手にすることが出来る。

ただ、ダークエルフ化は殺戮のためではなくエルフ族が追い込まれ、命の危機を感じた時に相手を圧倒するために扱わずの特殊な変化。通常、殺しに扱う変化ではない。

ジーニアスが自らの意志で圧倒的に幻人を殺すために扱った。

「あの子は誰かを殺したかったのね」

「ああ、そうだ。何でそんなことしたかは本人に聞かないと分からない」

とにかく今はジーニアスの体力が回復し目覚めるまで、エージの家に待機ということになった。

「うう……」

身体の内側から刺すような強烈な痛みを感じ、ジーニアスは目を覚ます。

声を出したくなる程の痛みに悶え苦しみながら周囲を確認すると、自らが部屋の中にいることに気付く。

ベットから窓の外を見ると、外は既に明るくなっている。

「ここは……どこだろう？」

身体の痛みには耐えながら、ジーニアスがベットから立ち上がることにすると部屋のドアが開く。

「ジーニアス君、目が覚めたかしら？」

「綾香さん……？」

「あっ、おはよう、ジーニアス君。気が付いたところ早速で悪いけど、どうして貴方はダークエルフ化なんてしたの？」

ジーニアスが横になっているベットに腰掛け、綾香はジーニアスに訊ねた。

「それは……ノールさんの経験値で急激にレベルが上がったから自分の力を試してみたくて……」

「ついさっき聞いた話によると幻人は人ではなくミュータントだったから良かったけどさ、限度つてものがあるでしょう？ 貴方は昨日、気を失うまで幻人を魔法で殺戮していたらしいじゃない」

「うん」

「もし、貴方は相手がミュータントの幻人じゃなく人だったとしてもダークエルフ化してた？」

「してた、絶対」

「どうしてよ、貴方だって物事を判断出来るでしょう?。」

「出来るよ、出来るからダークエルフ化したの。僕にだって、自分の力をどれくらいか知る権利があるんじゃないの。」

「貴方って人は……!!」

綾香は思いつきりジーニアスの頬を叩く。

体力的に動ける状態では全くないので、ジーニアスは反動によりベツトに倒れ込む。

「貴方は一体何をするためにエルフシティから来たのよ! エルフがどういうモノなのかを分かってもらうためでしょう! そんなんじゃない、エルフどころか貴方を間違っつて捉えてしまっじゃないの!」

「だからって叩くことないだろ。叩けば言うことを聞くと思っつのか!」

怒っているのか、ジーニアスの口調は荒い。

「もう絶対に殺戮なんてしたいと思わないで。皆にも命があるのよ?。」

「知ってるよ、そんなこと。僕が生きていられるのも、こうやって命があるからだよ。」

綾香からジーニアスは目を逸らす。

「分かっているよ……綾香さんの言っていることは正しいよ。僕は力を手に入れて舞い上がっていたのかもしれない……」

静かにジーニアスは答えた。

「そう、良かったわ。貴方が理解してくれて。んー、時間も良い頃合だろうし行きましようか」

ぐいっと、横になっているジーニアスの腕を引っ張り自身の下に引き寄せせる。

「何してるの？」

「何してるって分かるでしょう？ 戦場に向かうに決まっているじゃない。昨日のトレインさんの話を忘れちゃったの？」

「それって僕も行くの？」

「当たり前でしょう。私たちは傭兵として雇われているのよ？」

「でも、僕は身体が痛くて動けないんだよ」

「ふふっ、それは嘘ね。ジーニアス君、貴方分かりやすいくらいバレバレよ。ライル君たちはもう先に街の外へ向かったわ。さあ、早く行きましよう」

グイグイとジーニアスを綾香は無理やり引っ張り続ける。

「本当に痛いんだよ……さっき綾香さんも痛いはずだって言ってたじゃん！ 分かっているはずだよね……」

「煩いわね。男の子なんだから少しのことでグダグダ言わないの！」
身体に激痛が走り、とても動ける状態ではないジーニアスを綾香は背負い、街の外まで強制的に連れ出した。

もう既に言葉を発する気力もないジーニアスを背負いながら綾香は城門まで歩くとライルとルウの二人が待っていた。

「ジーニアスは大丈夫か？ かなり辛そうな顔してるけど」

「そうね、まだ後遺症があるせいか完全には動けないみたいなのよ。でも、大丈夫よ」

「何を根拠に大丈夫なのか全く分からないけど？ ジーニアスはまだ休ませておくべきだ」

「そう言われても連れてきたのだからもう良いじゃないの。それよ、トレインさんたちはどうしたの？」

「トレインたちならとっくに出発したよ。以前、奇襲されて奪われた拠点を取り返しに行くってさ」

「そうなの。私たちも戦えるように早速行きましょうか」

先に拠点へと向かったトレインの部隊に追い付くため、ここから綾香たちは西に進んだ場所にある拠点へと向かう。

既に限界状態であったジーニアスはライルが背負って行動することとなった。

「綾香さん、エージが家にいるんだからジーニアスを休ませてても良かったんじゃないかな？」

「いえ良いのよ、ライル君。ジーニアス君は余り痛みのことを知らないと思うの。ここで休ませてたら、また何かの拍子にダークエルフ化してしまうわ。ダークエルフ化した後に自らの身に一体何が起るのか、それを分からせないといけないの」

「何だか、ネコに対する天罰療法みたいだな」

「……ねえ、拠点つてあれのことかしら？」

特に話を聞いていなかった綾香の指を差す方向には要塞のような建築物があった。

荒野にたった一つ存在する要塞は廃墟ように荒れ果てている。

綾香たちがその場に辿り着いた頃には既に、その付近でトレインの部隊と幻人との戦いが始まっていた。

「そうだな。オレたちも行くぜ！」

ライルがジーニアスを背負ったまま、要塞での戦闘に参加するため駆け出す。

「あつ、待ちなさいよ！」

綾香、ルウもそれに続く。

そして、幻人たちとの一進一退の戦いが始まった。

約一時間程経過した頃、メンバー全員がそろそろ限界へ近付いていた。

綾香たちはその辺のどこにでもいるような兵士とは違い、能力者なので高い魔力や攻撃力を持っている。

通常の人が関与するような戦いでは魔力切れどころか、息切れ自体を起こせるかどうかの程に力を手にしていたが今回は違っていた。

「オレだけで数百くらいは斬ったはずなのに何度もあの拠点から出てきている気がするんだけど、幻人って何人いるんだ？」

「確かにそうね。私ももうすぐ魔力切れで、ショットガンが撃てなくなっちゃっわ」

スゴい炸裂音を響かせながら綾香は迫ってきた幻人をショットガンで撃ち倒す。

綾香の銃のセンスは恐ろしい程高く、どんな体勢で銃を撃ったとしても確実にヘッドショットであった。

「綾香さんは全然余裕みたいだな……」

「兄さん、僕は魔力切れになってきたみたい」

「それは本当か？ ヤバそうだから逃げた方がいいな」

そろそろ魔力も限界になりかけたライルは撤退することを決める。

というより、ライルが完全なルウ基準の作戦に移った。

その撤退の途中、必死で戦っていたため気が付けなかったが、ライルたちよりも先にトレインの部隊は略全て退却していた。

「幻人が絶え間なく襲ってくる理由はこれだったんだな……明らかしんがりそなに殿備えかよ。ひとまず、オレたちも街まで逃げるんだ！」

と、ライルが叫んだ時には既に幻人たちは周囲を取り囲んでいた。

「さつきより数が増えてない？ ヤバくない、これって？」

「確かにそうね。もし生まれ変われるのなら私は今度、男性になりたいわ」

「男になりたいのか……綾香さん、死ぬんじゃないかって何とかここを切り抜けるんだ！」

しかし、周囲を取り囲まれ追い込まれている状況には変わりない。

そんな絶体絶命の中、突然綾香たちの目の前に約二メートル程の長さをした銀色の槍を持つ人物が空から降ってきた。

降ってきたというよりかは降りてきたのか、その人物はとても格好よく綾香たちに背を向けたまま着地を決めていた。

「綾香、久しぶり。状況的にピンチのようだから、オレが助けた方がいいよね？」

「貴方は……誰？」

一応、綾香はショットガンを構える。

「あつ、綾香？ オレだよ、オレ」

綾香の殺気を感じ、微妙に焦ったその人物は振り返ろうとする。

「ああ、ちよつと待ってて。折角の感動的再会の場面に、こいつら幻人は絶対に合わない。本当に見ているだけで気分が悪くなるよね、幻人って」

現れた人物は幻人たちを槍で薙払い、綾香たちを囲んでいた幻人たちを一蹴した。

その後僅か数分という短時間で拠点を占拠していた幻人全てを圧倒的な強さで皆殺しにしていた。

「おい、どういう強さだよ……綾香さんはあの人の知り合いなのか？」

信じられない程の強さで要塞を制圧していった光景を目にし、ライルは息を飲む。

「ううん、知らない人だと思う。さっき、背を向けていたせいで顔とか全然見えなかったし」

「ひとまず、あの人に会いに行ってみようか。助けてもらった礼も言いたいしな」

危機を救ってくれた人物と会うため、綾香たちは幻人から解放された要塞内へと入る。

スパルタ式の修行

辺りを警戒しながら要塞内部へ入ると四人は不思議に思うことがあった。

「要塞内に幻人が一人もいないね」

不思議に思ったルウはライルに訊ねる。

「確かに誰もいないな。信じられない程いたはずだから要塞内にも、あの人が倒した幻人の死体が結構あると思ったんだけどな」

二人が会話していると、杏里にとても酷似した人物が近寄ってきた。

「あつ、いたいた。綾香、そこにいるのは綾香の友達かい？」

「あれ、杏里くんなの？」

「杏里つて……杏里な訳ないじゃん。オレは有紗……っていつかオレのことが分からないの？」

「分からないです」

「おかしいな。オレつて二人とも記憶を消したんだっけ？」

自らを有紗と名乗った男性？は何やら独り言を語り始める。

「多分、綾香の記憶も消しちゃったんだな……ってことは初対面になるのか。突然で混乱すると思うけど話すよ、オレは有紗。綾香、

君の兄だよ」

「貴方って私のお兄さんなの!」

「そうだよ、綾香。もう弟の杏里には会ったんだろ? ついさっき、君の口から名前が出てきたから杏里を知っているよね?」

「勿論知っているわ! あの子はやっぱり私の弟だったのね!」

何故か綾香は初めて会ったはずの有紗の言うことに対し、全く疑いを示さない。

「その人は本当に綾香さんの兄なのか?」

「絶対そうよ、私のことを知ってるもん。私に家族だなんて言ってきてくれた人は有紗さんが初めてよ。普通ならこんなこと言われても信じられないけど、有紗さんなら信じられるわ」

「でも、それだけの理由で信じていいのか?」

「ええ、勿論」

綾香とライルが話していると、有紗が声を掛ける。

「話は終わったかい、綾香。そろそろ、ドレッドノートを倒しに行こうと思うんだけど、綾香も一緒に行かないかい?」

「ドレッドノートってなに?」

「綾香は幻人たちを倒しているのにドレッドノートのこと知らない

のかい？」

「ええ、全然」

「そうなんだ。教えるけど、ドレッドノートはこの世界に幻人たちを作り出した魔界の霸王だよ。ここまで聞いてもドレッドノートのこと知らない？」

「ええ、全然」

「そうなのかい？ 次からは戦う前に相手となる人物、能力、相手の戦略に関する情報収集くらいした方がいいよ。綾香だって、戦場で戦う傭兵なんだから」

諭すようにやんわりと有紗は語る。

「それとドレッドノートのことだけど、彼はこのルーメアを侵略するため数年前にやってきた。その際、侵略するため使ったのが幻人っていう気持ち悪い種族。幻人はドレッドノートの魔力で作리出された種族だから何人やつつけたってムダ。彼の魔力は無尽蔵だから絶え間なく作られちゃうんだよね」

「……ってことは幻人じゃなくて、ドレッドノートって人を倒さないでダメってことね」

「そういうこと。あとさ、もう一度言うけど綾香も一緒にオレと来ないかい？ 久しぶりに再会出来たのだから離れたくないんだ」

恥ずかしそうに頬笑み掛けながら有紗は綾香をそっと抱き締める。

「ねえ、有紗さんは私の本当のお母さんが誰なのか分かる？」

「母親……覚えてるよ。もう会えないけどね」

「そう……もういないのね」

綾香は有紗の胸に力なくうなだれる。

少しの間、力なくうなだれていた綾香だったが、顔を上げ有紗に問い掛ける。

「ねえ、でも私は何をすればいいの？ ドレッドノートと戦うんでしょ？」

「そうだよ。でも、綾香は戦わなくていい。怪我なんてさせたくない」

「なら、ライル君たちは戦うのね。私は何もしなくていいみたいだけど、ライル君たちはドレッドノートと戦う？」

抱き締められていた綾香は有紗から離れて、ライルたちに訊ねる。

「綾香、その人たちも一緒に来るのかい？」

しかし、綾香は有紗の問い掛けを聞いていないのか勝手に話を進める。

「ねえ、ライル君。どうする？」

「戦いたいな。相手が強いなら尚更だ」

「じゃあ、決まりね。有紗さん、私たちもドレッドノートと戦いに行くわ」

「そ、そうかい……」

「どうしたの？」

微妙に元気がない有紗の態度に、綾香は訊ねる。

「てつきり、オレは綾香と二人きりになれると思ったんだけど」

「二人よりも皆でいる方が楽しいじゃない？」

「そうじゃなくて……でも綾香がそういうならそれが正しいよね」

有紗は渋々納得した様子でライルたちの方を見る。

「君たちも来るのだとしたら、ドレッドノートと対等に戦える強さを備えていないといけない。オレが強くなるために君たちを徹底的に指導する。ついてこれないようだったら遠慮なく見捨ててあげるから、その時はさっさと帰っていいよ。はははっ、オレって優しいね」

堂々とした様子でライルに有紗は笑顔で手を差し出し、握手を求め
る。

「……普通は何言ってるの？」

ライルは有紗の考えていることが分からなかった。

「じゃあ、まあ挨拶もこの程度にしといて外で指導の方を始めようか？」

まだ握手をしていない差し出していた手を早々に引っ込め有紗は指導を行うため、要塞内から外へ出るように促す。

そして一旦、有紗とライルたちは外へ出た。

「あー、えーと、高々幻人たちを相手に女性の綾香を守り気遣うどころか、余りにも弱過ぎるせいでまともに綾香を守ることさえも出来なかった可哀想なライル君たちを仕方なく短期間で強くするため、これから厳しく指導したいと思います。ははっ、よろしくね」

微妙に半笑いで有紗は語る。

「さつきからオレたちが弱いってどうして決め付けてんだよ！ 幾ら綾香さんの兄貴だからって黙ってないぞ！」

明らかな挑発と取れる発言にライルは怒鳴った。

「オレは本当のことを言っているだけ。それに対して何故怒るの？ それと黙っていないならどうしたいのかな、ライル君？ ちゃんと、お兄さんが聞いてあげるよ？」

「ふざけやがって。オレに舐めた口叩くな！」

即座に水人の力を駆使し、ライルは水の剣を作り出す。

一気に有紗との距離を詰め、その剣で斬り掛かろうとした。

しかし、有紗はライルの一撃を簡単に躲す。

「逃げるのか！」

ライルは躲した有紗に再び剣を振る。

「逃げるって……オレが？」

その攻撃も何の造作もなく有紗は躲すと、近距離まで接近したライルの首を恐るべき速さで掴み絞め上げた。

「っっ……」

薄ら笑みを浮かべた状態で有紗は片手でライルの身体を数センチ持ち上げる。

「どうして、オレが君みたいな雑魚から逃げるようなことをしないといけないのかな？　ライル君みたいな雑魚相手からとか？」

「止めてください！　兄さんを離してください！」

兄の危機を悟ったルウは有紗の腕を掴み、ライルを離させようとする。

「いいかい、世の中にはね、どうしようもないことが沢山あるんだよ。だから、君のお兄さんはこれから死んじゃうの。そういう訳だから、ルウ君。その手を離してくれないかい？」

「は……はっ……」

首を絞め上げられ、呼吸をすることが出来ないライルはそろそろ限界だった。

「有紗さん、離さない！」

その時、綾香が有紗を止める。

「綾香、どうしたの？」

綾香の声に反応して、有紗は手を離す。

「兄さん！」

崩れるように地面に倒れ込んだライルにルウは駆け寄った。

「どうして離せって言ったの？」

「当然でしょう！ ライル君を殺すなんて絶対にさせないわ！」

綾香はショットガンを構えた。

だが、ショットガンに魔力の弾を装填していなかったことに気付き、もたつく。

「綾香、落ち着いてくれ」

「私は落ち着いているわ、ただ私の友達を殺そうとするのが許せないのよー！」

「ゴメン、悪かったよ綾香。もう殺すなんて絶対にしないから」ととても焦りながら有紗は綾香に謝る。

「分かったならライル君に謝りなさいよ！」

「うん、分かったよ、綾香。ライル君、済まなかった。オレを許してくれるかい？」

「くそ……」

悔しそうにライルは有紗から目を逸らす。

「それじゃあ、指導を始めようと思うけど、ライルはやるかい？君だけでも音をあげて良いんだよ？」

「ふざけるな！やるに決まってるだろ！」

「簡単に怒らないでよ。さっきのことはお互いにもう忘れようよ」

数分後、ライルのコンディションが整ったため、有紗の指導が始まる。

最初に有紗は三人の能力を独自の理論で測定し、三人に課題を与えた。

内容はとても酷く、スパルタ方式であった。

自らに課せられたノルマをこなせない者はクズだと断言し、三人に要求を与えたのだった。

まず、ライルには水人の全ての状態変化を難なく発現させ、水人化した状態で雷魔法にあまり影響されなくなることを。

ルウには炎人の能力を難なく発現させることと魔法剣の完全修得。炎人化した状態で水人魔法にあまり影響されなくなることを。

ジーニアスには綾香に二度とするなと止められているダークエルフ化を完全に制御し、殲滅魔法のバーストを使いこなすこと。

「この程度のことが出なくては決して強くなれない！ 現状を見つめ、あるべき姿の自身を見なさい！ 落胆し、何故出来ないんだと思うのではなく、どうすれば出来るのかと思いなさい！」

完全に上から物を言っている有紗の発言がライルたちを突き動かし、必死で訓練を行わせる。

それにより、ライルたちは以前より能力が格段に上がり始めた。

有紗の課題を受け始めてから数日後、ライルたちは幻人から取り返した要塞で生活をしていた。

ここが現在でも戦争の最前線であることには変わらず、幻人たちの奇襲、夜襲が何度も起きていたからだ。

それは今すぐにも強くなりたいたいライルたちにとって実戦を何度も

体験出来る絶好の場であり、あらゆる局面に対する対処法を身体に覚えさせることが出来た。

「それじゃあ、今日も指導をするから。早めに仕度をするんだよ」
ライルたちが日々のキツイ訓練のためバテバテになった身体を休めている要塞の一室に有紗はいつものように声を掛ける。

その後、いつものように要塞の外で訓練を受けるはずだったがこの日は何かが違った。

先に要塞の外に出ていた有紗は今までに感じたことのない程の酷く歪んだ殺気を感じ取っていた。

「久しぶりだ、この纏わりつくヤバい感じ……オレより強い存在がこの世界にいたのか？」

有紗が自らに対して殺意を向ける相手を探すため周囲を見渡すと、何故かテンションの高いネコ人が近付いてくる。

「どうも、初めまして。私はルインって言うのよ」

ネコ人の女性は愛想良く軽い会釈する。

そしてこの時、有紗はこの人物が自らに強い殺意を放っていることを悟る。

「お前、誰だ？」

その場から直ぐ様逃げ出したい程の恐怖を感じていたが、己の考えとは関係なく、その言葉を発していた。

「私はルインって言うの……って、二度も言わせないですよ？」

「オレに殺気を放っている理由は？」

「はあ？ そんなの決まっているじゃない、目の前にいたからよ？」

「そんな理由でか……？」

「貴方は一体何を言っているのかしら？ 答えが一つしかないことに難癖を付けても、結局答えはたった一つしかないのよ？」

ルインは身体へ纏った覇気を急激に宿らせる。

「そう、貴方がその場にいることは既に貴方の死が決まっていることなのよ。さあ、私とのショーを楽しみましょう！」

ルインは有紗に距離を詰め、迫る。

その際、ルインは笑みを浮かべていた。

「くそ……こいつ絶対イカしてる」

ルインが迫ってきたため、有紗は速攻で銀色の槍を構える。

「くらえ！」

有紗はルインに向かって、槍を振る。

しかし、ルインは地面を蹴って宙を舞い、有紗の背後へ回った。

「駄目ねー、全く。下手ね、貴方。槍の使い方が全然なっていないわ。貴方の槍は止まっているもの以外、捉えたことなどないのではないかしら？」

あたかも舞っているかのような動きで翻弄し、ルインは一斉に攻撃を仕掛けた。

それを有紗は必死に持っている槍でルインの攻撃を受け流す。

「貴方、もしかしてもう私のスピードについてこれないの？ 本当に弱いだから……とにかく私も消耗品の存在意義くらいなら知っているわ。貴方は自らを消耗品だと悟ることをさっさとしなさいよ？」

堂々とルインはそんなことを言い放つ。

当然その言葉を有紗は許せなかったが、ルインは有紗よりスピードも能力も圧倒的に上の領域に達していた。

にも関わらず、有紗がまだ生きていられる理由。

それは遊ばれているからに過ぎなかった。

「消耗品なんて……オレに言うな！」

ルインの攻撃をはねのけると、有紗は渾身の力でルインの腹部辺りへ槍を突き刺す。

全力で槍を突き刺した有紗はルインに勝ったと瞬間的に思う。

しかし、事實は違った。

全力の攻撃もルインには殆どダメージを与えられず、槍が乾いた音を響かせへし折れてしまった。

「こ、こいつ……化け物なのか？」

有紗がそう思った時、ルインは身体を震わせ身体の一部を見つめていた。

自らの腹部に出来た数ミリの切り傷を見つめながら、ルインは震えた声を発する。

「わ、私の身体から血が出ているなんて……どうして……どうして私がこんな消耗品なんかには傷付けられなきゃいけないのよ！」

怒声を上げると、一瞬でルインの纏うオーラが邪悪なものへと変わる。

今までの彼女の力がまるで本気でなかったと瞬時に分かる程の変貌であった。

「よっぽど死にたいみたいじゃないの、知らなかったわ。その貴方の願いを叶えてあげるわ！」

強力な魔力を一瞬で作り上げ、ルインは織滅魔法の一つである、デルタを放つ。

大きな球形をしたデルタによる想像を絶する威力は周囲を抉るように消滅させながら有紗ごと粉碎した。

「消えたかしら？」

デルタによって破壊された場所をルインは見つめる。

「ネコ女！ まだオレは生きてるぞ！」

空中から有紗の声が聞こえたため、ルインは宙を仰ぐ。

「ああ、貴方って天使だったの？ もしかして天使だったことを隠していた？」

「隠している訳がないだろ！ お前みたいなイカレ野郎を倒すために天使化したんだ！」

しかし、有紗が天使化した理由は空中に逃げなければデルタによって粉碎されるためであった。

「マズいぞ、何故これ程の強者の接近に気付けなかったんだ。このままでは絶対にあの女には勝てない。一体どうすればいいんだ……」

有紗は本気で悩んでいた。

有紗自体、相当の戦闘力と経験、レベルを兼ね備えているにも関わ

らずである。

このような相手と戦ったこともなかった。

今までに出会ったこともなかった。

考えた結果が自らの勝率は一割以下程度。

何とかして勝てはしないかと空中を飛行しながら思案していると、綾香たちが要塞内から出て来るのが有紗の目に入った。

「今の音は何！」

「あはっ、まだ他にも消耗品がいたんだ。入れ食い状態じゃないの……私、すっごく嬉しいわ」

その瞬間、ルインの姿は陽炎のように消える。

ルインが何をするのにかに気付いた有紗は綾香たちの所に急降下し、綾香の前に着地した。

刹那、綾香の前に降りたつた有紗の腹部に何かが突き刺さる。

「があっ……」

衝撃により吐血をした有紗に刺さったものはルインの腕であった。

「貴方って、本当にバカねえ。それで仲間を守ったつもりなのかしら？ それは違うわ、この中では貴方が一番強いはず。それなのに命を投げ出しちゃうなんて、もうどうにもならないわね」

有紗の身体から手を抜き、その鮮血で染まった手を顔に近付ける。

「うーん、そうね……この鉄の匂い。久しぶりに嗅ぐ素敵香り」

「お前、手刀使いなのか……？」

「違うわ、私はオールラウンダー。手刀なんて、私の体術の一つに過ぎない。ただ貴方が私にしまったことを仕返しただけよ」

有紗の腕を掴み、手順良く両腕をへし折り砕く。

「お前！」

ライルは水人の力を駆使し、有紗の両腕を器用に砕くルインを倒すため水の剣を作り出した。

それに反応したルインはライルに頬笑む。

「もうすぐ貴方の番になるから、そこでじっと待っていなさい」

ライルは頬笑みかけられた瞬間、全く身体が動かなくなった。

その笑顔の裏にある強烈な殺意、それがライルを抑圧し身体全体を硬直させた。

「もう、この人を壊すのは飽きたわ。ぜんっぜん泣き叫ばないし……痛くないのかしら？ 面倒だから頸椎を折って止めにしましょう」

出血が酷く、既に意識がなくなっている有紗の頭部に手を掛けた時、

綾香がルインに向かってショットガンを放った。

だが、ショットガンの魔力の弾はルインの周囲にある邪悪なオーラに阻まれ、全く当たらない。

「誰なの、一体？」

再び、恐ろしい程の殺気をルインは放つ。

「私に向かって銃を撃つなんて……」

そこまで言い掛けたルインは綾香と目が合ったまま動きを止める。

「な、何よ!」

ショットガンを構えたまま綾香は叫ぶ。

「あ……貴方。どうして貴方がここにいるの？」

ルインは綾香の顔を見て、とても驚き、そして何か焦っているようだった。

「だって、貴方は私が異次元に封印される前に死んでしまったはず……いえ、実際は死んでいなかったのね!」

有紗から手を離し、ルインは急いで綾香に駆け寄った。

「い、来ないで!」

恐怖を感じ、綾香はルインに向かって数発ショットガンを乱射した

がさつきと同様にオーラで阻まれ、ルインへ当たることはない。

そして、そのままルインは綾香に……何故か抱き付いた。

「私よ、綾香！ 貴方といつも一緒にいたルインよ！」

ルインは綾香に抱き付いたまま、とても嬉しそうに語り、極度に嫌がり振り払おうとする綾香の唇に長い口付けを交わす。

綾香たちの傍にいたライルたちは有り得ない光景を目にし、全員フリーズ。

何が何だか、目の前の光景を理解出来なかった。

「……………」

自らの身に起きたことを受け入れられず、両目を見開いていた綾香だったが意識を失い倒れる。

「ええっ！ 綾香、どうしたの！」

「綾香、気付いたかい？」

傍らに、兄の有紗が座っている。

「……………」

綾香は何故、今自分がベットに寝ているのか分からない様子だった。

「びっくりしたろ。いきなり、ルインが……その、何ていうか……抱き付いてきたんだから」

有紗は微妙に言葉を濁す。

「そつだ、有紗さん。怪我は大丈夫なの？」

有紗のルインという言葉聞いて、やっとついさつき起きたことを綾香は思い出す。

「うん、全然大丈夫だよ。ルインがエクスを詠唱してくれたからね」

「エクスってあの最上級回復魔法？」

「そつだよ。殺そうとしたオレに回復魔法を詠唱するのは理解出来ないけど。そういえば、綾香はどうしてルインに抱き付かれたんだい？」

「私にも分からないけど……多分、誰かと勘違いしているみたい」

微妙についさつきのことを思い出してきたのか、唇辺りを気にしながら綾香は語る。

「そつだよね、だったらルインに説明してやって。あいつは今、ライルたちにと綾香のことを話しているんだ。別人だと知らずに」

「あれ、私のことを話しているの？ 私は彼女と会ったことがないのに」

「よっぽど姿形が酷似しているんじゃないかな、綾香に」

「ルインのところへ行きたいのだけど、今はどこにいるの？」

「この医療室を出た廊下辺り」

「ドアの側にいるのね、分かったわ」

綾香はベットから立ち上がり、医療室から出た。

綾香が医療室から出ると、廊下の壁に寄り掛かる格好で座っていたルインが両耳をふるふると震わせていた。

「綾香、ゴメンね。私、貴方を気絶させるつもりはなかったの……許してくれる？」

綾香に気付いたルインは立ち上がると綾香に縋り付くよう語る。

「ちょっと、ルイン。私の話を聞いて」

「どうしたの、綾香？」

「簡単に言うけど、私は貴方の話す綾香ではないわ。私は貴方と会ったことなんてないし、貴方が誰なのか分からないわ」

「それってどういうことなの？」

「私は貴方が捜している人とは別人ってことよ」

「そう、私を忘れているのね。だったら、思い出してくれるまで貴方の傍にいるわ」

何かをルインは囁く。

「何か言った？」

「ええ。それじゃあ、綾香が私の新しいご主人様になってくれないかしら？」

「えっ？」

「私は桜沢一族という一族に仕えていたの。だから、貴方が私の…」

「おい、ルイン！ 桜沢一族って言ったのか！」

有紗がとても驚いた様子で医療室から出てくる。

「ええ、言ったわ。私の愛する綾香の一族よ」

とても自慢げにルインは胸を張って語る。

「桜沢一族って、オレもなんだけど」

「嘘！」

「嘘じゃない、オレは桜沢有紗だ。そこにいる綾香もオレの妹だから間違いなく同じ一族だよ」

「貴方たちって桜沢一族の子孫だったの？ 凄いわ、本当にそっく

りなんだもん。そうだとしたら、私は早速貴方に仕えたいんだけど」

「ちょっと、何勝手に話を進めてんのよ。私はたった今自分が桜沢一族だつて知つたのにそんなこと決められる訳ないじゃない……それに私は桜沢じゃなくて橘綾香よ！」

「それなら私は橘綾香に仕えるわ。よろしくね！」

ルインは綾香に直ぐ様抱き付いた。

「ちょっと……何で抱き付くのよ……」

ついさっきのルインの行動を思い出し、気分が悪くなった綾香はルインを振り払う。

「私から離れてよ！ 私はネコアレルギーなの！」

「大丈夫よ。私たちネコ人はアレルギーを引き起こすような要素はないわ、ネコ人は人なんだから。綾香は忘れちゃったの？」

「で、でも私は貴方に近付いてほしくないの！」

「綾香が……そう命令するなら仕方がないわね」

「私がいつ命令したのよ！ 私は貴方を仕えさせるなんてしないわ！」

「そんな……私はどうすればいいの？」

「私にそんなこと言われても知らないわよ……」

綾香の言葉を聞いて、ルインは突然泣き始める。

「綾香に嫌われたら、もう私……生きていけない……」

「生きていけないって何言ってるのよ？」

「私は異次元にいた間、綾香にまた逢えると信じることだけが心の支えだったの。でも、綾香に必要とされなくなったら私がここで生きていく必要もないわ」

「だから、私は貴方が話している綾香じゃないって……」

その時、有紗が綾香の肩を叩き、ルインに聞こえないように綾香に囁く。

「綾香。ルインのこと、一応仕えさせたら？」

「どうして？」

「綾香が別人だと、その内気付いて自分から離れていくと思うしさ。それにあの強さはドレッドノートとの戦いにとても有利になるよ」

「私は嫌だけど、有紗さんがそういうなら仕方ないわね」

有紗と話した後、どうしようもないくらい落ち込んでいるルインに綾香は声を掛ける。

「ルイン、私は貴方を仕えさせるわ」

「本当！」

「ただし、私と貴方は平等。命令なんて貴方には絶対にしないし、私を敬うようなことはさせない。あと、私の友達や有紗さんを傷付けるようなことはもうしないでね」

「分かったわ。やってみる」

綾香がルインを任せさせたため、ルインは仲間になった。

強力な味方ルインを得た有紗はドレッドノートと戦いに行くことを決める。

展開期

翌日、有紗は綾香の体調が良くなったのを確認したのち、要塞内の一室へ綾香たちを集めた。

「先に言っておくけど、戦うのはオレとルインだけになると思う。これは、ドレッドノートとのレベル差の問題だから分かってね」

有紗はライルたちに話す。

「仕方ないな……悔しいけど、オレたちがそこまで強くはないってことだからな」

「ところで、ライルは相手の居場所を検索する水人検索は扱えるかい？」

「扱えるよ。あつ、もしかして、ドレッドノートがどこにいるか調べろってことか？」

「そうだよ、よろしくね」

「別に構わないけど、アレって割りに合わないくらい疲れるんだよ。出来れば使いたくなかったけど、この際仕方ないか……てことはオレは最初から戦えなかったってことか」

話を終えると、ライルは魔力を高めた。

魔力を駆使し水人検索を詠唱して、ドレッドノートの居場所を感知する。

その過程でライルは極度に疲弊し、立ち眩みをしたかのようにしゃがみ込む。

「ここから……というかこの大陸とは別の大陸にドレッドノートの城があった。そこにドレッドノートがいるはずだ。場所は……」

次にライルは方角や座標などの細かな説明する。

「じゃあ、そこに空間転移するよ」

座標を確認した後、有紗は空間転移を詠唱し、ドレッドノートの城へ空間移動した。

当然だが、そこはドレッドノートの城。

幻人たちの本拠地であるため、城の周囲には夥しい数の幻人たちがいた。

「有紗さん、これは状況としてかなり悪いんじゃないかしら。数が多過ぎるわ」

「大丈夫だよ、綾香。オレが守ってあげるからね」

微笑み掛け、綾香に答える。

「おい、ルイン。こいつらを全員叩き潰すぞ！」

「アンタなんか命令される筋合いはないわ！ でも、綾香を守るために戦ってあげる」

即座に臨戦態勢へ移行した有紗とルインは圧倒的な数を誇る幻人たちへ躊躇なく突撃した。

しかしそれは、躊躇なくという行動では全くなかった。

有紗とルインの戦いは完全に一騎当千。

余りにも圧倒的で、瞬く間に幻人たちを撃破していく。

槍が折られてしまった有紗は神聖魔法を、武闘派のルインは己の肉体のみで戦った。

戦いは僅か数分程で終わり、先程まで数千に近い数を誇っていた幻人たちは全滅してしまった。

「楽勝ね。この程度では、元々いなかっただとしか言い様がないわ」

倒した幻人を蹴飛ばし踏み躪りながら、ルインはつまらなさそうに吐き捨てる。

「次はドレッドノートが相手だ。ルイン、君も気を引き締めてかかるんだ」

「アンタ、さつきから煩い。アンタが私に気安く命令するんじゃないわ。忘れているみたいだから言うけど、私が仕えているのは綾香なのだから。次、舐めたことを私に言ったら、またボッコボコにしてやる」

「それは困る。綾香、なんとか言ってくれ」

「有紗さんに怪我をさせるようなことはしてほしくないわ。私たちは仲間なのだから仲良くしないとダメよ？」

「そう……ね。分かったわ、綾香。貴方が決めたことだもん、破る訳にはいかないもんね」

何故か綾香の話だけは真剣に聞くルインは即座に納得する。

「それじゃあ、城に入るよ。城内で何が待っているか分からないから気を付けるんだよ！」

有紗は気を引き締めるため他のメンバーに注意を促す。

そして、有紗たちは城内に入った。

城内は城だからといって特に何の装飾すらなく、殺風景なコンクリート造りが、ただ続いている何も無い空間である。

「城内って、いつもムダに広いわね」

「確かにね。でも天使界にある宮殿に比べれば面積は狭い方だよ」

「なあに、天使界って？」

「オレの所属している組織の一つだよ。そこでオレは大天使長という階級にいて、ホリックって通り名がある。ホリックというのは簡単に言うと、ワーカホリックの意味だけど」

「アンタみたいな変なのでも大天使長になれるようになったのね。」

私が異次元に飛ばされる前は本当に天使界って酷かったわ。貴族優遇とか世襲制で」

綾香と有紗が会話していると、ルインが話し掛けてきた。

「ルインは天使界のことを知っているのか？」

「それは勿論、私が貴方たちより数倍も生きていますからよ。私はネコ人だから長生き出来るの。それにね、私には聖帝の血が身体に流れているのよ。この前のデルタという殲滅魔法を私は扱ったでしょう？」

「聖帝の血に殲滅魔法って……ルインが新しい聖帝なのか？」

「そんな訳ないじゃない、私が聖帝なら真つ先にR一族どもを纏めて駆逐しているわよ。私は以前の聖帝から血の移植みたいな感じで血を譲って貰ったのよ。綾香を救うためにね」

「ところで、ルインって何歳なんだ？ 文献で読んだけど、天使界が酷かったのって今から150年近く前だよ」

「私はまだ260歳よ。綾香が生きていれば……あの子は天使だったから今でも一緒に生活していられたはずだったの……でも、綾香は死んだわ。私は綾香を殺したR一族を絶対に許さない、私が全て根絶やしにしてやるわ」

「……って、なんで私に向かってそのこと話すのよ」

「そっくりなのよ、貴方に。本当は貴方も覚えているんでしょう？」

とても綺麗な笑顔でルインは綾香を見る。

「私は綾香のことを凄く愛しているわ」

ルインの方をただ黙って見つめながら何を返せばよいのか綾香には分からなかった。

「ルインって、案外ヤバそうな価値観を持ってそうだね。ともかく立ち話はこれくらいにしてそろそろドレッドノートを倒しに行こうか」

有紗の号令により、綾香たちは広い造りがされているドレッドノートでドレッドノートを探すことにする。

そのため、六人は三、三で二手に別れてドレッドノートを見つけようとした。

分け方はライル、ルウ、ルインと綾香、有紗、ジーニアスといった感じ。

ライルたちは綾香の班と入り口（エントランス付近）から別々のルートへ別れた。

「装飾がないと思ったら、通路だけで部屋もないな。ここで生活していたような感じがしないっていうか」

ライルがコンクリートを四角く削り貫いたような殺風景な城の廊下を歩きながら言う。

「当たり前じゃない、ここで飼われているのは幻人たちよ。幻人は

魔力で作られた、ただのクズ。あんなのに生活なんて高尚なことが出来るはずがないわ。つまりこの城は幻人たちの檻よ。もしくは困い」

「そうなの？」

「そうよ、ライル。幻人は戦うことしか出来ない無能な欠陥魔力体なの。あんなのがいるから綾香の世界は壊されていくの。本当に許せないわね」

「ルインって、この世界が綾香さんの出身世界だっていつ知ったの？」

「残念ながら昨日よ。私は綾香のことを全て知っていると思ったのに……っていうか、ライル。ルウに好きな人がいるの知ってる？」

「えっ？」

いきなりの発言にルウは驚く。

「あっ、そうなの？ スロートにいる頃からずっとオレと訓練していたのに……好きな娘がいただなんて気付けなかったよ」

「盲点ね、ライル。さあ、ルウ、答えなさい。私は誰だかもう知っているけどね」

「えっ……その、あの……」

不意打ち発言にルウは落ち着かない様子。

結局、ルウはライルの方をちらちら見ながら戸惑っただけで何も答えなかった。

「どうしたの？　もしかして、ライルがいるから話せないってこと？」

「うん……」

「ああ、そうなの。この際だから言えば良かったのに」

「ルウ、何が理由でオレに知られたくないんだ？　オレたちは兄弟だろ、隠し事はダメじゃないか」

ライルは歩みを止め、ルウに聞く。

「そ、それは兄さんが知らなくてもいいことだし別にいいじゃん。隠し事って程でもないんだから」

歩みを止めたライルに対して、そのまませかせかとルウは通路を進む。

「今はそんなこと関係ないでしょ。早くドレッドノートを見つけるよー！」

微妙に焦っているルウが二人を先導するように歩いて行くと、その通路の先から異質な魔力を三人は感じる。

通路を進むと異質な魔力が発せられる部屋を見つけた。

「ここに、ドレッドノートがいるのか？　異質な強い魔力を感じる

けど」

「知らない……っっていうか何も知らないでいた方が罠があるかもしれなくて楽しそうじゃないの。そういえば、ライルって水人よね？水人っていうのは水人化した時、一切の物理攻撃が効かなくなるっっていうじゃないの。でさ、私に思いっきり殴られてくれない？」

「はあ？ お前、何を言っ……」

その瞬間、ライルは右肩に激痛を感じ、反射的に右肩を見る。

何故なのか全く理解出来なかったが、自らの肩にルインがネコのように爪をたてているのが目に入った。

相当強く爪をたてているせいか、ライルの右肩の衣服周辺は血が滲んでいる。

「ねっ？」

「……何してんだ？」

「水人化しないかなあ〜って思いながら待ってるの」

「お前のために殴られる訳がないだろ！」

「そんなに怒ることないじゃない、全く。あつ、そうだ、ルウって炎人よね？ 炎人は炎人化した時、身体が炎のようになるから……」

「殴るんだったらドレッドノートを殴れよ。つか、なんでオレたちを殴るんだ」

「それは水人、炎人、雷人化した人物は物理攻撃が効かなくなるかに決まっているでしょ！ 私だって物を壊すことを凄く……凄く我慢しているんだからせめて貴方を殴らせなさいよ！」

有り得ない一方的過ぎる理由で何故かライルはルインにキレられた。

「もういいわ！ ライルなんかには絶対頼まないんだから！」

そのままルインはドレッドノートがいる可能性がある部屋の扉を開く。

部屋へ入ってみると、室内はただ広いだけの特に何も無い殺風景な空間だった。

ただ、室内の壁に青黒く渦巻くものが無ければ。

「あの壁に渦を巻いているような感じのアレってなに？」

「あれは“ゲート”っていうの。ドレッドノートは魔族だから魔界にでも繋がっているんでしょう」

「そうだ、このゲートは魔界からの移動手段として扱っている。大幅に魔力を消費する“異世界空間転移”よりも遥か楽に魔界から他の世界へと移動出来るのでな」

ゲートの中から声が聞こえた。

そのゲートから、白いローブのような物を纏った人物がゆっくりと出てきた。

「私に何か用が有るのだろうか？ 何か理由が無ければ、ここまで訪れる者なぞそうはいないのでな……このような幻人の巣窟になど」

「お前がドレッドノートだな？」

剣を構え、ライルが聞いた。

「礼儀を知らぬようだな、少年。ところで、そんなことを私へ訊ねにわざわざここまでやって来たのかね？」

「勿論違う。この世界にいる幻人を全て消滅させてほしい」

「幻人が……当然それは出来ない。彼等は私の作り出した新たな魔法人種だ。彼等に生きる自由を与えてはいけないのかね？」

「そうかい。有紗がお前を魔界の霸王だと言ってたから、少しはまともな奴だと思ったんだけどな」

ライルが戦闘態勢へ移行すると、ルインに肩を掴まれた。

「止めときなさい。貴方は本来この場にいなかった者。これ以上、何かをしてもらうといい加減困るわ……てか、私に一発殴らせなさい」

「お前何言ってるんだよ？ さっき自分から殴らないって言ったじゃないか！ こっちこそ、いい加減にしないと綾香さんに言っぞ」

「そ、それは駄目よ。綾香は私に貴方たちを傷付けていけないって言うってたわ。私は綾香からの大事な言葉を心から理解しているもの。」

私は一番最善の策として水人化、炎人化して物理攻撃が効かなくなつたライルカルウを殴…」

「だから、それを綾香さんに話すって言うってんだよ」

「一々、ウザイことを言ってくるルインの話はライルは遮った。」

「ところで、話は終わったのかな？」

「あら、ごめんなさいね。すっかり忘れていたわ」

「しかし、本来の目的は忘れていないのだろうか？」

「ええ、そうね。貴方もあの能力を扱えるのね」

ドレッドノートとルインは何かを知っているかのように話を続ける。

「私は“シナリオ”でお前の行動を見た。R一族の封印が解け、私の前に現れるお前を」

「あの封印は勝手に解けたのよ。私が解いたものではないわ」

「そうだったか」

「そう、それは本来だと言われるものではなかった。誰かが本来の出来事を変え始めている」

ルインから、すっと表情が消える。

同時にルインから凍り付くような冷たい殺気が辺りを包み始めた。

「もう、私たちが話をする必要なんて無い」

「……知っている。勿論、この戦いの勝敗も」

それと同時にドレッドノートは自らの無限に近い魔力を極限まで集中させる。

しかし、既に勝敗は決していた。

「貴方、知ってた？」

いつのまにか、ドレッドノートの隣にルインが立っている。

「……………」

無言のまま、ドレッドノートはルインを眺める。

「貴方みたいに強くなった生物を生き返らすには、リザレクを扱った詠唱者側も貴方みたいに強くなってはいけないの」

「知っている」

ドレッドノートは静かに語る。

「つまり、レベルだけが高くなり過ぎた私を蘇らせられるような者は数少ないということ」

ドレッドノートが話し終わると、血を吐く。

「まだ、死なないで」

ドレッドノートをルインは支えた。

「何故、“シナリオ”で知ってしまった真実を変えようとしなかったの？ 貴方の力なら、この死を変えられたはず。いえ、貴方の魔力量なら相討ちにさえも持ち込めたはず」

「お前が……」

「なに？」

「お前が、R・ノールを殺さなかったからだ」

「えっ？ R一族がいたの？」

「本来は……ルーメリアで……ぐうっ……」

再び、ドレッドノートは血を吐く。

「“シナリオ”で自らの未来は見れない。本来、R・ノールは……この世界でお前に殺されていた。しかし、これで変わった。出会いが……」

それを言い残し、ドレッドノートは生き絶えた。

「ライル、ルウ。ドレッドノートは死んだわ。綾香たちのもとへ行くわよ」

「あっ……ああ、分かった。探しに行こう」

ライルはルインが発していた殺気で、言葉が一瞬出せなかった。

恐ろしい程の強迫的な殺意が全身を完全に硬直させたためである。

「これで、幻人も勝手にこの世界から消滅するわ。まっ、そんなこととなってみればどうでもいいのだけどね」

ルインたちはドレッドノートの城のエントランスまで戻ることにする。

「なあ、ルイン。ドレッドノートとは知り合いだったのか？」

来た道を戻りながら、ライルはルインに声を掛ける。

「まあ、敵対関係ね。過去に戦ったことがあるわ。当然、私が勝ったけど。ドレッドノートってのはね、R一族派の人物なの。因みにR一族ってのは数百年前に総世界を牛耳っていた悪徳集団よ。その連中に加担するドレッドノートを倒したのだから私は綾香に褒めてもらえるわ。あつ、どうしよう、抱き締められて『よくやった、ルイン』なんて言われて愛の口付けになんてなったら私、卒倒するわ」

「残念だけど、そうはならないと思うよ」

「なんで？」

苦笑いをしながら、ルウが話したことにルインは反応した。

「だって、それはルインの記憶にいる綾香さんだったらの行動でしょ？ 今いる綾香さんはルインに昨日会ったばかりだし」

「あー、そうか。だったら、私の方から褒めてっていわね。それで認めてもらって以前のような関係に……」

「以前のような関係？」

「それは私と綾香が恋人同士だった時の話」

はにかむように笑うルインに対して、その言葉を聞いたライルは微妙に顔を引きつらせる。

「ルインって……女性が好きなのか？」

「はあ、そんな訳ないでしょ？ どうして私が女性を好きにならなといけないのよ？」

「いや、だって綾香さんって女性だけど、恋人になりたいとかルインが今さっき言ってたからってつきりそうなのかなって思って」

「綾香が女性ですって！ ライル、貴方は何言ってるの！」

いきなり、ライルの両肩を掴んでルインは物凄い勢いで揺らす。

「おい……ちょっと……放せ……」

「桜沢一族はね、代々男性しか産まれない一族なのよ！ 女装しているとはいえ遥かに格好良いカリスマ的オーラを持ち合わせているあの綾香が女性である訳がないわ！」

言い切った後、ようやくルインはライルから手を離した。

「うえ……かなり気持ちが悪い……」

ライルは通路に膝を付き、気分が悪いのか胸の辺りを押さえる。

「もし、またふざけたことを言ったら……やっぱいいわ、面倒だから保留」

「保留って意味分かんねえし。第一、綾香さんと生活していたから分かるけどな、綾香さんは桜沢一族とか関係なく確実に女性だからな！ ていうか、見た目で女性だって分かるだろ！ それになんだよ、女装って！」

「生活……まさか、同棲！ 同棲していただと〜！ ライル、一体何しやがった！」

「生活って一緒に戦ったり旅したりしてんだから当たり前って言うか……つか、お前ほんとウザいな！ 同棲なんて一言もオレは言うてねえぞ！」

ライルとルインが言い争っていると通路向かい側から人影が見えた。

それは綾香たちであった。

「皆、大丈夫だった？ なんか物凄い殺気を感じただけ……」

「全然大丈夫よ、殺気を出していたのは、この私だから」

何故かハイテンションのルインは速攻で綾香に抱き付く。

ルインは綾香に抱き付いた際に綾香の身体をベタベタと触りまくっていたがとてもがっかりした様子で綾香から離れた。

「綾香って本当に女性だったのね」

「どうしたの？ 私がどうかしたの？」

身体を普通にベタベタと触れられて、綾香は微妙な顔をしながら訊ねる。

「なんでもないわ。それより、ドレッドノートを倒したわ」

「ドレッドノートを倒したのか！」

有紗がルインに訊ねる。

「そうよ、ドレッドノートがR一族に加担する人物だったから殺してやったわ。元々、これは決まっていたことだし」

「そうか。有難うな、ルイン」

「私に礼を言うことなんてないわ。私は桜沢一族に仕えているのだから」

合流した綾香たちはドレットノートの城を後にした。

そして、空間転移を詠唱し、綾香の故郷であるフォートへと戻った。

「ただいま！」

フォートへ戻ると、綾香たちは当然のようにエージ宅へとやってきていた。

「綾香、帰ってきたんだね！」

エージは帰ってきた綾香に勢い良く抱き付く。

「ちょっと、ガキ。アンタが綾香にくっつかないでよ……っていうか何でアンタがここにいるの？」

知り合いなのか、ルインはエージに対して怪訝な表情を浮かべる。

「えっ……？ この心の底からムカつくバカっぽい声はルイン？」

「そうよ、エージ君……あれ、エージ君ってルインを知っているの？」

「酷くない、今のって？ 綾香、私のことバカだっけ認めたでしょ？ てゆうか、どうしてそこをスルーするのよ！」

「そういえば、何でルインごときがオレの家の前にいるの？」

「私に仕えるって言ったから一緒にいるのよ。あと、ルイン。エー
ジ君に貴方は酷いことを言っちゃダメよ」

「逆じゃないの、それって！ エージ、かかってきなさい。一方的
に殺してあげるわ　！」

即座に覇気を宿らせたルインはエージに飛び掛かろうとする。

「ルイン、君から血の匂いがするよ」

「えっ？ ウソ？」

ルインは驚いた様子で、自らの匂いを確認する。

「そうね……確かに微かだけど血の匂いがするわ」

「怪我をしたの？」

「違うわ、綾香。殺戮を行った者にこびり付く血の匂いよ。これを
強者の証と勘違いし、自ら発している者もいるけど、その程度では
下の下。自らを獲物に知らせるなんて雑魚以下でバカね、死んだ方
が良いって感じ。本物の強者はこれを消し、強者と気付けなくさせ
る。今の私やエージみたいだね」

「殺戮って……ルインとエージ君が？」

「オレは違うよ。殺戮なんてオレには絶対出来ないもん。信じて綾
香！」

とても焦った様子で、エージは綾香に縋りつく。

「ええ、分かってるわ、エージ君。こんなに可愛いエージ君が誰かを傷付けるなんて出来ないものね」

縋りつくエージのうったえるような眼を見て、綾香はエージを抱き締める。

「ちょっと、どうしてエージは違うのよ！ 綾香、それっておかしくない！」

微妙ないざこざがあったが、ひとまずエージは全員を家の中に招き入れた。

その夜、全員が寝静まった頃合を見て、ルインは家の外に出ていた。

「どうしてなのかしら……綾香が男性じゃないなんて」

ルインはエージの家の周囲を何もせず、ただうろついている。

「ルイン、貴方何してるの？」

家の中から綾香が出てきた。

「別に何も……綾香はどうしたの？」

「なんだか、眠れなくて。夜風に当たれば気分が良くなるかなって思ったの。それに窓から貴方の姿を見掛けたからね」

「そう……綾香、今まで勝手なことばかり言ってゴメンなさいね。私の知っている綾香はもう記憶にしかないのだとようやく分かったわ」

「どうしたの？」

「私は貴方のことをずっと男性だと勘違いしていたの。それが貴方に抱き付いて気付いたの、女性だとね」

「普通は分かるでしょ、それくらい？ 私は男性だと思われてて逆にショックよ」

「そんなこと言ったらって分からなかったわよ。桜沢一族は確実に外見が女性のような男性しか産まれないう一族はずだったの。貴方以外は……」

「で、どうするの？」

「えっ？」

「私が女性だと分かって貴方が会いたかった綾香でないとしたら、もう私に仕える必要が無いんじゃないの？ そもそも桜沢一族って何なのか、私は今でも分からないし」

「……………」

ルインは下を向き、俯いたまま黙る。

「ルイン？」

「私、異次元にいる間、ずっと辛かった。希望なんて物が、もう何も見えなかった。でも、今は違うわ。本当に生きてて良かったと私は実感している。綾香に再び出会えたのだから。私は綾香から離れたくないわ。ずっと貴方の傍にいて決めたの！」

「そうなの？」

「ええ、そうよ。いずれは女性の綾香でも私を心から愛せるように頑張るわ！」

「それってどういう……？ えっ、私がルインを？」

ひとまず、綾香の意見を全く聞かずにルインは生涯綾香に仕えること勝手に決めた。

明るる日、綾香たちはモンスターハンターへ依頼を出していた幻人壊滅戦線の隊長トレインに依頼完了を知らせるため会いに行く。

しかし、トレインは幻人を消滅させたことを信じようとせず、依頼金を払おうとしなかった。

それは当然、トレインにはドレッドノートが幻人たちを野に放っていた黒幕だと気付ける程の能力者ではなかったからだだった。

ドレッドノートが黒幕で幻人たちを支配していたなどを綾香が説明したのだが、トレインは今一納得出来ない様子。

そのため、ルインが猛烈な脅しを掛け強引に依頼金を奪った。

そして、アーティから次の連絡が来るまで綾香たちはエージの家に滞在することとなった。

エージの家で生活を始めてから数カ月が経過した日、アーティからではなくテリーから連絡が来る。

それによってアーティの身に何が起きたのか、綾香たちは知ることになった。

第一八部〜第二一部までのキャラ設定など

第一八部〜第二一部までに出てきた組織、キャラクター、世界観、種族の細かな設定を載せていこうと思います。

ついでに作品内の時間経過ですが第二一部終了時点で、第一部開始から約二年半の歳月が経過しています。

設定の順序は

名前（年令、身長、種族、性格、特徴や価値観などの順です）

ライル（年令19才、身長177cm、水人の男性。ノールのレベル分けて水人の全変化能力をえるようになっていたが、有紗の修行でそれ以上の能力底上げが出来た。ルインと有紗の強さを目の当たりにしたことにより自身の弱さに気付いた）

ルウ（年令16才、身長165cm、炎人の男性。有紗との修行で剣技を習得。魔法剣の扱いになれ、兄のライルと同様に剣士となった。最近好きな人が出来た）

ジーニアス（年令15才、身長130cm、エルフ族の少年。有紗の訓練でダークエルフ化を完全習得し、殲滅魔法のバーストを使いこなせるようになった。綾香には天罰療法のような対応をされたが、結局は仕事柄人を殺すのは仕方が無いを考えている）

橘綾香（年令26才、身長170cm、人間の女性。仕事ではあるが故郷に帰ることが出来たため、とても満足している。兄である有紗に会えて嬉しい。ルインを自らに任せさせたが、ルインが自身をどう捉えているのか全く分からず不安）

桜沢有紗（年令28才、身長175cm、天使の男性、出身は不明。体裁が良く、聡明かつ冷静で能力も高いという非常に良く出来た人物。しかし、自身の能力を鼻に掛けたり、嘘を吐くのが好きであったり、日和見主義なところがあつたりと意外な一面も持っている。槍術の腕前が総世界で約10位以内に入る実力者。能力の高さから天使界の大天使長の位に就任している。ワーカホリックなため、ホリックという通り名がある。久しぶりに会えた綾香に対して非常に溺愛している）

ルイン（年令260才、身長172cm、ネコ人の女性、出身はネコ人のフラット共和国。性格破綻者なため、自身のことを何事も第一優先して考えている。ただし、桜沢一族とそれに関する者たちには彼女なりの礼儀を持って接している。総世界最強のレベル20万の女性。現時点ではルインに勝利出来る人物は皆無。橘綾香を男性だと勝手に思い込み抱き付くなどをしていたが本当は女性であると気付く。融合で現れる等、神話的な人物になり掛けていたが何らかの理由で封印が解け、現世に戻ってこれた）

トレイン（年令34才、身長177cm、人間の男性、一つのこと集中する性格、出身は不明。一応、実力のある魔導剣士。苛烈さを増していく戦いを危機だと判断し、他の世界から能力の高い優秀な傭兵を雇っている。部下の無骨にながらも女性を気遣おうという対応をあっさり一蹴するなど戦いに関してしか考えられない様子）

エージ（年令不明、身長131cm、イヌ人の男性、幼く控えめな

性格、出身は不明。見た目が幼いせいなのか子供だとよく間違われる。ネコ人は嫌い、特にルイン。エージ自身の実力はルインだけを知っていたりと、互いをよく知った仲ではある。綾香とは綾香の若い頃かの知り合い。綾香に何度か襲われた過去がある。感情の変化は顔を見るより尻尾を見た方が分かりやすい。本人は隠しているが、桜沢一族派の一人)

ドレッドノート（年令428才、身長169cm、魔族の男性、出身は魔界。思慮深い性格。自身の危機をなるべく減らすために幻人を作り出す能力を駆使して他の世界を侵略している。元々これは別の何かの目的があって行なっていたようだが、ドレッドノート自身が死んでいるため理由は分からない。幻人を大量に生み出せる能力を持っている。魔界のNo.2として霸王階級に位置する人物であり、ミトスの右腕とも言える側近。無限に近い魔力を持っていたがルインに殺された)

世界、能力などの設定

ルーマイア（文明レベルはスロートと同じくらい。幻人が現われたせいで、最前線の主要地点になっていた）

フオート（ルーマイアがある世界）

幻人（何度倒してもどこからともなく現れる不完全な魔力体。奇襲戦や電撃攻撃が得意。以外と脆く簡単に仕留められる。ドレッドノートに作り出された新種の魔力体。生活などの高尚なことは出来な

いし、幻人自体それをする必要が無い)

幻人壊滅戦線(隊長トレインを筆頭に幻人と戦い続ける兵团。実際にはフォート各地に似たような兵团は存在する。生きている者たちはこの兵团に入り、幻人との泥沼の戦いに命を懸けて死んでいく)

ダークエルフ化(殺戮のためではなくエルフ族が追い込まれ、命の危機を感じた時に相手を圧倒するために扱う特殊な変化。その際、殲滅魔法と呼ばれるバーストなどを唱えることが多い)

殲滅魔法(殲滅魔法の種類 デルタ、バーストなど。殲滅魔法のデルタについては聖帝と聖帝の血を輸血した者のみが使用可能)

弱さ

現在、ミールと杏里の二人はノールの自室前にいる。

それは、アーティにモンスターハンターを辞めると宣言し、部屋を出ていったノールを心配したからだった。

「アーティが姉さんから経験値を奪ったってことは姉さんに酷いことをしたに決まってるんだ。大丈夫かな……姉さんが落ち込んでいても僕は姉さんを元気に出来るのかな？」

「きつと大丈夫だよ、ミール君。ノールちゃんなら……」

何か嫌な予感を感じていた二人だったが、ミールはノールの自室のドアを開ける。

「姉さん……って何してるの？」

部屋に入ると、ノールは窓の近くに椅子を置き、その椅子に腰掛けたまま、外の風景を眺めていた。

「……何してるって、外を眺めているんだけど？」

「う、うん、でも大丈夫？ アーティに酷いことされたんじゃないの？」

「そう……アーティはそんなことを言ったんだ。バカだね、アーティは」

窓の外を静かに見つめたまま、ノールはミールの方を見ない。

「どうしたの、姉さん？」

「……………えっ？」

たった今、ミールに気付いたようにノールはミールの方を見る。

「なんか窓の方を見ていたけど、どうしたの？」

「なんでもないので、ミール。外より、室内の方が見つかりやすいかなって思ってた」

「どうしたの、姉さん。何を言ってるのかわからないんだけど」

「……………」

再び、ノールは窓の外を見つめ黙ってしまふ。

「ボク、少しだけ安心したかも」

ノールが窓の外を再び眺め始めたのを確認してから、杏里はミールに声を掛ける。

「そうなのかな？ 僕には姉さんが悩んでいるようにしか見えないけど……………」

「ノールちゃんは悩んでるの？」

「だって、僕の話をちゃんと聞いていないっていうか、何だか悲し

そんな雰囲気だった気が」

「悩んでたら、ボクたちにも話すと思っけど？」

「そう……なのかな」

「もし何かあっても、ボクがノールちゃんを支えるから大丈夫だよ」

「本音を言つと君じゃ凄く不安だけど姉さんのことを守つてね。それと……」

「それと？」

「今はシスイ君のことを絶対に口にしちゃダメだよ」

「うん」

「じゃあ、姉さんをよろしくね」

ミールはノールたちの部屋から自室へと戻る。

自室のドアを開け、入ろうとした時、ミールは異変を悟った。

室内には誰も居ないはずなのに何者かの気配を感じた。

「誰かいるの？」

部屋の入り口辺りから室内に呼び掛けると、室内に人影が見えた。

それはミールと今までの間、同室で生活していたジャスティンだった。

「や、やあ。ミール」

「ジャスティン君？ 君って確かアーティたちと一緒にソニックブームへ行っただけじゃなかったの？」

「そうだよ。でも、ヴェイグにスロットへ残るって言ったから大丈夫」

「そうなんだ。でも、どうして？」

ミールの反応を見て、ジャスティンは何かガツカリしたような表情をする。

「僕がスロットに残った理由が、ミールには分からないの？」

「えっ、理由？ うーん……僕の部屋にいるってことは忘れ物かい？ 一緒に生活してたしさ」

理由が分からないのか、ミールは困った顔をする。

「忘れ物かい？ じゃないっての。分からないのかい？ ほら、僕がヴェイグたちと一緒に行動しないでミールを部屋で待っていたってことはもう……分かるでしょ？」

「えっ、何だろう？ ヴエイグさんのことが嫌いになったってことかい？」

「ほんつとつにミールは鈍いね。僕が兄貴を嫌いになる訳がないでしょ。ミールがスロートに残るっていうから僕も残りたかったんだよ」

「僕がいるからかい？」

「そうだよ。なんかね、いつのまにか、あの……好きになってたっていうか。一緒に生活していたからなのかな？」

緊張しているのか頬を少し赤く染め、髪をさわりながらジャスティンはミールから視線を下ろす。

誰かに告白したことはジャスティンにとって初めてのことだった。

「ジャスティン君、今さ、何て言ったの？ 余り声が聞こえなかったんだけど。ゴメン、もう一回話してくれない」

「聞いとけよ……ちょっと、ミール君。話があるから僕に近寄ってくれない？」

無理やり作ったような笑顔でジャスティンはミールを手招きする。

「いいけど、何で？」

不思議そうにミールがジャスティンへと近寄ると、いきなり左頬を平手打ちされた。

「えっ……?」

反射的にジャスティンの方を見る。

「ってかき、人が勇気を出して好きだって告白してんのにどうしてそこを聞いてないの? やっぱり、男装なんかしてる僕だと、そういう対象にもならないってことかい?」

「好きって……もしかして僕のこと?」

ミールの一言にジャスティンは大きく溜め息を吐く。

「ともかく、僕はこれから君と一緒に行動するからね。今頃、ヴェイグのところに戻れないし。それにもう夜だからさ、明日になったら理由をノールさんや杏里さんにも話すからね」

「姉さんにも言うの? それって僕はどうすればいいの?」

血の気が引いたような、少し青ざめた顔でミールは訊ねる。

「物凄く嫌がつてる気がするんですけど? 僕にはミールが何を勘違いしてるかなんて大体分かるけどね」

「勘違い?」

「そうだよ、絶対僕のことをまだ勘違いしてるだろ。また同じことを言うのは面倒だから、僕のことを後でノールさんか杏里さんにも聞いてよ。それでも僕に抵抗があるなら……僕は待たないよ」

「あっ……うん。分かった」

微妙に引きつった笑顔をミールはする。

翌朝、ミールはとても急いだ様子でノールと杏里の部屋へ向かった。

「姉さん、いるかい？」

ドアを乱暴にノックし、ミールは部屋の中に入る。

「ミール君、おはよう」

ノールが寝ているベッドに腰掛けている杏里が返事をした。

「姉さんは寝てるの？」

「うん、そうだよ。ノールちゃんは昨日から体調が悪いみたいだから、まだ寝てるみたい」

杏里は寝ているノールの髪を優しく撫でる。

杏里の声は不安げでノールを本当に心配しているようである。

「姉さんの体調が悪いつて本当に？ 姉さんは水人だから風邪とかに影響されないはずだけど……っていつか何で杏里くんが姉さんの髪をさわってるの？」

「ノールちゃんが落ち着くかな……と思ってね。ダメかい？」

「杏里くんは姉さんに極力ふれないでほしいな。当然ダメに決まってるじゃん」

「ダ、ダメなの？」

「うん、ダメだよ」

「そ、そんな……」

「それより姉さんは昨日から体調が悪かったの？」

「そうみたい。ミール君が部屋に帰っていった後、気分が悪そうだったからボクがベットまで運んだの」

「もしかして、昨日僕にこのことを伝えたかったのかな？」

「でも、休んでいれば体調も良くなると思うから、ゆっくり寝させていようね」

「うん……そうだね」

「ところで、ミール君はノールちゃんに何か用があったんじゃないの？」

杏里はベットから立ち上がる。

「そ、そうなんだ。昨日ね、ジャスティン君が僕の部屋にいたの」

「ジャスティン君って確かアーティさんと一緒にソニックブームへ行ったんじゃないの？」

「そのはずなんだけど、僕の部屋にいたの。何でだか僕には分からないけど好きだって言われたよ……」

「それって告白じゃん！ いいなあ、ミール君。ボクもノールちゃんから言われてみたいな」

杏里は自らのことのように喜ぶ。

「でも、同性からそんなこと言われるなんて僕は思ってたよ」

「へえ？ 同性って……もしかしてジャスティン君が？」

「そつだよ、ジャスティン君」

「彼女は女の子だよ。ハンター養成所に入会する時にヴェイグさんがジャスティン君は女の子だって言ったじゃん」

ミールの問い掛けに苦笑いしながら杏里が答える。

「ジャスティン君って女の子だったの！」

「ヴェイグさんの話を聞いてなかったとしても、ジャスティン君と普段一緒に生活していたんだから普通は気付くと思うけど？ 例えば着替え、お風呂、トイレの使い方とかで」

ようやく、ミールはジャスティンが女性だと理解した。

常人ならば相当早く気付けたはずだったが、異性を全く意識しないノールと同じR一族特有な価値観であるため、ミールには彼女が女性だと気付けなかった。

「やっぱり、今まで僕のことを男性だと思ってたんだね」

呆れたような口調で言いながら、ジャスティンが部屋の中に入る。

「僕が起きた時、部屋にいなかったから、ミールならここにいるんじゃないかと思ってね」

チラッとミールの方を見る。

「あつ……ジャスティン君」

ミールは戸惑いの反応を見せる。

今まで男性だと思い、一緒に生活していた人物は女性だと知ったからである。

「ノールさん、まだ寝てるの？」

ノールが寝ているベットにジャスティンは近寄る。

「そうなの。体調が良くないみたいだから、ゆっくり寝かせてるの」

「薬とかは飲んだ？」

「飲ませてないよ。水人は体質が人間とは違っていてノールちゃんが言ってたから」

「ふーん……それなら大丈夫かもしれないね。あと杏里さん、僕は貴方たちとこれから行動しますね。ミールと離れたくないので」

「うん、分かった。目を覚ましたらノールちゃんにも言うっておくね」

「じゃあ、ミール。一緒に部屋へ戻ろう！」

ジャスティンはミールの腕を掴み、寄り添う。

「う、うん。そうだね」

明らかに引きつった顔をしたまま、ミールはジャスティンと部屋から出ていった。

その後、ジャスティンとミールは自室へと戻る。

「はあ……大体分かっていたけどさ、ミールってまだ僕が女だって気付けなかったんだね。ミール、君には本当に呆れるよ」

「ごめん……気付けなくて。でも、本当にジャスティン君て女の子なの？」

「謝ってるくせに、それでも疑うの？ はあー、君って奴は本当にどうしようもないね。何回も僕が男の子じゃないって気付ける時があったでしょう？」

「で、でも、僕は君が言ってくれなかったから分からなかったよ」

「言わなくても普通は気付けるでしょ？　じゃあ、僕は何でトイレの便座を下げていたか分かる？」

「あれって、クセだったんじゃないの？」

驚いたような口調でミールは返答する。

「もしかして、僕が困るようになるためだったの？」

「座らないと、トイレで出来ないでしょう！　こんなこと言わせないでよ、バカミール！」

「う、ごめん」

「じゃ、どうして僕はミールと一緒に風呂（ハンター養成所の大浴場のこと）に入らなかったか理由は分かる？」

「肌が見られなくなかったからでしょう？　パソコンで調べたけど、肌が見られたくない人もいるって」

「僕が女の子だからだよ。本当に君と話していると疲れるよ……」

ミールの答えが単純に考えて有り得ない内容だったので、強く言い返す気さえジャスティンは失った。

この瞬間、この鈍感男を思い知らせるにはもう方法は一つしかない。とジャスティンは悟る。

「僕は肌を見られたくないなんて一度も言っていない。その証拠に、ミールには見せてあげるよ」

ジャスティンは衣服を脱ぎ出す。

上半身の服を一枚一枚脱ぎ、上半身に着用しているモノはブラだけとなった。

「ほら、どう。女の子でしょう?」

自信を持ってジャスティンは胸を張る。

何となく、“勝った”と心で思っていた。

「あの」

「なに、ミール?」

「ジャスティン君も、そうゆう趣味があったのかい?」

「はっ?」

「ジーニアス君と同じ趣味だよ」

「はあ! それ、マジで言ってるの!」

ジャスティンは心から驚いていた。

まさか、服を脱ぎ上半身を曝け出しても、女装しているの?みたい

なニユアンスで語り掛けられるとは思ってもみなかったからである。

「僕を……男みたいに言うな！」

ジャスティンは怒りながら、背中にあるブラのホックを外す。

ブラがはだけ、露となるジャスティンの胸。

「どっ、もうこれで疑いようがないでしょう？」

胸に手を置きながら、ジャスティンは俯く。

ジャスティンの顔は恥ずかしさのあまりに真っ赤になっていた。

男性に胸を見せるなど、彼女の人生で初の体験だったから当たり前だった。

極度の羞恥に心臓の鼓動が高鳴るのを感じながらも、これでミールにも認めてもらえるのだと思い、彼女自身何となく嬉しくもあった。

しかし、ミールが言った内容はジャスティンをかなりへこませるものだった。

「僕には胸が脹らんでいるように見えないけど……もついいよ、服を着なよ。ジャスティン君は女の子だよ」

同情と哀れみに満ちた声でミールは答えた。

それと同時にジャスティンの何かもはじけた。

「は、ははっ……そうか、そうゆうことね。分かったよ、ミール。君の考えていることが」

ジャスティンは物凄くへこんだ様子だった。

「よし、分かったよ。脱ぐよ、全部脱げば良いんでしょ?」

下半身の衣服にジャスティンは手を掛ける。

男装をしているため、スーツのようなズボンを履いていたがそれを脱いだ。

ジャスティンは自らの心臓の鼓動をハッキリと聞いていた。

まさか、こんな形で全裸にならなくてはいけないのかと思いつながら。

最後に下着だけとなった着衣を脱ぎ出す。

「あつ……!!」

その瞬間、ミールは叫び声のような声を発した。

「な、ない、どうして!」

「なに、今になって焦ってるの。僕は恥ずかしくて死にそうだよ!」

下半身の一点に、完全に驚いた様子で注視するミールにジャスティンは叫ぶ。

「ひ、ひとまず、服を着てよ!」

見ないようにするためなのか、ミールは真っ赤になった顔を隠す。

「勿論着るよ。これで僕が男だなんて、もう言わせないからね」

少しホツとした声でジャスティンは言うと、服を着始める。

「ジャスティン君……」

「なんだい？」

「何で、こんなことしたの？」

「それは、君が鈍感過ぎるからだよ」

ようやく、服を着用し終えたジャスティンは答える。

「でも、見せなくても良かったんじゃない」

今だに顔を隠しながら、ミールは言う。

「もういいよ、顔を隠さなくても。服なら着たし」

ジャスティンの一言にミールは腕をぎこちなく下げる。

ミールの自身を見る目が何となく変わったとジャスティンは感じていた。

「あ、あのジャスティン……君」

「今、呼び付けしようとしたでしょ？」

「違うよ、君は……女の子だから、これ以上“君”っていう敬称を付けるのはおかしいかなって思ってた……」

「はっ？ もう慣れてるから、“君”を付けたままで良いよ。今頃、杏里さんがノールさんを呼ぶ時みたいに、“ちゃん”を付けられても僕として今一変な気分だよ」

「そ、そう……」

「うん」

このジャスティンの反応の後、二人は何も話さなくなった。

暫らくの間、二人は沈黙し、視線を合わそうとしない。

ジャスティンはしっかりとミールを見据えているのに、ミールはそわそわしながら視線を合わさず、どうしたら良いのか分からないようだった。

「あ、あの……ごめん！」

状況と雰囲気から居た堪れなくなったミールはジャスティンの下から逃げるように部屋を出ていった。

「あつ、ちよつと待ってよ！」

ジャスティンはただそれを見つめることしか出来なかった。

確かにミールのジャスティンを見る目は変わった。

しかし、ミールのジャスティンへ接する態度も同じく変わった。

たった今、ミールが逃げ出した時に、それを痛く感じていた。

ミールがジャスティンの事実を知った時、杏里はノールの看病をしていた。

しかしその日、ノールが目覚める気配は全く無く、ただ一日が過ぎていった。

その間もノールはうなされているのか、時折苦しそうな声を立てる。

ノールが苦しそうにしているため、杏里は彼女を気遣い一日中看病をしながら付き添っていた。

そして安心させられるかは分からなかったが、早く善くなるようにと優しくノールの手を握っていた。

時は経過し、三日後。ノールは目覚めた。

ノールが眠り続けてから四日間の時が過ぎていた。

目覚めたノールがゆっくり上体を起こそうとすると、杏里が隣で自分に寄り添うように寝ているのに気付く。

看病しているうちに杏里は疲れてしまいうたた寝をしてしまったというようだ。

目覚めたノールはそれの何かが気に食わなかったようで、杏里の顔を何度か叩いて起こす。

「えっ、なにになに？」

その際、杏里は掛けていた眼鏡が外れたため状況が理解出来なかった。

「はい、眼鏡」

ノールは杏里に、そっと眼鏡を掛ける。

「ありがとう……あっ、ノールちゃん！目が覚めたんだね！」

杏里はとても嬉しくて、そのままノールに抱き付く。

「良かった……もう目を覚まさないんじゃないかって凄く心配したんだよ」

本当に嬉しくて杏里は泣いていた。

だが、ノールには何故杏里が泣いているのか分からなかった。

「杏里くん、何で泣いてるの？　ボクがさわったから？」

「違うよ、ノールちゃん。君が目を覚ましてくれたからだよ」

「そう？」

抱き付いていた杏里をノールは退かす。

「ボクは夢を見たんだ」

「どんな？」

「君に話しても、全然関係ないよ。ボクが見たのはシスイ君が今まで見ていたこと、感じたこと、彼の決意したことだったから。あの子はバカだよ……ボクのために命を懸けたんだよ。あの子はボクが言ったことをずっと覚えていてくれたの……守ってねってことを」

「ノールちゃん……」

「ボクが見たものは夢だけど、あの夢でボクは真実を見たのかもしれない」

ノールは肩を震わせながら涙を流す。

「ボクはシスイ君に逢いたいよ……あの子に戻ってきてほしいよ……」

「でも……ノールちゃん」

「知ってる、ボクが殺した。あの子はボクに殺されることを望んで

いた……死ぬことによつてあの子が知つたことをボクに伝えたか
つたみたい」

「……そうなんだ」

「杏里くん、ボクを心配してくれて嬉しかったよ。ちよつと、ボク
は用があるから少しの間、部屋を出ていつてくれないかい？」

「服を着替えるのかい？」

「うん、そうだよ」

「でも、いつもだったら僕が目の前にも裸になるのに」

「そうだね」

ノールは俯いたまま、小さく答える。

「何かあるんだつたら何でも僕に言つて」

ノールの様子がおかしいことを悟つていた杏里は心配そうに接する。

「じゃあ、部屋から出ていつてくれないかい？」

「……うん、分かつたよ」

仕方なく杏里は部屋から出ていった。

部屋から出ていった杏里が向かつた先はミールたちの部屋。

ミールたちが特に何もすることがなくソファアールに座り、テレビをゆったりしながら見ていると杏里がドアをノックもせずに入ってきた。

「杏里くん、どうしたの？」

「ボクはここに来て良かったのかな……」

「良いけど？」

「違うの……ノールちゃんが目を覚ましたの。その時、ノールちゃんの様子がおかしいことは分かっていたの。でも、ノールちゃんが部屋から出ていってって言うから……」

「ノールさんに何かあったの？　ともかく、ノールさんが起きたなら話すこと話に行かないと」

ジャスティンはソファアールから立ち上がり、部屋から出ていく。

「あの、杏里くんは姉さんのことどう思ってる？」

「目を覚ましてくれて凄く嬉しいよ。ノールちゃんはボクにとってボクの全てだからね。でも、なんでそのことを聞いたの？」

「杏里くんが姉さんのことをどう思ってるか聞きたかったの。それで何か参考になるんじゃないかと思ってさ。僕はジャスティン君をどう思えばいいか本当に迷っているんだ」

「迷ってるの？」

「だって、今まで男だと思っていたんだよ、ジャスティン君のこと。」

女の子に初めて好きだって言われたから僕としては凄く嬉しいし、断りたくないし……でも感覚がどうすれば分かるのか今一はつきりしないんだよ」

ミールが声のトーンを落として呟く。

「杏里くんはもっと前から姉さんと付き合っていたんでしょ？」

「うん、そうだけど？」

「もう女の子の接し方は分かるんでしょ、凄く羨ましいよ」

二人が話していると、ジャスティンが部屋へ戻ってきた。

「どうしたのかな、ノールさん。凄く不安定な状態なのかもしれないよ。僕と普通に話していたら突然泣きだしちゃって……泣くのを見られたくないから部屋から出ていってと言われたよ」

「杏里くん聞いた？ 姉さんを慰めてあげてよ。僕より、杏里くんの方が姉さんを支えられるはずだから」

「そうだね……心配だし、ノールちゃんに会ってくる」

元々、ノールのことが心配だった杏里は急いで部屋へと戻る。

自室に戻る際、杏里は悩んでいた。

酷く落ち込んでいるであろうノールを慰められるだろうか不安だった。

そんな心持ちで自室に入ると、驚くべき光景が広がっていた。

ノールが床に座った状態で、今まさに自らの身体へとナイフを突き刺そうとしていたのだ。

「何やっているの!」

直ぐ様、杏里はそのナイフをノールからムリやり取り上げる。

「ああ……何するの?」

「何するのじゃないでしょう? 今、ノールちゃんは何しようとしてたの? もし、自殺とかだったらボクは絶対に許さないよ!」

「許さない? 許さないなら、ボクにそのナイフを刺してくれるのかい?」

「違うよ!」

「じゃあ、何がしたいの? 命を弄もてあそびたいんじゃないの?」

杏里からナイフを強引に奪い取ると、ノールは自らの胸へと突き刺す。

「ダメだよ!」

すぐに杏里はノールに突き刺さっているナイフを引き抜こうとする
と、あることに気付いた。

「怪我して……ない？」

「そうなの、ついさつき気付いたんだけどボクは自分の身体を傷付
けることが出来ないの。だから、自殺なんて出来ないみたいなんだ
よね。こんなにも、ボクは死にたいのに……」

身体に漂うように浮かぶナイフを悔しそうに見つめながら、ノール
は頬に涙を伝わせる。

「ボクは身体を傷付けようとしてもボクの身体はボクの意志と関係
なく勝手に水人化するの！ こうやって身体にナイフを突き刺した
つて、水中にナイフを入れるのと全く変わらない状態になるんだよ
！ ボクの身体なのに！」

「ノールちゃん、落ち着いて。どうしてこんなことしたの？」

ノールが極度に取り乱しているため、心配しながら杏里は訊ねる。

「ボクは……生きていたとしても、シスイ君に会うことは出来ない
の」

俯きながら、ノールは自らに突き刺さっているナイフを杏里に手渡
す。

「杏里くん、ボクからお願いするのは……本当に悪い気がするけど
それでボクを刺してくれないかい？ ボクにはシスイ君がいるよ。
もう生きることに未練なんてない、死んでも寂しくない。君の気が

済むまで刺して構わないから……」

そこまでノールが話した時、杏里はノールの顔を思いっきり叩いていた。

「……………?」

叩かれたはずなのに全く痛みを感じなかったため、ノールは顔をゆつくり押える。

「ゴメンね……叩いちゃって。痛かったでしょ？ でも、生きることに未練がないなんて言わないで」

杏里はナイフを床に置き、ノールを抱き締めた。

「ボクたちは恋人だよ。ボクにはノールちゃんが本当に必要なんだよ。絶対に死にたいだなんて言わないでよ!」

ギュツとノールを抱き締めたまま、杏里は涙を流す。

「どうして、君はボクに生きていてほしいだなんて言えるの？ ボクはなんでこれからも生きていかなきゃいけないの？」

「大好きだからに決まってるじゃん……いつも傍にいてほしいの」

杏里はノールの目を真剣に見つめて答えた。

杏里の言葉を聞いて、ノールはゆつくり深呼吸をする。

「杏里くんからボクに対してそんな言葉が出るとは思わなかったよ。」

大好きだなんてね、それって告白？ その話はボクが生きるか死ぬかに全く関係がないしね」

「でも、ボクは本当にノールちゃんに生きていてほしいの！ 好きだからいつも傍に居てほしいんだよ！」

「杏里くんがそんなにボクを必要としてくれるなら……ボクはもう少し生きるよ。でも、良いの？ ボクは人殺しなのに……」

「シスイ君はノールちゃんに生きていてほしくて、ノールちゃんに殺されたんでしょう？ シスイ君の分もノールちゃんは生きなきゃダメだよ！」

「確かにそうだけど……」

シスイの死の直前に話した内容を思い出したのか、溢れる涙を拭う。

そして、床に置いてあるナイフを杏里に手渡す。

「シスイ君がボクに生きていてほしいのだとしたら、ボクが今ここで死ぬことは間違ってる……よね？ シスイ君の命を懸けたこと自体がボクのせいでムダになっちゃうんだね。絶対に、そうなんだよね……」

心の中でノールはシスイのことを深く考えていた。

しかしそれは、とても割り切れるはずの無いこと。

ノールはシスイが話したことだけが正しいのだと考え始めていた。

シスイは自らに生きていてほしいと言っていた。

シスイのために死ぬのではなく、生きてみようと少しずつ考えを変えてみようとしていた。

「ボクは頑張るよ、シスイ君のために。じゃ、早速」

ノールは速攻で杏里の顔を殴る。

「うわっ！ えっ……？ どうして？」

「どうしてって、ボクの顔叩いたじゃん。あれって何なの？ ぜんぜん痛くなかったけど」

「えっ、あれは……その、成り行きっていうか。えっ、痛くなかったの？」

「えい」

ノールは再び、杏里の顔を殴る。

「ノールちゃん、止めてよ！」

何故か泣きながら杏里はノールのか細い腕を掴む。

「良いじゃん別に。気分も変えたいし、ちょっと外出しない？」

「う……うん、ノールちゃん寝ていたから外で散歩がしたいんだよね。どこ行く？」

「えーと、城の中庭までかな？」

二人は部屋を出て、中庭へと向かった。

その途中、城の回廊でクロノと見たことのない二人の男性と出会う。

クロノの背後には腰まで伸びた長いロングヘアの金髪をした滑らかな白い肌を持つ華奢な男性と、自らの迫力のある筋肉を見せびらかす筋骨隆々とした傭兵風の姿をした男性がいた。

「やあ、ノール、杏里。モンスターハンターを辞めたみたいだな」

「そうだよ、色々あってね。ところで、その後ろにいる二人は誰なの？」

「この人たちか？ この人たちは城に仕えてくれる新しい仲間だ」

クロノが紹介しようとする、先に一人が語りだす。

「私はゲマと申します。そして隣にいる筋肉質な男はソルと言います。私たちはクロノ様の考えに引かれ、仕官をしに参りました」

「そしたら、一発オーケーだぜ！ 給料も結構高いし、クロノさすがじゃねえかってわけよ！」

「口を謹め、ソル！ クロノ様は私たちのこれからの領主となるお方だぞ！」

「構わないよ、これからは仲間なんだから。それにクロノ様だとか、オレに敬語を使わなくてもいいよ」

「それでは貴方の領主としての威厳が…」

「別に良いじゃないか。クロノがそう言っているんだ」

クロノたちは会話をしている最中だったが、ノールは杏里の腕を引っ張ってクロノたちの脇を通過していった。

「クロノさんたちの話を聞かなくていいの？」

「ムシ」

「えっ……どこ？ ああ、そういうことね。それにしても強そうな覇気をしていたね、あの二人」

杏里の話を聞いて、ノールは不思議な顔をする。

「筋肉質な男の人は確かに強そうだったけど、なよなよってした男の人は明らかに弱そうだったけど？」

「どちらかというとゲマさんの方が、ソルさんより強い覇気を持っていたよ？」

杏里は話している途中であることに気付く。

「見た目で判断するなんていつもと違うなって思ったけど、そういうレベル分けでノールちゃんは能力が戦う前に戻ったんだね」

「うん……もうボクは戦うことを辞めたからレベル分けしたの。能力ってモノは見た目だけでは判断出来ないってことに君の話を聞いて」

て、たつた今思い出せたよ。そんなことをすぐに考えられないなんて、ボクは本当に弱くなつたんだね」

二人で歩きながら会話をしているうちに中庭へと着いた。

一通り中庭にある観葉植物などを見て回っていると病み上がりに近いノールは身体に疲労感を感じ、中庭に数ヶ所備え付けてあるベンチに座る。

「じゃあ、ボクも」

約三名程が座れる大きさのベンチだったため杏里もノールの隣に座ろうとしたが、ノールはとても嫌な顔をした。

「君も座るの？　なんで？」

「ごめん……ボクは立つたままにいるよ」

仕方なく杏里は座ることを止めた。

「もう死にたいとか言わないでよ」

「うん、もうそんなことは言わないよ」

そう言いながら、ノールはベンチへと横になる。

「もしかして寝るためにボクを座らせなかったの？」

「そうだけど、なんで？　ボクの上に座りたいのかい？」

「座らないよ！」

「……ボクね、初めて人に告白されたんだ」

「ボクはノールちゃんに二度目だよ？」

「いつ？」

「ハンターの宿舎で二人きりの時にしたじゃん！」

ノールの発言に杏里はかなり焦った様子を見せる。

「……あれのこと？」

何かを思い出したのかノールは身体を起こす。

「あれって告白だったの？ あの時ボクって君のこと、よく知らなかったから軽く流していたけど。あと、雑誌の方がボクにとっては優先順位が高かったし」

「ってことは今まで付き合ってたの、ボクたちって？ 結構、色々なことしていたのに」

「うーん、身体関係はギブアンドテイクだったし、軽く同居人くらいかな？」

「じゃあ……今はボクのことどう思ってるの？」

「今かい？ 君は、ボクにとって大切な人だよ。シスイ君みたいに、君と一緒に居たいの」

ノールは杏里が座れるように横になった状態から座り直して、ベンチにスペースを作る。

「座る？」

杏里は笑顔で頷き、ベンチに座る。

「あのさ、ボクが起きた時に君は抱き付いたじゃん。その時に何考えてた？」

「嬉しいとか好きだとか……かな？」

「見た目の割りには男みたいなこと考えてるんだね、君には幻滅したよ」

「見た目は関係ないよ？」

「ねえ……ボクも抱き付いていいかい？」

「勿論」と杏里は答えようとした。

しかし、それを言う前にノールは杏里を抱き締めていた。

「恐かった……本当に死にたいと思っていただけ、実際は誰かに止めてほしかったんだと思うの。こんなボクにも生きている価値があるんだって。最低だよ、シスイ君を殺したのに。シスイ君のために自分も死にたいとか言ってたのに」

「そんなことないよ」

ノールが抱き付いたことに少し驚いていた杏里もノールの腰に手を回す。

「どんな時だつて生きたいって思うことの方が普通だよ。人だよ、ボクたちは。感情つて物があるんだから生きていたって思うよ」

「そう……かな？ 杏里くん、君はボクのことを凄く心配してくれてたんだね。さっきの涙、本当に……本当に嬉しかったよ。何だかボクらしくないけど君のことが、ボクも大好きなのかもしれないね……」

その頃、ミールとジャスティンは部屋で会話をしていた。

「ねえ、ミール。ノールさん、目が覚めたみたいだね」

「あつ……うん」

「ついさつき様子を見に行つたけど、いいなあ、杏里さんとノールさん。中庭で恋人同士らしく抱き締め合っていたよ。杏里さんはノールさんが目覚めたことが凄く嬉しかったんだね」

「うん」

ジャスティンは中庭でノールと杏里が抱き合っているのを見ただけ。

彼らがどんな悩みを感じ、今まで生きるか死ぬかで葛藤していたのかを知らない。

「僕はミールのこと好きだよ」

以前同様、素直な気持ちをストレートに伝える。

「……………」

無言になり、ミールは何も答えない。

それから数十秒間程、沈黙が続いた。

「……………僕、ちょっと外に行ってくるね」

以前のように、ミールは部屋から逃げ出そうとする。

「もう嫌だよ！ どうして、ミールは逃げるの！ 僕はただ君と付き合いたいただけなのに！」

ジャスティンは声を出して泣き出す。

「僕をもう避けないでよ、嫌いにならないでよ、前みたいに会話がしたいよ……」

「ジャスティン君……………」

部屋から逃げ出そうとしていたミールだったが、ジャスティンに近づく。

「じゅめん、僕が悪かったよ」

「……………」

ジャスティンは泣きじゃくったまま、何も答えない。

一緒に生活しているのに殆ど会話らしいこともせず、自らを避けているミールに耐えられなくなっていた。

「じゅめん」

ミールはジャスティンをそっと、恐る恐る抱き締める。

「僕は女の子と話すのが苦手です。君が女の子と知っちゃったから、どうして良いのか本当に分からなくて……」

「……………ミール、教えてよ。僕を好きなの、嫌いなの？ もう分からないままにいるなんて、僕は嫌だよ」

「僕は……………好きだよ」

「ホントに？ だとしたら、嬉しいよ。あははっ、泣いちゃったりして、僕はバカだね。もっと早く聞いていれば良かったよ、そうすればこんなに辛くなかったのに……」

「じゅめんね」

「謝らなくてもいいよ、好きだって分かったんだから」

ジャスティンもミールを抱き寄せる。

この時、ジャスティンは眼を閉じた。

流石にミールでもこのムードではどうすれば良いのか分かんと思ひ、ジャスティンはじっとしている。

「どうしたの？ 眠いの？」

「君って奴は……そうだよ、眠いんだよ！」

無理やりミールを引っ張って、ジャスティンはミールをベットまで連れていき押し倒す。

「ちよつ、酷いよ。怒らないでよ、ジャスティン君」

「はあ？ 関係ないね、そんなの。君が彼氏になるのだとしたら、ノールさんたちみたいな普通の恋愛は出来ないんだってことが分かったよ。もう僕は自分を抑えないからね。じゃ、今からするよ」

「な、なにを？」

「分かってるくせに……いや、ミールじゃ分からないか。単純に言えば君を今から“犯す”ってことだよ」

ジャスティンは着衣を急ぐように脱ぎだす。

「わあっ……いきなり脱がないでよ」

驚いた様子でミールは顔を隠す。

「どうして、ミールは女の子の身体に興味が無いの？ 普通、男なら肌を見たいはずでしょ！」

着ていた着衣を脱ぎ終えたジャスティンはベッドに倒されたままのミールに伸び掛かる。

「逃がさないよ、ミール。今日だけは僕の思い通りにさせて」

「あの、ジャスティン君」

行為後、ベッドに裸のまま横たわり、宙を見つめながら、ミールは問い掛ける。

流石のミールでもこのことには色々と思うことがあり、ジャスティンに思いを伝えたかった。

「僕たち、もう今までの関係じゃいられない気がするんだ。ジャスティン君はそれでもいいかい？」

「僕はもうそれでいいと思ってる」

一方のジャスティンは既に着衣を身に付け、ミールが横たわっているベッドに腰掛けている。

先に浴室に入り、浴室から出た後に着衣を身に付けたらしい。

「僕はジャスティン君と友達としてじゃなくて、男女関係として付き合っていきたいの。僕は本気だよ」

「前々から僕がそのつもりだったけど？ やっぱり、僕の身体がそんなに良かったのかい？」

「なんか吹っ切れた気がする」

「って、ミールはよく分からないところでハッキリしているんだね」

「ところで僕にしてくれたことだけど…」

「あー、あれかい？ 兄貴から盗んだゲームやDVDから仕方とかの知識を得たんだよ。気持ち良かったでしょ？」

「凄く気持ち良かったよ。でも、僕はこんな簡単に身体を投げ出しちゃいけないと思うんだ。ジャスティン君、身体を大切にしないとダメだよ？」

「君が恋愛に関してまともだったら、こんなことは絶対しなかったよ。普通、初めての女の子が初めての男の子を襲うなんて、おかしい。それくらい、僕も分かるよ」

メイド？

翌日、クロノから命を受けた兵士がノール、ミールたち、それぞれの部屋を訪ねてきた。

用件は軍隊整備をするのでノールたちもスロートの軍隊へ参加して貰いたいとのこと。

それで、ノールたちはクロノに会うため城の図書館へと向かう。

「どうして、図書館に行くの？」

図書館へ向かうため廊下を歩いていると、疑問に思ったジャスティンはノールに聞いた。

「それはね、クロノに家が無いからだよ。ホームレスなの」

「あつ、そうなんだ」

平然とした様子でジャスティンは頷く。

「違うよ、クロノさんは図書館で勉強しているんだよ。だからいつも図書館にいるんだよ」

簡単にジャスティンが納得したのを見た杏里は驚き、そのことを否定する。

「煩いぞ。ボクが説明したんだから黙れよ！」

何故かノールは逆上し、杏里の首を締め始めた。

「や、やめてよ！ 息が出来ない……あれ？」

不思議そうに杏里はノールの手を掴み、簡単に首から手を離させる。

「力を入れてなかったんだね。いきなりだったから、ボクびっくりしちゃったよ」

「なんで？ ボクは凄く力を入れたはずだよ」

「くそつ、クロノめ！ 私を一体誰だと思っているのだ！」

突然、廊下に響く怒声。

図書館へ辿る通路を喚きながらノールたちの方へと歩いてくる三人の人物がいた。

「私はスロート建国以前から、この国家を守っている由緒正しき貴族の長テイルだぞ！ 何故私がこの国家の大將では無いのだ！」

その自らをテイルと呼ぶ、身なりが煌びやかな服装をした男性は自らを威張り散らしている。

「ええ、テイル様の仰る通りで御座います。クロノとかいうあの男は噂によると我々のように貴族の出身では無いとのこと。恐らく、我々が高名な貴族の家系であることを妬み、このような極めて当てにならない人選をしたのでしょう」

「そうだな、時雨。やはり平民ごときに人を見る目などあるはずも

ない」

「そうですね、高名な我々こそ出来損ないの平民を率い導くべき者
いずれは確実にスロートの王となるテイル様に私たちはいつまでも
ついていきます」

「そうか……スロートの王か。確かにそうだな、ミラディンよ。ク
ロノは病を抱えている。クロノが死ねば実質上、私が次の王となる
のだ。私が王になった暁には貴公らにも領地やそれ相応の地位を与
えてやる」

「どうやら、テイルのご機嫌取りをしている二人はテイルの配下の時
雨とミラディンのようだ。」

「あの風景を見て、皆はどう思う？」

何気なくノールは他の三人に訊ねる。

「見てると最高にムカつく。あんな風に民衆のことが……他人のこ
とが何も分かっていないクズな奴が国の上層部にいるから国が乱れ
るんだよ。しかも貴族以外は出来損ないの平民だってさ。アンタ等
のいう平民がそこにいるからこそアンタ等が日々生活が出来るって
ことを脳髓に知らしめてやりたいね。それとも、スロートのために
今ここで殺す？ 僕は三人くらいなら楽に殺せるよ」

ジャスティンはイライラしているのか率直に答えた。

すると、三人のうちの一人、時雨がノールたちに近付いてきた。

「おい、その貴様等。さっさと道を開ける」

こちら側に向かってきた時雨が、明らかに命令口調で上からものを言う。

ミール、ジャステインらは即座に戦闘態勢へと移ったがノールは彼らの前に手を差し出し、宥める。

「あつ、すみません」

そしてノールが謝り、ノールたちは道を開けた。

「そうそう、話だけでも分かるならばそれで良い」

時雨は堂々とノールたちを見下げる。

そのまま、テイルたちが通り過ぎようとした時、テイルはノールと杏里に気付く。

「なんと美しい女性だ……そうだ！ お前たち、私の下でメイドとして働かないか？ いやそれどころか、お前たちのように美しい女性ならば、私の妻にしてやっても構わないぞ」

品定めでもするように、テイルは二人の顔を覗き込む。

「えっ、嫌です。すみません」

軽くノールは頭を下げた。

「あつ、ボクも性別が同じなのでお嫁さんにはなれません」

「なんだと、テイル様が貴様等のような平民にお声を掛けていらっしやるのに断るとは！　そこに直れ！」

ミラデインと時雨は腰に付けていた鞘から、剣を抜こうとする。

「貴公たち、少し落ち着け」

テイルは他の二人を宥める。

「し、しかし……テイル様」

「構わん構わん。いかに平民であろうと、いずれ私の偉大さに気付き、自ら申し出てくるのだからな。ともかく、物騒だから剣を仕舞いたまえ」

二人が構えを解くのを確認すると、テイルは二人を率いて廊下を歩いていった。

「うざかったね」

ぼそっと、ノールは囁く。

「ボク、初めてだよ。男の人に結婚してって頼まれたの。なんか嬉しいな」

「勘違いだよ、君を女だと思ったから結婚してって頼んだの。妻にって言ってたし、聞こえなかったの？　男に男が好きだなんて言ったら、隣で聞いているこっちは吐き気がして堪らないよ。はい、この話はここでおしまい」

「ああ、そうなの……」

毎回のことが女性と勘違いされたため、杏里はテンションが下がった。

そして、もう一人かなりガツカリしている人物がいた。

「ミール……あのオッサン、僕のことを全く見なかったね」

「そうだね。何でだろう？」

「僕が男装しているからかな……ううん、違うよね。テリーさんは男装していても女性だと気付けるし……やっぱり胸が無いから？」

「かもね」

ミールの一言の後、ジャスティンはミールの頬を殴る。

「気にしてるんだから否定してよ！」

「……ジャスティン君は小さい胸のこと気にしてたの？」

困った顔で殴られた頬を押さえながらミールは聞く。

「そうだよ。あと、胸が小さいとかストレートに言うなよ！ ノー
ルさんは胸がD〜Eくらいだけど、僕はA以下だし……ミールだっ
て小さいと嫌でしょ？」

「そんなことないよ。胸ってさ、女性の身体の中で一番個性が出やす
いんだって。ジャスティン君のも個性なんだからそれで良いんだ

「よ」

「ミールがそういうなら、そんな気にすることじゃないかもね。ありがと、なんか僕、自分の身体に少しだけ自信が付いたよ。でも、女性が苦手なのに何でそんなこと知ってるの？」

ジャスティンはミールに頬笑み掛ける。

「何話してるの？」

「何でもないよ、姉さん。早く図書館に行こう」

数分後、ノールたちは図書館へと着いた。

そこまで辿り着く間に、テイルたちのように今までに見たことのない人物が多数見受けられた。

スロートが出来て二年目となり、少しずつ軍隊が完成されようとしていた。

「クロノ、何か用があるんだって聞いたけど？」

ノールは図書館の普段通りの席に座っているクロノに近寄り、声を掛ける。

「ああ、出来ればスロートの軍隊に入ってほしいんだよね」

「軍隊って？」

「モンスターハンター辞めたらしいじゃないか。今ヒマだろ？」

「ヒマじゃないよ。第一、ボクは社会の歯車になんかなりたくない。我慢とか嫌いだし、好きに生きたい。働いたら負けかなと思ってる。部屋でのびのびとゆったりしてます」

「働けよ……軍隊に入らないなら城から追い出すけど」

「軍隊には入るけど？ あー、クロノってボクたちに城から出ていってもらいたいんだ。ボクたちの誠意が全く感じないんだね、最低」

「今、イラツとした気がする」

「軍隊に入って何すればいいの？」

「お前等が強いのは以前の戦いでもう分かっている。相應の地位として大將、少将の役職を任せようと思うんだけど。ついでに、オレは帝であり元帥な」

「クロノが元帥？ はっ、辞めちまえ」

「何か逐一感に触ること言うようになったな。元帥にはなりたくなかったよ、オレは。第一、弱いから。でも周りがオレに元帥になってほしいと言ってくれたからなれた訳だ」

「あっそう。なら辞めちまえ」

「てか、人の話を聞いてた？　ひとまず、どの辺の階級にするかをこれから決めるからレベル言ってるってくない？」

クロノは人物の名前が書かれた紙を、机に山のように積まれた書類の中から取り出す。

「レベルって……」

突然、ノールの表情は曇る。

「どうした？」

「ボク……レベルは10しかないよ」

「どうして？」

「クロノは結構前にモンスターハンター辞めてたから知らないのは当然だけど、ボクはモンスターハンターを辞めた時に経験値をアーティへ全部渡しちゃったの」

「そうなんだ、だったらノールはいらないや。お前は弱いから帰っていいよ」

「いらないの？」

ポツリと小さく、ノールは答える。

その沈んだ悲壮な声をクロノはノールから初めて聞いた。

いつも明るいノールの異変を即座にクロノも悟った。

「どうした、顔色が悪いぞ?」

「クロノはボクがいらないの?」

「なんだよ、冗談だよ、冗談。なんかノールらしくないぞ」

「そうなんだ……冗談ね。騙されちゃったね」

明らかに無理に作った笑顔でノールは笑った。

「ノール、少し休んだ方がいい。何か心配だ」

「大丈夫だよ、気のせいだから。それより話を続けて」

「そうか? でも、無理はするなよ? じゃあ、話を続けるけど一人ずつ自分のレベルを言っつてくれないか? それによって階級を決めるから。ついでに変化した後のレベルも教えてくれ」

「変化って?」

「杏里、お前みたいに天使化したりすることだ」

「ふーん」

杏里は意味が分かったのか頷く。

「じゃあ、ミールから」

「ボクは今7万5千、天使化すればプラス2万だよ。魔族化して魔

天使化すれば5千追加されるよ。魔天使化は出来るだけしたくないんだけどね」

「ミール、強くない？　なんでそんなに強いのに僕には簡単に倒されるの？」

ミールの傍にいるジャスティンが訊ねる。

「僕が天使化してもミールの魔天使化した状態には2万近く足りないよ」

「ジャスティン君って天使だったの？」

「そうだけど話してなかったっけ？」

「へえー、知らなかったよ」

イチャイチャしながら二人が和やかに会話している。

そんなイチャイチャしている二人を尻目に、クロノは杏里に訊ねる。

「じゃあ、杏里は？」

「ボクは今9万、天使のハイエターナル化も出来るから12万だよ」

「杏里ってレベル凄く高いね」

クロノは驚きながら杏里を見上げた。

「そうだね。でも、ボクがそのレベルでいられるのはトンファーを

持っている時だけなんだ」

「普段は？」

「100くらい」

「それって弱くないか？」

何となく納得したのか、クロノは書類に四人の設定を分けた。

「という訳で、お前等の階級はこれだ。ミールは中将、ジャスティンは少将、杏里とノールはメイドな」

「あれ、ボクは兵士じゃないんだ？」

「ああ、そうだよ。あと、メイドっていうのは所謂女性のお手伝いさんのことだよ」

「メイドか……ボクはこの城に連れてこられる前は使用人として働いてたから久しぶりだね。てことはさ、エプロンとか付けるの？」

「別にノールならスロートの救世主だし普段着でも構わないけど、城にいるメイドはメイドとしての格好をしてるよ」

「なら、ボクも服装変えないとね」

「そゆこと、それじゃあ今日から働いてもらうからメイドたちの仕度部屋に向かってくれ」

「分かった。じゃあ、行こー！」

満面の笑顔でノールは杏里の手を握り、一緒に行こうとする。

しかし、杏里は黙ってふてくされ、その場を全く動こうとしない。

「杏里、どうしたの？」

「おかしいでしょ、ボクは男だよ！ どうして、ボクがメイドさんをやらなきゃならないの？ クロノさんもノールもそのことをスルーしてるし！」

「なんか変だと思ったら、そんなことか。杏里、いつのまにかノールのことを呼び捨てで呼べるようになったんだな」

「恋人だからね。お互いを呼び捨てで呼ぶようにしたの」

嬉しいのかノールはクスクス笑う。

「成る程ね、だからそんなに仲が良いのか。さあ、そろそろ仕事に向かってくれ」

「ちょっと、いい加減にしてよ！ ボク怒るからね！」

「なに、なんか不満でもあんの？」

相当面倒なのか、クロノはイラツとした口調。

「それは勿論、ボクが男だからに決まってるじゃん」

「だったら、執事やるか？と言いたいけど杏里じゃ無理だ。スロー

トをステイから救った時からスロートの城や街にいる連中は見た目のせいで杏里のことを女性だと思っている」

「う、うそだ！ だって、カイトさんやクロノさんたちはボクが男だと分かってるじゃない！」

「確かにオレみたいに知っている奴もいるけど、ほんの一握り程度だろ？ 杏里は胸が無いからボーイッシュな服装をしている美少女だと思われているんだからな」

「ねえ……クロノさん。それってどうにかならない？ 皆がボクを男だって見てほしいんだよ……」

「残念だけど、無理だ。杏里自身が自らを男性だと言い回しても見た目のせいで誰も信用しないな。その辺は来世に期待しろ。それより、杏里はどうして髭が生えないんだ？ 喉仏も男のくせに無いじゃないか」

「あはは、そういうことみたいだね。よかったね、杏里。じゃ、着替えに行こうか」

がつくりと肩を落とす杏里の手を引き、ノールは図書館から出ていった。

「ミールとジャスティンの二人はさっき言った通り将校として働いてもらおう」

「ところで、将校って何するの？」

「軍の統率、戦争での兵士の指揮など作戦展開と他国との会合参加

とか色々。重要な会議にも出てもらわなくてはならないし、子供のお前等には案外大変そうかもな」

「僕らが子供だった？ そんなことないよ。年令くらいで判断するようだったら、クロノさんもダメだね」

「どうかな？ ジャスティンちゃんみたいなお子供は？ 年令だけじゃないっていうことを行動で示してほしいものだね」

「仕事をすればいいんだろ！ 僕が口だけじゃないってことを示してやるよ！」

「よし、なら二人にはこの大陸にあるステイの他の四国、これらの国家との同盟協議に参加してもらう。もっと早く同盟協議を行うべきだったんだけど、まともに動ける将校の人数が少なくて今まで行えなかったんだよね」

わざとらしく、クロノはにやける。

「同盟協議に行けばいいんだね。早く行こうよ、クロノさん」

「いや、オレは行かないけど？」

「どうして？」

「職務があり過ぎて寝る暇すらないんだ。今日もたった三時間しか寝てないオレを過労で殺す気か？」

「でも、同盟協議には帝であるクロノさんだって参加しないと……」

「だからこそ二人をスロートの中將、少將にしたんだろ。分かったなら兵士を数人連れて、同盟協議を行いにさっさと四国を回ってくれ」

その結果、ミールとジャステインは城の兵士を引き連れ、他国との同盟を行うために城を離れた。

現在、ノールと杏里は使用人の休憩室で着替えを行っている。

使用人の休憩室と言っても着替えや仮眠などを取れるベットなどのスペースもあり、使用人に対する気遣いも見られた。

「あの……ボクはどうしてもこれ着ないといけないの？」

使用人用のエプロンとワンピースなどを持ちながら、杏里はノールに訊ねる。

杏里の持つエプロンは前あて部分の長いスカート丈からなる、オーソドックスなタイプ。

ワンピースもオーソドックスな黒に近い色をした物。

そしてそれを既にノールは着用していた。

「いや、バレないよ。杏里がそうゆう人だってことは隠せばバレないよ」

「ちよつ、ノール。君の言い方だと、なんかボクが女装したがってみたいに聞こえるんだけど?」

「どうしたの? 勇気が出ないの?」

「勇気とかそうゆう問題じゃないよ」

「いいかい、杏里くん。君は女性なんだよ、女性。もう本当は分かっているでしょう?」

急激に低下してしまった僅かに残っている魔力で、ノールは杏里へ催眠を掛け始める。

「ボクが……女性?」

力が抜けたのか、ふらふらつと杏里は床に座り込む。

「あれ? もう、この子は催眠にかかったのかな? 元々、心に疑念を感じていることこそが催眠にかかり易いんだけど、その話に合わせる杏里くんは普段自分が男であることに疑念を持っているってことなのかな?」

そのことがノールの頭に浮かんだが、一応催眠を続ける。

「いいかい、杏里くん。君は確実に女性なの。疑問に思うなら、そのメイドとしての服装に着替えて鏡の前に立ってみなさい。そこに映っている人物が本来、君としての姿なのだから」

ノールの言葉に反応し、杏里は徐ろに立ち上がると着ている服を脱

ぎ捨て、とても嫌がっていたはずなのにペティコートを履き、続いてワンピース、エプロンを着用し、最後にサーヴィスキャップ（何故か、彼のだけはフリル付きカチューシャ）を被り、メイドとしての服装を整えたのち、鏡の前に立つ。

「どう、杏里くん。鏡に写っているのは男性かい？ 女性かい？」

再び杏里は、ノールの言葉に反応し、じっと鏡に写っている自らを眺める。

そして、杏里は一言だけ囁く。

「どうみても……ボクは男だよ」

「チツ、催眠掛かなかったか。こうなったら最大限に能力を使って催眠を掛けてやる！」

わざとはつきり聞こえるように舌打ちしたノールは再び身体に魔力を高めた。

今度は全力で催眠を掛けようとしている様子。

「ボクもう着替えたから催眠なんて掛けなくなっちゃいいじゃん！ それに君はレベルが10なんだから君の魔法じゃ、ボクには効かないよー！」

必死で魔力を扱い、催眠を掛けようとするノールに杏里は叫んだ。

「煩い、やってみなきゃ分からないでしょ！ ん……何だか、背中に違和感を感じるような？」

ノールの背中からは、いつの間にか白く輝く天使の翼が出現していた。

「能力がなくなったから天使化も出来ないと思ってたんだけど？」

微妙にそのことを考えていたノールはあることに気付く。

「ボクが天使化したってことはさ、ボクのレベルって今2万と10だね。レベルが1000のトンファーを持ってない誰かさんなら簡単に催眠を掛けられるね」

「そ、そんなのはボクも天使化すれば防げるよ！」

「どうかな？ 10と1000じゃ大差あるけど、2万+10と2万+1000の能力にはそんな大差ないよ」

その間ずっとノールは催眠を掛け続け、杏里の心を侵触していった。結局杏里の天使化は間に合わず、というよりしなかったのかもしれないが、ノールの催眠をまともに受けてしまった。

「よしっ！ これで自分がどんな存在が分かったら！ もう一回鏡を見て、そこに写っている人物は何なのか言ってみな！」

言っている自分でもどうしてこの展開になったのか、ノールにはよく分からなかった。

「……うん、分かった」

目に光がなくなった杏里は再び鏡の前に立つ。

ぼんやりしたままで、ノール自身心配になるような状態だった。

「鏡に映っているのは誰？ 男の子かい？ 女の子かい？」

「鏡に写っているのは……」

そこまで話して、杏里は黙ってしまった。

「杏里くん、どうしたの？」

「……」

「聞いてる？」

「……」

「なんか話してよ。飽きてきたな」

「優しそうな女の子……」

次の瞬間、ノールは不思議と寒気を感じたような気がした。

水人であるノールは完全に体温が一定のために寒気など感じないにもかかわらずだった。

恐らく、杏里の言葉に限りなくドン引きしていた。ただ、それだけだった。

「そ、そうなんだ。着替えた訳だし、メイドの仕事をしに行くよ」

「ノール、仕事って何するの？」

杏里は鏡の前で女性らしく服装を整える。

それを見たノールは一瞬殺気を覚えた。

「んー、そういえば、ここで何をするのかをクロノから聞いてなかったね。他のメイドの人が来たら聞いてみようか」

「ノール」

「なんだい？ まだなんか用なの？」

「スカートって変な感じだね。初めて履いたけど、なんか不思議だよ」

「そだね、ボクも普段は水人衣装にパンツ（ボトムス）かレギンス（スパッツ）履いてるから、なかなかスカートなんて履かないよ。下着なんてボクは見られたくないからね」

「ノールでも恥ずかしいの？」

「恥ずかしいって意味がまず分からないし。ボク以外も絶対そうに決まっているけど、下着を見られて嫌悪を感じない人なんていないよ。変態な人なら話は別だけどね」

「ふーん、お茶飲むかい？」

「いいね、君が用意して。君もお茶汲みくらい出来ないと、メイドとしての仕事は何も出来ないからね」

二人が部屋でお茶でもしながらゆっくりし始めると、とても息を切らせ慌てた様子でメイドが部屋に入ってきた。

理由は当然、スロートを救った救世主であるノールと同じくスロートを救った隊長格の一人だった杏里が何故か突然メイドとして働くことになったからであった。

特に何も考えないでクロノは二人を勝手にメイドとして決めだが、メイドたちにとっては何故そうなったか全く理由自体も分からなかった。

それは自らたちよりも身分の高そうな二人にメイドという仕事自体が無礼だと考えたからだった。

「ノール様！ 杏里さん！」

「あっ、ゴメンね。お茶飲んでた」

サボっていたことがバレてしまったと思い、ノールはにやけて誤魔化す。

しかし、メイドの反応はそこにいかなかった。

「メイドは私たち、下々（しもじも）のような者が行う仕事です！ 救世主様や隊長様にさせる訳にはいけません！」

部屋に入ってきたメイドはノールたちのメイドとして服装を見た瞬

間、非常に驚いていた。

そして、メイドとしての服装をむりやりノールから慌てながら脱がそうとした。

「あ、あの……メイドさん。そうゆう趣味、私は無いんですけど……」

「そうだよ、ノールに変なことしたら恋人のボクが許さないよ！あつ……今、ノールって自分のこと私って言ったよね？」

その言葉を聞いてメイドはたじろぐ。

「お二人は……こ、恋人なのですか？」

「そうだよ！ ノールはボクの恋人……あれ？ ボクは女の子なのに何を言ってる……」

「てめえは男だろうが！」

困惑気味の表情を浮かべていた杏里の顔をノールは全力で殴る。

そのまま杏里は倒れて気を失った。

「杏里くん、君は男の子でしょう？ 意味分からないことをバカみたいに言ってるんじゃないよ！」

ノールは催眠を掛けていたこと自体をすっかり忘れていた。

そしてその光景を怯えた様子でメイドが見ていることに気付く。

「どうしたの？ 恐かった？」

「戦争では、このように戦っていたのですか？」

震えた手付きで床に倒れている杏里の手当てをメイドは始める。

「あつ、違うよ。これは遊びだよ、遊び。杏里くんは女の子じゃないのに女の子だ！みたいなこと言うから正気を取り戻させるために殴っただけだよ」

「そうなんですか？ 私は杏里さんが女性であると聞いていますが……」

メイドは明らかに不信な眼差しでノールを見つめる。

「とにかく杏里くんは男の子だから、そうゆう眼で見ないでほしいな」

「では何故、杏里さんは私たちのメイドの服装をしていらつしやるのですか？ 男性でしたら執事の服装を着用するはずですが……」

「あー、確かに。でも、そうゆう趣味が杏里くんにはあるの。だから他の人には黙っててほしいな」

「分かりました、救世主様の頼みであれば……」

微妙な顔をしたまま、メイドは納得してくれた。

「でさ、ボクたちもメイドとして働きたいんだけどいいよね？ クロノが決めたことだしさ」

そのため、仕方なくメイドはノールと杏里にメイドとして働いてもらうことを認めた。

大敗

ノールと杏里の二人がスロート城のメイドとして働くようになってから、既に半年以上が経過していた。

その間、杏里の当初の考えとは異なり杏里が男性であると誰一人、一度たりとも気付かれることは無かった。

そんなある日、メイドとしての日常的な仕事が終わりに、ノールと杏里は自室でゆっくりとしていた。

白いテーブルクロスが掛かったテーブルの椅子に腰掛け、白いティークップで紅茶を啜りながら、ある会話を杏里は持ち掛ける。

「ボク、ノールちゃんに聞きたいことがあるんだけど」

「なに？」

「ボクたちがさ、出会う切っ掛けが今と違かったらどうなったのかなって思ってたね」

「どうゆうことだい？」

「ボクたちって、最初は救世主様と一人の傭兵って関係だったじゃん。それから、ボクが告白してノールちゃんはあっさり引き受けて

…」

「そうだね、懐かしいよ。でもそれがどうしたの？」

「ボクたちの出会いが違かったら、どうなったのかなって思ってた。ノールちゃんなら、ボクとどういつ風に出会いたかった？」

「知らね」

「そう……」

「杏里くんはどうなの？」

まるで関心がなかったノールだが、紅茶を啜りながら一応聞く。

「えへへ、ボクはね、こうゆう出会いがしたかったって思うの。ボクがスロートの格好良い傭兵でノールちゃんはステイに捕らえられたお姫様。ボクがステイに行つて、ノールちゃんを助けるとボクに一目惚れするの。それでハッピーエンドになるって……」

「ぐうー」

「ノールちゃん……起きてよ」

杏里が話し始めた辺りから既にうつ伏せになっていたノールを杏里は揺すつて起こす。

「何すんだよ！ 起こすな！」

「だって、ノールちゃん、ボクの話全然聞いてくれないんだもん」

「長くて聞いてられないね。第一、ボクが一目惚れつてのところの意味分かんないし？ それに君は何歳だよ、子供みたいなこと言っちゃってさ。十九歳にもなつて、変なこと言わないでよ。ファンタ

ジーじゃあるまいしさ」

「ええっ？ 嫌なの？」

「うん、嫌なの。現実をねじ曲げて何が楽しいんだか。女の子に告白って、そんな安っぽいシチュエーションで良いと思ってるの？」

「うん……ゴメンね。ノールちゃんはボクとどうゆう出会いだったら良かったと思う？」

「知らね。と言いたいけど、ボクにもあるよ」

「なに、凄く気になる！」

「うぜえな、折角だから話してやるよ……ボクが何処にでもいる普通の水人でね、杏里くんは普通の人間。二人とも恋愛ベタで杏里くんが告白してるのにボクはずっとその意味が分からなかったっていう感じかな？」

「それって、今までのボクたちのことじゃん」

「ああ、そっだよ。悪いか！」

「う、うめんなさい……」

杏里は、ノールに頭を下げる。

「ん、謝るなら仕方ないね」

「じゃあ、許してくれるの？」

「許す訳ねえだろ、バカ！」

「えっ……そんな……」

予想外の一言に杏里は少し俯いた。

「そういえばさ、杏里くんってどうしてパーラーメイドをしてるの」

「えっ、あ、それは……」

「パーラーメイドってさ、接客担当のメイドじゃん。普通はさ、ボクがやるはずじゃん。おかしくない？」

「ボクもそう思っけど」

「なら、交代してよ」

「でも、ボクはクロノさんに接客の担当をしるって言われたから」

「君が男性だと分かってるクロノが、どうして君を接客担当にしたの？」

「言っ方がいいのかな……」

「どうしたの？」

「実はね、ボクはノールちゃんより見た目が可愛いんだって。ボクは格好良いって言ってほしかったのに」

「はっ？」

「そういう訳でボク自身残念だけど、ボクはパーラーメイドの方が良いみたい」

「いや、そんなこと聞いてないよ。今、ボクは君より可愛くないって聞こえたけど何で？」

かなり焦った様子でノールは聞く。

「まさかだよ、ボクが男よりも可愛くないって言われるなんて……立ち直れないよ……」

「と、ところでノールちゃんは何してるの？」

ノールの相当な落ち込み具合を見て、杏里は即座に話題を変える。

「……ボクかい？ ボクはオールワークスっていう家事全般をこなすメイドだよ。掃除、洗濯、ベッドメイキングに料理までやってるよ」

「うっわ、結構仕事があるんだね」

「でしょー、でも救世主としてこの城に連れてこられる前も同じことしてたから、そんなに忙しくないよ。そんなことより、杏里くんは本当に良いよ。接客なんてただ笑顔でいればいいだけだし、することって言ったらクロノ辺りへ会いに来たお偉いさんへのお茶汲みくらいでしょ。楽すぎて羨ましいよ」

「でもボクは男性だといつバレるか毎日心配で心配で……」

「バレねえよ。だからこそ、毎日接客担当のパーラーメイド出来るんだろぅが？ そんなことより顔、声、見た目、仕草が女っぽいのに自らを男性だと過信する方がボクは心配だよ。それに女性のボクを好きだなんて性同一性障害なんじゃないの？」

吐き捨てるように言うと、ノールは紅茶を啜る。

「過信って……ボクが男性だってことは本当のことだよ？」

「煩い、眼鏡割るぞ。今、ボクは君なんかより可愛くないって言われてへこんでんの」

テーブルに頬杖を付きながら不満げな顔で杏里から目を逸らしていると、ノールのケータイが鳴る。

「あっ、ちょっと待っててね、眼鏡。電話に出るから」

「眼鏡って……ノールちゃん、相当怒ってるよね？」

杏里を軽く無視すると、ノールは電話に出る。

ノールに電話を掛けてきた人物は、モンスターハンターに所属するテリーからだった。

ノールはテリーと久しぶりに会話することが出来て嬉しかった。

しかしその際、テリーが咽び泣く声でアーティの死をノールに伝え、生き返らせてほしいと頼んだ。

ノールにはテリーの願いがどれ程強いものかを咽び泣く声で悟っていたが反射的にケータイの電源を切ってしまう。

それはアーティとの関わり自体を持つことを身体が勝手に拒絶したためだった。

同時刻、以前水人ノールの魔法によって痛い目にあっていた魔王ルミナスは邪神ミトスがアーティと相討ちをしたことを魔界にある自らの屋敷で知り、魔界の支配者である邪神に自らがなろうと画策していた。

まさにその時、霸王であるドレッドノートがルインに殺されているとも知っていた。

魔王ルミナスは今こそが邪神になる絶好のチャンスであると確信し、邪魔なミトスの配下を殺戮することで次期邪神になることを決める。だが、まずはその手始めに自らを倒し、自らの魔王としての地位を落とした水人ノールを消すことから始めることにした。

「ねえ、ボクはアーティを生き返らせた方がいいのかな？」

二つ折り式のケータイを閉じるとノールはメイドの服装のままゆっくりしている杏里に声を掛ける。

「ボクは生き返らせた方がいいと思うけど、ノールちゃんは嫌なの？」

「最高に嫌だね。なんだか身体が絶対に会って拒んでいるような……理由は分からないけど」

「アーティさんを生き返らせないの？」

「それを悩んでるんだよ。テリーはアーティを生き返らせてほしいって泣いてたんだよ。ボクは生き返らせたくないけど、テリーのために生き返らせた方がいいのかなって」

「優しいね、ノールちゃん。それじゃあ、テリーさんのところに行こうか」

「……………」

「どうしたの？」

「電話切ったから何処にいるのか分からないの」

ノールは悲しそうな表情を見せる。

「そうゆうことなら大丈夫だよ。リダイヤル機能があるから、またそこに連絡すればいいよ。それにテリーさんのこと、アドレス帳にも書いてあるでしょ？」

「言われてみれば」

確かにとノールは思い、連絡を取るうとする。

その時、ベット付近から強力な魔力を感じた。

ノールと杏里がその付近を確認すると、魔王ルミナスが現われる。

「久しぶり、元気にしてた？」

「ルミナスさん、どうしたの？」

杏里は笑顔で答える。

「あれ？ 君って、杏里だよな？ どうしてそんな格好しているの？」

「あつ、これ？ これはね、この城でメイドとして働いているから着てるの。ボクは執事として働きたかつただけだね」

「ちよつと！ 全然違うでしょ！」

怒っているのか、ノールは声を高くする。

「杏里くんがどうしてもメイドの服装を着てみたいとか、女装を試みたいとかボクにせがむから仕方なくメイドとして働いているんじゃないか！」

「そうだったの。他人の趣味にとやかく言うつもりはないけど、もしかして私のような境遇……ニューハーフなの？」

「違うよ！勝手に変なこと言わないでよ！」

「いいよ、いいよ。ボクが秘密にしておいてあげるから」

「だから違うって言ってるじゃない！」

何故か半泣きの状態で必死に杏里は怒る。

「でさ、そろそろ私がここへ現れた理由とか聞いてほしいのだけど」

「興味は欠片ほどもないけど？」

「無いの？それなら別に構わないよ。どうせ、君は死ぬことになるのだからね」

速攻の早さで、ルミナスは空間転移を唱える。

すると、一瞬でノールたちは何も無い草原のような場所に現われた。

「ルミナス。今、殺すって言ったけど誰を？」

瞬時に風景が変わったため、ノールと杏里は周囲を見渡す。

「当然君だよ、ノール。今は魔族として同族だけど、ただ単に貴方を殺したいの。地味な戦いはつまらないから全力で来てほしいの」

「……ちよつと、それなんとかならない？今のボクは以前の強さが全然無いよ。たったのレベル10しかないの」

「どうして、レベル10なの？　ともかく私は最初から全力で行くから」

ルミナスは魔法剣を両手に出現させる。

しかし、魔法剣を出現させたルミナスからは一切殺気を感じない。

ただ、立っている。または力を抜いている感じで立ち尽くしている。

ノールはその様子をただ見ていたが、一瞬で目の前にルミナスが迫り、ノールの右肩に剣を振り下ろした。

その一撃は、一気に腕を斬り落とす程の威力と早さだったが、右肩を三センチ程斬ったところで剣を止める。

右肩から滴り落ちる流血を眺めながら、ルミナスはあることを聞く。

「何故避けないの？」

それは、ルミナスにとって疑問だった。

「恐くて……身体が全然動かなくなったの」

じっと、ルミナスを見つめていたが震えた声で答える。

恐怖以外を感じられず、ノールは流血している右肩を押さえながら、そのまま地面にしゃがみ込む。

以前ルミナスと戦った際、まるで恐怖などを感じなかったが今では恐ろしい程その感情しか彼女には芽生えない。

それはやはり、レベル分けによって彼女自身の精神などが弱くなっただためである。

「ボクを殺すの？」

恐怖のため、ノールはルミナスの顔を見ることが出来ず、自身の足元の方を見つめながら震えた声で訊ねる。

「当然だよ。雑魚になったとしても君は私を倒したことに変わりないから。まして、君は何故か弱体化している。このチャンスを私が逃す訳が無いでしょう？」

それを聞いて、ふいに眼から涙が流れる。

シスイのために生きようと決意したのに自分は結局死ぬしかないのかという思いから涙が流れたようだった。

「どうやって、死ぬ？ これ程の実力差があるなら大抵以上の苦しみは何でも君に与えてあげられるよ」

再び、ルミナスは魔法剣を出現させた。

「串刺しと行きたいところだけど……ふふっ、まずは腕からかな？」

先程斬ったノールの右肩を笑みを浮かばせながら眺め、ルミナスは剣を構える。

「ルミナス、ボクを忘れてないか？」

背後から声が聞こえた。

ルミナスの背後にいたのは、トンファーを構え、人格が変わった杏里だった。

「ノールから離れる。離れないと、ただでは済まない」

「メイドの格好をしている君にそんなことを言われてもね。それにとだじゃ済まないってどうゆうことなのかな？」

ルミナスは振り返り、杏里を嘲るよう語る。

杏里など最初から眼中にないというルミナスの意志がそうさせた。

「ノールを泣かせたのは絶対に許せない。謝ってもらってから」

距離を一瞬で詰め、ルミナスの懐に入るとルミナスの腹部を狙い、トンファーで打撃を与えようとする。

フェイントも含めた複数回の超接近距離の攻撃をルミナスは軽く躲し、その躲しざまに杏里が着ているスカートを踏み付け、地面へ転倒させた。

「封印障壁」

その瞬間、魔法の詠唱無しでルミナスは封印障壁という魔法を杏里へ向かって放つと倒れている杏里の周囲には結界のような物が現われた。

「何これ……出られないの？」

「それは封印障壁という魔力の檻。そこで君は、ノールが死んでいくのを黙って眺めているんだよ」

再び、ルミナスはノールの方を振り返る。

しかし何かを思い付いたのか、また杏里に声を掛ける。

「封印障壁は脱出可能の魔法だから君でも出てこれるかも。ノールを助けたい思いがあるのなら早く出てくることだね」

杏里に問い掛けた後、ルミナスはしゃがみこんだまま泣いているノールを蹴り上げる。

「うう……」

しゃがみ込んだままの防御の体勢では無かったノールは蹴りの直撃を受ける。

その際に彼女の華奢な細い腕は簡単に折れてしまい、衝撃によってノールは青い群生した草地に倒れる。

「本当にレベルが10みたいだね、ノール？ 今の蹴りなんて以前の魔天使化した君なら楽に躲せて笑いながら数発カウンターもしてくるはず」

自らの印象によって浮かんだルミナス自身のイメージを語る。

そして折れている右腕をわざと掴み、ノールを無理矢理立ち上げさせた。

ノールは苦痛で表情は歪んだが、必死で痛みを堪える。

「相当痛いはずなのに泣き叫ばないの？ 普通なら屈強な体格をした男性でも激痛に声をあげて命乞いをするはずなのにね」

その間、ルミナスは何度も折れている腕を掴み上げた。

無意識のうちに流れ出た涙、痛みのためノールは唇を噛み締める。

「あー、もしかして杏里を心配させないように我慢しているの？

けど、杏里は助けに来たりしないよ。あの子は簡単に破ることが出来るはずの封印障壁を破ろうとさえしないのだから」

ノールを見下すようにルミナスは語る。

折れている腕からノールの首へとルミナスは持ち方を変えると、そのまま複数回ノールの腹部を殴る。

ルミナスが殴るたびにノールは口から吐血をした。

攻撃の威力が強過ぎるため骨が砕け、臓器が破裂し、身体が悲鳴を上げるためだった。

「ふふっ、楽しくなってきた」

「止める！ ノールをいじめるな！」

封印障壁の中に閉じ込められている杏里は、ルミナスに向かって叫ぶ。

「煩い、折角の興が冷める。そんなに殴ることを止めてほしいんだ
ったら、さっさと封印障壁から出てくればいいじゃない？」

しかし、それは不可能なことであった。

封印障壁は外側からも内側からも破壊出来ない強力な障壁であり、
詠唱者が他の人物によって打撃や魔法に影響されない限りは破るこ
とが出来ない。

そのことは封印障壁を扱えないノール、杏里ともに知らない。

そのためノールは杏里が助けしてくれることを願い、杏里も必死で封
印障壁を破ろうとしていた。

だが、それもすぐに終わった。

元々レベルが低くなったノールではルミナスの攻撃の前に数分も生
きていることなど出来ない。

呼吸が止まり、心臓も機能しなくなったのを確認すると、ルミナス
は気が済んだのかノールを草原に捨てた。

満足気な勝ち誇った笑みを浮かべながらルミナスはゲートを作り出
し、魔界へ戻っていった。

ルミナスがゲートを作り出し去っていったから数秒後、魔力が弱ま
ったのか杏里を覆っていた封印障壁は消える。

即座に杏里はノールの下に近寄ったが、その酷い光景を目にし、一

瞬吐き気を覚えた。

悲しみと怒りに気が動転しながらも死んでしまったノールに復活の魔法リザレクを掛け、杏里はノールを生き返らせた。

「ノール、身体大丈夫？」

身体が完全に治癒され、意識を取り戻したノールを気遣いながら訊ねる。

しかし、ノールは杏里に対しても怯えているのか自らの膝を抱き抱えたまま震えた。

「殴らないで……お願いだから、もう殴らないで下さい……」

「落ち着いて、ノール。ボクだよ」

「杏里くん……どうして、ボクを助けてくれなかったの？」

「封印障壁から出られなかったの」

「ルミナスがすぐに出られるって言ってたじゃないか、ボクなんか死ねばいいと本当は思ってたんだろ……」

力無くノールは杏里に掴み掛かった。

「本当だよ、ボクはノールを助けたかったんだ」

それを聞いたノールは眼に涙を浮かべ、杏里を睨み付けながら掴み掛かっていたが止めた。

「杏里くんがボクを見捨てるとは思わなかったよ」

悲しげな声で語り、ノールは涙を流す。

杏里は自らがノールを救えなかったことをただ後悔するしか出来なかった。

二人は無言のまま、スロートの自室へ空間転移を詠唱し戻る。

部屋に戻ってから、杏里はノールを支えになればと積極的に会話を始めた。

だが、ノールは杏里の話をただ俯き黙って聞いているだけで杏里を見ることもせず会話に答えることもなかった。

嫌われたのかと杏里は思い、とても辛かった。

それでも彼女の支えになりたかった杏里は会話を続けた。

ふと気が付くと外はいつのまにか暗く、夜になっている。

気不味い雰囲気のまま、二人は就寝した。

前哨戦

「眠れない」

ベットで寝ていたノールは上半身を起こす。

ノールには違和感があった。

辺りは静かなはずなのに、ずっと不思議な声が聞こえていた。

その声を彼女は聞いたことがある。

以前、魔族のグリードを倒す際に聞いた声だった。

「力を失い、まして格下の者にまで敗北を喫するなんて」

声は周囲から聞こえるものではない。

自らの内側から女性の声が聞こえ、声のする間、激しい頭痛がノールを襲う。

「本来の血の力を私が半分程、目覚めさせましょう」

ノールの頭痛は止まった。

その瞬間、強力な力がノールの内側から沸き上がる。

沸き上がる力を制御出来ず、悲鳴に近い声を上げた。

「ノール！ どうしたの！」

ノールの悲鳴を聞き、一瞬で飛び起きた杏里は二段ベットの从上から飛び降りてきた。

ベットから飛び降りてきた杏里を確認したノールは杏里に飛び掛かり、床へ押し倒す。

「忌々しい桜沢一族。貴方たちが存在しなければ、決してこんなことには……」

ノールは押し倒され身動きを封じられた杏里の首を異常な力で絞め始めた。

「ノール……ちゃん、止めてよ。桜沢つてなに……？」

無言のまま、ノールは何も答えない。

杏里の首を絞めながら、感情も顔には表さなかった。

「……………」

ノールに首を絞められている間、一切抵抗を杏里は示さない。

ノールの力が強過ぎるせいで、まるで行動を取ることが出来なかった。

意識が薄くなり、眼にも生気を宿さなくなった頃、杏里はフツと頬笑みを浮かべた。

杏里は何故自分が突然微笑したか分からなかった。

だが、ノールの心には影響を与えた。

「あれ……？」

ノールは手の力を緩める。

「ボクは何をしてたんだっけ？」

自らの真下から不思議な違和感を感じ、ノールは床へ視線を落とす。

「杏里くん、何やってるの！」

直ぐ様、倒れている杏里に気付いたノールは杏里から避けた。

「……かはっ……はあ……」

杏里は呼吸を整え始める。

「大丈夫？ これって何があったの……？」

杏里の首筋に手で絞めた跡が残っているのにノールは気付く。

ノールはその手の跡に自身の手を近付けた。

もしかしたらと、そう思ったからである。

「ダメだよ……」

苦しそうに杏里は横になったまま言う。

「ボクは平気だから……」

そつと杏里は頬笑む。

それでもノールは杏里の首筋にある手の跡に自身の手を合わせた。

「やっぱり、ボクが絞めてたんだね」

「……………」

「何か言つてよ、杏里くん」

「うん……でも、ボクの首を絞めてる時、いつものノールちゃんらしくなかったよ。本当に別の人みたいだった」

「フォローしてくれてるのかい？ でも、ボクは普通じゃない。シスイ君を殺したから、君も殺したくなつたんだと思う」

「違うよ、ノールちゃんはそんなじゃない。なんかボクのことを桜沢の一族とか言つてたし、声も話し方も本当に別人みたいだった」

沈黙し、その言葉の意味をノールは考える。

「もしかしたら、ルミナスがボクに呪いみたいなのを掛けたんじゃないかな」

そう思ったノールはすぐに行動を起こすことを決めた。

「杏里くん、一旦天使界に行くよ」

「天使界へ行くの？」

フラフラと息苦しそうに杏里は立ち上がる。

「そうだよ。多分これはルミナスがボクに掛けた呪いが原因だと思うの。だから、一旦天使界に行くの」

「でも、ルミナスさんは魔界に住んでるんだよ？ 魔界に行くなら天使界に行かなくてもいいんじゃない？」

「そうじゃないの。アクローマに魔界へ行く方法を聞きに行くの。だって、ボクは魔界へ行く方法が分からないもん」

「でも魔界へ行けたとしても、ノールちゃんがまた苛められちゃうよ……ボクはそんなのもう嫌だよ！」

杏里はノールに魔界へ行つてほしくなかった。

また、ルミナスに痛め付けられ殺されてしまふと考えたからだった。

「全然大丈夫だよ。なんかね、あの声を聞いた時、ボクに以前より強い力が沸き上がったの」

「声って？」

「女性の透き通った綺麗な声だったの。その声を聞いたら制御出来なくて……って、ルミナスと声が違うから、あの声はルミナスじゃないのかな？」

「だったら行かない方がいいよ。お願いだから魔界へは行かないで」

「それなら杏里くんは一緒に来なくていいよ。ボク一人で行くから」

「どうしても行くならボクも行くよ!」

止められないことが分かった杏里はノールに付いていくことにする。

支度が済んだ二人は早速天使界へ行く魔法、異世界空間転移を詠唱し、天使界のアクローマの宮殿前へ移動した。

「久しぶりの天使界だよ」

地平線の向こうまで続く、白く輝く雲の大地を眺めていたノールは突然、雲の地面に倒れ込む。

「何してるの、ノールちゃん?」

「ふかふかしてそうだったから、つい」

「早くアクローマさんへ会いに行こうよ」

「いやだ。杏里くんが会って来てよ。これ、凄くふかふかしてるから動きたくない」

「ダメだよ！ ノールちゃんがアクローマさんへ会いに来たんですよ！」

「いや、いいし。杏里くんが魔界へ行く方法を聞ければボクが会いに行く必要はなくなるじゃん。それじゃ、いつてらっしやい」

「ノールちゃん……」

倒れてその場を動こうとしないノールを仕方なく杏里は背負ってアクローマのところまで連れていこうとする。

「さっきから気になっているんだが、そのバカ二人。何をしている？」

宮殿内から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

その声の主はレイディアントであった。

偶然、ノールと杏里に気付いたので声を掛けたらしい。

「あーもう、杏里くんのせいだからね。あんな変な人に気付かれちゃったじゃん。これじゃ、ボクまでアクローマに会わないといけないよ。ホント、ムカつくな」

「おい、変な人つてもしかして私のことか？」

「当たり前でしょう？」

「そんなことより大変なことになったな、ノール」

「何が？」

「シスイが行ったことを覚えているな？ シスイの水人能力は他人を操るということ。それは他人の人権を潰し、価値観を損わせ、“支配”することだ」

「それで何が言いたいの？」

「ジェノサイドという総世界を裏から支える組織が、シスイを創ったお前に責任があると決定した。お前の罪は“支配”という総世界協定違反だ」

「大体検討は付くけど、どうやってボクに責任を取らせようって言ふんだい？」

「当然、命だろう。元々、R一族のお前は総世界の裏ブラックリストへ今回の事件で載せられたからな。R一族の再来ということでのこの懸賞金は一兆だ」

「たかつ！ じゃあさ、ボクが懸賞金が貰えるところにボクは行くだけで一兆貰えるってことだね！」

「バカだろ？ お前が行ったら即抑留だ」

有り得ないノールの発言に、レイディアントは引く。

「ところでそんなことを何でレイディアントは知ってるの？」

「それは無論、私もジェノサイドに所属しているからだ。アクローマを含め、熾天使、智天使の階級に位置する者は全て所属している」

「えーと……ってことは、ボクってここにいたらマズイってことだよね？」

「ああ、間違いなくそうだ。財政どころか、全国民に少しの間くらいなら楽をさせられそうだな」

この瞬間、ノールは自らの状況を悟った。

さらには周囲から明らかに多数の視線を感じる。

ようやく、ノールはレイディアント以外の複数の気配を察知した。

「ヤバい……逃げるよ！ 杏里くん！」

即座に立ち上がって、空間転移をノールは詠唱する。

しかし、それは既に間に合わなかった。

大天使長の白瀬向日葵がノールの背後を取り、ノールに掴み掛かったからだった。

「ノールちゃん！ レイディアント様の話を最後まで聞こうよ！」

何故か白瀬はとても焦っている様子。

「離してよ……」

ノールが叫ぶと白瀬は手を離した。

「って、あれ？」

「ゴ、ゴメンね。痛かったかい？」

済まなそうに白瀬は謝る。

「全くだ。誰が、お前を捕縛すると言った？ 同族の天使を裏切るようなことをするはずがないだろう」

何故が見下すような態度でレイディアントは語る。

「ボクを捕まえるんじゃないの？」

「当然。それが分かったならば、アクローマへ会いに行け。最近、天使界へ来なかったから心配している」

「アクローマが？」

信じられないくらいノールはガツカリした。

彼女はアクローマなんか心配されるくらいなら死んだ方がマシだと何故か考えているようだった。

そして、それが彼女の表情にはつきりと表れてしまった。

「ノール、頼むからアクローマの前でその嫌そうな表情をするのは止めるよ」

レイディアントと白瀬向日葵に連れられ、ノールたちは宮殿内へと入った。

宮殿内を歩いているとさつき感じた視線を再びノールは感じ取る。

振り返ると、背後には複数の天使たちがいた。

「あれって、ストーカー？」

「いや、違う。彼等は女神……つまり、お前を一目見るために集まった天使たちだ」

謁見の間へと続く回廊をスタスタ歩きながら、ノールの方を見ずにレイディアントは語る。

「数百年振りに女神が現われたのだから当然だろうな」

「なら、ボクは女神化した方がいいかな？ てゆうか、天使にもなっていないのに何でボクが女神だって分かったのかな？」

ようやく天使の羽をノールは出現させる。

その後、女神化し六翼の羽を出現させた。

ノールの変化とともに沸き上がる歓声。

ノールたちに連れ立っていた天使たちは歓喜に満ち溢れていた。

「わあっ、凄い！ 有名人になったみたいだよ！」

気を良くしたのか、ノールは天使たちの方へと手を振る。

天使たちはそれぞれの方法でノールのことを讃えていた。

拝む、聖歌を歌う、涙を流す、歓喜に震えるなど様々。

「ノール、立ち止まるな」

「あつ、ゴメンね」

再び、ノールたちは謁見の間へと歩を進める。

「悪いな、ノール。この世界の者たちは神にどう接して良いか分かっていない。何故なら、この世界にいる者たちは空想と妄想でしかない下等な神を信じていないからだ。だが、それは当然そうだ。本物の神とは現御神あきつかみこそ正しい」

「へえー、ボクって神なんだ。この前まで、ボクが聖書で讃えていたのはボク自身だったんだね」

「いや、それは我々天使たちと出会う前のことだろう？ だとするならば、お前の讃えていた物は空想と妄想の成れの果て。とどのつまり、紙に丸を書き、それを神なんだとたまって讃えていたのと何ら変わりの無い行為だ」

「レイディアントはそうゆうことをバツサリ切り捨てるんだね」

「当然だ。行動を起こす、起こさないは自らのやる気と運と価値観だけだ。我々の行動を神が起こさせるなんてことはあるはずない」

「あれ？ でも、ボクは女神なんだよね。神らしくした方が良いの？」

「はあ？」

レイディアントは明らかに不快そうな顔をする。

「神を演じるとは？ それはまさか、権利を振りかざすということか？」

「いや、そんなことをボクは出来ないでしょ。ただ、言ってみただけ」

「まっ、それはそう……もしや、ノールは“神の称号”を誤解していないか？」

「違うの？」

「いいか、“神の称号”とは……と、話しているうちに着いたな」
会話をしているうちに、アクローマがいる謁見の間へ辿り着いた。

「向日葵。後ろから付いて来ている集団を謁見の間へ入れないようにしろ」

「分かりました」

白瀬はレイディアントたちが謁見の間に入ったのを確認してから謁見の間を出て、扉を閉める。

謁見の間にはいつものように赤い絨毯が敷かれており、その絨毯が続く先にアクローマの座る玉座があった。

玉座にはアクローマがいつものように座っている。

「スターマイン！」

レイディアントが速攻で神聖魔法を何故か詠唱する。

すると、レイディアントの周囲には星のように輝く無数の光が出現し、その全てがアクローマへと降り注ぐ。

しかし、アクローマには全く当たらず、全てはじけて消えた。

「くそ！ あのバカ、また魔法障壁を張っているな！」

その光景を見て、レイディアントはとてつもなく怒る。

そして、アクローマはスターマインがはじけた音に気付いたのか、玉座から立ち上がった。

だが、アクローマの様子は何かおかしかった。

何故か、ボーツとレイディアントたちを見つめた後、背伸びをしながら眠そうな眼をした。

つまり、いつものように玉座で寝ていたらしい。

「おはよう、レイディアント……あつ、ノールちゃんじゃない！ 貴方を心配していたのよ！」

アクローマはノールに向かって走ってきた。

どうやら、ノールに抱き付こうとしている。

そのアクローマをノールは軽く身体を捻る形で躲した。

「触らないでください。アクローマさんはボクに触れないで下さい」

「えっ……そんなに身体に触れられたくないの？」

「どちらかというとアクローマさん限定で」

いつものようにアクローマは気分を害した。

「それは置いといて、何か私に用があつて天使界へ来たんでしょ？
知っているわよ」

玉座に座り直してから、アクローマは訊ねた。

「いいえ、全然全く最初からそもそも論点自体違います。貴方になんか会いたくもない。変に誤解されたくはありません」

さっきの嫌悪の表情が、またノールに表れてしまった。

「そんな……酷く毒舌じゃない。私、凄くショックだわ。レイディ
アントゥノールちゃんが私を苛めるわ」

「ん？ 済まない、話を聞いていなかった」

「あっ、分かった！ 貴方たち二人で手を組んでるのね、その手には乗らないわよ！」

「そんなことはどうでもいいんで、さっさと魔界へ行く方法を教えてくれない？」

その後、無駄なやりとりを約三十分程続け、ようやくアクローマは魔界のことへ話題を変えた。

「魔界のこと、今は考えたくなかったのよね。ミトスが死んじゃったの。友達だったから凄くショックだわ」

「生き返らせたなら？ てか、ミトスってどっかで聞いたような？」

「生き返らせることが出来ればとくにリザレクで生き返らせてるわ！ 悔しい……竜神族といずれ近いうちに戦争をするって決めたわ。絶対に許さないんだから」

「そうなんだ。なら早く魔界へ行く方法を教えて」

「貴方ってそればかりなのね。他に言うことないの？」

「ないけど？」

「あつそう。そのことなら智天使のリサか熾天使のヒカルに聞いて。確か二人とも今なら神殿内にいるはずだから」

「最初からそう言えよ。くそ、時間を潰した！」

堂々とそう吐き捨てたノールは明らかにイライラしながら謁見の間を出ていく。

杏里はアクローマにノールのことを謝ってから出ていった。

「ノールちゃん待ってよ！」

先に謁見の間を出ていったノールに杏里は追い付いた。

「勝手に行かないでよ」

「はあ？ ウザいよ、杏里くん。さっさとリサとヒカルへ会いに行くから急いでよ」

白い壁が続く回廊を歩きながら、ノールは杏里に言う。

「でも、どこにいるか分かるの？」

「階級が高い天使だからテラス辺りでお茶でも飲んでるんじゃないの？」

そのまま、二人は歩いていたら中々テラスに辿り着かなかった

というよりも、迷子になっていた。

「貴方たちが魔界に行きたいって人ね」

背後から声が聞こえた。

その声に反応し振り返ると、煌めく桃色の長い髪をし、すらっとした細身の身体に透き通るような純白の鎧を纏った女性がいた。

「レイディアント様の命により、貴方たちと一緒に魔界へ行くこと

になった智天使のリサよ。よろしくね」

淡々とした冷静な口調で語ると、リサは右腕を差し出す。

「ん？ 握手かい？」

ノールはリサの手を握った。

「貴方は私のことを覚えているかしら？」

「えっ、分からない」

「貴方が初めて天使界に来た時、白瀬向日葵様と一緒にいたでしょう？ 向日葵様は相変わらず九澄に神聖魔法を放っていたけど……その時、九澄と話していたのが私よ」

「ああ、あの時の人だったんだ」

「思い出してくれたかしら？ あと先に私から言っておくけど、まだ貴方なかが女神だと認めていないわ。R一族が女神だなんて」

「何か言ったかい？」

「何でもないわ。早く魔界へ行きましょう」

握手していた手を離すと、リサは魔界に行く魔法を詠唱する。

魔界へ行くこう！

リサの魔法により、ノールたち三人は魔界へ移動した。

魔界の風景は何ら禍々しさを感しない。

空は蒼く、大地には青々とした草木が生え、普通の人界とは何一つ変わらなかった。

「魔界って案外普通なんだね。ボクのイメージしてたのとは全く違うよ。」

「どんなイメージなの？」

「なんとなく禍々しい感じがするって思ってた。重苦しいっていうか、薄暗い地獄って感じで。」

「そんな状態の世界なんかに一体誰が住みたがるのよ？」

ノールの返答にリサは飽きた様子。

「そんな世界は廃棄され、新しい世界を作るためのエネルギーにされるわ。今じゃ誰でも知っていることなのだから、それくらいは知ってなさいよ。」

「世界の廃棄ってどうやるの？」

「それは分からない。天使とか魔族には出来ない荒技ね。多分、総世界的な何か別次元の力が働いているのだと思う。それはいいとし

「早く行きましょう」

「早くつてどこに行くか分かってるの？」

「貴方が知っているんでしょう？ 早く目的地を言いなさい」

「ルミナスのそこだよ」

「それなら、ここから西へ進んだ先の綺麗な湖の畔に黒一色の悪趣味な無駄に大きな屋敷があるわ。そこが、ルミナスの屋敷よ。でもその前にミトスに忠誠を誓っていた天使たちを取り戻しに行くわ」

「もしかして、この前裏切った智天使のラーズのこと？」

以前、ミトスが天使界へ攻めてきたことをノールは思い出す。

「そう、それともう一人。以前は貴方と同じように大天使長だった人物も説得しに行くわ」

「ボクが天使界に来た時、大天使長が欠員になってたのはその人がミトスの部下になってたからなんだね」

「そうよ、だからこそ説得しに行くのよ。ミトスはもういなくなったのだから天使界へ戻ってきてくれるはずよ」

話し終わると、三人は翼を広げ、空へ舞い上がった。

一方その頃、リサ曰く、黒一色の悪趣味なルミナスの屋敷へ魔神階級のルークとドREAMが招待されていた。

「オレたちを呼んで何がしたいんだ？」

ルミナスの屋敷のサロンで高級そうなソファーに脚を組みながら座っているルークは訊ねる。

そのルークの背後には彼の召使であるドREAMが背筋を正したまま直立していた。

「私は、この魔界の新たな邪神へなろうと考えているの。そのため、邪魔な者たちを消そうと思って」

ルークの座るソファーからテーブルを挟んだ先に向かい合うような形で置かれたソファーに深々と座るルミナスは分かりやすいように話した。

ミトスと組んでいた、若しくはミトスの次期邪神になるかもしれない人物を今のうちにルミナスは消去しておきたかったのである。

「へえー、それで？ 邪神にでもなったら、オレたちを側近とかにでもしてくれるのかい？」

「側近って？」

「っーかよ、オレたちを階級闘争なんかに関き込まないでくれる？ オレもドREAMも色々忙しいんだ。オラ、ドREAM、もうこんなところには用はねえ。さっさと帰るぞ」

明らかに不機嫌そうな表情をしているルークは、ソファアから立ち上がりさっさと帰ろうとする。

「そんなに私の側近になりたかったの？　ゴメンね、気付かなくてじゃあ、私と同盟を組むってことだね」

「はあ、何だと？　話を勝手に進めるんじゃない！」

「何だ、違うの。なら帰ってよ」

「言われなくとも、帰ろうとしているところだ！」

ルークは怒りながら、ドREAMと一緒にサロンを出ていった。

「まっ、彼らと戦う必要がなくなっただけでもマシでしょうね」

サロンに一人残されたルミナスはソファアに座ったまま、魔力でビジョンのような物を作り出す。

ビジョンには魔界の大地がスフィア状に映し現されている。

その映された魔界の大地は何故か五つの色で分け隔ててある。

「戦う敵は多いね。一先ず、ミトスの魔界將軍たちを全て撃破しなくては邪神になれなさそう」

ルミナスは映された魔界の映像を眺めながら、そう考えていた。

ルミナスの語る魔界將軍とは全部で四名いる。

魔界の北エリアを統轄する大魔導師イブール、西エリアを統轄する暗黒騎士のイーサン、東エリアを統轄する水人ブリザード、南エリアを統轄する蛮族であり炎人のカルナツクである。

その他にミトスの部下で天使界の元大天使長であり、ミトスの代わりに中央区を支配するルーシエ。

そして、魔界の混乱に乗じて魔族ではないのに邪神へなろうと企む部外者のエルスがルミナスの中では危険視されていた。

ついさつきまで、その中に含まれていたルークとドレアムには敵意が無いどころか階級にも関心が無いことが分かり、ルミナスは別の敵を倒すことにする。

「ひとまず、ブリザード、イブール、イーサン、カルナツクの順で潰していこうかな？」

そう考えると魔界の大地が現されたビジョンを消し、サロンを出て支度を始めた。

ルークとドレアムはルミナスの屋敷を出てから空間移動を詠唱し、自分たちの屋敷がある南エリアに戻ってきていた。

ルークの屋敷はルミナスのように黒一色であるような物ではない。

外観は通常のモダンな建築技法を採用しており、スタンダードな造りになっている。

しかし、やはりそこは貴族。ルミナス同様に屋敷の広さには変わりなかった。

「やっぱ、ウチはまともだな。ルミナスの悪趣味さ加減にはホント呆れるぜ」

「ルーク様、果してあれで良かったのでしょうか？」

「何が？」

「ルミナスと手を組むことで、我々が捜し続けているあの男を……」

「そんなこと知っている。けど、あいつは誰の力も借りずに殺すと決めてんだ。それにな、あんな訳の分からない男と手を組むことなんか最初から御免だ。あとな、いつも言ってるだろ、オレに敬語を使うなって」

「それは出来ません。私は貴方の召使いでありますから」

「召使いって言っても、もうドREAMを雇った父上や母上は、オレがガキの頃に殺されたんだ。そのオレを育ててくれたドREAMのことをオレは父親だと思っている。主従の関係じゃないことは昔からもう分かってるだろ？」

「ルーク様……」

照れ臭そうに話すルークを見ながら、ルークがそう自らに対して思

っていたことが嬉しい反面、複雑な気持ちをドREAMは抱いていた。

「て、てゆーか、これは前にも言ったことだからな！ もう忘れんなよ！」

「了解しました、ルーク様」

何となく穏やかな空気が辺りを包んでいた。

「いつまで話してんだ、バカ野郎！ てめえら、さつさとオレに気付け！」

突然、屋根の屋根の方から声が聞こえた。

二人の雰囲気は暴言で打ち壊したのは魔界將軍であり炎人のカルナツクだった。

「オラッ！」

屋根の上から飛び降りたカルナツクはルークたちの傍に砂煙を上げ、着地する。

「お前等、ルミナスと会っていたみたいじゃないか。何を話していたんだ？ ほら、さつさと言え」

「話せだあ？ 誰に物言ってるかテメーは分かってんのか？ つーか、テメー何でここにいるんだよ。さつさと失せるや」

「あつ？ 魔界將軍のオレに齒向かうのか？ なら、てめえらはルミナス派ってことだな。死んでもらうぜ」

「何でそうなんだよ！ テメー、勝手に決め付けんな！」

ルークは怒鳴ったが、まるで聞く耳をもたないのか、カルナツクは炎を身体に纏い迫る。

「くそ！ だから、脳筋野郎はム力つくんだよ！ ドREAM、こいつを殺すぞ！」

「了解しました」

ルークは魔法剣を、ドREAMは巨大な鎌を構えて、カルナツクの攻撃に備えた。

「食らいやがれ！」

カルナツクの豪腕がルークに直撃する瞬間、ルークは軽く身を躲すと間髪入れずにカルナツクの腕に深い斬り傷を与える。

しかし、ルークの放った斬撃はカルナツクの腕のみを傷付ける程度の斬撃ではなかった。

カルナツクの蛮族としての巨体には似付かわしくない俊敏な身のこなしが腕ごと持っていかれる威力を封じたのである。

「おー、いてえ。少し見縊ってたか？」

カルナツクは自らの腕が普通に動くかを確認するかのように、掌で握る動作や開く動作をする。

「ハア？ テメーみたいな雑魚が強者を見縊ってどうするんだよ。頭狂ってんじゃねえの？」

「んだ、てめえ！ オレが本気を出さないでいてやったのが分からないのか！」

「それがバカだと言ってんだよ？ 絶対にこんな奴には負けられないな……ドREAM、こいつはオレ一人で殺る。手を出すなよ」

「了解しました、ルーク様」

ドREAMはルークから離れた。

「なんだ？ 一騎打ちになるのか？ 死期を早めることになるぞ」

「生憎、脳筋に負ける程こっちは落ちぶれてはいないんでね……っというか掛かってこないのか？ 怖気付いたのなら逃げても構わないんだぜ？」

明らかに見下げた感じの憎たらしい口調でルークは語る。

「逃げるのは、てめえだ。当然逃がしはしないけどな！」

再び、猛烈な勢いのままカルナツクはルークに迫る。

さっきと変わらないような単調な動きをするカルナツクに対し、ルークは次こそ蹴りが付くようにとカルナツクの心臓を狙って貫いた。

「ぐあっ！」

叫びにも似た声を上げ、カルナツクは剣を引き抜こうとする。

「簡単に勝負ありだ。お前、動きが分かりやすいくらい単調なんだよ」

「だよな。でも、これが相手を騙すには最適なんだ」

ルークが楽勝だといった口調で語るとカルナツクは動きを止め、全く攻撃が効いてないかのよう振る舞う。

「ハア？ 何を……」

その瞬間、カルナツクは身体に剣が突き刺さったままの状態でルークに抱き付き、両腕で動きを封じる。

物凄い力の圧力により、ルークは逃げられなかった。

「ダークフレア！」

そのままの状態でカルナツクが魔法を詠唱すると黒色をした複数の豪火球がカルナツクに捕まっているルークへと降り注ぐ。

「ルーク様！」

その情景を見ていたドREAMが叫ぶと、猛火を上げる火球が降り注いだ地点からルークが弾き飛ばされるように出てきた。

「信じらんねえ……戦い方をするんだな」

ルークの声は擦れ、聞き取ることが困難であった。

炎の攻撃によって身体に火傷によるダメージを負い、さらに喉か肺の一部を焼かれてしまったようだ。

それとは全く逆の様子でカルナツクも炎の中から出てきた。

「オレは炎人なんで、炎は効かない。剣などの物理攻撃も全く効かない。貴様とは比べ物にならない程の強者なんでな」

カルナツクはそういうと胸を貫いたままになっている剣を引き抜くと魔力を高める。

すると、傷口が簡単に治癒され、腕に残っていた傷も消え去った。

「どうだ、この能力は素晴らしいだろう。死者を思いのまま操作するグレイブストーンという能力だ。エピタフではないぞ……聞こえは良いが、あれじゃ言葉の意味が違う。墓に書きただの名前だ。とにかく、今のオレを倒せる可能性がある者とは既に水人と天使のみ。魔族である貴様なぞに負けなどしない」

勝機を悟り、カルナツクは次の攻撃に備えた。

ルークに明らかなダメージを与えたのにもかわらず、カルナツクは油断を全くしない。

瀕死に近い時こそなりふり構わない行動を取るだろうとは自らの経験でも知っていたからだった。

「くそ……捨て身でかかってくるとは思わなかった」

ルークはダメージを受けた身体を奮い立たせると、剣を構える。

「くらえ！」

ルークが全力で剣を振り下ろすとカルナツクは特に何も考えてない様子で左手を剣の前に突き出す。

当然、ルークの振るった剣は腕に刺さった。

だが、それは罠。カルナツクの腕を途中まで斬り裂いて止まってしまう。

それはカルナツクの並はずれた筋肉により、止められたらしい。

「ほら、腹がガラ空きだぜ」

動きの止められたルークの腹部を狙って、カルナツクは速攻でストレートを放つ。

ルークは殴られた瞬間、骨の碎ける鈍い音を上げ、そのままの勢いで屋敷の外壁に叩き付けられた。

壁に叩き付けられた後、ルークは大量の吐血をし、自らの胸を押さえ悶える。

「ルーク様！」

ドREAMはルークを助けるために彼へと近寄った。

「ドREAM……手は出すなよ。まだ負けたって決まった訳じゃねえ」

胸を押さえた状態でルークは身体をふらつかせながら立ち上がった。

「なんだ、まだやるの？」

カルナツクは何事もなかったように斬られた腕を一瞬で治癒する。

「お前……何で傷が治ってんだよ？ 回復魔法なんて使っていないだろ！」

「あー、そつだ。低能な貴様には何をしているかさえも分からないだろう」

止めを刺すかのようにカルナツクはルークへと迫った。

相変わらず単調な攻撃をするカルナツクの攻撃をルークは当たる直前で宙に跳躍する形で躲す。

だが、着地した時の衝撃がダメージを受けた身体に響き、ルークは体勢を崩した。

「くそ……おかしいだろ。何で攻撃しても、あいつはすぐに回復するんだよ？」

即座に崩した体勢を立て直したルークは両手に魔法剣を具現化した。

「また、魔法剣か？ 魔法剣ごときじゃ、オレにダメージ自体与えられねえんだよ！ 少しは学習しやがれ！」

勝利を確信しているのか、不敵にカルナツクは微笑む。

「お前もう飽きたわ。どうせ、オレに手傷なんか与えられねえんだろ？ クズが、さっさと死ぬんだな」

吐き捨てるようにカルナツクは言うと、魔法を詠唱し始める。

「不知火」

カルナツクの発した“不知火”という言葉と同時に、ルークの周囲には無数に漂う炎が現れた。

周囲に現れた火にはルークを焼き尽くすような威力はない。

明らかに何かを予兆させる火であることは間違いなかった。

「気付いたか？ この火は、お前にダメージを与えるための火じゃない。これから放つ魔法の火力を上げるために使った魔法だ」

「魔法を使うだと？ バカかよ、手のうち証して何になるんだ。オレが魔法障壁を張ればいいだけじゃねえか！」

「防げるなら防いでみな」

カルナツクは魔法を詠唱する。

「デトネイト！」

カルナツクの詠唱終了と同時に“不知火”と同時に現れた無数の火ごと、ルークを巻き込むようにして大爆発を起こした。

ルークは激しい爆発によって数メートル程、宙へ吹き飛ばされる。

「ルーク様……!!」

地面に叩き付けられる前にドREAMがルークを抱き止める。

ダメージが酷くルークは目を閉じ、ドREAMに寄りかかった状態で全く動きを示さず、死んでしまっているかのようにだった。

「ようやく死んだか。よし次はてめえだ、ドREAM」

カルナツクはルークを抱き止めたドREAMを見下している。

「貴様、許す訳にはいかん！」

ドREAMが武器である鎌を構え立ち上がるうとした時、足に何かの感触がした。

ルークがドREAMの足に手を掛けたようだった。

「逃げる、ドREAM。お前じゃアイツに勝てない……」

「ルーク様、お言葉ですが貴方のその命に従うことは出来ません」
立ち上がる際にゆっくりと地面にルークを優しく寝かせる。

「私が時間を稼ぎます。その間に回復魔法で手当てをなさって下さい」

戦闘態勢にドREAMは移行した。

「はいはい、注目」

何かが空から降ってきた。

空から降ってきた……もとい、着地した人物はルミナスだった。

「はいはい、ルミナスさんがやってきましたよ。ルーク、君の屋敷の座標軸がおかしいよ。空間転移をしたら空に現われちゃったし」

突然現れたルミナスはルークを見て、何かに気付く。

「ボロボロね、ルーク。ついでだから助けてあげよーか？」

わざわざ倒れているルークの傍にまで行き、見下せる位置に移動してからルミナスは語る。

「誰がお前なんか」

「怒らないですよ。魔神階級の弱い君が意気がつても何も得はしない
よ」

「……助けてくれ、ルミナス」

「聞き分けがいいとすんなり世の中は罷り通るものよ。助かったら
同盟を組め」

言い終わったルミナスはカルナツクの方へ向き直る。

「で、次はルミナスか」

突然ルミナスが現われたため、カルナツクは微妙に放置をくらっていた。

「そうだよ、私が戦う。でも、貴方と戦うのはもっと後にしたかったのだけど」

「オレが強過ぎるからだろ？」

蛮族らしい筋骨隆々とした身体で、カルナツクは何故かポーズを取る。

「バカじゃないの？ 理由は私の正体が悟られるからだよ」

「正体？ もしかして性別のことをか？」

「違うよ。なんなの、性別のことかって？ 正体っていうのは私が天使でもあることだよ」

「なんだって？」

ルミナスの“天使”という発言に物凄くカルナツクはたじろぐ。

「聞いてねえぞ……ルミナスが天使だなんて」

「ところで、私のことはルーシエから聞いたのでしょうか？」

「お、お前！ 何で知ってるんだ！」

「カルナツク、貴方って本当にバカだね」

呆れたルミナスは軽く魔法の一節を言う。

するとルミナスの前方に魔方陣が現れ、神聖魔法のソレイユが放たれた。

カルナツクは即座に躲したが、カルナツクの後方でUターンし、再びカルナツクへと襲い掛かる。

その結果、カルナツクにソレイユが命中し、カルナツクは弾き飛ばされた。

ソレイユが命中するとカルナツクは呻き声をあげ、カルナツクの身体は崩れ消え失せた。

「やっぱり、ネクロマンサーだったのか」

消え失せたカルナツクがいた場所を眺めながらルミナスは語る。

「ルミナス……カルナツクがネクロマンサーだって、最初から気付いていたのか？」

ドREAMに肩を貸してもらいながら、ルークは立ち上がった。

「あれー？ 何方でしたっけ……ああ、ルークさんいたのですか？」

「いるに決まってるだろ！」

「あっそう。そんなの知っている。ていうか、ルークもカルナツクがネクロマンサーだって知っていたんだ」

「ああ、戦っている際に気付いた。回復魔法を詠唱していないにも関わらず、傷が治癒されていくんだからな。けどな、幾ら何でもあの回復量は異常だ」

「当たり前でしょう？ カルナツク自体が既に死者だったのだから」

「あつ……だから、すぐに回復出来たのか。ネクロマンサーだったら死者の能力なんて自身の思い通りにどうこう出来るからな。カルナツクは思い切ったことをするんだな。自らを死者にするなんて……」
「君だって人のこと言えないよ。元々は人間だったのに魔族になっただじゃん。君と同じく、さらなる力を得るためにカルナツクだって新たな変化を求めたのでしょ」

「お前、何でオレが人間だったこと知ってるんだ！ それにオレは、力を得るため魔族になっただんじゃねえ！ 全部、あの男のせいだ！」

「はあ？ ゴメン、私は君の過去になんて興味無い。じゃあ、傷が癒えたら扱き使ってやる。有難く思いなさい」

「なつ……お前！」

「助けてやったら同盟組むって約束しなかったっけ？ あつ、いいよ、同盟組まないなら。にしても助けられた挙げ句、約束も守れないようだったらルークは魔神失格だね。君みたいな男がミトスの部下だなんてもう最悪だよ。このまま、止めを刺してあげようか？」

「くそ、言わせておけば……」

ルークがキレそうになった時、ドREAMが囁く。

「ルーク様、ルミナスとの同盟を結んでみてはどうでしょうか」

「何で？」

「ルーク様はお怒りなされていたのでお気付きにはなされなかったようですが、ルミナスは今まで一度もルーク様に負の感情を抱いておりません」

「それで信用出来るってことか。確かに口では吐き捨てるみたいに最低なことを言ってるけど実際に助けてくれたしな」

「で、どうすんの？ 死ぬの？」

相変わらずルミナスは上から目線で腕を組みながらのふてぶてしい態度。

というよりは、ルークとは別の方を見ながら語っている。

それに対し、ルークは怒りを堪えながらもルミナスと同盟を組むことを決めた。

異変

「ここが、ルーシエ様の屋敷よ」

そう、リサは大きな屋敷の前で語る。

現在、ノールと杏里、リサの三人はルーシエという元大天使長であった人物の屋敷前の庭園にいる。

理由は邪神ミトスに仕えていた彼を再び、天使界へ引き戻すという狙いがあったからだ。

「えーと……でも私、ルーシエ様の屋敷を訪ねるのは初めてなのよね。まずはノックをすればいいのかしら？」

とても戸惑いながらも、リサは屋敷の扉を数回叩く。

「別にそんなことしないで普通に入ればいいじゃん。めんどくさいなあ」

さっさと扉を開くとノールは屋敷の内部へ入る。

「あつ、ノール、待ちなさい！　ここはルーシエ様の屋敷なのよ！」
物凄くリサは焦っている。

「知るか。ボクはさっさとルミナスのここに行きたいから、ここは簡単に行くよ」

「だから待ちなさい！」

結果的にルーシエの了解を得ず、三人は屋敷内へと入った。

「へえ、外観だけでなく中も案外立派なんだね」

屋敷内の装飾や煌びやかな内装。

それが、印象的だった。

「当然でしょう、ルーシエ様の住む屋敷なのだからセンスがあつて当然なの。ルーシエ様は魔界將軍のトップになる程の実力者なのだから、屋敷も権力者級の建物になるの」

「なんか、随分と肩を持つんだね。天使界から魔界行ったのに」

「悪いのかしら？ ルーシエ様の偉大さを貴方は分からないから、そんなこと言えるのよ。ルーシエ様は私たちにとって今でも大天使長であり、優秀な指導者でもあるの」

「はいはい、そうですか」

「ちょっと、貴方。どうしてそんなに人の話を聞かないのよ」

「面倒だからに決まってるじゃん……あつ、やっと誰か来たよ」

ノールたちがいるホールのように広いエントランスに、一人の男性が歩いてきた。

「おお、リサさんじゃないですか。久しぶりですね。誰かの声がす

ると思いましたが、貴方だったのですね」

彼女らに近付いたのは司祭のような身なりをする、どことなく神聖な空気を纏った雰囲気のある男性。

凜とした顔立ち、優雅な佇まいと容貌の美麗さを持ち合わせている。

明らかに女性から持て囃されそうなタイプであった。

「は、はい、ルーシエ様！ 申し訳御座いません、私は何の承諾も無しに入りたくはなかったのですが……この人たちが……」

「いえ、構いませんよ。私を遠路遙々訪ねていらっしやったのですから。それと、リサさん……そちらの方は？」

「あー、ボクは現大天使長のノールです。貴方よりも強いです」

さらっと、トゲを含んだことをノールは語る。

「ボクは春川杏里です」

そんなノールに対して杏里はノールの一言がかなり気不味いと思っ
ているのかオドオドしたような感じで答える。

「そうですか。では、私と一緒に応接間へ移動しましょう」

明らかにケンカを売っているような態度のノールに対しても、優しい笑顔でルーシエは語る。

その後、ルーシエに連れられ、三人は応接間へと向かう。

「ねえ、待たせ過ぎじゃない？」

「確かにそうね。応接間に招かれてから、もう三十分くらい経過しているわ。ルーシエ様に何かあったのかしら？」

現在、ルーシエに応接間へと三人が通されてから既に三十分が経過している。

「あーもう！　ボクはこんなところで待たされるために魔界へ来たんじゃないっての！」

イライラした様子でノールは応接間のソファアールから立ち上がる。

「リサ、悪いけどここからは別行動にしよう。ボクはルミナスのここに行くからね」

「待ちなさいよ、ノール。貴方に勝手な行動なんてさせないわ。とにかく、今は貴方もルーシエ様を待つて……」

「本当に煩いな！　第一、リサよりボクの方が大天使長で階級が上なんだよ！　毎回毎回、ボクを下に見るようなこと言うな！」

「貴方が大天使長だなんて知っているわよ！　でも、職務をしない貴方なんかそんなこと言われたくない！」

二人が言い合っていると、応接間のドアが開いた。

「待たせてしまったね」

「待たせ過ぎだったの！ ボクはさっさとルミナスのここに行くから！」

ノールが怒りながら応接間を訪れたルーシエの隣を横切ろうとする
と、何かにぶつかった。

「ん？」

確認すると、目の前にはルーシエの他にもう一人、別の男性がいた。

「お嬢ちゃん、悪いけどここから出ていっちゃあダメだよ」

「えっ、誰？」

「オレはね、お嬢ちゃん、魔界將軍のブリザードって言うんだよ」

「あーそう、さっさと退いて。邪魔だから」

「それは出来ない。お嬢ちゃんたち三人は今から牢に入ってもらおうよ」

「はあ？ 牢屋？」

「そう、ブリザードが語るように貴方たちには牢へ入ってもらいます。今は邪神になるために少しでも敵となる可能性がある人物を消しておきたいのです」

ルーシエは淡々と語る。

「ルーシエ様、それってどうゆう意味ですか？」

「聞こえなかったかい、リサ。君たちは私が魔界の支配者である邪神になることを妨害する可能性がある。だからこそ、牢に入ってもらう」

「わ、私はルーシエ様の敵になんてなりません！」

「そうですか。でしたら貴方も私に従ってくださいませね？」

「は……はい」

落ち込んだ様子でリサは力なく答える。

「リサ、貴方飲まれてるよ。ルーシエの言うことに耳を貸さない。今、ルーシエは邪神になるって言ったんだよ。天使界とは完全に決別するつもり」

「ええ、そうですが？ 何か問題でも？」

「最初の予定とはもう違うね。行くよ、リサ。彼は天使界に戻らないって言うてくれたし、ここに居ても無意味だよ」

「え、ええ……」

強引にノールが、ソファーに座ったままうなだれているリサを立たせる。

「いけませんね、それは」

リサが立ち上がった時、ルーシェが何かの一節を滑らかに語る。

それは「ハルマゲドン」という上級神聖魔法の詠唱。

凄まじい勢いの光の波動が突如空間に現われ、応接間の三人を襲う。

まだ意識がはつきりしない中、杏里は立ち上がる。

立ち上がった杏里の身体には複数の裂傷痕があり、全身に酷い出血が目立った。

「そつだ……ノールちゃんトリサさんは？」

周囲を確認すると、いつの間にか屋敷の外の庭園まで弾き飛ばされており、近くにノールとリサの姿があった。

二人は抱き合うような格好で倒れていたが、明らかにノールの損傷が激しい。

魔法を放たれた際、瞬間的にノールがリサを庇ったようである。

「嘘……ノール？」

リサの問い掛けにノールは目を閉じたまま答えない。

「おや、生きていらっしやったのですか？ あの至近距離でなら同族の天使であつても上級の神聖魔法で三人とも消せると思っていたのですが…」

既に満身創痕の状態に陥っている三人にルーシエとブリザードが接近する。

その瞬間、杏里はこの状況が如何に最悪かを悟る。

目の前には自らと、そうレベルが違わないであろう無傷の敵が二人。

こちらは酷いダメージにより意識を失っているノール、ルーシエの裏切り行為により一種の錯乱状態に陥っているリサ。

まして自らも既に戦えるコンディションではなかった。

「このままじゃ全滅する」

杏里の脳裏にはその言葉が浮かぶ。

「最初から何も抵抗せずに牢へ入れれば良かったのですよ。もう遅いのですがね」

まだ戦えそうな杏里にルーシエが近寄る。

それに対し、杏里は腰に付けていたサイドパックからトンファーを取り出し、ある魔法を詠唱する。

杏里の詠唱した魔法は空間転移。

一瞬の早さでノールとリサはその場から消えた。

追い込まれた杏里が行える全滅を免れる方法はそれしかなかった。

「貴方は残るのですか？」

一人残った杏里にルーシエは訊ねる。

「三人で逃げても貴方はボクたちを追ってくるでしょう？ それと一緒に空間転移をしたとしても貴方なら逃げた座標を簡単に解析出来るはず。手負いのボクじゃ、逃げながら貴方から彼女たちを守る事が出来ません」

「彼女たちが逃げられるように時間稼ぎですか？ それでは貴方は死んでしまいますよ」

「知ってます。でも、彼女たちが生きているならボクの命は構わない」

「仲間のためになら命さえも厭わないということですか？」

「ボクは簡単に死なないよ」

トンプアーを静かに構えると、杏里は微笑を浮かべる。

「ここは何処……?」

意識を取り戻し、ノールは地面から上体を起こす。

周囲を見ると、足の高さまである青々とした草原に倒れていた。

この場所は魔界に初めて来た際に、現れた草原だった。

それを認識すると同時にノールの全身を激痛が襲い、態勢を崩した。

「痛い……よう……」

「目が覚めたかしら?」

踞っているノールにリサが訊ねる。

「リサ、ここは何処なの?」

「し、知らないわ、私にも分からない……」

震えた口調でリサは答えた。

周囲がどのような場所だったのか判断出来ない程にリサは恐慌状態に陥っている。

「杏里の空間移転で私たちは、ここに飛ばされたみたい。けどそれ以外は分からないの。でも空間移転では魔界から出ることが出来ないからここは魔界のはずよ」

「じゃあ……杏里くんは?」

「あの娘は私たちを逃がすために…」

「だったら、ボクたちで助けに行かないと！」

「行つては駄目よ！」

立ち上がるうとしていたノールにリサは叫ぶ。

「何でだよ！ 助けに行かないと！」

「今戻つたら、あの娘が私や貴方を逃がした意味が無くなっちゃうでしょ！ それに貴方だつて酷い怪我だし、彼女はもう……助からないわよ……」

「彼女？ だったら、リザレクを使って生き返らせばいいでしょ？」

「無理よ、ルーシエ様は禁止令という能力を持っているわ。彼が相手を倒したら、必ず禁止令を使って相手が生き返ることを封じてるの。それにルーシエ様を倒したとしても禁止令が解けるかどうかは……」

「そんな……」

一瞬目眩がしたのか、ノールは草原にぺたんと座り込む。

「今は天使界に戻つて対策を考えないとどうにもならないわ。だって、ルーシエ様が私たちを攻撃したなんて今でも信じられないもの……」

リサの声の震えは変わらない。

今まで信頼していた者からの裏切り、それが彼女の気を動転させていた。

「とにかく、ノール。今は天使界に行きましょう。アクローマ様たちには早く意見を仰がないと……」

ノールに声を掛けたりサは、ノールの異変に気付く。

「ちくしょう……悔しいよ。杏里くんがアンタに何したっていうの？」

ノールは泣きながら、草原の草を握り締めていた。

「くそ……ボクにもっと力があれば……」

次の瞬間、ノールには歪んだ覇気が宿り始める。

それは殺意や憎悪を孕んだ悍しいオーラだった。

「ノール、なんなのその覇気？ 天使である貴方にそんな歪んだ覇気が宿る訳無い……」

「……………」

無言になったノールからはプラズマのような光が発せられ、天使の羽も八翼へ分かれた。

それは天使の最上位の変化、光体化である。

しかし、非常に抑えがたい殺意と憎悪により起きるこの変化は殺戮以外を生み出さない絶対悪に他ならない。

「……………？」

自らの異変にノールは身体を確認する。

酷く傷付いていたはずの身体は完全に治癒されていた。

「リサ、声が聞こえたの。女の人の声が」

「どづいうことなの、それって……………？」

「もう、ボクは行くから」

「ま、待ってよ、ノール！」

リサに反応を殆ど示さないうちにノールは空へと舞い上がった。

邪神になるための戦い

天使の翼をはためかせ、ルミナスは魔界の空を飛んでいる。

ルークやドREAMと同盟を結び、カルナックも倒すことが出来たルミナスは次に倒すべき魔界将軍の下へと向かっていた。

ルミナスがわざわざ天使の翼で空を飛行しているのには訳があった。

それは何故か空間転移で指定した座標軸がずれてしまったため。

先程、ルークの屋敷に空間転移をした際も全く異なる位置に移動されたため、仕方なく空を飛行し格好付けるように地面へ着地したのである。

「はあ……魔王形無しだよ。これじゃあ、私が天使だとはバレてしまっし……性別が何とかって……」

何かをぶつぶつと言いながらルミナスは飛行を続ける。

「でも、そのお陰で次の戦いは楽になりそう。私が天使だと知ったらイーブルは間違いなく、暗黒魔法での戦いを挑んでくるだろうね。大魔導師であるイーブルを暗黒魔法のみに優先させることが出来れば簡単でしょう」

実際のところ、ルミナスは戦ったことのないイーブルを甘く見ていた。

彼の悪いところは何事に対しても軽く見がちな傾向。

それが今回の邪神になると言う思い切った行為をさせたのだが…

ともかく、ルミナスは魔界将軍のイーブルの屋敷へと向かっていた。

一方その頃、イーブルの下にカルナツクの敗北やルーク、ドレアムのルミナスとの同盟についてが他の魔族から通知されていた。

「ああ、本当に困ったねえ……何故若い子たちは、こうなんだろうねえ……」

自身の屋敷のサロンで、年令的に初老に差し掛かった紳士が独り言を話している。

彼の名はイーブル。魔界の大魔導師であり、ミトスの魔界将軍である。

「イーブル様。ルミナスを討伐することが我々や魔族たちの平和と安定をもたらすだろうと私は考えていますが」

イーブルの独り言に対して答える人物がいた。

「クレアちゃん……どうしましたか？」

イーブルに声を掛けた人物はクレアという女性天使。

彼女は魔法の教えを受けるためにイーブルの下を訪れていた。

「クレア“さん”です。そんなことより、ルミナスは何故反乱を起こしたのでしょうか？」

「確かに……私もそれを考えていたところです。元々彼女は、ミトスさんに直々に命ぜられ魔王の称号を授けられました。しかし、今まで彼女は魔王という名に全く固執せず、その権力にも興味を示しません。ですから何故今になって、しかも邪神という権力に縋ろうとするのが私にも分からないのです」

「あの、何故“彼女”なのですか？ 確か、ルミナスは男性のはず……ですが？」

「ああ、そうですね。クレアちゃん、すみません」

「クレア“さん”です。怒りますよ」

「ああ……何故若い子は、こうなんだろうねえ……」

「先ず、イーブルとクレアの二人は屋敷から出る。

二人が屋敷を出ると、上空から何か接近しているのを視認出来た。

それは天使の翼を出現させ、空を飛行するルミナスであった。

「どうやら彼女の方から来たようですね……そして、彼女の狙いはまず間違いなく私でしょう」

「だから、ルミナスは男性。人の話を聞いていますか？」

「聞いていますよ、クレアちゃん」

「へえー、症状は健忘ですか？ 何故でしょうか、私は殺意を抱きました」

「……………」

ニコニコと頬笑みながら話すクレアからイーブルは何かを察し、話すことを止めた。

当然、それは悪寒。

この至近距離からクレアに神聖魔法を放たれるのは、イーブルと言えども正直死に近かった。

数秒後、ルミナスが屋敷の敷地にある綺麗に整えられた庭園へ着地する。

「どうして私を打ち落とそうとしなかったの？」

ゆっくり着地したルミナスがイーブルに問い掛ける。

「最初から打ち落とすつもりなどなかったよ、ルミナス君」

「ルミナス君って……私をバカにしているの？」

「貴方は男性でしょう？ ルーシェ君が変化の原因ですからね」

「私のことを知っているの？」

「はい、私を頼ってきた方々のことは決して忘れませんから。どんな噂などでも」

「噂っていうか、もう知っているじゃん。だったら、私がここに来た理由も分かる？」

「勿論。ですが、戦いませんよ」

「どうして？」

「理由なんてありません」

「なら、私が邪神になっても文句はないね？」

「あります。貴方の邪神になりたいという意志が私には分かりません」

「貴方に話して何かなるの？」

「いいえ、何もありません。ただ、私が納得するかしらないかに過ぎません」

イーブルの返答後、ルミナスは沈黙した。

彼なりに思うことが何かしらあった。

「理由は……それは……」

静かにルミナスは語り始める。

「ミトスとの約束なんだ……彼の身に何かあったら、私が邪神になるって」

イーブルに俯く様子で答えると、ルミナスは天使の翼を出現させる。

「戦わないのなら私はもう帰る。今は貴方だけに構っていられる程、全然暇じゃないのでね」

そういうとルミナスは空へと飛び立った。

「あの人を魔法で打ち落とさないのですか？」

「いいえ、そのような卑劣な行為はしません。それにルミナス君がミトスさんと何故そんな内容を約束したのかも気になりましたしね。それより……」

「それより、何ですか？」

「魔界へ光体化した天使が現れました」

「光体化が？」

「ルミナス君よりも先に止めるべき方がいます。誰なのか知りませんが、光体化のオーラを辿れば簡単に見つかるでしょう」

「光体化した天使に私たちだけで勝てるでしょうか……」

「まず、勝てませんね。それどころか、光体化した人物にとって私たち二人の戦力など皆無に等しいのではないのでしょうか」

あっさりとイーブルは答える。

「それでは仕方ありませんね。放っておきましょう」

「クレアちゃん……それはいけません。イーサン將軍、ブリザード將軍などに支援を求めましょう」

しかし、その頃イーブルの考えを邪魔するようにルミナスがイーサンの決戦のためイーサンの管轄地である西エリアに向かっていた。当然ルミナス自身も光体化のオーラを感じ取り、光体化が魔界に出現したことは知っている。

光体化が魔族にとってどれ程の災厄を招くかも知っていたが、光体化よりもルミナスにとって邪神になることの方がかなり優先されることだったからだ。

「光体化が発生したようね。もし、魔界で光体化した天使がルーシエだったら……私は決して邪神になれない」

空を飛行しながら、そのことを考えていた。

「今頃だけど移動は空間転移を使った方が早い。座標軸は合わないけど……」

結局、ルミナスは空間転移を詠唱し、イーサンの西エリア……のはずが、西エリア付近の何処かまで瞬時に移動をした。

その後、数十分掛けてルミナスはイーサンの西エリア領域内に侵入

する。

ルミナスはイーサンの居場所や屋敷又は城の位置を把握していなかったので取り敢えず国境付近の何も無い荒野のような地帯をうろついていた。

これから起きる戦いのためルミナスが意識を集中しようとする...

「よっっ！」

唐突に何者かがルミナスの肩を叩く。

ルミナスに声を掛けた人物は今までに見たことが無い人物。

見た目は人間年令でいう二十歳くらい。

服装などの外見から剣士と思われるキツネ目をした男性だった。

「君って誰？」

「オレのこと知らないの？ マジかよ、それヤバいよ？」

キツネ目の男性は明らかに気の毒そうな眼でルミナスを見つめる。

「なんか、最高にムカつく。どっか行きなさい」

「いやだね。これからオレはイーサンとルミナスの戦いを見るんだ。それで生き残った奴と戦う。これが漁夫の利作戦の手順でわけ」

「あっそう。それは良かったね」

「さつきから愛想が無いな。一体どうしたの？」

構ってほしいのか、キツネ目の男性がルミナスの肩に手を回す。

「綺麗だね、君って。これからオレがルミナスかイーサンって奴を叩き潰すっていうショーが見れるんだけど見ていかない？」

「良いことを教えてあげようか？」

「えっ、なにになに？」

「私が、これからイーサンと戦おうとしているルミナス。あと、私は見た目はこんなだけど女性ではないよ」

「……………」

キツネ目の男性は啞然としたのか、ルミナスをただ見つめる。

「ははっ、冗談キツいって。神経使っている時のそうゆう嘘は以外と堪えるんだよ」

「君、エルスでしょ？」

「あれ、知ってたの？」

「もう、バカばかりだね」

速攻で魔法剣を作り出したルミナスはエルスを斬り付けた。

「いつてえ……」

至近距離からの不意打ち攻撃だったため、ダメージを受けたエルスはその場にしゃがみ込む。

「君ってバカだろ？ 敵が目の前にいるのにいつまでも攻撃を仕掛けないと思っていたの？ というより、ルミナス……私の顔くらい事前に知っていたらどうなの？ もしかしたら戦う相手になっただかもれないんだよ」

「まさか……こんなに可愛い子がルミナス？」

何かを悟ったエルスは勢い良く立ち上がる。

「お前はオレの作戦を既に看破していたのか……やるな、ルミナス！」

それだけ言うとエルスは全力で逃げていった。

「作戦って、なーに言っているのかな？ さあーて、イーサンはどこかな」

エルスが見えなくなるのを視認すると、イーサンを探すため西エリアの中央に向かった。

西エリア中央へ向かうと大きな都市があった。

都市を囲うように高い城壁が築かれ、敵の侵入を許さない造りになっている。

「ここは昔ミトスと一緒に買い物しに何度か訪れたけど、イーサンの管轄地だとは知らなかった…」

何気なくそんなことを考えながらルミナスは都市内に入るため城壁の城門へ向かう。

何故、空を飛行出来るルミナスが城門から入ろうとしているかには訳があった。

飛行出来る者たちの世界では常道であるが、空からの侵入を防ぐためバリアを張っている。

そのバリアに当たれば、ダメージを受けるうえバリアに阻まれ侵入も出来ず、間抜けが一人完全に気付かれてしまうだけなので絶対に空から侵入する訳には行かなかった。

しかし、上空から入らなかったとしてもルミナスの考えは当然読まれていた。

「君が、ルミナス？」

ルミナスが向かった城門に漆黒に染まる甲冑を身に纏った人物がいた。

その人物は表情を窺い知れないようになるのか、顔全体を覆うヘルムを被っている。

「ここに来ることは、西エリア地区の国境付近へ君が来た時から既に知っていた。それで、君を待っていたよ」

「私の行動はお見通しって訳ね…」

「まさか。君が敵地から離れ過ぎた位置に空間転移をしたから簡単に気付けただけだよ。少し焦っていたのかな？」

「んっ……」

座標軸がズレているため既にバレていたことが分かり、ルミナスはたじろぐ。

「先に言うけど君とは戦わない。君も光体化した天使のことは気付いているだろう？」

「そんなの知らないよ！」

魔力で両手に魔法剣をルミナスは作り、構える。

「逃がさないよ。こっちは命を懸けて戦いに来ているんだから！二度も同じ理由で逃がさない！」

「二度？ もしや、私の他にも迷惑を掛けた者がいるのかい？」

「迷惑だつて！」

「ああ、迷惑だよ。君は今がどうゆう状態なのか分からないのかい？ それに君は魔界將軍と戦うことが重要だと勘違いしているようだけど、魔界將軍に打ち勝てば邪神になれるという訳じゃないよ」

「なっ……」

「多分、ミトス様に勝手なことを言われたと思うけど……そんなに甘くはないよ」

イーサンはルミナスに言い終わると、ルミナスに近付く。

戦わないと言っていることが事実なようで、イーサンから敵意を感じなかったルミナスは構えていた魔法剣を下ろす。

「もう邪神のことを考えるのは止めにして、今は光体化した天使を倒すことに集中しないかい？」

「嫌だと言ったら？」

「武器を下ろしたのはそれを了承したからじゃないのかい？ 全く聞き分けがない子だね。でも、そうゆう子は好きだな」

「キモっ……」

「言っておくけど、男の君に興味があるって訳じゃないよ」

「それは言っても言わなくてもキモい」

「そうかい……じゃあ、二人で光体化を倒しにいこう」

何げに傷付いたのかイーサンの声のトーンは下がった。

「パス。そんなの一人で行きな。私はルーシエへ会いに行く」

「何故、ルーシエ將軍に？」

「理由なんて、どうだって良いでしょ。男の私に興味なんてないはずだよ?」

「そうかい」

仕方なくイーサンはルミナスから離れると、空間転移を詠唱する。

「ルミナス、君が何を考えているのかは分からないけど邪神になりたいのであれば、魔界の平和と秩序を守ることを第一に考えることだ。ただ野蛮に自らの力を振りかざすようじゃ、カルナックと何も変わらないよ」

空間転移で空間移動をする前にさり気なくイーサンは言い残し、消えた。

「言いたいことだけ言って消えたし。でも、一体どうすれば私は邪神になれるのだろうか…」

ルミナスはイーサンが消え去った場所を眺めながら思う。

「ミトス、本当に私だけで大丈夫なのかな…」

「私が一番最後のようだね」

漆黒色の甲冑を身に纏ったイーサンが荒野にいる三人の人物に声を掛ける。

その三名とは同じ魔界將軍であるイーブルとブリザード、それとイーブルの付き人であるクレア。

「ええ、そのようですねえ。イーサン將軍にしては珍しい」

イーブルが答える。

「ルーシエは来れないみたいだ。何でだかは聞いてなかったから知らんけど」

次にブリザードが答えた。

「それより、何故このような荒野なんだい？　ここにいれば、光体化した天使が来るのかい？」

荒れ果て、木々も枯れているような大地をイーサンは見回す。

「ええ、来ますよ。一直線に飛んでいるようですから。クレアちゃんのお陰でルートが解析出来ました」

「はあ……いくら言っても無理みたいね」

イーブルの言葉にクレアは溜息混じりの反応。

「クレアちゃん、どうしましたか？」

「耳までダメになったの？　私には、もう手に負えないわ。運命だと思って諦めましょう」

「……………」

何かを感知したのか、イーブルは沈黙する。

「どうしました、イーブル様？ 私の言葉で気を悪くなされましたか？」

「いえ、少しだけ。それよりも光体化が来ました。クレア“さん”はすぐに逃げられるよう離れた場所に隠れていてください」

「は、はい……………」

「では、イーサン將軍とブリザード將軍は私が光体化した天使を魔法で打ち落とした所を一斉に攻撃し、確実に仕留めてください。もし、一度で仕留められなければ二人は光体化から退いてください。その後、また私が魔法を放ちますのでその繰り返しをお願いします」

「ああ、任せてくれ」

イーサンは親しみ深い口調で答えると自らの愛刀、ツヴァイハンダーと呼ばれる二メートル半程の大剣を構えた。

「今回の戦いは、こいつを生かせると思うよ。何か調子が出てきたな」

それから数十秒後、イーサンたちがいる方角に凄いスピードで飛行する天使が接近しているのを各々が視認した。

ここぞとばかりにイーブルは暗黒魔法ダークマターを詠唱し、光体化した天使を打ち落とす。

「今だ！」

ブリザードの掛け声と共にイーサンは打ち落とした天使に対して一斉に攻撃を仕掛ける。

イーサンは攻撃を開始した瞬間に、光体化している天使が女性であると悟ったが大剣を振り下ろすことを止めなかった。

人体を切り裂く音と共に光体化した天使の身体をイーサンは断ち切る。

「おい。この嬢ちゃんのこと、オレは知ってるぞ」

ブリザードは攻撃の手を止める。

「知っているのかい？」

「この嬢ちゃんは、この前ルーシェの屋敷を訪ねた女の子だ。確か、ノールという娘だった」

「分かったところで何も変わらないよ。この娘は、もう死んだよ」

哀れみに似た目付きで、イーサンは僅かな動きさえ見せないノールを見つめる。

現に、ノールはイーブルの暗黒魔法をまともにくらい撃墜されたうえ、一斉に攻撃を受けたのだから死ぬのは当然である。

ただ、それが普通の状態のノールであれば確かにそうになっていた。

「ぐっ……」

大量の血を口から吹き出す。

ノールは身体の大半を裂傷、切断され、彼女の周囲は血の海と化している。

「痛い……ははっ……」

表情に冷めた笑みを浮かべる。

「邪魔してんじゃねえよ……」

血溜まりに倒れるノールが言葉を発した瞬間、異変が起きる。

周囲の温度は異常な程低下し、酷い寒さが辺りを覆った。

それとともに、ノールの致命的と言って良い程の傷も即座に治り、傷痕一つ残さなかった。

そして、治癒された身体を確かめながらノールは立ち上がる。

「いやぁ……結構やってくれたじゃないの」

「生きているぞ！ 一体、どういうことだ！」

イーサンとブリザードは即座にノールから距離を取る。

「イーブル將軍！ 今すぐ暗黒魔法を放つんだ！」

「分かっていますよ。これは予見の範疇です」

再びイーブルは暗黒魔法をノールに向かって放つ。

しかし、ダークマターの波動がノールに命中する前に、ダークマターは消えた。

「魔法障壁ですか？」

魔法障壁を張られたと考えたイーブルは、より強力な暗黒魔法を詠唱し、再び放つ。

ノールに向かって放たれた暗黒魔法だったが、ノールは特に動じる様子もなく、さっきと同じように暗黒魔法は消えた。

「魔法は効かない。でも、魔法障壁を扱っている訳じゃない。そして、物理的なダメージもボクの身体には残せない。それでもまだ戦いたいのかい？」

「君は何故……光体化になっただんだ？」

イーサンがノールに問い掛ける。

「問い掛けに問い掛けることで返すのは感心出来ないよ。でも、答えるなら……天罰を。まだ、ボクは終われない！」

ノールの身体からはプラズマの様な光が再び現れる。

「逃げていいよ。貴方たちに、これは本来関係のないこと」

「関係ないことって言われてもね。君には関係ないと思えても、こつちとしては関係大有りなんだよ」

イーサンはツヴァイハンダーを両手で構える。

「魔界で天使が暴れるのを見過ごす訳にはいかないよ。これでも魔界を君のような者から護るための魔界將軍なんでね」

「そう、残念」

何かをノールが囁いた直後、ノールはイーサンの視界から消えた。

「……………」

イーサンが気付いた時、自らに起きている自体を理解することが出来なかった。

確か、自分はノールと距離を取りつつ、向かい合う形で大剣を構えていたはずだった。

「空が……見える？ 倒れているのか、私は？」

ゆっくりと腕を動かそうとしたが全く反応はない。

既に感覚のない身体に死を悟り、ぼんやり空を眺めているイーサン

に近づく人物がいた。

それはキツネ目をした男性。

「凄えよ、アンタ。あの攻撃でまだ生きてんだから、よっぽどの実力者みたいだな」

「君は……」

「オレはエルス。お前が生きていたなら助けてやっても良いけど？」

「生きていたいな……初めてこんなに生きたいと思っているよ」

「そっか、それは良かった。こっちとしてもその方が後味良い」

倒れているイーサンに回復魔法を掛けるため、エルスはしゃがむ。

「他の三人つて、アンタの仲間だった？」

「三人？」

ようやく、イーサンは他の三人のことを思い出す。

「オレが見ていた感じだと、二人は即死。アンタと天使の姉ちゃんが生き残った。姉ちゃんって言っても、光体化した天使の姉ちゃんの方じゃないよ。まっ、どっちも逃げちゃったみたいけど」

「ブリザード將軍とイーブル將軍が即死……」

「はあ？ ブリザードとイーブルって？」

「魔界將軍の二人だ。もう魔界將軍ですらどうにも出来ない存在だったなんて……」

「じゃ、そーゆうアンタは？ も、もしかして他の魔界將軍のカルナックかイーサン？ なあ、早く教えるよ？」

何かを思い付いたのか、エルスのテンションはかなり高い。

「……………」

それに対して、イーサンはエルスの考えていることが即座に分かり、言葉を発するのを止めた。

「聞いているのか？」

「カルナックはルミナスに殺された。イーサンもこの世にはいない」

「へえー、残りはルーシエだけか！ オレはツイてるぞ、ルーシエを倒せば邪神確定だ！」

「邪神だつて？ まさか……ルミナスがルーシエに会う理由は、この戦力でも光体化に負けると知っていたからなのか？」

「で、アンタの名前は？」

「イー……イズモだ」

「イズモ……知らないなあ。ニメーター近くあるツヴァイハンダー」

を振り回して戦うのに。魔界の強者は九割型調べたつもりだったんだけど。まあ、いいや。イズモ、お前どうせすることないだろ？」

「さあ、私はもう何をすればいいかなんて分からないさ」

当初予測していた自体を全てに置いて超えていたため、イーサンは混乱し始めていた。

勝利すると思っていた光体化に負け、ミトスの代わりに魔界を守るはずだった魔界將軍も結局は全滅。

そして、この魔界を牛耳ろうとしているルミナス、魔界將軍統括役のルーシエも天使である。

このままではどちらが勝っても魔界が魔族の物では無くなってしまっ、それが混乱の原因だった。

「おい、オレの話聞いている？」

「……どうした？」

「お前、今ボーっとしてたろ？」

「ああ」

「もう一回言うけど、オレの仲間にならない？」

「えっ？ オレには西エリアの……」

「西エリアって確かイーサンの直轄地だったよな。そんなところに

何か用があるのか？」

「あることはあるけど……今は行かなくてもいいかな」

「ふーん、そつか。これから、オレはルミナスとルーシエの戦いを見に行く。今度こそ漁夫の利作戦を展開させてやるじゃん」

「はあ……私のことどう思う？」

ルミナスは問い掛ける。

以前と変わらず、ルミナスは自身の屋敷のサロンで高級なソファに深くと腰掛けていた。

「言わせてもらつたら、自分勝手なクズだ」

問い掛けに答えたのはルークである。

目的を見失いそうになっているルミナスは慰めてもらつため、自らの屋敷へ以前同盟を組んだルークとドレアムを呼んでいる。

「普通、こうゆう時って私のこと慰めたりするはずじゃないの？」

「オレってお前のこと良く知らないし、まだ魔族的に認めてないからな。てかさ、お前最初のやる気が全く感じられないんだけど？ 舐めてんのか？」

「私だつて知らなかった。魔界將軍を倒せば邪神になれるのだと思つていたし……それにミトスがそう言つていたの」

「つーかよ、ミトス様とお前の關係つて何よ？ 言い方からそれなり親しいつて感じに聞こえるけど」

「恋人」

「お前死んだ方が良いわ」

明らかに引いているルークは速答で答える。

「この姿での關係じゃないよ！」

「どの姿だよ」

「実は私、女性なの」

「あーあ、何でオレはこんなのに助けられたんだろう」

酷くルークは落胆している。

「嘘じゃないよー！」

「証拠は？ どうせ、無えだろ。そもそも男だろ、お前つて？」

「ふふっ、証拠ならあるよ。私が女性で、モデルだった頃の裸体を撮った写真が何枚かまだ持つているから。見たい？」

「……………」

何かを考え込むように、ルークは黙り込む。

そして、ルミナスの顔をじっと見つめた。

「どうしたの、黙り込んで？ 見たいの？ 見たいなら探してくるけど？」

「言われてみて思ったけど、お前って男のくせに女性に整形したよ
うな顔付きしてるよな」

「私は整形なんてしてない！」

「怒るなよ、そーゆう意味で言ったんじゃない。確かに女性みたいな綺麗さだっけって言ってんだよ」

「よし……………決めた。私は絶対に女性へ戻る」

「どうやって？」

「ルーシエに魔法を掛けられたの。アイツは私とミトスとの仲を引き裂こうとして私を男にしたってわけ。こんなことでミトスに嫌われたくないし、迷惑も掛けなくなかったから距離を取っていたんだけど……………」

「お前、喋り過ぎ。だったら何でもっと早くルーシエから魔法を解かなかったんだよ」

「私じゃルーシエに絶対勝てないよ。それで、私より階級の高いル

「ルーシエに逆らったことで叛逆罪にされる。私は魔王階級の一人に過ぎないし、罪を犯したとされる魔王階級の一人をミトスだつて大勢を束ねる者として優遇出来ないと思うし、私でも処刑されてしまつかもしれない」

「で、アンタじゃルーシエに勝てないとなるとオレでも勝てないってことになるけど？ オレもドレラムも魔族だから、ルーシエの神聖魔法を受ければヤバイ」

「それなら簡単。光体化がいるでしょう？」

さらっとルミナスは言う。

「それは無理。実質、魔界將軍の連中でも勝てなかつたんだ。光体化をルーシエのとこまで誘導するなんて出来ないだろ」

「少しは考えなさい。というか、私も今考えたところだけだね。オラを感じ取って推測したのだけど、光体化は凄い速度で飛行している方角に丁度ルーシエの屋敷があるの」

「ああ、知ってる。光体化は一直線にずっと飛んでるしな。てかそもそも、その推測はオレがした奴じゃん」

「そう、一直線に休みなくね。しかも、過去に魔界へ現れた光体化とは違う点がある」

「オレは過去のことなんて知らねえけど？ 元々魔界出身じゃ無いんでね」

「話の腰を折るのが上手ね、ルーク。仕方ないから教えてあげるけ

ど、過去に魔界へ現れた光体化は見境無く魔族を殺戮した。理由は知らないけど、光体化は暴れまくったらしいの」

「らしいって……」

「その時と違って今回は全く光体化から攻撃を仕掛けない。恐らくだけど光体化は邪魔する者だけを殺すのだと思うの。だから、魔界將軍たちは全滅させられた」

「そっか、それならルーシエの屋敷辺りから邪魔すれば、そこから攻撃されたと思ってルーシエの屋敷を狙うかもしれないな」

「さっすが、ルーク分かっているじゃん。そういう訳で困は頼むね」

「……………」

完全に誘導されていたことによようやく気付き、ルークは落ち込む。

数時間後、光体化がルーシエの屋敷を通過する時刻より前にルミナスたち三人は空間転移を詠唱し、ルーシエの屋敷へ向かう。

しかし、既にルーシエがルミナスたちを待ち構えていた。

「やはり、来ましたか」

「……………」

静まり返ったようにルミナスたちは黙り込む。

「安易な発想で私の下へやって来たのだと思いますが、君たちなどで光体化を倒すことは出来ない。今すぐに、この場から離れなさい」

「私は光体化を倒すなんてしないよ。簡単な足止めをしに来たの」

「光体化のですかと言いたいところですが、ルミナスさんがここにいる時点でそれはまず有り得ませんね」

「そうだよ、貴方を倒しに来たの」

「そうですね」

二人の周囲に殺気が立ち込める。

「おい、ルミナス。最初に予定してたことと全然違うじゃねえか！」

「良いの、これで。ルーク、ドREAMは決めていた通り罠を頼むよ」

「ああ……分かってる」

ルークとドREAMはルミナスから離れ、どこかに行く。

「一体、彼らは何をされに来たのですか？」

「私の付き添い。気にしなくていいよ」

「でしたら、貴方を殺せば終わり。それで良いですね？」

「一応、そうゆうことになる」

ルミナスが言い終わると同時に、ルーシエは神聖魔法ソレイユを放つ。

ソレイユの光の波動はルミナスへ普通に命中し、ソレイユの威力によりルミナスは数メートル程、弾き飛ばされた。

「何故、魔法障壁を扱わないのですか？」

地面に倒れているルミナスへ不思議そうに訊ねる。

「まさか、貴方程の方が魔法障壁をあの一瞬で張れない訳が無い。もしかすると、ただ単に攻撃を受けたかったのですか？」

「そうだね……意味は後で分かるよ」

倒れた際に衣服に付着した砂などを払いながら、ルミナスは立ち上がる。

「でも、魔族の私にとって神聖魔法は本当に痛い……絶対に三倍返しにしてやる」

「それならば、心配に及びません。禁止令を発動し、貴方の暗黒魔法を詠唱阻止します」

すかさず、ルーシエは禁止令を詠唱し、ルミナスは暗黒魔法を扱ったことが出来なくなった。

「あつ……」

何となく魔力を抑制されたような感覚をルミナスは感じる。

「これで、私に太刀打ち出来る手段を貴方は失ってしまいましたが続けますか？ 貴方も既に気付いていると思いますが、私の能力は貴方を遥かに超えている。魔王の貴方と、霸王の実力に次ぐ魔界將軍統括役の私では戦う前から勝敗など火を見るよりも明らか」

「気に入らない。私が貴方に勝てないなんて誰が決めたの？」

「私です、事実は覆りません」

さらっと当たり前のようにルーシエは答える。

「負けるか、アンタなんかにも！」

即座に魔法剣をルミナスは作り出し、両手に構える。

それを見たルーシエは身構えもせず、やれやれと言った感じでルミナスを見つめる。

「これでいい……私が自棄を起こしているように見せ掛けないと駄目なのだからね」

胸に手を置き、深呼吸をして呼吸を整えながらそう考えると、再び剣を構えルーシエに突撃した。

「もう諦めませんか？」

ルーシエが地面へ崩れ落ちたルミナスに接近する。

戦いを開始してから数分、ルミナスはルーシエに対して一度もダメージを与えられないまま、先程と同じように地面へ倒れている。

「禁止令ばかり卑怯だ……」

「残念ながら卑怯ではありません。私の禁止令を貴方の禁止令で最初から防げば良かったのです。貴方は禁止令を扱えないようですが」

ルミナスがルーシエに敗北を喫したのはルーシエにより、禁止令という補助系魔法を扱われたためである。

禁止令とは対象となる標的の一つの能力を扱えなくさせる効果を持つ。

通常、戦いの前に互いの禁止令を防ぐのだが（禁止令を禁止令で防いでも禁止令のみに禁止令を掛けられた側も掛けることが出来る。

つまり、両者側の禁止令を相殺させて扱えなくさせること）、ルミナスは禁止令を扱えない。

そのため、ルミナスがダメージを受け回復魔法を扱おうとすると寸前に禁止令を掛けられ、その隙に暗黒魔法で即座に反撃しようとしても結局は禁止令を寸前に掛けられる。

これではルミナスが一方的にダメージを受け続けることは当然であ

り、ルミナスは最初からルーシエに勝つことなど不可能であった。

「……そろそろ、回復魔法を詠唱してもいいでしょ？」

回復魔法を一度も掛けられない状態のルミナスは酷く傷付き、既に戦意を失っている。

「それはいけません。貴方からは私に対しての攻撃的な意志が、手に取るように分かりますから」

「そんな訳ないじゃん……行動全てを封じられてるのに、そんな意志がまだあったら私はイカしてるよ……」

「本当にそうですかね？ 私には何かを隠しているように感じられますけど。先程の二人が何らかの形で関連していますか？ さあ、早く答えなさい」

ルーシエはルミナスの真横に立つと、倒れているルミナスの腹部に強烈な蹴りを加えた。

「うう……」

苦痛に藻掻きながら血を吐き、ルミナスは泣き始める。

「その程度の嘘泣きで騙される程、私は甘くありませんよ？」

「嘘泣きじゃないよう……」

泣き始めたルミナスを呆れたようにルーシエは眺めていたが、ルミナスの頭部を強引に掴み上げる。

「私を見なさい」

「もう止めてよ……私は戦えない……」

「ようやく分かりましたか。そうです、貴方が戦う権利など初めから無い。まして、邪神になる権利なども。何故ミトス様が貴方に魔王の地位をお与えになさったか……」

話途中だったが、何かを察知したのか不意にルーシエは上空を見上げる。

「来ましたね……光体化が」

「えっ……」

「では、この場から私は離れたいと思います。貴方はどうしますか？　ここから離れますか？」

「もうほっとしてよ……」

「そうですか」

こちらへと向かってくる光体化の方を見つめながらルーシエはポツリと呟く。

「私は貴方にしたことが間違っているとは思いません。願うなら貴方に……」

瞬間、光体化が恐るべき速度でルーシエを押し倒した。

「えっ………?」

何故上空を飛行していた光体化がルーシエのみをピンポイントで狙ったのか、何故今までの通常飛行速度を遙かに上回る速度で光体化が迫ったのか、ルミナスには分からなかった。

だが、ルミナスは光体化の存在だけは知ることが出来た。

「まさか、ノール………?」

「……………」

不思議な様子でルミナスの方をノールは一瞥したが、殆ど反応を示さないうちにルーシエへと視線を戻す。

「ルーシエ。杏里くんはどこ?」

「貴方が光体化だったのですか………」

ルーシエが問い掛けに対し、ノールは突然ルーシエの右腕を殴り潰す。

ルーシエの右腕はまるで機械にプレスされたような損傷を受け、全く動かせなくなった。

「ぐっ………」

常に冷静だったルーシエの顔付きが激痛により歪む。

「ボクが聞いているんだよ。ルーシエはボクが聞いたことをバカみたいにただ答えていればいい」

「……彼なら、私の屋敷内にいる」

「殺した？」

「はい、彼はとても厄介な強さを有してましたから。そうでもしないと彼を対処出来なかった」

「今は生きてる？」

「生きています。何も覚えてはいないでしょうけど」

「ふーん、そうなの？」

光体化の象徴だった八翼の白い羽が消え、プラズマのような光もノールから消えた。

光体化が解けたようである。

「あの子に、もう手を出さないで」

そう言い、ノールはルミナスの方へと向かう。

「もはや……」

ノールがルミナスに向かって歩んだその隙を狙い、ルーシエは神聖魔法ハルマゲドンを放つ。

しかし、ノールはそれを最初から知っていた。

ハルマゲドンさえも凌駕する魔法デスメテオを詠唱無しで発動。

デスメテオによる黒炎の魔力による隕石はルーシエが放ったハルマゲドンごとルーシエの存在を消滅させた。

それは魔界將軍たちを抹殺した魔法であった。

「ルーシエは気付いていたんだね。結局、ボクが殺すつもりだったことを」

何かを囁くとノールは再びルミナスに近付く。

「ルミナス、どうしたの？」

とても怯えた様子でノールをルミナスが見上げていたので言葉を発した。

「ノ、ノール。私もルーシエのように殺すの………？」

「殺さないよ。ボクはルミナスをもう許してる」

「ルーシエはどうして？」

「杏里くんを苛めたから」

「……私に回復魔法を掛けてくれる？」

「良いよ、じゃあ服を脱いで。今は色々あって、最上級回復魔法工

クスを詠唱する程の魔力が残ってないから」

「うん……」

ささっと黒いドレスを座ったまま、ルミナスが脱ごうとすると…

「あっ、胸がある……ノール、無理よ。今は脱げない」

「どうしたの？」

「私、女性の身体に戻れたみたい」

「えっ？ 女性に？」

「本当だよ。胸も身体付きも元に戻れた」

「ちょっと、さわらせて」

疑っているのか、ノールはルミナスの前にしゃがむと、ルミナスの衣服内に手を入れ上半身にふれる。

「本当に……膨れてる。あっ、ボク初めて他の女性の胸さわったかも。ボクのと肌触りとか感覚が少し違うんだ…」

「私、元々は女性だったの。元に戻れて嬉しいよ…」

感心した様子でノールが酷く傷付いているため抵抗が出来ないルミナスの胸をさわり続けていると背後から声が聞こえた。

「なんか凄く卑猥な光景だな……つか、なんでテメーがいるんだよ

「？」

微妙な目付きでルークはルミナスとノールを見つめる。

「そんなことより、ルミナス。光体化とルーシェはどうした？ お前が女に戻っているところを見ると、ルーシェが死んだってことは分かるけど」

「ああ……それなら……」

「ルミナスが両方倒したよ」

ルミナスが答える前に、ノールが立ち上がってから答える。

「えっ……」

「マジか！ お前本当は強えじゃねえか！」

びつくりした様子でルークは言う。

「私は……何も……」

「とにかく、魔界將軍もルーシェもいなくなったことは魔王のお前が新しい邪神ってことだろ！ ほら、さっさと新しい邪神として魔界全土に発令しに行くぞ！」

「う、うん。分かった」

半ば強引にルークに引っ張られる感じでルミナスは空間転移により消えた。

「……さてと」

彼らを見送ったノールは溜息を吐いてからルーシエの屋敷内へと入る。

屋敷内をゆっくりとした様子で搜索していると、廊下の奥に何かの人影が見えた。

なんとなくそれをノールが追いつけてみると、一つの部屋へと逃げるように消えた。

ようやく見つけたと直感したノールは急いでその部屋へ入った。

「杏里くん？」

ノールが部屋に入ると、高級なホテルのように整った室内に執事としての黒い衣装を身に纏う杏里の姿があった。

「やっぱり、杏里くんだ。凄く心配したんだよ」

久しぶりに杏里と対面したノールは安堵した表情で杏里に頬笑みかけたが杏里の様子は違っていた。

おどおどしたような恐がっているような感じで部屋の隅まで下がる。

「どっしりよう……逃げられない……」

「どっしりしたの？」

「こ、来ないで！」

「はあ？ 今なんつった？」

微妙にイラツときたのか、ノールの口調は悪い。

「てゆうか、何なの君は。ボクが死ぬ気で戦って君を助けに来たのに君は何をやってるの？ その格好ってさ、執事のもりかい？ ルーシエに負けたからって彼の執事してますってことかい？」

そう言いながらも杏里に駆け寄り、優しく抱き締める。

「でも良かったよ、またこうして会うことが出来て。貴方のノールが今来ましたよ」

「貴方は一体……？」

「えっ、ちょっと、何言ってるの？」

その時、勢い良く部屋の扉が開いた。

「ノールちゃん！」

入ってきたのは、アクローマとリサであった。

しかし、アクローマは普段とは明らかに違っていた。

とても殺気立った強力な気を発する、普段の何処か抜けている状態とはまるで異なる完全な臨戦態勢だった。

「あれ、ノールちゃんもう光体化してないじゃん。しかも間が悪かったみたいじゃないの。貴方たち、キスでもするわけ？」

杏里を抱き締めているノールを見て、アクローマは語る。

「アクローマ、どうしたの？ 凄く殺気立った感じだけど」

一応、アクローマたちの目を気にしたのか、杏里からノールは離れる。

「そんなこと簡単に分かるでしょう？ 貴方を刺し違えたとしても……いえ、刺し違えるは100%違うわね。貴方を正気に戻すため、私の命を懸けようしたのよ」

「そう？ でも、ボクはずっと正気だったよ。声が聞こえてから身体が変わっちゃったみたいなんだよね」

「声を……ついに貴方は聞いたのね！」

「アクローマって何か知ってるの？」

「そりゃそうでしょ、私は荒廃の天使と呼ばれる以前からR一族派よ。貴方にこれから起こる身体の変化なら私は全て分かるわ」

「例えば？」

「最初から説明すると、戦う意志の目覚め 感情の変化 意志の变化 身体の弱体化 声による変化 覚醒 二度目の覚醒 さらなる進化よ。でも普通、身体の弱体化なんて起こらないはずだから私がその手順を無理矢理にでもさせようとしていたのだけど」

「それなら、アーティがボクにレベルの経験値分けを……」

何かを悟ったのかノールの顔が青ざめる。

実際は自身をより強くするために、殺すためだけにシスイを創りだしてしまっただのではないかと思っただからだ。

「貴方は着実に成長しているみたいね。いえ……貴方を誘導しているかのようにね」

「言ってる意味が分からないよ！」

「貴方はただ、貴方の生活をしていればいいわ。理由がどうあれ、貴方はシナリオ通りに強くなっていけるのだから」

「シナリオ通り……？」

「私がさっき言った貴方の成長順序のことよ。一子相伝で組み込まれた、この成長過程は貴方を総世界の新たな統括者へと導くためのものなの！」

「……………」

黙ってしまったノールから杏里へとアクローマは視線を移す。

「だーから、貴方は何で今でもその眼鏡くんと一緒にいるのよ！」

「そんなの……決まってるじゃん。心から愛しているからだよ。それ以外、ボクに理由なんて無いよ」

「何なのよ、もう。若い貴方なんかに変なんて語られたくないわ！
全く、羨ましいじゃないの！ てゆうか……なんか変ね。眼鏡く
ん」

何故か悔しがっていたアクローマであったが、杏里の異変に気付く。

「あつ、アクローマも気付いた？ ボクもね、なんか変だと思った
んだよ」

「ちよつといらっしやい、眼鏡くん」

アクローマは杏里に手招きする。

「は、はい！」

ぎこちなく反応すると、アクローマに近寄る。

アクローマは近寄った杏里の両肩に手を置きながら、杏里の目を覗
き込むように見つめた。

「あ、あの、どうしました？」

「静かにして。静かにしないと頬を叩くわよ、桜沢杏里くん」

「ボクの名前は春川杏里ですよ？」

「今はね、でも後先貴方は気が付くわ。その時は絶対にただじゃ
済まないわよ」

杏里の肩をアクローマは置いている両手で強く圧迫する。

「痛いっ……止めてよ!」

「仕方ないわね、ノールちゃんの方から本気で殺気を感じるから止めてあげるわよ。感謝しなさいよ、全く」

アクローマは杏里の肩から手を離す。

「アクローマ、何か分かったの?」

ノールがアクローマに聞く。

「ええ、分かったわ。凄く嬉しいことがね。眼鏡くんはリターンという魔法の影響を受けているわ」

「何それ?」

「眼鏡くんに流れていた時間を巻き戻した魔法よ。多分、ルーシエが彼に掛けたんだと思うの。彼の時間がどれ程の期間巻き戻されたか知らないけど、ノールちゃんのことから分からない様子を見ると貴方に会う以前に彼の全てを巻き戻されたみたいね」

「……………」

「感付いたようね。そうよ、眼鏡くんは貴方と今が初対面よ」

「……………」

無言のまま、アクローマの話聞く。

「悲しいけど、初対面じゃ貴方のことを知らないなんて当然よね。貴方が眼鏡くんを愛していたとしても、それは一方的な愛よ。引いちやうくらいのストーカーよ、ノールちゃんがやっていることは。さあ、これで貴方は眼鏡くんと何の接点も無くなったわね。とつても私は嬉しいけど、貴方も最高に嬉しいでしょう?」

「アクローマ様、それは幾ら何でも言い過ぎです。それにリターンは……」

「リサ、それ以上言ったらマジで殺るわよ」

「ええっ……申し訳御座いません……」

アクローマに睨み付けられたリサは萎縮し、俯きながら謝る。

「良いのよ、分かってくれば。あと、ここで長話するより、天使界へ一旦戻りましょうか。ノールちゃん、貴方はちゃんと眼鏡くんを逃がさないように連れてくるのよ」

「うん……」

ノールは泣きそうになっている杏里の手をゆっくりと握った。

第二三部、第二九部までのキャラ設定など

第二十三部、第二十九部までに出てきた組織、キャラクター、世界観、種族の細かな設定を載せていこうと思います。

ついでに作品内の時間経過ですが第二十九部終了時点で、第一部開始から約三年の歳月が経過しています。

名前（年令、身長、種族、出身地、性格、特徴や価値観の順です）

R・ノール（年令20才、身長174cm、水人の女性。現状に苦しみ、何の希望も見出せず死にたがっていたが、杏里の優しい愛を感じて再び生きることを選んだ。それによってなのか愛という意味を身を持って理解し始めた。未だに恥ずかしいという感情が無い。シスイに関しては自身が再び生きようとした日を以降、恋人である杏里に対しても一言も語っていない。常に明るく振舞ってはいるが、元々深く悩む方なのでこのことに関してても結局は一人で抱え込もうとしている。それも原因の一つなのか、自らの価値を問われる発言には致命的な程にトラウマを感じている。覚醒した際、祖先の言葉を聞き、ついにR一族として自覚し始めた。力を取り戻したのも、ルーシエを殺すために身に付けた光体化もこれによるもの）

春川杏里（年令19才、身長166cm、天使の男性。ノールを心から本気で愛することを決意した。ノールと異なり、楽観的なところがあるためノールが既に立ち直っていると普通に考えている。無

理やり押し付けられたメイドの仕事をしている内に、ノールより綺麗で可愛くなり、接客担当のパラーメイドをしていた。メイドの仕事は杏里にとっては如何に男性だとバレないように振舞えるかの日常だったせい、立ち居振る舞いは最早女性である。現在はルーシエからリタールの影響を受け、三年間分の時間が巻き戻されている。三年間分の時間が戻されたことにより、ノールを知らない)

R・ミール(年令17才、身長168cm、天使の男性。ジャスティンのアプローチにより、ジャスティンと付き合うようになった。ジャスティンのことを常日頃から男性だと思っていたため、最初は非常に嫌がっていた。クロノの提案で現在はスロートの中将を務め、ジャスティンや少数の兵士とともに各国を巡り、同盟協議を行なっている。姉のノールに杏里が恋人として付き合うことを黙認するようになった)

ジャスティン(年令17才、身長161cm、天使の女性。旧メンバー全員に女の子だと認知されているが未だに男装している。ミールは男装しているジャスティンと街などで手を繋ぐなどして親しく出歩くことが苦手。ミールの誤解を解くために身体を張って、ミールを自身の恋人にした。クロノの提案で現在はスロートの少将を務め、ミールや少数の兵士とともに各国を巡り、同盟協議を行なっている。男装しているせい、杏里と同じく同性からでも異性だと見られることがある。ただし、杏里の場合は100%に近い程なのでそれ程でもない)

ミトス(年令351才、身長178cm、魔族の男性、階級は邪神。消息不明となつているが死んだと見なされていたために魔界の均衡が崩れた。魔界の統括者としての立場にあつたが自由主義だったため統制的なことは殆ど何もしていないし、魔族たちに対しての口出しも余りしていなかった。アクローマと同じくR一族派の人物。ル

ミナスとは内縁関係となっている)

ドレッドノート(年令428才、身長169cm、魔族の男性、出身は魔界。思慮深い性格。自身の危機をなるべく減らすために幻人を作り出す能力を駆使して他の世界を侵略している。元々これは別の何かの目的があつて行なつていたようだが、ドレッドノート自身が死んでいるため理由は分からない。幻人を大量に生み出せる能力を持っている。魔界のNo.2として霸王階級に位置する人物であり、ミトスの右腕とも言える側近。無限に近い魔力を持っていたがルインに殺された)

ルミナス(年令97才、身長171cm、魔族の女性。魔法剣の使い手。元々はエルフ族だった。“もし、自分がいなくなったら次はルミナスが邪神になつてほしい”というミトスとの約束で自身が邪神になろうと決意した。実際は女性であり、ルミナスはミトスの恋人であつた。しかし、それを由としなかったルーシエに男性化させられたため、ルミナスはミトスと出会うことを避けていた。その後、ミトスが死んでしまったとルミナスは知り、ミトスとの約束を守ろうとした。現在は実際に魔界の邪神となり、新たな魔界の統括者となつた)

ルーク(年令28才、身長177cm、魔族の青年、階級は魔神、明るいが捻くれていた性格。魔法剣の使い手。元々は人間だった。魔神階級に位置する身であるが権力に属さないフリーの魔神のであるため権力闘争には無関心だった。ルミナスに戦いを挑まれた際、権力に興味が無かつたため断ると逆に友好的とルミナスに勘違いされ、結局は諸々の事情で手を組むことになつた。この行動によつて結果的にこれから魔界の中心的な魔族になる人物)

ドREAM(年令66才、身長183cm、魔族の青年、階級は魔神、

冷静で律儀な性格。強力な槍術使いであったが、ルインに負けて以来は大鎌を用いて戦う。ルークの召使いで、ルークと同様に元々は人間だった。ルークの一番の理解者であり、ルークとともに家族を殺した人物を探している)

ブリザード(年令362才、身長177cm、性格はオツサン風。水人でありながら魔界の東エリア地区の統括をミトスに任された人物。しかし、ミトスが消息不明になってからはルーシエと手を組んでいた。能力や魔力が高く、水人化最高位の水帝化が出来る程の力の持ち主だった。ノールの光体化した状態からのデスメテオにより一撃で死亡)

カルナツク(年令249才、身長195cm、性格は猪突猛進で自分主義。魔界の南エリア地区最強の蛮族の炎人。ネクロマンサーの能力を駆使し、死者でありながら死んでいないという矛盾した不死身の身体を持っているため今まで無敗を通していった。死者としての立ち位置から最も分の悪い天使であるルミナスと戦ってしまい、神聖魔法を受けて無に帰された。相性の悪いルーシエ、ブリザードとは同盟の関係を結んでいた)

イーサン(年令338才、身長180cm、頭部から足先までを包む漆黒に染まる甲冑を身に纏った人物。ダークナイトという兵種をしていたため、見た目は現在でも変わらない。全身を漆黒の甲冑で纏うという威圧的な風貌だが温和な人柄である。魔界の西エリア地区統括。ツヴァイハンダーと呼ばれる二メートル半の大剣を振り回せる程、剣の扱いには手馴れている)

イーブル(年令411才、身長171cm、お節介な感じの性格であるが本人に悪気はない。大魔導師として多彩に魔法を扱うことが出来る。ミトスに魔界の北エリア地区統括を任されている。魔法の

指導をしているため、様々な世界から魔法を習いにくる者がいる。ドレッドノートはイーブルの魔法の師である。光体化したノールからの魔法デスメテオにより死亡)

クレア(年令183才、身長164cm、優しく才色兼備な女性だが、イーブルにはとても厳しい。イーブルを尊敬していて、天使ではあるが魔族のイーブルの弟子になっていた。元々は智天使の階級だったが魔界に来る際、けじめとして職を辞した)

エルス(年令不明、身長172cm、天然な性格。強力な能力を秘めた魔導剣士ではあるが、何故か運に頼ろうとする傾向がある。キツネ目をしている。魔界でミトスが死んだと聞いたので他の世界出身だが魔界を統一しようとしてきた。イーサンを味方に付けられたので漁夫の利作戦を展開しようとしたがノールの異常な強さを目の当たりにし勝てぬと悟り、逃げ出していた。現在はイーサンが正体を明かされ、イーサンの部下として今は働こうとしている)

ルーシエ(年令210才、身長172cm、冷静沈着で何事にも動じない性格。司祭のような身なりをする、どこことなく神聖な空気を纏った雰囲気のある男性。凜とした顔立ち、優雅な佇まいと容貌の美麗さを持ち合わせているため女性から持て囃されそうなタイプ。能力的に女性が優位な立場を取れる天使階級で大天使長まで上り詰めていた人物。何があつたのか、ノールが天使界へとやってくる数十年前に大天使長としての地位を捨て、魔界へ向かっていた。因みにルミナスを男性化させたのは四年前)

リサ(年令76才、身長157cm、冷静さを装っているが実際は臆病。アクローマの指示を受け、魔界にはルーシエ、ラーズの説得を目的としてノールたちに同行した。天使階級では智天使の位置にいる)

クロノ（年令24才、身長175cm、人間の男性。冷静で知性派だがぼんやりするのが好きなため、端から見ればそうは見えない。現在はスロートの議長、軍総帥を兼任している。膨大な勤務時間に疲労困憊しているがその雰囲気も殆ど出さない。貴族階級者からは非常に嫌われているが、領民たちからは人の上に立つ人物はスロートにはクロノしかない」と圧倒的な支持を受けている）

ゲマ（年令不明、身長176cm、美形で頭脳明晰の非常に優秀な人物。腰の辺りまで長いロングヘアの金髪をし、滑らかな白い肌を持つ華奢な男性。剣術、魔術ともに優れているため見た目と異なり戦闘向き。ある強力な特殊能力を有している。正義感が強く、自らの能力で自らが求める平和な世界に導けるような環境を探していた。ゲマが平和や正義などを考えるようになったのは、ある人物の説法による。別の世界から来た人物。レベルは変化なしの状態でも15万程で通常とは一線を画す能力を有している。ゲマはソルを弟のように思っている）

ソル（年令自称200才、身長180cm、自分勝手にデリカシーもなく何も考えていないように見えても実際は良い人。元は剣闘士だった。自らの筋肉を見せびらかす筋骨隆々とした傭兵風の姿をした男性。トウハンドソードという巨大な剣で戦う炎人。友人関係のゲマの意見にはいつも賛成している。ゲマのように強力な能力を有している。レベルは変化なしで10万程度）

テイル（年令54才、身長166cm、種族は人間。普段は紳士的であるが気に食わない自体が起こると典型的貴族な態度を取る。知識人であり戦術家なため戦争では軍師として活躍する。スロートの貴族たちの大半はクロノよりもテイルの方が帝として考えている）

時雨（年令43才、身長173cm、種族は人間。性格は典型的な貴族。テイルの側近で、テイルを尊敬している貴族の一人。貴族以外の者への態度は傲慢な時が多い）

ミラデイン（年令41才、身長169cm、種族は人間。性格は典型的な貴族。概ね時雨と同じような境遇）

世界、能力などの設定

ジェノサイド（総世界政府クロノスの機関の一つ。担当は大まかに言々と暗部の仕事）

異世界空間転移（空間転移の応用。天使界、聖域、魔界、悪魔界へ行くための魔法。天使、魔族、悪魔しか習得出来ない）

封印障壁（標的となる相手を結界の中に封じ込め、動きを封じる魔法。封じ込められた標的は結界の中から出られない。しかし、結界が無敵であるため結界の中に閉じ込めた標的にダメージを与えることが出来ない。応用としては相手が確実に防御不可能な魔法や攻撃をした場合、やり過ぎせることが出来る）

禁止令（標的となる相手の魔法、能力の内一つを封じる魔法。魔法などを使う直前に禁止令をされると禁止令を受けた者は隙が生じるため、能力の高い者がまず行なう手段。しかし、お互いが禁止令を扱えば効果は消える）

リターン（標的となる相手の時間のみを過去に戻す魔法。身体や記憶、能力全てが過去に戻るため禁忌の魔法とされている。魔法影響の条件は相手がその影響を望んでいる場合のみ有効。戻せる時間は長くとも三年程度が限界。リターンを一度かけられたら、もう一度リターンをかければ元に戻る。未来にする魔法は存在しない）

光体化（普通の天使の状態から、羽が八翼に分かれ、プラズマのような覇気が現れる天使の最上級形態。しかし、変化には大きな副作用がある。その副作用とは、憎悪や殺意の感情が増大すること、殺戮による快楽を求めること。だが、この変化を行える者は既に覚醒者なので理性を紙一重で何とか保つことが出来る）

成長順序（戦いの目覚め 感情の変化 意志の変化 身体の弱体化 声による覚醒 光体化 二度目の覚醒 覚醒体までがR一族のノールのみに与えられた一子相伝の成長順序。このまま成長すれば、身体を一切鍛え無くとも最強といっても過言ではない身体を得ることが出来る。しかし、両親やR一族の関係者を知らなかったノールはアクローマの言葉でようやく自身が一子相伝の能力を備えていることに気付かされた）

水、炎、雷人の身体について（？魔力体の身体は、人間とは大幅に異なる。そのため、病魔に苛まれることが無い。というか、出来ない。？自らが死を選ぼうとしても死を受け入れることが出来ない）

「魔界と組織図」

魔界は他の世界で語られているような重く暗い雰囲気はない。

魔界は魔族で元エルフのミトスを頂点とする世界で、魔族が約一億

人程暮らしている。

階級は邪神を最高位に霸王、魔界將軍統括役、魔界將軍、魔王、魔神、魔族の順。

魔界の階級（ミトスが邪神だった状態を表記）

邪神

ミトス

霸王

ドレットノート

魔界將軍統括役

ルーシエ

魔界將軍

カルナツク、ブリザード、イーブル、イーサン

魔王

ルミナス、その他九名

魔神

ルーク、ドREAM、その他八名

以前は（と言っても百五十年前）、一種優位主義な風潮があったため魔界には魔族たち以外の種族が殆ど存在しなかった。

しかし、その魔界にミトスというエルフが訪れてから全てが変わっていった。

現在では元々が魔族では無い者たちが大勢高い階級に位置する者となっている。

ただし、選抜については非常に適当で、方法はミトスの独断が二割、ドレッドノートの思い付きが八割を占める。

実質的にはミトスが何もしていないため、ドレッドノートの政策で全てが纏まっている。

「天使界と組織図」

天使界は普通の世界と異なり、地面が全て雲で出来ている。とはいえ、空中に浮遊している訳ではない。

天使界は天使の女帝アクローマを頂点とする世界で、天使が約一億人程暮らしている。

階級は女帝を最高位に大天使長、熾天使、智天使、天使、見習い天使の順。

天使界の階級（ノールが大天使長になった状態を表記）

女帝

アクローマ

大天使長

ノール、レイディアント、桜沢有紗、白瀬向日葵

熾天使

ヒカル、九澄冨良、ルミナス

智天使

リサ、ラーズ、グリード

以前は（と言っても百五十年前）身分意識が強く、能力が無いにも関わらず貴族や上流階級のみが世襲制により、大天使長や熾天使などの高い階級に就任することが出来ていた。

そのせいもあり、私服を肥やそうとする者が多く現われ、政治などの腐敗が目立った。

そんな中、貴族の血縁でありながら反政府活動を行っていたアクローマ、レイディアントの率いる組織がクーデターを起こし、成功する。

クーデター後はアクローマを女帝とし、貴族階級や世襲制を廃止し、能力が高い人材を抜粋してそれ相応の地位にセットする実力主義の世界になった。

そこには種族の差なども全く関係なく、元々天使でなくとも上級階級になれる。

ついでに女神という変化は確かに神を現しているので女帝と並ぶ影響力がある。しかし、政治や権力に執着が欠片も無いノールが女神になったせいaka影響力は全く無いに等しい。

事実の影響

「はい、早速だけどノールちゃんは私と一緒に訓練所へ行きましょ
うね」

空間転移により魔界から天使界のアクローマの宮殿前へとノールた
ちが着いた時、アクローマがノールに語った。

「何で？」

「今の貴方の能力をどの程度なのか確かめたいからよ。さあ早く行
きましょう。あと、眼鏡くんは別室で待機ね」

「はい」

何故か既に眼鏡くんとして定着している杏里は力なく頷く。

「リサ、貴方は眼鏡くんから色々と聞き出さない。記憶が無い時
点で効果は薄いだらうと思うけど、よろしくね」

「分かりました、アクローマ様。さっ、杏里。私とともに来なさい」

「はい」

リサに手を引かれ、杏里は何処かに連れられていく。

「杏里くん何かするの？」

「いいえ、別に何もしないわ。ただ、眼鏡くんには眼鏡くんの家族

へ会わせてあげるの。ふふっ、桜沢一族を騙すのなんて簡単だから天使界にもう一人いるのよね。今は私の手駒よ」

「へえ……そうなんだ」

「そんなことよりも訓練所へ行くわよ。貴方が大天使長になるため、グリードと訓練していた場所だから場所くらいなら分かるでしょう？」

数分後、ノールとアクローマは訓練所へ着く。

以前、ノールが神聖魔法プラネットを発動し、崩壊してしまったので新たに建設された訓練所は新築に近い。

「聞いてなかったけどさ、ここでボクは何するの？」

「貴方がどれくらいの強さを計るのよ。早速で悪いけど女神化か光体化をしてくれる？」

「別に良いけど……ボクは光体化だけはしたくない。光体化したせいで、ボクは魔界でまた人を殺してしまったの……」

「そんなこと構わないわ。貴方が殺してしまったのなら、そこで死んでしまうのがその人たちの運命だったのよ。それが分かったのなら光体化しなさい。貴方が歯止めを掛けている場合じゃないのよ」

「分かつ……たよ」

落ち込んだ様子でノールは全身へ魔力を急激に高める。

すると、ノールの背中には天使の六枚の羽が現れ、女神化の形態になった。

「次は光体化しなさい」

「……………」

無言のまま、再びノールは魔力を高める。

魔力を高めたことにより、ノールの背中の羽は八枚に増え、プラスマのような光の覇気が発せられた。

「ノールちゃん、まだ意識は保ってる？」

「意識は大丈夫。でも苦しくて辛い、吐きたい…………泣きたくなる」

「もっと、魔力を高めることは出来る？」

「もう無理…………これ以上、心の中に殺意を増やしたくないよ…………」

「嘘吐かないでよ、貴方がその程度じゃないくらい私は分かっているわ。私だって光体化が出来るのに貴方がそれ以上出来ないなんてこと、絶対無いわ」

「でも、これ以上変化するとボクは本当におかしくなっちゃうと思っ……………」

「安心しなさい、貴方は“覚醒化”出来る。シナリオ通り、全ては順調に進んでいるのだから」

「……………」

不意に、アクローマの首にノールは両手を添える。

「どうしたの、ノールちゃん？ 何をしたいのかわかるけど聞いてあげる」

「アクローマを……殺したい」

両手に力を加え、アクローマの首をノールは急激に締め始める。

「構わないわ、貴方の好きなようにしなさい。その代わりに、貴方が次の新しい女帝よ？」

一瞬苦しそうな表情を示すが、死に対して全く臆していないのか頬笑みの表情をアクローマは浮かべる。

「……………」

ノールはアクローマの首筋から手を離す。

アクローマの首には両手で締めた痕跡がはっきりと分かる程の痛々しい内出血の跡が残っていた。

「止めるの？」

「アクローマは沢山の物を背負ってるもん。ボクがアクローマを殺すなんて絶対にしちゃいけない」

「優しいのね、ノールちゃん。でも、総世界にとって貴方の方が私

なんかより大事なの。貴方の方が多くの物を背負っている。貴方は選ばれた人なのよ」

「……………」

「それはそうと、私も焦り過ぎたみたいね。変化は貴方の心のタイミングにもよるものね。光体化を解いていいよ、ノールちゃん」

「うん……………」

光体化の状態から元の人間化した状態へとノールは戻った。

「さて、これから忙しくなるわ。魔界が統一されたみたいだから天使界もさっさと統一しないとね」

「天使界ってアクローマが女帝として統一しているんじゃないの？」

「この天使界だけはね。でも、もう一つ天使界は存在するの。魔界や悪魔界は一つしかないのに不思議に思ったでしょう？」

「いや、もう総世界自体に沢山の世界があるから何個あっても何も思わないっていうか」

「反応うつすいわね……………少しはリアクション取りなさいよ。えー、それ本当？ アクローマお姉様、是非とも聞かせて〜とか何かあるでしょう？」

「……………お姉様とか」

微妙な含み笑いをノールは表情に浮かべる。

「他にある天使界は聖域という名前をしているわ。簡単に言うと神を信じている天使たちが住む世界ね」

「あれ、流した？ そういえば、初めてアクロマに会った時、この天使界では神を信じていないって言ってたね」

「そうよ。存在しない偶像でしかない物に願くい、祈るるだなんて愚かたしか言いようが無いわ。というよりも、それらをしたらその時点で人生の完封負け。でも、何か支えが無いと生きていけない人だっている。それが聖域に生きる負け犬（彼ら）よ。最近ずっと交流が無かったから私の方から会いに行かないと」

「ふーん」

「ああ、それと忘れそうだったから言うけど、眼鏡くんに早く会いに行った方が良かったわよ」

「どうして？」

「もうすぐ彼の兄弟である桜沢有紗と桜沢綾香が私たちから眼鏡くんを取り返しに来るわ。ふふっ、楽しみじゃないの。今の貴方の実力なら一網打尽ね」

「やだよ、戦うなんて!」

「それじゃあ、駄目ね。眼鏡くんは彼らに連れて行かれて貴方を倒すために強化されるのは間違いないわ。しかも、貴方の記憶自体無くなっている眼鏡くんなら何の疑いもなく愛していたノールちゃんを殺すでしょうね」

「そんな！ 杏里くんがボクを殺すなんて嫌だ！」

「そんなに嫌なら、さっさと桜沢有紗と桜沢綾香をぶっ倒してきなさいよ。ついでに眼鏡くんはリサと一緒に宮殿の外にいるわ」

「うう………」

どうすれば良いのかわからないうちにノールは宮殿の外に向かって駆け出していた。

「ねえ、有紗さん。ここに杏里くんが本当にいるの？」

「そうだよ、綾香。離れ離れだったオレたち兄弟が、ようやく一緒になれるんだ」

「そうね。私、すっごく嬉しいな」

一面が雲で出来ている地面を歩きながら桜沢有紗、橘綾香、ルインの三人は宮殿へ近付いていた。

彼らは先程リサからの伝令ケイタイのメールを受け取り、桜沢杏里を天使界で匿っていると知らされ天使界へと来ている。

「でもさ、あからさまに怪しいって思わない？ アクローマとかって名前さ、私どっかで聞いたことあるのよね」

疑っているのか、ルインは気が進まない。

「それならそれで構わないよ。実際に杏里がいるかもしれないだし。それに行かなきゃ分からないだろう？　もしも、アクローマ様と戦うことになったとしても何度か仮想敵として戦うイメトレしているからオレが勝てるよ」

「有紗って桜沢一族関連の人以外、誰かを信じたことないでしょ？」

「そうだけど、ルインは勘が良いね」

「貴方って……」

「それ以上言わないでくれる？　その程度のことでも同情なんてされたくないよ？」

「有紗さん」

「綾香、どうしたの？」

「エージ君の家から、ライル君たちも連れてきた方が良かったんじゃないかしら。だってほら、凄く綺麗よ。雲が地平線の向こうまで続いている……とても幻想的」

うつとりとした様子で綾香は雲で出来た大地に見惚れている。

「そうだね、綾香。ここは綺麗だ」

「私、思ったのだけど」

「何だい？」

「空間転移でさっさと杏里くんがいるアクローマさんの宮殿まで行かない？」

「言われてみれば……」

早速、有紗は空間転移を詠唱し、アクローマの宮殿まで移動した。

空間転移をし、有紗たちがアクローマの宮殿前まで来ると二人の人物が目に入った。

それは、リサと少し怯えた感じの杏里である。

「あっ……」

リサは有紗たちに気づき、声を出す。

「やあ、リサ。それと……そこにいる君が杏里なのかい？」

「はい……ボクは杏里と言います」

「やっぱり、君が杏里なんだね！」

嬉しかったのか有紗は杏里に駆け寄り抱き締めた。

「オレは君の兄の有紗だ。それと綾香のことはもう知っているだろうっ？」

「えっ、あの……」

「久しぶりね、杏里くん」

綾香も駆け寄ろうとしたがルインに腕を掴まれ立ち止まる。

「どうしたの？」

「あの子は、リターンを受けてる。貴方と会うのは今日が初めての状態になっているわ」

「何言ってるの？」

「そうゆう魔法が総世界にはあるのよ。でも、大丈夫。私もリターン詠唱出来るし。リターンを二度掛けすれば元に戻るわ」

「それなら、杏里くんは大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ。でもあの子がどうしてリターンなんて掛けられたのかしら？ 不思議ね？」

数分程、有紗たちが杏里に出会えたことで会話していると宮殿の入り口から急いで出てくる人物がいた。

「あっ、ノールちゃんじゃないの」

綾香がノールに気が付く。

「えっ、綾香。今、ノールって言った？」

「どうしたの、ルイン？」

「ネーミングから言って100%R一族じゃない！ 確実に仕留めてみせる！」

ノールという言葉に過剰な反応をしたルインは速攻でノールに襲い掛かり、攻撃を仕掛ける。

しかし、顔を狙ったストレートのパンチはノールの水人化により軽く躲かれ、ノールの水に変化した身体を激しく水音を立たせながら素通りする形でルインは態勢を崩す。

「わっ……！ なにいまの！」

水人化によつて躲したノールも、第六感的な反射に近い形で偶然に攻撃を躲せたのでとても驚いている。

「あはっ、水人なの！ ゴメンね、気付かなくて！ 電気を駆使して殺つてあげるわよ！」

態勢を崩していたルインは即座に態勢を立て直し、自らの全身へ魔力による電流を流すと、水人化しているはずのノールを掴み上げた。

「水人はね、アンタみたいに水人化すれば無敵だと勘違いしているみたいだけどさ！ 自身の身体に電気を流せば簡単にふれられるのよ！」

そのままルインは掴み上げた状態からノールを雲の地面へ叩きつけ、仰向けに倒れたノールに馬乗りの形で乗ると、ノールを殴ろうとした。

だが、ルインの動きはピタリと止まる。

ルインの振り上げた腕を綾香が掴み、殴らせないようにしたためだった。

「止めなさい、ルイン。ノールちゃんは私の友達なのよ」

「だ、だって、この女はR一族なのよ！」

「止めなさい。お仕置きするわよ」

薄ら笑いを浮かべ綾香が“お仕置き”という言葉を口にした瞬間、ルインの顔は真っ青に変わり、即座にノールから離れる。

「綾香、違うの！ 私、貴方の友達とは知らなかったから……お仕置きだけは許して……」

ノールから離れたルインは綾香に抱き付くと、態度が一変したように許しを請う。

「分かればいいのよ、ルイン」

綾香はルインを優しく撫でる。

「つか……何なの一体？」

立ち上がったノールは有紗たちを見つめる。

「ノールちゃん、久しぶりね」

「あつ、綾香さんじゃん。久しぶりだね。綾香さんも天使だったの？」

「そうよ、私のお兄さんが教えてくれたの。有紗さんっていうのよ」

「で、そっちのボクを殺そうとしたネコ人は誰なの？」

「私に仕えているルインよ、さっきはゴメンなさいね」

「……聞かなかったことにしておくよ」

「それより、ノールちゃんってR・ノールロイヤルなんでしょ？」

「そうだよ、一応」

「当然、私や有紗さん、杏里くんが桜沢一族なのも知っているわよね？」

「ついさっき聞いた」

「私たちについて嫌な感じがする？ 例えば、殺してしまいたいか今すぐに消えてほしいとか」

「どうして？ 嫌な感じがするのはそのネコ人だよ！」

「やっぱり、ほら。有紗さん、ノールちゃんたちは普通でしょう？」

「確かにね、オレも彼女から嫌な感じがしないよ」

驚いた様子で有紗がノールをじろじろ見つめる。

「ところで、君は杏里がリターンを受けていることを知っているよね？」

有紗はノールに問い掛ける。

「杏里くんがおかしくなっている理由と関係してるのかい……ていうか、貴方は杏里くんをかなり格好良くした風に見えるね」

「そっだよ……ここでそっだよって言うとなんか変な感じがするかな。そういう風に見えるのは、オレが杏里の兄貴だからだよ、R・ノールじゃあ、ルイン。杏里にリターンを詠唱して」

「アンタが私に命令するなんて……でも、桜沢一族だから不本意だけどやってやるわ」

有紗の頼みをルインは嫌がった様子で承諾すると、杏里に向かってリターンを詠唱する。

「えっと……リターン！」

リターンを受けた杏里にはすぐに変化が表れた。

「あっ……」

「杏里くん、私のことが分かる？」

何かしらの変化が見受けられたので綾香が杏里に問い掛ける。

「うん、分かるよ」

「やったあ！ 杏里くん、私は貴方のお姉さんよ！」

杏里に綾香が抱き付く。

「うん、綾香さんが桜沢一族だってことも、ボク自身も桜沢一族だ
ってことも既に知っているよ」

「知っているってことは貴方も？」

「覚醒したよ。ルーシェさんと戦っている際に。覚醒した時にボク
は分かっちゃったんだ。だから、ルーシェさんにリターンを掛けて
もらったの」

「掛けてもらったって、どうして？」

「ノールちゃんが……敵だと知ったから。殺さないといけないから
……」

「杏里くん、ダメよ。そんなことなんてしちゃ。貴方は、ノールち
ゃんを愛しているのでしょう？」

綾香の問い掛けに杏里は頷く。

「だから、尚更消さないといけない。殺さないといけない」

「さつきから全部聞こえているんですけど」

物凄く不満そうにノールは語る。

「ボクを殺さないといけないって意味が全く分からないんですけど？」

「意味なんてない、ただR一族だからだよ。それに、ボクがノールちゃんを愛していた訳じゃなかったみたい」

「はあ？」

「ボクがノールちゃんに興味を示したのは、一子相伝の能力を備えているノールちゃんから桜沢一族の血脈に、その能力をすり替えるためだったの。それをボクが覚醒した時、はつきりと聞かされたの」

「君は……何を言ってるの？」

「言いたいことが分からないの？ ボクは君のことが好きで君に近付いた訳じゃない。ボクが好きだと偽って近付いた理由は君に桜沢一族の子供を産んでもらうためだけだったの。でも、水人と人間の関係で行為をしてもそれは出来なかった」

「さっきからさ、本気で言ってるの？ 君はボクが好きだって言うてたじゃないか！」

「ボクもそう思っていたけど根本から違ってたみたい。ボクはシナリ才通りにただ動かされていたみたいなの。誰かが操作したシナリ才に沿ってるから、ボクはノールちゃんを騙した。好きだと偽った」

「杏里くん、それ以上言ったら殴るよ」

「構わない、そんな簡単なことで君の気が済むのなら。どの道、こ

れからは敵同士だから」

「じゃあ、ボクのこの感情は何なのさ！ ボクは杏里くんのが大好きだよ！ 敵同士になんて絶対ならないからね！」

「こつちとしては好都合だよ。それなら、君をこれからも偽ってられる。何らかの方法で必ず能力を奪ってみせる」

「……………」

杏里の頑なな意志を感じ取ったノールは話すのを止めた。

そして、ノールの背中には天使の羽が八枚現れ、プラズマのような覇気も現れる。

「杏里くん……………君を絶対に許さないよ。ボクのことを好きじゃないと嫌だ！」

「分かってないね」

ノールが臨戦態勢に入ったのを見届けてから杏里は自らの腰に付けたサイドバックからトンファーを構えた。

「ボクは光体化しなくとも強いよ。既に覚醒化しているからね」

そう、杏里は語る。

確かに杏里からは覚醒という言葉が事実であるようにノール以上の覇気が放たれていた。

杏里はノールに接近し、トンファーを振る。

軽くノールは躲すと、杏里に水竜刀を突き刺そうとした。

だが、ノールは水竜刀が杏里を貫く寸前で止めた。

「どうして……?」

杏里の間合いから、ノールは離れる。

「どうして、ボクが避けなかったのかって思ったね?」

「……………」

「凄いな、もう気付いちやっただ。普通、あの状態だったらボクを殺すのが当然だったのに……」

「君は……………」

ノールは杏里の目を見ていた。

覚醒したためか銀色に輝く彼の目から溢れる雫も、一緒に。

「はい、二人とも。もう戦うのは止めようね」

有紗がノールたちに割って入る。

「R・ノールが杏里に攻撃を仕掛けたが実際には攻撃しなかったところを見ると、やはりR一族全てが敵だという訳じゃないようだね」

「敵です、彼女は」

フォローする形で有紗が言ったことを杏里が顔を服の袖で拭きながら否定する。

「敵じゃないって言ってるだろ！」

杏里の一言にノールは怒鳴った。

「そろそろ、ここを離れませんか？ 彼女とは、これ以上顔を会わせていたくない」

それを、全く無視する形で杏里は有紗に言う。

有紗は少し戸惑う様子を見せたが頷いた。

「仕方ないね、杏里。ここから離れようか。あと……R・ノール。君とは、また会いたい」

「なっ、なんで話を勝手に進めてんの！ ボクは杏里くんと離れたくないよ！」

「でも、その杏里が離れたいと言っているのだから仕方がないだろう？ 君は杏里と親しかったようだけど……」

「諦めろって言うの？ 嫌だよ、ボクは杏里くんがいないと……」

「どうせ、生きていけないって言うんでしょ？」

見透かしたように杏里が語る。

「えっ……」

「君は、いつも頼ってばかりだね。自分一人で生きていくことが出来ないのかい？」

「で……出来ないよ」

「出来るよ、ボクがいなくても。ノールちゃんには大切なものが沢山ある」

「大切なもの？」

「そう、ボクの他に……ね。では、もうここを離れましょう」

杏里は有紗に異世界空間転移を詠唱し、天使界から戻ることを提案する。

杏里の提案を受け入れ、異世界空間転移を詠唱し、有紗たちはノールの前から消えた。

「……………」

ノールはただ、それを無言で眺めていた。

「リサ」

「んえっ、どうしたの？」

目の前で起きていたことに、すっかり着いて行くことが出来ず、ノ

ールに話し掛けられただけでリサは驚いている。

「ボクって、杏里さんにフラれたんだよね？」

「えっ？ そうなの？」

「ボクは……これからどうしようかな？」

杏里たちが立ち去った後、数分程の時間を宮殿の入り口付近でノールはぼんやりとしていた。

ただ、何も話さずに遠くを眺めながら。

「ノール。落ち込むのは分かるけど、そろそろアクローマ様へ謁見しに行かない？」

「……………」

「一応さ、私たち、桜沢一族を全員逃がしちゃった訳だし。報告した方が良くないんじゃないのかな？」

「……………」

「私、先にアクローマ様のところに行っているからね。絶対来てよ！」

「決めたよ」

「えっ！」

「何を驚いてんのさ？」

「な、何でもないわよー！」

「ん？ まっ、いいや。ボクはこれから昔やってたモンスターハンターって組織みたいな組織を作る」

「どうして？」

「組織だと、一人で寂しい思いをすることは無いはずだから。何か条件がないとボクと誰も一緒にいてくれないから」

「大天使長なんだから天使界と一緒にいない？ 今の貴方を放って置けないわ」

「リサとならいいけど、アクローマと一緒にには居たくない。良い人だと分かったけど、なんか嫌だ」

「そうなの？ でもアクローマ様は貴方のことをとても心配しているのよ？」

「ボクはスロートに戻るから、なんかあったら連絡してね」

異世界空間転移を詠唱し、ノールはスロートへと戻った。

各々の発想

「はぁ……………」

スロートの城内の自室に現れたノールは深く溜息を吐く。

部屋の中央に置いてあるテーブルの椅子に腰掛けると、部屋の中を眺める。

「杏里くん、どうして……………」

ノールの心の中は複雑だった。

この部屋、この空間にいと杏里以外をノールは考えることが出来ない。

気付くと、ノールは自分自身知らないうちに涙を流していた。

「あつ、泣いてるのかな？ 泣いても何にもならないのに……………どうして、涙が止まらないんだろう……………」

止まらない涙をノールは手の甲で拭う。

「気付かなかったよ……………ボクはこんなに杏里くんと離れたくなかったんだね……………」

その時、部屋のドアをノックする音が聞こえた。

「ノール、いるか？」

どこかで、以前聞いたような声にノールは反応する。

「誰なの？」

「オレだよ、テリーだ。部屋に入っていないか？」

「テリー？ いいよ、入っても」

「分かった」

その声とともにドアが開く。

「久しぶりだね、ノール」

テリーとリュウ、ヴェイグが部屋に入ってきた。

「どっしたの、急に」

「急にじゃないって。ちゃんと前もって連絡したじゃん。でも、あの時は……取り乱して悪かった」

「あの時は？」

ノールは少し考えてようやく意味を理解する。

「そっか、天使界や魔界にいたから時間が経過してないんだ……」

「ところで……泣いているみたいだけど、オレたちがここにいても大丈夫か？ 辛くて泣きたいんだったら、オレたちは席を外すけど」

「ああ、これ？ ボクも止めたいけど、止められないの。喪失感って言うの？」

再び、ノールは涙を手の甲で拭う。

「何か無くしたのか？」

「うん。ボクが存在よりも、遥かに大事な物をね」

「そうか……」

「テリーは何しに来たの？」

「電話でも言ったけど、アーティを生き返らせてほしいんだ」

「いいよ、やってあげる」

魔力を高めるとノールは復活の魔法リザレクを詠唱する。

しかし、ノールが詠唱しても何も起こらなかった。

「ねえ、アーティはまだ生きているけど？」

「はあ？ 生きてたのか！」

「アーティは生きてるよ。リザレクを生きている人物を対象に扱っていると、生きているって忠告を受けるの。それを今、ボクは受けたからアーティは生きているんだよ」

「マジでか？ だったら何でオレたちに姿を見せないんだよ？」

「さあ、なんか理由があるんじゃないの？」

「そっか、でもアーティは生きているんだな。少し、安心したよ……」

「良かったね」

「なあ、ところで杏里はどうした？ いないのか？」

気になったのか、リュウが訊ねる。

「……………」

杏里という言葉聞いたノールは泣きそうな表情で頂垂れる。

それを見たテリーは少しムツとした様子で、リュウの足を踏み付けた。

「ああ、ちょっと良いかい？」

ヴェイグが三人に声を掛けた。

「オレは妹のジャスティンに会ってくるよ。故郷のエリアースに帰るって先に言っておかないと」

「ヴェイグ帰っちゃうの？」

「そうだよ、ノール。オレはモンスターハンターを辞めて、故郷でSPになることが決まったんだ。これからは国賓級の大物を護る高

給取りな生活が始まるのさ。本当にルミナスには感謝だよ、魔族にしてくれてさ」

「SPになったばかりなのに国賓級の人を守れるの？」

「当たり前だろ、オレのレベルは八万もあるんだからな。SPランクは最上級のSランクだ……って言う訳で、じゃあな。また必ず会いに来るから」

ヴェイグはジャスティンに会うため、部屋を出ていった。

「また、モンスターハンターのメンバーが減ったね」

ポツリとノールが呟く。

「いや、モンスターハンターは実質上もう無くなっている。そもそもアーティがいなくなつて、綾香さんたちだつて辞めたし。オレらもヴェイグみたいに職探しした方がいいのかな？」

「じゃあさ、ボクが新しい組織を作るよ」

「本当か？ でも、仕事の管理とか出来る？ オレってモンスターハンターでは経理しかやってないし、リュウは全然仕事の管理しなかったし、全部アーティだけで組織を成り立つように経営してたから……」

「最初にテリーは経営のこと考えてた？」

「考えてなかった……」

「だよ。出来る、出来ないじゃなくて、するか、しないかなんだよ。ボクはもうやるって決めてるから反対しても組織を作るよ」

「なら、オレも参加するよ。リュウもやるよな？」

「あつ……？ いいけど？」

恐らく話を聞いていなかったリュウは何となく返事を返す。

「よし、なんか盛り上がってきたね！ じゃ、さっさと営業に行かないと」

「あつ、ちょっと。この組織の名前は？ というか、事業所はどこにすんだよ？」

「名前は……まだ決めてない。あと事業所は、このスロート城だよ」

「クロノに内緒で営業してるのがバレたら追い出されそうだな。で、名前は？」

「モンスターハンター……」

「止める、それは。大体見当が付くから先に言わせてもらおう」

「裏R・ノール連盟会」

「マフィア的な雰囲気醸す名前はいけないと思います」

「じゃあ、何がいいの……」

「ノールって名前とか考えるの苦手だろ？」

「そ、そんなことないよ。ただ、テリーにも聞いてみただけだよ」
突然、拳動不審な態度をノールは取る。

「凶星か。じゃあその、裏R・ノール……なんだったっけ？」

「裏」

既に忘れていいのか、覚えている範囲だけ。

「裏……かよ。この際、格好付ける感じでリバーズでいいわ」

ともあれ、新たな組織“リバーズ”は発足された。

リュウはともかく二人のやる気が高まりだした中、ふいに部屋のドアが開く。

ノールたちがドアの方を見ると、部屋に入ってきたのはクロノであった。

そして、クロノは笑顔であることを語る。

「なんか随分と面白い話してんじゃないか。そうだな、オレが仕事を
持ってきてやるよ。仲介料金を成功報酬の八割はオレが貰うけどな」

「ちよっ……おまつ……」

クロノの仲介料金を八割寄越せというドS的発言により、三人は機能

停止する。

しかも、スロートで営業するなら殆どクロノ主導での仕事をこなさなければならぬと勝手に決められてしまった。

「普通、仲介料金二割が自分の取り分つて言うはずじゃない？」

「杏里、君はあれで善かったのかい？」

有紗が塞ぎ込んだ様子で部屋に座り込んでいる杏里に声を掛ける。

有紗たちはアクローマの宮殿から戻って以来、ルーメイアのエージ宅に居候させて貰っている。

しかし、ルーメイアに戻ってから数日間が経過しても自身の割り当てられた部屋ですっと塞ぎ込んだままにいる杏里のことが有紗は心配になっていた。

「いえ、良いんです。ボクなんて、もうほつといて下さい」

「出来ないよ、君はオレの弟であり家族じゃないか。家族が困っているのを見過ごせる訳が無いよ」

「有紗お兄さん。でも、ボクが悩んでいることは間違っているの。間違っていることを話しても何にもならないよ」

「そんなことはない。話せば、それはなんとかなるかもしれない。一人で悩んでいても解決出来ないならオレを頼ってほしい。話してくれるね、杏里？」

「お兄さん……」

悲しみが込み上げたのか杏里は泣き出す。

「ボクは彼女が……ノールちゃんが好きなんです。でも、それはボクの感情じゃない。偽っているんです」

「偽っているってどういうことだい？」

「ボクが彼女に抱いていた感情は偽りだったんです。覚醒した時に……祖先の人にこの先も決められた通りにしか生きられないと言われた。それが事実なのだから、ボクは彼女が好きではなく、別の力が働いてそうさせたことになる。だから、彼女にはこれ以上嘘を吐きたくないんです」

「本当にそうなのかな？」

「はい、間違いありません。ボクの祖先が……」

「何故祖先の言うことなら疑いもなく信じられる？ 君の今まで抱いていた感情が突然偽りだと言われた程度で簡単に納得出来る内容のはずがないだろう。現に君は今でもR・ノールに想いがあるからこそ、悩んでいるのではないのかい？ R・ノールは桜沢一族と知った君を今でも好きだといった。敵の一族だと分かっているはずなのに」

「それなら……決別の意志を伝えました。彼女と戦った、それがボクからの……」

「戦ってないよ、君たちは。R・ノールは寸前で君を攻撃しなかった。君自体も戦う気すらなく、R・ノールの攻撃で死のうとまでしていた。本当は自分でも自分の感情や考えに祖先なんて関係ないことなんて分かっているのだろう？」

「……………」

「杏里は、いきなりシナリオだとか聞かされて混乱させられただけなんだ。今のオレたちに祖先なんて関係ない、彼らの言葉に耳を傾ける必要もない。ただ、自分で思ったことをすればいいんだ。そんな当たり前なことを君は忘れてるだけなんだ」

「有紗お兄さんは……それでは桜沢一族を……」

「オレだって桜沢一族だ、一族を裏切るつもりはない。ただ、祖先の言いなりにならないといけない何ていうクソドグマに支配される気は全くない。それは彼らの勝手に決めたエゴだ。だったらオレはオレ自身のエゴを通すだけだ」

「ボクも……通すことが出来るのかな」

「出来るさ、彼女を本当に好きなら。偽りではないなら」

「ボクは彼女に……ノールちゃんに会ってきます。心から謝りたい……好きだと言いたいです」

「ああ、それがいいよ。行っておいで」

「はい！」

涙を拭い、頼笑むと杏里は空間転移を詠唱して消えた。

「杏里、君がこんなにも意地を張るとはね。君はR・ノールから離れるというシナリオ通りなら、死ぬことになっていたのに何故シナリオ通りに生きようとしたんだい？」

本心

「なんか今日はありそうな気がする」

自身の部屋中央に置かれた四人掛けテーブルの椅子に腰掛けながら、ノールは用意して置いた紅茶を啜る。

「はあ？ 何が？」

そんなノールの呟きに対して、テリーは答える。

テリーはクロノから提供された仕事の依頼書をノールの隣の椅子に座って眺めていた。

「分からないけど、仕事とかかな？」

「仕事ならあるだろ。一日でクロノにリバースを発足したことがバレルとは思ってなかったけど。今じゃこうして働き詰めの毎日でゆつくりすることも中々出来なくなったよな」

「そうだよね、スロートには資金が無いからオレが仲介役として仕事を持ってきてやるとか言ってたしね。でも、仲介料が八割って高過ぎじゃないかな？」

「あれってさ……ノールが何とかするはずじゃなかったの？」

「どうせ、メンバーが三人だから良いじゃん？ でも、ミールとジヤスティン君がリバースに参加しないってのは残念だったな……」

「あの二人は役職があるからな。ミールがスロートの中将でジャステインが少将兼軍師じゃ、まず時間的に都合は合わないだろ」

「それはそうだけど……」

「話している途中で悪いけど、ドアの外に誰かいるみたいなんだ。ドア開けるか？」

二人が話していると、床で胡座あぐらを組みながら剣の手入れをしていたリュウが他人事のように語る。

リュウの傍らにはノールが前以て渡していたクロノの依頼書が置かれていたが見た形跡は無い。

「客か。ていうか、知っているならお前接客しろよ」

「ノックもしないからただ立ち止まっているのか、それともここには用が無いのか、ちよつと分からなくてな」

と言いつつも、自身の剣の手入れに集中しているのかリュウ自身からドアを開ける気は無いらしい。

「じゃあ、ボクが開けるよ」

紅茶を啜っていたノールは椅子から立ち上がるとドアに近付いてドアを開ける。

「あっ」

ドアを開けると、ノールは小さく声を出した。

「やあ……ノールちゃん」

ドアの傍に立っていたのは杏里だったからだ。

「な……なんで、君がここにいるの？」

「君に会いたかったの」

「嘘、なんだろ？」

「嘘じゃない。君との約束がボクの本当の思いだと、ようやくボク自身が気付けたんだ」

「君はボクを侮辱してるのかい？」

「違うよ」

「何が違うのさ！ 君に諦めが尽きそうかと思ったのに……なんで今頃来るんだよ！」

杏里をノールは睨み付ける。

八翼の天使の羽がノールの背中に出現し、ノールの周囲にはプラスマのような光を発する覇気も現れた。

「場所を変えようか、桜沢杏里。ここにいたらテリーとリュウに迷惑が掛かるから」

「ボクはそんなつもりは……！」

「話なんて聞きたくない」

ノールは杏里の腕を掴むと、空間転移を詠唱して二人とも消えた。

ノールたちが現われたのは何もない草原。

そこは以前、ノールを殺すためにルミナスが空間転移で連れ去った場所。

「君はここでボクと戦う。ボクが勝ったら何でも言うこと聞いてもらうからね」

「戦うなんて……したくないよ。そんなことしなくても何でも言うことを聞くから……」

「信用出来ない……偽っているとしか思えない。君がボクに逆らえないように力で抑え付けるよ。嫌だと言ってなら、力でボクを抑え付けばいいだろ！」

水人の能力を駆使し、水竜刀をノールは作り出す。

水竜刀の大きさは普段と異なっていた。

以前ノールが戦った、イズモが扱っていたツヴァイハンダーと同等の大剣を作り出していた。

「従わせる……ボクが敵だなんて言わせない！」

ノールは速攻で杏里に斬り掛かる。

ノールが両腕で持つ二メートル級の大剣を横一線に振り抜く攻撃を杏里は咄嗟に構えたトンファアの腹の部分で剣の威力を受け流した。

「わあっ！」

普段とは違い武器が大形過ぎたせいか、ノールは扱い慣れておらず体勢を思い切り崩す。

倒れそうになったノールを杏里は反射的に抱き止めた。

「大丈夫かい？」

「は、離せよ！」

「もし、ボクが離せば、ボクと……以前の関係に戻ってくれる？」

「くそ、こうなったら……」

「落ち着いて、ボクの話聞いて」

優しく包み込むようにノールを抱き締めると杏里はノールの水人能力を禁止令で封じた。

「えっ……？」

片腕で掴んでいた大剣が消え、ノールは水人能力を封じられたことを知る。

「多分、ノールちゃんって今、水人の気体になる状態変化を使うおう

としたでしょ？ そうすれば、ボクから離れられるから」

「離せ、桜沢杏里！」

ノールは抱き締められたままの状態です。杏里の腹部に強烈な一撃を加える。

当然、至近距離からの打撃により杏里の腹部から鈍い何かが折れる音、押し潰されるような音がした。

光体化している状態のノールの一撃を受けた杏里は通常のた打ち回しても不思議でない程のダメージを与えられていた。

しかし、それを気にしていない素振りを杏里は見せた。

「落ち着いて、ノールちゃん。ボクの話聞いて」

ゆっくりと杏里はノールに口付けを交わす。

「……………！」

突然、杏里から口付けをされ、かなり驚いていたノールだったが落ち着きを取り戻したかの静かになった。

同時に背中にあつた八翼の羽や覇気もノールから消え去った。

「ノールちゃん、落ち着いた……………？」

「うん。でも、君は……………さっき、血の味が……………」

「痛かったよ、やっぱりノールちゃんは強いね」

「今のを防がなかったなんて……すぐに回復魔法を掛けてあげるね」

「回復魔法なんて掛けなくてもいいんだよ」

「どうして！ ボクが本気で殴ったんだよ！」

「ボクのことには気にしないでいいよ。ボクはノールちゃんに……」

「ボクに会えれば、もう死んでもいいとか言うつもりでしょ。ボクがそんなこと絶対にさせないよ！」

「どうして……」

「分かるよ、それくらい。以前の君とボクの立場が変わっただけじゃないか。君が何を考えているのかくらいボクだって分かるよ。勿論、ボクから言えることは君に生きていてほしい、一緒にいてほしいってことだけ」

「良いの？ ボクは桜沢一族の……」

「ボクが良いって言うてるの。ボクも初めから自分の気持ちに素直になるべきだって、ようやく分かったから」

「ノールちゃん……」

「でも、杏里くんがボクにキスするなんて思わなかったよ」

「話を聞いてほしくて……ボクの気持ち分かって貰いたくて……」

ノールの問い掛けに答えようとした杏里だったが、ついさっきの攻撃による怪我で抱き締めていたノールに倒れ込むようにして意識を失った。

互いの胸のうち

目を覚ますと、杏里は自身が白いシートが敷かれたベッドで横になっ
っている状態だと気付いた。

勿論、やけに天井が近いことにも…

杏里にとっての見慣れた光景に自身がどこにいるのかがすぐに分か
った。

「ここは……」

不意に何かの音を聞く。

杏里はその音を確かめるため、ベッドから上体を起こす。

「あつ、おはよー、杏里くん。やっぱり、煩かったかい？」

二段ベッドの傍でノールが掃除機を掛けている。

「ノールちゃん……」

「今日は早起きしたから、部屋を掃除しなきゃって思ってたね。杏里
くんがいるから汚くなんてしちゃいけないなーってさ」

「ボクは……」

「もうそれ以上言わないで。君がボクのことをまた必要としてくれ
たことが分かれば、ボクはそれで良いの。もう、R一族や桜沢一族

なんてどうでもいいの。君だって……今ではそうでしょう？」

「うん、ノールちゃんと同じ」

「だよね〜、ウンウン、そうだよね〜」

嬉しそうな綺麗な笑顔でノールは頬笑む。

「それでね、良いことを教えてもらっちゃったんだよね」

「なんだい？」

「それはね、互いに同じ種族になれば行為をすると子供が出来るって話。それにボクも、やっと感じる事が出来るみたい」

「でも、ボクがすると……」

「ちょっと、君。ついさつきR一族や桜沢一族なんてどうでもいいって言ったばかりじゃん。子供の血脈なんてどっちでもいいの」

「そうだったね……ゴメン」

「あと、二人共もう20才を超えてるから人間だったら万全の態勢で子供を作ることが出来るらしいけど、ボクたちで子供を作るなら互いの種族を天使にしないとイケないじゃん。天使だと寿命が500才だから、ボクが子供を産めるようになるのはまだまだ後の話なんだよね。大体、80才つてところだったよ」

「えーと……」

「簡単に言つと、ゴム無しで何回出しても安心つてことだよ」

「言葉がストレート過ぎるよ。でも、ボクは一日に二回以上は……」

杏里の顔は赤くなった。

「顔が赤くない？」

「ボクは今とっても恥ずかしいの。ノールちゃんと、またすることが出来るって分かつて。でも、それ以上に自分の体力の無さに……」

「ちょっと待って」

「どうしたの？」

「何についてが恥ずかしいのさ？　ボクが君の立場なら嬉しいとか楽しいだと思っけど？」

「楽しいは……違つと思っよ」

「ウソっ！　ボクはしてる時、楽しいよ？」

「そうなんだ。でも恥ずかしいって言うのは、ついさっきノールちゃんかゴムとか……やっぱり、ノールちゃんは恥ずかしいとか分かんなくても良いと思っよ」

説明だけでは理解してもらえないと思い、教えることを杏里は諦めた。

「じゃあ、杏里くん。綾香さんたちへ会いに行くよ」

「うん、分かった。ボクからも一生懸命説得するからね」

不安そうだが笑顔を作り杏里は答える。

支度を整えたノールと杏里はR一族と桜沢一族が敵対するべきではないと他の桜沢一族の綾香、有紗に伝えに行こうとしていた。

「杏里くん、空間転移詠唱して。ボクは綾香さんたちの場所が分からないから」

「うん」

頷くと、杏里は空間転移を詠唱する。

詠唱によって、ルーメイアのエージ宅前にノールたちは現れた。

「ここにいるの？」

「そうだよ。ライル君やルウ君、ジーニアス君もいるよ」

「へえ……よし、リバーズにスカウトしよう」

「リバーズってなに？」

「リバーズは新しくボクが作った組織だよ。今はボクの他にテリー

とリュウが所属してる」

「ボクも入りたくない」

「良いよ、でも今は絶対に儲からない状態に陥ってるから、そのつもりで」

「大丈夫だよ、ノールちゃんが休んでも良いくらいボクが働くから」

「そうして貰えると凄く嬉しいけど、そうゆう意味じゃないの。守銭……クロノがいけないの。てゆうか、早くこの家に入るうよ」

「あつ、うん、分かった」

杏里が率先して玄関のドアを開く。

「お邪魔しま……」

ドアを開けて貰ったノールがエージ宅に入ると、既に玄関付近には綾香がいた。

「いらつしゃい、ノールちゃん、杏里くん。シナリオで貴方たちが来ることはもう確認済みよ」

「やあ、綾香さん。早速で悪いけど、言いたいことがあるの」

「あら、私もよ。奇遇ね」

「じゃ、ボクから言わせて……」

「あら、ダメよ。ノールちゃんより私の方が年の功なのだから、お姉さんの私を先に話させるべきよ」

何故か年上だということを綾香は強調している。

「ボクはR一族とか桜沢一族とか関係ないと思ってるよ。以前みたく一緒にいようよ。その方が楽しいよ？」

「あー、もう。ダメじゃない！」

「えっ？ なにが？」

「私が言いたかったのに……」

「……………」

「済まないね、ノール」

綾香の反応にノールが困っていると、有紗も玄関まで来た。

「オレも君の話した通り、一族同士の戦いは無意味のように感じていたんだ。君と杏里の関係を壊したくないしね」

「そっか、それならボクも同じ考え」

「そうと分かれば、あとは他のR一族や桜沢一族の者。二つの一族の関係者たちを戦わないように説得することをしないとね」

「他の人たちは戦ってるの？」

「気付いた途端、目の色を変えて殺しに来るよ。以前、ルインが君に飛び掛かった時のように」

「怖いね……それは……」

「今のところ分かっているのは、R派にはアクローマ、ミトス、その他に11名。桜沢派にはルイン、エージ、その他に7名」

「案外少ないね」

「うん、確かに。もう、一族同士が大規模に戦っていた時から結構経過しているしね。でも、その関係者が組織などの頂点などに君臨しているならば、その者の部下とも戦わなくてはならない」

「それじゃ……多くなるね。天使界だけでも人口が一億くらいいるから」

「そして、R一族、桜沢一族を根絶やしにしようとする組織もある」

「確か、ジエノサイドだったけ？　ボクはそこで懸賞金一兆だったさ」

「今は、三兆だよ」

「ケタ違いだね、ボクって」

腕を組みながら胸を張り、ノールは深く頷く。

「ルインと綾香はノールより上だよ」

「えっ、ウソ？」

「ルインは誰彼構わずに殺し過ぎていたから、そもそも普段聞くことのない単位だ。それは仕方がない。でも、ルインより綾香が強いと分かってしまったらそうならざるを得ないというか……」

「そうなのよね。私、ルインに勝ったの」

話したいと言った割りには既に、ブーツとしていた綾香が語る。

「ウソだよ、あんなに非常識な戦い方するの……」

「私の場合は、ルインの趣味である生物殺しを抑制したせいで、ルインに一方的に殴られたの。二発か三発目で私は死んでいたわ。だって、第三者視点で感じて既に壊れてしまっている私を殴り続けているルインが見えたもの」

「一方的に殺られただけじゃないの、それじゃ？」

「違うわ、その時に初めてルインを許せなくなったの。どう生き返ったのかは忘れたけど、私はあの時に何かをしてルインを殺してしまっ寸前まで追い詰めたの」

「あの時は……凄かったよ。綾香に初めて恐怖を感じる程だったもん。今じゃ、綾香がお仕置きするっていうとルインは何でも言うこと聞くもんね」

「でも、私も悪いのよ。私の友達や有紗さんを傷付けちゃいけないって言ってたけど、私を傷付けちゃいけないって言ってなかったもの」

「綾香、違うよ。どう考えてもルインが悪いんだよ」

「それはいいとして、リバー入らない？」

微妙に会話に入れなかったノールが話し掛ける。

「なにそれ？」

「ボクが新しく作った組織だよ。皆で一緒にいると、きっと楽しいよ」

「そうだね……組織として確立しているならジェノサイドと対等に戦えるかもしれないし。それは良いかもしれないね」

「でしょでしょ。もうリバー入っちゃいなよ」

「そうだね。じゃあ一先ず、二人とも家の中に入って」

有紗に促され、ノールと杏里はエージの家に入った。

室内に上がったノールたちがダイニングまで来ると、そこには見慣れた顔触れがあった。

「あつ、ライル。あと、ルウ君とジーニアス君じゃん」

「あれ、ノール？」

ライルはノールがこの場に現れたことに驚いた様子。

「久しぶりじゃないか、今はどうしているんだ？」

「三人に言いたいことがあります」

「なに？」

「ボクが新しく作った組織リバーズに入ってくれませんか？」

「別に構わないと言いたい所だけど、それは無理だよ」

「マジで？」

「オレたちは、テイストのロイゼン魔法国家に帰ろうと決めちゃったんだ。ジーニアスもロイゼンに行きたいって言っしな。暇になったら、そのリバーズってのにちょっとは手を貸すからそれでいいだろ？」

「そっか……残念」

「綾香、ちょっと」

一緒にダイニングにいたエージはノールがライルたちと話している際に綾香を声を掛ける。

「どづしたの？」

「あいつ……うん、ノールさんが作った組織に皆入っちゃうの？」

「そうね。私も入るし、エージ君も入りましょうよ？」

「う、うん、分かったよ。綾香がそう言うなら綾香を信じるよ……綾香の言っていることなら正しいはずだから」

言葉でそう言っても納得がいかないのか、エージは不満を感じている。

「でも……オレが今まで生きてきたのはこんなことをするためじゃないよ、綾香」

本音

杏里の他、綾香たちをリバーズへとメンバー加入が出来たノールは少しだけテンション高めで空間転移を詠唱するとルーメリアを離れた。

これにより、リバーズメンバーの人数は合計八名とまで増えたのだが宿舎の空きが無くなるからという理由でノールたちはスロート城へ戻った途端に宿舎から退去するようにとクロノに言われた。

仕方なく、ノールはスロートの城下街外れにある、以前ノールの家があった土地に生活が出来、事務所として扱える建造物を建てることに決めた。

「あの……ボクが腑甲斐ないばかりに現在の事務所としている場所から追い出されてしまいました。これからも……いいえ、これからは本当に精一杯頑張ります。ボクをどうか見捨てないください」

泣きじゃくりながら、ノールは悲しげに俯いている。

「落ち着いて、ノール。追い出されたことは君のせいじゃないし、見捨てたりなんかしないよ」

今までとは打って変わり、とても彼女が小さく見えた有紗は号泣しているノールを抱き締める。

彼女を守ってやらねばならない。

そう感じたのだからかもしれない。

「あの……有紗さん」

「なんだい？」

「ポジション違うよ？」

「ん？」

杏里が困った様子で見つめていたので何となく有紗はノールから離れる。

「すみません、皆さん。これからは、今ボクたちが立っているこの場所に新しい事務所を建てるため、より一層働いてもらいます」

「別に良いけど、事務所ってどうするの？」

有紗は訊ねる。

「他の世界にある事務所として相応しい建物を競売か不動産で買って、空間転移を詠唱し、この場所に持つてくるってことにする。基礎とかライフラインは魔法でどうにでもなるから気にしなくていいよ」

「今はどうするの？ 住むところもないっていうか…」

「これから天使界に行きます。大天使長であるボクなら少しくらいの我儘わがままを言っても大丈夫でしょう」

「まあ、そうだね。でもノール、どうしたの？ ついさっきまでの

君とはまるで違うような…」

「ボクに価値がないことくらいは知ってます」

「えっ？」

有紗は意味が分からず、一度聞き返す。

しかし、物凄くテンションの低いノールはそれ以上何も話そうとなかった。

「天使界に行くなら異世界空間転移詠唱するわよ」

そんなノールの様子を見て、何故かノリノリのルインが異世界空間転移を詠唱し、ノールたちは天使界へと移動した。

天使界へノールたちが現われると普段と何ら変わらない地平線の向こうまで続く雲の大地が広がっていた。

当然ながらテリー、リュウはその光景を見て驚いた様子。

「な、なんだよ、これ。一面雲だらけじゃないか」

通常では有り得ない光景を目にし、テリーは驚きを隠せない。

「ここは天使界っていうのよ。こここのことは後で私が教えてあげる
ルインが何となく説明する。」

「あれ？ 貴方のオーラから聖帝のようなものを感じるのだけど、

もしかして聖帝だったりする？」

「はあ？ 聖帝だって？ お前、聖帝のこと…」

「みんな！ アクローマに会いに行くからついて来てね！」

メンバー全員にノールが掛け声を掛ける。

そのことで聖帝という言葉の意味をルインから聞こうとしていたテリーだったが止めた。

広い回廊を歩いてきたノールが大きな扉で閉じられた部屋の前で立ち止まる。

「ここがアクローマのいる謁見の間だよ。みんな、ボクの後についてきて」

そう言いながら、ノールが扉を開くと室内には赤く長い絨毯が玉座まで広がる光景があった。

「さつさと宿舎を貸してもらって、さつさとそこで休もうね。アクローマは見た目通りに簡単な人だし、簡単に部屋貸すと思うから楽勝だね」

勝手なことを言いながらノールは室内に入る。

ノールたちがぞろぞろと大人数で謁見の間に入ると、いつものよう

にアクローマは玉座に座っていた。

ぞろぞろと入ってきたノールたちにアクローマは即座に気付いたようだった。

「アクローマ。宿舎を何部屋かタダで貸して」

遠目の位置からノールはアクローマに語っている。

ノールたちに気付いてから数秒間程、アクローマは黙っていた。

「ノール！」

ようやく意識が理解に到達したのか、アクローマは怒声を上げる。

怒った様子でノールに猛烈な勢いで迫ると、アクローマはノールの両肩を掴み、ガタガタと揺らした。

「見てみなさいよ、どう考えてもおかしいでしょ！ 何があったらこんな有り得ない組み合わせが出来るのよ！ バカじゃないの、ノール！」

本気で怒っているのか、アクローマはノールを呼び捨てる。

「私じゃ、ルインを再起不能にさせるくらいが関の山よ。はあ……私はここで死ぬのね。まだすることは沢山あったのに……」

「ちょっと、それどういう意味？」

再起不能という言葉にムツとしたのか、ルインは機嫌を損ねる。

「アクローマ、彼らとは和解したの。これからは、もうRとか桜沢とか関係ないの」

「貴方がそれを決めたの？」

「ボクが決めたの」

「分かったわ、貴方が決めたのであれば仕方がないわ。不本意だけど、戦うことは止めるわ」

「ウンウン、それが良いよ。じゃ、宿舍貸して」

「バカにするんじゃないわよ」

かなり押し殺した声で低くアクローマは言う。

「アクローマ、聞こえてる？」

「聞こえているわ、宿舍くらい幾らでも勝手に死ぬまで使ってれば良いわよ。でも、ノール。貴方は私と一緒に訓練所まで来なさい」

「ん？ いいけど？ じゃ、みんなは宿舍で休んでてね」

ノールは言い残すと、アクローマと共に訓練所へ移動した。

「どうして訓練所まで来たのか、貴方は分かる？」

「また、光体化しろってことでしょ？」

「違う。私に貴方の経験値を全て渡してもらいたいの」

「嫌だよ、経験値を渡すなんて」

「私には経験値が絶対に必要なの。先に教えるけど、杏里、綾香、ルインは貴方より強いわ。貴方が女神化した時に杏里、綾香を消しておけばこんな展開にはならなかった！」

即座にアクローマからは元々現われている二つの羽が八翼に分かれ、プラズマのような覇気が現れる。

「信じていたのよ、貴方を！」

さっきのようにアクローマはノールに掴み掛かる。

「今までどれだけ私が貴方の……R一族のために働いたと思うのよ。最後は……最後は勝利すると、どんなに辛くても私は信じていたのに！」

とても困惑した様子でアクローマの話を聞くしか出来なかったノールは突然アクローマに突き飛ばされる。

「うわっ……痛い……」

床に倒れた、というより叩き付けられたノールは怯えた目でアクローマを見つめる。

「何よ、その目？ 私が悪いって言いたいの？ 何にも役に立たない貴方がいけないでしょう！」

倒れているノールを無理やり立たせると、アクローマは腕を振り上げ思い切り、ノールの顔を平手打ちする。

反動でノールは再び床に倒れた。

「もう貴方なんていらないわ。せめて、私の経験値になりなさい」

何かの魔法をアクローマは詠唱し始める。

強い魔力の重圧で部屋全体が軋みだす程の魔法を放とうとしていた。

だが、何か見覚えのある光線がアクローマに命中し、アクローマは吹き飛ばされた。

「何やってる！」

急いだ様子でレイディアントが修練所に入ってきた。

「光体化のオーラを感じ取って見たら、まさかお前がノールを殺そうとしているとは……」

そう言いながら、レイディアントはノールに近付く。

「立てるか、ノール？」

「うん……」

レイディアントに手を貸してもらい、ノールは立ち上がる。

「どっつして邪魔するの……」

「少し頭を冷やすんだな、アクローマ。光体化するなんて、お前らしくない」

「こんなこと私だつて……したくはなかったわよ」

レイディアントに返答し、アクローマは光体化を解いた。

「ノール、絶対に謝らないからね。あんな連中と今頃仲間だつて言われたつて、そんなことが簡単に納得出来るはず無いでしょ！」

ノールを睨み付けながらそう叫び、アクローマは修練所を出ていった。

「大丈夫か、ノール？ 怪我はしていないな？」

「また、いらないうつて言われた……もうボク嫌だよ、いらないうつて言われたくない……」

ノールは俯き、泣きそうな表情をする。

「レイディアントはボクを必要としてくれる？」

「……………」

無言で、レイディアントはノールの頭部を叩く。

「いたっ」

ノールはレイディアントを見上げた。

「頭がおかしくなったのかと思って叩いてみたがどうだ？ それでも分からないようなら言うが、自分の価値や存在と言うものは他人に評価されるものじゃない。自分自身で決めるものだ」

「いらないって言われても？」

「だから何だと言うのだ？ よく分からないが何故そこまで他人からの評価にこだわる？ 自らの本質はそこじゃないだろ？」

意味が分からないのか、レイディアントは何時もの冷やかな口調を変えない。

「自分自身の価値が……」

「それと、アクローマがしたことは許してやってほしい。アクローマには、R一族に熱狂的な程の想いがあったからな。中でも……ノール、どういう訳かお前のことが好きだった。多分、お前の行ったことで裏切られた気がしたのだろう」

「ボクはアクローマに謝った方が良いのかな？」

「何もするな、私から言うておく。お前は仲間がいる宿舎へ行け」

「うん……分かった、レイディアント」

ノールは頷くと、修練所から出ていった。

恒例の部屋分け

ノールと分かれてから、綾香たちは天使たちの宿舎に移動していた。

一通り宿舎内を歩いてみると空室数はメンバーらにとって程よい数で、誰も入居が出来ないといったことはない。

「それじゃあ、いつものやりましようか」

何かを思い付いたように綾香がポンと手を叩く。

「いつものって部屋割りか？」

テリーが反応する。

「ここも一人部屋の他に二人部屋があるから二人で暮らしたい人は分けた方が良くなって思ったの」

「そうだな、全員の意見を聞いて部屋分けをしようか」

メンバーの意見を聞いていった結果、部屋分けはノールと杏里、綾香とルイン、エージ、リュウ、テリーとなる。

元々、天使界の大天使長という肩書きを持つ桜沢有紗は宿舎ではなく、個人用の自宅があるのでそちらにいるということになった。

「これで決まったわね。どちらかというところはテリーちゃんと一緒に良かったのだけだ」

ルインの意見から同室となったが、綾香は余り気が乗らない。

「アンタさ、家があるならそこに住ませなさいよ」

そんなこととは露知らず、不満げにルインは自宅を持っている有紗に文句を語っている。

「悪いけど、家でペットは飼いたくないんだ」

「ペ……ペットですってえ！ 私の一体何処が、ペットだと言うのよ！」

「へえ、違うんだ？」

有紗は趣ろにポケットから何かの袋を取り出す。

袋の中には、マタタビが数本程入っていた。

「そ、それはマタタビじゃないのかしら？ おかしいわね？」

何故か、ルインは挙動不審な態度を取る。

両耳をピンと立たせ、尻尾も振るわせながら、マタタビを見ているように見ている動作を何度も行なった。

「ああ、そうみたいだね。ペットショップで売っていたんだ。どうしても欲しいなら、ルインにだけ特別だよ？」

ルインにマタタビが入った袋を差し出す。

「べ、別に私は欲しく何て無いわ！ で、でも……アンタが私にだけっていうのなら貰ってあげなくもないわ……」

強引に袋を掴み取るとルインは割り当てられた部屋まで逃げた。

「あれは……やっぱり、ペットだな」

ぼんやりと有紗は考える。

「それじゃあ、一旦解散しましょう。ノールちゃんの指示があるまでは自由行動って感じで良いわね？」

綾香の指示で各々決められた部屋へ向かい、有紗は宿舎を出ていく。

自宅へ戻るため有紗は宿舎を後にすると、偶然ノールと出会った。

「やあ、ノール」

「あれ、他の皆はどうしたの？」

「宿舎のロビーで部屋分けをしていたよ。何だか、部屋分けは恒例らしいね。杏里の意見でノールは杏里と同じ部屋になったよ」

「やったね。分かってるじゃん」

ノールは頬笑みながら、宿舎内に入っていた。

「彼女の様子を見てみると、とても今まで敵対していた一族とは思えなくなるよ。彼女はもう祖先からの強迫的な意思から解放されたのかな？」

「ああ、ここかあ。ボクの部屋は」

宿舎のある一室の扉をノールはノックもせずを開く。

室内には杏里の他に綾香とルイン、テリーの四人がいた。

「女性だけが集まってる？」

「あつ、ノール。遅かったね」

何か困った様子の杏里が、ノールに反応する。

「ちょっと、色々とあったから……てか、君はようやくノールって言ってくれたね」

「ほらあ、私の言った通りでしょ？ ノールちゃん、恋人の貴方には普通に呼んでほしかったのよ」

すっかり見抜いていたとでも言いたげな様子の綾香。

「ほら、杏里くん。次は呼び方を変えなさい」

「分かったよ、綾香姉さん。オ、オレは、春川杏里だよ」

「何か違うわね」

杏里の不自然さから綾香は即答していた。

「さっきから何してるの？」

興味は無かったが、ノールは訊ねた。

「ノールちゃんも知っているとと思うけど、杏里くんはもう19才だというのに……今は20才だったわね。20才だというのに明らかに子供じゃない？ 少しは男らしい大人にした方が私は良いかと思っ
つてね」

「それは無理だよ、綾香さん」

「どうして？」

「杏里くんは女性と言っていい程に男じゃないからね。逆に今頃男らしくされてもホント気持ち悪いよ」

「えっ、ノール、それ本気で言ってるの？」

「君が接客担当のパールーメイドをした辺りから、女性と付き合っているような錯覚を始めたから間違いないよ」

「もう……ボクは、ボクだけが自分を男だと分かっていたら、それでいいよ」

酷く気を落とした杏里は色々な何かを諦めた様子。

「ボクは杏里くんが男だと分かるよ。脱げばね」

「見た目は？」

「見た目で君を男性だと気付いたら、その人は千里眼だよ」

「……………」

さらに杏里は落ち込み俯いた。

「ところで、テリーとルインは何してるの？」

「あら、何言ってるの？ ここは私と綾香の部屋よ。貴方は隣の部屋」

ルインが反応して答える。

「そっなの？」

「簡単に言うと、綾香が杏里をこの部屋に連れてきたの。あと、この子は聖帝について私に聞きに来たってこと」

「そっなんだ。オレは聖帝について聞きたくて」

「で、テリーは結局聖帝のことが分かったの？」

「今から聞くとところだよ。聞こうとしたら、ノールが部屋に入ってきたから」

「ああ、そうなんだ。なんか邪魔しちゃったね。しかも残念なことに杏里くんのことだ」

「ところで、ルイン。オレのことを……聖帝のことを教えてくれな
いか？」

「別に構わないけど、これを知れば貴方はこれからどうすれば良い
のかを深く考えなければならぬわ」

「構わない」

「そう？　なら教えてあげるわ。聖帝という人物は簡単にいうと生
き神、つまり神様よ」

「神だって？」

「そう。ただ、貴方には自覚がないだけ」

「そんなこと有り得ないだろ、オレが神だなんて」

「でも、貴方は聖帝でしょう？　もう殲滅魔法だって扱えるはず。
そもそも、聖帝は生き神と決まっているのだから私の言っているこ
とは全てが正しいの。貴方は実質上の神様なのよ」

「で、でもオレが神だなんて……おかしいだろ、神だなんて？」

激しく、テリーは動揺を示す。

「聖ミューティア帝国、知っているかしら？」

「それは……」

「知つての通り、貴方の故郷よ。貴方は20才の時に、聖女として正式な方法で聖帝になるはずだった。今は既に聖ミーティア帝国は廃墟だけだね。ルーメリアに待機している際、現地を見に行ったんだけど流石に私も焦ったわ。聖帝不在の総世界が出来てしまうのではないかとね」

「でも、オレは故郷が破壊された時に生きてた……」

「当然よ、貴方は死ねない。ただ、何かのミスで貴方の身体が死滅したとしても確実に復元される。それが、必然なの」

「じゃあ、オレがミーティアから逃げている時にアーティヤリユウに会えたのも必然なのか？」

「勿論、貴方は産まれた時から聖帝なのだから。彼らは聖ミーティア帝国が無くなっても貴方が生きられるよう巡り合わされた。でも、選んだ相手を間違えたわね。アーティは元R派であり、ジェノサイドに所属していたアイザックの子息。リユウはジェノサイドの所属メンバー」

「何だよ、ジェノサイドって言うのは」

「R派、桜沢派の連中を殺戮しまくっている組織よ。でも、どちらかというと平和的、優良な組織である総世界政府だから正当なことじゃない。犯罪者以外に見れば100%あつた方が良い組織ね。恐らくだけど、貴方が聖帝だと彼らは既に知っている。だから、貴方と一緒にいたのだと思う」

「それじゃ、アンタらはヤバいんじゃないの？」

「ヤバいわ。でも、貴方がジエノサイドに手を貸さないって約束してくれるなら幾らでも対処法はある」

「オレが？」

「貴方はジエノサイドに入ろうって考えたのではなかったの？ 貴方の仲間である、リュウが所属しているのよ？」

「別に、アイツが所属していても興味は無いつていうか。それにオレはそんな組織に組することなんてしないし、殲滅魔法も二度と使わない」

「貴方も前の聖帝と同じことを言うのね。そうやって前の聖帝は桜沢一族に加担して、R一族の……名前は忘れたけどR一族の誰かと同士討ちに追い込まれたわ。勿論、自らの力でね」

「オレは……Rにも桜沢にもジエノサイドにも属さないからな！
リバース以外には……」

動揺していたテリーだったが、徐々に冷静さを取り戻し始めていた。そして、リバースに所属するということが自らの発した言葉とは矛盾していると気付く。

リバースはR一族のノールが発足した組織。しかも、桜沢一族も所属している。

これでは自身も、ジェノサイドと敵対することとなる。

どちらに入ったとしても、自らは信頼する仲間と戦うことになってしまふ。

「オレは……少し考えさせてくれ」

深く考え込んでいるのか、やや俯き加減でテリーは室内から出ていった。

「話の内容がよく分からなかったね」

二人が会話する風景をただ眺めていたノールは呟く。

以前聞いたことのある聖帝という言葉。

それに、そこまでの意味があったとは全く思わなかった。

「テリーは、テリーのままなんだよね？」

ノールはルインに聞く。

「私は無理だと思うわ。いずれ、彼女にもシナリオが見えるはずだから」

「シナリオ？」

「覚醒した者のみが見ることの出来る未来よ。貴方だって見えるはずでしょ？」

「どつやったら見えるの、それって？」

「あら、まだ使ったことが無かったの。簡単よ、普通に未来が見た
いって思えば良いの。眼を瞑り、頭で未来を見たいと願えば楽勝よ」

「ふーん」

ノールは眼を瞑り、何かを考え出す。

数秒後、目を開いたノールは口を開く。

「何も見えないじゃん？ ウソついたでしょ？」

「貴方って覚醒したんじゃないの？」

「覚醒って光体化でしょ？」

「違うわ、残念だけど。光体化は天使の覚醒した姿。私が言っているのは種族とは別にしての覚醒。まだ覚醒していなかった貴方なら、あと二段階覚醒出来るけど……」

「ノールって、まだ覚醒してなかったんだね」

何か得意気に杏里が話に割り込む。

「ボクはもう覚醒したからノールより強いよ。シナリオも見えるし」

「煩い、眼鏡。今はそんなどうでもいい話は聞きたくないの」

「ええっ！ ボクはシナリオのことを教えてあげよう……」

「杏里くんに何かを教わるなんて迷惑で屈辱的だね。てゆうわけで却下します」

「ど、どうして……」

杏里は泣きだしそんな悲しげな表情を浮かべる。

「簡単に言うとな疲れ、もう頭の容量が足りないの。部屋に戻って休みたい。今日はもう色々あつてくれたくただよ」

「じゃあ、部屋に戻ろうか。ノールはボクと同じ部屋だよ」

「なんか一々癪に障ることを言うようになったね、君は。知ってるよ、そんなこと。バカじゃないの？」

そう言い放つとノールは舌打ちをして部屋を出て行った。

「そんな……待ってよ、ノール……」

ノールを追い掛けるように杏里も部屋を出ていく。

「いいなあ、私もあんな風に誰かと付き合いたいわ」

「止めなさい、綾香。さっきのノールと杏里の関係からしてどちらも良い雰囲気だったとは思えないわ。というか、あんな風にだけは止めてほしいわ」

新たな仕事

天使界の宿舎へと仕事を移してから数日が経過し、ようやくノールたちはリバースとしての活動を再開する。

そのため、クロノからの仕事を引き受けるようになった。

ノールたちは既に強過ぎてしまっているために、仕事やハントを100%成功し続ける。

完全に総世界のパワーバランスを逸脱した組織と化していた。

その功績からなのか、クロノを閑せずとも異世界から仕事の依頼が大分来るようになっていた。

「ジエノサイドだっけ？ あの組織から完全に目を付けられるくらい色々やっているのに向こうは何もしてこないね」

宿舎ロビーにメンバーを集め、ノールは疑問を感じていたことを語る。

「それなら問題ないでしょう？ 私たちがしていることは殺戮や虐殺じゃないわ。賞金首のハントや依頼された仕事をそつなくこなす優良な組織なのだから」

不満なのか、腕を組みながらルインは答えている。

「どうせ連中は私たちが賞金首どもを一掃したら戦いを挑んでくるのだと思う。賞金首に、リバース。いずれジエノサイドにとって戦

う敵たちなのだから敵と見ている者たちが勝手に潰し合っている間は同士討ちさせておけっという寸法よ」

「あー、やっぱり。大体ボクもそうなのかなって思ってたよ」

ノールはルインから視線をリュウに移す。

「そうなの、リュウ？」

「ああ、そんなところだな」

話をただ聞いていたリュウだったが、ノールの問い掛けに普通に頷いた。

それは話を聞いていなかったが、何となく返事を返したという訳ではなく事実を答えているようだった。

「じゃ、君ってクロノスの……ジェノサイドの一員？」

驚いているのか、有紗は少し声の上擦っている。

「そうだけど、どうした？」

「自分からバラしてどうするの？ ジェノサイドの一員だって？」

「もういいんじゃないかな、この際。そう思ってね」

「そっか」

「桜沢一族とジェノサイドは敵だ。オレと、戦ってみるか？」

「君と戦えば、色々面倒なことになるから断るよ」

「ふーん、そうか」

何となく頷くと、リュウは宿舎を出ていこうとする。

「どこ行くの？」

「スロート。ジェノサイドの連中とはその世界で情報を取り合っている。諜報員のオレは伝令を逐一伝えないといけないんだ」

「そうなんだ。いつてらっしやい」

ノールは笑顔で手を振る。

「ああ、すぐ戻るよ」

普段と何も変わらない様子で、リュウは宿舎を出ていった。

「リュウって素直だよな。リュウのああゆつとこ、ボクは好きだな」

「ノール、それは違うよ……」

普通にリュウと話していたノールに杏里が声を掛ける。

「言いづらいけどさ、リュウさんは今ので確実に敵だと分かったんだよ。しかも、リュウさんが諜報員ってことは、ボクたちの情報が完全に筒抜け」

「どこが言いづらいのさ、べらべら喋ってるじゃん？ よーし、こ
うなったらリュウを皆で追い掛けよう！」

「おー！」

皆でとノールは言ったが、メンバーの内、ノールと杏里だけがはし
やぎながら宿舎から出ていった。

ノールと杏里の二人がリュウを追って宿舎の外へ行くとリュウは宿
舎の出入口付近にまだいた。

「どうした？」

「あつ、ヤバっ！」

「……………」

今のノールの一言で大体把握したリュウは、余りにも短絡的過ぎる
行動に言葉もない。

「……………オレはこれからスロートへ向かう。付いてきたいのなら来れ
ばいい」

それだけ言うと、リュウは異世界空間転移を詠唱し、ノールたちの
目前から消えた。

「リュウも異世界空間転移使えたんだ。じゃあ、ボクたちもさっさとスロートに行こっか」

ノールも異世界空間転移を詠唱し、スロートへと向かう。

スロートに移動したノールたちが出現した場所はスロート城内の中庭だった。

「早いな、お前ら二人だけか？」

中庭に、リュウがいた。

「尾行なら、もう少し上手くやった方がいいんじゃないか？」

「やっぱり？」

「ともかく、オレはこれからジエノサイドのメンバーと会うから二人はどこかに行ってくれ」

「よし、分かった」

杏里の手を引きながら、ノールは杏里と一緒に少し離れたところにあるベンチに座った。

そこは、リュウのいる位置から普通に丸見えの場所。

ベンチに座っている二人はどこことなく楽しげに、リュウの方を見ている。

「…………ふう」

二人の余りにも短絡的過ぎる行動にリュウは溜息を吐く。

その時、城内の方から出てくる人物がいた。

身なりからしてスロートの兵士のような人物はリュウに近づく。

「通り、二人で何かを話すとすぐに兵士は去っていった。」

兵士が去ると入れ替わりで別の人物がリュウに近付き、再び何かを話すと二人でノールたちの方に歩み寄ってきた。

「貴方たちがR・ノールと桜沢杏里ですか？」

「いいえ、誰ですかそれって？ 全くの人違いです」

笑顔でノールは否定する。

「貴方方に頼みたいことがある」

「バレてる？」

わざわざ、ノールは杏里に聞いている。

「無論、リバースへの依頼です。我々から報酬を支払います」

「ですから、人違いです」

「成功報酬は……10億でどうでしょうか？」

「引き受けましょう！」

ノールは立ち上がると、その人物の手を両手で握る。

「それは良かった。申し遅れましたが、私の名は相馬。早速依頼についてですが…」

「前金を下さい、宿舎暮らしはもう嫌です」

「えっ？ はあ……分かりました。これをどうぞ」

相馬は一枚の紙を手渡す。

「10億の小切手になります。これで足りなければ…」

「いいえ、全然足りません。嬉しいです。で、依頼とは何ですか？」

相馬から手渡された小切手をじつと眺めながらノールは聞いている。

依頼人を前にしているというのに接客という対応ではなかった。

「ヴィオラートという世界の法王を亡き者にしてほしい」

「それって、ジエノサイドの方でやれば良くない？ ボクらより組織の人数は多いでしょ？」

「ジエノサイドですか？」

ノールがジエノサイドという言葉が発すると、相馬は怪訝な顔をした。

「ノール、相馬さんはジエノサイドと何も関わりはない。それにジエノサイドのメンバーはまだ来ていない」

リュウはノールに耳打ちする形で伝える。

「あっ、そうなの。じゃ、相馬さん。依頼内容をよろしく」

「はい。ヴィオラートの法王はジェノサイドという組織を総括するクロノスという……つまり総世界政府の一員です。彼はその権力を扱い、我々を長年支配しています」

「それで、相馬さんたちを支配している法王を殺せば全てが上手くいくってことだね？」

「そうです」

「成る程。でもそれじゃあ、ボクらはジェノサイドにケンカを売ることだよな。大丈夫かな？」

「R・ノールなら、きっと勝利すると信じています。R・ノールは私たちの希望です」

「ん、相馬さん。なんだかボクをかなり持ち上げてるみたいだけど、そうゆう訳じゃなくてね……リュウ、ボクたちならジェノサイドに勝てるかい？」

何故かノールはリュウに振る。

「無理だな、勝てない。クロノス創始者のタルワールの能力に適う者など存在しない」

「よし、分かった。相馬さん、今回の仕事引き受けますよ」

「本当ですか？ R・ノール、貴方を信頼して本当に良かった。では、よろしくお願いします」

相馬は空間転移を詠唱し、ノールたちの前から消えた。

「えーと、分かりづらくなっただけで、クロノスⅡ総世界政府。ジェノサイドⅡクロノスの特殊部隊でいいんだよね」

「説明するとジェノサイドはクロノス中央機関の一つだ。総世界が平和であるには犯罪者などに死を与えるのは当然というタルワールの思想から、そのような死を扱う暗部でも中央機関の一つになれる。そのせいか、所属数も桁外れな人数だ」

「ボクもその思想には賛成だけど、ボク自身犯罪者扱いされてるから腑に落ちないね」

「R一族、桜沢一族はこの世に生を受けた時から犯罪者だ。それも、タルワールの思想だ」

「リュウもそう思ってる？」

「んー、普通」

「微妙なニュアンスだね……R一族のボクにとっては嘘でも白黒はつきりさせてほしいよ。そんなことより、ウチの組織にはスパイがいるね」

「リュウさんのこと？」

もう知っていることなのにノールが言ったので杏里が聞く。

「杏里くん、もう一人だよ。リュウ」

「なんだ？」

「リュウはいつ自分がスパイだとバレたと思った？」

「テリーがオレに聞いてきた。ノール、杏里、綾香、ルインも知っている」と聞いたから堂々としていた」

「それはどうかと思うけど。とにかく、リュウ以外にもう一人くらいスパイがいるの」

「ハア……」

リュウは深く溜息を吐くと、何かを決心した目でノールを見つめる。

「もう一度言っておくけど、ジェノサイドはR一族を敵と見なしている。ノールはオレと戦うか？ オレはもうお前と戦う覚悟を決めている」

「リュウ、煩いよ。今、誰がスパイか考えてるの」

「スマン、邪魔したな」

「そうだ、リュウ。残りのスパイは誰？」

「スパイ？ 多分、杏里……辺りかな？」

両腕を組み、かなり深く考えた様子でリュウは答える。

「リュウって何も知らないみたいだね」

「まあな、オレは単独だと今までずっと思っていた」

「じゃあ、スパイが分かったよ。一人だけ言動が不審な人いた」

「有紗兄さん？」

同じくリュウと共に考えていた杏里が答える。

「おい、何で眼鏡が先に答えるんだよ」

「ごめんなさい……」

当てたのにノールに怒られて杏里は落ち込む。

「でも、杏里くんにしては確かに正解だよ。あの人だけだもん、ボクらの懸賞金知っていたの。以前、レイディアントがボクにかかっている懸賞金を話してたのと似た感じだったもん。それにレイディアントが天使界の上流天使は全てジェノサイドに所属しているって言うってたもんね」

「そのことを有紗兄さんに言うの？」

「まさか、そんなこと言うはず無いじゃん。彼にはまだ自分がスパイだと気付かれていないと思っていてもらわないと。レイディアントが言っていたことは話しちゃダメだよ？」

「どうして？ ボクは兄さんと敵になるなんて嫌だよ！」

「どうしてって君はバカかい？　こんなことを話したら完全に敵対するでしょ。まあ、向こうがかかってこなければ一緒にいるけどね」

「つまり、オレはメンバーに闘いを挑まなければ一緒にいられるんだな？」

「まっ、そうだけど。てか、リュウはさっきから自分のことをバラし過ぎなんだよ？　少しはスパイらしくしてみたらどうなんだい？　ボクがスパイだったら…」

「ああー、ちよつといいか、杏里？」

ノールのことをスルーして、リュウが杏里に声を掛ける。

「有紗がリバーズを離脱したら、有紗についていくか？」

「えっ……」

唐突な質問に杏里は口籠もる。

相当悩んでいるのか、ノールの方を杏里は不安そうに見つめた。

「杏里くん、ボクの前なんだから嘘でもついていかないって即答してほしいところだよ。まっ、それは置いといて、これを見てよ！」

ついさつき相馬から貰った小切手をノールは見せびらかす。

「これはクロノからの仲介を通していない。だから、全てがリバーズのものなの！　わあっ、どうしよう、ボクもこれでニューリッチ

だね！」

「ノールはこれからの闘いについてとか、今の組織内のこととか心配じゃないのか？」

突然大金を得たせいか、はしゃぎまくっているノールにリュウは言う。

「ボクらは強い、絶対勝てるって信じていれば勝てるんだよ。ボクらは仕事もハントも完璧にこなしている常勝軍だよ」

「そうかい、先に言っておくけどオレは裏切ったりしないからな」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

「……理由は聞かないのか？」

「ボクはリュウを信頼している。それだけじゃ、足りないのかい？」

「そうか、ノールは優しいんだな」

「ふふっ、じゃあ取り分の話になるけど、ウチのメンバーは全部で八名。一人一億配分計算で残りの余った代金全てを新しいギルド建設に回します」

「一億も貰えるのか！」

リュウは明らかに驚いた反応を示す。

「そんな大金見たことも獲られるチャンスも無かったのに、いきな

り自分の物になるなんて……奇跡だ!」

「その代わりに、ヴィオラートへは行ってもらうよ。今回の戦いは、クロノス、ジエノサイドとの前哨戦となることは間違いないからね。メンバーを四人か五人くらいは連れていくよ」

「残りは?」

「自宅警備」

「ああ、そう。そういや、新しい本拠地を造るんだったな。どんな感じに造るつもりだ?」

「それなら何も問題ないよ。ボクの手元に残る、丁度二億で屋敷を提供してくれる人がいるから。とつても悪趣味だけだね」

ルミナスの優しさ

ノールたちが仕事を依頼された同時刻、魔界中央区では国際会議が行われていた。

無論それは新たな邪神となったルミナスの邪神就任式、ルミナスの新たな魔界将軍を選出決定など……後の魔界運営を取り決めていく重要な会議だった。

「あー、ちよつと、君。何だか寒気がしたのだけど何でだと思っかな？」

ある邸宅のサロンから、透き通った綺麗な女性の声が聞こえる。

その声の主は新たに邪神となったルミナス。

豪華絢爛な造りが成されたサロンの高級なソファーに深々と座りながらルミナスはゆったりとしている。

現在、ルミナスは会議の途中休憩の合間に自らが新たに建てた邸宅で休んでいる様子。

連日続く、会議のせいかルミナスには疲れの色が窺える。

「名前で呼べよ、バカが。オレが知る訳ないだろ？」

「霸王にまで階級を上げてやったのだから、君は口を慎んだらどうなの？」

ルミナスの問い掛けに答えたのは、新たに魔神階級から魔王、魔界
將軍などを飛び級で出世したルークである。

彼も同じようにソファアに腰掛けている。

ルークの傍にはソファアが他にもあると言うのにルークの座るソフ
アの背後で直立し、辺りに気を配るドREAMの姿がある。

「アンタには階級を上げてもらって感謝しているよ。でも、オレは
お前の冷え症の話なんて聞きたくもないし、答える筋合いもない」

「生憎だけど、私は冷え症じゃないよ。毎日の運動を欠かさないか
ら、一度も冷え症になつたことなんてない」

「へえー、だったら何で寒気なんてするんだよ？」

「嫌な予感がするの。悪寒なのかな……何かを奪われるような。そ
んな恐ろしい感覚が……」

「そんなこと誰がするんだよ？ お前は魔界の最上級階級の邪神だ
ぜ？」

「そうなのだけど……」

不意に三人は部屋の隅に魔力を感じた。

ルミナス、ルークがその方向を見るとその場にノールと杏里が現れ
ていた。

「あー、いたいたルミナス。この家、二億で売って」

「はっ……?」

ルミナスは今までの生涯で一番理不尽な要求をされていた。

この今いる邸宅はルミナスが邪神へと就任する記念に建てたもの。

以前の黒塗りの屋敷から、引っ越したばかりである。

「何言ってるの、君は? そんなこと言って私が良い返事を返すだろうと思ってるの?」

「それなら、ボクはルミナスのために光体化してあげるよ」

「酷過ぎる脅し……拒否権はあるの?」

「あるよ、ボクに勝てれば」

「そういうのが無いって言うの。勝てるはず無い……」

「さっきから何言ってるんだ、ルミナス? てか、この女は光体化出来るのか?」

以前、ルミナスとノールに何があったのか知らないルークは話に付いていけなかった。

「ノールは光体化出来る。魔界將軍たちを纏めて粉碎し、私でさえ敵わなかったルーシェさえも圧倒的に葬ったのはこの女だよ」

「それってどういうことだ? あの時の光体化はお前が殺したはず

じゃ……」

「私が殺したなんて言ってない。ノールが私に押し付けた」

「てことはお前なんで邪神になってんだよ！ 弱えんじやないか！」

「うっさいね、君なんかよりは強いよ！」

「はいはい、そろそろ無駄話も終わったかな？ ならさっさと二億で売ってね」

手をパンパンと叩くと、言い合っている二人にノールは冷血な言葉を掛ける。

「この水人！ 人でなし！ ノール、君には暖かい心はないの！」

「あるよ、人だもん。こつちもタダでよこせなんてことは言っていないの。せつかく二億もあげるんだから」

「ダメに決まっているでしょう！ この邸宅を建てるのに三十億もかかっているんだよ！ それに取引でもなんでもないよ、こんなのつて！」

「……光体化しちゃうかな」

光体化特有のプラズマのような覇気がノールから発生した。

そして、ノールの背中から八翼の羽根が現われる。

ノールは完全に光体化した。

「ノール、もう止めようよ。これは恐喝だよ。ノールのしている」とは最低だよ」

そのノールを杏里は止めようとする。

「杏里くん、君はどうしてここに連れてこられたか分かる？」

「なに？」

「君がボクより強いってことを見せれば、もっと早くルミナスは家を譲ってくれるはずだよ」

「それってボクも脅せってどういうの？ 最低だよ、ノール！」

「あー、はいはい、分かりましたよ」

杏里の話を軽く切り上げ、ソファアに座るルミナスへ迫る。

「ルミナス、この前はありがとう。ボクはルミナスの行為のお陰で心から死の恐怖を実感出来たよ。あの時は痛かったよ、苦しかったよ、怖かったよ、ふふっ」

「ノ、ノール……」

ノールが迫ると途端にルミナスは静かになった。

「どう？ 今、すっごくボクが怖いでしょう？ 怖くてボクを見れないでしょう？」

「……酷いよ、こんなやつて」

脅迫され、ルミナスは泣き出す。

「酷いよ、なんて大袈裟だね。ボクに同じことをしたじゃん？ それを返してあげるだけだよ」

言い終わると、ルミナスを平手打ちするため高く掌を振り上げる。

「止めなよ！」

その腕を杏里が掴んで止めた。

「人を脅すなんて、全然ノールらしくないよ。止めようよ、こんなこと」

「あつ……杏里くん、眼の色が銀色に変わってるよ」

杏里の瞳は銀色の輝きを放っていた。

それは杏里が覚醒化した証拠だった。

「覚醒化したよ。ノールがルミナスさんを苛めるなら、ボクはノールを止める」

「てか、そんなこと言って実は君がルミナスを苛めたいんでしょう？」

「違うよ、そんなことしたくない！」

「……にしても、杏里くん。よくボクの平手打ちを止められたね」

「止めるよ、ノールが暴力を振るうなら」

「ルミナス、聞いた？ 君を苛める相手がたった今変わったよ。光体化したボクの攻撃さえも軽く受け止める杏里くんが君を苛めるんだって」

さりげなくノールはルミナスに囁く。

今の状態のルミナスを脅すには十分過ぎる止めとなった。

「わ、分かったから……邸宅も屋敷も全部あげるから私に酷いことしないで……」

「ありがとう、ルミナス！」

ソファアに座ったまま、泣き続けているルミナスにノールは抱き付いた。

「ごめんね、怖かったかい？」

「怖いよ……」

「出来たら、いらない屋敷とかを二億で売ってほしいんだけど、良いかな？ この邸宅を売ってとはもう言わないからさ」

「……いいよ。以前、私が暮らしていた屋敷を売るから帰ってちょうだい。あっちも、建てるのに十六億もかかったのだからもういいでしょっ？」

「うん、ありがとう。でもボクが助けてほしいって連絡したら、ちゃんと来るんだよ?」

「な、なにそれ……私はそんなこと聞いてない」

「来るんだよ? 来ないと……」

暗い頬笑みをノールは浮かべる。

「分かったよ……いつでも行くから、もう許してよ……」

「よしよし、ルミナスはとってもいい人だよ」

俯いたまま恐怖でノールを見れないでいるルミナスの頭をノールは優しく撫でる。

「じゃ、杏里くん。屋敷を譲って貰ったから行くところか」

「う、うん……」

杏里はとても浮かぬ顔をしている。

早速ノールは空間転移を詠唱し、ルミナスの旧住居である黒塗りの屋敷の玄関前に着いた。

着いた後に、異世界空間転移で屋敷ごとスロートへ移動した。

移動先は当然、スロートのノールたち姉弟が暮らしていた住居跡地。

しかし屋敷は、ノールたちの暮らしていた家の約数十倍程の大きさだったため圧倒的に土地面積を超えてしまった。

その極端な大きさ、外観の豪華さはスロートではとにかく目立った。

「どうする、杏里くん。ボクの判断だと絶対に金の亡者のクロノ辺りが来そうなんだけど。土地代とかの税金取られそう」

「そうだね、間違いなく来ると思うよ。最近、分かりやすいくらいお金に反応するようになったからね、クロノさん。昔は全然あんな人じゃなかったのに……」

黒塗りの屋敷前でベラベラ話していると、何かとても嫌な予感があったのでノールたちは屋敷内へ入ることにした。

「やあ、何を話していたんだ？」

「あ、あれ……」

屋敷に入った直後、ノールは絶句した。

このような恐ろしい体験は初めてだったからだ。

「この屋敷の扉は結構厚く作られているみたいで聞き取れなかった……てか、どうしたんだ？ まるで、幽霊を見ているようじゃないか」

ノールたちの目の前にはクロノの姿があった。

何故、彼がこの屋敷内において自分たちに気付かれずにどうやって入

ることが出来たのか、ノールは両方全く分からなかった。

それは、クロノが魔法のスキルを持ち合わせておらず、空間転移さえも知らないはずだったからである。

「ク、クロノ……どうやって屋敷内に入ったの？」

「はあ？ 玄関からだよ」

「はっ……？ ボクらがついさつき玄関前にいたじゃん。普通気付けるはずだよ。しかも、ボクらがスロートへ来てからまだ一分も経ってないはずだし」

「まだまだだな、二人とも。その様子だと魔力、攻撃力だけで戦いを勝ち続けていただろ？ まあそんなことより、ここには少しだけノールの土地があるけど、殆どはスロートの国有地だ。え〜と、大体一ヶ月百万で手を打とう」

「百万でって普通に言ってるけど……ここは街外れで、このスロート市街で一番土地価格が安いはずなのに街の中心部より高レート価格なんですけど」

「嫌なら、屋敷は国で接收する。喜べ」

「やるか、バカ野郎。ところで、さつき魔力と攻撃力以外にも何かあるみたいと言ってたけどなに？ さつさと言え」

「あー、やべっ。バカ野郎って聞こえた。やべっ、百万をまだ貰ってねえわ。オレはそろそろ帰るけど、城からゲマとソルが来たら退去してもらっからな」

「どんだけ金欲しいんだよ。引くよ、クロノには。じゃあ、いいよ。明日払うよ、百万」

「オツケー、交渉成立だな。ついさっきオレが気付かなかったのは“潜在能力”によるものだ」

「ポテンシャルでしょ？」

「いや、まあそうなんだけど。お前らの場合は、“アタック・ポテンシャル”と“スペル・ポテンシャル”だけだろ？」

「なに、それ？」

「近代の戦い方ではそういう呼び方するんだよ。ソルとゲマが新たな力を得る方法を教えてくれたんだ。それで、オレにあった“スキル・ポテンシャル”は“他人に悟られない能力”だ」

「……なんか、しょぼいね」

「煩い。能力だけあって全くオレに気付けなかったくせに。ところで、お前らのメンバーにはスキル・ポテンシャルを扱える奴がいるのか？」

「さあ？ 仲間内にも知られたくないのか誰も自らの能力を全て披露してくれないから分からないよ。ボク自身、杏里くんの全力とかも知らないし」

「仲間を少しは信頼しろよ」

「色々ゴタゴタしてるから、そうもいかないの。ていうか、ゲマとソルって人にスキル・ポテンシャルについて聞けば、ボクらもそれを扱えるようになるの?」

「自らの能力を開花させられればな。オレは大体二ヶ月かかったけど」

「二ヶ月って? 嘘でしょ?」

「嘘じゃないよ。ノールたちを城から追い払った次の日にゲマから提案されたことだったから、間違いなく丁度二ヶ月で能力を自分のものにした」

「ええっ、じゃあ、ボクらをスロート城から追い払って何日経ってるの?」

「多分大体、三ヶ月かな?」

「なにそれ……おかしいよ、そんなの。ボクらは天使界に長くいたんだよ。だから、他の世界へハントに行ってる時しか時間が進まないから時間経過はこっちの世界じゃ、それ程ないはずなのに……」

「ノール。これって、どの世界にいても同じだけの時間が経過するようになったんじゃないのかな?」

ノールと同じく疑問に思った杏里が答える。

「アクローマなら何か知ってるかも……本当に年寄りだからね」

「人間年令で比較しちゃダメだよ。天使の年令では、全然アクロー

「マさんって若いんだよ?」

「じゃ、何才?」

「人間年令でいうと、アクローマさんはまだ26才くらいだよ」

「それは見た目の話でしょう? 価値観や発想は年寄りだよ、絶対年寄り」

「てか、二人とも。城へ来るか? お前らならスキル・ポテンシャルを難なく身に付けられるはずだ」

「時間軸の方も気になるけど、今以上に強くなれるかもしれない気がするから、一応城へ行くよ」

小休止

ノールたちはスロート城へ向かうため、スロート市内を歩いていた。青い空に映え、一層その白い輝きを増す漆喰の美しい街、それがノールたちの住むスロート城下である。

数分後、スロート城へと着く。

相変わらず豪華さに欠ける質素な城の造りにノールは疑問を持っていた。

「クロノ」

「なんだ？」

城の回廊を歩きながら、ノールはクロノに声を掛ける。

「城の造りが相変わらず質素だね」

「まあな。無駄な物には金を掛けたくないし、城内を豪華に飾るだなんて只の驕りに過ぎないとオレは思っている。そんなこと、領民たちの血税を吐き捨てているようでオレには出来ないよ。まっ、城の壊れた箇所を修繕するためには金を使っているけどな」

「他の搾取した税金は何に使ってるの？」

「搾取したって言葉悪くないか？ 一応、税金は軍資金三割、領民資金四割、領営資金三割に全部廻している。ついでにだけど、オレ

の収入は議長、帝、総帥を兼任しているけど全く受け取っていない」

「金の亡者め！」

「なんで？」

「じゃあ、クロノさんはどうやって暮らしているんですか？」

さりげなく杏里が聞く。

「昔からやっている不動産業だよ。ちゃんと、資産はあるから心配するな。それに新しい食い扶持が出来たしな」

ニヤニヤしながら、クロノはノールと杏里を見ている。

「この人は……本当に金の亡者だ」

ノールと同じことを杏里は思った。

しかし、ノールたち二人がクロノを金の亡者だと思っ程、一見クロノは金稼ぎをしていないように見える。

だが、当然そんなはずが無い。

自らの土地ではない国有地を自らの不動産業で違法に展開しているのだ。

議会を通さずともノールたちに法外なぼったくり料金を押し付けられたのもこのためである。

議長、帝、総帥と兼任しているクロノだからこそ、行えることだった。

「そんなことはどうでもいいとして早く行くぞ」

鼻で笑いながら一蹴するとさっさとクロノは話を流した。

「よう、ゲマ。今って暇かい？」

城の図書館までやってきたクロノは図書館にいたゲマへ声を掛ける。

丁度、ゲマは本棚の棚から書籍を取り出し、読もうとしていたところ。

「ああ、クロノ様。如何なされましたか？」

「ノールと杏里にスキル・ポテンシャルについてを教えてやってくれないか？」

「その、お二人にですか？」

「こいつらなら能力も高いし、簡単に扱えるようになるはずだから結構楽に教えられると思うよ」

「そうですか……ですが、クロノ様の頼みであってもノールさんには教えることが出来ません」

「はっ、なんで?」

「いいえ、その……水人女性は苦手です。アレルギーなんです」

「へえー、そんな体質あるんだ。そういう訳で、ノールはダメっばいわ」

「なんか、ガツカリなんですけど」

目の前で当たり前のように断られ、ノールは微妙にしらけた顔をする。

「初めて聞いたよ、水人アレルギーって。本当はボクのこと嫌ってるんじゃないの?」

機嫌が悪くなったノールはゲマに近付く。

「あ、あの……」

「分かるよ、近付くなって言いたいんでしょ? 相当腹立つんですけど」

微妙な反応をするゲマにノールが迫る。

「よっつ」

何となく嫌がっているゲマの手を握る。

「は、離してください…」

「嫌だね、今確かめてんだから」

「離して!」

無理やり手を振るい、ゲマはノールから手を離させる。

握られたゲマの手の甲は真っ赤に変化していた。

「あれ……本当にアレルギーだったの?」

「はい、私は水人アレルギーの体質なんです」

「ゴ、ゴメンね。てつきり、ボクを嫌っているからそんな反応をするんだと思ってたよ」

「いいえ、大丈夫ですよ。私がノールさんに体質を上手く伝えられれば良かったのですから。不快な思いをさせて申し訳ありません」

「そんな、ボクが無理やりやったんだから貴方が謝ることなんて無いよ……ゴメンなさい……」

ついさっきの強気な姿勢から、ノールは申し訳なさそうに態度を変える。

「ノールさんは優しいですね」

さっと、ゲマはノールを抱き締める。

「ノールさんは何も悪くありません。何も悪くないのです」

ぼんぼんと背中を叩いて、ゲマはノールから離れた。

「優しいのはゲマさんだよ。ボクに気遣って、またボクにふれちゃったし……もう休んでいいんだよ、ゲマさん。アレルギーなのに余計体調悪くなったでしょ？」

「ええ、少し」

そう言いつつも、ゲマの顔色は優れない。

「済まんな、ゲマ。今日は休んでいていいよ」

「そうですね？ クロノ様、私は大丈夫ですよ。スキル・ポテンシャルについては任せてください」

「いや、ゆっくりしてる。これは命令だ」

「は、はい。分かりました」

クロノに頭を下げ、ゲマは図書館のフリースペースの方へ歩いていく。

「起きなさい、ソル」

「はあ？」

フリースペースにある椅子を並べて寝ていたソルを起こすと、ゲマは明らかに寝呆けた様子のソルと一緒に図書館を出ていった。

「クロノ、あの二人の関係ってなに？」

「昔からの親友って聞いたけど？ でも、オレには親友というか兄弟にしか見えないけどな。あーゆうのを絆が深いっていうのかな」

「ふうん、そうなんだ。でも不思議なんだよね。一瞬だけ、ソルさんからシスイ君のような感じがしたんだよ」

不思議そうにノールは首を傾げる。

それも束の間、ノールの表情は暗くなった。

「シスイ君のことを思い出しちゃった……やっぱり、ボクも……」

「ノール！」

すぐに杏里がノールを抱き締める。

「ノールは生きてなきゃ駄目だよ。シスイ君との約束でしょう？ それにノールが死んだらボクは……どうすればいいのさ」

「ゴメンね、発作的に言ったただだから大丈夫だよ。スキル・ポテンシャルについても分からなかったし帰ろっか。じゃあね、クロノ。ボクらは帰るよ」

「ああ、分かった。あと支払い期限は今日から一週間後までだから早めに払えよ」

「はいはい、分かってますよ。亡者」

ノールの隣に杏里がくっつくような格好で二人は図書館を出ていっ

た。

「ちよつとき、探検してみないかい、ここ？」

黒塗りの屋敷まで戻ると、ノールは杏里に言う。

「そうだね、入ろつか。ボクはバスルームとベッドルームを探すね」

「大体検討付くから先に言うけど、絶対にしないからね」

「どうして？」

「気分じゃないし、そんなことは今するべきじゃないよ。良いかい、杏里くん。天使界の窮屈な宿舍暮らしから皆を楽にさせるために、こうやって大きな屋敷を譲ってもらったんだよ。皆を連れてくる前にボクらが屋敷内を把握しての方が建物内を説明出来ていいでしょう？ 全く、Hなことばかり考えているんじゃないよ」

「分かったよ……だったら、屋敷内を全部把握した後でいいよ」

「たく、分かってないな、君は。なんで、ボクが犯されること前提なんだよ、バツカじゃないの？ それはともかく屋敷内に入るよ」

「うんー！」

嬉しそうに頬笑むと杏里はノールにくつつく。

正直イラツとしたが、ノールは杏里と屋敷内へ入ることにする。

「そついえば、ノール？」

「ん？」

「ルミナスさんにお金っていつ払うの？」

「……………」

真顔で杏里の顔を少しの間、ノールは見つめる。

「えっ、もしかして、ノール……………」

特に何も語らず扉の方にノールは視線を戻す。

し字の開けやすいドアノブを廻して、扉を開けるとノールは驚いた。

開けた瞬間目に入ったのは綺麗で豪華な装飾がなされた赤い絨毯を部屋全体に敷き詰められたフロアだった。

そして、当然のように飾られている絵画やアンティークの数々。

とにかく何もかもが豪華過ぎていた。

「豪華過ぎないかい、これって？ さっきはクロノがいてびっくりしてたから全く気付けなかったけど、ルミナスはエントランスから物凄くお金をかけ過ぎているような……………」

「そうだね、敷き詰められた綺麗な絨毯なんてアクローマさんと会

う時しか見たことないよ」

「うわっ、明らかに貧乏じゃん、ボクらって。何ですか、これって？ 底辺ですか？」

「違うよ、今は億単位を稼いだニューリッチでしょう？」

「ああ、そうだった。小切手を早く換金してこなきゃね……でも、こんなので不条理だよ。ボクらが日々底辺生活を送ってる間、ルミナスは金持ち貴族な生活を堪能してたって訳でしょう？」

「ルミナスさんも色々と苦労したからこそ今の生活があるんだと思うよ。ボクらより五倍も長く生きてるし」

「五倍って何で君が知ってるの？」

「ルーシエさんが言った。ルミナスさんは見た目と違って年令が95才〜100才くらいだって」

「どう見ても二十才くらいの人にしか見えないけど、やっぱり年を結構取ってるんだね」

「でも、魔族や天使の寿命だとまだ人生の五分の一しか生きてないよ、ルミナスさん」

「知ってるよ、それくらい。でも、ボクらはまだ480年くらい生きられるんだから、ボクらにとってすればルミナスも年寄り」

「それはいいとして、どれくらい部屋があるか探検しようよ。すっごい広いしね」

「それじゃ、行こっか」

数十分後、ノールたちはようやく旧ルミナス宅内部の全容を把握することが出来た。

三階建ての屋敷には部屋数四十。

サロン、応接間が各階にそれぞれ一つずつ。客間、寝室全てにトイレ、バスルーム完備。蔵書やワインセラー、さらには宝物庫までもが屋敷内にはあった。

「……………」

ノールは最初とてもはしゃいでいたが、既に無口になっていた。

これ程まで自らを底辺だとは思わなかったからである。

それについては杏里も同じ様子。

命懸けで戦いを続けても、このような資産を築けなかった。

この現実にノールは無性に腹が立ってきた。

「おかしくない？　こんなのもってさ、有り得ないでしょ！　ルミナス、仕返ししてやる！」

エントランスまで戻ると、ノールは溜まっていた不満を口にする。

「でも、その仕返ししてやりたいルミナスさんがこの屋敷をたつた

の二億で譲ってくれたんだよ。多分、ここって素人判断でも総額五十億以上行くと思うよ」「

「ありがとう、ルミナス!」

「調子良いね、なんか。お金払わないつもりでしょ? それじゃさ、ノール、寝室へ行こうよ!」

「殺されたいの?」

「戦うの? 無理だよ、覚醒出来ないノールはボクに勝てないよ」

「そういうニュアンスじゃなくて、嫌だって言ってるの。分かれよ、いい加減。ていうか、どうしてそんなにしたいのさ?」

「だって、以前したのはボクらがまた付き合うことを決めた時じゃん」

「あの時はボクの心が弱くなったから、したんだよ。それに怖いんだよ、あんな風にまたボクがなるのって。あんなの、ボクじゃないもん」

「ボクはノールの反応を変だと思ってないよ。あれが普通なんだよ。天使化して、初めてお互いと一緒に感じられるようになったんだから」

「でも、その……なんていうか」

「感じられる感覚が普通だって思えるようにしようよ」

そう言いながら杏里はノールの身体にいやらしい手つきでふれる。

ノールは諦めたのか、ふれられても俯いたまま振り払おうとしなかった。

数十分後、ノールと杏里は寝室から出てきた。

杏里はとても幸福そうな顔をしている。

それに対して、ノールは足元が覚束ない上、とても浮かない表情をしていた。

「どうしたの、ノール？ 気持ち良くなかったの？」

「いや……凄く良かったよ。自分でもびっくりするようなことを言っちゃってたしさ……」

「だよね、今日のノールも凄かったもん。ノールの喘ぐ姿が……」

「ボクはそれが嫌だって言ってるの！」

反射的にノールは杏里の腹部を思いっきり殴る。

その後、ノールは足元が覚束なかったせいか、態勢を崩した。

「君はさ、激し過ぎなんだよ！ 程々つてことが分からないの！ ボクはもうあんな風になりたくないし、程々に楽しみたいの！」

「だって、ノールが十分くらいで終わらせてっていつから……楽しんでみたかっていつても暇なんでしょ？」

そう言いながら杏里は、ノールを支えながら立ち上がらせる。

「そういえばそんなことを前に言ったけど、今は感じられるから全く暇じゃないの！　じゃ、これからは天使化してる時は程々。それ以外の変化の時は君のペースってことにしていよ。どうせボクが天使化してなきゃ、ボクは何も感覚がないんだしさ」

「……仕方ないから、ボクは妥協するよ」

「何が妥協するだよ！　良いんだよ、ボクはしなくても？　どうせ、天使は80才にならないと子供を作れないんだから！　それが分かったらボクを背負え！」

「じ、ごめんなさい」

ノールの前でしゃがむと、杏里はノールを背負う。

そして、ゆっくりと立ち上がるとノールに声を掛けた。

「ノール、皆を呼びに行こっか」

「そうだね、元々はこんなことしないで呼びに行くつもりだったんだからね」

覚醒の仕方

異世界空間転移を詠唱したことにより、ノールたちは天使界のアクローマの宮殿前へと現われる。

特に普段と何ら変わらない雲が一面と広がる天使界の風景。

別にこの風景を見たかった訳ではないので、さつさと二人はアクローマの宮殿へと入る。

「大天使長ノール様」

宮殿へ入ると、杏里に背負われたままのノールに声を掛ける天使がいた。

天使は身形からして宮殿を守る番兵といった装備を纏っている。

「どうしたの？ ボクに何か用？」

「アクローマ様がノール様に重要な話があるそうです。それで、私と一緒に謁見の間まで向かってほしいのですが……大丈夫でしょうか？」

ノールが杏里に背負われた状態なので、声を掛けた天使は気遣っている様子。

「大丈夫だよ、じゃあ杏里くん。さつさと進め」

「はぁーい!」

何か楽しんでいるのか嬉しそうに答えると杏里は歩きだした。

「扉は開いていますね、ではノール様。謁見の間へお入りください」

「ん、ありがとね」

ノールを背負ったまま、杏里は謁見の間へ入って行く。

謁見の間へ入ると普段通りアクローマは玉座に座っていた。

「ノールちゃん、待ってたわよ！ 一先ず、眼鏡くんから降りなさい！」

「そうしたいけど、ゴメンね。今は無理」

そう言い、杏里を急かしてアクローマに近付いた。

「そうなの？ まっ、もう今じゃ“仲間”なのだから何も警戒する必要なんてないものね」

吹っ切れたような綺麗な笑みをアクローマは浮かべる。

「私、決めたの。ノールちゃんの意志を信じる。なんせ貴方は私たちの希望なんですからね」

「ん、どうしたの？」

「この前、貴方を信じられなくなって打っちゃったでしょ？ あの時のことを謝りたくて…」

「あー、あの時のことね。人に脅迫されたり、傷付けられたりするの慣れてるから大丈夫だよ」

「あつ、貴方……若いのに随分苦労していたのね」

「苦労とは思ってないよ。これがボクの人生だしね。それに……大好きな人に出会えたのだから」

背負われたままのノールは強く杏里を抱き締める。

「ノール、そろそろ降りてくれない？ もう辛いよ……」

「重くて、ゴメンね」

微妙に怒りに満ちた声でノールは言い、杏里から降りる。

「もう足腰の調子は良いね。これなら大丈夫だよ」

「駄目ねえノールちゃん、少しは痩せないと。見た目によらず……んふっ、貴方って随分と重たいのねえ。女神化出来る者がたましいだなんて、ああ全く持って残念なこと。いえ、貴方は全然気にしなくても良いのよ。これは貴方と私の秘密なのだから」

含み笑いを表情に浮かべながら、一々癪に障ることをアクローマは話している。

「アクローマ」

「なあに……って、以前もこんなことがあったような？」

「ぶん殴つても良いかい？」

尋常ではない程の強い殺気をアクローマは感じた。

「ノールちゃん、貴方を信じて決めたことがあるの。もう私はジェノサイドから脱退するわ」

「そうなんだ。そういえば、アクローマはジェノサイドにボクの何を伝えていたの？　ところで、アクローマは自分が話を逸らすのは上手い方だと誤解してたりしないかい？　因みにボクの体重は二十キロだから」

「連中に話していたことは貴方の覚醒の度合いと、桜沢一族のことよ」

「それだけ？」

「そうよ？　だって私は元々R一族派だし、ジェノサイドの連中は信じられないわ。勿論、貴方のことを嘘も交えた感じで伝えていたわ。だから、貴方がルーシエ程の人物に勝った時はジェノサイドの連中、さぞ驚いたでしょうね」

笑顔で頬笑みながらアクローマは語る。

「でも、アクローマは大丈夫なの？」

「大丈夫よ、私なんて気にしなくても。あと、伝えておきたいことがあるの」

「なんだい？」

「貴方は……つまりR一族はシナリオでの未来予知が不可能だということ。貴方の行動は誰にも分からないの。以前ここに来たミール君もそれに当てはまるわ」

「別にそんなのどうでも良くない？」

「違うわ、関係大有りよ！ 貴方の能力成長が全く分からないうちに攻撃を仕掛けられないでしょ！ 貴方はジエノサイド側からすれば、いつ完全覚醒するのか分からない爆弾みたいなものなのよ！」

「てことは、ボクが怖いのか？」

「そう、怖いわ。特にシナリオを扱える者である程ね。彼らは行動を読むため貴方にシナリオを使うわ。でも貴方には効かない。仕方なく自らの力量で貴方の行動の数手先を読み、読んでしまうからこそ疑心暗鬼に陥る。貴方の覚醒はそれ程恐ろしいものよ」

「それじゃ、今は？」

「見た目通りの可愛い女の子ってところでしょうね。ルーシェに勝てたところで、まだまだ貴方はか弱いなのよ」

「杏里くんよりも可愛いってことだね？」

「そうよ？ 第一、眼鏡くんは男の子でしょう」

「そういうんじゃないくて、見た目でだよ」

「見た目で？」

不思議そうな表情でノールをアクローマは見つめる。

その後、杏里の方に視線を移した。

「あー、そういうことね。綺麗ね、眼鏡くんって」

「ボクはどうなの？」

「簡単よ、ノールちゃんは可愛い。眼鏡くんは綺麗。ノールちゃんにとって眼鏡くんは女性的に越えられない壁ね」

「くそ……眼鏡が……」

邪悪な怒りに満ちた目でノールは杏里を睨み付ける。

「ノール、なんだか怖いよ……」

杏里は恐怖を感じ、少し後退る。

「これは決闘だね。女性として、ボクの方が可愛くて綺麗で強くてその他諸々パラメーターが高いってことを思い知らせてやるよ！」

「可愛いとか綺麗はともかくとして、強いのはボクの方だよ？　そもそもボクは女性じゃないしさ」

「……………」

無言の強い殺気が周囲を包む。

杏里の不用意な一言はノールにとって火に油となった。

日頃から杏里の見た目に嫉妬していたノールはキレてしまった。

「どっしたの？」

杏里にもノールの変化に気付けたようで気遣っているような反応を見せる。

その杏里に対して、ノールはスタスタと近付くと杏里の腰に付けているサイドパックを強引に奪い取る。

「えっ……………ちょっと、ノール？」

「さっきの一言について……………君は忘れてないよね？」

「何か、ボク悪いこと言った？」

杏里の不用意な発言にノールの機嫌がますます悪くなった。

「なんなの？ 君はボクに何を言ったのか全然覚えてないっていうのかい？」

「何だろう、忘れちゃった」

「戦おう……………うん、戦おう。今度からは忘れられないように、脳へ

と恐怖を刻み込んでやる」

「ちよつ、ちよつと、ノール。落ち着いて……ボクたちが戦っても今の状態じゃ勝つのはボクだよ」

「はあ？ 信じらんない！ 戦ってもいないのにもう勝った気でいるわけ！」

またもや、ノールの気に障る発言を杏里がしたためノールの怒りは増す。

「とにかく戦うのはもうボクが決めたからね。じゃ、アクローマ。一旦、席を外すけど構わないよね？」

「ええ、私は全然構わないわ。気が済むまで殴り合ってきなさい」
アクローマには二人を止める気配が感じられない。

そもそも、アクローマはノールが杏里に勝てるだろうと踏んでいるため止める気などなかった。

「そういう訳だから、空間転移するね」

「ま、待ってよ！」

杏里は止めたが、ノールは異世界空間転移を詠唱し、ただ地平線の向こうまで荒れ地が続く場所に移動していた。

「どう、枯れた木や剥き出しの岩とかが臨場感あるでしょ？ いずれ戦うつもりだったからこの舞台を探しておいたんだよね。凄いで

「しょ？」

「でも、ボクはノールを傷付けるなんて嫌だよ！」

杏里はノールと戦いたくなかったため、必死で抗議する。

「あっそう。じゃ、これを手にしてもそんなこと言える？」

ノールは杏里の足元へ、トンファーが入ったサイドパックを放り投げる。

「ちよつと……ノール、何でこんなことするの？」

「君がトンファーを大事にしていることをボクが知っているからに決まってるじゃん？ ねえ、怒った？ だったら、かかって来なよ」

「嫌だよ、絶対にノールとは戦わない。戦いたくない」

しゃがみ、地面に落ちたサイドパックを大事そうに抱えると杏里は泣きそうな眼でノールを睨む。

「君はどうしようもないバカだね。戦わないんだったら、ボクは君のトンファーを折るよ」

「ダメだよ！」

「だったら、命懸けで守ることだね。ボクは最初から全力で行くから」

次の瞬間、ノールは光体化する。

ノールの背中には八翼が出現し、光体化特有の覇気が発せられた。

「多分ね、ボクはボク自身を抑えられないから、このままじゃ君を一方的に叩きのめすことになる。それでも構わないなら戦わなくていいよ」

ノールは狂気にも似たような笑みを浮かべる。

「行くよ、杏里くん」

直後、ノールは八翼の翼を大きく広げた。

そこまでが人間化したままの杏里が見えた光景だった。

酷い衝撃と共に杏里の目の前は真っ暗になった。

ただ、意識はあった。

気を失った訳ではない。

「杏里くん……生きてる？」

杏里は頭部に何かの感触を感じた。

それに引き寄せられるように身体が持ち上がる。

この時、杏里は初めて自らの身に起きた事実を知った。

ノールが羽ばたいた、あの一瞬。

あの瞬間にノールは自らの背後へ回り込むと、頭部を掴み躊躇いさえせずに地面へと叩き付けたのである。

「わあー、杏里くん、鼻血出てるよ。眼鏡も割れちゃって、それじゃ何も見えないね」

クスクス笑いながら、ノールは杏里の眼鏡を顔から取る。

「ねえ、痛い？」

再び杏里を顔から地面へと叩き付ける。

「ねえ、痛いつて聞いているの。ねえ、聞いている？ ねえ？」

何度も何度も、ノールは杏里を地面へと叩き付ける。

顔を振り上げられるたびに、杏里の血液が周囲に飛び散った。

「凄く、ゾクゾクする。こんなに簡単に君を殺せるなんて……」

再び、ノールは杏里を地面に叩き付けようとする。

その瞬間、杏里は右腕を地面に付き踏み止まった。

「ようやく、その気になったみたいだね。良いよ、少し待ってあげる」

倒れ込んだ状態の杏里から、ノールは距離を取る。

「痛い……痛いよ、ノール。どうして、こんなことしたの？」

何かを囁きながら杏里は立ち上がる。

「エクス」

囁くように杏里は言った。

エクスの効果によって杏里の怪我が全て治癒され、それと略同時に杏里からは何か不思議なオーラが感じられた。

「ボクは覚醒したよ。もうノールがボクに勝てる見込みはない。戦うのは止めようよ？」

「確かに覚醒したみたいだね。瞳が銀色に変わってるし……って、杏里くんはボクが何処にいるか分かるの？」

「分かるよ。覚醒すると視力が良くなるの。でも、視力に関係ない。君の気配が容易に掴めるからね」

「あっそう。どうでもいいよ、そんなこと」

ついさつきと同じように、ノールは杏里の背後へと回り込む。

「位置なんて関係ない。視力じゃなく気配で分かるって、ボクは言っただよね？」

ノールとは逆方向を見つめながら、杏里は語っている。

「ちよっ、杏里くん。位置自体が逆だよ？」

再び、杏里へダメージを与えるために杏里へ接近する。

そして、杏里の頭部を掴み地面へと叩き付けようとした時、ノールの動きが止まった。

「杏里くん……ボクが見えるのかい？」

ノールの首筋を杏里はノールとは逆方向を見ている状態で掴んでいた。

「見える、見えないの次元じゃないよ」

ノールの首筋を掴んだまま、杏里は振り返る。

そのまま、杏里はゆっくりとノールを背後へと倒し始める。

ノールは背後へ徐々に体勢を崩しながら倒されていき、地面に押し付けられた。

「どうして……ボクは光体化してるんだよ？」

「確かに、光体化は天使族の力を急激に増やす変化であることは間違いないよ。でも、答えは簡単。ただの力負けだよ」

押し付けられた状態のノールに杏里は頬笑み掛ける。

「……殴ったりでもすれば？ あれだけ酷いことしたから杏里くん怒っているでしょ？ もうボクは君に勝てないんだって分かったから、別にいいよ」

「もう止めよ、こんなこと?」

「なに?」

「ボクたちが戦うことなんて意味ないよ。ノール、君が好きなんだ。もう君を傷付けたくない」

そついうと、ノールの首筋から手を離す。

杏里の声は震えていた。

例え自らが傷付けられても、愛する人を傷付けることはしたくなかった。

「じゃあ、止める」

「良かった……」

「その代わりに、覚醒の仕方教えて」

「覚醒の?」

「その力があるからボクに勝機が全く無いんでしょう? だったら、覚醒方法を教えてよ」

動きたくないのか地面に横たわったままのノールを見つめながら、杏里は悩み始める。

「覚醒っていうのは、二度死んだ人が行える変化なんだよ。このこ

とはルーシェさんが言っていたんだけどね。でも、ノールはボクの
今までの記憶では、まだルミナスさんに殺されただけだよ」

そう言いながら、杏里はノールへ馬乗りになる形で再びノールの首
筋に両手を掛ける。

「ボクがノールを覚醒させてあげるよ」

まるで普通の会話をしているかのように杏里は語る。

「あの、すみません」

「なあに、ノール？」

「なんで、もうボクが君に殺されること前提になっているの？」

「ボクは復活魔法のリザレクを扱えるし、ノールを倒せるのってス
ロートではボクか綾香姉さんかルインくらいだよ？ 余り苦しませ
ないで覚醒させるならボクが一番かと思っただけだよ……」

「言われてみればそうだけど」

「じゃあ、早速」

ググツと両手に力を入れ、ノールの首を急激に絞め始める。

「……………」

お互いに、無言で見つめあう。

その内にノールは感覚が薄れ始め、眼を閉じる。

痛みも苦しみも感じなかった。

ただ、時が過ぎるのをノールは待った。

「ノール？」

「ん？」

「苦しくないの？」

「苦しいっていうか眠いけど。それがどうしたの？」

「ほ、本当に？」

「もしかして、ただ首を絞めてただけなのかい？ 君はまたボクが水人だと言うことを忘れているだろ？ ボクは水人だから、君のような肺も横隔膜も身体の中にはないよ」

「じゃ、じゃあ、ノールは今までどうやって呼吸をしていたの？
なんか、ノール……怖いよ」

「おい、退けよ眼鏡。またボクを軽蔑するみたいな言い方しやがって！」

杏里がマウントポジションを取っている状態から、ノールは無理矢理立ち上がる。

「ボクは水人だから呼吸なんてしなくても身体の中の純粋な酸素だ

けで生きていけるの！」

「純粋な酸素は猛毒だよ？」

「ボクにとっては君らの空気と同じものなの」

「ということとは、別な方法で試さないといけないんだね？」

「や、やっぱ、ボクは覚醒するの止めるよ」

「そうだったの？ もう、終わっちゃったよ？」

「えっ？」

杏里は花の刺繍がされているハンカチで、右腕を拭いていた。

そして、赤い何かが滴っている。

「痛くなかったでしょう？ あと数秒で意識が無くなると思うから
少し我慢してね。あと、ノールの身体の中を見てみたいんだけど…
…別にいいよね？」

中にいる人

「うわぁ　　！」

ベットからノールは飛び上がるように起き上がった。

ノールは酷く、気分が悪かった。

もし彼女が水人ではなく人間だったのなら、全身に汗をびっしりとかいていたはずである。

「はっ……はぁ……身体は何ともないよね？」

即座にノールは自らの身体を確認する。

「良かった……普段と何も変わらない。でも、ここは………宿舎のボクの部屋か」

「おはよう、ノール」

二段ベットの下方で寝ていたノールのことを杏里は覗き込む。

「うわぁ　　！」

杏里を認識した途端、再びノールは叫び声を上げた。

「わあっ！　ノール、どうしたの？」

「ボ、ボクを殺したでしょ？　近付かないでよ、ケダモノ！」

自らを覗き込んでいる杏里をノールは全力で蹴り飛ばした。

「うわっ、危ないなあ……」

何の造作もなく、軽く杏里はノールの蹴りを受け止めた。

「早く覚醒してみなよ？ 変化する時は鏡を見た方が良いよ。眼の色が銀色に変化するから」

「き、きみには罪の意識って奴がないのかい！ 謝ってよ、凄く怖かったんだからね！」

「生き返らせるって約束したから別に良いじゃない。ノール、君はメンタルが弱いんじゃないの？」

「ええっ……」

素っ気無く酷いことを言われ、ノールは落ち込んだ反応を見せる。

「なんだか……昔と杏里くん変わったね？」

「そうかな？ あっ、ノール！ 君に知らせたいことがあったの！」

「なに？」

「本当にノールの中には肺と横隔膜が無かったよ！ どれがどれだか分かりづらかったけど絶対にそうだよ！」

「……………」

興奮しながら話す杏里を見て、ノールは言葉も無かった。

杏里の語っている内容を考えると吐き気がした。

「もうヤダ……こんな会話……」

ベットから立ち上がると気分が悪そうに口を押さえながら、ノールは洗面所へと向かう。

「ノール、大丈夫？」

そのノールを気遣うように杏里も付いてくる。

「来ないでよ！ 元々はボクが悪いからはつきりと言えないけど、今の君と居たくないの！」

「そう？ それは良いとして覚醒しないの？」

「覚醒って……」

簡単に話を流されて、ノールは傷付いていた。

もつとつしたら良いのか分からなくなっていた。

「そこまで調べていた時に、ノールが立ち上がったの。ボクはびっくりしたよ」

「それ……どつとどつと？」

「私はクアールというR一族です”って言ってたよ。これ以上、ノールを壊さないでほしいってことをボクに伝えたかったみたい」

「クアールって誰だよ！ そんなことボクは言っていない！ 第一、ボクは死んでたじゃんか！」

「多分、ノールに“声を聞かせた人”だと思うよ。祖先の人の声を、ノールも聞いたことがあるでしょう？」

「あの声の人が……？」

「ボクはノールを力で制圧した時、酷い勘違いをしていたみたい。強ければ、ノールを支配出来るんだって。そのせいでボクは、ノールを殺していいだと言って首を絞めたり、身体の中をいじくったりした。でも、そんなことしちやいけなかったんだ。クアールさんがボクを叱ってくれたお陰で気付けたよ」

「普通に最初から分かれよ、それくらい。こっちは身体をいじくられて良い気分じゃないよ。次、またやったらこっちが殺すからね」

「ノール、やっぱり君は精神力が強いかも。ボクが自分自身の身体をいじくられたって聞かされたら、気分が悪くなって戻しちゃうかもしれないもん……」

「ああ、それならついさっきまでボクもそうだったよ。すぐに気分が悪くなったから洗面所に行こうとしてたし……でもまた、ボクは変わった。光体化した時には無かった気分だよ」

「あっ、ノール。眼が銀色……」

ノールの眼は徐々に銀色へと変化し始める。

水人であるため青色をした瞳の色が変化していく間、ノールはある実感をしていた。

この変化に光体化の殺意や憎悪などという悍しい感覚が一切しない。自らを抑圧、抑制していた何かからの完全な解放をされたような、とても清々しい晴れやかな気分だった。

「凄いね、この感覚。ついさっきの戦いで光体化していたボクは負けて当然だよ。こんなにも身体や自分自身のオーラを軽く出来るんだから」

両手を上げて背伸びをすると、ノールは杏里を見つめる。

「どうしたの？」

「いや、ちよつとね」

ノールは返答したその瞬間に、杏里の頬に平手打ちをした。

威力が強かったせいか杏里は態勢を崩し、杏里の眼鏡も顔から床に落ちる。

「いやっ、いきなりなにをするの…」

女性のような悲鳴を上げた後、ゆっくりと杏里は眼鏡を拾う。

「何するって、仕返しに決まってるじゃん？」

「ノール、怒ってる……かい？」

「怒ってるよ。そりゃあ、君のことを地面に何度も叩き付けたのは悪いと思ってるよ。でもその後で、ボクを殺して解体するのが許せないの」

「もう過ぎたことだし、お互い忘れよう……」

「えいつ」

ノールは杏里の顔にストレートを加える。

「止めてよ、ノール！」

泣きそうな顔で杏里はノールを止めるため、抱き付こうとする。

そこへ透かさずノールは身体を回転させ、足を鞭のように振り上げると抱き付こうとする杏里の首筋に強烈な上段背面回し蹴りを加える。

グラツと大きく態勢を崩し、膝から続けて頭部と打ち付けるようにして杏里は床に倒れ込む。

今の一撃で杏里は失神していた。

「フツツ……倒れたね。早速ボクも……」

無表情のまま、ノールは頬笑むと両手に水竜刀を作り出した。

「……………」

じいーっと、杏里を見つめているとノールはあることに気付く。

「ボクは人を解体するようなグロいことをしたいなんて思ってない。触発される場所だったよ」

めんどくさそうに杏里を二段ベッドの普段自らが寝ている下の方まで運ぶと、そこに杏里を寝かせる。

「これで良しと……さっさとアクローマに聞きに行かないとね」

アクローマのいる謁見の間へとノールは向かっていた。

元々は時間軸が以前と異なっている理由を知るためにアクローマへ会いに来ていたので、ノールはさっさと話しておこうと考えていた。

数分後、謁見の間へノールは着く。

さっさと玉座に座っているアクローマに近付くと声を掛ける。

「アクローマ、ちょっと聞きたいことがあるの」

「やっと来たのね、ノールちゃん。待ちくたびれちゃいそうだったわ。それよりも貴方は眼鏡くんに勝てたの？」

「ああ、さっきのケンカのことね。首を絞められた後、一撃で殺されて身体をグチャグチャに解体されたらしいよ」

「……………」

アクローマは言葉を失う。

「やっぱ、ショッキングな内容だよな。自分でもそうされたなんて認めたくないもん。でも、ボクは今回死んだお陰で覚醒出来るようになったよ」

「本当なの？ ノールちゃん、貴方はクアールって人を知ってる？」

とても関心のある様子でノールに問い掛ける。

「知ってる。解体にされたボクの代わりに杏里くんを止めてくれた人。ボクに……いるんじゃないかなって思えるんだよね」

「ついにそこまで貴方は成長したのね。もうすぐよ、貴方は後少しで完全な姿になるわ」

「まだボクは強くなれるの？」

「まあ、そんなところね」

微妙な返答をアクローマはする。

「何か隠してるでしょう？」

「ええ、勿論。でも、貴方は知らなくても良いことよ。だって貴方が理由を知ってもプラスになることは一つもないわ」

「クアールって人が関係してるでしょ？ アクローマ、クアールって名前を出した時、凄く反応したし」

「……………」

「ボクはクアールに身体を盗られる気がするんだけど。何か間違ってるかい？」

「少し……………違うわ」

「例えば何が？」

「貴方はクアール“様”にとても似ているの。私は貴方と初めて会った時、クアール様と再びお会いできたのかと思う程だったわ」

「そういえば、ボクと初めて会った時に何か言い掛けたよね。てつきりボクはR一族と判断されたから言葉に詰まったんだと思ってたけど」

「最初は半信半疑、R一族らしい名前を聞いて確信といった辺りね」

「ボクはどうなるの？ 以前言ってたけど、成長段階を知っているんでしょ？」

「貴方の身体はクアール様の物になる。貴方の意識、記憶は微塵も残らないと思うわ……………」

「そんなことだろうと思ったよ。甘いんだよ、そんな考え！ やるわきゃねえだろ、ボクの存在を！」

とても受け入れ難い内容。

その事実にもールはアクローマを怒鳴り付けるように大声を出していた。

「ノールちゃん、貴方は“権利”って能力を知ってるわね？」

「何だよ、それ！ ボクがクァールになることと関係してるのか！」

「落ち着きなさい、ノールちゃん。私の話を聞いて！」

玉座から立ち上がり、一種の錯乱状態に陥っているノールを抱き締める。

「……………落ち着いてるよ。話を聞くよ」

「そつ……………？」

アクローマはノールを落ち着かせるため、抱き締めたまま会話を続ける。

「貴方は自らがここまで早く強くなれたこと、何故だか分かる？」

「……………」

ノールは無言でアクローマの話を聞く。

「貴方の中に宿っているクアール様のためなの。クアール様の力が貴方を驚異的な早さで強くしている。それは貴方がクアール様へと変化し始めていることなの」

「……………」

「本来貴方は何もしなくても良かった。貴方はクアール様の受け皿だったのだから。それは既にグラール帝国で貴方が産まれた時から決まっていたの」

「……………」

「もし貴方と今のようない方をしなかったら、私と貴方は貴方がクアール様へと変化するまで会うこともなかったでしょう。でも、グラール帝国の平穩は続かなかった」

「……………グラールって？」

「テイストという世界にある、現在ではラミング帝国となっている国家よ。十数年前、グラール帝国でクーデターが起きたの。その時グラール帝の三人の子供が生き延びたって聞いたわ。貴方は、その生き残りなのよ」

「グラールって人がボクの親なの？ 誰がグラールを殺したの？」

「そう、グラール帝が貴方の父親よ。でも、グラール帝を殺した人物は分からない。以前から私が魔界の魔神ルーク、ドレアムに捜索を頼んでいたけど結局見つからなかったしね。となると、ラミング帝国にはいない。そしてグラール帝を殺せる程の人物といったら……貴方にも分かるわね」

「ジェノサイドの連中が殺ったって言いたいんでしょう。なら、殺つてやるよ。ボクがグラールの仇を討つよ」

抱き締められていたノールはアクローマから離れる。

「ボクは何時までボクとして存在しているの？」

「分からない。でも貴方が次に覚醒した時、クアール様へと完全な変化をするでしょう。貴方が変化をするたびにクアール様を強く感じられるようになるのだから」

「てことはもうすぐか、ボクがクアールになるのは。だったら、今のうちにすることやっとかないとね」

「クアール様になることを受け入れたの？」

「バツカじゃないの。受け入れる訳ない！ 身体から打ち消してやる！」

「でも、クアール様は……」

「ボクのことには口を出すな！」

「分かったわ……私はクアール様の復活を望んでいるし、貴方にも存在してほしい。だから、私は結果だけに全てを委ねることにするわ」

落ち込んだ様子でアクローマが答える。

「ごめん、アクローマ。怒鳴るつもりなんてなかったの…」

その様子を見て、少し冷静さを取り戻したノールは謝る。

「ところでさ、時間軸にズレが生じてるんだけど何か起きたのかい？」

「ええ、起きてるわ。クアール様の復活を予兆しているの。貴方がクアール様に入れ代わるまで時間軸はズレたままね」

「何でそんなことが分かるの？」

「私は貴方にもっとも近いR派の人物よ。私だけが、R一族である貴方の未来をクアール様の力で見る事が出来るの。貴方を導くためにね」

「他人の未来をシナリオで見たなら、他人にその内容を教えようとするを見た内容自体忘れるはずじゃないの？ ボクのシスイ君だって…そのためにボクに殺されたんだよ」

「それなら問題ないわ。私はクアール様の“権利”でR一族の貴方にもシナリオを扱える。貴方に限ってだけ、伝えたい内容を忘れなようにさせてもらっているの」

「“権利”って何なの」

「世界を統べるべき神の能力。私たち天使が信仰するのは“権利”を扱える者だけ。他の連中が熱狂的に狂信する空想、妄想、幻想程度の贗物などとは違う。実際に存在する現人神あいらひとがみのみよ」

「神の力ね……」

静かにノールは囁く。

「アクローマ、R一族のボクにもその能力を扱えるんだよね？」

「そうであるはずよ。でも、殆どのR一族はその能力を扱えないの。貴方もまだ扱えないのでしょうか？ 権利を扱えるのだったら、あの眼鏡くんなんかに後れを取るはずが無い」

「ってことは権利を扱えるようになれば、ボク存在をクアールなんかに渡さなくていいってことか」

「恐らくそういうことでしょうね」

「アクローマってさ、ボクがクアールになってほしいの？ それともボクのままでもいいほしいの？」

「さっき言ったでしょう……私は結果だけを知ってる」

言い辛いのかアクローマはノールから目を逸らし、小さく言葉を発する。

「アクローマにとってはとても重要なことみたいに言ってたけど、結局は関与しないってことね。あーあとさ、伝えたいことがあるんだけど」

「どうしたの？」

「ボクたちは天使界の宿舎を出ていくよ。これからはスロートで生

活していくから」

「分かったわ。そういえば、ルミナスちゃんに私の方から二億を払っておいた方が良いかしら？」

「あれ、何でそんなこと知ってるの？」

「ルミナスちゃんはね、今では魔界の邪神だけど天使界の熾天使でもあるのよ。貴方の脅しに屈して、私に泣き付いてきたからルミナスちゃんの事情なら分かるわ」

「ボクが脅した？ 魔界の邪神を？ まさか、何言ってるの？」

「貴方つて、たまに優しさを微塵も感じないことをするわよね。初めて会った時と性格が変わってきたわ」

「うーん、まあね。戦うようになってから、昔のような優しさが無くなり始めたつてのはボクにも分かる……って言うか、杏里くんに言ったことと同じことを言われてしまったよ」

「そうなの？ 眼鏡くんも性格が変わってきたのね。やっぱり覚醒化出来るようになると、人も変わっちゃうのね」

「まっ、いいや。ボクは皆と一緒にスロートへ帰るから」

「ええ、分かったわ。あと、ノールちゃん。最後に貴方へ伝えたいことがあるの」

「なんだい？」

「貴方は天使界へ私が呼んだ時以外もう来てはならないわ。貴方は以前よりジェノサイドからマークされているのだから」

「そうかい。てことはボクがここに来たことくらいなら向こうも知ってるだろうね。だったら、アクローマの方からジェノサイドによるしく言っというて」

「ふふっ、貴方の冗談は全く笑えないわ」

露骨な対応

「ノール、何か用があるのかい？　メンバー全員を集めたみたいだけど」

宿舎のロビーへ集められたメンバーの一人、有紗が疑問に思ったことを問う。

他のメンバーも呼ばれたから何となく集まったので、理由を聞いた。

「皆に伝えたいことがあるの。実は新しい住居を手に入れたから、そこに引っ越そうと思うの」

ノールはロビーに集まっているメンバーへ語る。

「そうなの？　でも天使界にいれば他の世界では日数が経過しないし、天使界にいた方が良いんじゃないかな？」

「そうも言ってもらえないの。何だかね、天使界にいても日数は経過するようになったみたいなんだよ」

「ああ、そうなの。それじゃ、ここにいる必要はもうないね。ノールの言う通り、スロートへ行こうか」

「あんまり驚かないんだね。時間軸のことなのに」

「予兆のことだろう？　強くなったからね、ノールは」

「予兆って？」

「君自身が既に知っているだろう？ もうすぐ…」

「知ってるならそれ以上言うな」

有紗に対して脅すような口調で言い、有紗へ殺気を放つ。

「気を悪くしたなら済まなかった」

謝っている割に有紗は頬笑みを表情に浮かべている。

「話が逸れちゃったけど新しい住居に移動するから、さっさと支度してきて」

機嫌を損ねたのか、それだけ言うとノールは自室へ向かう。

それを見て、メンバーたちは各々の自室へ引越しの準備をしに行った。

「ねえ、綾香。さっきどうして有紗にR・ノールが殺気を放ったか貴方は分かる？」

部屋に戻る途中、ルインは綾香に訊ねる。

「さあ、何故かしら？ 有紗さん、特に怒らせちゃうようなことは言っていないと思うのだけど…」

「言ったじゃないの、本人の前で堂々と。有紗はどう考えてもケンを売っているわ。どうしてお互いの一族を許し合うようにしてい

る時にそんなことするのかしらってことよ」

「どうゆうことなの？」

「私たち桜沢派とR派には色々と問題があるの。この前、適当な仲直りみたいなことをしていたけれども、私もエージもそれに対してかなり不満があるのよ。元々殺すためのだけしか見れなかった対象の見方を友好的な仲間だっという風にするのが無理あるって思ってたのよ」

「それって何が言いたいの？」

「私たちはそもそもR派となんて一緒にいるべきじゃない。有紗だって分かっているからR・ノールの前で堂々と言おうとしたのよ」

「だから、何が言いたいのよって聞いているじゃない。第一、有紗さんがノールちゃんに何を言ったのよ？ 私には何を言ってるのか分からなかったわ」

「綾香って本当に何も知らないのね。教えてあげるから覚えてちょうだい。R・ノールは桜沢派とR派が戦った際にいたR・クアールにそっくりなのよ。R・クアールの情報は未だに覚えているわ、何せ敵の総大将だったのだから」

「それと何か関係するの？」

「ええ、R・クアールは忌まわしい能力である“権利”を扱う。両一族の戦争中にその時代の聖帝と一緒に同士討ちしちゃったけど、彼女は権利を扱って転生の準備をしていたみたいなの。しかも厄介だったのがその条件。自らよりも強い、一族の者に転生するって言

うのよ。だとすれば、見た目も似ていて結構強いノールで間違いないだろうってことなの」

「それじゃ、ノールちゃんはどうなるのよ？」

「そんなの決まっているじゃない。肉体に転生されたらR・ノールがR・クアールに変わってしまう」

「本当なの、それって？ だったら私たちでノールちゃんをクアールって人に転生させないようにしましょう」

「ばっ……馬鹿言わないですよ？ R・ノールとR・クアールを一緒に倒せば全てが終わるのよ。R・クアールさえ倒せば、クロノスのタルワールにだって勝てるのだからね」

「そうだよ。さすが長生きしているだけあって色々知ってるね、ルイン」

いつの間にかいた有紗が彼女たちの背後から答える。

「でも、ノールには生きていてもらわないと困るな。クアールに変わってしまったら、クアールを消して元のノールに戻すよ」

「何故？」

即座に振り返ったルインは問い掛ける。

「何故って、そりゃあ杏里が哀しまないようにするためだよ」

「ああ……あの子ね。どうしてもあの子はR一族なんてのを愛してし

まったのかしら？ 私たちがお互いを愛しているように愛の力は強く不思議な物なのかしらね、綾香」

「はあ？ ルインが？」

少し引いた表情で有紗は聞く。

「そういえばそうね。ルインの愛している人って誰なの？」

「そ、そんな！ 酷いわ！ 綾香がそんなこと言うなんてえ！」

半泣きの状態でルインは綾香に抱き付く。

「ちよつと……離れなさいよ。貴方は私に恋愛感情を抱いているみたいだけど、私たちは女性で同性なのよ？ 少し考えれば間違っていると感じるでしょう？」

「そんなこととつくに気付いてるわ！ 綾香が女性だから気付いていても必死で受け入れようとしているんじゃないの！」

「私はそれが嫌なのよ」

自らに抱き付いているルインを綾香は引き離す。

「こんな話は置いといて、とにかく私はノールちゃんをクアールつて人に転生させないようにするわ。ノールちゃんを傷付けるようなことなんてしたくないもの」

「でも綾香、それはどうやって……」

「綾香、そんな話ってどういうことよ！ 私たちの将来についての大事な話じゃない！」

再びルインは綾香に抱き付く。

「全く……バカに付ける薬はないみたいだね」

話を邪魔された有紗は引越すのため、一旦自らの屋敷の方へと向かった。

支度を終えたノールたちはスロートの黒塗りの屋敷前へ空間転移によって現われた。

勿論、黒塗りの屋敷前に現われた時、ノール、杏里以外のメンバー全員が驚いた。

まさか、このような豪華な建物が引越す先だとは思いつかびさえしなかったからだ。

それは、マンハントやその他の依頼を幾度もこなしていたとはいえ、そこまでの資金を稼いでいないのは明らかだったため。

「ノール……これどうしたんだ？」

黒塗りの屋敷の門前でテリーはノールに問い掛ける。

「買ってきた」

「幾らで？」

「二億だよ」

「はあ……？ そんなに安くこんなを買えないだろ。てか、ここに住んでも本当に良いんだよな？」

「そりゃそうだよ、ボクの家だもん」

すたすたと歩いて、ノールは屋敷の門を開く。

「突っ立ってんのもあれだからさっさと入ろうよ。あと、部屋数は沢山あるから何処使っても良いよ」

その後、メンバーたちは屋敷の豪華絢爛な造り、室内の家具家財の質の良さに再び驚いた。

値段を費やし過ぎているとさえ思わせる屋敷内にメンバーの誰もがノールはこの屋敷を誰かから強奪してきたのだと悟る。

だが、そのことに関しては誰もノールに言わなかった。

自分たちは悠々とこの優良な屋敷に住める、だとするならその過程などどうでも良いじゃないかという考えを各々少なからず持っていたからである。

「それじゃあ、屋敷内を案内してあげるね。あと案内が終わったら、またこの今いるロビーに一旦集まってね。お金あげるから、一億」

この日はメンバーたちにとって驚かされることばかりの一日となった。

ノールたちが黒塗りの屋敷に引越してから数日後、ノールは再びメンバーたちを屋敷のロビーに集めた。

「皆さんに集まってもらったのは今回の仕事が決まったからです」

「仕事内容って何？」

興味ありげな感じでルインは語る。

「今回の仕事はかなり大きな仕事です。クロノス、ジェノサイドへケンカを売ることになります。内容はヴィオラートの法王を亡き者にすることです」

「はっ？ 法王を？ 第一、クロノスって……」

「言いたいことは分かっています。ですが、前金を受け取っています。ついでにこの前皆さんに配った一億が依頼金になります」

「貴方は分かっていないでしょう？ 私が言いたいのは……」

「ルイン」

静かに有紗がルインの肩を叩く。

「いらぬことをリークしなくても良いんだよ。ねっ?」

「まあ、どうせ法王は殺すつもりだったからどうでも良いけど、こ
ういうのって私の性に合わない」

「ルイン、分かってほしいな…」

「分かっているわよ」

「えっと、話を進めていいかい?」

微妙に待っていたノールはルインに声を掛ける。

「構わないわ。ちょっとしたことだったから」

「話を進めるね。敵の主力は法王、流体兵器という兵器になります。
法王のレベル、能力ともに不明。流体兵器は相手の能力を自らの基
準とする能力を備えているようです。流体兵器に関しては自分と似
た相手と戦うって感じで思っていればOKです」

言い終わると、ノールは腕から何かが入ったビンを取り出す。

まるで水の張ったシンクからビンを取り出したのと変わらない動作
だった。

「うわっ、おまつ、どっからビンを取り出してんだよ?」

手品のような有り得ない光景を目にし、テリーは驚いた。

「何処って、腕からだけど?」

いつものことなのか平然とノールは語る。

「種族つてものを考えな。ノールは水人だから身体の中に肉体じゃない水のみで出来た空間を作り出せるだろうけど、水人ではないオレたちはそんな人知を超えたような荒技は出来ないんだ。今度からは普通にしてくれ」

「ボクにとっては普通のことを普通にしているだけだよ。今まで通り、ボクは普通にしているよ」

そう言いながら、ビンの栓をしているコルクを抜く。

「この中にはメンバー人数分のクジが入っています」

スツと、ビンの中からクジをノールは一つ引き抜き、全員に引き抜いたクジを見せる。

「皆さん、クジを見てください。ほら、クジの先に赤色が付いているでしょう？ この色が引いたクジに付いたら、今回のミッシェンに参加出来ます。ついでにボクは赤色を引いたので、ミッシェンに参加出来るようです」

「他の連中は？」

「自宅警備」

「てかさ、前々から思ってたんだけど、ノールってオレたちにミッシェンのことを話すとき何で敬語口調になるんだ？」

「テリーはボクが命令口調だったら良いの？」

「仲間なんだから普段の感じで良いんだよ」

「仲間であつても礼儀は尽くしたいよ。この組織が危険な仕事をする組織であり、皆が危険な仕事をするのが当然だと百も承知であつても、ボクが皆にその危険な仕事を押し付けている間は敬語を使うよ。ボクからの感謝を込めさせて貰つてね」

「へえー、R一族にしてはまともな発想をしているのね」

思つてもみないことを言われたからか、ルインは感心している。

「でも、アンタが一々そんなこと考えなくてもいいのよ。寢床、食料、賃金を提供して馬鹿みたいに喚いてさえいなければ雇い主としては優秀よ。結果的に言えば、アンタは優秀な雇い主だから雇われている私らは敬語を使われなくても満足しているのよ」

「まっ、そういつこと」

続けて、テリーも一言だけ言う。

「それはいいけど、早くビンからクジを引いてよ」

メンバーたちにビンをノールは差し出す。

ビンからクジをメンバーたちが引いていった結果、ヴィオラートへ向かうメンバーはノール、杏里、綾香、ルイン、エージとなった。

「で、オレが自宅警備かよ……久しぶりのデカイ仕事なのによ……」

クジ運が悪く、当たりを引けなかったテリーはかなり落胆した。

「じゃあ、テリー、リュウ、有紗。自宅警備をよろしくね」

さらっとノールは言う。

「はいよ、頑張っといで。こっちも仕事の余裕が出来るよ」

有紗は満面の笑みで答える。

「あー、確かに。それはかなり言ってる」

リュウも似た感じのことを答える。

「なら良かったよ。自宅警備なんてイヤだって言われるかとボクは思ったよ」

「全力でイヤだよ、オレは……」

「気にしないの。ボクの後任が頑張っつて次の仕事を探してくれるから」

「オレは今回の……後任つて？」

「紙にでも書いとく」

「縁起でもねえ」と言っつなよ

「相手を弱いとは思ってない。殺されると思ってないとやってけな

いよ」

「でも、戦うことに対して弱気になってないってところが自信の表れ
って奴だな」

「分かってんじゃん。死ぬつもりなんて全くないよ、ボクは」

「頑張つて来いよ、ははっ。じゃ、次の仕事までオレは充電してお
くわ」

屋敷のロビーから、テリー、リュウ、有紗は離れる。

「仕事内容だけど、班を二つに分けます……分けるね。一つはデコ
イ、つまり罔が三人。もう一つは法王を殺す役で二人ね。でさ、今
回のミッションではボクが法王を殺したいんだけど」

「どうしてよ、嫌よそんなの！ 折角、この私がロイヤ……強い敵
を倒せるかもしれないってのに戦えないだなんて！」

「ゴメンね、ルイン。どうしてもボクが倒したいの」

「えー……」

確認を取るようにルインは綾香の方を見る。

綾香はエージと一緒にさつきからミッションとは関係のない何かを
話していたがルインに気付く。

「どうしたの、ルイン？ お仕事のこととはノールちゃんに任せてお
けば大丈夫よ」

「綾香がそういうなら…」

諦めが付いたのか、ルインはノールに視線を送る。

「これで配役が決まったね。デコイはルイン、綾香さん、エージ君。倒す役はボクと杏里くんね」

「な、なあ、R・ノール」

「なあに、エージ君？」

「出来ればさ、オレのことをエージさんって呼んでほしいんだ」

ノールに擦り寄るとノールの右手を自らの両手で優しく握り、ノールを見上げながら甘い声で囁く。

「犯されたいの、エージ君。そんなに可愛いこと言ってるとお姉さんがお部屋へ優しく連れ込んだじゃうよ？」

「ノール、そんなことしちゃダメ　！」

ノールの傍で黙って話を聞いていた杏里が叫ぶ。

「じよ、冗談だよ。なんだか身体がざわざわっとして変なこと言っただけだから。あー、エージ君。今度からはエージさんって、お姉さんが呼んであげるね」

「ノール、間違っているわ」

今のやり取りをしらけた目で見ていたルインが言う。

「この惨めなシヨタイ又人の歳はアンタよりも数倍高いわ。大体、私と同じくらいの年令よ」

「イ又人は寿命が長いね。こんなに可愛くて抱き締めたいのにボクよりずっと年上なんて……」

「あれ？ それじゃあ、私が以前聞いた時と年令が違っじゃないの？ 疑問に思ったことを綾香が言う。

「確か、初めて会った時は三、四十代って言っていた気がするんだけど……エージくん。どういふことか説明しなさい」

「……何か言ったの？ オレ、聞こえなかったよ」

「ルーメイアの頃からはぐらかし方が変わらないのね。だったら気が向いた時に教えて頂戴ね」

「それは良いとして、ミッションは明日だから今日は部屋でゆっくり休んでいて。それじゃ、杏里くん。君にはボクとしてほしいことがあるから、さっさと部屋に戻るっ」

一応、ノールはメンバーに伝えた後、杏里の腕を引っ張りながら部屋に戻った。

「あの……杏里くん。突然だけどさ、ボクの話聞いてくれない？」

杏里を急かして部屋に戻ってきたノールは杏里へ声を掛ける。

「話を聞いてほしくて部屋に戻ってきたの？　ボクはてつきり他のことかと思ってたよ……」

冗談めいたことを言っていると、杏里はノールが深刻な顔付きをしていると悟る。

「ノール？」

「気付いてほしかったのに、ボクが本当に悩んでいるのに……どうして君は分かってくれないの！」

自身の思いを分かってくれないもどかしさに、ノールは怒鳴った。

ノールはハツとした表情をし、杏里から視線を逸らす。

「ゴメンね、怒鳴るつもりは無かったのに怒鳴っちゃって。でも、ボクにとって凄く重要だったから君には聞いてほしかったの。もうすぐ、ボクはボクじゃなくなっちゃうんだ。いつまで、この姿でいられるか分からない。後悔も未練もボクは残したくないんだ」

声を詰まらせながら、ノールは話していた。

「ボクがクアールになっても杏里くんは愛してくれる？　ボクが愛する人はきつとクアールも愛するはずだから……だから……」

泣くことを我慢していたが耐え切れなくなったのか、ノールの頬を

涙が伝う。

それでも心配かけなくなかったノールは微笑を浮かべた。

こんな風に悲しい笑みをノールが浮かべるのを見たのは、杏里は初めてだった。

「ノール、今の……どうということなの？」

「ボクはクアールって人になっちゃうの。転生だから外見だけはボクのままでけどね」

「ダメだよ、そんなこと絶対にさせない。ノールのままじゃなきや嫌だ」

「ボクだってそうだよ、絶対にクアールなんかになりたくない。でも、ボクにはどうすることも出来ないの……」

「ボクがなんとかするよ！」

「ホントに？」

ただ、泣くしか出来なかったノールだが杏里を見つめる。

「継るよ、その言葉。ボクにはもうそれしか出来ないんだから」

ゆっくりとノールは涙を拭う。

「ノール、でもいつ頃からクアールさんに変わるの？ まさか……明日とか？」

「……さあ？ ボクには分からない。明日か、一週間後なのか、それとも数年後とかの間隔があるのか結局のところ分からないね」

「だったら諦めないで皆と一緒に打開策を見つけようよ。それにボクは君以外を愛せない、さっきの話は忘れるからね」

対流体兵器

「お早よう、みんな。調子はどうだい？」

「言うまでもなく悪いわ、R・ノール。今が一体何時なのかアンタ分かる？」

屋敷のエントランスに集められたメンバーの一人のルインは眠そうに語る。

しかし、ルインが眠そうに語るのは無理もない。

現在、時刻は朝の三時頃である。

「三時でしょう、夜襲を仕掛けるなら普通だよ。あとさ、法王はヴィオラートの聖堂にいるんだよ。聖堂なら修道院もあるはず。修道院の朝は早いんだよ」

「親愛なる神さん、わたくしたちを具体的に金でお救いくださいませとか頭の沸いたようなことをベラベラと宣っているクソゴミに見つかるくらいどうだって良いでしょ？ だったら逆に昼間に乗り込んだ方がマシよ、あの間抜け面どもにアンタらの神さんが死ねと吐き捨てたのが理解出来るはずよ」

「最低な考えだね。人を殺すなって前々から言ってるでしょ？ 第一、何の理由があつて人を殺すんだよ」

「アンタ今更何言ってるの？ 人を殺すのに理由なんてないに決まっているでしょ……あーいや、冗談。私の目の前にバカ面下げて現

われたからね」

「その考えを変える気はないの？」

「変えるべきはアンタの方でしょう？　ここにいる連中はアンタを含めて簡単に人を殺せるの。無駄に力を持って余せて何になるの？　アンタの勝手な発想を詰まらない理由で押し付けないでくれないかしら？」

「殺すな、法王以外は関係ないんだ！」

「あらあら、R・ノールは思い上がりの激しい偽善者なんですね。Rの血が泣くわよ」

その時、ルインの肩を綾香がポンポンと二度叩く。

それに反応したルインは何があったのか、耳や尻尾をへなへなと垂らせた。

「ごめんなさい、R・ノール。今のは全部冗談なの……」

微妙に震えながら、ルインは語る。

「……分かってくれたのなら、それで良いよ。じゃあ、みんな。今からヴィオラートへ行くよ」

「さあーと、どうやって私たちの存在を分かりやすく知らせる？」

標的となっている法王がいる世界、ヴィオラートへ着いたルイン、綾香、エージの三人は周囲を森で覆われた聖堂の門前にいる。

ルインたちの役割は前以て決まった通り、囿である。

別行動のノール、杏里たちに注意が向かないよう目立つ行動を行なう手筈だが、ルインたちには囿となって特にどうするかというプランが無かった。

「ここは貴方たちのような方が来ても良い場所ではありません。お帰りください」

聖堂の門前には番兵がいた。

彼らの背後に見える聖堂は通常の教会と一線を画する荘厳華麗な造りである。

「うざい、私に話し掛けんな。ところで綾香、私は一気にぶっ潰す方が良いと思うのだけど？ R・ノールには悪いけど、デコイが破壊や殺戮を行わずにどう目立ってっていうのよ。私には分からないわ」

「確かにそうね。ノールちゃんには悪いけど、ここは私たちなりにやらせてもらいましょう」

「さっきから何を言っている。さあ、早く帰りなさい！」

再び番兵はルインたちに声を掛ける。

「……綾香、私は今イラツとしたわ。何故私は話し掛けんなと言っ

た相手からまた話し掛けられたのかしら？」

「私たちが聖職者で無いこと。法王などに会うためのアポイントを取り付けていないこと。こんな真夜中に聖堂の前に来るのが不審者っぽいと思われたからよ」

「まっ、妥当なことをしているって訳ね。二人とも、今すぐに魔法障壁を張りなさい。急がないとぶっ殺しちゃうぞ」

可愛らしくルインは頬笑む。

ルインが行なったのはたったそれだけだった。

たったそれだけで魔法の詠唱を行わずに魔法を発動させた。

ルインの魔法によって大規模な爆発とともに聖堂は木っ端微塵に弾け飛び、完全に瓦解してしまった。

「今の魔法は神聖魔法グランドクロスよ。天使が扱う魔法で崩壊したのだからこの聖堂も本望でしょう」

言い終えた後、ルインは含み笑いを表情に浮かべる。

無論それは聖堂を瓦解させたからという訳ではなく、聖堂内にいた者たちを纏めて虐殺することが出来たため。

自由な人殺しは快樂殺人鬼であるルインにとって最も適したストレス解放法であり、簡単に味わえる歓喜であった。

それが、つい表情に現われてしまった。

「ルイン、やり過ぎよ……」

綾香は目の前の光景に一言だけ囁く。

「やり過ぎ？ まさか？ 私はちゃんど半分残しておいたわよ。優しいのでね」

轟々と沸き立っていた砂煙が落ち着き始めると、綾香は気付いた。

完全に瓦解してしまった聖堂の敷地の奥に通路のようなものがあり、その通路の先にはもう一つ別の聖堂があることに。

「この聖堂に来たことは初めてだから二つもあると私も気付けなかったけど、向こう側から強力な気配がしたのよ。だったら、こっちはいらないでしょ？」

ルインは再び含み笑いを浮かべると、瓦解した聖堂を呆然と眺める以外出来ないでいる番兵二人を無視し、向こう側の聖堂に行くため瓦礫の中を進む。

綾香も番兵と同じように呆然としていたが、何故かルインのように頬笑みを浮かべているエージに手を引かれ瓦礫の中を進む。

「ふふつ、綾香見たかい？ ルインのバカみたいな顔。最高に面白いことがあるそうだよ」

「え、えっ？ ダメよ、エージ君。そんなこと言っちゃ」

「良いの、オレと綾香だけは。バカみたいな顔したあのネコ人が認

めてるんだから」

「……とは言ったものの、私らがデコイじゃあね」

二つ目の聖堂へ向かう長い回廊を歩きながら、ルインは呟く。

「私が法王を殺したかったのに……久しぶりにまともに戦えるような相手のはずよ、法王は」

「そう言っても仕方ないでしょう？ ノールちゃんが戦いたいって言っているのだから。あの子は人を殺すのが嫌なはずなのに……何か彼女なりの考えがあるのでしょうか」

「まあね、でもR一族なのに偽善者だわ。誰も殺さなかったら平和な世界になるとでも思っているのかしら？ 全く、クソみたいな思想だわ」

「ルイン、そういう括りをするのはダメよ。ノールちゃんは確かに強いし、R一族だけど人を殺すとかしない子なの。こういう職業を生業としているのにな」

「今時珍しいわ。でも確かにそうね、あの女からは血の匂いが余りしない。はぁーあ、だったらたまには血飛沫くらい一人でゆったりと味わいたいって思う……」

そこまでルインが話した時、突然巨大な何かが酷い粉塵を巻き上げ

ながらルインを押し潰した。

それは巨大な杭のように回廊のワンブロックを貫いていた。

奇跡的にも綾香、エージは難を逃れたが…

「ルイン……？」

目の前のワンブロックを押し潰した壁のような物を綾香は呆然と見つめる。

「そんな……ルイン……」

へなへなと力が抜けたのか綾香は床に座り込む。

「安心して、綾香」

一瞬の出来事に自体が把握出来ず混乱している綾香にエージは語る。

「あの程度でルインは死ねない。気にしなくて良いんだよ」

「エージ君……でも、ルインが……」

再び粉塵を巻き上げながら巨大な杭のような何かが空中へ持ち上がり始めた。

綾香、エージはそれを目で追っていたが突然その杭のような何かが消える。

何故、今のように消えたのか二人には分からなかった。

「何だろう、今の？ 法王の能力かな？ だとしたら面倒な能力だね、頭から押し潰されるなんて」

特に問題なさげにエージは語る。

「そつだ……ルイン！」

綾香はルインが押し潰された瓦礫の山を掘り始める。

パニックを起こしているせいか綾香はその間ずっと泣いていた。

「あー、心配しなくても大丈夫よ、綾香。私は大丈夫だから」

瓦礫から音を立たせながらルインは立ち上がった。

殆ど全身から出血していたルインだったが、少しもそのことに対して動じていない。

「あら……綾香、泣いているの？」

「当たり前でしょう……潰されて死んじゃったかと思ったわよ……」

「大丈夫よ、綾香。私は貴方を悲しませるようなことはしない。死ぬならこんな下らないところで死ぬより、貴方に看取られながら死ぬ老衰希望ね」

「ルインだったら殺戮の血飛沫の中で死にたいとか言うかと思ったけどな、オレは」

「エージ、黙ってなさい。今の私はキレかかっているの。綾香を泣かすような真似をした連中が許せない。絶対に叩き潰してやるわ」

「あははっ、冗談言わないでよ。どっかのバカネコが攻撃を食らったから綾香は泣いてるんだよ。その程度の攻撃くらい避けてほしいとこだね」

「ほ、本当なの？ 私だけのために涙を流してくれているのね、綾香。これが愛の力なのね…」

「また始まったよ……ほら、ルイン。お客さんが来たよ」

崩れた回廊の先から、一人の姿を三人は視認することが出来た。

それは何処かで見たとような姿、紛れもなくルインであった。

「あら、優雅な佇まいや品位のある顔立ちから絶世の美女が現われたのかと思っただわ」

さも当たり前のようにルインは語る。

「とにかく、私たちの前に立ち塞がるのなら敵。自分をぶっ飛ばすのはかなり気が引くけど、それどころじゃないものね。ふうーっと」
のびのびと片手を伸ばして背伸びをする。

「綾香、エージ。あいつが流体兵器って奴ね。あいつらは能力を同じにするってR・ノールが言ってたわ。でも手出しは無用よ、私に殺らせなさい」

「勝手に殺つといで。観察してるから」

「負けないでね、ルイン……」

「分かっているわよ。私が負けるなんて有り得ないじゃない」

ルインは綾香にそう言つと駆け出す。

…が、一瞬で勝負は付いた。

ルインの強烈なストレートが敵のルインの顔に入る。

手加減無しで殴つたせいか、敵のルインはグチャグチャに弾け飛んでしまっていた。

「うわっ、グロ！ 絶対に私はあんな死に方イヤよ！」

「どうでも良いんじゃないの、死に方なんて。オレ等みたいな人殺しを含めて誰も良い死に方なんて出来る訳ないじゃん。第一、ルインは老衰が いい んでしょう？ アホくさ」

「そーいうアンタはどういう死に方したいのよ、エージ？」

「オレは当然綾香だけのために死にたい。それが出来れば人生最後に幸福が味わえるのだからね」

「だったら私だつてそうよ。綾香のために命を捧げられるなら生きてたかいがあつたものよ」

「ねえ、二人とも。私のために命を懸けるだなんて何だかおかしい

わ。命を懸けるなら自分のために…」

「ストップよ、綾香。私がまだ生きていたみたい」

ルインは敵のルインが吹っ飛ばされた方を警戒している。

敵のルインはどうやったのか分からないが既に身体が完全に再生された状態であった。

「回復魔法を使ったの？ ぜんっぜん気付けなかったわ。ほら、かかってきなさいよ」

ルインは挑発するように腕をくいくいつと動かす。

「……………」

しかし、敵のルインはルインと同じ戦闘態勢の構えを取り、その場から動こうとしない。

「何やってんのかしら？ 私の身体を扱っているのなら強さも私のようであってほしいわ」

再び、ルインは敵のルインに向かって駆け出す。

さっきと同じようにルインは敵のルインに攻撃を加え、敵のルインは簡単に倒された。

「さっきと何も変わらないわね」

やる気なさげにルインは呟く。

「どうする、思っていたよりも流体兵器って弱いし先に進んじゃおうかしら？ てか、これって本当に私を模倣しているの？」

「そうだね、雑魚だったら時間を掛ける意味がないし……ってバカネコ。まだ敵のアバズレは生きてるよ」

エージに言われて、ルインは敵のルインを一瞥する。

「あら、本当。生きていたわね。てゆうか、アバズレ、バカネコって誰のことよ？」

「敵のことだよ、見た目からしてアバズレでバカそうだろ」

「法王を殺したら次にアンタを殺してやるわ、慰め物」

「それ、オレのトラウマなんだ……」

意気消沈とした様子でエージは囁く。

「知ってて言ったのよ。あの頃のアンタはそこらのゴミみたいに惨めだったからね……にしても、こんだけベラベラと喋っているのに向こうの私は全然かかってこないわね」

ゆっくりとエージから敵のルインの方へ視線を移す。

敵のルインはさっきと同じように戦闘態勢の構えを取ったまま、その場から動こうとしない。

「やれやれだわ。最高にバカなのかしら？」

すたすたとルインは敵のルインに接近する。

そして、ルインはストレートを加えようとしたが…

「……………?」

今度はルインが床に崩れ落ちていた。

自らが攻撃された瞬間がルインには見えなかった。

その間も敵のルインは床に崩れ落ちているルインを蹴り潰すような攻撃を加える。

「ぐう…………クソツ…………ざけんな!」

片手の力だけで身体を振り上げ、ルインは綾香たちの方まで着地する。

「あいつ、いきなり強くなったわ…」

「ルイン、大丈夫!」

綾香がルインに駆け寄る。

「ちょっと油断しただけよ。安心して」

立ち上がりルインは口から流れ出た血を拭くと、戦闘態勢の構えを取る。

「おい、アンタ。私似の絶世の美女だからってオリジナルの私を傷付けることがどういうことか分かっているの！」

「……………」

相変わらず無言のまま、敵のルインは戦闘態勢の構えを取り続ける。

「何なのかしらね、向こうの私は？ 闘うことしか出来ないのかしら……」

「ルイン、避ける！」

突然、エージは叫ぶ。

思考にほんのわずか気を取られていたルインが気付いた時には既に敵のルインに顔を鷲掴みにされていた。

その後一瞬でルインは回廊の壁に頭部を打ち付けられ、その反動のままに床へ叩き付けられる。

連続の攻撃にルインは一切の対処が出来ない。

それどころか今の攻撃だけで意識は彼方へと弾け飛び常人ならば即死は免れない。

視点の定まらない目で何処かを見つめたままグッタリとしているルインに対して、敵のルインは首や頭部を繰り返し踏みつける。

意識の覚醒自体を完全に阻止するための攻撃は明らか。

踏み付ける威力は酷く、ルインの血が散り、床にはひび割れが無数に走った。

「ルインから離れなさい！」

殺那的に繰り返される敵のルインの行動にようやく追い付いた綾香がショットガンを構える。

しかし、それも既に遅かった。

敵のルインは綾香のショットガンの先端を握り、綾香を見つめる。

撃てば、どうなるか。

無言の行動に、そのような感覚が綾香を覆った。

「さあ綾香、銃を下ろして」

エージが敵のルインと綾香に割って入り、綾香のショットガンを下ろさせる。

「何見てんの？ 続きをやりなよ」

エージの問い掛けに敵のルインは黙っていたが、何かを悟ったのか振り返り再びルインの首や頭部を踏み付ける。

「ああ……止めなさいよ！」

綾香は再びショットガンを構えようとする。

「待てっつて綾香！」

綾香をエージは後ろから抱き付く形で止める。

「綾香は分からないの？ ルインは一切手を出さなっつて言っただよ。今のルインに手を貸すことは彼女への侮辱になるんだ」

「何言っつてるのよ！ ルインが死んじやうでしょう！」

「ルインが死ぬ？ 綾香はどれだけルインを過小評価しているの？ 良いかい、綾香。ルインがあんな偽物なんかには殺されるなんて有り得ないんだよ。だって、ルインは総世界最強の……」

強い殺気が辺りを覆い、エージは言葉を失う。

凄まじい殺気に敵のルインも動作が止まっていた。

「来たよ、ルインだ。アバズレなバカネコじゃない本当の……」

まるで畏怖の正体を見たかのようにエージは語る。

「私はあの姿になりたくないのに……」

首や頭部を繰り返し攻撃されたため、ルインは酷く出血をしている。ふらふらと立ち上がったルインは両手で頭を押さえながら言葉を発していた。

頭を押さえているのは繰り返し頭の攻撃により連続でルインを襲った脳震盪のせいだろうか？

当然、それは違う。それどころかの何か別の…

ふらふらと頭を押さえていたルインだったが、頭から両手を離す。

ルインの姿は、先程までのルインとは少し違っていた。

口には牙が生え、手には物を切り裂くためだけに特化した爪。

「……この私を綾香に見せたくなかった」

上の方を眺めながら、何かを囁く。

その言葉を聞いて敵のルインはルインと距離を取った。

敵のルインは明らかに怯えている。

言葉も感情もまるで発しなかった敵のルインがである。

「怯えているの……ふふっ、感情があるんだな、感情が。良いわね、それが生きているってことよ」

敵のルインの頭部をルインは驚掴みにする。

「私は自らをこの姿に追い込んだ者は例外なくぶち殺している。悪く思っな」

瞬間、敵のルインは全身から白い灰のような物を散らせながら崩壊していく。

「……………」

ルインは無言のまま、敵のルインの顔に置いた手を押し込む。

直後、敵のルインはバサツと音を立て白い灰の山と化した。

「ふう……………」

白い灰を見つめ、ルインは溜息を吐く。

「ルイン、調子はどう?」

「エージ、私は今も私よ。さっきと何ら変わっていない」

「聖帝の血が効いたんだね、良かったよ」

「そうね、昔のままだったらアンタも大好きな綾香も食べてしまっていたわね」

「ゾツとするよ、その一言……………あれ?」

「どうしたの、エージ」

「流体兵器がまた来たよ。複数になってる」

ぞろぞろとルインの姿をした複数の者たちがルインたちに接近する。

音もなく、殺気も放たず、まるで空気のように気配を微塵も感じなかった。

「手出しは無用よ」

「分かってるよ、ルインに殺されたくないからね」

「ルインってどっちのよ？ まっ、十中八九私のことだと分かるけどね」

不敵に頬笑むとルインは敵のルインを見つめる。

法王の考え

「急いでよ、杏里くん」

現在、ノールと杏里は聖堂の屋根伝いで歩いている。

ルインたちが聖堂正面から囿役として乗り込む手筈になっているが、より人目に付かないよう行動したかったためだ。

「無理だよ……こんなを着てるんだもん……」

とても歩きにくそうに杏里は屋根伝いを歩く。

それは男性である杏里が何故か、シスターの格好をしているからである。

「どうして?」

「どうしてって……これは普通ノールが着る物でしょう? そもそもこれってボクだけ着る意味はあるの?」

「ゴメンね。それ、一着しか無かったの」

「一着しかなかったのならどうしてボクがシスターの格好を……」

「ぐちぐちと煩い男だね、君は。普段から着てるじゃない、女装物の服なんて」

「ボクがいつ女性物の服を普段着なんてしたの?」

「普段からだよ。ボクが君のためにエリアースの店で買ってる服は全部女性専用のボーイッシュな服なの。君がエリアースで服を買ってきてって頼んで以来ずっと君は女性物の服を着てたの」

「このシスターの法衣を着る前から……何年も前からボクは女装してたって言うの？」

「ジャスティン君やジーニアス君なら気付いていたかもね」

「ボクは……」

泣きそうな声で何かを言おうとした時、物凄い爆発音が聞こえた。

ノール、杏里は反射的に爆音のする方向を見つめる。

その方向にあったはずのもう一つの聖堂が木っ端微塵に瓦解していた。

「杏里くん、これ一体どういうこと？」

「ルインさんがやったんだと思うよ。徹底的に破壊尽くしているもん。綾香姉さんやエージ君がしたがるようなことじゃない……」

「法王がやったんじゃないよね？」

「法王さんは自分の聖堂を壊すような人じゃないよ。だって、神様を信仰している人だし」

「本当は分かっていたよ、ルインだね。あいつ殺してやる」

さらっと、ノールは言った。

「あーゆづのが絶対悪って言うんだ。生かしておいたら、また沢山殺す気だよ」

「ノール」

「もし、今回ボクが生きて帰れたなら戦うから。邪魔しないでね、杏里くん」

「うん……」

そうこうしている内にノールは先に進んでいき、ある場所で立ち止まる。

「杏里くん、今からここに氷の棒を突き刺すよ」

そう言いながら、ノールは氷の棒を作り出し、屋根に思いっきり突き刺す。

屋根から抜けなくなったことを確認してからロープを取り出した。

「古典的な侵入法だけど、窓から侵入するからね。それじゃ杏里くん。お先にどうぞ」

ノールは氷の棒にロープを縛り付けてから、その場を退く。

「ノールから行かないの？」

「こんな時だけレディーファーストされても困るんですけど」

「そう？　ボクだけじゃ勝てないと思うからすぐに来てね」

心配そうな口調で言いながら杏里はロープを降りていく。

その後、窓から杏里が室内へ入った瞬間、物凄い爆発とともに輝く光線が壁を破壊しながら闇夜に放たれた。

「あれ？　確か今のって、この前ルーシェにくらったハルマゲドンっぽいね」

ぼんやりとした様子で特に杏里を心配しなかったノールは水人化し、水蒸気化すると法王がいるとされる室内で実体化した。

室内は酷く雑然としている。

この部屋からハルマゲドンが放たれた衝撃によつてのようだ。

一通り眺めていると部屋の隅でのびている杏里を見つけた。

「あー、ちよつと杏里くん。どうして魔法障壁を張らなかったの？」

一応、心配しながらノールは杏里に近寄る。

「あれ？　杏里くん、怪我してない？」

気を失っている杏里の様子を見て、結構怪我をしているのだと思っていたノールは不思議に思う。

「そちらの方は、クアール様のお連れの方ですよね？」

気配もしなかつた室内から声が聞こえ、ノールは声のする方を向く。

「クアール様、とてもお会いしたかった……私はこの時をどれ程待ち焦がれていたか……」

ノールに語り掛けてきた人物は何故か涙している。

「杏里くんにどうして手加減したの？ あと、ボクはクアールではないよ。ボクの名前はノールっていうの」

「煩いぞ、貴様に声を掛けてなぞおらん！ 口を慎め！」

「はっ？」

「ノール、貴様は自らの年齢が幾らかも分からんのか！ 貴様の役割はクアール様の新たな肉体となることであろう！ なのに何故未だに貴様がクアール様の身体を独占している！ 悪女め、貴様は今すぐに、クアール様へ身体を返すのだ！」

「な、なに言ってるの……？」

「痴れ者め、私の話している言葉が分からん訳があるまい。だがまた敢て言うなら貴様がすべきことは自らがクアール様へと一刻も早く身体を返さねばならないという貴様の生涯を懸けた行為だ。さあ、儀式を行え。貴様にはそれ以外の存在意義はない」

「待つてよ、そんなの受け入れる訳がないだろ、バツカじゃないの？ ていうか、貴方はさっきから何を言ってるの？ 本気で死にた

いんですか？」

「死を受け入れるべきは貴様だろう……言葉も分かんのか、出来損ないめが」

男性（法王）は能力を高めると、掌を宙へ向ける。

「クアール様、今一度ご辛抱を……」

すると、法王の掌には所謂掌サイズの小さなノールのビジョンが現れた。

「……………」

法王は無言でそのノールの腕を掴む。

そして、法王はノールの腕を上空へ向かって掲げた。

「えっ、ちよっ、ちよっと！」

変化は、すぐに現われた。

ビジョンのノールが取らされている行動が、ノール自身にも強制的に行わされたのである。

「な、なにこれ？ どうして腕が……」

直感的にようやくノールは気付いた。

法王がついさっき具現化した自らと似たビジョンと、今の自らの行

動が酷似していることに。

即座にノールの頭を駆け巡ったことは、あの自らのビジョンを法王の下に現されていることは自らの死を意味するということだった。

その答えが閃いた瞬間、ノールは法王へと飛び掛かるつとずる。

一刻も早く、ビジョンを消させる必要があった。

「判断力も行動力も早い。さすが、R一族の血筋を継いでいるだけある。しかし……」

法王は、掌に現しているノールの右腕を肩付近から千切る。

「が……うああ……！」

動作の影響はノール自身にも現われた。

ノールの右腕は突然肩から千切れ鮮血が散った。

「うう……ああ……」

千切れた右肩を押さえ、ノールはよろめきながら立ち止まる。

「これ以上生きていても私にこの責め苦を受け続けることになるだけだ。どうだ、私もこんなことをしたくはない。クアール様へ身体を返還する自らの使命を全うするのだ」

「嫌だ！」

流血する右肩を押さえながら、ノールは叫ぶように答える。

「……もう、悟りなさい」

法王は掌に現しているノールのビジョンをゆっくりと掴む。

「や、やめて……それだけは……」

酷く怯えた声を出す。

「でしたら、早くクアール様へ身体を返してくださいませんか？ 貴方には……価値があるとは微塵も思っていないですし、貴方はこの世にいても既に無駄なのです。何故ならそれは、クアール様を抑圧することになるからです」

今までと違い、法王の言葉は明らかに柔らかなものになる。

法王からは罪に対する思いも感じられた。

もし今まで法王自らが話した敵意剥き出しの内容が事実ならば、そのような感情自体思い浮かぶはずが無い。

「受け入れないよ、ボクは。例えば次に何をされるか分かっているもね……」

「そうですか……」

ノールのビジョンを法王は鷲掴みにし、握り潰す。

今まで聞いたことの無い音をノールは聞いていた。

声というには余りに雑音で内容は分からないが、それが自らの悲鳴だと気付く。

そして、ようやくノールは自身が床に倒れていることを知る。

全身を襲う強烈な痛みにも何も出来なかった。

ただ床にうつ伏せに倒れたまま、決して動くことはない。

「もう、止めにしましょう」

法王は近付くと、ノールに語りかける。

「貴方の身体は完全に崩壊しました。これ以上貴方は生きていたとしても苦痛以外に味わうことがありません。いい加減、クアール様へ身体を返して下さい」

「うう……」

心が折れ、ノールは泣き出す。

「クアール様に、クアール様の身体を返してくださいね？」

「……………」

「物分かりが無い御方だ……仕方ないですね。でしたら私は杏里さんを殺すことにしますか」

ノールから離れると、気を失っている杏里へ法王は接近する。

「……………何をするの？」

「先程、言いませんでしたか？」

法王は掌に杏里のビジョンを現す。

意識を失っている杏里にはそれを止める術は無い。

「止めて……………ねえ、止めて……………」

その声に法王の動きは止まる。

「貴方がクアール様に身体を返して下さるのでしたら今すぐに止めますよ。本来なら……………貴方を傷付けることさえ必要無かったですから」

言葉の後、法王は杏里のビジョンを現したまま立ち尽くす。

そのまま、法王は何もしなかった。

ただ何かを待っているようだった。

「止める……………！」

床に横たわるノールに異常に強い覇気が宿る。

「な、なんですか……………これは……………」

想像を絶する覇気に法王はたじろぐ。

法王でさえ、今までに感じたことのない程の強力な覇気だった。

「これは、クアール様のオーラとも違う……まさか、ノール。貴方は……」

「エクス」

最上級回復魔法エクスを詠唱したノールの身体は完全に治癒された。

「ボクが次に覚醒したら、ボクはクアールになるとアクローマが言っていた。でも……お前が杏里くんを殺そうとするならそんなことどうでもいいんだ！」

「そう……ですか。でしたら、ほら、さっさと私を止めなさい。彼女が貴方のようになっても良いのですか？」

「止めるって言うてるだろ！」

立ち上がったノールは両手に水竜刀を作り出す。

しかし、即座に法王は禁止令を詠唱し、ノールの水竜刀は消える。

その後のノールの行動は素早かった。

既に水人能力を止められることをあの一瞬で推測していたらしく、水竜刀が消されても何も動じることなく速攻で法王へと飛び掛かる。

「くっ……これ程迄とは……」

法王は掌のビジョンを杏里からノールへと変えた。

再びノールを握り潰す行為を行うはずだったが、法王の腕に力は入らない。

気付くと既に法王の片腕は無くなっていた。

「止めろって……言ってるだろ……」

法王の後方へと着地したノールの右腕には腕が握られていた。

その光景に法王は恐怖以外を感じられない。

命を懸けてでも転生させたかったものが、まさかここまでとは思わずにらなかった。

クアールとしての覚醒

「殺してやる……」

強い憎悪に満ちた声で、ノールはそう囁く。

しかし、ノールはそれ以上法王に手を出すことは無かった。

次にノールが行う行動は自らの圧倒的な変化により、恐怖で数瞬間行動が取れなくなった法王を殺害することであるはず。

だが、ノールの行動は違った。

「エクス」

法王へ向けて、最上級回復魔法エクスをノールは放つ。

「何を……しているのですか？」

エクスにより、腕が復元された法王には今の行動が理解出来ない。

「恐がらないで、法王。ボクです」

法王へと近づくノールからは今までの強力なオーラは感じられない。

まして、彼女の雰囲気や声色までが異なっていた。

「まさか……クアール様なのですか？」

「お久しぶりですね、法王」

ゆっくりとした足取りで近付くと法王をクアールは抱き締める。

「良かった……本当に、本当にクアール様ですね……」

堰を切ったように法王の目からは涙が流れる。

法王にとってR・クアールは神に等しい存在である。

神自身が自らの下へ再び手を差し伸べてくれたことは歓喜以外の何物でもない。

「法王、アクローマはどこです？」

法王から離れると、クアールは周囲を見渡す。

「は、はい……申し訳ありません」

法王は何故か謝る。

「現在、アクローマは女帝として天使界を治めております。今では数少ない我ら同志です」

「同志たちは？」

「既に数える程度しかおりません。私とアクローマ、相馬、ミトス、ドレッドノートなどです」

「そうなんだ……」

「……どうかなさいましたか？」

法王は微妙な違和感を覚えていた。

「ああ、何でもないよ。ボクのせいで皆には迷惑を掛けてしまったんだなって思ってたね」

「クアール様？」

「それとき、ボクは“アズラエル”が改名したのかと思ったよ。だって、自分のことを“ハウオウ”と呼ばせているみたいだしさ」

「貴方は本当にクアール様……なのですよ？ 私の名を知っているのですから……」

「どうして？ ボクはクアールだよ？」

「いえ、確かにそうなのですが……クアール様の言葉や雰囲気があるでノールのように……」

「ノールはボクの中に存在します。一つの身体に二つの人格が宿っていて、ただその位置が置き代わっただけだからね。違った意味の転生をボクは行ったから、ノールの考えはボクの考えに複雑な変化を起こしながら移行するよ」

「それで、自身を“ボク”と」

「うん、そうだよ。こっちの方が当たり前な気がするの」

「これから如何なさいますか？ クアール様の転生が成し遂げられた今が決起の時だと私は考えます」

「ううん、今は決起の時ではないよ。まだ配役が揃っていないからね」

「配役とは？」

「……………」

法王の問い掛けに、クアールは無言で返した。

法王の部屋の外に何かの気配が感じられたからだった。

趣ろに法王の部屋のドアが開く。

法王とクアールはそちらへ注意を向けた。

「あつ……………」

ドアを開いたのは綾香だった。

「……………見付けたぞ、R・クアール！」

そう叫ぶと綾香は手を自らの前にかざし、空間転移を詠唱なしで発動。

綾香の前の空間が歪み、そこから綾香は何かを取り出す。

取り出したものは、ロケットランチャー。

それを照準合わせも全くせずクアールたちの方へ精確に放った。

「はっ！」

気迫の籠もった声で法王は床に掌を打ち付ける。

瞬間、天井を打ち破るように巨大な何かがロケットランチャーの砲弾ごと床を射抜いた。

床ごと射抜かれた砲弾は下層階で爆発音を響かせた。

「……………」

しゃがみ、掌を床に押し付けていた法王は立ち上がる。

すると、天井から床を射抜いていた何かが突然消えた。

「あー、アンタね。私をプレスしてくれたのは。命で償ってもらわよ」

続いて部屋に入ろうとしたルインが語る。

「ルイン、お前じゃクアールには勝てない！ エージと一緒にアズラエルだけを狙え！」

砲弾を撃ち終えたロケットランチャーを投げ捨てると、両手に魔法剣を綾香は作り出す。

「ウソ？ 綾香って魔法剣使えないはずじゃ……」

「ルイン、話は後だ！」

綾香は魔法剣を全力でクアールへ放り投げる。

しかし、魔法剣はクアールたちへは届かず、床に開いた穴に落ちていった。

「無理よ、綾香！ 銃火器専門の貴方が投擲したって当たるはず無いでしょう！」

「これは、どういうことなんだ？」

焦りながらも綾香は次の攻撃魔法を放とうとする。

「一体どうしたの、綾香？ 権利発動、魔法」

ノールの言葉の後、綾香の魔力は急激に弱まり、綾香からは魔力を感じられなくなった。

「ボクは綾香と対話したいの。今はお互いが争っている場合ではないことくらい綾香だって分かっているでしょう？」

「ああ、分かっているとも！ けどな、あの戦いの元凶がお前じゃないと分かってもオレはお前を許せないんだ！」

クアールに対して、何かとても激怒している綾香にルインは状況を掴めていない。

「綾香、どうしたのよ？ あれはどう見てもクアールじゃなくてノ

ールでしょ！ 狙う相手は法王よ……って、綾香。今、貴方って自分をオレって言わなかった？ 貴方って意外とワイルドなのね！」

「お前、ホントにバツカじゃないの？」

敵を前にしても普段と変わらないルインにエージは言う。

「あいつはR・ノールじゃない。転生かなんかしてR・クアールに代わったんだよ。それと今の綾香はオレたちの本物の御主人様だよ」

「……ってことは」

ルインは綾香により近付く。

「どうした、ルイン？」

クアールを警戒していた綾香だったが、ルインが自らの顔を覗き込む程の近い距離にいたので注意が逸れる。

「綾香、貴方は隙が有り過ぎるよ。もし、ボクが綾香を殺すつもりだったら今の時点で殺してたね」

「……分かった、話を聞こう」

戦闘態勢に入っていた綾香だったが、クアールの問い掛けに構えを解く。

「綾香、今のノールはクアールなんでしょ？ ブツ倒しましょうよ」

「無理だ、今のR・クアールには決して勝つことは出来ない」

「どうしてなの？」

「R・クアールは既に権利を発動した。もうその時点でR・クアールを倒すことは不可能なんだ」

「権利？」

「最初に攻撃を仕掛けて失敗した後だ。R・クアールはファーストアタック以外倒す手段が無いのに……何故オレには力が無いんだ……」

「そりゃあ、綾香が女性だからでしょう？」

「えっ？」

不思議そうな表情をした綾香は目線を自らの身体へ移す。

「な、なんなんだ……これは……」

衣服を下から持ち上げる胸の膨らみに絶句したような声を出す。

目の前のものが信じられないのかバンバンと胸を叩き、本当にあるのかを確認した。

「桜沢一族は男性しか産まれないはず……なのに、何故この子の身体は女性なんだ？」

「あの一、もう話しても？」

略完全に放置されていたクアールが語る。

「ボクと手を組んでくれないかい？　一緒に総世界を平和と平等の世界にしようよ」

「……条件がある」

「なに？」

「オレたちには権利を発動するな。それとオレたちを裏切るような真似はするな」

「構わないよ。ボクに戦いを挑まなければ、それまでは仲間だったことだから。はい、そういう訳で権利解除」

再び綾香から魔力が感じられるようになった。

「分かった。行くぞ、ルイン」

「どこどこ？」

「とにかく、この場から離れるってことだ。ついてこい、ルイン、エージ！」

部屋から出て行くと、綾香たちは何処かに行ってしまった。

「ボクたちも行こう」

「アクローマの下へですね」

「そうだよ、アクローマのとこ。じゃ、異世界空間転移よろしく」

「了解しました、クアール様……ところであの娘は如何なさいますか？」

「うん？」

法王の問い掛けにクアールは法王の視線の方を向く。

そこにはまだ気絶していた杏里が横たわっていた。

「連れていくよ。彼はとてもこれからの戦いに関連しているからね」

「彼？ それは誰ですか？」

「だから、杏里くんだよ」

「……………？」

不思議そうな表情をしたまま、じつと杏里を法王は見つめる。

法王が杏里を女性としか認識出来ない理由は当然、杏里のシスターとしての女装である。

しかし、それが普段着のままの杏里であっても法王に杏里を男性だと見破れたかは定かでない。

「アズラエル、無事か！」

その時、勢い良く部屋に飛び込んでくる人物がいた。

服装は所謂ゴスロリ。黒やモノトーンを基調とする着衣にフリルやレースなどを用い、可愛らしさを表現しているものに十字架や棺のような装飾がアクセントとしてあしらわれていた。

「あれ……アズラエル。貴方の隣にいる人って……」

ゴスロリ風の服装を纏った人物は驚きを隠せない様子。

「姉貴！」

そう叫ぶとクアールへと駆け出す。

しかし、先程の法王の能力で床が抜けていたため落下していった。

「今のは？」

「はい、彼女はR・ノールの妹R・エールです。彼女は若干17才という年令で既に権利を習得しております」

「ボクよりも30才近く早い……あの子は優秀なんだね」

「いえ、エールは……」

「こんのクソヤロー！ どいつだ、こんなとこに落とし穴掘ったクズは！ ぶっ殺してやる！」

酷く怒声を上げ喚きながら、エールは床に開いた穴から這い上がってきた。

先程とは打って変わり目付きも酷く、可愛らしさは消え失せている。

「それは落とし穴ではありませんが、床に穴を開けたのは私ですよ。どうです、エール。ぶっ殺してみますか？」

這い上がってきたエールに優しそうな笑みを法王は浮かべる。

「ああ？ ……ヤだな、アズラエルうゝ。冗談だよ、冗談。貴方のことは大好きだよ」

「そうですね、とても嬉しいですね」

再び優しそうな笑みを法王は浮かべる。

「ともかく、メインディッシュはこっち！」

エールはクアールを歓喜の眼差しで見つめ、嬉しそうに指差す。

「もう一回行くぞ、姉貴！」

クアールへ猛烈な勢いで突進すると、ばふっと音がする程のタックルをかます。

勢いのままクアールはエールと共に倒れる。

「姉貴、ずっと会いたかったよ。ゴメンな、勝手に家出して……本当にゴメン……」

謝罪の言葉を口にしながら、エールはクアールに抱き付く。

「姉貴の体温……やっぱり冷たくて気持ちー！ あっ、ところでど

うする？ 今ヒマだったら楽しいことを一緒にしようか？ 姉貴はまだ知らないと思うけどさ、きつと気に入ると思うんだ」

「待ちなさい。いえ、もう止めなさい、エール。そのようなはしたないことは。その方は貴方の姉上ではありません」

「はっ？ ウソだろ？」

直ぐ様クアールからエールは離れる。

「ゴメンね、アタシの大好きな人にそっくりだったから間違えちゃった。そうだよな、姉貴はスロートで暮らしてるはずだし……ゴメン」

ガツカリした気持ちを悟られないよう、エールは無理に頬笑んでみせたが表情はぎこちなく固まってしまう。

「うっん、大丈夫。ボクもエールのこと大好きだから」

服をパンパンと叩きながらクアールは立ち上がる。

「ボクはR・クアール。エールと同じR一族だよ」

「やっぱり似てるんだよな。雰囲気も見た目も温もり（冷たさ）も……瓜二つとしか言い様が……」

「どっつしたの、エール？」

「な、なんでもない。独り言だから！」

別行動

一方その頃、綾香たちは聖堂を出ていた。

「綾香、どうしてクアールを殺さなかったのよ？ 私たちの方が強いはずよ？」

「確かにルインの言う通りだ。アズラエルも過去のクアールも接近戦タイプの人物じゃないし、楽に勝っていたかもしれない」

「だったらどうして？」

「クアールが恐ろしい程、強力になっていったんだ。過去に戦った時は接近戦タイプじゃなかったのにまるで格が違い過ぎる……ましてファーストアタックを封じられたのが痛かった」

「権利ってなんなの？」

「総世界で最も強力で、扱える者は神とも称される程の能力だ。権利はスキル・ポテンシャルの高等系ワード・スキル。言葉によって自分自身と無機物以外に様々な権利を与えるんだ。不可能な権利はクアールでも与えられないようだが……」

「例えば？」

「生物を殺すこと、権利を与えた生物が生涯を懸けても行えないこと、生物の復活、生物の具現化の四つだ。逆に権利によって行えることは桁違いの数だ。奴は、もし人々の信じる全知全能の神が実在するならば、全知全能も天使を率いる力も全てを剥ぎ取り、いとも

簡単に普通の人間へと変えてしまっただろうな」

「ちよつと待つてよ！ そんな空想生物でも勝てないなら私たち絶
対勝てないじゃない！」

「いや、勝てる。ファーストアタック……つまり奇襲、急襲、電撃
攻撃によつて一瞬でクアールの命を奪うことだ。クアールは無機物
に権利を与えられないから、ついさっきのようにロケランや魔法剣
で仕留めることも可能なんだ。他には過去にオレが行つた聖帝を味
方に引き入れて戦う方法。今は聖帝さえも何処にいるか分からない
けどな」

「私、聖帝なら何処にいるか知つているわよ」

「本当か！」

「ええ、勿論。綾香、誉めて誉めて〜！」

「それならオレだつて知つてるつもの。綾香、そのバカを誉める意
味なんて無いよ。バカだし」

「ところで、聖帝は何処にいるんだ？」

「R・ノールの家」

「はあ ？」

本当に信じられないのか、綾香は変な声を出す。

「あいつだろ、今のクアールに身体を受け渡した奴だろ、R・ノール」

ルって！ どうしてR一族の下に聖帝が居るんだ！」

「知らないわよ。テリーは聖帝のことも自らの立場も分かっていないみたいだからね。彼女は本当に何も分かっていないから私らと日々楽しく生活していたってことよ」

「聖帝も女性なのか？ いや、そんなことは関係ない……今すぐにR・ノールの家に行くぞ！」

「分かったわ」

ルインは頷くと空間転移を詠唱する。

数秒後、R・ノールの黒塗り屋敷に現われる。

「入って。私は屋敷内のことなら把握しているから」

率先して、ルインはエントランスの扉を開く。

屋敷内に入ると偶然なのか、エントランス付近に有紗がいた。

「あつ、お帰り。以外と早かったね」

「どうした？」

「いや、特には？ って綾香、今日の君はワイルドだね」

「違うよ、有紗。ここにいるのは今では君の祖先。橘綾香じゃなくて桜沢綾香だよ」

ついさっきのルインと同じようなことを話す有紗にフォローするよ
うにエージは語る。

「それって当たり前じゃないかな？ 橘綾香は桜沢綾香だから。姓
が異なるのはオレが綾香を…」

「違うの、有紗。間違ってしまったように分けて名前を呼んでい
るの。目の前にいるのは有紗の妹の橘綾香じゃないの。祖先の桜沢
綾香なの」

「そういう訳だ。有紗、よろしく頼む。ところで聖帝は何処だ？」

「聖帝……？ ていうか、綾香はどうなったんだ？ 祖先か何だか
知らないけど、オレの綾香の身体に移ってんじゃないやねえ！」

怒声を上げ、有紗は天使化する。

広げられた羽の枚数は八枚、怒りに任せた光体化だった。

「綾香から出ていけ、亡霊！」

空間転移を有紗は自らの目の前に現す。

そこから有紗は白銀の槍を取り出し、綾香に向かって構える。

「綾香から出ていかないなら、オレにも考えがある！」

「君は一体何を焦っているんだ？」

「はっ………？」

「オレたちがこの屋敷へ来た時、聖帝という言葉をおれが話した時から様子がおかしい。何かあったのか？」

「あつたよ、オレの大切な綾香に亡霊が乗り移っているっていう現実がな！」

「話の論点が違う……これだと同族同士で無意味な争いを起こしそうだ。ルイン、エージ、オレは橘綾香から一旦離れる。橘綾香にはオレに身体を“支配”されている間の記憶はないから、ある程度このことは伝えてやってほしい」

「ん、分かった」

素直にエージは頷く。

「いやよ！ また貴方と逢えて十分かそこらしか経ってないのよ！ もっと話がしたい……貴方の存在を感じていきたいの……」

「本来なら、こうして話すことも出来なかったんだ。理解してくれ」
「……………」

涙を流し無言でルインは頷く。

「有難う、ルイン」

その一言の後、綾香に変化が起きる。

「……………あれ、どうしたの？」

桜沢綾香から解放された綾香は微妙に眠そうな感じだったが、すぐに驚きを示す。

ルイン、エージ、有紗の三人が、じつと自らを目の前で見つめていたからだった。

「あ……綾香……」

光体化を解き、よろよると有紗が綾香に近付く。

「綾香！」

有紗が綾香を抱き締める前にルインが綾香に抱き付いた。

「綾香！ 私のこと、覚えてる！」

「覚えているわ……ルイン、さっさと離れなさい。お仕置きするわよ」

直ぐ様ルインは綾香から離れる。

「綾香、気分は悪くないかい？」

「有紗さんまで、一体どうしたの？ んー、まあ少し倦怠感があるかな？」

「綾香、さあ部屋まで行こう。休んでいないと身体に悪いよ」

「大丈夫よ、そんなに疲れてないから」

そう語る割りには、有紗に手を引かれ自室に綾香は向かった。

結局、綾香は疲れていたので休みたかったらしい。

「エージ、分かっているわね？」

「お前が分かってんの……それはどうでも良いけど、綾香の話していたことを確かめに行くんでしょ？」

「そうよ、テリーに会いに行くのよ」

二人はテリーの自室へ向かう。

「テリー……いるかい？」

微妙におどおどしながら可愛い素振りではエージはテリーの自室のドアを軽くノックする。

だが、部屋からの反応は全く無かった。

「バカね、アンタわ。そんな職業柄のノックのされかたしたら向こうが部屋から出にくいでしょう、キモくて」

「誰かの部屋を訪ねるってことは今でも苦手なんだ……」

「……ただ単に聞こえなかっただけか。私が代わりにやるわ」

エージをドアの前から退かし、ルインがドアの前に立つ。

「テリー、いるでしょ？ 私よ、ルイン。開けてちょうだい」

しかし、ルインの場合でも部屋からの反応はない。

「いないんじゃないの？」

「……………」

ルインは黙ったまま、ドアの取っ手を握り、ドアを開こうとする。

鍵は掛かってないらしく、ゆっくりとドアは開いた。

「入るわよ」

静かに室内へ入ったルインは室内を見渡す。

結局、テリーの姿は室内に無かった。

「いないね、テリー。どこ行ったんだろ？」

「さあ、私には分からないわ。アンタ、イヌなんだから鼻使って探
しなさいよ」

「オレはイヌ人だけど、鼻は人間並みだよ。過去にやらされた行為
であまり効かなくなった」

「随分と苦勞したのね」

「あの頃は、されるしかオレに価値がなかったからね。ゴミと同じ価値しかないオレに綾香が手を差し伸べてくれなかったら今でもオレはあの館でゴミ同然だったかも……ちょっとさ、テリーもないみたいだし待つ間、昔話でもしない？」

「アンタが人間だけを殺しまくっていた理由って、その辺にありそうね。良いわ、聞いてあげる」

「ルインは異次元にいたから知らないと思うけど、オレは誰かを殺すことなんてもう止めたよ。橘綾香がオレに優しくしてくれた。人間にも良い奴がいるって教えてくれたんだ」

「そういえば、アンタが綾香と出会ったのっていつ頃？」

「今から大体十年くらい前、綾香が子供だった頃だよ。でも、あの頃では綾香が桜沢一族だと分からなかったよ、幼少時の綾香はまだ眼鏡を掛けてなかったからね。それに男の子じゃなく綾香は女の子だったし」

「今まで聞いてなかったけど、綾香とアンタってどんな関係？」

「恋人だと思ってた時期もあった。身体の関係もあったから。こんな、オッサンのオレなんかを誘ってくれたんだよ」

「……えっ？ それって一体どういうこと？」

「綾香は処女じゃないってこと」

「エージ！」

強引にエージの首を鷲掴みにし、近くの壁に押し付けた。

エージとルインには四十センチ近くの身長差があるせいか、エージは首を掴まれた状態で宙に浮いている。

「アンタ、それがどういうことか分かっているわけ？ 従者が主人にしてはいけないことよ！」

「ああ、そう。でも、オレは嫌だったんだよ。過去の記憶が蘇ってきそつで……だってあいつらが……っとこれは忘れた方が良い話」

何か違和感を覚えたのか、鼻の辺りを触る。

鼻に違和感を覚えても首を掴まれている痛みや苦しさには全く気にも留めていない。

「何をグダグダと話してんのよ。どうすんのよ、これから。桜沢一族が復興したらアンタの立場は最悪よ」

「誤解をしているよ、オレが勝手にしていた訳じゃない。オレが毎回襲われてた方」

「襲われて……って？」

「さつきも言ったけど、オレから綾香を誘ったことは一切ない。綾香本人に聞けば、色々と教えてくれると思うよ」

「悪夢だわ、それって本当に……」

力が抜けたのか、エージの首から手を離す。

特に何事も無く、エージは着地した。

「そう？ でも良かったね、これから綾香はルインの人だよ」

「アンタ、何かするの？」

「うん」

答えた後、溜め息を吐く。

「R・クアールの傍にいた時、高次元のシナリオを扱えた。これはハズレないと思ってね、試してくるんだ」

「好きなようにしなさい、くたばったら骨くらい拾ってやるわ」

ルインはエージから眼を背けると、手の甲で眼を擦る。

「あれ？ バカネコが泣いてる」

「煩い、マジで殺すわよ？ あー、私も年ね、こんなほんつとにどうでも良いイヌ人なんかのために涙が流れるなんて……情が移ったみたいね」

「キモくね？」

「何とでも言えば良いわ、感情に嘘は付けられないもの」

「はあ……本音を言つとね……」

「なんか、あるわね」

何かを見つけたルインは会話を断ち切り、テリーの部屋にあった机に近寄る。

そこにあっただのは手紙だった。

内容は暇だからリュウと行動する、リバーズとは少しの間別行動を取るとのこと。

「何ていうか、ここで待っていても仕方がないらしいわ。どうする？」

「ルインは綾香の傍にいて。あと、有紗は必ず裏切るよ。あいつは信用しちゃいけない」

「どうして？ 桜沢一族なのに、有紗が私たちを裏切るって？」

「聞かないで」

「シナリオで見たのね。アンタが忘れてはならない内容だもんね…
…なんだか悲しいわ。いつも人を殺しまくっていた私なのに、やっぱり年なのね」

「年じゃないよ」

ぼそっと、エージは囁く。

「色々あったけど、オレもルインを愛してる。それじゃ、先に行っ

てるよ」

少しだけ嬉しそうな表情で、エージは空間転移を詠唱し消えた。

黒幕

「アタシ、今思ったんだけどさ」

「どうしたの、エール？」

何となく話したエールの一言にクアールは答える。

「ここって天国だよな？」

エールの眼には地平線の先まで続く雲の大地、澄み切った雲ひとつ無い青空が映っていた。

つまり、ここは天使界。エールは天使界に初めて来ていた。

「いいえ違いますよ、エール。ここは天使界という世界。天国などという空想とは異なります」

「マジで？」

意表を突かれるアズラエルの言葉にエールは驚きを隠せない。

「アズラエルって毎回聖書読みながら天国とか地獄はあるって聖職者の人らに言ってたじゃん。あれ、空想なの？」

「はい、空想です。あれは人々が自分の都合の良いように考え付いた馬鹿げた安易な発想。天国や地獄が存在するなど全く持って有り得ません」

「言い切ったな……いつものアズラエルと全然違い…」

「クアール様の前ですから、私は本音が言えるのです」

「ところで、何しにここに？」

微妙に、エールの声はトーンが下がっていた。

元々、聖職者である法王の下に身を寄せていたエールは聖堂で法王から見聞きしたことを自身は聖職者では無いが覚えている。

そもそも今までとは根本から異なることを語られ、ショックを受けていた。

「この世界、つまり天使界の女帝アクローマへ会いに来ました」

「女帝って、アタシらで会えんの？ 第一、天使だよ？ ウチの聖堂に来てくれている天使とかとは違う……あれ、もしかしてあの天使とかって……」

「ええ、会えますよ。アクローマはアポなしでも会える手軽さを謳っていますから」

「そろそろ行こっか。エールも天使界には慣れてきた感じがするしふわっとした軽い笑顔で頬笑むとクアールは語る。

「てかさ、アクローマは女帝で偉い天使なんだろ。アタシらで本当に会えんのかよ」

「会ってくれるよ、アクローマなら」

杏里を背負ったまま、二人を先導するようにクアールは進みアクローマの宮殿へ入る。

「ここが、そうだね」

クアールは謁見の間の前で立ち止まる。

直後、部屋を閉ざしていた扉が開き始める。

「アクローマも気付いているみたい。さあ、入ろう」

クアールたちが謁見の間へ入ると、いつも通りアクローマが玉座に座っているのが見えた。

「アクローマ〜!」

手を振りながら、クアールはアクローマに近付く。

それを確認したアクローマは玉座から立ち上がると、クアールの前まで駆け寄りツギハヤク跪く。

「クアール様、心からお待ちしておりました」

「よくボクがクアールだと分かったね。今、ボクは別の姿形をしているのに」

「姿形が変わっても貴方のオーラだけは変わりません」

「そっか。そういえば、アクローマはボクがここに来た理由は分か
ってるよね？」

「分かります。同志の集結、クロノスとの決戦ですね」

「へえー、ボクを殺したのはクロノスって言うんだ。桜沢綾香と聖
帝だと思ってたけど初めて知ったよ」

「いえ、申し訳ありません。アズラエルから既に聞いていたと思っ
ていたので話すべき内容の順序を間違えてしまいました。クアール
様の命を奪おうと画策した黒幕は、タルワールという者です。桜沢
綾香とその一族一派、聖帝はタルワールの計画通りに操作され、ク
アール様と我ら同志たちが戦うことになりました。その後、タルワ
ールはクロノスという自らが立ち上げた組織によって総世界を間接
的に支配しています」

「今の総世界は平和？」

「いいえ、全く。クアール様の作り上げた理想郷……戦争も貧困も
なく、誰も差別されない夢にまであの見えた総世界は既に変わってし
まいました。人々は言い様のない不安から有るはずのない奇妙な偶
像を信仰し、自らの利益を追求し醜く殺し合い、人種に見境のない
下劣とも言える価値観のみで互いを差別し合っています」

そこまで言うと、跪いていたアクローマはクアールを見上げる。

「クアール様、私はどうすれば良かったのでしょうか？ 私がクアール

ル様のご意志を貫き通せた世界はこの天使界だけ……同志たちもクロノスに殺されていき今では僅か数名程。もう、私にはどうすれば良いのか分かりません」

「そうだね、ボクにも分からない。ボクは人々が平等に楽しく穏やかに暮らせていけば、全てが良いと思っていたから。考え方が安易だったんだろうね」

「違います！ 貴方が安易だと認めてしまったら、私たちは一体何だったのですか！ タルワールの歪んだ思想が、この総世界を作り替えさせたのです！」

「それは私も思います。クアール様のご意志が間違っているなど考えられるはずがない。平等で平和を嫌うなど……」

「あの、ちょっと」

エールの問い掛けに三人が振り向く。

「さつきから何を話してんだか分からないけど？ 何を語ってんの？」

「総世界のことだよ」

クアールが軽く答える。

「だからそれが分からないって言ってんの、分かる？ アタシの言ってること？」

「どっぴいっ」と？」

「学者でもないのに推測で人の生き方を勝手に語り過ぎ。人の生き方の何が分かるわけ？ アタシだって分からないけど、第一アタシらに他人のことなんて関係ないんじゃないの？」

「……………」

クアールはエールを見つめ、無言になる。

アクローマ、アズラエルもクアールを見つめたまま、何も語らない。

「考え付けませんでした……………」

「一度も？」

「そう、一度も。一つ概念にボクは固執し過ぎてしまったのかな……………」

クアールの弱さを、アクローマは感じ取る。

「違う！」

咄嗟に感情的な声を上げていた。

「貴方がいたからこそ総世界は平等で平和だった！ 何かあっても貴方の意志は貫き通してもらわないと総世界はダメになってしまう……………」

「そうだね、アクローマ。ボクは頑張るよ」

「クアール様、昔の貴方とは感じが変わりましたね。しっかりして下さい!」

「ゴメンね、アクローマ」

「……そろそろ、お時間です」

そう話すとアクローマは異世界空間転移を詠唱し、クアールの傍に異空間を作り出す。

「どこに通じてるの?」

「家です」

「家?」

「もう入って下さい、時間がありません」

「えっ、アタシも!」

アクローマは無理矢理クアールとエールを異空間へ押し込むと何処かに転送する。

謁見の間からクアールたちの姿は消えた。

「……あーあ、ノールちゃん、失敗しちゃったみたいね」

クアールたちを送った後、アクローマは溜め息を吐き俯く。

「ノールちゃんはねえ、とっても優しくして他人のことを色々と考え

られる子よ。私には生意気言う時があるけど、それも可愛げがあって良いのよね」

「アクローマ、それがどうかなさいましたか？」

「どうかしてるから話しているんじゃないの。でね、ノールちゃんはクアール様へ転生なんて全くしたくなかったの。本来ならグラール国家で、二十才になるまでお嬢様生活をし、転生が宿命だと思いつながら簡単に転生を受け入れたはずだったのにな…」

「しかし、それは叶いませんでした。何者かがグラール国家を滅ぼしてしまった」

「その時点で宿命を受け入れなくても良い権利を得たノールちゃんだったのに何故か私のところに現われたのよね、どういう理由でなのか今でも分からないけど。多分それからのよね、ノールちゃんがクアール様へと変化する手順が急速に進んだのって」

ノールを語るアクローマは寂しげに俯いている。

「私ね、今だから言うけどノールちゃんをクアール様へ転生させたくなかったの。だから言っちゃったわ、覚醒しなければ転生しないって。それと権利を扱えるようになれば、クアール様にならないってこともね」

「あの時に話したことが事実だったとは。R・ノールは既に知っていたのか」

「今となつては過去の話よ。あーもう、どうして私たちは平穩でいられないのかしらね」

俯いて語っていた状態から、アクローマはアズラエルへと視線を移す。

「それはそうと早く貴方は逃げた方が良い。あと、数分後に彼らが来るわ」

「何故、彼らが来ると?」

「何が来るか分かってんならさっさと逃げなさいよ。一応言うけど異世界空間転移や空間転移を扱うと目的地が天使界の私の宮殿だった場合は確実に宮殿前に現われるよう結界を張っているの。これで少しは時間を稼げる」

「貴方は?」

「彼らは私がクロノスを裏切ったから制裁しに来るの。裏切った私は行動自体を捕捉されているから今さら何処へ逃げてもダメ。というか、逆に逃げない方が良いの。私が行動しなければ、シナリオではこの謁見の間に私がずっといることしか分からない」

「では……私も残りますかな」

アズラエルの一言にアクローマは鬼気迫る表情で反応する。

「だから逃げろって言っているじゃないの。もう、いい加減分かりなさいよ! ここにいたら貴方も死ぬのよ!」

「だったら尚更離れられませんね。大事な同志を平気で見殺しにする、私ができるような行為自体を行う者だと貴方には見えていたので

すか？ 見損なってもらっては困りますね、一体何年の付き合いだと思っっているのですか。第一、私も貴方と同じようなもの。ここから行動を取らない方が良く。シナリオで捕捉されない存在はR一族、桜沢一族、聖帝のみなのですから。後は彼ですね」

「終わりみたいね、私たち」

アクローマたちは謁見の間の入り口に注意を払う。

そこには、二人の人物がいた。

一人は怪力無双の質量を誇る体軀をした剣士風の男性、もう一人はラフな格好をしている優男風の若い男性。

「話し中？」

ラフな格好をしている若い男性が二人に声を掛ける。

「もう終わったわ」

「それじゃあ、貴方と対話したいな。アクローマさん」

全く敵意の無い、優しげな頬笑みを若い男性は表情に浮かべる。

「こちらから話すことは何もない」

「貴方に戻ってきてほしい、アクローマさん」

「死にたくなかったら消える」

「嫌だ、貴方には……」

「黙れ！」

瞬時にアクローマは光体化する。

略同時にアズラエルも若い男性のビジョンを作り出す。

「もう一度言う、消える。私たちはお前と話すようなことは何一つとしてない」

「やっぱり、アクローマさんも結局はオレたちを敵対視するんだ。仲間だと本当に思っていたのに。R派の人たちは皆そうだった……その様子からすると法王も同じ？」

「同じですね」

「ああ、そう……ジリオン、貴方にお任せするよ」

そう言い残し、ラフな格好している男性は謁見の間を出ていく。

「ジエノサイドに所属していたお前たちも既に分かる通り、R派は全て指名手配者となっている。殺されることは仕方ないと思え」

「バカ抜かすな。てゆうか、私たちが一体何をしたっていうの」

「権利に縋り、自由を欲しないR派は存在自体が敵だ」

「何を訳の分からないこと言ってるのよ？　それが理由になってるとアンタ本当に思ってるわけ？」

アクローマの問い掛けの瞬間、ジリオンの身体に異変が起きる。

その異変は先程の戦いでノールの身に起きた“潰す”という状態と一緒だった。

肉塊と化したジリオンだったもの。

それは、ほんの一瞬の出来事である。

「よっしゃあ！」

歓喜の声を上げ、アクローマはガッツポーズをする。

今の一瞬で起きたのはただ単純にアズラエルがスキル・ポテンシャルを扱いジリオンを潰しただけだった。

「こんな簡単に食らってくれるとはね。さーて、殺るなら徹底的に
よ」

嬉しそうに笑いながら、一刀の魔法剣をアクローマは作り出す。

アクローマは両手で魔法剣を持つと駆け出し、剣の切っ先を地面スレスレで走らせた状態からスイングする形でジリオンを一気に打っ手切った。

「楽しそうだな、オレを殺すのがそんなに楽しいのか？」

アクローマは声を聞いた。

それが自らの真後ろから響くと悟ったアクローマの胸、心臓付近を剣が刺し貫いていた。

「ぐっ……う……」

ガクツと体勢を崩し、アクローマは膝を付くようにして倒れる。

即座に踵を返し、いつの間にかアクローマの背後にいたジリオンがアズラエルへと向き直る。

「遅い」

再び、アズラエルがジリオンを潰す。

ついさっきと同じように肉塊と化したジリオンは床に落ちる。

「何でしょうか、これは。ダブル（分身）ですかね……ところで、アクローマ。いつまで寝ているつもりですか？」

「バレたか」

何事もなかったようにアクローマは立ち上がる。

「いつ気付いたの？」

「貴方が、“うう”などとわざとらしく発して倒れた際ですね。即死と思われるダメージを受けた際に言葉など発せられるはずがありませんから」

「あら、そうなの？ 次があれば、試してみたいところだわ」

言い終えた後、アクローマは最上級回復魔法エクスを詠唱する。

端から見れば致命的な怪我を負っていたアクローマだが、治癒後と前とでは怪我が消えた程度で変わりない様子。

「にしても、ジリオンだったかしら？ 何なの、ダブルでも使ったの？」

自らを刺し貫いた方のジリオンをアクローマは全力で蹴飛ばす。

「私もそう思いました。ですが、二体とも手応えがあった。不思議としか言えません」

「答えは簡単。二体ともオレであり、本物っただけだ」

アクローマ、アズラエルともに声がする方へ振り向く。

三体目のジリオンが謁見の間へと入ってきたところだった。

「ジリオンという意味が分かるか？ 意味は無数ということだ。分かってしまえば、ただそれだけ。数が多くなるでしかないこと」

ジリオンは復活の魔法リザレクを詠唱する。

すると、先に倒したはずの二体のジリオンが起き上がった。

「まだ、たった三体目。楽しませてもらわないと」

三体となったジリオンが一斉にアクローマたちを襲う。

戦いは長く続いた。

しかし、倒せば新たに別のジリオンが現れ、倒したジリオンもまた復活させられてしまうという無限ループに陥ったアクローマたちは酷く消耗していく。

そして、ジリオンが十数体となった時、アクローマたちは封印障壁を張り、円形の障壁内に立て籠もった。

立て籠もったからといって既にアクローマたちは強力な力を持つジリオンらにより満身創痍である。

「……………」

封印障壁を無言でノックしてジリオンは出てくるよう促す。

「……………」

それをアクローマたちは無言で返す。

返事をする事自体が今の彼らには苦痛となっていた。

「あつ……………そうだ」

だが、アクローマは何かを思い付いたのか言葉を発する。

「そうね、そうだったわ。私たちはこんな所に籠もって何をやってきたのかしら。私たちは死ぬためにここにいる、間違っても逃げて生き永らえようなんてことじゃない。クアール様のお代わりない姿

を見られて、私は、私は惑ってしまった。これから、クアール様と再びなどと……結局、私の意思も言葉も覚悟も本当のものでなかった」

静かにアクローマは封印障壁を解く。

ジリオンたちはアクローマが封印障壁を解いたからといって攻撃を仕掛けない。

彼らの覚悟を悟ったらしい。

結果的にそれが良かったのかは定かではないが。

「今、ここが勝負の際……一斉に仕掛ける！」

速攻で詠唱する魔法。

部屋全体が軋みだす程の魔力量だった。

それは過去にアクローマがノールを信じられなくなり、殺そうとした時の魔法と全く同じ。

「弾け飛べ！」

激しい閃光とともに爆発が起きた。

酷い衝撃波により崩壊し、瓦礫の山と化した謁見の間から起き上が

る人物がいた。

それは、アクローマでもアズラエルでもない。

スキル・ポテンシャルを解いたジリオンただ一人だった。

「……んい？」

不思議そうにジリオンは一言だけ発する。

ジリオン自ら発した言葉だが、ジリオンはこの言葉の意味を知らない。

アクローマが最後に放った炎人魔法デトネイトの発動中、自らこと巻き込んだアクローマの悲鳴、崩壊する謁見の間の瓦解音が響いていた。

疑問に思わせた音はその最中に聞いた音だった。

「終わった？」

ラフな格好をした男性がジリオンへ近付く。

「まあ……な。とても彼らは強かった。自らの命を投げ捨てられるのだからな」

「勇敢だね、アクローマと法王は。そうでもない、人の上に立つことは出来ないのかな」

「そうだろうな、彼らの場合は。これからは、お前がお前の心に誓

ったように世界を変えるといい。自由はお前が説いてくれたようなものであるべきだ」

「でも、最近ではこうも思うんだ。今まで説いたことがR派の人たちに受け入れられないことは何故なのかとね。自由であることよりも、過去の高圧的なR一族の権利による支配が現在よりも善いのか……理解の出来ない程度である自らがまだまだと分かるよ。でもそれが信念を揺らがすことには決してならないけどね」

「……………」

ラフな格好の男性の前に下がるようにと言った感じでジリオンは手を差し出す。

彼らのいる地点から離れた場所に空間転移を扱って、エージが現れた。

アクローマがいなくなったせいか、結界が外れたらしい。

「あつ……………」

エージは二人を凝視したまま、その場から動かない。

しかし、戦闘態勢に入るところか闘気も纏わず、殺気も放とうとはしなかった。

「エージさん」

ラフな格好の男性がエージに声を掛ける。

「どうしたの、“タルワール”？ オレも殺したいの？ 周りを見て大体把握したけど、もうアクローマは殺したんだよね？」

「ああ、そうだ。オレが殺した」

ジリオンが答える。

「だが、お前は殺さない」

「どうして？」

「無抵抗の者を傷付けるようなことは決して戦いと呼ばない。まして、今のお前は指名手配者ですらない」

「人殺しが指名手配者じゃないって？ 君の言っていることはおかしいんじゃないのかな？」

「罪を償うべき対象となる者たちの家族がもうお前を記憶していない。人間だけを殺し続けていたことが幸いだったところだな」

「話が違う……オレと戦え！」

ジリオンの戦闘意志がないことを悟ったエージは焦り始める。

「拒否します」

次にタルワールが答える。

「どうやってかは知りませんがシナリオを見ましたね、エージさん

？ だとしたら尚更貴方の思い通りに出来ないし、させない。貴方は自由だ、そしてこの話はもうここで終わりです」

「ま、待て！ どうしてオレがシナリオを見たことも……まさか“タルワール”も……」

「気付かれましたか、貴方でこれで“四人目”になります。でも、それに気付かれたからといって変化は何もありませんよ」

そう言うってから、タルワールたちは空間転移を詠唱し消えた。

第三～第四六部までのキャラ設定など

第三十一～第四十六部に出てきた組織、キャラ、世界観、種族の細かな設定を載せていこうと思います。

ついでに作品内の時間経過ですが第四十六部終了時点で、第一部開始から約三年半の歳月が経過しています。

名前（年令、身長、種族、出身地、性格、特徴や価値観の順です）

R・ノール（年令21才、身長174cm、水人の女性。度重なる自らの身体の変化に違和感を覚えている。ノールは幾ら身体が強化されたとしても、その能力を敵となる相手を殺害するためには扱いたがらない。法王戦で、ノールはR・クアールに身体を取られることが非常に嫌であったが春川杏里を救うため覚醒し、その際の覚醒によつて祖先R・クアールに身体を転生により奪われ、現在は自らの意思表示すらすることが出来ない。何かの名前を決めることが苦手。春川杏里に何かを教わることは彼女にとって屈辱らしい）

春川杏里（年令20才、身長166cm、天使の男性。リターンにより時間が過去に戻されていたがルインが元に戻した。自らとR・ノールの一族の違い、自身がノールに接近した本当の理由からノールを諦めようとしていたが、互いの意志の確認によつてノールを本気で愛することを改めて決意した。最近では、杏里が男性の服を着ると違和感しか覚えない）

R・ミール（年令18才、身長168cm、天使の男性。現在はスロートの中将を務めている。姉のノールと杏里が付き合うことを黙認するようになった）

ジャステイン（年令17才、身長161cm、天使の女性。現在はスロートの少将を務めている。ジャステインは男装しているせい、杏里と同じく同性からでも異性だと見られる）

R・エール（年令16才、身長164cm、B86W57H81、人間の女性、出身は旧グラール帝国。普段は親しげで誰とでも友達になれる性格だが、実際は勝ち気で乱暴。分かりやすいくらい猫かぶり。スキル・ポテンシャルは“権利”、流体兵器。ゴスロリでお嬢様風、ゴシックを重視している服装を主に着ている。流体兵器はまだ彼女にとって未完成。ガイノイドとしての特性が、増幅器を持っており身体を強化している）

クロノ（年令24才、身長175cm、人間の男性。スキル・ポテンシャルは他人に悟られない能力。現在はスロートの議長、スロートの軍総帥、スロートの帝を兼任している。それ程権力がクロノに集中していても独裁を行わない。一先ずはR・ノールたちから資金を吸い上げれば問題が無いからである。膨大な勤務時間のせいで持病が再発し苦しんでいる。金稼ぎに関しては犯罪者並みにあくどい）

ルミナス（年令97才、身長171cm、聡明ではあるが軽い性格でもある。魔法剣の使い手。現在は光体化の討伐を成功させた功績で魔界の邪神となり、新たな魔界の統括者となった。R・ノールに脅迫され、今まで暮らしていた黒塗りの屋敷を奪われた。結局、支払うと言われていた二億の資金も完全にスルーされ、天使界の女帝アクローマに立て替えさせてもらうなど邪神の立場的に微妙なことをさせてしまったため、R・ノールのことはもう存在自体が嫌い。

R・ノールの言い残した言葉に極度に怯えている)

アクローマ(年令263才、身長174cm、天使の女帝。性格は天然でめんどくさがりで極度にマイペース。R・ノールの身近にいたR派の人物として唯一R・ノール、R・クアールをシナリオで見る事が出来た。R・ノールに情が移っていた為、R・クアールを転生させる段階で迷いが生じていた。R・クアールにはR・クアールがR一族の当主となってから現在まで心酔している。戦いのセンスに置いては中級の悪魔や天使程度だが、炎人魔法によつてその全てをカバーしている。常に平和を愛し続け、それでも現実主義を貫いた。謁見の間でのジリオン戦により死亡)

レイディアント(年令261才、身長176cm、天使の女性。聡明な大天使長だが以外と性悪で質が悪い。R・クアールを心酔しているアクローマとは違い、R派ではないためR一族のことをよく知らない。どちらかというクロノス派であるが、アクローマがクロノスを良く思っていないため余り関わりを持ちたくないのか天使界での業務以外組織的なことはしない)

テリー(年令21才、身長173cm、聖帝の女性、出身地は聖ミリアティア帝国。死んだと思っていたアーティが生きていたことを知り、逢いたがっている。聖帝としての素質が覚醒し始め、能力が格段に上がった。自身が聖帝としてR一族、桜沢一族らと実際このまま生活を共にすることが正しいのかということを考えるようになった)

リュウ(年令27才、身長180cm、竜賢族の青年。クロノスの諜報員であり、モンスターハンター、リバーズと二つに渡りスパイ活動をしている。最近ではバレていることに気付いたようで、自らベラベラと内容を話す。アーティが居なくなつたからといって、テ

リーのように悲しがってはいなかった)

ゲマ(年令不明、身長176cm、美形で頭脳明晰の非常に優秀な人物。現在では、その優れた能力をクロノに見込まれ、クロノの右腕とも称される程。水人アレルギーの体質らしいが、実際のところ不明)

ソル(年令自称200才、身長180cm、炎人の男性。自らの筋肉を見せびらかす筋骨隆々とした傭兵風の姿をした男性。仕事は大體サボるためにあるという自流を持っているためか、自らの仕事もそつなくこなしてくれるゲマといつても一緒に行動している。ゲマと接する時はまるで兄弟のようで、ゲマもそれと同じように対応する)

桜沢有紗(年令29才、身長175cm、天使の男性。リュウと同じくクロノスの諜報員、リュウと違い察する能力や行動力が高くR・ノールを挑発するようなことでも平気で行う。人に嘘を吐くことが得意で、よく人を騙している。一族の血筋、祖先のドグマ的なものは信じていないが、春川杏里や橘綾香を救うために一族存続を目指そうとしている。そのため、桜沢一族でありながらクロノスの幹部として活動を行なっている)

ルイン(年令261才、身長172cm、ネコ人の女性、出身地はネコ人のフラット共和国。総世界最強のレベル20万の女性。覚醒によって本来の力を現したが、それはルインの全力ではない。ルインが今回の覚醒で意識を保ち、自らを暴走させなかったのは過去の聖帝から授かった聖帝の血のお陰。R・ノールに対して喧嘩腰のような態度を見せるが、特に戦いを挑むというような訳ではない。無論寝首を掻くなど狡猾な行いをするつもりは無いが、何かのついでにR一族の一人や二人をさっさと消しておきたいと思っている)

橘綾香（年令27才、身長170cm、天使の女性、天然でマイペース。散弾銃などの銃火器を非常に扱い慣れている。桜沢綾香に身体を乗っ取られていたが、その時の記憶は全くない様子。ルインやエージの自らへの接し方が友人関係とは違うような気がして不思議に思っている。弟の春川杏里にはもつと男らしくしてもらいたいが無理であると大体認識している）

エージ（年令252才、身長131cm、イヌ人の男性、幼く控えめな性格。イヌ人という種族上の問題で見た目が幼いせいなのか子供に間違われる。ネコ人は嫌い、特にルイン。ルインを嫌っているように見えるが桜沢綾香に継ぐ理解者でもある。ルイン同様に戦闘を生業としていた人物だったが現在は戦いを行うことをしない。R・ノールに意味深なことをしたり、言われたりしたがエージはR・ノールのことがはつきり言えば嫌い。理由は当然R一族であるから）

アズラエル、法王（年令342才、身長171cm、出身は聖域フリード、冷静そのもので紳士的な性格。アズラエルは法王との名の通り、神を信仰する聖職者の筆頭。毎日飽きることなく神を崇めるなどを欠かさず行なっているが、そもそも神を全く信じていない。信仰をすることは日課であり趣味らしい。スキル・ポテンシャルはハンド。ハンドは対象となる者、物を自身の掌にビジョンとして現し、その現したビジョンを操作することにより、対象そのものにも操作の効果を表すことの出来る能力と自身の腕をビジョンによって現し、標的を圧縮する能力である。ジリオン戦により死亡）

相馬（年令不明、身長167cm、出身は不明、律儀な性格。エーデルを蘇生（直した）したドルマスター。生命までも自在に操れる程の職人。自らの身体さえも作り替えられるらしく、既に死を超越している。そのためか、相馬自身の本来の寿命を越えてから年令を数えていない。戦闘に関してはどうしても敗北主義的な考えしか思

い浮かべないせいで戦おうとはしない)

世界、能力などの設定

権利(全ての行動、動作、魔法、能力などの事象を標的に扱う権利を与える高等系ワード・スキルであり、スキル・ポテンシャル。権利を行使された者が全く知りえない能力や魔法でさえも、その者に扱わせることが可能。ただし、その権利という能力にも扱えないパターンがある。生物を殺すこと、権利を与えた生物が生涯を懸けても行えないこと、生物の復活、生物の具現化の四つが扱えない。権利は使用者自身、聖帝、同じ能力を有している者、支配という能力を有している者に対して扱うことが出来ず、無機物にも扱えない。聖帝、R一族、桜沢一族などの一子相伝系である最上級能力も標的に与えることは出来ない)

流体兵器(標的とした人、物を同一のように現すスキル・ポテンシャル。人物の場合は気配、殺気、闘気などを消すことが可能)

「クロノスの組織図」
タルワールという人物を筆頭に総世界全体を裏から間接的に支配する組織。

支配と書いてはいるのだが、自由と正義を目的としているため悪党や犯罪者などにとってのみ疎まれている。特に疎まれているのはジエノサイドという暗部。悪党や犯罪者でなければ、あった方が良い

組織。

ただし、タルワールは正義を目的として行動を取っている訳ではない。

タルワールにとってクロノスとはR一族と桜沢一族を一掃するための組織である。

一般的な人物、つまり能力者で空間転移を扱えない者たちにはクロノスの存在自体知られていない。

階級は総帥を最高位に次に四強、幹部、機関員の順。

クロノスの階級

総帥

タルワール

四強

シリオン、その他三名

幹部

桜沢有紗、リュウ、アクローマ、レイディアント、法王など数千名程。

機関員

約一千万程の数。

スロート貴族、領民

「またか……テイル將軍。貴方と私はいつまで経っても同じ考えには至らないようだ」

疲れたような声が図書館に響く。

声の主は、スロート初代帝クロノ。

彼は普段通り、城内図書館のフリースペースで大量の書籍が積み重ねた机にて仕事をしている。

「はあ、全くそのようすな、クロノ殿。庶民は結局庶民的思想を捨てきれず、貴族としての正しい思想を備えた我々の正しい指示を理解出来ない。それがよく分かる」

クロノと会話をしているのはスロート貴族たちの長とも言われるテイル將軍。

彼は普段通り、領民のためならぬ、貴族のための提案書をクロノへと提出している。

「私が庶民であり、庶民的な思想をしていることが気に入らないと？」

溜め息を吐いた後、クロノは返答を待つ。

「気に入りませんなあ、クロノ殿。貴方が柔軟な思想を持ち得ているのならば、我々の指示を理解出来るのですから」

「以前も言いましたが、私たちは手を取り合い共に領民たちの暮らしを支えることを行っていくべきなのです。間違っても領民たちに苦痛を強いることが目的ではない」

「その考えから間違っているというのですよ、クロノ殿。我々は領民たちを導くため様々なことを思案し、そして行っている。領民たちからは感謝され、さらに恩恵も受けなくてはならない。それが流儀ともいい、自然なことではないのだろうか？ クロノ殿、そろそろ考えを改めてはどうか？」

「それは出来ません。私たちの国家、スロートは過去の封建的制度を取っていた国家と異なる形体を取っているのです。領民主導の民主主義が私たちの根差す目的とされるべきだ」

「はあ、そうですか。このまま互いの意見をただ無闇に言い合ったとしても現段階では時間を浪費するだけで仕方がないようだとな納得せざるを得ないようでしょうな。私はただ庶民思想なぞが国家建設のためならぬと申しているだけなのに……残念でならない」

やれやれといった感じで仕方なさそうにテイルは語る。

「我々は帝であるクロノ殿を支えるため共に職務をしている。全てを我々に任せてみてはどうか、クロノ殿？」

「とても有り難い話ではありますが、私は二十代とまだまだ若い。若手の私が自らの仕事を投げ出すような出過ぎた真似など、とてもとても……」

「分かりました……」

溜め息を吐くと、テイルは会釈する。

「ところで……」

「はい？　どうかなされましたかな、クロノ殿？」

「以前からお聞きしたかったことが。テイル將軍は領民たちのことをどのようにお考えか？」

「領民は、我々の利益のために骨を折って働く。それでよろしい」「言い終えると、再び軽く会釈をし、テイルは図書館を出ていく。

「はあ……」

テイルが図書館を離れたのを見計らってから、クロノは深く溜め息を吐いた。

「典型的な貴族思想の持ち主だな、彼は。封建的制度が今まで当たり前だった過去の国家からスロートに属してくれている貴族だったのだから無理もないのは分かるが、まさかあのような考えを今でも持っているとは……」

まだまだ貴族たちとは手を取り合えるような関係でないとクロノは深く思い知る。

今までクロノは領民である自らを目の敵にし、それが基で意見の食い違いが発生しているのだと考えていた。

しかし、考えがそもそも違っていた。

彼らは領民を物程度としか見てはいない。

貴族ではない自らも領民たちと彼らにとっては同程度であり、自らの利益のためだけに扱おうとしている。

「お疲れの様子ですね、クロノ様」

同じく図書館にいたゲマが気遣いの言葉を掛ける。

「ああ、そうだね、ゲマ。オレは何だか息苦しいよ」

「長い間クロノ様は無理をなさっています。休まれたら如何でしょう?。」

「ありがとう、ゲマ。でも、大丈夫だよ。オレは休まなくても平気だから」

一方その頃、R・ノールの黒塗りの屋敷では…

「ここが、家?」

R・クアールは辺りを見渡しながら、屋敷のエントランス付近をうろつく。

ノールの記憶が残っているようだが、それは断片的であり屋敷のこ

とは残っていなかった。

「さあ？ アタシだってこんなところ来たことないし分かんない。アズラエルたちがここでアタシらに待っていて欲しいってことなんじゃないの、多分」

「そうだったら良いんだけど……」

「ところでさ……」

「なに？」

「そのシスターの子って誰？ クアールに背負われたまま、安らかに寝てるって感じだけど。アタシがいた修道院って女の子は……っというか女子はアタシだけなんだよね。誰なの、この子？」

「杏里くんっていう桜沢一族の男の子なの」

「男の……子？ 嘘だろ、見た目化粧もしてないのにアタシより綺麗とか……」

「そうだね、杏里くんは綺麗だよ。ところで、エールはどうして顔が白いの？」

「はあ？ アタシは化粧してんの。ゴスロリだよ、分かんない？ というかアタシが好きでやってんだから一々文句付けないでよ」

「文句は付けてないよ。ボクは水人で化粧が出来ないから……」

「……どうした？」

「そうだった、ボクは水人になったんだ。たった今思い出したよ」

「何言ってるんだか？ クアール、アンタ頭大丈夫か？ 自分がなんなのかくらい覚えてるよ。今の発言は若干ひくわ……て、あれ？ 人が姉貴みたいな魔力体になれるんだっけ？ 天使や魔族と違うかなれる訳ないんだけど……さっきから思ってたけど、やっぱりアンタ変だわ」

「なんだろう、グサツとくる一言だね……」

ふいにクアールは背負っている杏里を気にし出す。

「どっした？」

「もうすぐで、杏里くんは目覚めるよ。ボクがいるとややこしくなる。交替の時間だよ」

クアールはくらくたと立ちくらみが起きたようにふらつき、床にしゃがむ。

そのせいか、杏里がクアールから落ちた。

「……ん、ん？」

倒れていた杏里が衝撃で目を覚ます。

「お早う。なんだか、ボク寝てたみたい」

杏里は自らの目の前にいる人物に声を掛ける。

その人物は杏里の方を振り向き語った。

「そうみたいだね……ボクも寝てたようだよ。でも、なんだか……
凄く気分が悪いんだ」

その人物の声は正しくノールのものだった。

クアールから身体の所有権が、ノールから移ったらしい。

「立てるかいい？」

先に立ち上がった杏里はノールに優しく手を差し出す。

「ん、ありがとう」

笑みを見せ、ノールは立ち上がった。

「なあ、クアール。大丈夫か？ 今のって立ちくらみだよな？」

微妙に気遣っているのか、エールもノールに声を掛ける。

エールはまだクアールから、姉のノールに戻ったことを知らない。

その時、ノールは声がする方を向いて、動きを止めた。

「あ？」

不思議な反応見せるノールに対して、なんだよ？と言った感じの
声を出す。

「エール……なんだよね？」

「忘れたの？ アタシの名前はR・エールだよ。アンタと同じ一族じゃないの……」

そこまで話したエールをノールは思いっきり平手打ちで両頬を叩く。はた

「エール！ 今まで何処に行ってたのさ！ ボクは毎日毎日エールを心配してたんだからね！」

そう言った後、ノールはエールを抱き締める。

「エール、もう勝手に何処にも行かないでね……」

エールは自らを抱き締め泣いている人物が誰なのか分からなくなっていた。

ついさっきまで自らが会話していたのは昔の姉と似たような姿をしたクアールという人物だったはず。

しかし、今のクアールはまるで……

「姉貴……なのか？」

「当たり前でしょう！ “ノール”お姉さんの顔を忘れてしまったの！」

はつきりと自らを思い出してほしいのか、ノールは強くエールを抱き締める。

「うっん、覚えてるよ……辛い日や寂しい夜には毎回姉貴や兄貴のことを考えていた。アタシ、今スゴく嬉しいよ。姉貴にまた逢えて本当に嬉しいよ」

姉に抱かれ、エールは声を上げて泣いた。

「えと……アタシの恥ずかしいところを見せてしまったようだね」
数分経ってから落ち着いたエールはノールに語る。

「そうだね、エール。エールが泣いたところ、ボクは初めて見たよ」
相変わらずの笑顔でノールはエールの頭を撫でる。

「……こ、子供扱いすんなよ。恥ずかしいだろ」

「ねえねえ、ノール。その子はノールの妹さんなの？」

「そうだよ、杏里くん。ボクの綺麗で可愛く素直で優しい……」

「姉貴……そこはいつまで経っても相変わらずだな……」

呆れたような口調でエールは言う。

「姉貴はいつもアタシや兄貴を紹介する時、決まってべた褒め。しかもわざとじゃなくて本心から言ってるみたいで恥ずかしいんだよ」

な、それって。普通で良いよ、普通で」

そういうと、杏里に向き直る。

「アタシはR・エールだよ、可愛いお嬢さん。ところで、どうすればそんなに綺麗になれるの？ 姉貴みたいに貴方も素っぴんだよね？」

「えっ、ボクは……」

エールの可愛いお嬢さんという言葉に対して、杏里は自分が男性だと伝えたかった。

だが、エールの素直に興味有りげな視線が目に入り、自らの日頃から行っている肌の手入れなどを言おうか迷った。

「違うよ、エール。この子は男性。それとね、杏里くんはボクの恋人なの！」

「姉貴も誰かに恋をするようになれたんだな。いや、待てよ。その子はどう見ても女の子……だろ？ えっ、なに、アタシの人を見る目がないってこと？」

「そんなことないよ、杏里くんは見た目、骨格、仕草、声質が女性なだけだから。本当に男の子だよ、脱がせるかい？」

「スゲーよ、それって！ 天性の魅力って奴だろ！ しかも、その姿で女の子じゃねえってところがネックだな。風俗なら女でも男でもイケる……あ、いや、何でもないよ。こっちの話だから」

「ふーん？」

よく分かっているのか、ノールは微妙な返事をする。

「あ、あのさ、ノール、エールちゃん」

「なに？ アタシはエールで良いよ」

「そう？ ……じゃなかった。ボクがカッコいいってどうやって思ったってくれる？ ボクは女の子だとか、綺麗だとかなんて思われたくないんだ」

「欲張りだなー、綺麗なくせに全く本当に欲張りだ」

「ああ、そうだね。戯言を語る前に杏里の魅力をアタシによこせって感じ」

ノールもエールも似たような反応を見せる。

「女の子じゃない……ボクは女の子じゃないんだ……」

何かを諦めた様な沈んだ眼差しで地面の方を見つめながら、杏里はぶつぶつと語る。

その後、ノールと杏里はエールに屋敷内を案内した。

エールは昔のように小さな借家暮らしをこれからもしていくのだと感覚的に思っていたらしく、このような今までの自分たちにとってとても現実離れた豪華な屋敷が自らの家になるという事実にあまりピンとこないようだった。

「アタシさ、姉貴が苦勞してたこと知ってたんだ」

一通り屋敷内を案内し、再びエントランスへ戻ると、エールは語る。

「姉貴が貴族の屋敷でメイドやってた時、辛かったんだろ？ アタシらは孤児だし貧乏だしガキだったから……」

「懐かしいな。でも、エールは辛くなかったでしょ？」

優しそうな笑顔でノールは笑った。

「まあね、でもさ……」

「ん？」

「姉貴が辛くても頑張ってるから何もしなくていいっていう環境にいるのは、アタシ辛かった。アタシ、姉貴の足手まといなんかもうなりたくなかったんだ」

「だから、家出したの？」

「そう……」

「バカだね、エール。ボクはね、貴方が傍にいただけで仕事も辛くなんかなかったよ。勿論、貴方を足手まといだと思ったことなんて一度もないよ」

「……………」

エールはノールを見つめたまま、何も言わなかった。

また泣きそうになったのか、泣くのを堪えているようだった。

「アタシはね、姉貴が楽できるように沢山稼いでさ、こんなね、屋敷とか買ってプレゼントしようかと何度も考えていたんだ。でも、姉貴はいつの間にかこんな凄い屋敷に住めるようになってたんだな……」

「まあ、自分の力で建てたものじゃないしね」

ポーツとした様子でノールは語る。

「どういうこと？」

「魔界の邪神ルミナスっていう人から安く譲ってもらったの。あの人は不思議な人だよ、ボクのことを恐がってるんだから」

「姉貴が邪神と？ どういうこと？」

エールとの間に空白期間が有り過ぎると悟ったノールは数十分かけて色々と自らや杏里の今までのことを語った。

「ずっと話聞いてたけどさ、姉貴が強いなんて有り得ないだろ。姉貴は根性あるし頑張り屋なのは知ってるけど、争いごとに関しては一瞬にも知らないはずだよ？ 第一、アタシは姉貴が暴力振るってるのを見たことなんてない」

「今では平気だよ、慣れた」

「へえー、そう？ そんなに自慢話してくれんなら、姉貴にちよっかい出してみよっかな？」

不意に、ノールの前からエールは消える。

特に何事もなくノールは背後をチラツと振り向き、杏里はノールの背後を見た。

その場にエールが現れ、ノールの膝の裏辺りに軽く蹴りを加えた。

「あ、痛っ」

そう言った割りにノールは痛がる素振りも見せず、態勢も崩したわけではない。

「なんだよ、この程度も避けられないの？」

今の事実気付いていないエールはノールをまだ疑っている様子。

「避けなくても良いかなって思ってたね」

「そこまで言うんだったら戦いの動作をしてみてよ」

「そうかい？ じゃあ、杏里くん。空間転移よろしく」

杏里は頷くと空間転移を詠唱する。

すると、広陵とした大地が続く場所にノールたちは現れた。

「杏里ちゃんと腕試しする時はここって決めてるの。エールは見てる

だけで良いよね？」

「構わないよ」

「そっか。じゃあ、杏里くん。全力でかかってきな」

「うん、分かった」

優しく頬笑むと杏里は身体に覇気を宿らせる。

それと略同時に杏里の瞳の色が変わる。

杏里は最初から覚醒化した。

「なんだって……覚醒化した？ アンタ、姉貴を殺す気なのか！」

杏里の覚醒化による強い覇気を感じ取り、エールは強い殺気を杏里に向ける。

「わあ、エールもかなり強いみたいだね。でも、ボクも強いから安心して」

その一言の後、ノールも覚醒化する。

「姉貴、本当に強かったんだ……覚醒化するなんて……」

過去の記憶に残っているノールとはギャップが有り過ぎて、エールにはすぐに受け入れられなかった。

記憶

「姉貴、杏里は大丈夫なのか？」

ノール、杏里の部屋にある広々とした寝室で杏里は豪華なキングサイズのベッドに横になっている。

ついさっきの戦いに負けたのは杏里のようだった。

「大丈夫だよ。ボクたちはお互い殺す気でやって、お互いそれを回避するくらいでやってたから。いつもどちらかが気絶したら止めるって感じだし」

そう言いながら、ノールは杏里が眠るベッドに腰掛け、手に持っていたタオルを自らの水人化によって湿らせてから杏里の額に乗せる。

「そうなのか。なら問題は…」

「だけど、ボクが負けた時は何故か裸になっていて、よく分からないことをされていたことがあったね」

「姉貴、それ普通じゃない？」

「ウソ？ 完全に舐めてるようなことなの？」

「負けたなら尚更だよ。本当に杏里を好きなんだつたら、杏里に自分を任せるとかくらいしてやったら？ だからそんなさ、杏里は姉貴の意識がない時しか強気になれないんだよ」

「てか、ボクは素面の状態でそんなことを行わないといけないの？
あーもう考えただけで背筋が凍るんだけど。本当に泣けてくるよ」

「知らない、アタシに言われたって。第一、アタシに理由なんて聞かれても男の考えてることなんて分かんないよ。まっ、アタシは姉貴と違って今じゃ平気で出来るから慣れれば良いじゃんってしか言えないけどね。ところでさあ……」

何か微妙に言い辛いのか、エールはノールの顔色を窺う。

「杏里にどんな卑猥なことされたの？」

「えっ？ 何が？」

「えっ？」

暫し、二人の間に沈黙が流れた。

「あれ？ そんなこと言ったかな……」

「違ったの？」

「そうだ。エール、好きな人はいる？」

「はっ？ 姉貴と兄貴。あとアズラエル」

「違うよ、恋人がいるのかってこと。それともアズラエルって人が恋人？」

「全然。アズラエルはアタシをまともにしてくれた優しい人だよ。」

好きだけど、恋人じゃない」

「そう。今度からは好きな人を見付けて、その人だけにそういうこととはしてあげようね」

「姉貴は怒らないのか？」

「ん？」

「アタシが身体売ってたこと。アズラエルはアタシのこと、短絡的過ぎるとか言って怒ってたけど」

「エールが生きるために苦勞したことを怒るなんてボクには出来ないし、怒る理由もないよ」

「ふーん……そっか……」

「話は変わるけどさ」

「なに？」

「ミールのことに行かない？ ミールにもエールを会わせたいよ」

「あ、良いね、それ。アタシも兄貴に会いたい！」

「よし、そうと決まれば早速行こう！」

二人は寢室に杏里を残したまま、スロート城へ向かった。

数分後、二人はスロート城へ着く。

入り口の門には以前と同じ門番が相変わらずいたので、ノールが天使化し、エールを抱き抱えて城内に侵入した。

「確か、この辺がミールたちの自室だったんだよね」

以前住んでいた兵士宿舎までノールたちは来た。

リバースに所属せず、スロート軍中将、少将として過ごしていたミール、ジャステインはノールたちと違って現在も宿舎で暮らしている。

「おい、ミール。いるかい？」

三回程、ドアをノックして待つ。

「どうしたの、姉さん？」

眠そうな顔でミールがドアを開けた。

「眠そうだね。そんなことより、エールが帰ってきたんだよ！」

「エールが！」

一瞬で眠気が吹き飛んだらしくミールは部屋の外に出てくる。

「よっ、兄貴。元気してた？」

「元氣してたじゃないだろ！」

怒った様子で、づかづかとエールに迫る。

「なんだ、その訳の分からない格好！ 顔もなんか白っぽいし……
それで化粧のつもりか！ エール、お前今まで何してたんだよ！」

「さあね？ 苦労じゃないの？」

「バカ野郎！ “オレ”も姉さんもお前のこと、ずっと心配してたんだぞ！」

「ありがとう。アタシ、心配してもらって嬉しいよ」

「エール……変わってないね。昔と一緒にだよ」

ミールの表情に笑みが浮かぶ。

「お帰り、エール」

「あはっ、良いね、こーいうの。ただいま、兄貴！」

「どうしたの、ミール？ お客さん？」

外の様子が気になったのか、ジャスティンも部屋から出て来た。

「……ん？ なんで、兄貴の部屋から女が？」

相変わらず男装しているため、男の子に見えるジャスティンを一瞬

で女性だとエールは見抜いた。

「そりゃあ、“僕”の彼女だし。一緒に暮らしているよ」

「彼女じゃなくてフィアンセでしょう？ もうミールは僕のお婿さんに決定してるんだし」

「あれ、二人は結婚するの？ ジャスティン君の両親に会いに行かないとね」

「そうだね。その時はよろしくお願いします、ノールさん。ところで、そちらの女の子は？」

「この子はボクの妹のエール。凄く…」

「はいはい、姉貴そこまで」

嫌な予感がしたのか、エールはノールの話を遮る。

「アタシはR・エール。因みに貴方は誰なの？ それと兄貴と一体どういう理由で今の関係になったのか、経緯とかそういう諸々のことを知りたいところだね」

「ああそうだった、ゴメンね。僕の名前はジャスティン・ルシタニアだよ。ミールとは部屋が同室になったことが切っ掛けで今の関係になったんだよ」

「懐かしいね。ジャスティンが僕のことを好きになってくれて嬉しいよ」

「……てことは、アタシはまた一人ぼっちなのか？」

「ん？」

ノール、ミールは同じ反応をする。

「姉貴たちはもう別の誰かの物なんだろ。これからは一緒に暮らせないのか……」

「そうだね。お互い別々に暮らすのが当たり前になったし」

「だよな……」

悲しげな声でエールは囁いた。

それから少しの間、四人で会話をした。

しかし、ミールたちが日々の職務で疲れていたのは分かっていたので、ノールたちは早々に切り上げることにした。

ノールの屋敷へ戻ると恥ずかしそうにエールは語る。

「姉貴、一緒にお風呂入らないか？」

「どっしって？」

「久しぶりに家族らしいことがしてみたいっていうか」

「ああ、そういうことね。一緒に入ろっか」

楽しみに会話をしながら、二人はノールの自室まで戻る。

「あ、お帰り」

高級なソファーに腰掛けながら紅茶を飲んでいた杏里が反応する。

「なんかさ、ボクにはこの部屋での暮らしが慣れなさそうだよ。あんまり豪華なもの良いつてもものじゃないね」

「普通に慣れてるようにボクには見えるけど？」

「そうかな？」

「一緒にお風呂入る？」

「そうだね、入ろっか」

「お、おい。姉貴、それはアタシ困るんだけど」

「ああ、そっか。まあとにかく、エール。浴室はこっちだよ」

ノールはエールの手を引き、寝室へ入る。

寝室へ入ると、入り口以外にも扉がもう一つあり、その先が脱衣場、浴室だった。

「じゃあ、お風呂入ろっか？」

「姉貴、待ってくれ」

「どうしたの？」

「アタシ、実はお風呂に入りたくて姉貴をお風呂まで誘ったんじゃないんだ」

脱衣場まで来ると、微妙にそわそわしだしたエールはノールから視線を逸らす。

「見てほしいものがあったの」

エールはゴスロリの服装を脱ぎ始める。

その様子を普通に眺めていたノールは、あることに気付いた。

「水人の姉貴なら肌をさらせば、分かるだろ？ アタシの中に機械があるんだ」

ノールには感じられた。

エールの心臓や肺に位置する部分から、生物からは一切感じられないはずの電気的な波動を。

「アタシはさ、一度、死んだんだ。それで目覚めたらこうなった」
床の方を見つめたまま、エールは囁く。

「……姉貴はアタシの身体が変わってても、アタシを好きでいてく

れる?」

「今までと何も変わらないよ」

「そうか?」

顔を上げて反応する。

「あ、あとさ、姉貴に凄く聞きたいことがあるんだけど」

いそいそと服を着ながら、エールは話す。

「R・クアールって誰だ?」

「ああ、聞いたことがあるね。“お母さん”が昔、話してくれたよ。過去に名誉あることを行った人だって」

「お母さん……だって? アタシらは孤児じゃなかったのかよ?」

「ミールもエールも、まだ赤ちゃんって感じで全然子供だったから仕方ないよ。それに記憶として残っていたら余計辛いからね」

「どうして教えてくれなかったんだよ、アタシらが孤児じゃないって!」

「ボク自身が無意識のうちに忘れようとしたからだよ。既に両親の名前どころか存在さえも忘れていたのに、はつきり思い出させられた……ボクたちの両親はこの世界にある、現在はラミング帝国と名っている国家の王族だったの。名前はお父さんがグラール、お母さんがエアハートだよ。ところで……」

「なに……?」

「R・クアールって、どうしてエールが知ってるの?」

「覚えてないのか、姉貴? 姉貴は自分のことをR・クアールだと言ってたんだ」

「……言っていない、そんなこと」

「アタシが思うには姉貴、R・クアールに身体を乗っ取られてたんじゃないかって思うの」

「……………」

エールが言い終わると、ノールは無言になっていた。

そして、ノールは涙を流す。

「ボクはそんなこと覚えてないよ……アクローマの言ってた通り、本当にボクのは感覚は消えちゃうんだね……」

「姉貴……」

エールは今まで見たことがない程、深く落ち込んでいるノールに対して何も声を掛けてやれなかった。

二人が脱衣場から出ると、杏里が寝室にいた。

「お風呂、入らないの？ お風呂に入るって言ってたのにタオルを持っていかなかったから」

杏里の手元には四つ折りにされた白いバスタオル一つ。

「ああ、ゴメンね。アタシの気が変わったの。アタシはお風呂、入らない」

「そっか。あつ、そういえばノールがいるからエールもバスタオルって必要なかったかも」

「言われてみれば……ってことは覗きに来たのか？」

「ゴメンね、エールにはそういう興味がないの」

「うわっ、ストレート過ぎ。変に傷付いた」

「ところで、ノールどうしたの？ 気分が悪いの？」

「……悪いよ、酷く悪い。この前の話、覚えてる？ ボクがR・クアールになるってこと。実はさ、もうボクはR・クアールになつてたらしいよ」

「全然気付かなかった……」

「ボクも気付かなかった。いつ身体を盗られたのか、一切分からなかった」

暗い表情を浮かべたまま、ノールは続ける。

「ボクがこうして意識を保っているってことはさ、今のうちに別れの挨拶くらいしていた方が良いつてことかな？」

「ボクは……」

杏里が口を開こうとした時、寝室のドアが開く。

「聞いたわよ、今はR・クアールじゃないみたいね」

入ってきたのは何故かノリノリでテンションの高いルインだった。

「どっかの誰かさんみたいにスパイ活動をさせてもらったわ。貴方がR・クアールじゃなかったら、楽勝じゃないの。早速だけど、ぶっ飛ばさせてもらおうわ！」

両腕を広げ、ルインは構えの態勢に入る。

「わあっ！ 何でお前がいるんだよ！ ヤベーよ、姉貴！ アイツはマジで強えーよ！」

「知ってる、ルインは強いよ。でも仲間だから大丈夫」

強い殺気を放つルインを前にしても、ノールは動じない。

「仲間？ 貴方は私を前にして本気で言っているわけ？」

「ルインはリバーズメンバーであって、ボクらは仲間なはずだよ？ 戦う理由なんて存在しない」

「それはどつかしら?」

ルインに異変が起きる。

牙がすつと生え、両腕が獣のように変化した。

ルインの覚醒化だった。

「さあ、かかってくるなさい。いいえ……逃げても構わないわ。私は貴方のしたい通りに合わせてあげる」

「だったら、簡単。戦わない」

「逃げるってこと?」

「まさか。ルインを攻撃しない、ルインから逃げないってこと」

「……本当に、やりづらいわ。どうして戦わないのよ?」

「ルインは以前と変わった。以前はボクの姿を見た瞬間に殺しに来たよ。今みたいに言葉のやり取りもないうちに」

「そうね」

ルインはノールから目を離す。

「試したのよ、貴方を。只でさえ詰まってきたのに味方だと考えていた相手に殺されたくないのよね……記憶にはないでしょうけど、貴方の考えはR・クアールと同じよ。これなら戦えるはず」

「ボクがR・クアールだった時に何かあったの？ ルイン、教えてくれない？」

「何があつたかしらね？ 私も余り分からなかつたけど、R・クアールは味方だつたわ。だけど、敵はR一族。R・ノール、貴方は別よ。杏里が悲しむから」

「ありがと。変な心配をさせたね」

「そういう意味で言ったんじゃないの、分かりなさい。ところで、R・ノール。貴方はこれからどうするの？」

「ロイヤルを毎回付けるのは止めてほしいな。それはともかく、ボクは戦うことを止めるよ……違う、もうボクは何も……」

「諦めたのね」

溜め息混じりにルインは発する。

「周りを見なさい、そして貴方がいて当たり前だと無意識に思っている人を考えなさい。貴方が諦めてしまったら、とても悲しむわ」

「……………」

「あーあと、そこのゴスロリー！」

「ア、アタシ？」

かなり焦りながら、エールは答える。

「流体兵器、アンタの仕業でしょ？」

「そうだよ、悪いか！」

「悪い。アンタは私に手を出した。訳の分からない不意打ちで攻撃をし、私に土を付けた。これは許せません、万死に値します。この恨みは今ここで晴らさねば、私の心は済みません。そのために目の前にいる生意気なゴスロリという存在を討つ。それこそ唯一真実の私の願い」

ルインは表情一つ一切変えずに言い切る。

彼女は本心から話している様子。

「えっ、ちよっ、お前本気でアタシを殺すつもり？ 姉貴、なんとかしてくれよ」

内容が内容のせいか酷く落ち込んでいるノールの背後に隠れ、エー
ルは助けを求める。

「……エール、ルイン。静かにしてくれる？」

「エール？ そのゴスロリが？」

ルインは殺気を放つことを止める。

「ネーミングからしてR一族じゃないの……貴方と一緒にいるってことはもれなく姉妹ですってネタでしょ？ 私、つまんない」

ノールに愚痴を言ってからルインは部屋を出ていった。

「な、なんだよ、あのネコ人。あんな化物とよく仲間になれたな。人外だよ、あんなの。神話に出てくる連中だって勝てねえよ……」

「そう、エールには見えたの？ だけど、エール。ルインはようやく半分くらいの能力を出し始めたただだよ」

「あのオーラで……半分？ 本当に化物だな」

「ついでに、まだ総世界の年代的に若い存在だから仕方ないけどさ、ルインは後世の神話の仲間入りすると思うよ。ルインは今現在の総世界で一番強いからね」

「訳分かんないんですけど。アタシが何も知らない奴だったら悪魔だとか、邪悪な神だとかバカなことほざいてただろうね……姉貴はあのネコ人が怖くないのか？」

「全く。戦うことは、まず無いだろうから」

「あれ？ 昨日は戦うって言ってなかったっけ？」

寝室のキングサイズのベッドに腰掛けて三人のやり取りをただ見ていた杏里がようやく反応する。

「いつ？」

「昨日の夜だよ」

「ゴメンね、杏里くん。その日のことは思い出したくないの」

「そう？ だったら、ノール。そろそろ休もうよ。今、朝の九時だよ」

「寝てなかったの？ そうだ、ボクは身体を乗っ取られてて…」

「ノール、法王さんのところへ行ったこと覚えてないの？」

「……ああ、法王ね。いつ行ったっけ？」

「ノール……もう絶対に君をクアールさんにしないようボクも頑張るからね」

ノールの変化する前の記憶さえも無くなっていることを悟った杏里は心に誓った。

裏の顔

ノールたちが屋敷に帰ってから何事もなく日々が過ぎた。

また、ノールにR・クアール化などの異変が起こるようなこともなく、ただ平和な時が流れていた。

しかし、法王との戦いを境に別の変化があった。

リュウ、テリー、エージがいつまで経っても屋敷へ帰ってこないこと、そして桜沢有紗が屋敷からいなくなったことの二つである。

「暇だね」

特に何をすることもなく、暇なので買ってきた三人掛け仕様の長めのソファーに横たわりながらノールは独り言を囁く。

ノールは暇を持て余していた。

それを元々室内にある高級なソファーに腰掛けながら、ココアで一息ついている杏里が答えた。

「そうだね。クロノさんから全然連絡ないし、ずっと仕事がなくて暇だね。それよりさ、そのソファーだけど…」

「なに？」

「この屋敷に合わくない？　それだけ安物アウトレット品だよ、家具って」

「君は金に目が眩んで心が多少腐ってきたようだね。良いかい、商品という物は使えればそれでいいんだよ。分かるよね？」

仰向けの状態から少し身体を捻り、ノールは杏里の方を見つめた。

「えー、でもたまにはさ、ボクらも豪華な物を買ってこようよ。今ではお金も沢山あるし、ノールに宝石とか指輪とかプレゼントしたいもん」

「いらないよ、そんなの」

「どうして？　プレゼント、ノールは嬉しくないの？」

「そりゃ嬉しいよ。でもそれだったらボクは家事を手伝ってもらった方が宝石とかをもらうよりかは嬉しいな」

「ノールは欲が無いんだね」

「ボクは水人だし化粧とかが出来ないからね。着飾るとかの類には興味が無いんだと思うよ。でも、自分の理想としている姿を得られたからボディアートとかなんてどうでも良いけどね」

「ボディアート？」

「化粧とか刺青のこと」

「ノールが化粧とかするとどんな感じ？」

「他の人は……って言うか、水人以外の人は綺麗なキャンバスに絵具で絵を描くって感じだけど、水人の場合は水で完全に湿ったキャンバスに絵を描くって感じ。ボクらと似たような種族の炎人、雷人はどうなのか知らないけど。ああ、それとさ、テリーたちを探しに行かない？」

「ルインさんから受け取った手紙には心配しなくてもいいよ」と書いてあったよ」

「……暇だからだよ」

その時、屋敷の呼び鈴が鳴る。

屋敷内に独特なメロディが流れる中、ノールは速攻でソファーから立ち上がり自室を出ていった。

たったの数秒で三階からエントランスまで下りてきたノールはある光景を目にする。

折角、ノールが暇な状態を打開出来ると考え、彼女自身驚く程の速度で急いできたのに既に綾香が屋敷を訪れた人物の対応をしていたのだ。

「……………」

その光景を目にした時、ノールは声が出せなかった。

「あっ、ノールちゃん、丁度良かった」

エントランスまで来ていたノールに綾香が声を掛ける。

「……………」

「ゲマさんが貴方に話があるらしいの」

「そうなの？ 暇だし、応接間でお茶にしよう。男性が今誰もいないから話は絶対に盛り上がるはずだ！」

「そうもいかないらしいのよ、ゲマさんお仕事あるみたいだから。玄関での対応だけで良いらしいわ」

「ああ、そう」

エントランスの扉からノールは外へ出る。

「お久しぶりです、ノールさん」

ノールが外へ出ると、それに気付いたゲマが親しげに声を掛ける。

「どうしたの？ お茶飲んでかない？」

「いえ、お構いなく。私は大丈夫ですよ」

「良いんだよ、遠慮しなくても。暇だし」

「いえ、まだ仕事が……………」

「それは残念だね」

「本題に入りますが、是非ノールさんのお耳に入れたいことがありますまして…」

「なに？」

「実は再びテストで戦争が起きます」

「わあっ！ それは良いね！ 全員にビンタして一喝入れてきてあげよう！」

かなり乗り気のノールはテンションが上がった。

それに対して真剣な表情のゲマは言葉を続ける。

「ノールさん、貴方の平和を愛する心は分かりますが……貴方たちリバースに属する者は今回の戦争に参加しないで頂きたいのです」

「だから、戦いが始まる前に皆をビンタするんだよ」

「いいえ。だからこそ、参加しないで頂きたいのです」

「ゲマさんは戦争が起きた方が良くないなんて考えてんの？」

「勿論。我々の仕事ですから」

「戦うことは止めた方が良くよ。まず貴方からビンタするよ」

「暴力はいけません。貴方を牢に入れますよ？」

「やれるもんなら、やってみればいいよ。正しいことは正しいんだから」

「仕方ありませんね」

ゲマは落ち着き払った様子で何かを取り出す。

そして、ノールの腕を掴むとノールの腕に何かを取り付けた。

ノールの腕に取り付けたもの、それは手枷だった。

「牢へ、ご案内します」

「どづいつことなの……」

「このことはクロノ様からの命令でもあるので、申し訳ありません」

そう言いながら、ゲマは手枷をノールの両腕に取り付けた。

「あのクロノがそんなこと考えるととても思えないけど」

「貴方たちリバースが参戦されてはパワーバランスが根本から崩れてしまいます」

「それで皆を捕まえるって訳かい？」

「いえ、ノールさんだけですけど？」

「はあ？」

「ノールさん、牢に入りたいと仰ったじゃないですか」

「ちよつ……言っていないよ、そんなこと。これって強制的って訳じゃないの？ ボクたちの対処って？」

「強制的であるはずなど有り得ません。そもそも貴方たちが我々よりも強大であることを知っていますので、これはお願いです」

「どうして参戦しちゃいけないのさ」

「ノールさんたちが参戦すれば、こちら側に何も損害なく戦いを勝利出来るでしょう。ですが、それでは相手国は……」

「はいはい、分かったよ。参加しなければ良いんですよ」

「有難うございます。ノールさん」

ゲマは頬笑むと、その場を立ち去ろうとする。

「あの、ちよつと」

「何ですか？」

「これ」

手枷を付けられた両腕を差し出す。

「ノールさんは水人でしょう。それくらい簡単に外せるはずでは？」

「いや、これいらぬから持ち帰ってよ」

「では、有難うございます」

「ん？」

ノールが気付くと、既にゲマは手枷を片腕に持っていた。

「今さ、何したの？」

「ノールさんが私に手渡ししてくれた、だけですが？」

「怖い能力だね、なんて名前？」

「秘密ですよ」

再び頬笑むとゲマは立ち去った。

「あの人、本当は怖い人なんだね。クロノも近くにいると思って気を抜かなかつたのに……ボクには何されたか分からなかった」

ゲマが屋敷を訪れてから数日後、ノールたちの屋敷周辺には騒めき
が起きていた。

その徒ならぬ様子からノールが屋敷を出ると、何処の国の人物か分
からない数名の兵士がノール宅入り口に集まり、松明を手に今まさ
に屋敷へと火を付けようとしていた。

兵士たちからは強い殺気が放たれ尋常ではなかった。

「ちよっ、何やってんの！」

火を付けられる寸前でノールが兵士たちに叫ぶ。

反応した兵士はノールを確認し、口を開く。

「女か。お前には関係ないかもしれないけどな、オレたちがされたことをお前らにも受けてもらわないと許せないんだ」

話す兵士の目はとても冷たい。

ノールから視線を逸らすと再び屋敷に火を付けようとした。

「止めろって言うてるでしょ！」

ノールが止めようとした時、兵士たちに異変が起きた。

身体がグニャグニャっと変形し、血を吹き出しながら全員地面に倒れた。

「何やってんのよ、ノール」

いつの間にかノールの傍にいたルインが声を掛ける。

身体に返り血が付着している様子からルインが兵士たちを殺したらしい。

「今、こいつらが何をしようとしていたのか分かる？ 火を付けよ

うとしていたのよ？ どうしてさっさとぶっ殺さないのよ？」

「殺すなんて駄目だよ、何も解決しない」

「したわ。私がぶっ殺したからこそ、どっかのバカが屋敷に火を付けられなかった。これを解決したと言わずして何というの？」

「でも、そんな理由で…」

「バカ！」

ルインはノールの腹部に蹴りを加える。

衝撃でノールは地面に倒れ込んだ。

衝撃は酷かったが、ノールは腹部から痛みを感じなかった。

「貴方はあのクズ共から何にも感じなかったの？ 血の匂いが纏わり付いていたじゃない。それにね、あの松明だつてこの屋敷を焼き尽くすために今ここで付けましたって訳じゃないのよ。見なさい」

街の郊外の方をルインは指差す。

至るところから火の手が上がっている。

周囲を覆うように立ち昇る煙、殺戮される人々の叫びが普段の日常ではないことを表していた。

「あの様子から察すれば、さっきのクズ共は目に付いた連中に殺して火を付けてを繰り返していたようね、本当に羨ましい……ああ、

貴方と同じでとても許せないわ。そう、同じ考え」

「どうしてこんなことになってるの…」

「戦争よ、戦争。このクズ共の着用している鎧から何処ぞの国の兵士が攻撃を仕掛けたってことくらい貴方にも分かるでしょう。しかも市街地まで迫っているってことは明らかに奇襲攻撃。通常なら宣戦布告を行うのがマナーなのによっぽど恨みがあるのか、優位に立ちたかったのか、ただ単に野蛮なのかは知る気もないけど、ゲームのルールの反則ね」

「戦うよ、ルイン。あいつらを纏めて排除する」

「スロートから？ この世から？」

「価値観に任せるよ。ボクは誰も殺したりなんてしないけどね」

「よっしやあああ　　！」

突然、ルインは大声を上げた。

略同時に圧倒的な殺意を周囲に放ち始める。

その殺意を直に感じ取ったノールはルインを凝視していた。

今、自らの前にいる人物が本当にルインなのか信じられない程、ルインの変化は凄まじかった。

「私はね、私がいるのに自分たちだけで勝手に殺しを楽しむ連中が許せないのよ！ 貴方が殺すことを承認してくれなかったら発狂す

るところだったわ!」

「何言ってるの、誰も殺していいなんて…」

「“価値観”でしょう、分かっているわよ!」

その一言を発し、ルインは残像が残る程の速度で姿を消した。

ノールは今のルインを見て、酷く後悔した。

最近のルインの様子から人殺しをしなくなったと思い込んでしまっていたことを。

もしノールがヴィオラートの教会での出来事を記憶していたのなら、あの不用意な発言は決してしなかったはずである。

「ノールちゃん!」

急いだ様子で屋敷から綾香が出てくる。

その手には何故かショットガンが握られている。

「今の殺気はルインのよね!」

「ああ……うん、そうだよ。ボクはルインのこと、誤解して…」

「そうよね、止めに行かないと!」

ノール話を聞いていないらしく、適当な相槌をしながら綾香はショットガンに銃弾を込める。

「そのショットガンの弾込めって壊れているはずじゃなかったの？」

「ノールちゃん、隠れた方が良いわ！ 私が貴方を殺しかねないからね！」

弾込めを終えたショットガンを綾香は空へ向かって一発放つ。

その瞬間、綾香に異変が起きた。

ついさつきノールの傍で圧倒的な殺意を現したルインと殆ど互角といった覇気が綾香に収束した。

「これで二度目じゃないの！ 以前よりキツイお仕置きが必要みたいね！」

眼鏡の奥の瞳は狂気じみている。

見たことのない綾香の姿にノールは圧倒されていた。

「それじゃあ、準備OKね。行つくわよ、ルイン！」

綾香は空間転移を詠唱し、現したゲートをくぐり消えた。

「何あの二人、一緒にリバーズで仕事してたのに一度もあんな姿見たことないよ」

二人の圧倒される力を目の当たりにしたノールは自らも能力を発揮しようと思った。

しかし、現在自らのすることはそれではないと我に返ったのか、自らにしか出来ない水人能力を扱って火の手を和らげるべく雨を降らすことを始めた。

報復

他国兵士の襲撃から数時間の後、スロート市街地周辺は落ち着きを取り戻し始めていた。

ルイン、綾香両名の活躍によって、スロートの被害を最小限に抑えられたのは言うまでもなかった。

しかし、領民と兵士を含め数千の命がこの戦いの犠牲となってしまった。

調査を行わずして分かったことが、一つあった。

奇襲攻撃を仕掛けた側の兵士一団がラミング帝国の者だということだった。

スロートとラミングは同盟協定をステイの次に執り行った軍事大国である。

何故ならラミングは過去に魔神ルーク、ドREAMから国家としての危機を救ったからだ。

これを機に友好的関係となった両国だったが、スロートは完全に恩を仇で返された形となった。

「我が軍兵士諸君は一体何をしていたのだ？ 貴族並び所有の領民たちに多くの犠牲が出てしまったではないか」

スロート市外周辺の草原へと集結された兵士の集団を前に將軍ティルは語る。

「私も今回の件をとても遺憾に思っている。全くもって許し難いものだ。私も軍兵士諸君と同じく思いは一緒だ。直ちにラミングへ鉄槌を下すべきだと」

兵士一団からは歓声上がる。

以前の戦争とは異なり、一般領民までも闘いの犠牲とさせたラミング帝国を許せぬという思いからであることは間違いない。

「直ちに出兵する。兵士諸君、決して出遅れることのないように私へ続くように」

ティル將軍、並びにティルの側近である時雨、ミラディンを先頭にスロート兵士一団はラミングへと進む。

その場には過去にステイからスロートを救い、名を馳せた者は参加していない。

貴族であるティル自身が領民の台頭を許さなかったのだと参加した部隊の者たちは考えていた。

彼の貴族らしい発想が手を組むことを拒んだのだと。

「時雨。今回の戦、貴公の見方で勝算はいかほどか？」

先程と同じく、行軍する部隊最前列を歩いていたテイルは時雨に問う。

「無論勝利は我々の物となるでしょう、テイル將軍。今現在のラミング部隊は消耗しているはず。あのような強行軍を送ってくる程です。これは明らかに短期戦を……」

「貴公の考えはそうか。現在の兵総数は？」

「は、はい。我々の部隊は現在一万程。いずれは友軍も増援に向かってくるでしょうから……」

「いや、友軍などは来んよ。ましてや、来させるなどしない」

「友軍が来ないとは……何故ですか？」

「では貴公の考えに問う。何故、貴公は敵国ラミングの兵が少数だと考えたのか？」

「そう申されますとテイル將軍の考えは違つと？」

「その通りだ。我々は既に先手を取られてしまっているのだ、そのような甘い考えを持つべきではない。また、ラミングの強襲を私は短期戦を狙った行動だとも考えてはいない。あのような戦略の欠片もない攻撃、我々を誘き寄せるために行ったものである」

「成る程……さすがテイル將軍。私では考え付きませんでした」

「今はそのようなことなどよい。当然、我々はこのまま敵の策略にかかる訳にはいかん。現在の縦列の構えから早期に行動を取れるよう散開戦術を行う。少数の遊軍を作り、確固隊を整えるよう貴公らは部隊へ伝令を送れ」

テイルは時雨、ミラディンに指示するとラミング帝国周辺の地形図を見だした。

一方その頃、スロート市内にはテイルの率いる部隊数とは比較的小さい部隊が整えられていた。

その部隊は先行するテイルの軍団を支援する援軍として作られた訳ではない。

クロノの指示により、スロート周辺を警備するため纏められた部隊だった。

「クロノ、部隊配置は決まった。あとは配備するだけだ」

スロート周辺地図を片手にカイトは語る。

カイトは先のステイとの戦争後、過去の組織解体時からクロノの側近となりクロノを支えている。

以前のような反発をすることもなくなり、すっかり態度も丸くなっている様子。

「ああ、有難う、カイト。本来ならオレがやらないといけなかったんだけど、迷惑を掛けて済まなかった」

クロノは疲れたような声で話す。

表情にも覇気はなく元気がない。

「迷惑をつて……お前が軍総帥なんだ。お前の命を迷惑だなんて思う兵士がいるかよ？」

「そうだな、しっかりしないと」

「ところで、クロノ。テイル将軍が兵を率いラミングへと向かってしまったようだがどうする？ オレたちも向かうべきか？」

「やはり、テイル中将は既にラミングへと向かったのか。だとするならば、オレたちはラミングへ向かうべきじゃないよ」

「どうしてだ？ まだ間に合うかもしれないぜ？」

「追い付く、追い付かないの問題じゃないよ。一体ラミング兵が何処にいるかも、あとどれ程の兵力が残存しているかも分からない状況にスロート周辺から兵を数多く移動させる訳にはいかないからね。でも、こちらもやられているだけでは駄目だ。この場合は守りに徹し、再び市街への侵略を許さぬようにするべきだ」

「そうか、オレとしては久しぶりに実力を発揮出来るかと思ってただけだ。まっ、国を守るのが仕事だし文句はないけどな」

そういうと、カイトは兵士を配置させるためクロノから離れた。

「クロノ様」

続けて、クロノの右腕とも言えるゲマがクロノへ声を掛ける。

「どうした？ 早く持ち場へ付こうじゃないか」

「やはり、クロノ様ですね。貴方は自身の体調よりも国のことを考えてらっしゃる」

「うん？ どうしたんだ？」

「クロノ様はお休みなさって下さい。この状況にクロノ様の身に何かあったら大変です」

「この状況に休むだなんて…」

そこまでクロノは発した。

しかし、一度話すのを止める。

暫しの沈黙の後、クロノは口を開く。

「いや、そうだね、ゲマ。実はもう限界だった。不本意だけど今は休ませてもらうよ」

「ええ、それが良いでしょう。クロノ様、後は私たちにお任せ下さい」

「有難う。迷惑を掛けるね」

相変わらずの態度で礼を言い、クロノは城へ戻っていく。

「さて、ソル。私たちも仕事ですよ」

「始めるのか？」

ゲマとクロノの様子を、家の壁面に寄り掛かり腕組みをした格好で見ているソルは眠そうに語る。

「貴方が話を聞いているものだと思っていた私は駄目ですね」

ラミング兵の急襲から二日が経過した。

テイル率いるスロート軍はラミング軍の伏兵やゲリラ攻撃を予期し、敵の早期発見や各個撃破を優先させるため遊軍を複数作るなどして対応しようとしていたが、ラミング兵は誰一人として現れることが無かった。

これにより、スロート軍の兵士たちは言い知れぬ不安を抱き始めた。

既にラミング国境を越え、ラミング帝都まで半日程の距離となっても出くわさない敵。

本来、現在の互いの関係なら今すぐにも再び戦いが起きなくてはならない状態にあっても兵の姿は無い。

この状況に何かあると思わずにはいらなかった。

ただ、ラミング帝都へ向かわなくてはならない。

ラミングは侵略を行おうとし、同盟を破り、スロートの領民、貴族に対し危害を加えた。

スロート国家に住む者として許す訳にはいかなかった。

「ふむ、奇襲を仕掛けておいて以前伏兵無しか……何をしたいのか検討の付けようが無いな」

攻撃を受けず、遊軍を作る必要がなくなった感の出始めた部隊は再びテイルを先頭に行軍を続けていた。

「テイル將軍、如何なさいましょうか？」

「斥候を扱い、相手の出方を伺いたいところだ。全く困った相手だよ」

「我々に恐れ、帝都へ退却したのではないでしょうか？」

「そうではないと私は思うよ、時雨。出方は分からないとしても推測は出来るのだからな、そのような甘い判断に取付かれてはならんよ」

時間は経過し、テイル將軍率いるスロート軍はラミング帝都を見通せる付近まで辿り着いた。

この時、部隊の者たちはラミング帝都の異変に気付く。

ラミング帝都からは煙が上がり、明らかに何か様子がおかしかった。

「我々は二番手か。全く、ラミングは何処まで他国へ迷惑を掛ければ気が済むのだ。では、我々はこのまま国へ帰還するのかと問われるならば、それは無い。我が国家を侵略されたにも関わらず、他国がラミングを制圧するでは報復も出来ず、ここまでやって来た我々に手柄も無い。このようなことでは全く話にならんよ。我々も関係者であることを証明するため、ラミングへ向かうとする」

独り言のように話したテイルはその後、側近のミラディン、時雨へ指示を出し、部隊全体の隊列を丁度三角を作るような形に変更した。

その隊列の要素は守り。そもそも移動には向かない。

つまりは相手の出方を伺うものである。

すると、ラミング帝都方面に数名の兵がいるのをとても小さくだが確認出来た。

兵たちもスロート軍を確認したのか、ラミング帝都へと戻っていく。

「さて見たかな、彼らの行動を？ 今、戻っていった彼らの行動によって我々の行動が決まる。我々の陣形は行動速度も遅く、守りの態勢であることを見て取れる。もし、この陣形を見て、相手方が戦いの姿勢を取るのだとしたら煙り自体も策であったと言うことだ。

だが、彼ら同盟国家の者で我々の行動を見抜けぬ程の力量しかなかった場合のためスロートの旗印を掲げよ」

三角に形作られた陣形の中央を歩むテイルは時雨ら側近へ指示を出す。

数分が経過した。

ラミング帝都側からは編隊を組まれた無数の布陣を確認出来た。

「これはまず、私の読み通りの結果だろうね」

呆れたようにテイルは発する。

直後、ラミング帝都側から出てきた編隊はスロート軍側へ迫り始めた。

「あれが同盟国家、つまりは友軍であるならば、我が国家の旗印を確認するだけで我々に攻撃を仕掛けるなどあるはずが無い。となると……戦うことになるだろうね」

「采配如何なさいましょう?」

ミラデインがテイルに訊ねる。

「そうだな」

数秒程、テイルは口元付近に手を置き、ラミング軍を眺める。

「部隊数は……そうだな、見る限りでは大体六千程の数といったと

ころかな？ だとするならばだ、本隊とは別に部隊を二つ作り、それぞれを帝都へと向かわせる。しかし、実際は帝都直前で進行を止めるだろう。別動隊をラミング軍は止めなくてはならないからな。そうなれば、相手方は我々のように三つへ分かれなくてはならん。我々のように決められた行動を取るのではなく、略強制的にな」

「その役目、我々にお任せください」

「勿論、貴公らの役割だ。貴公らに部隊四千を与えよう。伏兵のようではなく、相手方が気付けるよう分かりやすく速やかに行動をするように」

「了解致しました、テイル將軍」

ミラディン、時雨両名は指示の通りを行つたため離れていく。

「テイル將軍」

「おお、君か、ジャスティン少将。今の采配は如何だったかな？」

テイルに声を掛けたのは女性将校としての服装を着用するジャスティンだった。

彼女はクロノの配下としてではなく、テイル大将の配下として活動している。

それはジャスティンがスキル・ポテンシャル、悟りを開花させていたからでもある。

つまり能力の高さからの引き抜きだった。

「悪くないよ、正確そのもの。勝ちパターンと言っても良いでしょう」

「そうか、それならば良かった」

ジャスティンの返答にテイルは幾分か機嫌が良い。

ジャスティンの言葉遣いなどを差し置いても、身分や応対に拘る典型的な貴族思想のテイルが良いのには理由があった。

「あの、私が思うにはですけど…」

「何故、最初から貴公の能力を扱わなかったかということかな？」

「はい。まあ、そんなところですよ」

「今でも私の読みの良さが正しいかを再確認して起きたかったのだ。采配まで君には任せられんよ」

「良いんですよ、將軍。私に気を遣わなくても」

「ああ、貴公にそのようなことなどは不要か。新戦力の貴公は私の配下としてもまだまだ若い。例え少将としての高い地位であっても私の配下の中には貴公を良く思っていない者もいるのだ」

「そういうのには慣れてますけど…」

「不服かね？」

「いえ……まあ、はい。いえ、私のことはいいです。作戦についてお聞きしたいことがあります」

「何かな、ジャスティン少将。正しいかは先程貴公も確認したであらう」

「はい、今作戦は私たちの勝利に終わるでしょう。けど、何か腑に落ちないというか……根拠はないのですけど」

「ふむ、そうか。いずれはこの戦いも終わる、それが我々の勝利でだと言っているのであれば、後に考察を行えば良からう。さて、それだけがジャスティン少将」

「何でしょうか？」

「女性である貴公は後列に下がると良い」

戦争と日常

数時間程戦いは続き、スロート軍優勢のまま、ラミング軍の完全降伏という形で戦いは終結した。

テイルの考えた通りにことが進み、紛れもなく圧倒的な勝利を収めた。

しかし、ティル自身には疑問が浮かんでいた。

ティル自身が戦っていて気付いたことだが、敵方の指揮系統が皆無に等しかった。

ラミングは軍事大国、幾らスロート軍が帝都に迫っていようと指揮系統の混乱など起きるはずは無い。

また戦っている場合は、ラミング周辺なのだ。

少々の戦力差に何処かに伏兵を潜ませているだろうとはティルも考えていたが、それすらも無かった。

ラミングは戦争を仕掛けてきた側。先の攻撃がしくじったとしても、策を講じていて然るべき。

今回のようにそうでなければ、ただ無意味である。

疑問は深まるばかりであった。

「さて、降伏したラミング兵士の武装解除は終わったな。これから

私はラミング帝王と謁見を申し付ける。貴公らは私と共に来るように」

「了解致しました、テイル將軍」

テイル率いるミラディン、時雨、ジャスティンの三人と複数の兵士がラミング帝都へ入る。

「テイル將軍、捕虜にした兵士から興味深い発言がありました」

「なにかな、それは？」

「我が軍がラミングを攻撃するのは、これで二度目だと申しております。また帝王は……」

「話はそれ位で良い。良いかな、ミラディンよ。彼らは我々と違うことがあるのだ。分かるな？」

「はい。我々と違うこと、それは領民と貴族だという身分差です」

「そうだ。我々のように人を率いる者は領民を適度にコントロールしなくてはならない。それが友好国家の侵略であるなら、妥当な条件を事前に行わなくてはならない。要は領民からの情報など役には立たんということだ、彼らはただ上層部の作られた情報を鵜呑みにするしか出来ぬのだからな」

「確かに……失礼致しました、テイル將軍」

「それはともかくとして何故我が国家なのか、私はそれが知りたい。我が国家は軍備を整え、過去とは比較にならぬ程の力を保有した。」

攻めるなら自らよりも力を保有していない国家を攻めるべきだ」

「クロノ元帥の申し付けにより、同盟国家となった国家には我が国家の武力保有数を全て伝えていきます。戦争により無駄な死を増やさぬようとの考えです。勿論、救世主ノールさんなど別戦力のことも伝えていきます」

自らも疑問に思っていたので同盟協議を執り行ったジャスティンが以前のことを語る。

「ノールさん……？ 救世主の名はそのような名だったのか。ノールといえば、メイドの中にも同じ名をした者が以前いたな。ノールのように言葉を伸ばした後、ルという発音の名を持つ者など私の人生では確か一度切り。何かしら関連性があるかもしれない……と冗談はそれ位にしておき、現段階では私がクロノ元帥に代わってラミングへ処理を行う。貴公らも私に従うように」

ラミング帝都、王宮へ辿り着いたテイルたちは応接間のような場所へ通された。

応接間にいたのは執政官と貴族風の男性二人、そして大臣クラスの男性二人。

四名共に表情は暗く疲弊しきり、覇気を感じられない。

「お待ちしておりました……」

協議を執り行えるよう縦長のテーブルへ招くため、大臣の一人が応接間入り口でテイルたちを出迎える。

その後、席に座り終えたテイルたちは協議へと移行する。

「さて早速だが今回の件、我々にとって甚だ許しがたいものだ。貴公らはどのようにして我々スロートへ…」

「それは我々にとってもだ」

テイルの話の途中、貴族風の男性が割り込む。

「何故、同盟国である我々に奇襲を行った？ 貴公らの国家は専守防衛を謳っていたではないか。まして同盟協議の際に軍備を、全戦力を公開させたあれは平和のためでは無かったのか？ 同盟国家での戦いなどをそもそも起こさぬよう互いの手の内や兵力を…」

「済まないが私には貴公の話が見えない。何を申している、貴公は？ そもそも貴公ら国家が我々スロートを侵略したことから始まった戦争ではないか。我々をこれ以上怒らせるのは止めたまえ」

「テイル將軍と言ったかな？ 貴公にはラミング帝都の現状を確認しなかったのではあるまいな？」

「ラミング帝都はあらゆる箇所が…」

「そうだ、貴公らの奇襲が原因だ。我々はこの侵略を許しがたく思
い…」

「許しがたいだと？ 我々を前によくもそのようなことが言えたものだな、貴公らでは話にもならない。早急に国王を呼んで参れ。さあ、早くするんだ！」

この時、初めてテイルは声を荒げた。

テイルにとって、それ以前にスロート側の者たちにとってもこのやり取りは不愉快極まりないものだった。

「国王は……既に崩御なされた。名誉ある戦死であった」

しかし、貴族風の男性の一言で様子は変わった。

「戦死？ 何故だ？」

「スロート側最初の侵略の際、市街戦の最中複数の兵士により……」

「何故、我が国家がラミングを攻めなくてはならんのだ」

「我々は覚えている。クロノ帝がスロート軍を引き連れ、ラミング帝都を侵略したことを」

「……酷いものだな」

テイルは呆れたように一言だけ語る。

「クロノ元帥は我が国家の帝だ。何故、この現状において貴公らはクロノ元帥を侮辱するのか。既に私は許容出来る範囲を越えてしまった。クロノ元帥のように平和的な解決を望んでいたがこれでは話にもならん。我々がこの場へ留まり、我が国家及び他の国家へ二度と侵略を行えぬよう肅正、監視が必要であると理解した」

「そんなことなど出来ぬよ」

「何故かな？」

「先程貴公らの戦った相手は我々部隊を含め、ロイゼン魔法国家、クラスム共和国の支援軍もいたのだ。双方の国家ともに我々の味方をしてくれている」

「なんだと、それは本当なのか？」

「貴公らにとっては残念なことだろう」

「そうか、だとすれば……」

ティルは席を立つ。

「ミラディン、時雨、ジャスティン。これより我が軍は撤退する」

「何故ですか、明らかに狂言のように聞き取れますけど」

撤退するという言葉にジャスティンは反応する。

「狂言であってもだ。既にラミングには戦える戦力は残っていないだろう、だからこそ我々は帰還する。敗戦国家の処遇などよりも、先程の言葉の信憑性を確認することが先だ。もしも、それが事実であるならば我々の現在状況は宜しくない」

「杏里くん、知ってた？」

自室の以前買ってきた安物アウトレットのソファーに横になりなが

ら、暇そつに雑誌を読んでいたノールが杏里に声を掛ける。

「知らないよ」

杏里は普通にそつ答える。

ノールとは違い、元々部屋にあつた高級ソファアに腰掛けながら、ノールのことを楽しそつに見ていた。

「まだ、何も言つてないけど」

「うん」

「ボクは話を聞いてほしいんだけど」

「ノールの話なら、ノールの話したい時にいつでも聞いてあげるよ」

相変わらず、ノールを見つめながら楽しそつな杏里。

正直、ノールはイラツとしていた。

「こつちみんな」

「ど、どうして?」

杏里は何か焦つた反応を見せる。

「杏里くん、知つてた? 今、スロートとラミングで戦争状態になつてゐるらしいよ」

「ラミングって言えば、ボクらがルークさん、ドREAMさんたちから救った国のことだよ。なんか、それを聞くとラミングの人たちって酷いなって思う」

「ルーク？ ドREAM？ 何のことですか？」

「ノール、少し落ち着こうね」

「でね、ボクらの家も火を付けられそうだったじゃん。あれもラミングの仕業なんだってさ。しかも、手当たり次第で無差別だったらしいよ」

「やり方が酷いね。嫌なイメージが付いたよ」

「でもさ、何でいきなりこんなことするんだろ？ 杏里くん、分かる？」

「それはね……」

微妙に考えているようなのが、杏里は腕を組む。

「やっぱり、そこにいてとても邪魔になったからじゃないのかな？」

国家間ていうのは大抵そういうことで友好関係裏切るらしいから

「ですよー」

雑誌を読みながら、適当にノールは答える。

「ノール、聞いている？」

「ですよ……は？　なんか言った？」

「ラミングに行ってみない？」

「やだ、疲れる」

「空間転移を詠唱すれば、あっという間だよ」

「やだ、服が汚れる」

「ノール、君は戦争を止めようとか思わないのかい？　ボくらみに能力が高ければ、戦わせないように圧力を掛けられるよ」

「ボくらは戦争に参加しないの。そーいう約束したし」

ノールは軽く寝返りを打つ。

「えっ？　誰と？」

「誰でも良いじゃん。それにボクは圧力とか支配するとかみたくないこと、嫌いだよ。次、そんなこと言ったら張り倒すよ」

「その後は何するの？」

「多分、マウント取ってから殴ったり……なのかな？」

「その後は？」

「エクスを詠唱して君に謝るよ。というか、何でこの話になったの？」

「酷いことを言っても、やっぱりノールは優しいんだなっ」ところを見たくて」

ついさっきのように楽しそうに杏里は語る。

そんな頬笑みながら語る杏里を目にし、正直ノールはさらにイラッとした。

その時、外の様子が騒がしくなって来始める。

「はい、杏里くん」

雑誌を読みながら、ノールは窓を指差す。

「はいはい」

困ったような笑みを浮かべながらソファから立ち上がると杏里は窓の外を眺めた。

「ノール、さっき言っていたことだけだよ」

「早よ言え」

「スロートの兵士さんたちが帰ってきたよ」

「やけに早いね、ボクらが戦争してた時は確か半年くらい係ったのに」

「そうだね、今回は一週間くらいで帰ってきたみたいだしね。見に

行こっか？」

「君の無駄な野次馬根性はどっから一々湧き出てくるのか知らないけど、近いから見に行つてあげるよ」

「ノール、空間転移ならラミング行くのと大体同じくらいの距離だよ」

「君は話の腰を折るのが上手だね。ほら、さっさと行くよ」

安物アウトレットのソファから立ち上がると窓の傍にいる杏里を退かし、そこから飛び降り、ノールは外へ出た。

杏里もそれに続いて飛び降りたが思いつきり転けた。

内心、何とも言えない気持ちで立ち上がるつとすると杏里はあることに気付く。

着地した地面は凍り付いており、転けるのは仕方がない状況になっていた。

「ふっ……」

ノールは鼻で笑い、杏里から目を逸らすとその場を離れる。

何とも言えない気持ちだったが、杏里もノールに続いた。

二人がスロート市街、スロート城へと続く通りまで来ると兵士たちの一団、彼らの帰りを待っていた街の住民らを見付けた。

「ノールさんたち」

兵士一団の中からノールたちへ呼び掛ける声がする。

「あれ、誰ですか？」

「僕だよ、ジャスティン。軍服を着ているからかな？ 分からなかつたかい？」

兵士一団からジャスティンがノールたちに向かってきた。

「多分、そうかも。なんか今日のジャスティン君は女性っぽい」

「そう……女性っぽいか。なんだか、そう言われると不思議な感じがするよ」

「ところでさ、戦争は終わったの？」

「それがだけど、色々とよく分からないことだらけでさ。まだまだ続くかもしれないんだよ」

「勝つたの？」

「そりゃ勝つたよ。僕一人でも勝てたかもってところだし」

「ジャスティン君、今の一言ってなんか怖いよ」

「僕より強いはずのノールさんが何を言っているんですか？」

「そういうんじゃないかって……あれ？ ミールはいないの？」

「僕とは別の部隊に配属されているから、今はスロート城だと思いますよ。じゃあ、僕は久しぶりにミールと会えるから色々ありますので…」

そういうとジャスティンは他の兵士と一緒にスロート城へと向かう。

「あれ、これってフラグかな？」

ボソツと杏里は何かを呟いた。

平和的解決

数日後、ロイゼン魔法国家からスロート城へ使者がやってきた。

ラミングでのことを協議により話し合いたいらしく、その協議の場がラミング帝都で行われるとのこと。

「ラミングで協議が行われるらしいけど、今回は戦争をするためにラミングへ行く訳じゃない。今回の戦争によって起きた互いの国家間の認識など、ズレを直すことが目的だ。ラミングの行いを公にし、そして彼らが侵略されたと思えば援軍を送ったロイゼン、クラスム国家との関係回復を行う。良いね、ミール大将？」

相変わらずの疲れた表情のまま、クロノはミールに指示を出す。

さり気無く、ミールの階級が中將から大将へと格上げされていたがそれはロイゼン、クラスム両国家の国王と謁見する際に失礼のない身分であるための一時的な格上げであった。

「分かりました、状況は厳しいでしょうが期待に応えられるよう努力します。それと、帝クロノ。ロイゼン、クラスムへの援助についてですがどれ程の提供を行えば宜しいでしょうか？」

彼ら二人はスロート城の図書館にいる。

スロート城には謁見を行う場所も、帝として相応しい部屋もある。

それでもクロノは急を要するような事態でも変わらず図書館で会議などを行っていた。

「本来スロート側はラミングからの侵略を受け、支援されるはずの側。けど、今回は誤解をされたまま戦いを行う結果になってしまったからね。同盟国のロイゼン、クラスム両国にも被害は出た訳だし……」

「つまり、何も払いたくないってことですね？」

「まーね。頑張ってきてくれ」

少し頬笑むような表情をクロノはする。

「ああ、そうだ、ミール大将。協議から戻ったら君には代理の帝として数日程務めてほしい。認めたくないけど、身体の調子がどうも優れないんだ」

「僕がですか？ 僕には向いていませんよ、人を率いるなんて。ゲマ中将かテイル大将辺りを代理の帝として下さい。彼らには人を率いる能力が備わっているはずですよ」

「めんどろうなんだね？」

「はい、当たり前ですよ」

「ミール大将はいつもストレートで良いね。それなら他を当たろうか」

翌日、ラミングで行われる協議のため、スロート城からミール大将を含めた数人の兵たちが派遣された。

道中特に変わったことは起きず、三日程でラミング帝都へ到着する。ラミング帝都はテイル將軍たちが制圧した時と変わらず酷い有様であり、復興の兆しは見えない。

「どうしてこんなことか…」

ラミング帝都の現状を目にし、内心そう思わずにミールはいられなかった。

数日程前、ジャスティンからはラミング帝都のことを聞いていたとはいえ、現状を目にするまでははっきりと理解出来なかった。

「……えと、ラミング城へはどうやって行くのだったかな？ 少尉、知らないかい？」

ミールはラミング帝都入口で、伴ってきた兵士（少尉）に聞く。

「はっ、ミール大将。あのラミング国国旗が掲げられた建物がラミング城だと思われませう」

「ん？ どれ？」

ミールが辺りを見渡すと分かりやすく、ラミング城が見えた。

というよりは、ラミング帝都ではラミング城が一番高い建物であったので一目見れば簡単に分かるはずだった。

「ああ、あれね」

さも初めて見つけたといった反応をし、ミールは他の兵士を率いてラミング城へと向かった。

「お待ちしておりました」

ラミング城入口へミールたちが着いたミールたちへ声を掛ける男性がいた

ミールにとって、その男性の声は聞き覚えがあるものだった。

「もしかして……ルウ君？」

ミールは男性に訊ねる。

「……はい、以前はお世話になりました」

固い表情のまま、ルウは答える。

以前、ミールと共に行動していた頃とルウは変わっていた。

変わった、という表現よりかは成長していたと言った方が良くもしれない。

身長はミール自身を追い越し、幼かった表情も兵士としてのものになっていた。

「ラミング国王は既に死去されております。ラミング国王に代わり、

ロイゼン魔法国家国王ジークハルト様が皆様をお待ちしております。
私が案内を致しますので皆様、私にお続き下さい」

振り返り、ルウはラミング城へ入っていく。

ミールたちもルウに続いて、ラミング城へ入る。

ルウの案内により通されたのは応接間であった。

「やあ、待っていたよ」

ルウが応接間の扉を開こうとすると、先に室内から扉が開く。

扉を開いたのは、眼鏡を掛けた少し痩せ形の若い男性。

格好は魔法使いのような法衣を纏っている。

「……………？」

何やら戸惑った感じでルウは対応していたが、ルウは応接間入口から離れた。

「さあ、どつぞ皆さん」

男性はミールたちを招き入れる。

「では、立ち話も何ですから席へ着きませう」

男性の一言で各々席に着く。

応接間内には、その男性以外いないようである。

「今回の件、何やら互いに多くの問題が発生しているようですね」

「はい、残念ながら」

男性の問い掛けにミールは応える。

「先に話しておかなければなりません、これは元々スロートが侵略されたことにより発生した戦争です」

「そうですね、我々ロイゼンの者たちはラミング帝都へ同盟国として救援に向かっただけです。戦いの要因が私たちには分からないのです。どのようなことがあったのか伝えてくれませんか？」

「はい。しかし、私は今回の戦争に参加でした。ですので、今回の戦争についての指揮を執っていたティール大将より資料を受け取っています」

「おや、私は貴方のことをティール將軍だと思っていた。そういえば、互いに自己紹介がまだでしたね」

「ああ、そういえば。私はスロート国家軍大将のミールです」

「その若さで大将とは貴方はとても優秀なのですね」

「優秀と言いますか…」

何と答えてよいのか分からず、ミールは口籠もる。

「配属当初からの將軍職。それも中将への飛び級出世、その後瞬く間に大将へ再びの出世は優秀でなければとても有り得ませんよ」

「……最初から知っていたのですね」

「ええ、まあ。情報は命と同一だと考えていますから。それと、申し送れましたが私の名はジークハルト。宜しく願います」

「貴方がロイゼン魔法国家国王のジークハルト様だったのですか」

「はい、この話はこれくらいにして本題に入りましょう。是非、私にもテイル將軍の資料を見せてもらいたい」

「ええ、では……」

ミールは兵士に指示を送る。

指示により兵士は持ち込んでいたケースを開け、資料を取出しミールへそれを渡した。

「では、これをどうぞ」

「ええ、拝見させてもらいます」

受け取った資料にジークハルトは目を通す。

数分程、ジークハルトは資料をペラペラと捲っていた。

「テイル將軍はとても優秀な方なのですね……たった一人で、しかも短期間にこの情報量は……」

興味深く慎重に資料に目を通すとジークハルトはあることを語る。

資料の量は膨大だった。

僅かな期間のたった一度だけの戦いであったが、將軍であり軍師としての戦略、戦術及び戦いの流れや結果、考察などを誤りのないようにと些細なことなども書き記されてあった。

「資料を読み、よく分かりました。同盟協議の際、貴方方が説明した総軍事保有数は正しかったようだ」

「はい、我々は……」

誤解はあったが少しでも改善が見えたと思い、ミールが声を発しようとした。

「この数ならば、十分に勝てます。もう、お話は結構です」

ジークハルトは席から立ち上がる。

「どういう……ことですか？」

「つまり戦ってしまえば我々が勝つと言うことだよ。ミール大将、貴方を今から捕虜として拘束する」

「そのようなことが出来ると思っているのですか？」

「勿論だとも。よもや、今でも私をジークハルト様だと思っているのではないだろうな？」

男性の言葉に一瞬、ミールはゾクツとするような寒気を感じた。

即座に座っていた椅子を弾き飛ばす程の勢いで立ち上がる。

しかし、遅かった。今まで自らのいた場所、及び兵士たち全てに氷の刃が降り注いだ。

刃の直撃を受け、次々と兵士が倒れる中、ミールは致命的なダメージを辛うじて避けていた。

一瞬の判断による行動、あの椅子からの立ち上がりにより動作を取りやすくなったのが幸이었다。

「クソ……何だよこれ……」

とにかく、ミールは他の全てを放棄して応接間から飛び出す。

事態は危機的な状況だった。

和平が目的なはずの場で、不意打ちを堂々と言うとはミール自身思い至らなかった。

自身の考えの甘さを悔いながらも一瞬で敵地となった城内を脱出するため、回廊の窓を体当たりで突き破って飛び降りる。

「……………」

足を広げ、猫のような動物に近い形で着地したミールはこれからの対応についてを思案する。

自らが戦いを仕掛けて良いのか、もし戦いを仕掛けた場合の対処はどうなるのか、このままジークハルトを倒してしまっても構わないのかなどを考えていた。

ミール自身、確実なまでに能力が進化していた。

ジークハルトにより奇襲を受け、窓から飛び降りるまで僅かに数秒間。たったそれ程の時間でこの環境についての処理を考え付き、行動を行えるようになっていた。

しかし、それは当然仕掛ける側も同じ。

「待て！」

間髪入れずにジークハルトもミールの傍へ着地する。

「ミール、さっさと気絶でもしてれば良かったものを！」

ジークハルトは右腕に氷の刃を出現させ、ミールを襲う。

…が、ジークハルトはミールが身構えたのを確認してから立ち止まる。

行動の意味をミールは無意識的に悟った時、ミールの身体に衝撃が走った。

「どうやら、貴方はジークハルト様であると勘違いしてしまったようです。その時点で既にこの展開になることは決まっています」

「よ」

ミールの背後にはルウが立っていた。

ルウの両手に発現された魔法剣はミールの喉元及び心臓付近を刺し貫いている。

「これくらいで死ぬような人でないとは知っています。致命傷は与えたので、さっさと失神して下さい」

ルウは瞬時に、わざと雑で強引な勢いを付け魔法剣を引き抜く。

魔法剣を引き抜くと、膝から体勢を崩しながら倒れ込もうとしているミールを蹴り倒し、駄目押しを決めた。

「今ので死んだんじゃないのか？」

自身をジークハルトと語っていた男性がルウに声を掛ける。

「まさか。ライルはこの程度でR一族が倒せると思っているの？
第一、こんなことするような奴はオレには許せないよ」

「そりゃ、そうだけどな」

男性はそう話ながら、徐々に身体が変化していく。

数秒で姿は完全に変わり、水人ライルになった。

水人であるライルは身体を自らの思った形に変化することが出来る。

その変化は自由自在であり、大抵のものには変化が可能。

同じ水人のノールはその能力に全く興味を示さなかったのか使っていない訳だが、それは力量を何処に発揮するかという点での要は個人差だった。

「とにかく運ぶぞ、ルウ」

「分かってるよ」

蹴り倒してから、ミールをまだ踏み付けているルウはミールから足を退かす。

その瞬間、ミールは一気に立ち上がった。

酷い出血からダメージは相当だが、ミールは諦める様子が無い。

このような状態に追い込まれようとも、ミールには勝機があった。

「……………」

ミールは口を動かしながら何かを発しようとする。

当然だが喉元を刺し貫かれ声など出るはずもない。

ただ、吐血しながら聞くに堪えない音が響くだけである。

「止めるぞ……………」

ライルの声に覇気は感じられない。

状況が状況だとはいえ、相手にしているのは仲間と誤っていた者。

酷く負傷した姿はライルの思考力を半減させていた。

「何やってんの、ライル！」

一瞬、出遅れたライルに代わり、ルウがミールを両手に持つ魔法剣で切り付ける。

直後、ライル、ルウ共に異変に気付く。

ルウの魔法剣がミールの身体を通り過ぎたのである。

それどころかルウはミールの身体自体を通り過ぎ、何もなかった場所を通過した。

「スゲーよ、これ。これが水人化なんだ」

ミールが感嘆の声を発する。

ルウに斬られる直前、ミールは確かに負傷していた。

それを無にさせたのはミールのスキル・ポテンシャル能力同化。

能力同化により水人であるライルの能力をそっくり自らへと上乗せし扱った。

能力同化は同じくスキル・ポテンシャル“権利”のミールオリジナル版、ワードスキルのため言葉を発する表現を行うのが重要だった。

「さつきはよくもやってくれたじゃん。僕にこんなことするってことは自分らが半死半生になっても仕方ないってことだよな？ なあ！」

ミールに強い覇気が宿る。

変化は覚醒化、眼の色も銀色に輝いている。

二度死なずに覚醒化の変化を行えるミールにはノール、エールとは違うR一族の特性があるらしい。

「もうくたばれよ、あとで生き返らせるから」

詠唱無しに突如ミールは神聖魔法プラネットを放つ。

プラネットの急激な光、それに比較するような規模の爆発、爆風が周囲一体を覆った。

ミールにはもう、スロートがどうかロイゼンがどうかは眼中にない。

完全にキレているため、自らの立場も相手への認識も範疇の外へ出てしまっている。

「スターマイン！」

天使化し、上空へ滑空後、ミールは神聖魔法スターマインを放つ。

魔法は過去に大天使長レイディアントが女帝アクローマへと放った魔法だが、威力も規模も大幅に異なってる。

ただ純粹に相手を仕留める、それだけを考えているミールには躊躇いがなく魔力の限界を常に放っていることにより起きた威力だった。

「……………おお？」

覚醒化し、魔力や集中力なども高く維持していたミールの身に変化が起きる。

何の前触れもなく天使化が溶けたのである。

上空からの落下とはいえ特に問題のなかったミールは地面に着地した。

「やり過ぎじゃないのか？」

一部半壊してしまったラミング城を背景に、身構えながらミールへライルが声を掛ける。

魔法障壁か何かを使って、ギリギリのところまで命を繋いだのか裂傷痕が多く目立つ身体でなんとか保っている。

「ミール、もうお前に勝ち目はない。諦めてくれ」

「何処が？ 優位な僕が何で諦めるのか理由を知りたいけど？」

「理由か、理由になる行動ならもう行った。これ以上はただ捕虜をいたぶる行動になる。協定違反だ」

「まだ、捕虜になった覚えはないよ」

「そうか」

ライルの話に反応し、すたすとミールにルウが近付く。

「ルウは間合いだ、ミール。どうした？」

何の苦もなく、ルウはミールの間合いに入る。

「ルウはお前の前にいるんだ。倒すべきじゃないのか？」

「どうしてなんだ……」

ルウが接近したことにより、ルウ自身もライル同様に裂傷痕が多く窺える。

それをミールは分かっている。

当然である、ミール自身が行った行為により今のダメージがあるのだから。

しかし、行動が出来ない。相手がそこまで接近したにもかかわらず行動自体が出来なかった。

スキル・ポテンシャルも水人能力も魔力自体も身体から感じられなかった。

「形勢逆転ですね、ミールさん。貴方は恐ろしい程に強かった。この方法でなければ、二対一でも勝つことが不可能だったでしょう」

「これは……」

「貴方はここで事故死したということにします。城の一部が崩れてしまっているのだから、丁度良い口実が出来ましたよ」

何も出来なくなってしまうたミールを前に、一切油断せず警戒心を溶かない。

「能力は扱えなくとも体術は扱えますよ、ミールさん。ただし、扱ったとしても貴方はオレに殺されることに変わりないですけどね」

ミールの首筋を掴むと、強い勢いで前面に引っ張り体勢を崩させ、一気に背後へ倒す。

マウントを取った状態からルウはミールへ魔法剣を繰り返し突き刺した。

それからは、ただ一方的だった。

隠し事

数日後、スロートにロイゼン魔法国家の使者が訪れる。

城内の図書館へと通された使者はクロノと謁見し、ミールら兵士一団がラミング城一部崩壊に巻き込まれ、死去したことを伝える。

使者が訪れたと知り、同じくクロノと共に図書館にいたテイル將軍ら数名の將軍職の者たちは困惑しながらも仕方なく受け入れるような反応を見せたがクロノ、ジャスティンには理解し難い内容だった。いや、ジャスティンにとっては許容し難い事実である。

高々、城の一部崩壊程度でミールが死ぬのかと深く考えていた。

「ジャスティン少将」

使者が帰国の途に着く際まで呆然としたままだったジャスティンにテイルが声を掛ける。

「遺体は数日後に運ばれるそうだ……この場合、私は何と言って良いのか分からん。ミール將軍は貴公にとって、我々以上に思い入れがあったようであるからな……」

軍人であるジャスティンに気を使ってか、はぐらかす表現を避けてテイルは話していたが、ジャスティンにその言葉は耳に入らなかった。

脳裏に浮かぶのは、ミールが敵の手にかかり身動きが取れなくなっ

ている様子。

しかし、即座にその考えも消えた。

あのような能力を持つ者を生かしておく訳が無い。

どうやってかは知らないが何者かにミールは殺されたのだと悟った。

そう考えるとジャスティンは悔しくて堪らなかった。

「帝クロノ、僕に暇を下さい」

「職務に戻りなさい、ジャスティン少将」

涙を流しながら訴えるジャスティンに一言だけさらっとクロノは答える。

「どうしてですか、僕がいなくても関係ないじゃないですか！」

「落ち着かないか、ジャスティン！」

クロノは少し声を荒げた。

「お前一人で何が出来るんだ。相手は、ミールを倒してのける程の実力者だぞ。お前で勝てる訳がないだろう」

「ああ……ちょっと良いかな、帝クロノ」

テイルがクロノに話し掛ける。

「私には色々と話が見えんのだが、何を言っているのかな？ それとだが、帝クロノとジャスティン少将、ミール大將はどのような関係なのかね？ そのような口調、公式の場で扱うべき発言ではない」

「これは失礼しました。少し熱くなってしまったようです。確かに部下の者に対しての口調ではなかった」

「そうであったか、それとも一つ。何故、ミール大將は何者かに殺害されたかのように言えるのかな？ 是非、私にも教えて頂きたい」

「彼は強いのですよ。その強さは我々の考えを遥かに凌駕する程のもんです」

「本当にそのような力を有しているならば、我々はミール大將を救世主さながら讃えているでしょうな。もし本当にそうであるなら今回のような戦争など起きなかった。いや、もしなどという非現実的な話は語るだけ無駄ではありませんがね」

当然、テイルはクロノの話信じない。

それどころか、軽く流し今はそれどころではないといった様子。

「ところで……ジャスティン少将。貴公は公務を数日行わなくて良い。気持ちの整理を付けるのだ」

ジャスティンたちスロート城の者たちがロイゼンの使者と謁見して

いる際、ノール宅で異変が起きていた。

「ねえ、何か感じない？」

ノールの自室へやってきて、出された紅茶を啜^{すす}っていたルインが唐突に語る。

「何が？」

相変わらず、安物アウトレットソファアへ横になって雑誌を読んでいるノールが反応する。

「貴方、随分と暇そうね。その状態で快適なら何も言わないけど」

「何のこと？」

反応したからといって、ノールの視線は相変わらず雑誌を向いている。

「んー、どうやら私に関係ないようだし、別にどうだって良いのだけど単なるお節介よ。今のうちから受けるダメージをなるべく少なくしていた方が貴方にとって良いかなと思ってね」

「で、何かあるの？ 暇だから教えてほしいな」

「暇じゃ無くなるわ、いずれね。それが今日なのか、明日なのかは知らないけど。もし、私の場合だったら躊躇わずに殺すでしょうね。向こうもどうせそのつもりだし」

クスクスと笑うルインはノールを羨ましげな目で見ている。

「本当に交替してほしいわ。でも貴方なら殺さないでしょうね、彼のことをよく知っているのだから」

「結局、言っている意味が分からないんだけど」

「いずれ、誰かと戦うという意味よ。絶対勝ちなさいよ、貴方」

「よく分からないけど勝つよ、暇だし」

「ふーん……そう。まっ、頑張んなさい」

「ノール。ボク、ちょっと用事があるから外出するね」

何やら楽しそうな感じで支度をしながら、杏里は話す。

先程、ルインがノールの部屋を訪れてから既に数時間が経過していた。

「おい、誘えよ」

「残念だけど、ノール。君はお留守番だよ」

楽しげに杏里は話す。

「何せ、男の子だけ……おっと、これ以上は言えないよ」

「つまり、男の子だけの飲み会とかがあるってことね。んで、男の子だとはつきり認められて本当に心底嬉しいというわけね」

「ノールは凄いね、何でもお見通しって感じだよ」

「うわっ、うぜっ。他に誰来んの？」

「リバーズで仕事をしていた時に仲良くなった同業者の人とかだよ。ノールも知っている人が沢山いるらしいよ」

「あれ？ それって集会じゃないのかな？ それなら話が分かるよ、殺す殺しますの世界に女性はまずいないだろうしね。同業者に女性なんて大抵ウチの面子くらいだよ」

「それってもしかして…」

「今、家にはリュウも有紗さんもエージ君もいないからじゃないのかな？ 以前は三人の誰かが集会に参加していたからね。今回は仕方なく人として中性的な君を選んだんじゃないの？ と言いつつも、見た目はまるつきり女の子だけだね」

「……やっぱさ、それはどう考えても違うよ、ノール。人はね、都合良く解釈したがるものなんだよ」

「そうだね、君の言ってる通りだよ」

眠そうにノールは語る。

一応、杏里は自らの語ったことを理解しているのかは別として楽しげな様子で出掛けていった。

その夜、ノールも何か違和感を覚えていた。

何やら自らに注意を向けられているような不思議な感覚。

それは殺意とは別物であって、ノールにも良く分からなかった。

「ふー……」

夕食も食べ終わり、特にすることもなく一人で安物アウトレットソファへ横になっていたノールは溜息を吐く。

変な違和感を感じているため、杏里に早く帰ってきてほしかった。

幾ら強くなっても、ノールも一人の普通な女の子であった。

「ノールさん」

ノックするような音が、窓ガラスから聞こえた。

ノールが窓を見ると以前見たことのある人影。

「ジーニアス君じゃん」

ソファから立ち上がるとノールは窓を開ける。

「久しぶり、ジーニアス君。でもどうしたの、こんな夜遅くにわざ

わざ窓から？ まあ、紅茶を飲んでいきなよ」

「あっ……はい」

そわそわしながら、ジーニアスは窓からノールの自室へ入る。

ノールは知らないが、ジーニアスの黒髪は元の綺麗な緑色をした艶のある髪に戻っていた。

「いやー、久しぶりだね。ジーニアス君、久しぶりに会ったのに身長伸びてくない？」

「そうなんですよ、僕にもどうしてだか分からないですけど」

「はいどうぞ、ジーニアス君」

そわそわしているジーニアスを高級ソファの方へ座らせ、ノール自らもテーブルを挟み対面式に設置された高級ソファに腰掛ける。

「ああ、紅茶がまだだったね。すぐ用意するよ」

キッチンの方へノールは歩きだす。

「ノールさんは最近何があったか知らないの？」

「何がー？」

キッチンから反応する。

「それよりも、僕がどうして今の時間帯とかに来たのかとか、どう

して窓から入ってきたのかとか疑問に思わないの？」

「何で？」

カップ二つとポットをプレートに乗せ、ノールはそれを持ってきた。

「はい、どうぞ」

ジーニアスの紅茶を先に煎れる。

「僕は今、ロイゼン魔法国家で暮らしているんです」

「あつ、ロイゼンって聞いたことがあるよ。確か、この世界にあるみたいだよね」

「そうです」

「あのさ、ジーニアス君。多分何か隠してるよね」

そわそわした感じがするジーニアスに山勘でノールは聞いた。

「ノールさんは誰かを殺したこと、ありますか？」

はっとした様子で、ノールはジーニアスの方を見る。

「……何回かはあるよ」

「人殺し、なんですネ」

「そつだよ、人殺し」

ノールの表情から、笑みは消えている。

「僕はこれから人を殺さないといけないんです。でも、僕は人を殺すことなんてしたことがないんです」

「人を殺すなんてしない方が良いでしょう。ボクが言えた口じゃないけど、これだけは言わせてもらおうよ」

「どうして、ノールさんは人殺しを？」

「大事な人が殺されそうだったからだよ……そんな理由で人を殺すのかって思うでしょ？ それでも殺すんだよ、ボクは。ボクのごときは狂人やサイコパスだと思ってても構わないよ、そう思われても仕方ないから」

「思いませんよ」

ジーニアスは語る。

「ノールさんは今でも後悔しているじゃないですか。何も感じていない訳じゃない。それよりか、その場合は正当防衛な気がします。明らかかな殺意を持って、ノールさんの大事な誰かを殺そうとした結果、ノールさんが相手を振り返り討ちました。それはノールさんのいる世界では当たり前なんじゃないのですか」

「ボクのいる世界？」

「殺す、そのようなことも行う生業。ノールさんの普段の仕事ですよ」

「ボクらは殺すような仕事は請け負わないよ。一人を除いてね」

「ミールさんはどうでした？」

「ミール？ 何で？」

「ミールさんもノールさんと同じ生業じゃ……？」

「ミールは城の仕事が忙しいからね、ボクらがやってるリバースの組織に関与しなかったんだよ」

「一度も、ですか？」

「そうだね、忙しいミールやジャスティン君を余計に疲れさせることはしたくなかったから」

「何か……話が違うな……」

何かをジーニアスは囁く。

「ある情報筋から、確かな情報を得たんです。でも内容が違う、全然」

「それ誰？」

「ノールさんは知らないと思いますよ、互いに会わない方が良い関係ですし」

「となると、ジェノサイドかクロノスの連中かな。その人たちは信

用出来ると思うよ、ボクみたいな犯罪者撲滅を目指しているからね」

「ノールさん、もう感付いているのではないですか？」

「何が？」

最初にジーニアスが来た時と、ノールの気配は違っていた。

それは些細な変化、通常気が付かぬ程。

ノールの内が臨戦態勢に移行したにもかかわらず、戦意も何も感じられない。

「僕がノールさんの敵だということをですよ」

「……そうなんだ」

既に把握したジーニアスにとって、ノールの躊躇しているような反応は余りにも白々しい。

「戦う以外ないの？」

「僕はノールさんを殺すつもりで来ました」

「止めよ、そういうの。不毛だよ」

「話を長引かせようとしているのは知ってます」

ジーニアスは空間転移を発動する。

即座に周囲はノールが今まで見たことのない森林地帯に変わった。

「ノールさん、エルフと戦ったことありますか？」

「無いよ、君が初めて」

「ていうことは目に物見せることが僕にも出来そうです」

急激にジーニアスは魔力を高めた。

たちまちにジーニアスの緑色の髪は黒髪へ変化する。

瞳の色も黒色に変化し、以前の状態よりも強力に変化を遂げている。

完全的なダークエルフ化をジーニアスは行った。

「凄い気迫だね、ジーニアス君。もし最初からその気迫でボクを倒しに来てたら、怖くて理由も分からなくてボクのことを君は簡単に倒せただろうね」

「冗談はよしてください」

「ジーニアス君、君もまだ迷っているんだね」

「当たり前ですよ。出会った当初、その後数ヶ月同じ組織で過ごした仲ですからノールさんが優しい人だと分かります。本当に情報が正しいのか……僕にも分からない」

「……………」

ノールは無言でジーニアスを見つめる。

「ノールさん、知ってましたか？ スロートへロイゼンの者がもうすぐ攻め込んできます」

「な、なんで？」

「分かっているくせに」

「分かるわけ無いじゃん！ スロートとラミンクの戦争だったのになんでロイゼンが割り込んでくるの！」

「戦争ですから、何かあるのか僕にも分かりませんよ。そして、何も分からないまま戦う。今の僕らの様にです」

決心が付いてしまったのか、ジーニアスは魔法を扱うためノールと距離を取る。

ノールは行動を確認し、即座に魔法障壁を厚く周囲に張り巡らす。

術者にとって距離を取る際が最も仕掛け易いタイミングだが、仕掛ける様子がノールにはなかった。

「バースト発動！」

右手をかざし、ノールを狙ってジーニアスは魔法を放つ。

バーストの光線がノール目がけ一直線に飛んできた時、ノールに違和感が生じた。

それは経験則的なものではつきりと言えないが、ただ当たってはならないと感じていた。

寸前、ノールは飛翔し、光線を躲す。

その光線がノールの真下を通過した時、ノールはあるものを見た。

厚く貼った魔法障壁が何の効力も効かせることなく、貫通されていた。

魔法障壁は術者の能力に比例するように強力が上がる。

現在のノールからすれば、自分自身の神聖魔法プラネット、ハルマゲドンクラスの高位魔法でようやくダメージを与えられる程である。

しかし、何の造作もなく貫通。不可思議だった。

「ほらほら、逃げなよノールさん」

右手をジーニアスは少しだけ動かす。

バーストによる光線はまるでノールを追うかのように再びノールへ向かう。

「ホーミングねえ……そう……」

宙から着地もままならぬ内に再び向かってきた光線にノールは特に動じない。

不可思議な能力、それに対して油断をしているなどまず有り得ない。

それを避ける必要が無かった。

「デイバイン」

着地と同時に神聖魔法デイバインを発動。

大きな輪っかのような光の輝きがジーニアスに向かう。

「……………！」

詠唱なしに放たれた強力な魔法にジーニアスは心底ゾツとした。

ノールは未だに自身を強化する変化を起こしていない。

その時点で、自らを越える強力さ。恐怖を覚えずにいられなかった。

「うわっ……………！」

恐れから、ジーニアスはバーストの操作を放棄し逃げ出す。

直後、ノールは現在立っている場所から数歩だけ歩き、バーストを躲す。

姿は明らかに余裕そのもの。

これでは最初から戦いにならなかった。

「不毛だよ、ジーニアス君。断言しても良い、君は絶対勝てないよ。どんなに怖くても、どんなに泣き喚いていても、どんなに身体をぐ

ちやぐちやにされても勝ちたい気持ちかなけりやもうどうにもならない。君は今の行動で、はっきりと自覚したはずだよ。ボクに恐怖したと」

「僕は勝ちます！」

「実体験を基にして語ったボクの話聞いていたかい？ 嘘や見栄や虚勢なんかで勝てる世界じゃないんだよ、ここはね。一応、教えてあげるけど、エルフとは戦ったことがなくてもジーニアス君みたいな感じの人とは戦ったことあるよ。強者との実戦経験はお姉さんの方が豊富だからね、ジーニアス君」

笑顔を見せるノールの口調は徐々に柔らかくなっていった。

わざわざ油断を見せるノールにジーニアスは仕掛けられない。

まだ、上辺の言葉ではなく実際に行動で命を懸けたことのないジーニアスはもう戦えなかった。戦えるはずがなかった。

「もう止めよ、ジーニアス君。ボクは許してあげるから」

「……………」

「だから、ちょっとおいでよ」

手招きしながら、ノールはジーニアスを呼ぶ。

「……………」

警戒をしながらジーニアスはノールに近付く。

「はい、捕まえた」

楽しみにノールはジーニアスを抱き締める。

「やっぱり、小さな子は可愛いなあ。こっやって小さな子を抱き締めるのなんて何年振りだろ」

「多分、一年半くらいですよ」

「どうして？」

「アーティさんと僕がポーカーしている時に今日みたいに抱き締められましたから。それと……ノールさん」

「なあに？」

その間、ノールはジーニアスの身体を抱き締めながら、さわさわと身体を触りまくったり、スンスンと髪の毛の匂いを嗅いでいた。

「背が130cmで低くて外見も幼そうに見えるけど、僕はもう17才です」

「それで良いんじゃないの。君みたいな……可愛い子は大好きだよ」
さり気無く、スルツとジーニアスのズボンに手を入れる。

反応したジーニアスは硬直し動かなくなった。

「やっぱり、そうだったんだね、ジーニアス君」

ニヤニヤしながらノールは言い、ズボンから手を出す。

「身長が伸びなかったり、女装が好きだったりと不思議な子だとは思っていたけど、ボクの考えた通りだよ」

「……………」

ジーニアスは泣きそうな眼でノールを見つめた。

「さてと良い情報を君から貰ったけど、ボクの口はそんなに堅くはないんだよ。そこで良い条件が…」

「うう……………」

顔に両手を置き、ジーニアスは泣きじゃくっていた。

「ええっ、ゴメンね、泣かせるつもりは無かったんだけど……………」

焦りながらもノールは謝る。

「君がボクと戦わないっていうなら、ボクは何も言わないよ。約束しようね」

「……………」

ぐすぐす泣きながら、ジーニアスは頷いた。

「ゴメンね、誰にも話さないから」

泣いているジーニアスの頭を撫でながらノールは再び謝罪の言葉を述べた。

「ところで君は相手に隙を見せ過ぎだよ、そろそろ寒くて眠くなっ
たんじゃないの？」

ノールの問い掛けが終わると同時にジーニアスはノールに全体重を
掛けるようにして倒れ込む。

「これで、ジーニアス君は仮死状態。警戒を逸らすために気になっ
ていたことを確かめてみたけど、こうすれば意外と簡単に水人能力
が効くみたいだね。そういや、ロイゼンの連中が攻め込んでくるっ
ていう話は本当なのかな？ もし本当ならクロノに伝えないと……」

「なーんかさ、面白いことが起こりそうなのよね」

かなり楽しそうな声で、ルインは自室にいる綾香に語る。

ルインと綾香はノール宅に来てから、ずっと同室である。

ルインは綾香に何らかの深い感情を抱いているらしいが、綾香は特
に何とも思っていない。

「お仕置きするわよ」

デスクのパソコンをいじりながら、綾香は答える。

「綾香、私はスロートを護るのよ、救世主さながらにね。これはね、綾香。とても名誉あることなの。また私はラミングからのように、この国スロートを命を懸けて護りたいのよ」

「いつも口だけね、貴方つて。貴方がしたいのはどう見積もっても殺人。どの辺に名誉があるっていうのよ？ シリアルキラーは黙って家にいなさい」

「分かったわ、綾香……」

「分かれば、それで良いのよ。あと、先に言っておくけど市街戦になった場合は別。貴方の好き勝手に殺れば良いわ、フォートのように故郷が壊されたら嫌だしね」

「フォートつて綾香の故郷よね……つてことは、R・ノールの故郷が壊されないようにしろつてことね」

「ノールちゃんの故郷は旧グラール帝国よ、今のラミング帝国」

「ラミング帝国をボッコボコにしてやったら泣くかしら、あの娘？」

「私が思うには生き死にかかった、貴方の生涯で一番苦戦する戦いが起きると思うわ」

「楽しそうね、それ。私が今までに苦戦したことは二度だけだったから、その展開は待ち遠しいわ」

「止めなさい、喧嘩したら私が許さない」

「私という者が苦戦した相手を知りたくないの？」

「興味が無いわね、全然。喧嘩することって」

「そう。なんか、つまらないな……」

「貴方ってさ……」

何かを言いたげな様子で綾香は溜息を吐く。

「貴方って戦うこと以外に興味があることって何かないの？ パソコンでも料理でも色々あるでしょ？」

「私は純粋な総世界屈指のファイターよ。五体を磨くことを優先しなくてはならないわ」

「一つのことには熱心になれるって良いことね。でも、スロートにいる間はもう戦いのことは忘れなさい」

「イヤよ」

「しなさい。貴方には命令しないと行っていただけ、あれは冗談。今から命令するわ、戦いのことは忘れなさい」

「やだ！ どうして私が……」

「だったら、もう……貴方と一緒に居たくない」

「止めます」

床に額を付ける程に、ルインは深々と土下座をした。

不信任感

スロートから離れること、数十キロの地点。

ロイゼン、ラミング、クラスムの混成軍数万が進撃を続けていた。

この三国は今回の平和的を装った使者を送ってからの奇襲を計ろうとしている。

協議を行い、その後使者を送り、ラミングでの事実を伝える行動は全て今回の戦いを秘密裏に行うため。

何がなんでも、この三国はスロートに先手を取る必要があった。

相手は救世主ノールを抱える強力な国家だと把握していたからだ。

「今回の戦いは、ミール以上に苦戦を強いられるだろう。ルウ、ソルフア、死ぬ覚悟で戦うんだ」

混成軍を先行し、スロートに辿り着いていたライルたち三人。

ライルは訊ねる必要の無いことを語る。

「愚問ね、とでも語れば良いのかしら？」

ニコニコしながらライルの言葉にネコ人のソルフアは反応する。

小柄で華奢な戦闘向けにはとても見えぬ体軀を彼女はしている。

しかし、温厚で優しさを具現化したかのようなネコ人でありながら、哀しいかなルインさながらに戦闘狂。

外見など、勝手に勘違いする雑魚をなぶり殺しにするだけの見せ掛けだった。

だが、ソルファ自身はそれを利点と捉えていない。

「そうだな、愚問だった。この場にいる、その点を考えれば当たり前か……どうやら敵はオレたちの行動や混成軍に気付いていないようだ」

「そうは思えないけど。ライル、彼らを甘く見過ぎではないの？ さつさとノールのところに行きましょう。ジーニアスとの連絡が取れなくなっているのだから」

「よっこいしょう……」

自身が普段いつも使っている安物アウトレットソファアにジーニアスを横たわらせると、ノールはハツとした表情をする。

「デ、デジャビュった。前、こんな夢見たことある……正夢がこんな内容って一体……」

ノールは心底がっかりしていた。

よっこい（ryと自らが言う夢を見たこと、自身が実際に言っ

まったこと両方にある。

「は、気分が悪い。さっさと杏里くん帰ってこないかな」

ソファーに寝ているジーニアスにタオルケットを掛けながら、独り言を語る。

「暇だし、ジーニアス君に添い寝してよっ」と

先程のノールが行った水人の体温変化により、ジーニアスは仮死状態のまま。

水人は水の状態変化を自由自在に操れるため、自身の温度も自在に操れる。

実際のところ、その当たり前が一般的に思えるが実はそれこそ高度な水人の証拠。

通常、水人の行う状態変化は全て“常温”。氷や水蒸気でありながら、温度は水と同意する。

その矛盾を打ち破り、常温以外にセットしたことによって、ノールはジーニアスを仮死状態に出来た。

「……あっ、違う違う、添い寝してる場合じゃないって。ロイゼンの連中が来るから、クロノに教えないと」

鼻歌を歌いながら支度をし、ノールはエントランスへと向かった。

数分後、ノールがエントランスまで来た時、屋敷の扉が外側から勢

い良く打ち破られた。

「あつ……ノール……」

ノールと目が合ったライルは無意識の内にそう発していた。

「な、なにをしてんだー！」

怒りに任せ、ノールは光体化する。

背面に八翼を出現させ、プラズマのようなオーラを纏いながらノールはライルに体当たりを加える。

屋敷外へ激しく弾き飛ばされたライルは即座に立ち上がり体勢を立て直した。

「ライル！」

猛烈な勢いで弾き出されたライルに、ルウが叫ぶ。

「戦え！ 目を逸らすな！」

体勢を立て直した後、何かをライルは詠唱した。

詠唱に反応するようにルウ、ソルファはノールに攻撃を仕掛ける。

一瞬でルウは魔法剣を、ソルファは腰に付けた鞘から抜刀し、斬り掛かる。

「はい、ストップ」

両者の剣はノールには当たらなかった。

まして、ノールが止めた訳でもない。

「この娘は貴方たちたったの三人で、どうこう出来得るという相手ではないわ。今は扉を壊してしまったことを誠意を込めて謝りなさい」

ニコニコしながら綾香が二人の剣を素手で受け止めている。

どこからどう見ても綾香の腕が切り落とされていなくもおかしいはずの剣の角度だった。

「ノールちゃん、貴方も許してあげるよね？」

「綾香さんがそういうなら許してあげなくもないけど…」

明らかに不服な様子で、ノールは光体化を解く。

「勝手なことを言うな！」

ライルの怒声が響く。

「お前らはもう能力を扱えない！ 投降しろ！」

「その考えが甘いつて言ってるんだよ、ライル！」

ライルの何らかの能力発動により、好機と取ったルウは綾香に再び攻撃を仕掛けた。

先程とは違い、綾香は攻撃を受け止めず躲した。

しかし、右腕付近を数ミリ斬られ、着ていた白衣の袖に赤い血痕が滲む。

「何かしら今のつて……不思議ね……」

「不思議でしょう？ 能力が扱えないということって。ノールさん、綾香さんも結局のところ普通の女性なんだよ。だから、オレたちには勝てない」

「ちょっと良いかしら？」

「どうしたの、戦いに関係ないことだったら斬るよ？」

「私が怪我をしたから、彼女が怒ってしまったらしいのよね。早く逃げるべきよ、貴方たち」

「彼女つて……」

ルウたちはノールの方を見る。

「ん？ 話は終わった？ 終わったなら、ボクはクロノのところにいくけど」

「はったりだったの？」

「いえ、私はノールちゃんのことを言った覚えはないわ。ノールちゃん、面倒なことになりそうだからクロノさんのところに行きなさい」

「おk」

身体を水蒸気化出来なかったので、ノールは走ってスロート城へ向かう。

「ノール！」

ルウ自身は驚きを隠せなかった。

突然能力が扱えなくなり、相手となる自分たちがいる状況にもかかわらず、何ら普段と変わらない様子で走り出したノールに対して。

この能力を封じる戦い方で、全くの無反応は初めてだった。

能力の扱えないノールと、ルウとの距離はさほど離れていない。

考えるよりも先にルウは走り出していた。

だが、その瞬間、何か強い力によって後方へ弾き飛ばされた。

「……………何だ？」

呆然とした様子で、ルウは立ち上がる。

「ねえ、聞いてほしいのよ。私は今から三人を殺さないといけないの。三人の内、二人は知った仲だから死に方は彼らにお任せしたいの。で、その死に方だけ…」

ルウには即座に何が自らの身に起きたのか分かった。

目の前にいたのは、ルイン。

彼女は、ルウたちと視線を合わさず、まるで独り言を語るかのよう
にルウたちを別の誰かに置き換える語り口をしている。

「彼らで自由に決めてくれないかしら？ 特に要望が無いんだっ
たら私がね…」

「うあああああ！」

魔法剣を振りかざし、ルウはルインに迫る。

当然、魔法剣は視線をルウに向けていないルインに当たった。

「私が、まだしゃべっているだろうか…」

悪鬼のような笑みをルインは表情に浮かべる。

ルインに魔法剣は当たっている。

しかし、斬れなかった。ライルの何らかの能力によってルイン自身
も能力全てを封じられているはずである。

「ルウ、勇気を出したのね。若いのに命を懸ける、相当な勇気を」
ルインはルウの魔法剣を振り払うと、ルウの腹部に他者では目で追
えない程の速度でボディーブローを放つ。

破裂音、粉碎音とも取れる不快な音とともにルウは地面に崩れ落ち

た。

尋常ならぬ吐血をし、目や耳から流血している。

既にルウは絶命していた。

「ルウ！」

ルウの死にライルは激昂し、ライルもルインに迫ろうとする。

「ライル。ちょっと、待ちなさい」

不意に、ライルは右肩を掴まれた。

ライルの背後からはルインの音が響く。

「敵前逃亡は止めてほしいわね……興が醒めること甚だしいわ」

「な、なぜ……」

「何故、ルインが背後にいる……みたいなことを言いたいんですけど、うけど止めておきなさい。私は雑魚の見苦しい言い訳は聞きたくないの、貴方にも分かるでしょう？ それとさっきの話だけど、どうやって死にたい？ 私は、こう見えても約束を守る方なの」

「ふざけるなよ……ルウを殺しといて！」

「ふざけていないでしょう。真面目にやってんの、こっちは。殺し方を吟味した結果、ルウを軽くボディブローで葬ってやったんじゃない……て、ああ、そういうこと。貴方たちの決断力が皆無だっ

だから私自身が選んでやったの。別の方法を浮かんでいたならゴメンなさいね。ところで……貴方はもう私の間合いにいるのよね」

言い終わると、ルインは先程の言葉に反応し逃げようとするライルを片腕……いや、偶然にもまだ肩に掛かっていた数本の指の力だけでライルを背後に押し倒した。

勢いは強烈、頭から地面に叩き付けられたライルは動きを失う。

「脳震盪を起こしちゃったかあゝ、つまらないな」

仰向けで倒れているライルの胸元にルインは拳を付ける。

その後、ルインは一気に下段突きを決める。

心臓付近を射ぬかれたライルは身動きを見せない。

「これで、二人目」

何となく、何か凄いことをやりきったような表情でルインは頬笑む。

表情だけを見れば“天使”のような女性だが、やっている行動は残酷。

殺した後に天使のような頬笑みを浮かべる姿は狂っていた。

「あとは……」

その表情のまま、ルインはソルファを眺める。

ソルファは剣を握ったまま、動かない。

戦い死ぬ、そう決意をしたソルファだったが戦いを挑むことが出来ない。

「よく見たら、貴方は私と同じネコ人じゃないの。可哀相に……怖いのね。貴方、震えているわ」

恐怖に震えるソルファにルインは近付く。

「よしよし、もう震えなくても良いわ。本当に怖かったのね」

ルインはソルファを抱き締め、まるで恐がっている子供をあやすような口調でソルファを慰める。

「女性で、しかもよりによってネコ人の貴方がこの殺し合いの世界で名を上げることなど出来ない。フラットに帰り、誰か良い人を見つけて子作りをしなさい。その方が貴方のためよ」

「ア、アンタだって私と同じネコ人じゃない……」

「私だつて自分で言った通りのこと、したかった。良い、親切心でもう一度言うわ。ネコ人のフラット共和国へ帰りなさい」

「……………」

体勢を崩すように、ソルファは地面に跪く。

悔しさからなのか、命を繋ぎ心底ホツとしたからなのか、ソルファは涙を流していた。

「ネコ人ならネコ人らしい本来の生き方ってものがあるわ。それで良いじゃないの」

チラツとルインは綾香を見る。

「終わったわ、綾香」

「……………」

静かに綾香はルインを見つめていた。

「やり過ぎだつて言いたいんでしょ？」

「情つてものが貴方にはないの？」

「ない、私には。そんなものがあつたら私はここで生きていけない」

「最初から貴方が圧倒的だつたでしょう。殺すまでしなくとも良かったじゃない」

「危険分子相手にそれは譲れない。殺すわ、元仲間であつても」

「最低」

「そうよ、その言葉通り。総世界最強とはそういうものよ」

「貴方が異次元に封印されていた理由が良く分かつたわ」

そついうと綾香はルインから目を逸らし、ライル、ルウの死体に近

付く。

その際、ルインは綾香の手を引き、綾香を引き止めた。

「待ちなさい、綾香。まさか貴方、この二人を生き返らせようって言うんじゃないでしょうね？」

「当たり前じゃない。それと、私に触れないでちょうだい」

大きく腕を振ってルインの手を離させる。

「綾香はおかしいとは思わないの？」

「……………」

睨み付ける目付きでルインを見つめる。

「分かっているじゃないようね。どうして、彼らはこの屋敷に来てわざわざ私らと戦ったのか……ということだね。私たちは言うまでもなく強者よ、それも天井抜けな程。その状況でかかってくるのは、こういう風に弱点を知っている者。まっ、例外も多いけど」

「何なの、貴方の言ってること！ 自分のしたことに理由を付けて正当化しないでよ！」

綾香がルインの頬を平手打ちした。

不快感が募り、それが行動となっていた。

「正当化なんてしてないじゃない！」

ルインも綾香の頬を平手打ちする。

平手打ちをされた綾香は気分を害したのか、ルインから視線を下ろす。

「綾香、貴方ってR・ノールと同じね。物事に感情的で人の話を聞かないことがあるわ。さっきの話を続けるけど、綾香はおかしいと思わないの？ 彼らが私たちに攻撃を仕掛けてきたのって。確かにロイゼン、スロートは現在敵対のような状態だわ。彼らがかかってきても不思議じゃないようにも思える……それがおかしいんじゃない。どうして軍関係者でもない私らを先に襲うのよ。しかも、天使界で活動が続けていた私らがどうして今スロートにいると彼らが分かるのよ。普通の戦争なら狙いは別でしょう、スロートの帝であるクロノじゃないの」

「ライル君たちは何かを知っていたってどういうの？」

不愉快さから目を合わさなかった綾香だが、その言葉に反応する。

「そうよ、それを知っているから私たちに“ルール”を扱ったの。ルールというのはスキル・ポテンシャルよ、通常なら自らの動きを無にする代わり対象一人を能力効果不能にさせる補助系能力だけど水人能力、水のバリア辺りでライルは効果を全体化させたのでしょ。早い話、“支配”、“権利”を両方ともに封じられるため楽に勝てるって知っていたのよ」

「何よ、その支配と権利って」

「両方、スキル・ポテンシャル。桜沢一族が支配、R一族が権利。」

綾香、貴方も早く支配を扱えるようになりなさい……話が逸れたわね。今回の戦争、不可思議な理由で起きたわ。スロート側が先に仕掛けたと言つて、ラミング側が仕掛けてきた……有り得ないわ、そんなこと。そんな傾向がスロート側にあるのだとしたら私が真っ先にラミング入りしているわ。目の前で楽しいことが起きているのに私が逃すはず無いじゃない」

「貴方、そこは言い切るのね。まるで自分らしさでも言いたげ」

「つまりは何かを誰かが行つて、ラミングにダメージを与えた。与えたのは、まずスロートの人物ね。ラミングはフルボッコされる訳だし、もし私に嗅ぎ付かれて鉢合わせになったら最悪。ロイゼンとかだとこれから起きる戦いで死ぬかもしれない。だとすれば、私らがいるために負けは無いスロート……あと、ライルたちを騙したのはその戦争を仕掛けさせた人物と同一じゃないわ」

「誰なの、それつて。ライル君たちを生き返らせちゃダメな理由と関係があるの？」

「あるわ、ライルたちに私たちがこの戦争の引金みたいに語つて偽のリークをしたのはライルたちにとつてとても信頼出来る相手。嘘を言われているとも思えない程の相手。いずれは綾香の前にその恥知らずを土下座させてやるわ」

「もしかして、私の知っている人なの？」

「さあ、どうかしら？ 少なくとも私と綾香の関係悪化に繋がらせようという魂胆が目に見えるくらい分かるわ。ライルがルールを扱う時点で、今のメンバー内では素でアタック・ポテンシャルの高い私が杏里しか、まず勝てない。私なら綾香に危害を加えられない内

にライルたちを殺すであらうと踏んでね

優しさの裏

能力の解放を感じ取り、ノールはスロート城へ向かう途中で天使化し、空へと飛翔していた。

夜空を飛行している中、ノールはどこか嫌な予感を感じている。

このような感覚を覚えることは、ノール自身たまにあるので余り考えないようにしていた。

ただ、その感覚の原因が守銭奴クロノによる資金関係の話なのが、ノール自身腑に落ちていない。

そのようなことをぼんやりと考えつつ、スロート城中庭に降り立つ。

深夜であるため、城内は静寂に包まれている。

「……………」

特に何も話す必要性がないため、無言でノールは図書館へと目指す。

図書館へ着くと深夜にもかかわらず、図書館のフリースペースの机に普段と何ら変わらない様子でクロノは座っていた。

「ひやくま……いや、ノール。こんな夜中にどうした？」

深夜でありながら、図書館で一人静かにクロノはランプの灯りを頼りに、経済学の書籍を読んでいた。

「今、一瞬百万って聞こえたけど……気のせい？」

「何のことだろうか？」

如何にもといった具合で、クロノは何かを考え出す。

「それってもしかしたら幻聴じゃないのか？ 実はな、よく効く良い薬があるんだ。それを安く譲ってあげよう。オレはお前のことが心配なんだ」

さも本当に心配しているような真剣な表情で、クロノは語る。

「うわ、まさかだよ。元商人だったから語り口がウザい。因みにボクは水人だから薬は効果ないよ。水中に薬を落としても、水自体に効果がないようにね」

「ところでこんな深夜に何をしに来たんだ？ ま、まさかと思うけど、夜の……」

「ロイゼンの軍隊がスロートのすぐ近くまで来ているの。早く準備しないと大変なことになっちゃうよ！」

「馬鹿言つなよ、そんなことある訳が……」

「信じないなら、守銭奴。半殺しにしてやる」

「ロイゼンの軍隊は何処まで来ているんだ？」

「知らないよ……大体二、三時間あれば着くんじゃないの？ ボクを倒しに来たジーニアス君が言ってたけど、あと数時間後らしいし」

「夜明けに奇襲か……恐ろしいな、なんか。前日の使者は一体何だったんだ、騙くらかしてアドバンテージを取りたかっただけなのか」
考え込む様子で、クロノは頭を抱える。

「いや、悩んでいても仕方ない。戦争の準備を早急に行く」

木製の椅子から立ち上がると、クロノは急いで図書館を出ていこうとする。

しかし、一旦立ち止まり、ノールへ振り返った。

「ノール、ミールのことはもう聞いたか？」

「なに？」

「ああ、そうか。話したいことがあるんだけど、今は時間が無いから後で会いに行く。それまでは屋敷にいてくれ。分かったな？」

「良いよ。てか、眠いから家で寝るし」

「それはどうよ……元救世主なんだから兵士の士気昂揚くらいはしたらどうなんだ？」

「ボクは参加しない方が良いと思うけど」

「どういうことだ、お前がいてからこそスロート軍だろう？ また救世主として活躍してもらいたいよ。それはそうと、オレは守銭奴じゃあないよ」

クロノはそう言い残し、図書館を出ていった。

「……帰ろっか」

深夜の暗い図書館に一人残され、ノールは何となく寂しくなっていた。

図書館から出ると先程とは違い、ゆっくりとした足取りで中庭へと向かう。

城の回廊を歩いている間、城内にはけたたましい騒音が響いていた。

騒音は怒声というか単なる大声というか……とにかく兵士を叩き起こすための声だった。

そうこうしている内に、ノールの脇を数名の兵士が通り過ぎていく。

武器庫へと向かっている様子。

それを見送ったノールは再び中庭へと向かう。

クロノには戦争に参加してもらいたいと言われていたが、そんな気にはどうしてもなれなかった。

「さてと、帰るかな」

中庭に着いたノールは天使化する。

空へ飛翔するため、両翼を二、三度はためかせると背後から何かの気配を感じ取った。

「ノールさん」

ノールを呼び止める声が響く。

「ゲマさん？」

ゲマに声を掛けられたため、ノールは天使化を解いた。

「……見た？ 今の？」

「見紛うことなく、美しい天使のお姿でしたね。とても神々しいお姿でしたよ」

「皆には内緒ね、以前水人だつてことで厄介なことがあつたから」

「構いませんよ、私は誰にも話しません。そうだ、ノールさん。私の内緒にしている話を聞きますか？」

「それって条件のつもりかい？ 別に良いよ。話さないって言うてくれるなら貴方を信用するから」

「そうですね」

ゲマは普段と変わらない優しい笑みを浮かべる。

「私が、今回の戦争を仕掛けたのですよ」

「なに？」

言葉は唐突であった。

反射的にノールは、ゲマの顔を凝視した。

「名目上、ラミング側が仕掛けてきたとスロート側でなっています
が本来はスロート側が先。ノールさん、私にはですね、それを行える
能力があるのです」

頬笑みながら、ゲマは語る。

「へえ、貴方が犯人ね。今の一言、後悔するよ」

「ラミングを狙ったのはロイゼン、スロートまでの距離、時間がとても
良い間隔だったからです。お陰で消すべき目障りな存在が三名程死に
絶えました。ノールさん、何も悲しむことはありませんよ」

「何を訳の分かんないこと言ってるんだ！ 本当なんだな、貴方の言
ってることは！」

「ええ、紛うこと無き事実ですよ。私がそのように仕向けていたの
ですから。本来なら、ジーニアス、ジャスティン両名もさっさと死
んでいたはずでしたけど、お優しい貴方はジーニアスを殺さず、ス
キル・ポテンシャルの悟りで既に感付いたはずのジャスティンが何
故か私に戦いを挑まなかったせいで若干予定が狂いましたね。です
ので、結局はライル、ルウ、ミールの三名だけでした」

「ミールって……言ったか？」

周囲の温度が急激に下がり始めた。

ノールの強い殺気が周囲を覆っていく。

ミールの死を、それどころか殺した犯人に聞かされ、正気を保つどころではなかった。

「どうです、ノールさん。ノールさんも死んでくれませんか？ ミールさんの死がとても悲しいのでしょうか？ ミールさんが地獄でお待ちしていますよ」

ここまでゲマが語った時、覚醒化したノールが急激な勢いで迫り、ゲマの顔面を渾身の力で殴る。

殴られた反動で思いつき吹き飛んだゲマは、城壁にぶち当たり血塗れの姿で地面に倒れた。

「どうせ禁止令とか使って、ミールを生き返らせないようにしてるんだろ。だったら、殺してやるよ」

「そりゃ、当たり前だろ」

ノールの隣から、声が聞こえた。

速攻でその場から離れ、先程までの位置からノールは距離を取る。

「生きてたんだ……」

「生きているも何も、お前が私に何かをしたっていうのか？ あそこ
に死んでいる男が、まさか私に見えたとでも？」

目の端で、ノールは先程倒したゲマの方を見る。

似ているようだが、やはりそれは偽物。

通常ならば、先程面と向かって話した時点で気付けたはずである。

「あいつを殺したことなら後悔しないでいい、あれは私が作り出した者だ。事実、存在していた者ではない」

「偽物を作り出す能力ね」

「お前の仲間であるドレッドノートのような者と同じ能力だと勝手に評価するな。お前もR一族も桜沢一族も確実に塵にしてやるため、開花させた能力だ。言葉通り、これよりお前を殺す」

「ムリだよ、アンタには。どうせ、ボクに殺される。ていうか、ドレッドノートって誰よ？」

「それは、どうかな？ 殺せるかどうか試してみるか？」

「何を言ってるんだか……くたばれよ」

水竜刀を両腕に作り出すとゲマに突撃する。

歴然の差

憎悪の対象を前にしても、ノールは神聖魔法を扱わなかった。

どんなに激情に駆られようとも、ノールには理性がまだ残っていた。

「全く野蛮だな」

ノールの攻撃を受ける直前、ゲマは封印障壁を発動。

ゲマの周囲にはゲマを包み込むように半透明な障壁が現れた。

そのせいか、ノールは封印障壁に阻まれ障壁に体当たりする形になった。

「封印障壁を使うな！ 正々堂々と戦えよ！」

「正々堂々？ 何を言うんだ。敵の裏をかいてこそその戦術だろう。頭の悪い奴は死んでくれ」

略全ての魔法、物理攻撃を防ぐ封印障壁内でゲマは指を鳴らす。

「うあああっ！」

突如、ノールの周囲に強い電流が流れた。

覚醒化したとはいえ、ベースが水人のノールは筆舌に尽くし難いダメージを受ける。

絶え間なく電流は流れ続け意識を失いかけた瞬間、ノールは天使化し、一気に夜空へと飛翔する。

身体のベースが水人から天使に移り変わり、電流のダメージが水人の時に比べ比較にならぬほど下がったが電流は変わらずノールの周囲を覆い、身体にダメージを与える。

夜空へ飛翔しながら、ノールは泣いていた。

天使化したといえ、水人の際に受けた電流は身体に帯電しているため、激痛は絶え間なく続いているのが原因だった。

「痛いよ……電気がまだ流れてる。もうやだよ……杏里くん助けて……」

ゲマの攻撃を避けるため上空へ一直線に飛行していたノールだが、突然強い突風を受ける。

竜巻にでも巻き込まれたかのような状況に、ノールは上下の区別が取れぬまま中庭へと落下。

魔力で衝撃を幾らか緩和したが全身の打ち付けた衝撃は激しく、苦痛を表情に浮かべる。

「なんだ、随分とお早いご帰還じゃないか。ノール、逃げるんじゃないか？」

封印障壁の中で、ゲマは嬉しそうに語る。

「お、お前の仕業だろ……」

「まともに飛行も出来ないだけだろう？ 本当に情けない女だ」

「黙れ！ ミールを殺したお前が勝手なこと言うな！」

ゲマの周囲を包み込む半透明の封印障壁に、ノールは全力で殴り掛かる。

しかし、反動のせいかなノールの腕が折れてしまった。

か細いしなやかな腕をしたノールだが、魔力を集中させ全力で殴る瞬間の強固さはルインでも折ることは不可能。

ただ封印障壁は別であり、物理攻撃をされた場合は同等の勢いで跳ね返す特性がある。

それで、ノールの腕は折れた。

「痛い……」

折れた腕を押さえながら地面にぺたっと座り込んだノールは再び泣き出す。

「泣けば誤魔化せるっていうのか？ 私の怒り、その程度で霞むこととはない！」

再び、ゲマは指を鳴らす。

「……………！」

ノールは強烈な勢いで顔から地面に落下した。

背後から目に見えない何かが猛烈な勢いでノールを地面へと押し込んでいる。

ノールの細い身体は悲鳴を上げ、骨が軋み折れ始める。

その間も続く電流によるダメージ。

蓄積されたダメージはノールの許容出来る限界を越えてしまっていた。

「ごめんなさい……」

背後からの強烈な圧力により地面に押し込まれながらも、ノールは何故か謝る。

瞬間、ノールにかかっていた圧力、電流は消え去った。

「今、お前は何を語った？」

「すみませんでした……ボクが酷いことをしようとしたから……ゲマさん、許して……」

「……………」

ゲマは何も語らず、地面に倒れ込み泣きながら自らに許しを懇願するノールを見下ろす。

「お前は何か勘違いをしているのでは？」

「……えっ？」

「酷いことをしようとしたから、じゃない。もうお前らは行っている。あの許しがたい非道な行いを……」

両手を握り締め、何か怒りを堪えるようにゲマは語る。

「ソルを覚えているな。いつも私とともにいた男だ。炎人のソルを目の前にした時、シスイを創りだしたお前ならば何かしらの違和感を覚えたはず。そう、ソルは創られた者だ。そして、ベースとなった者は……私の妹だ」

怒りにガタガタと肩を震わしながら、ゲマは涙を流す。

「私の家族、一族郎党を全てR一族が塵にした！ 私はただその中で、たった一人だけ生き残った！ これは、お前ら一族に復讐してやれと皆が私に託したのだ！」

ゲマは封印障壁を解く。

「お前がな……お前一人が謝ったところでどうにもならないだ……」

ゲマは地面に仰向けで倒れ込んでいるノールの頭部を嘆きながら殴る。

殴り続けられながら、ゲマになら殺されても仕方がないと薄れる意識の中で、ノールは思っていた。

一族の者たちを全て殺され、生き返らせようとした妹は結局ノール

が行った水分身のよう性別が反転した元の素材に近い形をした別人。

誰も救うことが出来ず、怒りと復讐だけを糧に生きるしか無かったゲマを知り、ノールはゲマの怒りを少しでも鎮められるのではないかと生きることが諦めようとしていた。

数十回程衝撃を受けた時、ノールは自らの内に何か引つ掛かるような想いがあることを悟る。

ゲマと同じ境遇の者を知っている。

走馬灯のような幻想を目にし、ノールはようやくそのことを気付く。

「お父さん……お母さん……」

ノールは立ち上がろうとする。

ノールの動きを察し、ゲマはノールと距離を取ると再び封印障壁を発動した。

「エクス」

最上級回復魔法エクスを詠唱し、ノールの身体の怪我は消える。

「ゲマさん、やっぱりボクはここで死ねない。だって同じなんだもん、ボクは貴方と」

「……………」

無言でゲマはノールの話を書く。

「ボクは貴方に謝ったりなんてもうしない。絶対に」

「ならば、私はお前を殺し、お前の死を皆に捧げよう。お前の死で最後……R一族は全て死に絶える」

「勝つのは“私”だ！ 貴方には負けない！」

ノールは気合いを込め叫ぶ。

その時のノールの声質は違う、そして自らを呼ぶ一人称も異なる。

そのことにノールは気付かない。

ただ、ゲマは気付いた。

この戦いの流れが瞬時に変わってしまうだろう予感と一緒に。

「まさか、目醒めたのか！ 何故この時に！」

焦りの反応がゲマにはあった。

直ちに戦いを終わらせるため、ゲマは再び指を鳴らす。

直後、ノールの両足、足の甲を貫くように剣が鐔つばの部分まで深く突き刺さる。

「うあ……あああ！」

酷い激痛に即座にノールはしゃがみ、足を手で掴む。

「ゲマ、絶対に許さないぞ……」

両足を水人化させ、剣を擦り抜ける。

それを狙ったかのように再びノールの身体を電流が流れ始め、激痛が襲う。

「ぐうう……」

歯を食い縛り、激痛を堪えながらタツクルの構えでノールはゲマに突撃する。

「馬鹿か！ 良いのだぞ！」

ゲマは指を鳴らす。

再び、ノールは背後から急激な圧力を受け、地面に全身を叩き付けられる。

「駄目押しだ！」

ノールの上空にノールの体積を大幅に越える岩が出現し、ノールを押し潰す。

岩の下からは、流血の気配はない。

嫌な予感を感じ、ゲマは辺りを見渡す。

ノールはゲマの背後、数メートル先にいた。

「“権利”発動！ 封印障壁！」

ゲマへと駆け出しながら、ノールは叫ぶ。

瞬間、ゲマを覆いあらゆる攻撃を防いでいた封印障壁は消えた。

「まだ来るのか！」

ゲマが指を鳴らすと、ノールの目の前で大爆発が起きる。

まともに爆発を受け、全身に火傷を負い血塗れになり、片目を失いながらもよたよたとした足取りでゲマに接近し、ノールは手をかざした。

「デスメテオ、発動……」

詠唱無しで、ノールは暗黒魔法デスメテオを発動。

暗く禍々しい光のような揺らめきを放つ物体が、ゲマを襲う。

「うわぁ……！」

全身から汗が、ぶわっと大量に湧きだし、強烈なまでにゲマは死を感じた。

死の恐怖に身体は完全に硬直し、仁王立ちをしたまま一步もその場を離れられない。

その間も、ゲマが保身のため別に張っていた魔法障壁を突き破りながら、デスメテオはゲマを追い詰める。

だが、ゲマの魔法障壁を全て打ち破ると、魔力切れによりデスメテオは消えた。

ぎりぎり薄皮一枚のところ、ゲマは生き残ったのである。

「ゲマさん……」

先程の大爆発により、酷い出血をしながら血溜まりを作り地面に座り込んでいたノールが声を掛ける。

宙を仰ぎ、言葉を発するノールはゲマを見ていない。

既にノールは視力を失っている。

「もう、“ボク”には抵抗出来る魔力がないよ……貴方の勝ちだね……」

力なく消えてしまいそうな弱々しい声を発する。

座った姿勢も耐えられなくなり、ノールは前のめりに地面へと倒れた。

「ミール、ごめんね……」

言葉の後、ノールは動きを見せなくなった。

ノールを凝視していたゲマはそれを確認し、両膝から地面に崩れ落

ちる。

まさに恐怖していた。

自らの能力、“実現”を扱いこなしているゲマにとって敵となりえる者など存在し得なかった。

しかし、存在した。自らを殺す、そのような存在が。

先程のデスメテオの物体が脳裏へと克明に焼き付き離れない。

ノールを倒した今となっても震えが止まらなかった。

「うう……何なんだこれ……どうして私は泣いているんだ……」

地面に両膝を付き、身体を震わせながら、ゲマ自身訳も分からず勝手に涙を流していた。

「ゲマさん」

ゲマを誰かが呼び掛ける。

声の主、ジャスティンがゲマの傍にいた。

「何故かさつきまで中庭に入れなくて……中庭に入れるようになったから来てみたのですが、その惨殺体はゲマさんが？」

「……………」

何も語らず、ゲマは震え続ける。

「今の僕は、貴方が考え付かないような良からぬことを考えています」

そういうと、ジャスティンはゲマの口を片手で塞ぎ、普段から携帯しているナイフでゲマの背中へと心臓を狙って突き刺す。

命の危機を感じ取ったゲマは暴れる。

しかし、ジャスティンは力でゲマを押さえ込み、急所となる喉や頭部を続けて刺す。

「回復魔法なんて唱えさせてやらない……………死ぬ」

決起の時

誰かが呼ぶ声が聞こえている。

死に体となった身体のノールにまだ生きると。

ノールは無意識に覚醒を願った。

「……………」

ノールは眼を開く。

身体には一切、力が入らない。

ただ、怪我の痛みは感じない。

大爆発により受けた全身を覆う致命傷が治癒されていた。

「ノールさん、気付きましたか？」

心配そうな表情で、ジャスティンはノールに膝枕をしている。

彼女には返り血のような鮮血が衣服へ無数に飛び散っていた。

「ボクは負けて……………殺されたはずじゃ……………」

「ノールさんは殺されていませんよ。確かに最初、僕が見た時は女性の惨殺体としか……………いえ、ノールさん、何があったんですか？」

「戦ったの、ゲマと。彼がスロートとラミンクの戦争を引き起こした犯人だと自ら語ったから……」

「だったら、ゲマさんは殺害しても良かったんですね。何となく予感はしていたんですよ、予感をですけど。ノールさん、身体の方はもう大丈夫ですか？ 一応、回復魔法を詠唱したけど」

「ムリみたい……ボクの身体、動かないんだ。魔力も身体から感じないし、どうしたら良いか分からないよ……」

このようなことが今までなかったノールは不安な思いから泣き出していた。

「一旦、ノールさんの屋敷に行きましょう。僕が担いでいきます」

「いいよ……ボク重いし……」

「羨ましい体重量のくせに……じゃなかった。貴方はこんなことになってもどうして他人を頼らないんですか。ほら、黙って僕に担がれて」

横たわった状態のノールをジャスティンが軽く担ぐ。

「やっぱり軽いね。体重20キロって」

何の苦もなくジャスティンがノールを背負い、中庭を離れようとすると城外へ向かう回廊に人影が見えた。

「ノールに、ジャスティンか……」

回廊の暗闇から現われたのは、炎人のソルだった。

「失敗しくじったんだな、ゲマ。アンタこそが最強だとオレは信じていたけどな」

「殺るのか？」

ノールを背負っているのでジャスティンは態勢を取り辛そうに、ゲマを殺害した血塗れたナイフを構える。

「いや、戦わないさ。悟ったんだ、ようやく。もうこんな殺し合いはすべきじゃない」

「ゲマを殺されて、よくそんな台詞が言えるね？ いつも一緒にいた貴方なら何かしらあるんじゃないの？」

続けて、ノールが言う。

「騙し討ちじゃねーよ。本当にこんなことは無意味だと分かったんだ……オレは戦うんじゃなく、ゲマやゲマの家族を蘇生させる能力を持つ奴を探すことにするよ。そもそも最初から殺し合いじゃなくこうすべきだったんだ」

ソルは振り返り、城外へ向かう回廊を進もうとする。

しかし、ソルは立ち止まった。

回廊の数メートル間隔に設置されたランプの灯りに、何者かの人影が映ったからだった。

「気付かず、どっかの馬鹿みたいにこっちに歩いてくりゃあ良かったのにな」

ニヤニヤした表情の男性が現われる。

いや、それはソルにはそう見えたとに過ぎなかった。

実際は既に男性の持っていた剣がソルの胸を貫いていた。

「お前が元剣闘士だと聞いていたけど、それ程でもなかったようだな」

「いつの間に……」

「強そうに見えるのは見た目だけか？ だったら、剣闘士止まりだろうな。意気込み程度ではなく最初から逃げるべきだったんだ」

体勢を崩し、右半身から床にソルは崩れ落ちた。

床に倒れたソルから剣を抜き、続けて男性は水人魔法を数発程、ソルに放つ。

「そろそろ頃合いか」

ソルの首筋を掴み何かを確認し、男性はノールたちに近寄った。

「久しぶりだね、ノール、ジャステイン」

相変わらず、ニヤニヤしながら男性は語る。

「……今まで何処で何していたの？」

明らかに警戒した声で、ノールは聞く。

「スパイ活動って奴かな。色々相手方の情報は仕入れてきたつもりだよ、いずれは勝つためにね」

ノールの問い掛けに答えた男性、ランプの光によって姿を確認出来た人物は今まで行方知れずとなっていたアーティであった。

以前と彼は何も変わらないように見えるが、彼の瞳は通常の状態であっても吸い込まれるように澄み切った燃えるような真紅の瞳に変わっていた。

何らかの変化が彼の身に起きたようだった。

「話をするなら、屋敷に一旦戻りませんか？ ノールさんを休ませたいので」

「断る。屋敷に戻るだなんて何を言っているんだか。だったら、時期尚早だと理解し、オレは帰ることにする」

「貴方こそ何を言っているんですか？ ノールさんのことを考えれば休ませるのが当たり前でしょう？」

「知るか。ノール、お前は弟を殺されて悔しくないのか？ ミールは可哀相だな、無駄死にも良いところ。まるで慕われていなかったみたいじゃないか。まっ、だったら死んで当然か」

「お前、さっきからさ……」

怒りを堪え、ジャスティンは言う。

「ジャスティン君。ちょっと、降ろしてほしいな」

「ノールさん……」

察してか、ジャスティンはノールを降ろす。

「イライラする。あー、イライラするな。どうして死にたがりつてのはすぐに寄ってくるのかね……ボクはね、見ての通り聖者じゃないんだよ。人を殺す時は誰だって殺すよ」

「御託はいい。馬鹿みたいに語るな」

「あはは、ゴメンね……死にたがってたことに気付かなくて。今すぐ殺してあげるよ」

ノールは覚醒化を行う。

しかし、オーラが明らかに弱い。

先程の戦いで魔力を相当に使い果たし、弱体化が目に見えて明らかだった。

「雑魚、さっさとR・クアールに代われ。お前じゃ話にならないよ」

「怒るよ」

「勝手に、そこで怒ってる」

「……何しに来たの？ ボクと喧嘩するためじゃないよね。クアールのこと、知っているみたいだし」

覚醒化を解き、ノールはアーティに訊ねる。

「お前の弟を殺すように仕組み、さらにお前を殺すため挑んできた理由は、ゲマがクロノスの一員だからだ」

「クロノスって総世界政府じゃん」

クロノスという言葉を察し、ジャステインは声を発していた。

「そうだよ、ジャステイン。君は詳しいんだね、普通一般人はその存在……いや、自分たちがそいつらによって抑制されていること自体さえも知らないのに。ジャステインが知っているのなら、ノールも当然知っているね？」

「最近よく聞く名前だからね」

「そこまで知っているなら、ノール。お前の一族が徹底的に塵にされても知っているな？」

「勿論」

「今こそ、戦うべきだ。時が来たんだ」

「どこがだよ、時が来たって。見た目で分かんないわけ？ ゲマと戦って負けるくらい力しかないのに、まだゲマ以上の連中がいるかもしれないクロノスとどうして戦えるのさ！ ミールの為に戦い

たいけど、ボクじゃ自殺も良いところだよ！」

「なら、死ぬしかない。オレも、アクローマ、アズラエル、ドレット、ドノート、ミトスも死んでR一族関連はこの世から根絶だ。それだけは、オレ嫌だぜ」

「アクローマって……今言った人たちはR一族なの？ どうして彼らを知ってるの？」

「彼らはR派だ。オレもR派の一員であると、ミトスがオレに教えてくれた。まだ他に数人いるらしいけど、そいつらとしか会ったことはない。オレの親父アイザックも、R派だと……アイザックは過去、グラール帝国を守るため死んだ。母親はオレにそんなこと、一言も話してくれなかったけどな」

「……グラール帝国って」

「悪いな、何故か話が逸れていたよ」

少しだけ機嫌が悪そうにアーティは謝る。

「オレの両親の話なんてどうでも良いんだ……ともかく、オレは自身をR派だと知ったんだ。戦わせる、オレたちを。これ以上の無駄死には御免だ、殺すなら戦わせた末に殺せ」

「やだ……」

ノールは俯きながら、低く声を発する。

「そんな訳の分からない理由で戦うなんて嫌だよ……ゲマだってあ

んなに強かったんだよ。死んじゃうよ、ボクたち……戦うなんて……」

「この期を逃して一体いつになる？ ゲマのような傑出した人物はそうそういない。そんな奴が一人減った今こそが決起の時なんだ」

「もしかして……ボクは戦わされたの？」

「オレに援護してほしかったのか？ ムリを言うな、お前しかゲマは倒せない。オレが加わったところで惨めな男が一人地面に転がるだけだ」

「二人だろ、惨めな女もさっきまで一人転がっていた！」

「どうしてそこまで戦うのが嫌なんだ！ 沢山の連中が殺されているのに躊躇う必要があるのか！」

「死にたくないからに決まってるだろ！ あんな奴と二度と戦いたくない！」

「だろうとは思っていたよ。アクロマ、アズラエル、ミトスはお前の強さ、能力を過剰に評価していた。初めは雑魚だったお前が敵とする者と対峙した瞬間、極端な程の能力変化を起こすと連中は語っていたからね。仕方ないから連中の意見も聞き入れて、お前で勝負出来るかをお前に聞いてみたんだ。もう分かる通り、お前に用はないよ。さっさとR・クアールに代わってくれ」

「絶対に断るね、そんなの」

「なら、お前に良い情報をやろう。R・クアールにお前が代われれば、R・クアールはお前の代わりにクロノスを叩く。彼女の能力さえあ

れば勝てる相手なんだ。返してやれ、彼女に身体を。彼女が勝てば、聖帝から自身の身体を再生させ、お前から勝手に出ていくはずだ」

「また……ボクは、ボクじゃなくなるの？」

「お前は本当に一々ウザい反応をする女だな。痛みも味あわなければ、敵を殺す苦しみも残さなくていい。しかも、勝てばR・クアールはお前から出ていくんだぜ？ 結局、お前は何もしなくて良いのに戦わなくていい平和な時を過ごせるようになるんだ。高々、数時間程度意識を無くすくらいで勝手なこと言っなよ」

「勝手なこと言ってるのはそっちじゃないか！ 怖いんだよ、身体がボクのじゃなくなるなんて！ 戦うのも嫌！」

感情が昂ぶり、ノールは涙を流し始める。

「こんな時に泣くなよ……たく、これだから女は……」

ノールが泣き出した瞬間から、妙にアーティはそわそわし始めた。

「分かったよ、だったら一日だけ猶予をやる。それまでにどうするか考える。でもな、忘れるんじゃないよ。この一日のスパンで負けるようなことがあれば……」

苛付き、少し焦った様子で何かを言おうとしたようだが、アーティは話すのを止める。

「死んだら、どうせ終わりだな。何を言っているんだか、オレは。今のは忘れる。それは良いとして、スロート対周辺諸国だけど、ミトストとエージが連中を終戦に無理矢理持ち込ませるはずだ。オレも

連中を止めに行くしな」

「ボクは……」

ノールは口籠もり、涙を流し続ける。

「今のお前の話なんて聞きたくもない……士気に関わる気がするから言いたくなかったけど、オレもあの連中も本当は戦いたくないんだ。ルインやエージみたいナルナティックならともかく誰が好き好んであんなところに死に行くか。今は深夜だから、翌日の早朝お前を迎えに行く。それまで考えていろ」

空間転移を詠唱し、アーティはその場から消えた。

アーティが消える際、一緒にゲマ、ソル両名も消える。

彼らのリザレクによる復活を阻止するためにアーティが連れ帰った様子。

「ノールさん」

ずっと二人の話を聞いていたジャスティンが声を掛ける。

「少し落ち着きましょう……これを……」

静かにハンカチをノールに渡す。

「ありがとう……」

落ち込みながらも、ノールはハンカチを受け取り、涙を拭いた。

「あの、ノールさん」

「ん……？」

「僕はリバースに所属していません。ですから、総世界でそんな戦いが起きていることもノールさんの一族が殺され続けているのも全く知りませんでした。でも、ノールさんは知っていたんですよね……僕は思います。アーティさんの言う通り戦うべきです」

「……………」

無言のまま、ノールはジャスティンと目を合わさず、聞いていないような素振りをする。

今のノールにとっては聞きたくもない話。

事実から目を逸らそうとしていた。

「僕は許せません。ミールを殺し、それを画策した連中を。それに勝てば官軍、勝つと分かっているのに乗らない訳が無い。例え、僕が死んでもノールさんが生きていればね」

「ジャスティン君はそれで良いの……？」

「ミールがない世界なんて信じられない。貴方だつて分かっているはずです。あんまりふざけていると僕の義理姉あねとなる貴方でも、いい加減ぶん殴りますよ」

「だったら殴ればいいじゃん……ボクには出来ないよ、ムリだよ……」

「チツ……」

相当腹が立っているのか、普通にジャスティンは舌打ちする。

ノールに近寄ると、ジャスティンはノールの腹部を勢いをつけて殴る。

「今の貴方は昔の兄に似ています。能力もあり、さらに優秀なのに力さえも発揮しない。僕よりも遥かに能力が高くせに何故ってね」

「……ぐうう」

痛みを堪える様子でノールは腹部を押さえる。

「いきなり殴ることないじゃん……最低だよ」

怒ったのか、ノールはジャスティンを睨み付けた。

「最低で結構。そんなことより、自宅に戻ってこれからどうするのか考えれば良いんじゃないの？ それじゃあ、僕はもう寝ます。戦争の準備もしなくていらしいし、ストレスも少しだけ解消されたので、クロノス戦のため英気を養おうと思います」

そういうと、さっさとジャスティンはノールから離れる。

「ボクは、あの娘が嫌いだ……」

自室に戻っていくジャスティンを睨みながら、ノールは呟く。

しかし、一人で中庭にいても仕方ないので空間転移を詠唱し、自宅へ戻った。

恋人同士

「……………」

無言のまま、ノールは自宅、自室の寝室内へと空間転移により現れる。

ふと、ノールは自室に何者かの気配を感じた。

「ああ……ジーニアス君か」

思い出したことを囁きながら、ダイニングへと向かう。

ノールは寝室のドアを開けると心底ゾツとした。

安物アウトレットソファーに横たわるジーニアスの傍に杏里がいたのである。

正確に言つと、ノールは杏里がいたことにゾツとしたのではない。

ジーニアスに寄り添っているその角度が微妙に口付けをしているかのように見えたからだだった。

「ノール……………」

杏里がノールの名を呼ぶ。

「あっ、気付いてたかい？」

「ノールだよ、ジーニアス君に酷いことしたのって」

「殺す、なんて言われてそれを実行しに来たら意識を失わさせるくらいボクはするよ……それより今、杏里くんさ、ジーニアス君と、あの……」

「殺しに来たって、ジーニアス君が？ ノールがそんなに弱っているのにも何か原因があるの？」

杏里は立ち上がり、ノールに近付く。

「ボクが弱っているとか、よく気付けたね」

「君は今、そこに立っていることも相当辛いはずだよ。魔力切れを起こしている身体でよく耐えていたね。頑張っていたんだね、ノール」

優しく囁きながら、杏里はノールを抱き寄せる。

「もう大丈夫だよ、ノール。ボクの魔力を分けてあげるね」

潤い満たされるような感覚を、ノールは身体に感じた。

身体に魔力が満ち溢れていくのを感じ、ノールは魔力切れによる苦痛を感じなくなる。

水人のため、体温の感じないノールだったが仄かに温かさを実感した気がした。

「杏里くんさ、ボクは……全然助けてほしいとかなんて言ってない

んだよ」

「ノールが苦しさを我慢していたんだよ。それを救ってやれなくて、どこが恋人なの。好きなんだから当たり前だよ」

「……そうだよね」

「あ、あのさ、ノール？」

「ん？」

「ジーニアス君は意識を失っているんだよね？」

「ボクが低体温にさせて意識を奪っただけだから、ボクが能力を解けば何事もなかったように意識は戻るよ」

「そっか、良かったよ」

安心したのか、杏里は頬笑む。

そんな杏里の表情を見て、ノールはチラッとジーニアスに視点を移す。

ジーニアスには、さっき自身が掛けてやったタオルケットの上に複数枚の毛布が掛けてあった。

それでノールは杏里が意識の戻らぬまま冷たくなっているジーニアスを心配し、寄り添っていたのだと気付けた。

「変な誤解をしちゃったな……」

ジーニアスを眺めながら、ノールは思う。

「で、でさ、ノール。君に聞いてほしい話があるの」

少し興奮し、頬を赤く染めた表情で杏里は語る。

「君がさ、興奮してる時っていつもHなことを提案してくるか、そういうことをボクにした後で思い付いたことをわざわざボクに話す時だけなんだよね。若い君は、本当に分かりやすいよ」

「凄いな、ノールは。ボクのこと、何でも知ってるんだ」

何か楽しげな様子で相変わらず頬笑みながら杏里は語る。

頬笑む姿は、ノールの目から見ても綺麗だった。

今の杏里の姿は以前の幼さが抜け、美しい女性となっている。

男性の杏里は綺麗、美しいと言われる、思われることを嫌っているが、その姿はそのように思わずにはとてもらえない。

「ノール、ボクの話聞いてる？」

「えっ？ あ、ああ、そうだね。杏里くんは綺麗だよ」

「ボクはカッコいいってノールに言われたいな……って、そうじゃないよ。会場で友達に会った時に聞いた話しなんだけど、もしかしたら今よりもっと早くノールが子供を宿せるかもしれないの」

「はあ？ 普通に考えて無理でしょ」

「無理じゃないと思うよ、ボクが教えてもらった方法はウテルスセ…」

「ストップ。それ、ボクも知ってるよ。自分の身体なんだから調べてるって。何せ、ボクらには賢いお医者さんがいるんだから」

「綾香姉さん？」

「そつ。医学的知識を豊富に携えた綾香さんになら色々と聞けるもん、同性だし。さつき君が話したことだけど、確かにボクなら出来るよ。その部分をただ単に水人化させて、水面を通過させたようにさせればいいだけだし。でも、そんなことを今したからといって何か起きる訳じゃないよ」

「どうして？」

「簡単に言つと年令的な問題」

「年令？ ノールも同じことを言うんだね。ボクの友達も君の年令では色んな意味で背德的過ぎるとか言われたよ。でも、その人は結婚してるし、子供もいるらしいんだけど、何でわざわざそんなこと言うんだらうね？」

「杏里くん、多分だけどその人は人間じゃないよね」

「ノールと同じ魔力体の人、炎人だよ」

「その人って君は知らないみたいだけど年令が君やボクよりも、ま

ず間違いなく60才以上上だよ」

「ウソ？ ボクと同じくらいの若さなのに？」

「まっ、そりゃあ普段暮らしているとところが人間世界だから忘れてしまうのは仕方ないけど、ボクたちは人間じゃないんだよ。ボクは元々が水人だから最初から混同しなかったけど」

「そうだったね……ボクらは500才まで生きられるんだった。ア
クローマさんが天使の寿命のことを言ってたね」

「そういうことね。あと、ボクが取出産出来るしゅしゅっさん年令は80才ってこ
とも忘れないように。てか、以前ボクが話さなかったっけ？」

「そういえば、そうだったような……」

微妙に何かを杏里は考えている。

「取出産ってなに？」

「ははっ、そんなことも知らないの？」

笑顔をノールは作る。

「お腹に手を入れて赤ちゃんを取り出すこと。常識だよ」

「常識だよって言われても……そんなこと出来ないでしょ」

「えっ？」

呆気に取られた表情をし、ノールは言葉に詰まる。

「だって、専門書に書いてるじゃない」

ムツとしたのか、ノールは本棚に向かう。

一冊の専門書を取り出すと、あるページを開き、杏里に見せた。

「どっからどう見ても、ここに記述されてるじゃない。もう……少しは勉強しなさい」

「……………」

杏里は受け取った専門書を眺める。

「随分、水人は他の種族と違うんだね。というか、魔力体は。普通ね、人間やエルフ、天使とかはこういう出産方法は出来ないよ。教えて似ているものとしたら、帝王切開かな？ でも、後遺症なしのノンダメージなのはとても良いね」

「これ常識じゃないの？」

「魔力体だけなら常識だね」

「なにそれ、視野狭窄でしたか？ ボクが悪いんですか？」

「それよりも、もう寝ない？ ボク、今日は色々あったから疲れたよ」

杏里は時計を気にしている。

時刻は既に三時過ぎを指していた。

「……ボクも色々、あったよ」

「そうなの？ それってやっぱり魔力切れを起こしていたのとも関係があるんだよね」

「明日話すよ……朝になって起きたら話す」

翌朝、普段通りに寝室のキングサイズのベッドに寝ていたノールから目を覚ます。

時刻は八時過ぎ、ノールにとっては少し遅れた起床。

ベッドで上半身を起こしたノールの隣には、一緒に寝ている杏里がいる。

杏里はこの時間帯ではノールが起こさないと、まず起きない。

「フッ……」

杏里の安らかそうな綺麗な寝顔を眺め、少し頬笑むとノールは立ち上がる。

これから、ノールは普段通り家事を行う。

家事に関しては杏里に分担もさせず、毎日ノール一人で一言も文句を言わずに行っている。

リバースの長として仕事をし、日々辛くともそれを怠ることはない。しかし、今日は普段以上に熱心だった。

それは彼女自身の不安、恐怖、焦燥の表れ。

「この場に戻って来れないのでないか？」

「ノールとして自身が存在出来ないのではないか？」

「もう二度と、杏里と会えなくなるのではないか？」

そのようなことが、ノールの胸中に膨らむ。

考えれば考えるだけ、ノールは悲しくなった。

「どうして、ボクだけが……」

次に浮かぶのは、クロノスに対する罵詈雑言。

心の中で口汚く貶^{けな}していた。

家事全般が終わり、杏里を起こすとノールは料理を作り始める。

「杏里くん、ご飯出来たよ」

朝の支度を終え、テーブルの席に座っていた杏里に朝食を持ってい

く。

メニューは普段通り、サニーサイドアップエッグ、数枚のハム、サンドイッチ状に切られたパン数切れ、別の世界で買ったインスタントのコーンスープ。

億単位の所持金がありながら決して贅沢をしようとさえしないのが、ノールらしさである。

「ノール、今日も美味しそうだよ」

楽しげな様子で杏里は頬笑む。

毎回、朝は同じようなメニューだが決して文句を言わない。

「そう?」

向かい合うように、ノールは席に付く。

十数分程で食事、片付けは終わり、ノールはある話を杏里に持ちかける。

「ねえ、杏里くん。今日って……暇?」

「ノールが何かしたいなら、ボクはノールに付いていくよ」

「遊びに行かない? 繁栄してる世界にさ」

「ああ、エリアースとかの」

「じゃあ、そこ」

「何か用があるんだね」

「着いてから決める」

おおよそ
大凡の行先も決まり、数十分かけて普段の水人衣裳からノールはエリアースのカジュアルな服装に着替え、髪の手入れなどを行った。

杏里は普段通りのボーイッシュな女性専用の服装。

服決め、着替えや髪の手入れは、ノールよりも時間が掛かっていた。

「お待たせ」

安物アウトレットソファで寛いでいたノールに杏里は声を掛ける。

「特に待つてはいないよ」

「どこに行くところか？」

「ひとまず、エリアースに行くよ」

「うん、分かった」

「じゃあ、空間転移発動！」

空間転移をノールは詠唱なしで発動させる。

一瞬で、ノールたちはエリアースのとある首都の一つに出現。

そこは狙いすましたかのように人通りの多い道。

気付いた往来する人々は立ち止まり、呆然とした表情で二人を眺めていた。

「ノール、いつものことなんだから少しは考えようよ……」

「近いし関係ないよ。どうせ数日で忘れるさ、人はそんなものなんだよ」

笑顔で語ると、ノールは杏里の腕を引き、どこかへ向かう。

数分後、ノールたちは遊園地に着いた。

とても大きく、人が沢山いる楽しげな活気に溢れた場所。

「ボクは遊園地に来たのって初めてだな……いつも戦ってたから、ここは別世界のように感じるよ」

「杏里くんもそう思う？ 皆が楽しそうで面白そうだったから、一度は来てみたかったんだよ」

「ノールも女の子らしいところがあるんだね」

「別にボクは女の子らしくしてない訳じゃない。それは良いとして、さっさと中に入るよ」

遊園地の入り口、入園券を買う切符売り場まで二人は進む。

スタッフの説明を聞き、ノールはお金を払おうとした。

「あっ、やばっ、財布忘れた」

持っていた女性らしい作りのされたトートバックをぐそぐそと探しながら呟く。

「杏里くん持ってる？」

「ボクは財布を持ち歩かないよ」

何故か、杏里は頬笑む。

「ああ、そう」

駄目な子だなと思いつつ、ノールは手をかざす。

百万一束が、バサツと音を立てその場に出現した。

当然、スタッフは呆然とした表情。

「えーと、幾らだっけ？」

「さっき、思ったんだけどさ」

園内に入り、パンフレットを見ながら歩いていた杏里が話し掛ける。

「ん？」

「ノール、落ち着きがないよね。楽しみだったの？」

「……そんなところじゃないのかな？ あれに乗ってみたい、楽しそうだよ」

話を逸らすように、鉄で出来たレールの上を早いスピードで駆け抜けるトロツコのような乗り物を指差す。

「ジェットコースターって名前らしいね。乗ってみようか」

パンフレットを見つめながら杏里は話す。

一定の手続きを終え、数分後。

「遅かったね、アレ」

「周りの人は歓喜の声を上げて楽しそうだったけど、ゆっくり過ぎたね。一体どこが楽しいんだろう？」

「さあ？ 面白いと思える理由と理屈がない」

二人は口々に散々な評価を下す。

それもそのはず、ノールたちが空を飛行する速度、敵の間合い、距離を保ち行動する速度はもつと早い。

速度が遅く、レールで何処に進むのか先に分かってしまい、しかも安全である遊具のジェットコースターなどでは何も楽しくなかった。

「さっさと他んどこ回る」

「遊園地も以外と楽しいかもね」

一通り園内を回った時、杏里が楽しげに語る。

「そう？ 杏里くんがそういうなら、そうだね」

「そろそろ、良い時間だし帰ろっか？」

園内の時計台を杏里は確認する。

時間は五時になりかかった頃。

「そうだね、でも結構いたんだ。もう五時になったんだね……」

「ノール、楽しかったね。今日のデート」

「はっ………？」

そう語り頬笑み掛ける杏里にノールは妙にそわそわしている。

「ボ………ボクも、楽しかった………初めてデートなんてしたから……」

「いつもしてたじゃん、デートって」

「いつ？」

ノールにとっては今日が初めて杏里とデートした日である。

女の子らしいことを躊躇し出来なかったノールが自ら誘ったことで、たった今ノールにとって初めてのデートをしている。

ノールには杏里の話していることが分からなかった。

「したっけ、今日以外に」

「ノールと一緒に外出する時、ボクはいつもそのつもりだよ」

「……外出って仕事にとか、買い物にとか？」

「そうだけど、ノール大丈夫かい？ 疲れちゃった？」

「疲れてはないよ……なんか良いね、君の発想。ボクは仕事なら仕事、買い物なら買い物って無意識に割り切ってたからそう考えてなかったな。杏里くんみたいに考えられれば、毎日が楽しいだろうね、きつと」

決意

杏里との遊園地での楽しい一時を過ごしたノールは自宅に帰ると、エールの自室へと向かう。

それは、遊園地での話を語りに行く訳ではない。

「エール、いるかい？」

二、三度、部屋のドアをノックする。

「あれ……姉貴、どうした？」

微妙に髪がぼさぼさのエールが部屋から出てきた。

「寝てたの？」

「ついさっきまで仕事中だったからね」

「仕事って？」

「アタシは娼婦だよ、この前話さなかった？」

「もう止めなよ、身体を大切にされた方が良くよ」

「大切にするって……何を基準に大切なのだったら、アタシはこれから何をしたら良いのさ？ アタシは姉貴には頼らないって決めたんだ。アタシはアタシの生き方をするよ、これがアタシにあって
いるみたいだし」

「そう……」

「なんかさ、アタシに用があつてきたんでしょ？ 中に入りなよ」

「うん」

エールと共にノールは部屋に入る。

室内は雑然としていた。

ゴミなどは仕分けしているのだが、棚やクローゼットなど収納する物入れがあつたとしてもそこには戻していない。

「部屋、掃除したら？ ボクが今からやってあげようか？」

「これでいーんだよ、アタシは。この方が落ち着くの」

「そう……？」

とてもそわそわした様子で、ノールは周囲に散らかっている物を何度も見つめる。

「座つてよ」

ノールの自室と同じような四人掛けの高級素材で作られたテーブルの席をエールは引く。

「ありがとう」

そこに、ノールは座った。

「なんか飲む？ 紅茶で良いよね？」

「大丈夫だよ、エール。今はボクの話聞いてほしいな」

「えっ？ 何？」

ノールの口調からエールはただならぬ雰囲気を感じ取り身構える。

家族であるエールにはノールの口調、雰囲気からノールが怒っていると察することが出来た。

「エール、貴方にも言おうかと思っていただけ、この思いはやっぱりボクの中だけに残すよ。その方が良いのではないかと思ったから」

「アタシは何も悪いことなんてしてないよ」

「エールのことでは無いの。でも、とてもじゃない程許しがたい行為をした連中がいる……ボクが失敗った時にはエールにも、と思っただけ。でも、それはボクの甘えなの。ボクが解決しなきゃいけないだと分かったよ」

ノールからエールは何か普段とは別の雰囲気を感じ取っていた。

迷い、不安、そして今までの姉にはなかったはずの不思議な感覚。

「姉貴、もしかして愚痴を言いに来たの？ 聞いてあげても良いけど……姉貴には杏里がいるだろ」

「……………」

じーっと、ノールはエールを見つめる。

「あつ、何でもないよ」

何かを悟ったのか、エールは話すのを止める。

「エール、今さ、嫌なことってある？」

「嫌なこと？ あるでしょ、それくらい。普通、誰にだって」

「例えば？」

「アタシの身体だよ……以前見せたよな、身体。アタシはガイノイドなんだよ」

「身体を直す方法、ボクは知ってるよ」

「ええつ、どうやるのそれって？ アタシは人に戻れるの？」

「戻る。でも、エールは……」

「どうしてもつと早くそれを教えてくれないの？ 理由が知りたいけど。姉貴はさ、アタシが苦しんでいるのって知ってたでしょう？」

「知ってた」

「ちよつと……それ本気？ 知ってるのに助けないっていうの何だか知ってる、姉貴。そういう人って人でなしって言うんだよ」

「……………」

「アタシを直してよ、直せるなら」

「良いけど、条件があるよ」

「何なの？ 早く言いなよ」

「エールがガイノイドから人に戻ったなら、水商売はもう二度としないと誓ってくれるかい？ それと人に戻る方法を行えば、君はまた一度死ぬことになることも忘れないでほしいの」

悲しげな表情をしたまま席から立ち上がり、ノールは水竜刀を両手に表す。

刹那的に全身を覆い尽くす張り詰めたような殺意から瞬時に身体を捻るようにし、エールはその場を離れる。

「……………」

エールは言葉が出なかった。

ただ、自らの身に起きた事実を受け入れられなかった。

慕っている姉のノールから強い殺意を向けられていることに。

「エール」

エールとは目を合わさないように、ノールは視線を落とす。

「……姉貴もアタシのこと、殺すんだ」

「治すために殺すよ」

「ダメに決まってるだろ！ ていうか、アタシ本当に死んじゃうよ……アズラエルも相馬もいないのにここで“壊されたら”……」

そこまで、エールが話した時、ノールは天使化をする。

「ボクは天使なんだよ」

「……それがどうしたの」

「天使はね、ボクくらいの能力を持っていると復活の魔法リザレクを扱えるようになるの」

「そうなの……？」

「ボクに身体を預けてみないかい。勿論、条件は飲んでもらうよ」

「でも、死んだ人間が生き返るのにはアタシみたいな身体になんないと復活出来ないのにそんな魔法でとか……信じられないよ」

明らかに迷っている様子のエールは両腕から水人能力のように透明な液体を流す。

それは、流体兵器の発動だった。

透明な液体はノールと同様に具現化、さらに色彩まで付き以前エー

ルが扱った流体兵器はより強力になっていた。

「アタシ、もう分からないよ……人に戻りたいけど、死にたくない。姉貴の言ってること信じたいけど……」

天使化しているノールに流体兵器のノールが迫り、水竜刀を振り上げる。

右肩付近から深く切り抜かれ血液が吹き出ながらも、ノールは踏み止まった。

「エール、相手を黙らせようとしても向き合わないといけない時は、そこから逃げてはダメなんだよ。したいと感じたなら……しなきゃいけないと感じたなら」

「……………」

何もエールは語らなかった。

流体兵器のノールも本物のノールに水竜刀を斬り付けたまま微動だにしない。

「ほん……本当に、アタシは人になれるんだな……」

ポロポロと涙を流しながら、エールは泣く。

「信用するよ、姉貴のこと……ゴメンね……」

流体兵器がノールから水竜刀を抜く。

「でも、姉貴に殺されるのは絶対イヤ！ 生き返ったとしても、アタシそれだと姉貴の顔がもう見られなくなる……」

ノールを形取っていた流体兵器は消え、その代わりにノールの手元に流体兵器により作られた短刀が現れる。

短刀を両手で持つとノールは眼を閉じ、胸元辺りに短刀を突き刺した。

血を吐き、ゆっくりと床に横たわったノールは静かに事切れる。

「……………」

ノールの死体を眺めながら、ノールは黙っていた。

「ノール」

不意に入口のドアが開く。

嬉しそうな、どこか上機嫌な声でノールを呼ぶ声がする。

ノールの身体には自身の血が付着し、ノールの傍らには事切れたばかりのノールの姿。

それを確認した上での嬉々とした口調。考えられる人物は一人だけだった。

「どうしたの、ルイン」

「やっと本性を表したわね、やっぱりR一族はそうでなくちゃ。に

しても、惨たらしい殺し方。ただ殺すくらいなら頸椎を押し折って
終わりでしょう」

「今は消えてほしいな」

「人に物を語る表現ではないわね、R・ノール。私にも言葉だけで
人を殺せる方法教えてほしいなっ」

「ウザいんだよ、狂人。消えろ」

ノールの囁くような静かな声を聞き、ルインは懐かしい感覚に覆わ
れる。

ノールが自らよりも格上であるかのような存在に思えた。

ルインにとってこの感覚を与えられた者は今まででノールを除き、
ただ一人だけ。

「……怖いわ、今の貴方」

「だろうね、この口調だし」

床に横たわったエールの死体を背負うと、ノールは浴室に向かおう
とする。

「少し、私も冷静になれたみたい。手伝ってあげようかしら」

「これは、ボクにしか出来ないことだから」

「ノール、そろそろ寝よつか？」

何か、一人楽しげな雰囲気です杏里は語る。

声に反応し、杏里の方を見たノールは続けて目線を時計に移す。

丁度、時刻が十二時になりかかった頃だった。

「そうだね」

「じゃ、寝室に行こっか」

何故か杏里は相変わらず楽しげな様子。

「やっぱ、君は…」

「ん？」

「何でもない」

「さっ、行こっ」

手を差し出し、ノールの手を握ろうとする。

しかし、ノールは手を握らず、先に寝室に向かう。

「ノール、待ってよ！」

「えっ？」

少しかけ普段とは違う杏里の強い口調に、ノールは振り返る。

「今日のノール、どこか変だよ？　ずっとボクのこと見てくれないじゃない！」

「見てるよ、毎回。それに今だって」

「見てないじゃない！」

ノールの前に立ち、ノールの両肩に杏里は手を置く。

「ここにボクがいるんだよ、ここに！　困っていることがあるなら頼ってよ！」

「……………」

自身をしっかりと見つめる杏里から、ノールは視線を逸らす。

「ノール！」

「守るよ」

視線を逸らしたまま、ノールは囁く。

「ボクが君も、エールも皆も守るから……」

無意識にノールは涙を流していた。

仲間を守りたい、ミールの仇を取りたい、そう思いながらも考えは悲観に傾く。

本当は杏里に支えてほしかった、助けてもらいたかった。

だが、これから起こるであろう戦いのことを杏里には悟られなかった。

杏里を巻き込みたくない気持ちが気丈に振舞おうとする姿勢を取らせていた。

「誰かと戦うの?」

「うん……」

「ノールだけじゃなく、ボクや皆と一緒になら大丈夫だよ」

「うん……」

「いつ戦うの?　もしかしてクロノスやジェノサイドと戦うのかい?」

「戦うのは……数日後」

「相手が強大過ぎるもんね……ノールが不安になるのも分かるよ。でも、ボクは何だか燃えてきたよ」

「どうしてなの?　怖くないの?　死んじゃうかもしれないんだよ?」

「ボクらが勝てれば、ノールやボクたちの一族関連の人が犯罪者扱いされなくて済むからね。そうすれば、ボクとノールは毎日を安心して過ごせるから」

「……そうだね、君はいつもボクとは違う考えを持っているみたいだよ」

涙を流しながら、ノールは杏里を強く抱き締める。

「ボクに勇気をちょうだい……」

杏里の首筋に手を置き、くいつと少し上を向かせるとノールは杏里と口付けを交わす。

少しだけ長い、数秒間程の口付けだった。

支援者

翌朝早朝、ノールは一人リビングルームの高級木製テーブルの席に腰掛けていた。

ノールはアーティを待っている。

R・クアールとして戦う意志を決意したのか、恐れている様子はノールから微塵も感じられない。

「ノール」

部屋の扉をノックもせずアーティが開けた。

昔と変わらず、アーティにはマナーがない。

「やり直せ、アーティ」

「今は、そんなこだわりはどうでも良い。決心は付いたんだろうな？」

「決心は付いたよ。クアールとして戦う、クアールには勝ってもらわなくちゃね」

ノールの決心は固かった。

その意思が、アーティには感じられた。

「ノール、お前は凄いな」

「はっ？」

「決断力だ。人は通常、今のお前みたいに簡単にものを割り切れない。まして、あれ程クアールになることを恐れていたというのに……何かあったのか？」

「一日貰えれば、誰だって決心付くって。ボクでも決心付くんだから」

「違う、お前は強い女だよ、ノール」

「そう？」

「……R・クアールに変わってくれるな？」

「良いよ、今から変わる」

テーブルの席から立ち上がると、ノールは覚醒化する。

瞬時に瞳の色が銀色に変わり、ノールを覆うオーラも強力なものに変化した。

その時だった、ノールのオーラ自体が変化したのは。

「ノール？」

「いいえ、“私”はクアール。ノールは私に身体を預けてくれました」

「クアール……様？」

焦った様子で、アーティはクアールの前に跪く。

「クアール様、今まさに決起の時。クロノスを打倒しましょう」

「分かっています、アイザック。私も今この時だと思っています」

「クアール様は、アイザックを知っておられるのですか？」

「えっ？」

問い掛けに、クアールはアーティを見つめる。

「貴方はアイザックのご子息……の方ですか？」

「はい、アーティと申します」

「そうでしたか、アーティ。では、アイザックは？」

「私が幼い頃に他界しています」

「そうでしたか……」

「現在生き残っている者たちはアクローマ、アズラエル、ミトス、ドレッドノート、相馬、私の僅かに六名。もう既に戦うこと自体ギリギリの状態です」

「困りました。しかし、同志たちがまだ戦いを望んでくれるのならば私は全力で戦います」

「無論、戦いを望みます。私たちは貴方と、貴方の意志のため命を懸け、戦う所存です」

「有難う」

そう、一言だけクアールは語った。

ノールから転生により、クアールへと変わったクアールにはすべきことがあった。

ノールが望んだ通り、そして自らもいずれ行うはずだった、自らを殺し総世界を間接的に支配している者タルワールを打倒することである。

「そうね……」

R・クアールは片手を胸辺りの高さまで掲げ、掌を閉じたり開くなどして何かを確認する。

「この身体も、ようやく私に馴染んできた……意思疎通を出来たかなのでしょうか？」

そう囁くと、R・クアールは眼を閉じ自らの身体をギュツと抱き締める。

「ノール、安心してください。貴方のミールも私が必ず取り戻すから。貴方が目醒めた時には全てが元に戻っているから……」

ゆっくりと眼を開き、身体から手を離すとR・クアールはアーティ

を見つめる。

「私は数名の者を引き連れ、共に戦います。そこで、貴方方には先んじて戦いを行ってもらいたい。」

「数名の者とは……私たちよりも頼れる者なのですか？」

「いいえ、目を逸らさせることに意味があります。貴方方六名が同時に戦いを始めるということは大規模な戦が始まるのと何も変わりません。まず、間違いなくクロノス側は貴方方六名を死に物狂いで殺しにかかるでしょう。そして、私が引き連れる者たちは貴方方六名より弱い。待っているのは間違いなく死、それ以外無いでしょう」

「だったら尚更、私たちがクアール様をお守りしなくては……」

「いいえ、追い詰めたという感覚を与えられれば良い。私たちなど、囿に過ぎません」

「クアール様が？」

アーティにはクアールの語る意味が分からなかった。

アーティが考えていたことは、他のR派と同じくクアールを守りつつ戦うこと。

クアールを引き連れ、クアールのスキル・ポテンシャル“権利”により、相手を無力化し一網打尽にするという案だった。

それが、アーティ他五名の案。

クアールも同じ考えに至っていると思っていた。

「しかし……ノールがよく望んでくれました。彼女の働きが無ければ、私は転生さえ出来なかった。彼女の意志の強さが分かります」

「……では、そろそろ行きましょう。クロノスへ」

「ふふつ、エスコートはいりませんよ」

「そうでした……必ず、勝ってください。クアール様だけが、私たちの希望なのです」

真剣な表情で、アーティはクアールに語る。

クアールに一礼し、空間転移を詠唱すると、アーティは現れたゲートに消えた。

「今、誰かと話していませんでした？」

入れ替わるように、ジャスティンが室内に入ってきた。

室内に何かの気配を感じたのか、ノックなどの確認は取っていない。

「うん、アーティと会っていたよ。これから、ボクらはまず最初に仲間を集めるんだ」

「“ノールさん”、昨日と明らかに感じ変わりましたね。昨日は全然オーラも情けない感じだったのに。僕もモチベーション高けりゃ良いんだけど……やっぱり、怖いです」

「ボクも怖いよ。命はいずれ尽きるものだから。それよりも怖い」とは皆を救えなくなってしまうこと」

「ミールや杏里さんのことですか？」

「そつ」

クアールは表情に頬笑みを浮かべた。

「それじゃ、仲間を集めに行くよ」

空間転移をクアールは詠唱する。

ジャスティンと合流したクアールの空間転移により、辿り着いた先は魔界。

場所は魔界の邪神であるルミナス邸内部だった。

R・クアールには打倒タルワールを成し遂げるため、支援者が必要だった。

その役割を為す者としてクアールに選ばれたのが、ルミナスであった。

当然、ルミナス側はクアールがここに来たことを一切知らない。

「ルミナスは何処だろう？」

邸宅内をクアール、ジャスティンは彷徨う。

そして、クアールは偶然見付けた書斎へと無言で入った。

「あつ、いた。ルミナス、元気だったかい？」

手を振りながら、クアールは書斎で書籍を読んでいたルミナスに近寄る。

そんなクアールの存在に気付いた時、ルミナスはクアールと全く真逆の鬼気迫るような表情をした。

「ど、どう……どうして貴方がここにいるのおお　！」

読んでいた書籍をクアールの方へと放り投げ、書斎の壁際までルミナスは逃げる。

「この邸宅には貴方みたいな狂った水人が二度と入れないようにしていたのよ！　なのに、どうして貴方は入ってこれるの！　イヤ！　もうイヤ！」

クアールを見るなりしゃがみ込むと、ガタガタと震え出す。

ルミナスの見せた恐慌状態から、自身を確認しただけでどれ程の戦慄が彼女を襲ったのか何となくクアールには分かった。

「ホントに、いきなり酷いものだね」

余りにも酷い対応なので呆れたように、クアールは語る。

「貴方の中のノールは一体どんな存在なのさ？　まるで怪物にでも出くわしたみたいじゃないか。どっからどう見ても、ただの女の子

じゃない」

「ただの女の子……？」

顔に手を置き、その隙間からクアールを見ながら考え始める。

「そうね……そうだった。貴方は水人。せっかく仕掛けたクリーチヤートラップにかからなかったのもそのせい……」

「いや、本当に貴方の中のノールってどんな存在なの？」

「一体何しに来たの？ 脅し？ たかり？ 私を苛めてそんなに楽しいんだ？ お金ならあるわよ、どうせ欲しいんでしょ？ それとも何？ 今度は身包み剥ぎに来たの？ 貴方っていう人は本当に最低ね」

「相当嫌われているみたいだね。そんな話はどうでも良いんだけど。今日はね、貴方と以前約束した通り、貴方にしてもらいたいことがあるから来たの」

「知らない、そんなの。もう帰ってよ」

「怒るよ？」

「い、いやよ！ 貴方と関わると絶対酷い目に合うもん！」

「だったら今すぐに酷い目に合ってから行動を共にするか、それともこれから一緒に行動するかの二択でどっちが良いかを考えて」

「や、やだ……そんなの。私じゃない人を誘えば良いじゃない！」

私は貴方よりも弱いし、別にいらないでしょ！」

「貴方が良いの。実力も能力も確かなものだし。さあ、一緒に次の場所へ行こう」

「やだつて言ってるじゃない！」

「そう、残念だね」

クアールは水人能力を駆使し、水竜刀を作り出す。

「貴方には、今から痛い目に合ってもらいます」

水竜刀の切れ味を試すように宙へ二度振ってから、ルミナスに近寄った。

既に間合い、水竜刀の一振りで、しゃがみ込んでいるルミナスを絶命せしめる範囲だった。

「死にたくない。私まだ死にたくないよ。一緒に行くから許して……」

怯えたような震えた声でルミナスは許しを請う。

「許すもなにも、貴方の優しい意思をボクは尊重するだけだよ。有難う、ルミナス」

水竜刀を消し、可哀相なくらい怯えているルミナスを抱き締める。

「……前もだ、私を脅す時のパターンが同じじゃない」

「脅しているだなんて、そんなことないよ。ボクはルミナスのことが大好きだから。けど、こんなにもルミナスのことが大好きだと感じているノールの願いを断る……そっちの方こそが脅したとボクは思うよ。ボクの心は今まさにルミナスの脅しに屈しそうだよ」

「わ、分かったわ。私はノールに尽くすから、今回の件が終わったら貴方はもう私という存在がいたことを忘れて欲しいの。貴方に手を貸すからそれだけは絶対に約束して……」

「良いよ、“私”は忘れてあげる」

「……………？ 私は何をどうすれば良いの？」

「やっぱり、貴方は適役ね。立ち直りが早いし、即座に行動へも移せるなんて」

「どうして私は強くなっちゃったのかな……こんなことになるなら普通の女の子でいた方が良かったのかな……？」

「そんな口にしなくても良いことは、ホントにどうでも良いとして貴方にはクロノス本拠へ一緒に来てほしいの。戦いになるから軽くウォームアップしといて」

「クロノス本拠へ……って貴方は何を言っているの？ 戦うなんてしたら総世界中に大悪党として私たちのことが知れ渡っちゃうよ！ 第一、もう生きて帰られないじゃない！ ミトス、私を助けて……」

「あの、そろそろめんどいから話を一旦切っていいですか？」

「ちょっと、私の話を聞きなさいよ！ 私はまだ聞きたいことがあ

るの！ 行く決心だっしてないわ！」

「ボクは今から他の人に話を通してくるから。あー、そっだ、ルミナス？」

「何よ、人の話も聞かないで！」

「もしね、もしの話だから本当に有り得ないことだけど、先に言っておきたいことがあるの。お願いだから怒らないで聞いてね。もしね、もし逃げたりしたら……絶対に許さないから」

何故か強い殺気をクアールは放つ。

「……………」

再びルミナスは怯え、恐怖のせい何か何も話せなくなった。

次にクアールは怯えて前も見れないようになっていくルミナスを完全に無視する形で、ある人物へとノールのケータイで連絡を取る。

掛けた相手はジャスティンの兄、ヴェイグである。

ヴェイグは過去、モンスターハンターを辞めた時にSPとして活動すると話していた。

それをクアールはノールの記憶を辿り、把握していた。

「ヴェイグ、話があるの。とても大きな仕事だから良かったら会わない？ 貴方の力がどうしても必要なの」

さらさらっと甘言を口走りながら電話を掛ける。

「へー、兄貴のことも呼ぶんだ。兄貴って強いのかな？」

「ジャステイン」、君の言っている通りヴェイグは強いよ。とても頼りになるんだから！」

ジャステインもいるということを利用し、ヴェイグにクアールは是非会いたいということを伝える。

その光景を眺めながら、クアールに今すぐ死んで欲しいとルミナスは思っていた。

死地へ向かう者

現在、クアール、ジャスティンの二人はエリアースの過去に所属していたハンター養成所近くのレストランフード店にいる。

エリアースなら気軽にヴェイグを呼び出せると考えたからだった。

四人掛けテーブル席でクアールはコーヒーを飲み、ジャスティンはハンバーガーセットを食べている。

「待たせちゃったかい？」

ノコノコとやってきたヴェイグが親しげな声で話し掛ける。

「やあ、ヴェイグ。元気してた？」

「“ノール”、どうしたの急に？ オレの力を貸してほしいって言うだけだ」

ヴェイグはスーツ姿だった。

以前の優男風の体裁とは異なり、スマートにスーツを着こなすイケメンになっていた。

「仕事中？」

SPとしての仕事が終わった、または継続中なのか、それともただ普段から着ているのかは分からないがスーツ姿がクアールには印象的に映った。

「いや、終わったよ。今日も特に何もなし。オレの故郷エリアスはどうも平和らしいんだ」

「終わったってことは仕事があっただよな？」

「まあね、でも軽いものさ。この世界は銃撃戦にしか興味がないらしい。空間転移で背後に回って手刀を打てば、はい終わり。オレにはやっぱり以前のような息つく間もない戦いの方が向いているんだろ？」

クアールとジャスティンの座るテーブル席に向かい合うように、ヴェイグも席に座る。

「兄貴、着ているのブランド物ばかりじゃん」

「ああ、そうだよ。オレみたいに格好良い男はブランド物を着用しなきゃダメだろう？」

さり気無く指先で軽く眼鏡を上げる。

そのさり気無い行動でスーツの裾が捲れて見えた腕時計も高級品であった。

「うわっ、なんか兄貴、本当に変わっちゃったね。ブランド品なんてあんなに嫌いだったのに、この前会った時とはもう別人だよ」

「そうかな？ にしても、ジャスティン。相変わらず可愛いな」

「あははっ……」

明らかに微妙な愛想笑いをジャスティンは表情に浮かべる。

「あれ？」

何故か不思議そうな感じでヴェイグはジャスティンの反応を見ていた。

「ヴェイグ、貴方にはしてもらいたい仕事があるの」

「どんな仕事？ まっ、軽いものだったらやってあげてもいいよ」

「軽い仕事じゃないの。そう、とても大きな一世一代といっても過言ではない程の仕事。参加してくれるのなら貴方には一億の謝礼金を払うよ」

「参加します」

「はやっ、まだボクはお金のことだけで何をするかさえ話してないよ？ 君の両親はお金持ちってジャスティンから聞いたけど、貴方の見掛けからお金に困ってる訳じゃないでしょ？」

「だってさ、一億も報酬としてくれるんだろ？ それだけの仕事ならオレの名を総世界に広く知れ渡せる良い機会だ。断る理由が無い」

「戦いを仕掛ける先がクロノスであつても？」

「クロノス？」

ヴェイグの表情が険しくなる。

「バカ言つなよ、クロノスなんて言ったら総世界政府じゃないか。第一、ノールは連中のブラックリスト入りしているんだぜ……しかもトップ級犯罪者として。そんなところ行く必要なんてないだろう、行ったとしても捕まるだけだ」

「行くよ、こつちには十分過ぎる理由があるの」

「えー、マジかよ？　どうかしてるって、あんな場所にお前みたいな立場の奴が行くなんて。つかさ、ノールは今までだって色んな奴に追われていたんだろ？　あの腰抜かすくらいの賞金なんだからな」

「うっん、ボクの周りには一度として賞金稼ぎやボクを狙った能力者は現われなかったよ」

「ウソだろ？　今だってお前、全く周囲を警戒だつてしてないし……」

「世の中にはね、何者の感知力を凌駕する能力があるんだよ」

自慢げにクアールは語る。

彼女の話す、凌駕する能力とはR一族の覚醒者のみが扱えるスキル・ポテンシャル“権利”である。

余りにも高い汎用性から、扱えるパターンも多岐に渡り、略最強と語っても申し分ない程。

しかし、ノールはまだ権利を扱うことは出来ない。

今までノールがクロノス、ジェノサイド関係者や賞金稼ぎなどから襲撃を受けなかったのはクアールが無意識のうちに能力を発現していたからである。

それはクアールがノールのうちに宿ってから、ある出来事を境に現在まで続いている。

「ああ、そうなのか。悪運が強いな。それってもしかして、スキル・ポテンシャルって奴？」

「そうだよ、ヴェイグはもう使える？」

「いや、全然。人は誰しもスキル・ポテンシャルを有しているって聞いたことがあるけど、オレにはそのチャンネルが無いんだか全く発揮出来ていないんだ」

「なにその、チャンネルって？」

「えっ、言わない？ こういう風に？」

「全然？ それはそうとさっきの話だけだし、君と一緒にクロノスへ来てくれるのならスキル・ポテンシャルを開花させてあげても良いよ？」

「でもな……クロノスに……」

「君はボクに脅されて雇われただけ。相手がR・ノールなら仕方ないと思われて、君は恩赦を得られるよ。続けて、R・ノールと出会っても生き延びられたとなったら君の株は上がる。これなら文句はないはずだよ」

「それで、ノールは良いのか？」

「勿論。勝てるからそれで良い」

「何だ、勝てるのか。だったら良いよ、乗った。オレも色々とサポートさせてもらうからな」

「有難う。それじゃあ今から魔界へ行くよ。もう一人、今の話を優しく快諾してくれた協力者がいるから」

「来たか……」

異世界空間転移により、魔界のルミナス邸宅前に着いたクアールたちをルミナスは出迎えるような形で待っていた。

支度は整っているようで、過去にノールと戦った際に着用していた黒いドレスを身に纏っている。

「そのドレス、懐かしいね。仕込みが多そうな服だから期待できるよ」

「そうね。このバトルドレスには様々な仕込みをしている。戦いでは私、負けたくないし」

「ボクには簡単に負けたけどね」

「そうね……」

「もし他の誰かに負けたら……許さないからね」

「それって、私を鼓舞するために言っているんだよね……」

「本心から言ってます」

「……………」

「ところで、ノール。この見目麗しい貴婦人は魔王ルミナスじゃないのか？」

以前のことを思い出したヴェイグがルミナスを觀賞しながら答える。

「そうだよ、ヴェイグ。君を魔族にしてくれた良い人だよ。ついでにルミナスは今では魔界最高権威の邪神だよ」

「へー、そんな権力者がノールの願いを聞いてくれたんだ。ノール、お前は顔が広いんだな」

「そうだね、ルミナスは気の置けない程にとっても優しい人だから、ボクの話聞いた途端依頼を無償で快諾してくれたんだよ。本当に優しさというものを具現化したような人だね」

「ウ、ウソだ……そんな訳無い……」

「ボクはそう思っているんだから、ルミナスもそうだと思ったけど……違うかい？ やっぱり、ルミナスは優しい人だよ。そういう謙虚さは、人の上に立つ人にもあるんだと凄く実感できたよ」

「ち、違っ……どうしてそう取るの……」

「皆、今からクロノス本拠に行くよ。準備は良いね？」

「ああ、オレは全然大丈夫だけど」

「僕も大丈夫。緊張しているけど必ず勝つつもりだから」

ルミナスをスルーして、勝手に話が進む。

ルミナスは啞然とした様子で話を聞いていた。

「皆、準備は良いかしら？」

クアールが味方となる者たちを集めていたその数時間前、高級ホテルのスイートに複数の人物が集まっていた。

彼らは生き残りのR一族関連の者たちである。

「準備は皆、整っている。空間転移を頼む、アクローマ」

「ええ、分かったわ。ドレッドノート、貴方は以前のルイン戦みたいにわざとらしく死なないように」

「ふん……」

過去に敗北を喫し、殺害された者の姿が見受けられる。

アクローマ、ドレッドノートにとってあの時の死は偽り。

自身らのスキル・ポテンシャルによって見せ掛けただけのものに過ぎなかった。

「アクローマ、相馬の姿が見えませんが…」

「相馬？ 死地へ向かうというのに戦闘向けではないドールマスターがいる必要などないわ。身体は、たった一つしかないのよ」

アズラエルの問い掛けに答える。

「貴方の場合、身体は複数ですけどね」

「まーね」

「アクローマ、空間転移を頼む」

「はいはい」

めんどくさそうにドレッドノートの受け答えをすると、アクローマは空間転移を詠唱した。

直ぐ様、アクローマたちはクロノス本拠地の郊外に辿り着く。

クロノス本拠地は城や要塞などのように防衛特化の形を取っていない。

クロノス全体像は、一つの大きな都市であり誰でも住もうと思えば住める環境。

「一見、何も警戒態勢が敷かれていないように見えるが当然そんなことはない。」

「タルワールやジリオン、ゲマなどに認められた強力な能力者たちが数十万という。」

「アズラエル、ミトス、ドレッドノート、アーティ。指示が出せるのは今だけだろうし、私がまとめ役みたいな役割だからこそ言わせてもらおうわ。貴方たちの命は何のためにあるのかしら？ そう、R一族の、クアール様のために死ぬためよ。命を懸けなさい、自らの誇りを汚そうとも卑しいくらい悪あがきをし敵を殺すのよ。私たちが出来るのはただそれだけでも、R・クアール様が必ず私たちを救ってくださいるわ」

「……………」

無言のまま、全員が頷く。

「では、ドレッドノート。先手必勝の策を頼むわ」

「了解した」

ドレッドノートは元から無限に匹敵する魔力をさらに高める。

高めた魔力を駆使し、一瞬の内に大軍とも言える幻人の軍隊を作り上げた。

スキル・ポテンシャル“パンデミック”の発動であった。

「行け、幻人たち。何の遠慮もいらん、奴らはただの死にたがりだ。願いを叶えてやれ」

幻人の大軍は、ドレッドノートの話聞き終わると各々が空間転移を詠唱し、クロノスの都市全体に散っていった。

「空間転移まで扱えるのね、あの半透明」

アクローマが呟く。

「それ程、強力だという訳だ。今では、一体レベル七万程度まで押し上げられるようになった。複数の世界を潰した甲斐があったというものだよ」

「ミトスが貴方みたいなのを自由にさせていたのには驚きね」

クロノスの全体から爆発音などが聞こえ始めてから、アクローマ以外の全員がクロノスの都市へと散っていった。

「さて、皆は戦いに行ったわね……エージさん、貴方は戦う意志が固まったかしら？」

「……うん、でもオレが戦うのはR一族のためなんかじゃないよ」

一人静かに佇んでいたエージが語る。

耳や尻尾を垂らし、その小さな身体をふるふると震わせる姿が恐れを抱いているようにアクローマには映った。

「それで結構よ、結局のところ戦う相手と同じだけっていうことなのだから。貴方の好きなようになます鱈にでもしてやれば良いの」

「実はね、オレは怖いんだ。戦うのって久しぶりで、どうなるかもう自分でも分からない。怖いんだ……本当に……」

小さい身体を可愛らしく震わせる。

エージからは全く殺気や闘気などが感じられない。

過去にルインと同程度と謳われた者だが、それが嘘なますだと思えなかった。

「恐れがあるのなら、エージさんは意志を保てるはずよ。恐れず、どんどん進むようでは貴方の方が怖いけどね」

「自分を保ってみるよ……怖いけど」

「では、行きましようか。皆は既に死地へ向かったようだしね」

力の差

アクローマらが戦いに向かってから数時間後、クアールたち四人が、アクローマたちが現れた場所と丁度反対側に位置するクロノスのエリア区に現れた。

遠目に見える近代的なビル群が立ち並ぶ別のエリア区からは次々に燃え広がる火の海、立ち昇る黒煙が周囲一帯を覆っている。

さらには爆撃のような音がこのエリア区にも絶え間なく響き渡っていた。

「あー、至るところから爆発音が聞こえるね」

どこか楽しげに、クアールは語る。

クアールの言葉にジャスティンはどこか違和感を覚えた。

「誰か、僕たちの他に戦いを挑んだ人がいるんでしょうか？」

近代的な街中での市街戦を今まで見たことのなかったジャスティンは戦いの様相に少し圧倒されている。

「そのようだね」

「辺りは僕の故郷エリアースのような近代的な街と何も変わらないのに戦場……もしかして、こんなところを進むの？」

「命が一つや二つでは足りないくらいだね」

「そうだな。確信犯共は現在三名程との情報があるのだが、全くやれやれだよ。どうやら片道分の命しか持ち合わせていないようだ、彼らは」

他の三人以外の誰かが答えた。

声がする方を四人は反射的に確認する。

その場には巨躯の体格を有した男性がいた。

「私だ。今、任務から戻ったところだ。貴様らもこの場にいつまでもおらず、迅速に対応するように……とは言ったもののジエノサイドの者がどうかも私は聞いてはいなかったな」

彼ら四人の前に現れた男性は、ジエノサイドの執行官兼大臣のジリオンだった。

クロノスの実質上最強とも名高い強さを誇る彼が、何故四人の前に現れたかは定かでないが初っぱなから四人は最悪な状況に置かれていた。

「と、まあ……そのような前置きは終わりにするか」

地面を蹴り、瞬時に大剣を抜刀。速攻でジリオンはクアールに迫る。速度は恐ろしく速い。並みの者では何かが隣を横切ったとの思いに至る頃には既に死を迎えてしまう。

しかし、ジリオンが四人を横切った時、倒れたのはジリオンだった。

「おつそろしい……わ。水人でなければ、この身体でも一撃だった……」

クアールが態勢を崩し、地面に片足を付く。

クアールの身体、右肩側に裂傷痕の形跡があった。

身体を右肩側から一気にぶつたぎられる瞬間、クアールは水人化。

その際に数発カウンターを行い、攻撃を仕掛けた側のジリオンが地面にひれ伏したということだった。

「おい……どうしてあの男がオレたちの後ろにいて、誰かに倒されたみたいになっているんだ？」

ヴェイグには全く対応出来ていなかったようで、呆然とジリオンの方を見ている。

「不味いよ、兄貴。今のに驚いているようじゃ幸先の良いスタートは取れないって。はつきり言うけど、もう帰った方が良いよ」

「だ、だよな。ジャスティンも早くこっから帰るんだ、分かったな？」

早口で空間転移を詠唱すると、ヴェイグは消えた。

「なんか、役に立たなかったわね。貴方のお兄さん」

「だね、今のは忘れてほしいな」

無理やり連れてこられたルミナスの率直な言葉を聞き、ジャスティンは非常に申し訳なく思えた。

「……ところで、彼がまだ生きているみたいなのよね。誰が戦う？先に言うけど、私は御免だわ」

シリオンを警戒しながら、ルミナスは訊ねた。

「ジャスティン、君にはさっきの攻撃が見えたね？ 対処は出来そう？」

地面に片足を付けて、休憩していたクアールが立ち上がり聞く。

「今のところ五分五分かな……彼とは僕の戦い方が全然違うし」

「それじゃ、ジャスティン。ここで君は死んでくれないかい？ ボクとルミナスにはまだしなきゃいけないことがあるの」

「死んでって……」

「ボクらと君の命の時差は少ないよ。こんな感じ」

頬笑みながら、クアールは右手の親指、人差し指で、その短さを伝える。

「今、ようやく分かったよ……変わっていたんだね。“ノール”さん」

「とやっ……」

ジリオンは掛け声を上げ、倒れていた状態から一気に立ち上がる。

「どうした、オレがわざわざ隙だらけだったんだ。何故かかってこない。怖気付いたのか？」

挑発をする。

しかし、ジリオンは先程のダメージを隠しきれてはいなかった。

「あー、あれくらいなら負けないよ」

「よし、ジャスティン。お願いするよ」

ジャスティンを置いて、クアール、ルミナスは市街地の中を進む。

「逃げられたか」

「僕が相手をするよ」

「貴様らは何者だ？ 他の確信犯共と同じく、目的は変わらずか？ ノールがどういう人物なのか、分かっているのか？」

「ノールさんは優しい人だよ、意気地なしだけど。貴方の思っているようなイメージとは違う」

「イメージが問題ではない。能力が目覚めてしまっ、それが問題なのだ。能力の汎用性はいずれ全てを巻き込む。独裁が当然だと思いだまされ、その通りにしか考えも行動も取れなくされては困るのだよ、こちらは」

「さつきから何を言っているの？ 能力の話なの？」

「傭兵か……」

何かを悟ったのか再び大剣を両腕で握り、ジリオンは身構える。

「では、行くぞ」

先程と同じく、ジリオンは迫る。

動きは単調そのもの。

人を薪に例え、両の腕で握られた大剣を己の背面まで振り上げ、一気に叩き割るといった攻撃方法だった。

だからこそ、ジャスティンにとっては楽な相手であった。

「大体、半歩かな」

ジャスティンは半歩程、背後に下がる。

紙一重に匹敵する程のタイミングでジャスティンが先程までいた位置に大剣が地面を割り、深く突き刺さる。

ジリオンは一気に大剣を引き抜くと、横一線に振り抜く。

再びそれを紙一重なのだが何の造作もなく、ただしゃがみ込むだけでジャスティンは躲した。

大剣を躲すと、ジャスティンは大剣を降り抜き隙を作ったギリオンにタツクルを仕掛け、携帯していたナイフでギリオンの胸を貫いた。

「大抵は……これで死ぬんだけど」

ギリオンに蹴りを加え、蹴り倒す際の勢いでナイフを引き抜き、即座にジャスティンは距離を取る。

「いや、死んだよ、そいつは。実に見事だった」

正面の通りに、見覚えのある姿が見えた。

「どうして貴方が……」

「能力発動、といったところだ」

正面の通りから歩んでくる者、それは紛れもなくギリオンだった。

「貴様の能力は、悟りだな」

「貴方も能力を？　というか、初めて会う相手に貴様呼ばわりはな
いんじゃないの？」

「ん？　そうかな？」

少し言葉に詰まる。

「軍紀の下で少々癖になっていたようだ、済まない。君の能力は、
悟りのようだな」

「そう、でもそれが分かったからといって貴方の攻撃は当たらないよ。魔法を扱ったとしてもね」

「それでも魔法は扱うさ、リザレク発動」

倒れていたジリオンが立ち上がる。

「もしかして、生き返った……？」

「オレだって生物だ、生き返ることは出来る」

生き返った方のジリオンが答えた。

「まだ二体だけが戦いを止め投降するのなら、生かして返そう。もし、その気があるのならば、君もジェノサイドに入ってくれないか？」

「貴方の一存で、僕みたいな敵もジェノサイドに入れるの？」

「当然だ、君は何も知らずにクロノスへ来たのか？ ジェノサイドはオレが作り上げた組織だ」

「貴方がジェノサイドの……ということは、R・ノールの弟R・ミールを殺した人物を知っていますか？」

「オレだ、ジェノサイドは肅正を行う組織だからな。オレの命めいなくして、人は動かん」

「成る程……成る程成る程。実に明快だね。貴方が首謀者……」

血に塗れたナイフを構える。

ジャステインに強い殺意が芽生えていた。

「貴方を絶対に許さない。必ず僕が殺してやる」

「怒りに身を任せるな、寿命が縮むだけだ。それはそうとかかってくるのならば、オレはそれなりの対処を行う。安心しろ、リザレクは扱える。しかし、次に目を覚ますのはこの戦いが終わってからではあるが」

「……………」

睨み付けると、ジャステインは駆け出す。

正面に現れた方のジリオンに接近していたが目前まで迫った時、即座に天使化し、空へと飛翔する。

もう片割れのジリオンが背後から先程同様に大剣を一直線に振り切るイメージがジャステインに浮かんだのだ。

当然、悟りによるイメージなのでそれは起き、また紙一重のところ
でジャステインは大剣の一線を躲せた。

「空間転移……………」

詠唱なしで空間転移を発動し、普段のスローイングナイフでの戦い
方を行うため数本のナイフを両手に現わす。

そこで、ジャステインは不思議な光景を見た。

先程、自らを真つ二つにしようとしていた側のジリオンにもう片割れのジリオンが大剣を突き刺していたのだ。

当然の如く生き絶えるジリオンを眺めながら、大剣を突き刺した側のジリオンが語り始める。

「神聖魔法を扱えるが、オレは天使族ではない。オレは空を飛べないんだ……当然、畏だよ、畏」

次の瞬間、激しい勢いでジャスティンの背後から何かが組み付いた。両脇から腕を通し、後頭部で手を交差されているため背後を見ることさえ叶わない。

「良いのだ」

ジリオンが空中にいるジャスティンに向かって、全身を扱って大剣を投擲する。

狙い澄まし放たれた大剣はジャスティンの腹部へ突き刺さり、ジャスティンは地面へと落下。

「勝負あり……だな」

ジャスティンに大剣を振り投げたジリオンがそう囁くと他のジリオンらは全て消えた。

そして、ジリオンはジャスティンに近付く。

「まだ、生きていたのか。一撃で仕留めたつもりだったが…」

口をパクパクさせ何かを呻きながら、もうすぐ生き絶えるであろうジャスティンに語る。

「放っておいても一分かそこらだろう、しかしだ…」

ジリオンはジャスティンの首筋に両手を掛け、頸椎を折る。

「私は、その状態を放置し苦痛を長引かせるなどしたくない」

戦いを終えたことによるのか、ジリオンの口調は変わる。

「では、いずれまた」

クアールたちが向かった先へ、ジリオンは駆け出す。

クロノス本部へ

「ジャスティン、死んだかもね」

現れた場所とは別のエリア区まで進むと、クアールが思い付いたように語る。

「あんな若い子でも連中は殺すのね……残忍で容赦が無いよ」

「ルミナスがボクに向かって語れる台詞じゃないと思うけど、それって?」

そう語った後、クアールは口元に手を置き、驚いたような反応を見せ立ち止まる

「どうしたの?」

クアールが立ち止まったのに気づき、ルミナスも立ち止まり振り返った。

「いいえ、何でもないの。私の間違いよ」

「……………?」

再びクアールが走り出し、ルミナスもそれに続く。

「でも、ジャスティンのお陰で色々と分かったよ。やっぱり、この空域全体に空間転移を行えないようにされている。さっきの人物が私たちと同じ場所に現われたのも頷ける」

「ところで、私たちは何処に向かっているわけ？ 私は貴方に付いてきているだけだし、そろそろ教えてもらいたいところね」

「行先は、クロノス本部だよ」

「場所は？」

「私が過去に住んでいた場所。ここはとても、とても懐かしい場所だよ。街の風景や街並みは例えどんなに変わってしまったても私には分かる」

「……ノールってさ、勝手に調べさせてもらったのだけどテイストのグラール出身じゃなかったっけ？ 結構前にアクローマ様が話していたような気が……」

「ああ、そうだったね」

仄かに笑みを浮かべる。

「実は水人検索を行ったのよ。タルワールの居場所を掴むためにね。それで場所がここだと分かった」

「タルワール？ 誰よ、それって？」

「私が殺したい程に憎い相手よ。今からそれを実行しに行くところ」

「そう……貴方も大変ね。その若さで人を憎んだり、殺したりって。私の若い頃とは大違いだわ」

「もとより、このようになる運命だったのだと思うの。私がR一族に反抗し、あの体制を一新させた時から、いずれこうなるだろうとは分かっていたから。ただ、対処が出来なかった……それが原因で同志たちは……」

「R一族同士で戦ったの？ 変なことをするのね、貴方。血の繋がりのあるもの同士、仲良くやりなさいよ」

「彼らは権利に縋り、乙のが私利私欲のため、快樂のために総世界を屈折させていた。私は一族を裏切るであろう行為であったとしても、全ての人たちに平等と平和をもたらしたかった……人々が貧困や飢えで当たり前のように死ぬのは、もう見ていられなかったの」

「貴方、ノールなのよね？」

本心から、すらすらと語っているクアールにルミナスは違和感を覚えた。

「私は、ノールよ。これからもずっと」

「そう……？ 何か違和感があったの。貴方が別人みたいなの」

「それはそうと、ルミナス。貴方にもジャスティン同様に死んでしまふ可能性があります」

「えっ？」

呆然とし、ルミナスは聞き返す。

「私が殺すのではないよ。もし、私がダメだった場合は殺されるっ

てこと。だから貴方と私が死なないように今から言うことを言った通りに実行してもらいたいの」

「な、なにそれ？ そんなことをどうして今になって言うの？ 私、死にたくな…」

「仕方ないね、帰ってもいいよ？」

「えっ？」

「今なら帰れるよ。さっきの男性と戦う羽目になるけど。ここでは空間転移を扱えないし」

わざとらしく、クアールは笑顔で語る。

「だったら貴方と一緒に行くわ…」

「それで、ルミナスにしてもらいたいことは私にリターンを掛け続けてほしいの。間隔は魔法詠唱、魔法発動前までの間を連続で」

「連続魔法ね、私の魔力が続く限りの。ところで、リターンの契約は済んだことだしどういう魔法を扱うのか教えてくれないかしら？」

「デスメテオという暗黒魔法。魔力を身体から絞り尽くす程に消費するけど、扱えば勝機が見込めるはず」

「私は魔族だけど、そのような暗黒魔法を知らないわ。聞いたこともない」

「貴方では当然でしょう。だって弱いもの」

再び、クアールは笑顔を見せる。

「そうね……貴方にそう言われてしまっっては何も言えないわ」

「嘘よ、この暗黒魔法は一子相伝なの。覚えるとかそういう類のはなく、R一族のある成長を遂げた者だけが扱えるの。というか、もっと早く走りなさい。ジャスティンの死が無駄になるでしょ」

「……………」

何となく微妙な感じで、ルミナスはクアールと共に続く。

「あのさ、私、思うことがあるの」

「何かしら？」

「どうして、私たちに誰もかかってこないのになって。やっぱり、畏じゃない？」

「私としては魔力を消費しなくて有難いんだけど？」

「そりゃあ、そうね」

「ああ、あれよ、あれ。私の家」

走りながらクアールはある方向を指差す。

周囲が近代的な発展を遂げた街並みだというのに、そこだけ歴史ある宮殿がそびえ立っているという不思議な光景。

そこは街中に突然別空間が現われたような場所だった。

「宮殿だなんてここだけ何か浮いている……にしても、ここから向こう側は酷い有様だわ。一体どうやったらあのように破壊ができるのかしら？」

ぼんやりとルミナスは今まで自分たちが通ってきた街と同一な風景を保っていたであろう方向を眺める。

その方向はクアール、ルミナスらが現われたエリア区とは丁度反対側に位置する、アクローマらが現われたエリア区。

元々あったであろうビル群や建物は既に倒壊し、原型を保てぬ程に瓦解している。

爆発によるもののせいか各地で火の手が上がり、黒煙が立ち上っている。

焼死体や惨殺体、一体どうやったらこれ程の死に方ができるのかと思える程の変死体など死屍累々。

残酷で凄惨で、周囲には血腥い死臭が漂っていた。

「そういえば、貴方の家はスロートに持っていった私の屋敷じゃない。ここが家だなんて変なこと言わないでよ」

しかし、その光景を見てもぼんやりとしているルミナスはついさっきのクアールの言葉に平然とした様子で答える。

彼女にとって自身が巻き込まれなければ興味も関心もなかった。

「煩い。怒るよ」

「……………」

「一応……ああ、そうね。あれは、ヴェイグに話したのかしら。貴方にも話しておくけど、私には能力があるの。周囲に沢山いるクロノス側の連中が私たちに一切気付けないのはそのせい」

「私は貴方に気付いているけど？」

「仲間同士の連携が取れないと面倒でしょう？」

何かを眺めたまま、クアールは話すことを止めた。

クアールが眺めていたもの、それは近くにあった一つの死体だった。

「アレが、どうしたの？」

不思議そうにルミナスは話す。

「アレ、ですって？ 今、あの人のことを貴方は、アレと言ったの？」

「死体に名は無いわ、話せないもの。それ以前に知る気もないし、都合の良い言葉で括るのは当然でしょう？ だったら貴方は誰なのか知っているの……」

酷く悪い目付きでクアールが自らを睨み付けていることに気付き、

ルミナスは話すのを止める。

「彼は、まだ生きています」

既に死しているとしたかと思えぬ者に、クアールは駆け寄った。

出血が多く、手の付けようが無い程に傷付き仰向けに横たわった人物をしゃがみ込み抱き寄せる。

「良かった……また会えましたね、アズラエル。よくここまで戦い抜いてくれました」

「……………」

何もアズラエルは答えない。

数秒程、クアールはアズラエルを抱き締めていた。

「そろそろ先に進みましょうよ。あの男が来るかもしれないわ」

「分かっています」

大事そうにアズラエルを地面へ横たわらせるクアールの語気が荒い。

その時、ふいにアズラエルの口が動いた。

何かを話そうとしているが、それさえもままならぬ状態だった。

「どうしたの、アズラエル？」

しやがみ込み、クアールはアズラエルの口元に耳を寄せる。

「申し訳ありませんでした、クアール様。申し訳ありませんでした……」

ぼそぼそと聞き取りづらい声で確かにアズラエルは、そう語った。

「……………」

何も、クアールは答えなかった。

気が付くと、アズラエルは既に生き絶えていた。

苦痛に満ちたその死に顔は彼の無念さを現していた。

「アズラエルの服、前面の方が特に汚れていて擦り減っていた。誰も助けてくれない四面楚歌の中、魔力を使いきり致命傷を負いながらも私の戦力になるため這ってでもここまで辿り着いたみたい……宮殿を境に都市が崩壊しているところを見るとアズラエルがいたこの位置までが彼らの辿り着けたラインなのでしょう」

「こんなところまでわざわざ貴方の部下は随分殊勝なのね。私もアズラエルのような人材が欲しいところだわ。聖職者のような服装だけど、この傭兵はどこで雇ったの？ 是非とも私が雇ってあげたいわね」

「私の同志です。貴方が口を挟むべきことではありません」

「どうしたの、ノール？ もしかして怒っているの？」

「怒っているわ、貴方が語るような雇用程度の関係ではないの。それじゃあ、さつきと宮殿内に入りなさい。ここがクロノス本部となつているはずよ。私が先手攻撃を受けたら面倒だわ」

「さつきから私を顎で使っ…」

「はあ？」

語尾を強めにクアールは言い放つ。

「すみませんでした」

速攻で謝り、とにかく急いでルミナスは宮殿に入っていく。

元凶

「お待ちしてましたよ、ルミナスさん」

宮殿のエントランスには、何者かが待ち構えている。

にこやかに頬笑みを浮かべるタルワールの姿があった。

「貴方、クロノスの人……だよな？ やっぱり」

攻撃を仕掛けず、全く敵意のない口調。

この戦場では有り得ない事態に、ルミナスは反射的に問い掛けを行っていた。

「立ち止まるな、ルミナス！」

飛び込むような形で宮殿に駆け込んできたクアールは叫ぶ。

クアールの反応、怒声。

それにより気付いたルミナスは即座に魔法詠唱へと移る。

「顔は知らない。しかし、この状況で判断を下せる貴方がR一族だとは理解できる！」

クアールの魔法詠唱が始まる。

「まだ、オレは貴方と何も話していないのだけど。結局、オレの一

族は誰も理解をしてくれなかったか……」

悔しそうな声で語るタルワールは、二人の魔法詠唱に対して何もしない。

「発動、デスメテオ！」

詠唱終了とともに禍々しい漆黒の物体が現われた。

発動した際、クアールの様子は明らかに何かがおかしい。

全身から水蒸気が立ち上っている。

水人としての死、分解が起きていた。

「あの子、やってくれるじゃないの。私の判断が遅れていたら存在が消滅したのよ。何をどう考えられたら、あんな自殺行為が出来るのかしら……」

そう思いながらも、ルミナスもリターンを発動する。

クアールには再び魔力が宿り、魔力体として残存する魔力は勿論のこと、先程と同程度の魔力へと再起した。

「……………」

一度、クアールは発動させたデスメテオに視線を送る。

送った直後、即座にデスメテオを放つ。

タイムラグは尋常でない早さで、僅かに一秒以下。

時間を巻き戻され、自らが何を行おうかと考えていた状態へ還元したにもかかわらずの対処。

経験則的な概念と言うよりはクアールという生物としての反射、その領域に達していた。

しかし、それでも尚、タルワールは全く動じていない。

そもそも動じるなどのような問題以前にデスメテオを恐れてもいない、避けようとさえしていない。

悔しさを表情に滲ませたまま、静かにクアールとルミナスを見つめていた。

タルワールへとデスメテオが直撃寸前、何かが二つの間に飛び込む。

「間に合った！」

掛け声とともに現われたのは、シリオンであった。

タルワールと自身の保身のため、次にシリオンの取った行動は封印障壁を周囲に張り巡らせること。

だが、デスメテオを前にしてそれに意味があるのか。

当然の如く、シリオンを覆った封印障壁はシリオンごと消滅。

絶大な威力はシリオンを消滅させた後も宮殿を半壊させ、周囲を巻

き上げられた粉塵が覆う。

数十秒後が経過し粉塵が落ち着き始めた頃、クアールとルミナスはその場に人の気配を感じ取った。

紛れもなく、タルワールの気配。

あのデスメテオの直撃をジリオンが覆った封印障壁によって幾らか緩和したことにより即死を免れたようだった。

しかし、クアールとルミナスは気付いた。

即死を免れたはずのタルワールは微量のダメージさえ受けてすらいなかったのだ。

「ジリオンさんは“死にましたか”。けど、オレもね。使えるよ、封印障壁を。ほらね、R・ノール……いいえ、R・クアールさん」

自らの周囲をタルワールは封印障壁で覆っていた。

「この時点でもうR・クアールさんが戦いで優位に立つということはずあり得ません。どうでしょうR・クアールさん、世のために自害されてみては。既にRの血筋が必要とされていないのですよ。分かりますか？」

「平和と平等を必要としない者など存在しません。間違っているのは貴方だけですよ、タルワール？」

再び、クアールはデスメテオの詠唱を始める。

それを見て、二人の話を聞いて何かに気付いたルミナスも詠唱を始めた。

「“権利”によって押し付けられただけの効果を、貴方方だけの平和と平等のため総世界へ撒き散らすのは止めて下さい。いい加減、過去の過ちを悟りなさい」

「聞き捨てならぬ言葉ですね。全く聞き捨てならぬ程に！ 私が打倒した過去のR一族と私の行ったことを同一視するのは止めなさい！ 貴方たちが無情にも葬り去っていった者たちによって総世界がどれ程救われたのが分かっていいるのですか！ ようやく作り上げた三つの均衡も人々の平和も平等も私に理解を示してくれた一族の者たちも全て踏み躪り打ち壊して悦に入っている人でなしの貴方を絶対に許すことなどない！」

「どういうことですか？」

クアールの言葉、それにタルワールは反応を示す。

クアールが何故そのようなことを話すのか、タルワールには疑問だった。

この危機的状况と言える時点で先程見たはずのデスメテオという魔法の威力以外の何かに関心を示せるタルワールにも疑問だが。

「甘言だ！」

空間転移を扱ってきたかのようにジリオンがタルワールの前に現われる。

「だとすれば、タルワールが味わったあの悲劇が！ 平和や平等のために起きたのだと言うのか！ タルワール、お前が惑わされてどうする！」

ジリオンが激昂し、大剣を振り回しながらクアールに迫る。

「ルミナス！」

クアールは叫ぶ。

詠唱完了により魔法をストップし、ルミナスの詠唱を確認したのだ。

しかし、ルミナスは詠唱を行っていなかった。

「……御免なさい、ノー。魔法が分からないの」

呆然とした様子でルミナスはそれだけ語る。

瞬時にクアールは悟る。

ルミナスは既に権利に掛かっていると。

クアールが出遅れた理由はタルワールの反応にあった。

そもそもデスメテオという極めて強力な魔法に関心を示さない人物など出会ったことが、クアールには無かったのだ。

優位に立てない、そのタルワールの発言は正しかった。

クアールのデスメテオを避けさえもせず、自身のデスメテオの威力

による粉塵、ルミナスのリターンによる時間移送により状況を数瞬見失ったクアールに気付かれることなくタルワールはルミナスを自身の側に権利で引き込んだ。

自身に有利な特殊な何かが起こり得ても人が対処さえ出来たであろうかという状況を完全に潜り抜け、圧倒的な状況にタルワールは持ち込んだのである。

腰の据えた何事にも動じぬ護りこそが、タルワールの武器であった。その相手を前に怒りに任せ全身全霊の力でデスメテオを放つだけしかないクアールなど勝てるはずもない。

クアールが善戦、勝利するためには冷静でなくてはならなかった。ルミナスを常に“権利”下に置くべきであった。

「……………参ったわ」

魔力を弱め、クアールは戦いを止める。

「ん……………?」

確認したジリオンはクアールを目前にしつつも、攻撃を仕掛ける直前で行動を止めた。

敵とする者を目前にしながらも、ジリオンはタルワールに指示を仰ぐ。

「話がしたいと思います」

タルワールはそう語る。

「オレの今まで考えていた思考を持ったR一族とは何かが異なっていると分かります。ただ、それによって何かしらの影響があるという訳ではありません」

魔法詠唱をタルワールは始める。

詠唱の声を聞き、クアールはニヤついた。

「話が聞きたい？ その詠唱をしておいて何を語っているのですか？」

クアールは視線をルミナスに移す。

「ルミナス、私に勝ちの眼はありません。もはや私にこの戦局を覆すことは不可能となりました。貴方は今からタルワールの側に付きなさい。私がいなくなる時点で貴方を殺すということはまず無いでしょう」

「……………」

何も語らず、ルミナスはただ頷いた。

権利を扱われていることにより、それがルミナスの意思によって行われたかは定かでない。

「発動します、空間隔離結界」

空間転移によって現れる異次元へのゲートが出現した。

そのゲートはクアールへ向かって移動し、クアールを拘束するかのよう異次元の闇が覆い尽くしていく。

「聞きなさい！ 今の私ではタルワールに勝つことなど出来ない！ 私の目論見通りには決して事が動くことはなかった！ こうなつてしまつては……」

そこまで語つたクアールは完全に異次元へと取り込まれた。

「クアールさんは異次元に取り込まれました。これでオレたちに干渉することは出来なんでしょう。しかし、彼女の言葉。意図するものとは何なのかが、オレには分からない。自身の置かれた状況を覆せないと呼ぶ理由とは……何なのでしょう？」

魔力の消費が激しかったのか、タルワールは少しやつれた表情をしている。

「まだ、R派の残党がいる。彼らに意志を託すといったところか？ やれやれだが、情報によると確信犯共はまだ三人もいるよ。私にも意図することが分らん。ところで、彼女は どうする？」

ジリオンはルミナスの方に合図を送る。

「彼女は戦わないと思います。オレたちと戦う理由はもう無いよ。彼女ならきつと大丈夫、オレたちに理解を示してくれる」

「幾多の裏切りが続き、この状況に陥つてもなお、R派の人物を信用するつもりか？」

「ええ、勿論。これからもオレは信じるよ。そこから彼女がどう行動するかは自由なんじゃないのかな？」

「常々思う、甘いのではないか？ いずれは、ではどうなるか今回のように分からない」

「いつもそれを言っていますね、ジリオンさん。彼女は信じるに値しますよ」

「そうか……？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1307n/>

Clan`s wedge

2011年12月11日17時53分発行